いゐ-ちゆうぎやう 異位重行【名】古、公事・儀式などの時、親王・公卿たちの、官位の次第によりて、順次に後方に重なりて、內裏の庭に立ちならびしこと。〔古語〕

い-ゐん 醫院【名】病者を治療する家。醫者の家。

い-ゐん 醫員【名】醫療に從事し、又は醫務を擔當する職員。

い-ゑん 異苑【名】〔書〕『奇異なる談苑の義』神怪の記事を錄せるもの。十卷。宋の劉敬叔の撰。

い-を 魚【名】うを(魚)に同じ。和名「魚、宇乎。俗云、伊乎」

い-を 魚の鰾(エフ)【句】ふえ(鰾)に同じ。和名「脬、伊乎乃布衣、魚腹中脬也」

いを【名】〔動〕**一**ふなの一種。鯉に似たるもの。まるぶな。**二**さけ(鮭)に同じ。〔越後國の方言〕

い-を-あみ 魚網【名】**一**うをあみ(魚網)に同じ。**二**うをどり(魚捕)に同じ。

い-を-うり 魚賣【名】うをうり(魚賣)に同じ。

い-を-がめ 魚龜【名】〔動〕すっぽん(鼈)に同じ。

い-を-ぐし 魚串【名】うをぐし(魚串)に同じ。

い-を-さ【名】『いもをも接頭語、さは箭の義』や(箭)に同じ。〔古語〕萬葉「あらしをのいをさたばさみ向ひ立ちかなるましみづ出でてとあがくる」

い-を-すぎ【名】〔植〕やまごばう(山牛蒡)に同じ。〔古語〕和名「商陸、伊乎須岐」

い-を-づら 魚面【名】うをづら(魚面)に同じ。

い-を-つり 魚釣【名】うをつり(魚釣)に同じ。

い-を-とり 魚取【名】魚を捕ふること、又その人。和名「漁子、伊乎止利、…採レ蘆捕レ魚者也」

い-を-ぬ 寐を寢【句】い(寐)の條下を見よ。

い-を-の-こ 魚鮞・鮞・鮢【名】**一**魚類の卵。まこ。**二**(特に)鮭のはららご。

い-を-の-め 魚目【名】うをのめ(魚目)に同じ。

い-をん【名】『いわう(硫黃)の訛』つけぎ(附木)を云ふ。〔播磨國の方言〕

い-を-め 魚目【名】**一**いをのめ(魚目)に同じ。**二**いぼ(疣)に同じ。〔古語〕和名「肬目、以比保。又以乎女、手足忽生如レ豆」

う

發音 **一**あ行第三の音。母音。舌の後部をやや高めて、軟口蓋に近づけ、兩唇の間を少しく圓くし、氣息を聲帶に觸れしめて發音す。但し氣息を鼻腔に漏れしむべからず。兩唇餘りに近づけば、mの發音となる。他行のウ列の音は、皆この音を含む。あ行のうとわ行のうとは現今に於ては全く相同じ。上古に於て、その區別ありしや否や判明せず。**二**長音には、ううの如く重ね記し、又はうーの如く長音符を用ひて記す。本書は前者に依れり。「植う」「饑う」の如き動詞に於ては、長音に非ざるを以て、格別に發音するを要す。あの條下二參照。**三**うは一般に長音符の如く用ひらる。あう・かう・さう・たう・なう・はう・まう・やう・らう・わうは皆おー・こー・そー・とー・のー・ほー・もー・よー・ろー・をーと發音し、くう・すう・つう・ぬう・ふう・むう・ゆう・るうは皆くー・すー・つー・ぬー・ふー・むー・ゆー・るーと發音す。お列のこう・そう等も同じ。純國語に於ても漢語傳來の語に於ても然り。い列の場合は、いの條下三、又、え列の場合はえの條下四參照。この二つの場合は、所謂拗音なり。四うま(馬)・うめ(梅)・うまる(生る)・うまし(甘し)等の如くま行の音の上に來るときは、鼻音のんをあらはすことあり。口語に於てはうめる(埋める)をもしかいへど、こは尙一般には認められず。うまる(生る)はんに發音すれども、うむ(生む)は然らず。近代の文にはうに濁點を附せるものあり。これ英語のV音をうつさんがためにして、便宜法に過ぎず。聲音學よりいへば、母音の濁るべき理なし。よりて本辭書にはすべてば・び・ぶ・べ・ぼにてうつせり。例へば、ばいおりん(Violin)・びくとりあ(Victoria)の類。

字源 平假名のうは「宇」(漢・吳音共にウ)より出づ。變體假名としては、「宇」の字そのままの草體、又「有」「雲」「右」等の草體あり。片假名のウは、平假名と同じく「宇」より出で、于も亦然り。

う ウ【名】うら(裏)の略。ある記事の、その書籍の幾枚目の裏に在るよしを示すときに限りて用ふ。片假名にて記すを例とす。例へば「十三丁ウ」は十三枚目の裏面に在りとの意なる類。(オに對して)

う 有【名】**一**有ること。(無に對して) **二**〔佛〕天地の萬物を實在せる物と觀ずること、又その天地の萬物。因果の理法の繼續すること、又その繼續する世界。實有(ジツウ)。(無に對して) **三**〔哲〕『英Being』天地間に實在せるもの。「無より有を生ず」

有の目附【句】能(ノウ)にて、舞臺の上に無き物を有るがごとくに見する目つき。(無の目附に對して)

う 卯【名】**一**十二支の一。**二**方角の一。東の方。**三**古の時刻の一。今の朝六時より八時までの間。

卯腹・辰腿(モモ)・寅脊中【句】卯・辰・寅の時刻によりて、灸(キウ)を施すを忌むべき、身體の局部を示せる語。〔諺語〕

卯味噌・寅酒【句】卯の日には味噌、寅の日には酒を造るを、いづれも忌むこと。〔諺語〕

卯の日【句】**一**卯にあたる日。**二**次條の略。「住吉の卯の日に詣でて」

卯の日の神事【句】攝津國の住吉神社にて、毎月卯の日に行ふ祭典。うのひ。

卯の日の祭【句】前條に同じ。

う 兎【名】〔動〕うさぎ(兎)に同じ。うのけ(兎毛)參照。

う 禹【名】〔人〕支那、夏(カ)の第一世の王。顓頊(センギヨク)の孫。父を鯀(コン)といふ。堯の時、洪水を治め、十三年を經て功成る。舜(シユン)崩じて、禹(ウ)位に即き、國を夏と號し、安邑(今の山西省解州夏縣)に都し、東巡して會稽に至りて崩ず。か(夏)參照。

う 羽【名】**一**五音(ゴイン)の一。澄みて最も高きもの。ごいん(五音)・じふにてうし(十二調子)參照。**二**〔地〕うしう(羽州)に同じ。

う 鵜・鸕鷀【名】〔動〕涉禽(セフキン)類に屬する鳥。形、烏に似て大きく、色黑く、嘴は長くして、末の方すこし曲れり。性、甚だ食を貪り、能く水を潛りて魚を捕ふ。しまつどり。うがひ(鵜飼)參照。

(う)

鵜の糞(ソク)【句】鵜の排泄したる糞。藥用とせり。和名「蜀水華、宇乃久曾、鸕鷀矢名也」

鵜の眞似(マネ)する鴉(カラス)【句】次條の略。〔諺語〕十訓抄「鵜のまねする鴉の如し」

鵜の眞似する鴉(カラス)は、水を呑む【句】**一**鴉(カラス)が鵜の眞似をして、水中に溺るる意。**二**身のほどを知らずに人まねするは失敗の基なり。〔諺語〕風雅「大井川ゐせきに來たる山がらす鵜のまねすとも魚はとらじな」

鵜の目・鷹の目【句】人の物を捜し出さんとするさまを、鵜の魚をあさり、鷹の鳥を求むるに譬へていふ語。

う 鰻【名】〔動〕うなぎ(鰻)を云ふ。〔關西の方言〕

う 竽【名】笛の一種。形、笙に似、管の數、古は三十六なりしが、後には二十六管又は十九管となれり。

う 得【動下二他】**一**わが物とす。手に入る。〔獲〕伊勢「昔、男、思ひかけたる女の、え得(ウ)まじうなりての世に」**二**習ひ覺えて

巧みに行ふ。能く爲す。（狂言 文相撲）「何ぞえてゐる藝は無いか」

得たり賢し【句】「至（イタリ）賢し」の轉訛か。いたり（至）參照」己れにとりては、いかにも得意なり。（蕪村）「蓑むしのえたりかしこし初しぐれ」

得たりやおう【句】己れにとりては如何にも得意の事なりとて、承引する時のかけごゑ。（今昔）「えたりやおうと云ひて」

得（エ）に【句】得ずして。〔古語〕いふ（言ふ）の條下の「言へば得に」及び**とふ**（問ふ）の條下の「問へば得に」參照。

う 憂【形】うし（憂し）の略。〔古語〕（古今）「しかりとてそむかれなくに事しあればまづなげかれぬあなう世の中」

う【助】むの音便。（平家）「からめうと申すもの、一人も候はざりしに」

う【感】一うべなふ意。うん。（信明集）「今日のうちにいなともうともいひはてよ人だのめなることなせられそ」二うめく時に發する聲。うん。（宇治）「うといひて、うしろざまにこそ臥しかへりたりけれ」

う 宇【助數】『檐（ノキ）・屋根などの意』建物の數を示す語。棟（ムネ）。「正殿一宇、脇殿二宇」

う 羽【助數】一鳥の羽の數を示す語。二「鳥類の數を示す語。は。

う-あいさ 鵜秋沙【名】〔動〕あいさがもの一種。形、鵜に似て、嘴（クチハシ）ははなだ長きもの。

う-あんご 雨安居【名】あんご（安居）を見よ。

う-あめ 卯雨【名】卯の時に降りだす雨。

う-い 雨意【名】雨の降りさうなること。あめもよひ。雨氣。「雨意を知る」

う-い 雨衣【名】あまぎ（雨著）に同じ。

う-い 羽衣【名】天人の著るといふ衣。はごろも。

うい【形一】愛らしく感ずべくあり。可憐なり。神妙なり。（狂言（烏帽子折））「一段うい奴ぢや。急いで、とっとと參れ」

ういいん（獨Wien）【名】〔地〕ういんな（維納）「に同じ。

う-いう 烏有【名】『烏（イツクン）ぞ有らんの意』何も無きこと。全く無くなること。「烏有に歸す」

ういう-せんせい 烏有先生【名】假に設け作りたる人。亡是公（バウシゴウ）。（筆のすさび）「垂氷廣信は烏有先生なり。垂氷といふ姓は昔より聞かずといふ人あり」

ういすきい（英Whisky）【名】大麥・小麥・玉蜀黍（タウモロコシ）等の穀類を原料として精製したる洋酒。酒精分の强烈なるもの。英國を本場とす。ほいすきい。

ういんち 捲揚機（英Winch）【名】重き物を揚げ卸（オロ）しするに用ふる機械。

ういんな 維納（英Vienna）【名】〔地〕墺太利洪牙利（オオストリイハンガリイ）帝國の首府。ういいん。

ういりやむ-あだむす（英William Adams）【名】〔人〕みうらあんじん（三浦安針）に同じ。

うう 飢う・饑う・餓う【動下二自】食物無くなりて、腹、空になる。腹が減（ヘ）る。空腹を感ず。

飢ゑたる者は、食を爲し易し【句】『孟子の公孫丑上篇に「飢者易レ爲レ食、渴者易レ爲レ飲」とあるに本づく』飢餓に迫れる時は、食を擇ばぬ意。〔諺語〕

うう 植う・栽う・種う【動下二他】一物を、地に埋めて立つ。二種子をおく。たねを蒔きつく。三並べはめこむ。並べたつ。移し置く。「活字を植う」「刷毛に毛を植う」「疱瘡を植う」

ううそん 吳松【名】〔地〕『文字の支那音』支那江蘇省蘇州府に屬する開港場。

ううだん（英Houdan）【名】〔動〕『佛國ウウダン市の原産なるよりいふ』雞の一種。大毛冠を有し、産卵多く、食用に適す。

うう-ちん 魚辰【名】『文字の支那音』支那料理の一。さかた鮫（サメ）の腹部の肉を去り、頭と體との兩側に在る軟鰭（ナンキ）のみを殘して、乾燥したるもの。

う-うつ 紆鬱【名】うつもん（鬱悶）に同じ。

う-うん 烏雲【名】一女の黑髮の形容。二『六韜（リクタウ）の中の豹韜に見ゆ』烏の如くに集まり、雲のごとくに散ること。

烏雲の陣【句】變化の自由なる陣形。

うーろん-ちゃ 烏龍茶【名】『文字の支那音』臺灣より産出する一種の茶。紅茶と綠茶との中間物のごときもの。生葉を天日に乾し、黃色に變じたる後、採（モ）みて熱釜中に暖め、更に低溫の釜に移してまた採固め、布片を被ひて、醱酵（ハツカウ）・紅變せしめて製す。

う-えき 于役【名】『詩經の王風の君子于役篇に「君子于役、不レ知二其期一」とあるに本づく。于は往の義』君命を奉じて、他國に使すること。

うえし-じやう 羽衣石城・種石城【名】伯耆國にありて、南條氏の世襲せし城。關ゲ原の役、南條忠成、西軍に應じて、沒收せらる。今の東伯（トウハク）郡藏見村字羽衣石にその址あり。

う-えん 有緣【名】〔佛〕佛敎に緣（ユカリ）あること。（多くは佛と衆生との關係にいふ）（無緣に對して）いんえん（因緣）參照。

う-えん-ば 烏焉馬【名】『烏・焉・馬の三字は、その字畫似通ひて、ふと誤ることあるよりいふ』傳寫の誤の譬にいふ語。魯魚の誤。風鳳の誤。

うおおたあ-じえっと-きせん ウオオタアジエット汽船（英Water jet steamer）【名】汽船の一種。水が底より管を通じて、内部に裝置せるタアビン又はポンプ等に連り、此に或速力を得て、側面より放出する時、その反動に由りて進行するやうに仕掛けたるもの。

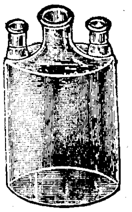
うおおたあ-しゆうと（英Water-shute）【名】高き斜面より船に乘りて、水中に滑（スベ）り落つる遊戲。ふなすべり。

うおおたあ-もおたあ（英Water-motor）【名】すゐりよくはつどうき（水力發動機）に同じ。

うおどか（露Wodka）【名】燒酎の一種。ライ麥又は大麥・馬鈴薯などより作る。主に露國に行はる。

うおんばっと（英Wombat）【名】〔動〕有袋（イウタイ）類に屬する獸。大きさ狸ほどにて、尾極めて小さし。濠洲（オオストラリヤ）に產す。

うおるふ-びん ウオルフ瓶（英Woulf jar）【名】二或は三の口を有する瓶。各口に施したる栓（セン）に硝子管を插入し、種種の目的に用ふ。



（うおるふびん）

うか 食【名】うけ（食）に同じ。〔古語〕（紀）「倉稻魂、此云二宇介（ウカ）能美柂磨一」

うか 浮【貌】氣附かぬさま。うかり。うっかり。うからうか。〔俚語〕「うかと誑（ダマ）さる」

うが【代】なんぢ（汝）を云ふ。〔陸奧國津輕の方言〕

うが 宇賀【名】一〔佛〕辯財天の尊號。うがじん（宇賀神）參照。二**うがのこんぶ**（宇賀昆布）の略。

う-かい 有界【名】〔佛〕因果の理法の繼續する世界、即ち欲界・色界・無色界の總稱。迷執の世界。（平家）「有界は秋の月、雲に伴ひて隱れやすし」

う-かい 烏喙【名】一烏のくちばし。二人の口の、とがりて烏の嘴の如くなるもの。貪婪（タンラン）なる人相。

う-かい 有海【名】〔佛〕三界の生死の無邊なるを海に譬へていふ語。

う-かい 憂海【名】〔佛〕憂の深きを海に譬「へていふ語。

う-がい 有涯【名】〔佛〕變轉して、常住ならぬこと。（平家）「無常の春の花、風に隨って散りやすく、有涯の秋の月、雲に伴って隱れやすく」

うかい-とっき 烏喙突起【名】〔醫〕肩胛骨の上緣に在りて、關節窩と肩胛截痕との間に存し、烏の嘴狀をなして、前側方に突出（ツキデ）たる骨。

うから 烏江【名】〔地〕支那安徽（アンキ）省和州城の東北。楊子江の津。項羽の敗戰して自ら刎（クビハ）ねし所。

うか-うか 浮浮【貌】一心の落ちつかぬさま。恍惚。二思慮分別のなきさま。輕忽。ぼんやり。（芭蕉）「うかうかと年寄る人や古暦」

うか-うかし 浮浮し【形二】心、落ちつかず。ぼんやりとしてあり。（小夜の寢覺）「うかうかしからず、正直に道理を知りたらんよりほかは」

うから-しゆんすう 禹行舜趨【名】『荀子の非十二子篇に「禹行而舜趨、是子張氏之賤儒也」とあるに本づく』表面の威儀のみは、聖人の如くにして、これにかなふ德の無きこと。

うかがはく 窺はく【動他】うかがふ（窺ふ）の延。〔古語〕記「しりつ戸よい行きたがひ、前つ戸よい行きたがひ、うかがはく知らにと」

うかがひ 伺【名】㊀伺ふこと。㊁神佛に祈誓して託宣（タクセン）を乞ふこと。㊂〔法〕或事項につきて、下級官衙より監督官廳たる上級官衙に、又は人民より政府に申立て、指令を仰ぐ手續。㊃八雲琴を彈く間に、音を發せずにただすくふ眞似をすること。㊄まはしもの。間諜。〔古語〕字鏡「諜、伊久佐乃宇加加比」

うかがひ-あし 伺足【名】足の運びのたしかならぬこと。しのびあし。ぬきあし。手習鑑「膝もわなわな、うかがひあし」

うかがひ-かた 伺方【名】江戸幕府下勘定所の役。勘定結頭の係（カカリ）にて、幕府の入用に關する一切の事務を扱ひしもの。

うかがひ-しよ 伺書【名】伺㊂のために差出す文書。

うかがひ-ずみ 伺濟【名】伺㊂に對する政府官衙の指令の濟みたること。

うかがふ 窺ふ【動四他】㊀ひそかに見る。のぞく。源氏「藤壺わたりを、わりなうしのびて、うかがひありけど」㊁ひそかに時機を待受く。［候ふ］源氏「小侍從、さるべきをりうかがひつけて、消息（セウソコ）しおこせたり」

うかがふ 伺ふ・覗ふ【動四他】㊀とふ（問ふ）の謙辭。源氏「かばかり心えたまひて、うかがひたづねたまはんに、かくれあるべきことにもあらず」㊁とふ（訪ふ）の謙辭。伺候す。參上す。㊂しらぶ。ただす。ためす。試みし結果を待つ。

う-かく 羽容【名】㊀『うくわ（羽化）を見よ』せんにん（仙人）に同じ。㊁〔植〕ほうせんくわ（鳳仙花）に同じ。

う-かく 羽翮【名】『翮は羽の本』はね。つばさ。羽翼。

羽翮、肉を飛ばす【句】『漢書の中山王傳に「叢輕折レ軸、羽翮飛レ肉」とあるに本づく。鳥の飛ぶは羽翼の飛揚力によるをいふ』至輕の物も多く聚れば、よく至重の物を動かす譬。〔諺語〕

う-がく 有學【名】〔佛〕小乘四果の聖者中の前の三果、即ち戒・定（ヂヤウ）・慧（エ）。なほ學修すべき道あるよりいふ。（無學に對して）高倉院升遐記「有學・無學の羅漢のあつまり」

う-がく 右樂【名】右方にて奏する舞樂。うはう（右方）を見よ。（左樂に對して）

うがく-ち 有學地【名】〔佛〕有學（ウガク）の信地。がくち。

う-かご 鵜籠【名】鵜を入れおくかご。謡曲（鵜飼）「うかごを開き、とりいだし」

うかさる 浮さる【動下二自】『もとうかす（浮す）の被役形』物事に心を奪はれて、おちつかず。「茶にうかさる」「熱にうかさる」

うかし 浮【名】㊀うかすこと。㊁汁の實。心中宵庚申「かき立て汁に、小菜のうかし」

うが-じん 宇賀神【名】〔佛〕白蛇を神として祀れるもの。辯財天の寶冠中にある白蛇は、即ちこの宇賀神なりといふ說あり。又その宇賀御魂（ウガノミタマ）と音の似通へるより、稻荷（イナリ）の神の使はしめなる狐の傍に、白蛇を畫きて神體とする神社あり。うが（宇賀）參照。平治「或は宇賀神の法をこめ、或は陀天の法をこめ」

うかす 浮す【動四他】㊀うかばしむ。うかぶ。㊁人の心を浮きたたす。狂言（宗論）「あの坊（ボン）をうかしたい」

うか-たま 宇迦魂【名】うかのみたま（宇迦御魂）に同じ。國姓爺後日合戰「おがたま・稻倉（ウカタマ）・鏡の宮」

うがち 穿【名】㊀うがつこと。さぐること。穿鑿（センサク）。㊁祕密・隱微なる點を探り發（アバ）きて示すこと。

うがつ 穿つ【動四他】『うぐ（穿ぐ）を見よ』㊀孔をあく。掘り拔く。貫く。［鑿つ］㊁飽くまで穿鑿す。隱微なる點を探り發（アバ）く。理を窮む。ほじくる。㊂脚部に物を著（ツ）く。「袴をうがつ」「下駄をうがつ」㊃押分けて進む。「林を穿ちて進む」

うか-つく 浮つく【動四自】うかうかとす。心浮きたちて、落ちつかず。

うか-ねらふ 窺狙ふ【動四他】うかがひねらふ。〔古語〕萬葉「この岡にをじか蹈みおこしうかねらひかもかくすらく君ゆゑにこそ」

うか-ねらふ 窺狙ふ【枕】狩には、鳥獸の足跡を窺ひ狙ふものなるより、とみ（跡見）にかけていふ。萬葉「うかねらふとみ山雪のいちじろく戀ひばいもが名人知らむかも」

うか-の-かみ 宇賀神【名】うかのみたま（宇賀御魂）に同じ。

うが-の-こんぶ 宇賀昆布【名】をりこんぶ（折昆布）に同じ。うが。庭訓往來「宇賀昆布」

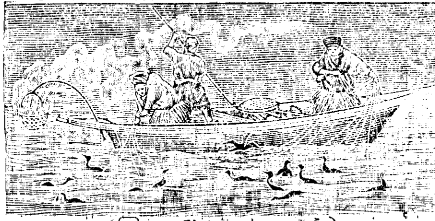
うか-の-みたま 宇迦御魂・食稻魂【名】食物の神。稻荷（イナリ）の神。素盞男（スサノヲ）尊の女、大年（オホトシ）神の妹、母は大市姬。（一說には、伊邪諾（イザナギ）尊の女、又、大國御魂（オホクニミタマ）神の子）。豐受姬（トヨウケヒメ）神と同體なりといふ。稻荷大明神。紀「倉稻魂、此云二宇介能美施磨一」

うか-の-め 宇迦能賣【名】『めは女（メ）の義』前條に同じ。

うか-は 鵜川【名】うかひ（鵜飼）㊀に同じ。〔古語〕萬葉「かみつ瀨にうかはをたてしもつ瀨にさでさしわたし」

鵜川の小鮎【句】鵜飼する川に於ける鮎の如く、逃るる途なき譬。〔諺語〕

う-かひ 鵜飼【名】㊀飼馴したる鵜を使ひて、鮎を捕らしむること。うかは。㊁上記の鵜飼を職とする人。うづかひ。うかひじやう。うかひびと。鵜師。㊂御廚子所（ミヅシドコロ）の膳部に屬して、御用の魚類などる漁（スナド）を下役。㊃うかひぶね（鵜飼船）の略。㊄謡曲の一。日蓮上人の、甲斐國なる石和（イサワ）川にて。鵜づかひの幽靈を成佛せしむる事を作れるもの。



（うかひ㊀）

うがひ 嗽【名】『うがふ（嗽ふ）を見よ』湯水を含み又吐きて、口中を淸むること。くちそそぎ。含嗽（ガンソウ）。水鏡「水をとりて、御うがひ奉りたまひしついでに」

うかび-あがる 浮上る【動四自】うきあがる（浮上る）に同じ。

うかび-いづ 浮出づ【動下二自】うきいづ（浮出づ）に同じ。

うかひ-きちざゑもん 鵜飼吉左衞門【名】〔人〕水戸の勤王家。名は廣邦。幕政の姑息を憤り、同志と謀りて、攘夷決行の勅を乞ひしが、幕府を措きて大事を謀れりとて、安政六年、江戸小塚原に斬らる。

うかひ-ぎよくせん 鵜飼玉川【名】〔人〕舊府中藩士。通稱は幾之助。横濱開港の初め、米人フウレマンに從ひて寫眞術を究め、本邦寫眞術の祖となる。又、鑒識に長ず。明治二十年歿す。年八十一。

うがひ-ぐすり 嗽藥【名】うがひに用ふる藥。くくみぐすり。含嗽劑（ガンソウザイ）。

うかひ-しふ 鵜飼集【名】〔書〕『かがり火の歌多く集中に入りたるよりいふ』ぞくしふ（續拾遺集）の異名。

うかひ-しみ 鵜飼枝美【名】〔人〕山鹿（ヤマガ）流の軍學者。豐後國岡藩士。通稱は福三郎。船戰要領私鈔を著述す。天保六年歿す。年五十八。

うかひ-せきさい 鵜飼石齋【名】〔人〕京都の儒者。江戸の人。名は信之、字は子眞。心耕齋と號す。那波活所の門人。山崎闇齋と名聲を同じくす。和漢珍書考・編年小史など著書多し。寛文四年歿す。年四十九。

うがひ-ぢやわん 嗽茶碗【名】うがひに用ふる茶碗。飯茶碗の二倍餘の大さにて、陶製の外、銅・眞鍮（シンチユウ）などのもあり。

うかひ-の-かがりび 鵜飼篝火【名】こひのやみうかひのかがりび（戀暗鵜飼篝火）の略。

うかひ-び 鵜飼火【名】鵜飼をする時にたく篝火（カガリビ）。

うかひ-びと 鵜飼人【名】うかひ（鵜飼）㊁に同じ。藤河記「うかひ人くるや手綱のみじか夜もむすぼほれなばとくはあけじを」

うかひ-ぶね 鵜飼船【名】㊀鵜飼に用ふる船。その制、高瀨船に似たり。うかひ。㊁

美濃國白石と伊勢國桑名との間を往復する久世(ゼク)川の船。その制、異樣にして、」棚なく、箱づくりに似て、舳艫(ロヂク)分ちがたく、長さ七八尋(ヒ)、形細長くして深く、打櫂(ウチガイ)を用ひて漕ぐ。

うかひ-べ 鵜飼部 【名】 上古、鵜を飼養して魚を捕へ、以て天皇に獻ることを世職とせし部族。〔古語〕

うがひ-みづ 嗽水 【名】 うがひをするための水。大鏡「鶯や手づからに汲むうがひ水」

うかひ-もの 鵜飼物 【名】 備前國津高郡鵜飼の刀工一家の作品の總稱。鎬(シノギ)を廣くして庵(イホリ)も深く、地鐵は正目に細く、肌の白くるを特長とす。

うかひ-れんさい 鵜飼錬齋 【名】〔人〕水戶藩の儒者。名は眞昌、字は子欽、通稱金平。石齋の子。元祿六年歿す。年六十一。

うかぶ 浮ぶ・泛ぶ 【動四自】 ㊀うく(浮く)に同じ。㊁動きて定らずにあり。浮遊す。㊂苦しき境遇をのがる。順境に立つ。世に出づ。立身す。「うかぶ瀨無し」 ㊃亡靈、解脫(ゲダツ)・成佛す。風雅「沈みこしうきみはいかで浮ぶべき誓の船ののりにあはずば」 ㊄心によしと思ふ。甘心す。榮花「とすれども、かくすれども、無紋にてあるは、固紋(カタモン)もなほものけざやかにうかばぬ歎をしたり」

浮ぶ瀨 【句】 ㊀船の浮ぶ處。㊁物事の、障(サハ)りなく、順當に行はるる機會。順境に向ふ機會。

浮べる雲 【句】 ふうん(浮雲)の直譯。繪本太功記「不義の富貴は、浮べる雲」

心に浮ぶ 【句】 想ひ起す。おもひおこす。

うかぶ 浮ぶ・泛ぶ 【動下二他】 ㊀浮ばしむ。「船をうかぶ」 ㊁立身せさす。世に立たしむ。㊂思ひおこす。「心にうかぶ」 ㊃そらよみす。暗誦す。枕「古今の歌二十卷を、みなうかべさせたまはんを、御學問にはせさせたまへ」 ㊄亡靈をして解脫(ゲダツ)・成佛せしむ。盛衰「前生の罪業(ザイゴフ)をも滅さん、かのおもとをも浮べ救はんとて」

う-がふ 烏合 【名】『烏の腐(クサ)りたる肉を慕ひなどして集まるごとくにとの意』ここかしこより無規律に集まること。烏集。

烏合の衆 【句】 統一なき群衆。

うがふ 嗽ふ・嗽ふ・漱ふ 【動四自】 くちそそぐ。うがひす。〔古語〕

うかぶ-せ 浮瀨 【名】 うかむせ(浮瀨)㊀に同じ。蕪村「うかぶせに遊びて、昔、柏莚が、ここにての發句をおもひ出でて、その風調に倣ふ。「小はる凪(ナギ)眞帆も七合五勺かな」

う-かぶり 宀冠 【名】 うかんむり(宀冠)に同じ。運歩色葉「宀、ウカブリ」

うが-まつり 宇賀祭 【名】 十一月三十日、京都九條東洞院の宇賀社にて行はるる祭禮。

うか-み 【名】 うかがひ見ること。間諜。〔古語〕紀「斥候、ウカミ」

うかみ-あがる 浮上る 【動四自】 うかびあがる(浮上る)に同じ。春花五大力「みみよりどころか、うかみあがることぢや。さあ、そのうかみあがる出世。おまへが、大名にならしやんすといふ、なんぞ、たしかな事が有るかえ」

うかみ-びと うかみ人 【名】 まはしもの。いぬ。間諜者(カンテフシヤ)。〔古語〕紀「間諜者、ウカミビト」

うかむ 浮む 【動四自】 うかぶ(浮ぶ)に同じ。

浮む瀨 【句】「浮ぶ瀨」に同じ。

身を捨ててこそ浮む瀨も有れ 【句】『空也上人繪詞傳卷上に「山川の末に流るる栃殼(トチガラ)の身を捨ててこそうかむせもあれ」とあり』運を天に任せ一身を犧牲に供する覺悟にて事を爲さざれば、物事成就することなし。〔諺語〕尤草子「もののふの矢たけ心の一すぢに身をすててこそ浮む瀨もあれ」

うかむ 浮む 【動下二他】 うかぶ(浮ぶ)に同じ。

うかむ-せ 浮瀨 【名】 ㊀大阪の天王寺の西にある料理屋の什物なる、大鮑(オホアハビ)の殼(カラ)の杯。大さ七合半の酒を盛るに足り、ここに遊ぶ者、これを滿酌して飲みほすを興とし、つひには家の名をも浮瀨といふに至れり。うかぶせ。類柑子「難波あたりのうつせあはびを、浮瀨と名づけて、奇物とせしは」 ㊁京都の圓山(マルヤマ)にありし料理屋。羇旅漫錄「京地の酒樓。…丸山の料理茶屋のあるじは…浮瀨は衰へてわづかに一軒あり。大坂の浮瀨は、なほ繁昌せり」 ㊂初代十寸見(マス)河東の七回忌の追善に作りし淨瑠璃の曲。

う-かむり 宀冠 【名】 うかんむり(宀冠)に同じ。

う-がん 右岸 【名】 川又は谷の右の方、即ち下流に向ひて立つ人の右の手の方の岸。(左岸に對して)

う-かんむり 宀冠 【名】『形、片假名のウの字に似たるよりいふ』漢字の冠の一。即ち宇・字・宙・家・宅などの字の上にある宀の字。うかむり。うかぶり。

うかめ-だて 浮立 【名】 熟知せるふり。浮世風呂「諸國の詞、うかめだての誤りだらけ」

う-がも 鵜鴨 【名】〔動〕うみがらす(海鴉)に同じ。

うがやふきあへずの-みこと 鸕鷀草茅葺不合尊 【名】〔人〕ひこなぎさたけうがやふきあへずのみこと(彥瀲建鵜鷀茅葺不合尊)に同じ。

う-から 族 【名】 身うちの人。血緣の人。みより。やから。親族。〔古語〕紀「不レ負二於族一、此云二宇我邏磨概茸(ウガラマケズ)一」

うからかす 【動四他】 おびやかす。〔古語〕名義抄「劫、ウカラカス、オビヤカス」

うからかす 浮らかす 【動四他】 うかす(浮す)に同じ。

うから-やから 【名】 親族。同族。同屬。〔古語〕紀「親屬、チチハハウカラヤカラ」

うかり 【貌】 うか(浮)に同じ。

うかり-ばう うかり坊 【名】 うつかりとしてをる者。うつかり。まぬけ。

うかり-ひよん 【貌】 ぼんやり。うかり。うかりぽん。ぽかん。うつかりひよん。〔德川時代の俚語〕高瀨盃翁「空蟬のなきがらしたふやうかりひよん」

うかりひよん-ない 【名】『ないは藤內 伴內などいふ人名に擬(ギ)して附けたる語』うかりひよんとしたる人。〔俚語〕

うかり-ぽん 【貌】 うかりひよんに同し。

うかる 浮る 【動下二自】 ㊀自然と浮く。紀「浮漂、ウカレタダヨヘルコト」 ㊁處定まらず。さすらふ。平家「舊都は、すでにうかれぬ。新都は、未だ成らず」 謠曲(鉢の木)「住みうかれたるふるさとの」 ㊂心、落ちつかずなる。心他にうつる。恍惚とす。心醉す。山家「さらぬだにうかれて物をおもふ身の心をさそふ秋の夜の月」

うかる 受かる 【動四自】 試驗を受けて及第す。試驗に合格す。〔俚語〕

うかれ 浮 【名】 うかれめ(浮女)に同じ。

うかれ-いづ 浮出づ 【動下二自】 ㊀何處(ドコ)を目あてともなく家を出づ。十訓「妻にて候ふ女の心ばへけしからぬによりて、過ぐべくもおぼえず候間、うかれいでて候ふなり」 ㊁面白さに心うきたつ。うかる。

うかれ-うど 浮人 【名】 うかれびと(浮人)の音便。〔古語〕盛衰「うかれうどこそしるしなれとて」

うかれ-がらす 浮烏 【名】 ㊀月の光などにうかれて、時ならず鳴く烏。㊁塒におちつき居らぬ烏。夫木「月さえて山はこずゑのしづけきにうかれ烏の夜ただ鳴くらん」 ㊂夜うかれあるく人。〔俚語〕

うかれ-ぎみ 浮君 【名】 うかれめ(浮女)に同じ。

うかれ-ごこち 浮心地 【名】 次條に同じ。

うかれ-ごころ 浮心 【名】 うかれたる心地。うかれごこち。うきうきとせる氣もち。謠曲(蟬丸)「鳴くや關路の夕烏、浮れ心は烏羽玉のわが黑髮の飽かで行く」

うかれ-さんぢゆう 浮三重 【名】 三重(サンヂユウ)の一。芝居にて、幽靈などを出す時、凄みを添ふるために用ふる鳴り物。

うかれ-づま 浮妻 【名】 うかれめ(浮女)に同じ。續千載「一夜あふゆききの人のうかれづまいくたびかはるちぎりなるらん」

うかれ-てうし 浮調子 【名】 ㊀うかれびやうし(浮拍子)に同じ。㊁うはてうし(上調子)に同じ。

うかれ-てふ 浮蝶 【名】 小唄の一。

うかれ-どり 浮雞 【名】 うかれたる雞。時ならず鳴く雞。萬代「なぞもかく人の心のうかれどり別れもよほす聲をたつらん」

うかれ-びと 浮人 【名】 ㊀一處に落ちつかぬ人。浪人。うかれもの。うかれをとこ。うかれうど。〔古語〕紀「浮浪、ウカレビト」 ㊁たはれを。道樂もの。うかれもの。うかれうど。うかれをとこ。うきすけ。

うかれ-びやうし 浮拍子【名】三味線などの、人の心を浮きたたしむるやうに彈く調子。うかれ調子。うき拍子。

うかれ-ぶし 浮節【名】なにはぶし(浪花節)に同じ。〔京都・大阪の語〕

うかれ-ぶね 浮船【名】**一**逍遙しつつ漕ぐ船。あそびぶね。**二**ところ定めず漂泊する船。

うかれ-んばう 浮坊【名】浮れたる人を嘲りていふ稱。

うかれ-め 浮女【名】藝妓・娼妓・酌婦・密賣婦などの類の總稱。うかれぎみ。うかれづま。遊君。遊女。六百番歌合「うかれめのうかれてありく旅まくらすみつきがたき戀もするかな」

うかれ-もの 浮者【名】うかれびと(浮人)に同じ。

うかれ-ゆかた 浮浴衣【名】浮れたる人の著る浴衣。派手なるゆかた。津國女夫池「うかれ浴衣の菊の露」

うかれ-を 浮男【名】うかれをとこ(浮男)の略。

うかれ-をとこ 浮男【名】うかれびと(浮人)二に同じ。

うき 【名】どろ(泥)に同じ。〔古語〕山家「五月雨は行くべき道のあてもなしをざさが原もうきに流れて」

うき 憂【名】うきこと。うれはしきこと。新續古今「さのみやはうきに年經んうき草の根も見つ人を思ひたえなで」

うき 浮【名】**一**『うくは(浮羽)を見よ』さかづき(盃)に同じ。〔盞〕〔古語〕釋日本紀「筑後風土記…酒盞。俗語云二酒盞一、爲二宇枳一」**二**〔人〕うきだいじん(浮大盡)に同じ。

うき 浮子・泛子【名】**一**釣具の一。釣絲に附けて水に浮ぶる小き木片。その形、多くは、唐辛(タウガラシ)の實に似せて、太く短く作り、又、算盤珠の如きものもあり。この物の動くを見て、魚の餌に附けるを知るなり。うけ。**二**あば(網端)に同じ。**三**『英 Float』河・海の水面に浮流せしめて、その流の速度と方向とを測定する具。**四**うきぶくろ(浮嚢)に同じ。**五**ふへう(浮標)に同じ。

う-き 雨季・雨期【名】一年中の中にて、雨の最も多き時期。我が國の梅雨の季節のごとき類。

う-き 于歸【名】『詩經周南の桃夭篇に「之子于歸(コノコトツグ)、宜二其室家一」とあるに本づく。「之子」は嫁する女子をいふ。又「于」はうえき(于役)の「于」に同じく「往く」の意なりともいふ』女子の嫁すること。

う-き 雨氣【名】うい(雨意)に同じ。

う-き 右揆【名】『書經舜典に「納二于百揆一、百揆時敍」とあり。百揆は、百事を揆(ハカ)る意にて、宰相の職といふ。それより轉じて、揆をただちに宰相の意に用ふ』うだいじん(右大臣)の唐名。

う-ぎ 羽儀【名】『易經の漸卦に「鴻漸(ススム)二于陸(タチマ)一、其羽可二用爲一レ儀」とあるに本づく。羽は鴻の用ひて進む所のもの、而して進むに漸あるがゆゑに、その羽は用ひて儀法と爲すべしとの意』**一**儀表となること。**二**天子を侍衞する兵。近衞兵。

う-ぎ 雨儀【名】**一**雨天の時に、禁中にて行はるる御儀式。**二**『朝儀は、中庭にて行はるれば、雨中には略して行はるる故なり』公事(クジ)を略儀に行はせらるること。江家次第「雨儀、立二仁壽殿西階下一」

う-ぎ 雨祇【名】うし(雨師)に同じ。

うき-あがる 浮上る【動四自】**一**水中より水面へ浮きいづ。うかぶ。うかびあがる。うかみあがる。**二**苦しきことをのがる。立身す。たすかる。うかぶ。

うきあげ-ぼり 浮上彫【名】うきぼり(浮彫)に同じ。

うき-あし 浮足【名】**一**相撲(スマフ)にて、足の指は地面に著きて、踵(キビス)の上がりてあること。足切(ソクギリ)。**二**足の一所に落ちつかぬこと。心の定まらぬこと。にげあし。

浮足立つ【句】足だまり出來なくなる。逃げ腰になる。

浮足を見す【句】前條に同じ。「うきあしみせて散りうせぬ」

浮足になる【句】前條に同じ。

うき-あしば 浮足場【名】『英 Floating scaffola』水中に箱船を浮游せしめて、その上に組立てたる足場。

うきあな-の-みや 浮穴宮【名】かたしほのうきあなのみや(堅鹽浮穴宮)に同じ。

うき-あぶら 浮脂【名】水の上に浮きたる脂。記「國稚(ワカ)く浮脂の如くにして」

うき-あゆみ 浮步【名】足を浮せて步むあるきぶり。うけあゆみ。

うき-いし 浮石【名】かるいし(輕石)に同じ。

うき-いづ 浮出づ【動下二自】水面に浮びあらはる。うかびいづ。新古今「涙のみうきいづる蜑の釣竿の長き夜すがら戀ひつつぞある」

うき-いは 浮石【名】**一**かるいし(輕石)に同じ。〔古語〕**二**水の中にありて、半ばをあらはし、恰も浮きたるやうに見ゆる岩。

うき-いを 浮魚【名】〔動〕めだか(目高)に同じ。

うきう 【名】〔植〕ゑごのり(惠古苔)に同じ。

うき-うき 【名】**一**やきざかな(燒肴)を云ふ。〔女房語〕**二**寒晒(カンザラシ)の米の粉をまるめて煮たるもの。しらたま。〔俚語〕

うき-うき 浮浮【貌】心の浮かれ立つさま。新六「君といへばいけるあさきの池水にうきうきとのみなる心かな」

うき-うた 盞歌【名】盃に酒をつぐ時にうたふ歌ならんといふ。〔古語〕紀「宇岐歌」

うきうど 【名】〔植〕ゑごのり(惠古苔)に同じ。

うきう-ぼく 烏臼木【名】〔植〕大戟(タカトウダイ)科に屬する落葉喬木。葉は廣き卵形にして尖り、全緣なり。花は黃色にして、夏咲き、秋實を結ぶ。種子の皮部より蠟を製し、仁より油を採る。また觀賞用ともせらる。たうはぜ。琉球はぜ。

うき-うを 浮魚【名】常に水の上層に生活する魚。例へば鰯(イワシ)・鯖(サバ)などの類。

うき-おき 浮置【名】事理を決定せずに置くこと。〔德川時代の語〕

うき-おり 浮織【名】緯絲(ヨコイト)を經絲(タテイト)にからませずに、紋樣を浮かしたる織物。うけおり。

うきおり-もの 浮織物【名】浮織にしたる織物。助無智秘抄「えび染のうきおりものの指貫(サシヌキ)」謠曲(知章)「うきおりものの直垂に、つきにほひの鎧著て」

うき-かた 浮形【名】うきもん(浮紋)に同じ。〔古語〕

うき-がため 浮固【名】柔道にて、相手を固むる術の一。

うき-かはたけ 浮川竹【名】『うきは、河邊の竹の浮沈する意の浮に憂きの意を兼ねしめたるもの』かはたけ(川竹)二に同じ。「浮節の里」參照。「うきかはたけの身」

うき-がひ 浮貝【名】〔動〕**一**たからがひの一種。介殼は、外部は白色の上に、黑褐色の筋三條あり、內側は極めて美し。**二**腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。殼厚くして螺形はなはだ短し。中生代よりしてすでに顯れたるものといふ。

うき-かぶ 浮株【名】〔商〕賣買その他の移動多くして、いまだ所有者の確定せぬ株劵。浮動株。

うき-かも 浮鴨【名】水に泳げる鴨。新六「み草ゐる入江になるるうき鴨のやすからぬ世は思ひ知りにき」

うき-かんなん 憂艱難【名】憂きことと、艱難と。

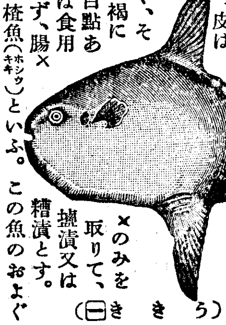
うき-き 浮木・楂・槎【名】**一**水の上に浮び居る木。ながれ木。和名「楂、宇岐岐、水中浮木也」**二**『支那の張騫(チヤウケン)が、漢の武帝の使として、槎(イカダ)に乘りて、天漢(アマノガハ)の源を究めしに、孟津(黃河の水邊の地)に至りて、牽牛(ケンギウ)・織女(シヨクヂヨ)に逢ひて歸れりといふ傳說に寄託していふ。槎は楂と同字』いかだ。ふね。〔古語〕源氏「いくかへりゆきかふ秋をすぐしつつうききにのりて我かへるらん」

浮木に逢ふ【句】『法華經の莊嚴王品に「佛難レ得値、如二優曇波羅華一、又如二一眼之龜値二浮木之孔一」とあり、又、莊嚴論に「有二一小兒一、聞二佛說一、人身難レ得如三盲龜値二浮木孔一、小兒穿レ板作レ孔、置二池水中一、以レ頭出入、終不レ能レ入、盲龜在レ海、百年一出、何日値耶、我今爲レ人有二面目一、一日百出、値二木孔一猶難」とあり、その他、雜阿含經(ザフアゴンギヤウ)・涅槃經(ネハンギヤウ)等にも同樣の說見えたるに本づく』遇ひがたき幸運に遇ふを、海中の盲龜(マウキ)の浮木に逢ふに譬へていふ語。盲龜の浮木。「一眼(イチゲン)の龜」參照。狹衣「浮木にあはんことよりも、難きことどもかな」

浮木の龜【句】前條を見よ。

うき-き 楂魚・飜車魚【名】**一**〔動〕固顎

（フグ）類に屬する魚。大なるは、一二丈に至る。形、あかえひに似、皮は鮫（サメ）のごとく粗く、その色灰褐にして白點あり。肉は食用とならず、腸×のみを取りて、鹽漬又は糟漬とす。こを乾楂魚（ホシウキキ）といふ。この魚のおよぐ時、熊手をもて止むれば、よく止まるといふより、名とす。まんばう。まんばうざめ。うききまんばう。　うききまんばう。㊁ほしうきき（乾楂魚）の略。


（うきき㊀）

うきき-ぢゆうき 浮起重機【名】『英 Floating crane 又 Derrick barge』箱船の上に据ゑつけて、水面上にて荷役（ニヤク）をなす起重機。船相互間に用ふるときは利便大なり。又、工事用にも用ひらるることあり。

うきき-づくり 浮木作【名】章魚（タコ）の切方の一。小口より薄く二分位づつに切りかけたるもの。

うきき-の-かめやま 優曇華龜山【名】かたきうちうききのかめやま（敵討優曇華龜山）の略。

うきき-まんばう【名】〔動〕うきき（楂魚）㊀に「同じ。

うき-きやく 浮客【名】氣の浮きたる客。〔徳川時代の遊里の語〕

うき-く 憂苦【名】うきことと、苦しきこと。うきくらう。

うき-くさ 浮萍【名】〔植〕浮萍（ウキクサ）科に屬する一年生の草。水田・池沼等に自生し、圓くして大さ一二分の三箇の葉狀體、水面に浮び、表は綠に、裏は紫色を帶ぶ。絲狀の數根下垂し、夏、淡綠色の小花を開く。かがみぐさ。かがみぐみ。たねなし。なきものぐさ。

うき-くさ 浮草【名】㊀水面に浮び生ずる草の總稱。〔萍〕 古今「わびぬれば身をうきくさの根をたえてさそふ水あらばいなんとぞおもふ」 ㊁〔植〕でんじさう（田字藻）に同じ。

うきくさ-くわ 浮萍科【名】〔植〕顯花植物・單子葉門の一科。一年生の草本にして、淡水に生ず。

うきくさ-の 浮草の【枕】㊀音の同じきより、うき（浮き）にかけていふ。 古今「たきつせにねざしそめぬる浮草のうきたる戀もわれはするかな」 ㊁うきくさは、根の水底につかぬものなるより、ねをたえて（根を絕えて）にかけていふ。 古今「わびぬれば身をうきくさのねをたえてさそふ水あらばいなんとぞおもふ」

うき-ぐつ 浮沓【名】水泳の時、沈まぬやうに身に著けたるもの。今のうきぶくろの類。〔古語〕

うき-ぐつ 浮履【名】これを穿てば、水面をも步み得といふ物ならん。〔古語〕 保元「昔まさしく鬼神なりしときは、隱蓑・隱笠・浮履・劍などいふ寶ありけり」

うき-ぐも 浮雲【名】㊀空中に浮びただよふ雲。ふうん。 千載「定めなき身はうきぐもによそへつつはてはそらにぞなりはてぬべき」 ㊁物事の落ちつき定まらぬこと。 方丈記「ふるさとはすでに荒れて、新都はいまだ成らず、あるとしある人は、みな浮雲の思をなせり」

うきぐも-の-みや 浮雲宮【名】常陸國鹿島（カシマ）神宮の末社の一。 風俗文選「浮雲宮は、鹿島だちの始めとす」

うき-くらう 憂苦勞【名】うきく。しんばい。憂苦。 曾根崎心中「このぢゆう、おれが憂き苦勞」

うき-こ 浮粉【名】米を細末にしたるもの。紅を凝結せしめ、又は落雁（ラクガン）を製するなどに用ふ。

うき-こ 浮子【名】あば（網端）に同じ。

うき-ごけ 浮苔【名】〔植〕苔類の一種。濕地又は水中に生ず。濕地のは、扁平部、星狀に分裂し、水中のは、鹿角狀に分岐す。かづのごけ。

うき-ごし 浮腰【名】㊀相撲を取る時などに、腰に力のこもらぬこと。㊁柔術にて、相手の體の浮き來れるとき、我が腰部を、相手の腹部に附著するやうに進め、我が腰を支點として投ぐること。

うきこつむ【名】ふね（船）の異名。うきつこつむ。〔古語〕 藏玉集「うきこつむ、舟」

うき-ざうす 浮藏主【名】浮かれたる藏主。〔徳川時代の語〕 紅梅千句「このごろは群集するや東福寺（安酔）、花には誰も氣のうき藏主（友仙）」 正章千句「新發意をそそのかしぬるうき藏主」

うき-さしあみ 浮刺網【名】海面に近く浮かせおきて、水の上層を浮泳する魚類を遮り、その頭を網目につきさすやうに仕向けて漁獲するに用ふる網。

うき-さんばし 浮棧橋【名】船舶の繫留と船客の昇降とに便する棧橋。木又は鐵の函を水面に浮べ、水面の昇降と共に高くも低くもなるやうにせるもの。

うき-した 浮下【名】釣絲の浮子（ウキ）をつけたる下の部分。

うき-しづみ 浮沈【名】㊀浮くと沈むと。うかぶと、おぼるると。 續古今「うきしづみ淵瀨流るるもみぢ葉はふかくあさくぞ色も見えける」 ㊁盛んなると衰ふると。榮枯。隆替。「ぼうふらや蚊になるまでのうきしづみ」 ㊂世の變遷に從ひて行動すること。

浮沈、七度（ナナタビ）【句】人生の浮沈限りなき譬。〔諺語〕 本朝二十四孝「いつの世にかは愛染（アイソメ）川の、身のうき沈み、七度は、氷をわたる信濃路」

うき-しづむ 浮沈む【動四自】㊀浮き、また沈む。 古今「かづけども浪の中にはさぐられて風吹くごとにうきしづむ玉」 ㊁榮え、また衰ふ。

うき-しほ 浮潮【名】うしほのながれ。潮流。 夫木「うきしほの浪にただよふ濱千鳥あととどむべきかたも知られず」

うき-しほ 憂き潮【句】うし（憂し）の條下を見よ。

うき-しま 浮島【名】㊀浮洲（ウキス）の大なるもの。㊁遠く水面に浮びたるごとく見ゆる島。㊂〔地〕常陸國霞浦の中にある島。稻敷郡に屬す。周回、三里半餘。一名、須田（スダ）の浮島。 貫之集「櫻川せぜのしらなみしげければや霞うながす信太（シダ）のうきしま」 ㊃〔地〕陸前國松島なる鹽竈の浦島。 新古今「しほがまの前に浮きたるうきしまのうきて思のある世なりけり」

うきしま-が-はら 浮島原【名】〔地〕駿河國駿東（スントウ）郡沼津町と富士郡鈴川との間において、浮島沼を抱ける平原。愛鷹（アシタカ）山の麓。海潮の作用にて、土砂の移動・流著して成りしものならんといふ。 新勅撰「あしがらの關路を越ゆるしののめに一むらかすむうきしまがはら」

うきしま-にんぎやう 浮島人形【名】厚紙に蠟を引き、針金を心（シン）とし、練絲（ネリイト）にて彩りたる、人物・鳥類などの形を作れるもの。水中に放てば、浮きて動きまはる。

うきしま-ぬま 浮島沼【名】〔地〕駿河國富士・駿東（スントウ）の二郡に跨れる沼。周回、三里。富士八湖の一。別稱、富士沼。

うき-しよむ 浮所務【名】一定せる以外の臨時の所務。しよむ（所務）參照。

うきす【名】〔動〕めだか（目高）を云ふ。〔尾張國の方言〕

うき-す 浮洲【名】沼などに、浮木・泥炭（デイタン）などの集りて、自然と土を載せ、草など生じて、洲（ス）の如くに見ゆるもの。 謠曲（藤戸）「あれに見えたる浮洲の岩の」

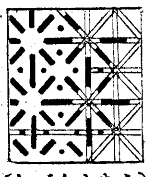
うき-す 浮巢【名】㊀水上に植物の莖・葉などを用ひて構へ、波の高低に從ひて浮沈する鳥の巢。（にほどりのに云ふ） 新後拾遺「したくぐる道と見しまににほどりのうきすをかけてこほるいけ水」 ㊁住所の定めなき譬。

うきす【名】うきすの（うきす篦）に同じ。

うきす-くづし 浮巢崩【名】模樣の一。下の圖を見よ。

うき-すけ 浮助【名】うかれを。みやびを。たはれを。〔元祿時代の江戸の語〕

うきす-どり 浮巢鳥【名】浮巢を作りて棲む鳥。みづとり。うきねどり。


（うきすくづし）

うきす-の うきす篦【名】矢柄（ヤガラ）に使用せる竹の、一年竹にて、肉の堅實ならぬもの。うきす。（かたうきす・かたのに對して）

うきす-のり 浮巢海苔【名】〔植〕ふぢとのり

(廣戸海苔)に同じ。

うき-ずまひ 憂住 【名】 心憂き住居。謠曲（烏帽子折）「都の外のうきずまひ」

うき-せ 憂き瀬・浮瀬 【句】 うし(憂し)の條下を見よ。

うき-ぜい 浮勢 【名】 いうぐん(遊軍)に同じ。うきぞなへ。**うきむしや**(浮武者)參照。太平記「敵の近づかん所へ駈け合せんと、浮勢になって控へたり」

うき-ぜき 浮堰 【名】『英 Floating weir』 隨時に、必要に應じて浮動せしめ得る堰。上流の水位を高め、又は引水に便ならしむるに用ふ。

うき-ぞなへ 浮備 【名】 いうぐん(遊軍)に同じ。うきぜい。

うき-そびれる 浮きそびれる 【動下一自】 浮かんとして、浮きそこなふ。〔俚語〕七偏人「陰症の傷寒だから、熱がうきそびれると、氣がたぢれるぜ」

うき-た 浮田 【名】 ㈠浮洲(ウキス)に作れる田。㈡〔動〕めだか(目高)を云ふ。〔大阪の語〕

うきた 宇喜多・浮田 【名】 姓氏の一。備前國の名族。祖先は百濟(クダラ)國の人。備前國兒島に住みて「兒」の字を紋所とし、中年、姓を立てて三宅(ミヤケ)といひ、後、宇喜多と改む。源平時代に浦上氏に屬し、後、毛利氏に歸し、又、織田氏・豐臣氏に從ひ、關ケ原の役に亡ぶ。

うき-だいじん 浮大盡 【名】〔人〕大石良雄の遊里にての綽名(アダナ)。うき。

うきた-いっけい 浮田一惠 【名】〔人〕土佐派の畫工。勤王家。名は可爲(ヨシタメ)、內藏允と稱す。京都の人。安政の大獄に繫がれしも釋(ユル)され、同六年歿す。年六十五。

うき-だから 浮寶 【名】 うくだから(浮寶)を見よ。

うき-だし 浮出 【名】 將棋(シヤウギ)にて、飛車(ヒシヤ)又は香車(キヤウシヤ)が、その位置より上方へ二目以上出づること、又、角行(カクカウ)が右又は左へ斜に二目以上出づること。

うきだし-いんさつ 浮出印刷 【名】『英 Embossing』 模樣もしくば文字をば紙面に浮出すやうにする印刷法。原版は、その部分を凹にす。

うき-だす 浮出す 【動四自】 ㈠水面に浮きあらはる。浮かびいづ。㈡うかれだす。うかれはじむ。

うき-だすき 浮襷 【名】 浮囊(ウキブクロ)の類の具。小瓢二三十個を布に縫ひくるみ、一筋は襟にかけ、一筋は腰にまとひて用ふ。うきぶくろの類。

うき-たつ 浮立つ 【動四自】 ㈠うきあがる。うかびいづ。おこる。㈡面白さ又は恐怖などにて、人の心落ちつかず。大いにうかる。騷ぎだつ。源氏「暮れぬれば、心も空にうきたちて、いかで出でなんとおぼすに」方丈記「世の中うきたちて、人の心もをさまらず」

うきた-の-もり 浮田森 【名】〔地〕昔、山城國にありし森。古歌に「大荒木の浮田の森」と詠みたれば、乙訓(オトクニ)郡淀村なる與杼(ヨド)神社(古の大荒木の森)の附近にありしならん。歌枕の一。續後撰「下草は葉末ばかりになりにけり浮田の森の五月雨の頃」

うきた-のり 宇喜田海苔 【名】〔植〕下總國葛飾(カツシカ)郡宇喜田村より產する海苔。

うき-だひ 浮鯛 【名】〔動〕產卵期となりて、海面近くに出づる鯛。さくらだひ。

うきた-ひでいへ 宇喜多秀家・浮田秀家 【名】〔人〕武將。直家の子。秀吉の養子。本名は家氏、八郎と稱す。關白秀吉に仕へて優遇せられ、片諱を賜はり、累進して參議・從三位に至る。朝鮮の役に元帥また監軍として各地に轉戰し、後、五大老の一人となる。關ケ原の役にも大阪方の元帥となり、敗れて八丈島に流され、謫所に在ること凡そ五十年、明曆元年卒す。年八十三。

うき-たま 浮魂 【名】 浮れさまよふ魂。うかれたま。

うき-だま 浮玉 【名】 桐にて造りたる球を、苧にて數珠のごとく連ねて作り、水泳の時身に著けて沈まぬやうにする具。うきぶくろの類。

うき-たる 浮きたる 【句】 うく(浮く)の條下を見よ。

うき-ぢ 浮地 【名】『ぢはひぢ(泥)の略か』うきす(浮洲)の類か、又はうきつち(浮土)に同じかるべし。

うき-つ 浮津 【名】 天の川にありと想像するわたしば。〔古語〕新勅撰「天の川うきつの波に彥星の妻むかへぶね今やこぐらし」

うきつ-こつむ 【名】 ふね(船)の異稱。うきこつむ。〔古語〕秘藏抄「わたつみのしらささめこえあま人のうきつこつむにのりつりに行く」

うき-つち 浮土 【名】 泥ぶかき土。〔古語〕山家「五月雨に小田の早苗やいかならんあぜのうきつちあらひこされて」

うき-つば 浮鐔 【名】 すかしぼりの模樣ある鐔なるべしといふ。

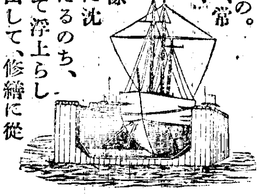
うきつり-ぼく 【名】〔植〕錦葵(ゼニアフヒ)科に屬せる熱帶產の落葉灌木。花は鐘狀にて、下垂して開き、花冠は黃色、萼は長くして鮮紅色。主に觀賞用として栽培せらる。

うき-てうし 浮調子 【名】 うきびやうし(浮拍子)に同じ。

うき-と 浮戸 【名】『英 Floating ship caisson』 閘門あるひは船渠(ドツク)の入口を閉鎖するに用ふる戸。

うき-とうだい 浮燈臺 【名】『英 Floating light-hou』 燈臺の一種。船舶の檣上などに燈火を設け、洲の附近の一定の位置に繫ぎおきて航路を示すもの。

うき-どっく 浮船渠(英 Floating dock 又 Pontoon dock) 【名】 船渠の一種。主として修繕の用に供するもの。常に海上に浮べおき、船舶の如き構造にて、船舶の入渠せんとする時、まづその中の空氣を排除して、適宜の深さに沈ましめ、入渠終りたるのち、また空氣を充たして浮上らしめ、內部の水を排出して、修繕に從事す。その形、種種あれど、等しく空氣室を設け、その空氣を拔き去ることの多寡によりて、その浮游力を調節す。


(くっどきう)

うき-どり 浮鳥 【名】 ㈠水面に浮び居る鳥。みづとり。うきすどり。㈡鳥の形に造り、水上に浮べて用ふる、小供の玩具。

うき-な 浮名 【名】 惡き名。評判。うはさ。(多くは男女間の艷聞にいふ) 狹衣「吹きはらふよもの木がらし心あらばうきなをかくすくまもあらせよ」

うき-な 浮菜 【名】〔植〕かぶら(蕪菁)に同じ。

うき-ながなは 浮長繩 【名】 うきはへなは(浮延繩)に同じ。

うき-なぎ 浮水葱 【名】 水に漂(タダ)へるなぎ。〔古語〕安法集「池づらに、頭白き女のうきなぎ摘みけるを見て」

うき-なは 浮繩 【名】 うきはへなは(浮延繩)に同じ。

うき-なみ 浮浪 【名】 立つ浪。なみ。〔古語〕玉葉「うき波のかかるもならば有渡(ウド)濱のうとくて人にあらましものを」

うき-に 浮荷 【名】〔商〕『英 Flotsam』 船より打荷(ウチニ)として、海中に投棄せられ、又は風波のために船中よりさらはれて海中に漂へる貨物。

うき-にんぎやう 浮人形 【名】 小供の玩具の一。壺などの上に、杓子などを持て立てる人形を添へ、その下部には、竹の笛を横にさしこみ、その笛を吹けば、上なる人形の廻轉するやうに仕掛けたるもの。

うき-ぬ 浮沼 【名】 うきぬま(浮沼)に同じ。一說に、萬葉集のは地名なりと。〔古語〕萬葉「君がためうきぬの池の菱とるとわが染めし袖ぬれにけるかも」夫木「いかにせんうきぬの澤にはふ蘆のしたのみだれもわきがたき世に」

うき-ぬなは 浮蓴 【名】 池などの水面に浮べるぬなは。拾遺「なき事をいはれの池のうきぬなはくるしきものは世にこそありけれ」

うきぬ-の-いけ 浮沼池・浮布池 【名】〔地〕石見國安濃(アノ)郡三瓶山の西麓にある沼。周回、十九町。後拾遺「身はかくてうきぬのいけのあやめぐさひく人もなし根こそつきせね」

うき-ぬま 浮沼 【名】 泥深き沼。うきぬ。

うき-ね 浮寢 【名】 ㈠船中に寢ぬること。うきまくら。㈡寢ねても心の落ちつかぬこと。寢所の一處に定まらぬこと。(遊女・水鳥などの上にいふ。歌には、憂き哭(ネ)の意に言ひかけたるものあり) 後撰「冬の池の

水に流るるあし鴨のうきねながらにいくよへぬらん」㊂小唄の一。

浮寢の床(トコ)【句】うきねをする場所。千載「をし鳥のうきねの床やあれぬらんつららゐにける昆陽(コヤ)の池水」

うき-ね 浮根【名】浮草などの根。(歌には、憂き哭(ネ)の意に言ひかけたるもの多し) 千載「あやめ草うき根をみても涙のみかからん袖を思ひこそやれ」

うきね-どり 浮寢鳥【名】水の上にある鳥。みづとり。うきすどり。うきどり。

うき-は 浮葉【名】水に浮きて生ずる葉。新拾遺「風をいたみはすのうきはにやどしめて涼しき玉に蛙なくなり」

うき-は 浮羽【名】うくは(浮羽)を見よ。

うきは 浮羽【名】〔地〕筑後國六郡の一。明治二十九年、もとの生葉(イクハ)・竹野(タカノ)の二郡を倂せるもの。郡役所を吉井町に置く。

うき-はうだい 浮砲臺【名】『英 Floating battery』港灣の防禦に任じ、または砲臺を攻擊するために、堅牢なる覆蔽(フクヘイ)を設け、多くの砲を備へたる軍艦。概ね敗殘の戰艦を以て充つ。

うき-ばうはてい 浮防波堤【名】『英 Floating breakwater』水面に或構造物を繫ぎ浮べて、波の港に進入するを禦ぐもの。

うき-ばかり 浮秤【名】ひぢゆうけい(比重計)に同じ。

うき-はし 浮橋【名】㊀あめのうきはし(天浮橋)に同じ。㊁筏又は船などを水面に浮べて、交通用に供するもの。〔古語〕萬葉「よどせにはうきはしわたし」

うき-はぢ 憂き恥【句】うし(憂し)の條下を見よ。

うきはへ-なは 浮延繩【名】長き釣絲に短き多くの絲を附け、その端に釣針を結びたる漁具。上層を遊泳する魚類を釣るに用ふ。うきなは。うきながなは。

うき-ひぢ 浮泥【名】どろ。うひぢ。〔古語〕山家「さみだれに小田の早苗やいかならんあぜのうきひぢ洗ひこされて」

うき-ひと 憂き人【句】うし(憂し)の條下を見よ。

うき-びやうし 浮拍子【名】うかれびやうし(浮拍子)に同じ。

う-きふ 雨泣【名】雨の降るごとくに涙を流して泣くこと。

うき-ぶくろ 浮囊【名】㊀魚の腹中にありて、體の比重を調節する囊狀の器官。〔鰾〕㊁水泳の時に、身に著けて沈まぬやうにするふくろ。革・護謨(ゴム)などにて作り、中に空氣を貯ふ。うき。うけ。うきぐつ(浮沓)・うきだすき(浮襷)・うきだま(浮玉)參照。

うき-ぶし 憂き節【句】うし(憂し)の條下を見よ。

うき-ふね 浮船【名】㊀水の上に浮きてある船。㊁鬘(カツラ)の一種。㊂菓子の一種。㊃謠曲の一。源氏ものの一。浮船の君(源氏物語宇治十帖の中の人物)の事を作りしもの。

うきふね-の 浮船の【枕】船は漕がるるものなるより、「思ひ焦(コガ)るる」の意のこがるにかけていふ。拾遺「われのみ獨りうきふねのこがれて世にはわたるらん」

うき-へう 浮標【名】ふへう(浮標)に同じ。

うき-ぼたん 浮牡丹【名】陶器に、釉(ウハグスリ)を浮上るやうに施してあらはしたる、牡丹の繪紋(エモン)。

うき-ぼり 浮彫【名】板面上に模樣を高く刻りあげたる彫り物。高浮彫・薄浮彫・半肉彫の三種に分つ。肉ぼり。うきあげぼり。うけぼり。

うき-まい 浮米【名】かこひごめ(圍米)に同じ。

うき-まくら 浮枕【名】㊀うきね(浮寢)㊀に同じ。〔古語〕新勅撰「うきまくら風のよるべも白波のうちぬるよひは夢をだにみず」㊁『浮と憂きとを言ひかけたるもの』涙にて枕の浮くほどに憂き獨寢。續後撰「せきかぬる淚の川のうき枕うきてみなわのよるぞけぬべき」

うき-まんばう【名】〔動〕うきき(楂魚)に同じ。

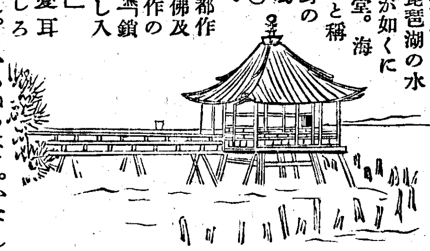
うき-み 浮身【名】㊀游泳法の一。體を輕くして仰向(アフムキ)になり、手足にて水を搔(カ)くことをせずに、しづかに水面に浮ぶ方法。手足疲れ、呼吸苦しくなりたる時などに行ふ。㊁越前・越後の海邊にて、旅商人の滯在中、妻の如くに共棲する一種の遊女。その家を、浮身宿といふ。

うき-み 憂き身【句】うし(憂し)の條下を見よ。

うきみ-がくれ 憂き身がくれ【句】うし(憂し)の條下を見よ。

うき-みごもり 憂き身ごもり【名】うし(憂し)の條下を見よ。

うき-みだう 浮御堂【名】近江國堅田(カタタ)にありて、琵琶湖の水上に浮べるが如くに造りたる御堂。海門山・滿月寺と稱し、京都紫野の大德寺に屬す。惠心(ヱシン)僧都の開基。本尊は同僧都作の千體彌陀佛及び聖德太子作の觀世音。芭蕉「鎖あけて月さし入れよ浮御堂」



（うきみだう）

うき-みみ 憂耳【名】おもしろからぬはなし。よからぬうはさ。かなしき物語。

うきみ-やど 浮身宿【名】うきみ(浮身)㊁を見よ。芭蕉「海に降る雪や戀しきうきみ宿」

うき-みる 浮海松【名】水に漂ひてある海松。伊勢「うきみるの波によせられたる拾ろひて」

うき-むしや 浮武者【名】浮勢(ウキゼイ)の武士。大友興廢記「鐵砲軍は石田佐渡守、朝倉一白は東度足ぐちの大將なり。後藤大學は浮武者にて」

う-きん 烏巾【名】黑き色の頭巾。

う-きん 烏金【名】㊀〔鑛〕てつ(鐵)の異稱。㊁すみ(墨)の異稱。烏玉玦。

う-ぎん 烏銀【名】硫黃にて燻(フス)べたる銀。

うきん-かう 鬱金香【名】〔植〕うっこんかう(鬱金香)に同じ。

うきん-た 浮田【名】〔動〕『うきた(浮田)の音便』めだか(目高)を云ふ。〔京都・大阪の語〕

うきん-ちよ【名】〔動〕『前條の訛』めだか(目高)を云ふ。〔京都の語〕

うき-め 憂き目【句】うし(憂し)の條下を見よ。

うき-め 浮海布【名】海上に浮べる海布。謠曲(和布刈)「みるめ・うきめの花も咲く」

うき-も 浮藻【名】水上に漂ふ藻。日本振袖始「磯に寄せくる浮藻・玉藻をうち交ぜて」

うき-もの 浮物【名】㊀水の上にうかべる物。俗謠「ああ、浮いた、浮いた、瓢簞ばかりが、うきものか」㊁どざゑもん(土左衞門)に同じ。

うき-もん 浮紋・浮文【名】浮織の模樣。うけもん。(固紋に對して) 源氏「うきもんのうへのはかま」

う-きやう 右京【名】〔地〕昔、京都の全市を、朱雀大路(スジヤクオホヂ)を界として、東・西に分ちたる、その西半の地。西の京。長安。(左京に對して)

う-ぎやう 有形【名】〔佛〕うさう(有相)に同じ。

う-ぎやう 右行【名】右の方へ歩むこと。狂言(蟹山伏)「大足二足、小足八足、右行・左行して遊ぶものぢや」

うきやう-しき 右京職【名】古、平安京の右京の事をつかさどりし役所。きやうしき(京職)參照。

うぎやう-どう 烏形幢【名】朝廷にて、元日・即位などの儀式に用ひし旗の一。大極殿前に樹(タ)つ。うざうどう。

うきやう-の-だいぶ 右京大夫【名】右京職の長官。右京亮(スケ)・右京進(ジヤウ)・右京屬(サクワン)などの職員あり。

うき-やがら 浮矢幹【名】〔植〕みくり(荊三稜)に同じ。

うき-やく 浮役【名】『收入、浮動して定まらぬ意』德川時代の雜稅の一。漁獵の類に課せしもの。

う-きやく 羽脚【名】はねと、あしと。

う-きやく 雨脚【名】あまあし(雨脚)に同じ。

うき-ゆひ 盞結【名】『杯を取りかはして、契を結ぶ意』ちかひ。うけひ。約束。盟約。誓約。〔古語〕記「うきゆひして、うながけりて」

うき-よ 憂き世【句】うし(憂し)の條下を見よ。

うきよ 浮世【名】**一**『もと憂き世の意なるに、ふせい(浮世)の字を宛てて、意のやや轉ぜるもの』浮きて定まらぬ世。無常の世。**二**世の中。この世。人世。うし(憂し)の條下「憂き世」參照。

浮世に鬼は無し【句】「渡る浮世に鬼は無し」に同じ。〔諺語〕

浮世は一分五釐【句】現世は、さほど惜しむべき値打(ネウチ)あるにあらず。浮世は三分五釐。〔諺語〕

浮世は車の輪の如し【句】現世の變轉極りなきを、車の輪に譬へていふ語。〔諺語〕 十二段草子「露の命も長らへば、浮世は車の輪のごとく、めぐりて來ぬる事あらば」

浮世は三分五釐【句】「浮世は一分五釐」に同じ。 根無草「古人春宵一刻値千金とめったに高ばれば、又うき世を三分五釐と捨賣にする男もあり」

浮世は夢【句】現世のはかなきを夢の覺めやすきに譬へていふ語。〔諺語〕

浮世を廻る【句】「憂き世に廻る」に同じ。 太平記「うきよをめぐる車がへし」

こかく浮世は色ご酒【句】世の中の樂しき事は、女色と酒とにあり。〔諺語〕 俗謠「達磨(マダル)さん、こちら向かんせ、とかく浮世は色と酒」

うきよ-おやぢかたぎ 浮世親仁形氣【名】〔書〕其磧・自笑の合作せる小說。五卷。享保五年の作。形氣物の祖。

うきよ-がさ 浮世笠【名】浮世ぐるひする者などのかぶりし笠ならん。 五人娘「うきよがさ」

うきよ-がたり 浮世語【名】うきよばなし(浮世話)に同じ。 謠曲(濡衣)「また、古にかへる波のうきよがたりの言の葉の露のかごともよしぞなき」

うきよ-ぎんちやく 浮世巾著【名】巾著の一種。實物不詳なれど、遊女などの裝飾品として腰にさげたるものにて、承應の頃より行はれしといふ。 用捨箱「承應の頃より浮世巾著といふものあり。桔梗ぶくろといふもののたぐひにあらずや」

う-きよく 迂曲・紆曲【名】**一**まがりくねること。**二**うくわい(迂回)に同じ。

う-ぎよくけつ 烏玉玦【名】すみ(墨)の異稱。烏金。

うきよ-ぐるひ 浮世狂【名】遊女・酒色に戲るること。名聞・利慾に心をまどはすこと。 伊勢貞丈隨筆「昔は、遊女と戲るるを、浮世ぐるひといひしなり」

うきよ-こうぢ 浮世小路【名】**一**浮世のちまた。世の中。**二**〔地〕江戶日本橋室(ムロ)町にありし細き小路。うきよせうぢ(浮世小路)・うきよだんご(浮世團子)參照。

うきよ-ごころ 浮世心【名】浮世ぐるひをする心。

うきよ-ござ 浮世莫蓙【名】模樣を石疊の如くに織出したる一種の莚(ムシロ)。 曾我會稽山「蚊屋も紙帳も所帶めく、內は裏なき浮世ござ、心をのぶる種ならし」

うきよ-ことば 浮世言葉【名】浮世ぐるひなどに關することば。 俗曲(浮世言葉)「浮世言葉によそへて問うて、とかく浮世ぢや、戀のみち、うらが氣ままになるなら、ほんに、とは思へども、人の口、有ること、無いこと、おっしやりますこと聞けば、松は小藤と寢たといふ。小藤は松と寢ぬといふ」

うきよ-こもん 浮世小紋【名】當時流行せる小紋染。 日本永代藏「浮世小紋の模樣」

うきよ-ざうし 浮世草紙【名】「名稱は淺井了意の『浮世物語』に本づく」元祿時代に、その時代の人情・風俗を寫したる一種の小說。西鶴物・八文字屋物など、これに屬す。假名草子の後を承けて大いに流行せり。 うきよぼん。

うきよ-し 浮世師【名】次條に同じ。

うきよ-じん 浮世人【名】**一**世事に通じたる人。通人。粹人。 うきよし。 狂言(きんじ聟)「聟どのは浮世人ぢやによって」**二**世の名利に耽る人。 うきよびと。

うきよ-すがた 浮世姿【名】今樣に著(キ)かざりしやれたる姿。當世風の姿。 好色飛鳥川序「きのふのうきよすがたを、今日の墨染になして」 「略。

うきよ-せいげん 浮世清玄【名】次條の略。

うきよせいげん-さとのよざくら 浮世清玄里夜櫻【名】劇曲の一。僧侶の清玄が遊女小櫻に戀慕して墮落せしことを仕組めるもの。 河竹新七の作。

うきよ-せうぢ 浮世小路【名】〔地〕『大阪邊にては、小路をすべてせうぢといふ』攝津國大阪の今橋の南なる小路。東堀より西へ入りたるところ。今橋邊には、富豪の住宅多し。 うきよこうぢ(浮世小路)參照。 淀鯉出世瀧德「これはこっちの大事のお客、浮世小路までお歸りぢや」

うきよ-せつ 浮世說【名】うきよばなし(浮世話)に同じ。

うきよ-ぞめ 浮世染【名】當時流行せる染模樣。 松の落葉「歌の文字・ちらし・こもんじ・浮世ぞめ」

うきよ-だんご 浮世團子【名】江戶時代の江戶名物の一。日本橋室(ムロ)町浮世小路(ウキヨコウヂ)なる浮世屋平助の賣出したる團子。

うきよ-づゑ 浮世杖【名】よしやづゑ(よしや杖)に同じ。

うきよ-でら 浮世寺【名】せけんでら(世間寺)に同じ。 一代女「さる寺のなづみたまひ、お大黑さまになりぬ。この日かず經るうちに、うきよでらのをかしさ」

うきよ-どこ 浮世床【名】**一**かみゆひどこ(髮結床)の異稱。**二**〔書〕「浮世風呂」に次ぎて成れる滑稽小說。髮結床に來る客の趣を寫し穿てり。中本六卷。式亭三馬の作。

うきよ-にんぎやう 浮世人形【名】元祿・正德頃に行はれし、一種の女の人形。裾(スソ)は捲(クマ)り得るやうに作り、陰部を具ふ。 筠庭雜考「當世風の人形を浮世人形といふ。…龜屋久作、古き浮世人形を予に見せて、衣を裾よりまくりたれば、朱筆を點じて前陰の形とせり」

うきよ-ばなし 浮世話【名】世の中の物語。世間ばなし。 うきよがたり。 うきよせつ。 俗談。

うきよ-びと 浮世人【名】うきよじん(浮世人)**二**に同じ。

うきよ-ふう 浮世風【名】〔文〕俳諧の一風。洒落(シヤレ)風。寶井(タカラ井)其角の唱へ出ししもの。江戶風。

うきよ-ぶくろ 浮世袋【名】**一**德川時代に、浮世ぐるひする人の用ひし匂袋。一說には、火打袋。三角に縫ひ、紐を附けたるものにて、もと女郎屋の暖簾(ノレン)の縫分の綻びぬために附けたる柑子革の乳(チ)に眞似たるものなりと。 たがそで(誰が袖)參照。 伊勢貞丈隨筆「昔は、遊女と戲るるを、浮世ぐるひと云ひしなり。傾城の宅前に、柳を二本植ゑて、橫手を結ひ、暖簾をかけ、それに遊女の名を書き、その下に浮世袋といふ物を、自分の細工にて附けしなり」 沙金袋「底たたくうきよぶくろや年のくれ」**二**德川時代に、幼き女子の、縫物を習ふ始めに、みづから縫ひて玩物とせしもの。上記浮世ぶくろに形の似たるより、同じ名に呼びしならん。 又それより轉じたるならんともいふ。又これを淡島(アハシマ)の神にたむけて、縫物上達の願をかくる習はしも有りき。後世、小供の玩ぶ縫ひくるみの庚申猿(カウシンザル)、又、新年に用ふる屠蘇(トソ)袋も、この遺風なりといふ。 花鶯談「神事のとき、町家の稚兒、日傘に、祇園まもり服紗やうのものをさげ、又、うきよぶくろといふ物を附くる」

うきよ-ぶし 浮世節【名】當世流行の唄の曲節。はやり歌のふし。 寬天見聞記「今は、一町內に、二三箇所づつ、よせと號し、看板に行燈をかけ、咄に音曲を入れ、役者の聲色・物まね・娘淨瑠璃・八人藝・うきよぶしなど、藝人を集めて、外に家業もなく、人よせのみ業とする家、あまたあり」

うきよ-ぶろ 浮世風呂【名】〔書〕錢湯の浴客の情態を寫し穿てる滑稽小說。中本八卷。式亭三馬の作。 うきよどこ(浮世床)**二**參照。

うきよ-ぼん 浮世本【名】うきよざうし(浮世草子)に同じ。

うきよぼん-かき 浮世本書【名】うきよ本を書く人。小說作者。戲作者(ゲサクシヤ)。

うきよ-またべゑ 浮世又兵衞【名】〔人〕いはさまたべゑ(岩佐又兵衞)に同じ。

うきよ-もとゆひ 浮世元結【名】元ゆひの一種。裝飾などを施して、派手(ハデ)なるもの。 一代女「つとなしのなげ島田、隱し結びのうきよもとゆひといふ事も」

うきよ-やうじ 浮世楊子【名】若衆(ワカシユ)の

定紋などを打ちつけたる楊枝。男色大鑑「えびす橋筋に、根本浮世楊子とて、芝居若衆の定紋をうちつけ置きしに」

うきよ-ゑ 浮世繪【名】〔美〕岩佐又兵衞の創めたる風俗畫。主に俳優の似顏・武者その他現在の風俗・世態を描く。菱川師宣(モロノブ)・鳥居清信・宮川長春・西川祐信・喜多川歌麿・安藤廣重・歌川豐國・葛飾(カツシカ)北齋・歌川豐國等この派の名家たり。錦繪も多くは浮世繪なりき。當世繪。

うきよゑ-し 浮世畫師【名】浮世繪をゑがく畫師。

うきよゑ-るゐかう 浮世繪類考【名】〔書〕浮世繪各派の系統及び浮世繪師の傳記・逸話等を記したるもの。一卷。笹屋邦教の原著に山東京傳の追考を加へ、後、式亭三馬・蜀山人等諸家の補記をも添へたるもの。

うきよ-をとこ 浮世男【名】好色の男子。いろごのみの男。本朝櫻陰比事「この商人の同じ町に、うきよ男ありて、この女を目にて忍び」

うき-わ 浮輪【名】護謨を引きたる環狀のズック袋の中に、キルク屑を滿たしたるもの。水中に在りても身體の沈まぬ用とす。

うき-わざ 浮業【名】柔術にて、相手の體の浮來るとき、更に引出しながら下に引附けて倒すこと。

うき-ゑ 浮繪【名】〔美〕歐洲の畫の遠近法を應用せる遠景を附したる繪畫。歐米の銅版畫に摸して創めたるもの。司馬江漢・永田善吉等、最もこれを善くせり。一枚繪の外に、芝居の書割・看板等にも應用せり。歌舞伎十八番中の助六の詞「この幕の間から覗いてごらうじろ、安房・上總が浮繪のやうに見えるはさ」

うき-をり 浮折【名】扇の折方の一。その上端を、中啓(チユウケイ)の如くに開かするもの。

うく 浮く【動四自】㊀底に沈まずして、水の上にあり。㊁水の底より水面へ上る。地又は下の物に固著せず。㊂表面にあらはる。うかぶ。榮花「涙うかせたまふに」㊃おちつかず。輕く動く。㊄不安又は面白さのために、心落ちつかず。心、身に添はず。うかる。あがる。千載「戀ひわぶる心は空にうきぬれど泪の底に身は沈むかな」㊅事たしかならず。あてにならず。後撰「玉津島深き入江を漕ぐ舟のうきたる戀も我はするかな」㊆酸味などのため、又は不快なる擦音(サツオン)を聞きたる等にて、齒の浮上るやうなる感を起す。㊇〔美〕描かれたる物體が、判然として見ゆ。㊈餘りて純益となる。「百圓浮く」

浮きに沈みの【句】次條の訛。狂言(那須與市)「磯打つ浪の高かりし浮きに沈みの扇も定かならず」

浮きぬ沈みぬ【句】或は浮き、或は沈む。浮きつ沈みつ。久永百首「をし鳥のつたふ岩根に浪かけてうきぬしづみぬ身をぞ恨むる」

浮きみ沈みみ【句】前條に同じ。〔古語〕千載「滿つしほの末葉をあらふ流れ葦の君をぞおもふ浮きみしづみみ」

うく 浮く【動下二他】うかす。うかばしむ。榮花「おきふしの契もたえていきせねば枕をうくるなみだなりけり」

うく 受く・承く・享く・請く【動下二他】㊀身にひきとる。引受く。受取る。與へらる。からむる。㊁ささへ防ぐ。支へとどむ。㊂容(イ)る。收む。㊃その方に向ふ。「南をうく」㊄後を繼(ツ)ぐ。ひきつぐ。㊅贖(アガナ)ひ戻す。請け出す。贖ふ。うべなふ。うけひく。「質物を請く」㊆〔商〕取引所にて、註文を受く。

受けつ流しつ【句】斬り込み來る刀を、程よくあしらふ。うけながす(受流す)參照。

うぐ 穿ぐ【動下二自】『うがつ(穿つ)』を見よ』穴あく。〔古語〕徒然「耳・鼻かけうげながらぬけにけり」

う-ぐ 雨具【名】あまぐ(雨具)に同じ。

う-ぐ 迂愚【名】迂闊にして、おろかなること。迂鈍。

う-くう 有空【名】うむ(有無)を見よ。

う-くう-ちゆう 有空中【名】〔佛〕法相宗にて、釋迦一代の説法を有教・空教・中道教の三時教に分てるもの。最初には凡夫・外道の我執を破(ハ)せんがために阿含(アゴン)經等を説きて、我は空なれども、人と萬物とを造る理法は有(ウ)なる由を示せりとて、有教といひ、次に、その法執を破せんがために、般若(ハンニヤ)經等を説きて、諸法皆空の理を示せりとて、空教といひ、つひに、有・空の二執を破せんがために、華嚴(ケゴン)・深密(シンミツ)等の諸大乘經を説きて、非空・非有の中道の理を示せりとて、中道教と呼び、法相宗は第三時の中道教に該當する大乘・至誠の教なりといふ。

うぐえ 筌【名】うげ(筌)に同じ。

う-ぐさ 鵜草【名】〔植〕㊀ふぢさはぎく(藤澤菊)に同じ。㊁つめぐさ(漆姑草)をいふ。〔周防國・長門國の方言〕

うく-じま 宇久島【名】〔地〕肥前國北松浦(キタマツラ)郡の西北方にある島。五島の一。南北一里七町・東西二里半・周回約九里。

うく-たから 浮寶【名】ふね(船)の異稱。一説に、うきたからと訓むともいふ。〔古語〕

う-ぐち 兎缺【名】『兎口の義。兎の口脣の形に似たるよりいふ』いぐち(兎缺)に同じ。〔古語〕以呂波字類「兎缺、ウグチ」

うぐ-つく【動四自】足ぶみす。跳ぬ。〔古語〕字鏡「蹢・躅、宇久豆久」

うく-は 浮羽【名】さかづき(杯)に同じ。うき。〔筑紫の上古の方言〕紀「昔筑紫俗、號レ盞、曰二浮羽一」

うぐひ 石斑魚・鯎【名】〔動〕喉鰾(コウヘウ)類に屬する淡水産の魚。形、鯇(アメノウヲ)に似て狹長・側扁、鱗細かく、頭部と背部とは綠色を帶び、背部には淡黑色の斑點あり、腹部は紅にして腹は白く、大なるは、尺に過ぐ。性、食を貪り、他魚の蕃殖を害す。いぐひ。くき。あかはら。あかゐ。うどひ。まるた。夫木「かがり火の光にまがふ玉藻にはうぐひのいをもかくれざりけり」

うぐひす 鶯【名】㊀〔動〕燕雀(エンジヤク)類に屬する鳥。形小く、繡眼兒(メジロ)に似てやや肥え、背は綠褐色にして、腹は灰色、眼・嘴共に細く、眉に三本の灰色の毛あり。藪などに棲みて、小蟲を捕へ食ふ。春の初より聲を發して、次第に美音を弄す。故に人家に飼養せられ、聲殊に美なるものは、價もまた隨ひて貴し。あたごどり。經(キヤウ)よみどり。はるつげどり。〔鶪・黃鸝〕㊁〔植〕うぐひすのき(鶯木)を云ふ。〔東京の語〕㊂〔植〕あまな(甘菜)を云ふ。〔周防國の方言〕㊃すみれ(菫)を云ふ。〔播磨國の方言〕㊄せつかひ(切匙)㊀の異稱。鶉衣「せつかひといひしをのこは、檜(ヒノキ)の木目こまかに、その姿やさしきから、昔は、御所に、うぐひすの名にも呼ばれしを」㊅組香(クミカウ)の包紙を刺し、又は火加減を見るに用ふる具。金・銀または赤銅にて作り、長さ四寸ばかりありて、兩端尖る。㊆うぐひすいろ(鶯色)の略。㊇やさい(野菜)の隱語。㊈うめぼし(梅干)の隱語。㊉金側の懷中時計の隱語。(十一)黃金の隱語。(十二)帶などをくけるに用ふる具。竹にて箆(ヘラ)のやうなるものを作り、その先を二つに割りて、縫ふべき處に挾みてくける。(十三)册子(サウシ)などを綴るに用ふる、竹の串(クシ)。

鶯鳴かせたこともある【句】『「梅干婆(ウメボシババア)とてしなびてをれど鶯鳴かせたこともある」といふ都都逸(ドドイツ)の文句に本づく』女の、若かりし時、容貌の美を譽め羨まれしことあるにいふ語。〔諺語〕

鶯の調(シラベ)【句】鶯の囀ること。雅筵醉狂集「色音よき琴笛ときく鶯のしらべは羽衣か陽春の曲」

鶯の谷渡(タニワタリ)【句】鶯の、谷の間を左右に飛びうつること。

鶯の糞(フン)【句】鶯のしたる糞にて製し、顏に塗れば、艷(ツヤ)出で色白くなるといふもの。

うぐひす-あはせ 鶯合【名】互に飼養せる鶯を持寄りて、囀(サヘヅ)る聲の優劣を定むること。うぐひす會。

うぐひす-いろ 鶯色【名】うぐひすちや(鶯茶)に同じ。

うぐひす-から 鶯香【名】組香(クミカウ)の名目の一。

うぐひす-がき 鶯垣【名】黑文字(クロモジ)の木にて編目を密に作れる柴垣。茶室の庭に珍重せらる。

うぐひす-かぐら 鶯神樂【名】〔植〕うぐひすのき(鶯木)に同じ。

うぐひす-がくれ 鶯がくれ【名】〔植〕前條に同じ。

うぐひす-かご 鶯籠【名】鶯を飼ふ籠。

うぐひす-かづら 鶯かづら【名】〔植〕うぐひすのき(鶯木)に同じ。

うぐひすーかひ 鶯飼【名】㊀鶯を飼ふこと、又その人。㊁鶯を飼ひて商ひする者。

うぐひすーがひ 鶯貝【名】〔動〕㊀あこやがひの一種。長さ三寸ばかり、殼は横に延びて翅の如く、形、鳥の翼を張れるに似たり。㊁ちどり貝の一種。瑠璃(ル)色なるもの。

うぐひすーがみ 鶯紙【名】紙の一種。犬筑波「梅づけはうぐひすがみのさかなかな」

うぐひすーかん 鶯羹【名】『鶯茶の色を呈するよりいふ』挽茶(ヒキチヤ)をまぜて作れる羊羹(ヤウカン)。

うぐひすーくわい 鶯會【名】うぐひすあはせ(鶯合)に同じ。

うぐひすーごろも 鶯衣【名】うぐひすそで(鶯袖)に同じ。

うぐひすーごゑ 鶯聲【名】口さきのみにて巧みなることをいふ聲。不可得物語「男は、うぐひすごゑして、利欲をさへづり」

うぐひすーさう 鶯草【名】〔植〕るりさう(瑠璃草)に同じ。

うぐひすざはーくわうざん 鶯澤鑛山【名】〔地〕陸中國稗貫(ヒエヌキ)郡湯口村大字豐澤にある鑛山。硫黃を産す。花卷停車場の西北六里。

うぐひすーずな 鶯砂【名】〔鑛〕輝石(キセキ)の破片を多量に含有せる綠灰色の砂。小笠原島に産し、壁を塗るに用ふ。をがさはら。

うぐひすーそで 鶯袖【名】脇を縫ひたる小袖。あづまこそで。あづまごろも。うめのはな。うぐひすごろも。うぐひすのそで。あづまこそで。鷹筑波「梅鉢やうぐひすそでの紋どころ」

うぐひすーぞめ 鶯染【名】うぐひす茶の色に染むること、又その色。

うぐひすーたけ 鶯茸【名】〔植〕菌類の一種。紅茸(ベニタケ)の類。傘の表面は赤く、その裏面と柄部とは白く、炙れば全部白變す。陰濕の地に生じ、食用となる。ひがんだけ。あかたけ。ささたけ。

うぐひすーちや 鶯茶【名】染色の一。茶色の藍氣(アヰケ)多きもの、即ち鶯の羽色に似たるもの。うぐひすいろ。うぐひす。うらばやなぎ。淺柳黃。

うぐひすーづめ 鶯爪【名】ほしえびの一。車えびを干(ホ)したるもの。

うぐひすーとぢ 鶯綴【名】『「宇佐も宮、熊野も同じ神なれば伊勢・住吉も同じ神神」といふ古歌の宇佐・熊野・伊勢・住吉の頭の假名「う・く・い・す」を、神神(紙紙)を寄すといふ意にとりていふなりとぞ』册子を綴づるに、先づ紙一帖の內一枚を取りて、二つに折り、穴を通し、その紙を又元の帖の上に重ね、その穴にならひて、一帖全部へ錐を貫き通すもの。

うぐひすーな 鶯菜【名】〔植〕㊀春の初に蒔きて野菜となす油菜。小町踊「寶人や初音で作る鶯菜」㊁春の初に出づる小松菜。㊂水菜の小きもの。㊃かぶらの、小きもの。〔京都の語〕

うぐひすーのーいひね 鶯のいひね【名】〔植〕くさぎ(臭木)に同じ。

うぐひすーのーき 鶯木【名】〔動〕忍冬(スヒカヅラ)科に屬する落葉灌木。山地に生じ、高さ六七尺。葉は長卵形又は卵圓形にして對生し、春、葉の間に細き莖垂れて、五瓣の小き紅花開く。實は大いさ小豆の如くにて紅熟し、鶯實(アウジチ)と呼びて藥料とす。うぐひすかぐら。うぐひすがくれ。うぐびすかづら。あうじちのき。うぐひすぼく。あづきいちご。

うぐひすーのーさへづり 鶯囀【名】しゅんあうでん(春鶯囀)の訓讀。枕「調(シラベ)は、…鶯のさへづりといふしらべ、想夫憐」

うぐひすーのーさるがき 【名】〔植〕さるとりいばら(菝葜)に同じ。〔古語〕

うぐひすーのーせき 鶯關【名】〔地〕㊀越前國南條郡湯尾(ユノヲ)と同郡武生(タケフ)との間にありし關。奧の細道「うぐひすのせきを過ぎて湯尾峠を越ゆれば、燧(ヒウチ)が城、かへる山に初雁を聞きて」㊁河內國北河內郡寢屋川(ネヤガハ)村大字堀溝にありし關。鶯關寺(ウグヒスノセキデラ)と呼びし寺の址なりといふ。一說に、南河內郡山田村竹內(タケノウチ)峠の西八町ほどの地なりともいふ。康資王母家集「わが思ふ心も盡きぬ行く春を越さでも留めよ鶯の關」

うぐひすーのーそで 鶯袖【名】うぐひすそで(鶯袖)に同じ。藻鹽草「鶯の袖、脇縫ひたる衣の袖なり。東小袖といふも、同じ事なり」

うぐひすーのーたき 鶯瀧【名】〔地〕㊀美濃國不破郡に在る瀑。㊁大和國春日山の奧に在る瀑。佐保(サホ)川の水源となる。

うぐひすのはつねーなます 鶯初音鱠【名】『節分の夜は冬と春との別れ目の日なるよりいふ』古、節分の夜、三枚におろしたる小鮎(アユ)を酢と鹽との二杯酢に浸し、芹の葉を敷きたる土器に盛りて食せしもの。

うぐひすーのみ 鶯呑【名】各自、酒を盃十個に注ぎ、五個づつ二組にして、おのおの梅花の五瓣に擬して置き並べ、早く飲み終へたるを勝とすること。うめのはなのみ(梅花飲)參照。宗五大草紙「うぐひすのみとは、兩人いでて十盃、疾く飲みたるを、勝と申候ふ。盃、定まらず候ふ」

うぐひすーばり 鶯張【名】廊下などの板張方の一。その上を步めば、軋(キシ)りて鶯のささ啼くが如き音を發するもの。京都の本願寺・智恩院等の寺院にあり。

うぐひすーぶえ 鶯笛【名】小供の吹き遊ぶ笛の一。その聲、鶯の囀るが如くなるものならん。犬子集「けふはやうぐひすぶえも子の日かな」

うぐひすーぼく 鶯木【名】〔植〕うぐひすのき(鶯木)に同じ。

うぐひすーまゆ 鶯眉【名】眉を細く剃りつけて、中に、これ墨(ズミ)にて、心(シン)を差したるもの。德川時代の奧女中の、十六七歲より行ひしもの。いとまゆ。やなぎまゆ。

うぐひすーもち 鶯餅【名】『青ぎなこの色、鶯の羽の色に似たるよりいふ』餅菓子の一種。糝粉(シンコ)にて餡を包み、かしはもちの形に製して、青ぎなこをまぶしたるもの。うぐもち。

うくびーづくり 鵜首作・鵜頸作【名】刀劍の製作の一式。峯の方の肉を、帽子より少し下りて半ばほどまで削(ソ)ぎ落したるもの。かむりおとし。かもおとし。うのくびづくり。うづくり。

うぐふ 【動四自】水氣を持つ。むくむ。艶狩劍本地「ひねり艾のなまやいと、痕もうぐはず痛みもなし」

うくむ 嘯む【動四自】うそぶく(嘯く)に同じ。〔古語〕字鏡集「嘯、ウクム、ウソム、フク」

うぐーもち うぐ餅【名】うぐひすもち(鶯餅)の略。

うぐーもつ 【動四自】土高くもりあがる。うごもつ。うごもる。うぐろもつ。むくもつ。〔古語〕紀「墳䐈、ウグモチコエ」

うくーやか 【貌】ふくやか。ふくらか。類名「架、ウクヤカナリ、フクヤカナリ」

うぐら 鼹鼠【名】〔動〕むぐらもち(鼹鼠)を云ふ。〔三河國・周防國等の方言〕

うぐらーもち 鼹鼠【名】〔動〕むぐらもち(鼹鼠)を云ふ。〔豐後國の方言〕

うぐるーぐやぐや 【貌】獨樂(コマ)の唸(ウナ)る音の形容。松風村雨束帶鑑「据りもやらずうねどりて、うぐるぐやぐや・うぐるぐっとも鳴ったるは、苗代小田の蛙獨樂」

うくるーしま 鵜來島【名】〔地〕土佐國の西南にある島。幡多(ハタ)郡沖之島村に屬し、周回一里十六町。別稱、天蓋(テンガイ)島。

うぐろーもち 鼹鼠【名】〔動〕むぐらもち(鼹鼠)に同じ。

うぐろーもつ 【動四自】うぐもつに同じ。〔古語〕類名「隆、ウグロモツ」

うーくわ 羽化【名】㊀〔動〕昆蟲類の、蛹(サナギ)より羽を生じて、成蟲に變態すること。㊁人の體に羽生えて、空中を飛行する仙人になること。うかく(羽客)參照。「羽化登仙」

うーくわい 迂回【名】㊀遠まはり。まはりみち。迂曲。㊁〔兵〕敵の退却線を脅威(ケフヰ)し、又は我が主力の攻擊を容易ならしめんがために、敵の射界外に於て、その側面又は背後に進む運動。

うーくわい 芋魁【名】たうのいも(唐芋)の漢名。

うくわく 烏獲【名】〔人〕支那周代の勇者。武王に仕へ、膂力(リヨリヨク)すぐれたり。「烏獲の力も、施すに術無し」

うくわじやう 右官掌【名】古の太政官・神祇官に置きし役。くわじやう(官掌)參照。(左官掌に對して)

うーくわつ 迂闊【名】まはりどほきこと。事情にあてはまらぬこと。注意の足らぬこと。うときこと。

うーくわん 有官【名】本官を有する者にて、藏人所(クラウドドコロ)の衆を兼ぬるもの。

うぐわん 烏桓 【名】 支那の北狄の一。兩漢の頃、內蒙古の東部に居り、魏の曹操に滅さる。

うくわん-べったう 右官別當 【名】 辨官の中にて、選ばれて勸學院の別當に兼任するもの。（無官別當に對して）

うけ 槽 【名】 をけ（桶）に同じ。〔古語〕 紀「槽、此云二于該一」

うけ 食 【名】 くひもの。うか。け。食物。〔古語〕 うけのみたま（稻魂）・うけもちのかみ（保食神）參照。

うけ 浮子 【名】 ㊀うき（浮子）㈠に同じ。〔古語〕 古今「伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつをさだめかねつる」 ㊁うきぶくろ（浮囊）㈡に同じ。

うけ 受・請 【名】 ㊀受くること。 ㊁向ひ當ること。面すること。「風うけ」 ㊂物を受くる器。 ㊃ささへ。つっぱり。 ㊄評判。人望。「近所のうけが惡い」 ㊅うけえだ（受枝）の略。 ㊆應（コタ）ふること。いらへ。應答。領承。 狹衣「たちまちのうけはせねど」 ㊇うけにん（請人）の略。 重井筒「わしが、京のとゝ樣、よしない者のうけに立ち、あすぎりに金立てねば、わしをやるとの判ぢやげな」 ㊈償を償ひて引取ること。 ㊉芝居にて、暫（シバラク）などの狂言における、主人公に對する敵役。

う-け 有卦・有氣 【名】 『大般若經の「貧窮暇入二有暇一」といふ語より出でしものにて、卦は借字、正しくは暇と書くべきものといふ』 陰陽（オンヤウ）道にて、人の生年の干支によりて、七年間吉事續くといふこと。（無卦に對して）

うけ 有卦に入る 【句】 有卦の年まはりに當る。

う-け 雨華 【名】〔佛〕 天より花を降らすこと。

雨華の瑞（ズイ） 【句】〔佛〕 釋迦の法華經を說かんとして三昧（サンマイ）に入りし時、天より四種の華の雨降りきといふ故事。

うげ 筌 【名】 うへ（筌）に同じ。

うけ-あひ 請合 【名】 請けあふこと。保證。承諾。

うけあひ-しようしよ 請合證書 【名】 債務の履行を保證する證書。

うけ-あふ 請合ふ 【動四他】 ㊀身に引受けて、責を果さんことを約束す。 ㊁證人に立つ。保證す。

うけ-あみ 受網 【名】 引網の一。中央に囊ありて、小魚を捕るに用ふるもの。

うけ-あゆみ 浮步 【名】 きはめてしとやかに步むこと。うきあゆみ。 一代女「素足（スアシ）道中、くり出しのうけあゆみ」

う-けい 雨溪 【名】 砂礫（サレキ）にて覆はれたる平地、又は沙漠などの中に水の生ずるもの。その河床は、降雨を待ちて滿つ。

うけ-いだす 請出す 【動四他】 うけだす（請出す）に同じ

うけ-いる 受入る 【動下二他】 受けをさむ。包容す。

うけ-いれ 請入・浮入 【名】 鯛の擂身（スリミ）を小く丸め、湯びきて、垂味噌にて煮たる食品。つみいれはんぺんの類。

うけ-いれ 受入 【名】 會計上にて、收入又は貸方の稱。（拂出に對して）

う-けう 有敎 【名】〔佛〕 うくうちゆう（有空中）を見よ。

うけ-うた 受歌 【名】 他人の作りたる歌を、自分の作りたるが如くにいひなすこと。 袋草紙「三井寺有二增珍云者一、忠命法橋之親弟也、少和歌不堪也、而思二重代一常以二受歌一心にくくつくる」

うけ-うど 沖獨活 【名】〔植〕 紅色藻類に屬する海草。ところてんに似て、細長くして紫色。さらして玉子色となれるものを、ところてんの如くに煮て食用となす。おもに筑前國に產す。これを紅にて染めたるものを、猩猩海苔（シヤウジヤウノリ）といふ。

うけ-うら 浮裏 【名】 うけばり（浮張）㈠に同じ。

うけ-うり 請賣 【名】 ㊀〔商〕 問屋より商品を買受けて、再びこれを賣捌くこと。こうり。 ㊁他人の意見・學說などを、そのまま、自分の考より出でしもののごとく裝ひて述ぶること。

うけうり-しや 請賣者 【名】 請賣を爲す人。前條參照。

うけ-えだ 受枝 【名】 遠州流の生花にて、基本なる天・地・人の枝に添ふる枝。うけ。

うけ-おひ 請負・受負 【名】 ㊀うけあひ。ひきうけ。 丹波與作「小まんがてておや、橫田の彥兵衞、四年このかた、三石二斗の御未進にて、水牢に入れられたを、小萬が願ひうけおひゆゑ、出牢仰せつけられた」 ㊁建築・土木、又は物品給付、或はその他の事業を引請くるに、あらかじめ日限・入費等の高を定めて、損益を見はかり、その責任を自ら貟ふべしと約すること。請貟契約。

うけおひ-きん 請負金 【名】 請貟人が報酬として受くる金錢。

うけおひ-けいやく 請負契約 【名】 うけおひ（請貟）㈡に同じ。

うけおひ-げふ 請負業 【名】 或仕事の請貟をなす營業。

うけおひげふ-しや 請負業者 【名】 請貟業を爲す人。請負人。

うけおひ-こうじ 請負工事 【名】 請貟にてする工事。うけとりぶしん。うけおひしごと。（いれでまに對して）

うけおひ-こさく 請負小作 【名】 江戶時代の小作法の一。小作年限を定めて、これに要する諸稅・諸雜費を自辨し、一手にて小作し、或は細に區分して、第三者に更に小作せしむること。

うけおひ-し 請負師 【名】 請貟仕事を業とする人。うけおひげふしや。

うけおひ-しごと 請負仕事 【名】 請貟にてする事業。うけおひ工事。うけとり仕事。

うけおひ-しふはいにん 受負集配人 【名】 郵便物の集配受貟をなす三等郵便局長又は集配受貟人が、郵便物の集配上に使役する傭人。

うけおひ-しふはいれう 受負集配料 【名】 郵便物の集配の受貟をなす三等郵便局長又は集配受貟人に支給せらるる受貟料。

うけおひ-しんでん 請負新田 【名】 江戶時代に、商人が受貟ひて開墾せし田地。鍬下（クハシタ）年限を定めて、期中は免租とす。

うけおひ-ちようしふはふ 請負徵集法 【名】 昔、行はれし租稅徵集法の一。政府が人民より直接に徵集することなく、別に請貟者ありて、政府に對しては、政府所要の金額を納めて、一定の手數料を受取り、人民に對しては、それと同一の額を賦課・徵集せしもの。

うけおひ-ていそうにん 受負遞送人 【名】 郵便物の遞送受貟をなす三等郵便局長又は遞送受貟人に於て、郵便物遞送上使役する傭人、即ち郵便馬車の馭車・馬丁、又は郵便車の車夫又は人夫などの類。

うけおひ-ていそうれう 受負遞送料 【名】 郵便物遞送の受貟をなす三等郵便局長又は遞送受貟人に支給せらるる受貟料。

うけおひ-にん 請負人 【名】 ㊀請貟契約によりて、仕事完成の義務を貟ふ人。 ㊁うけおひげふしや（請貟業者）に同じ。

うけおひ-ほしようきん 請負保證金 【名】 官廳・會社が請貟師をして、請貟の契約履行の保證として、その請貟金額の幾分を差出さしむるもの。

うけ-おふ 請負ふ・受負ふ 【動四他】 ㊀うけあふ。引受く。 ㊁請貟仕事として引請く。「工事をうけおふ」

うけ-おり 浮織 【名】 うきおり（浮織）に同じ。

うけ-がき 請書 【名】 うけしよ（請書）に同じ。

うけ-がく 受學 【名】 じがく（耳學）に同じ。〔古語〕

うけ-がしら うけ頭 【名】 能樂の太鼓の打手の一。

うけ-かた 受方 【名】 ㊀うけみ（受身）に同じ。 ㊁受くる方法。應接のしかた。あしらひかた。

うけ-がひ 肯 【名】 うけがふこと。うけひき。うけがへ。承引。

うけ-がひ 受飼 【名】 鷹の嘴（クチバシ）の一部の名目。たか（鷹）參照。

うけ-がふ 肯ふ 【動四他】 『うけは受の義』 うべなふ。がへんず。承引す。 落窪「今日は御忌日なるものを、などかうけがひあらん」

うけ-がふ 肯ふ 【動下二他】 前條に同じ。〔古語〕

うけ-がへ 肯 【名】 うけがひ（肯）に同じ。

うけ-き 浮木 【名】 ㊀ふね（船）に同じ。〔古語〕 紀「以二無目堅間一爲二浮木一（マナシカタマモテウケキトシ）」 ㊁うき（浮子）㈠に同じ。

うけ-ぎ 請木・受木 【名】 或物を支へ保つ木。支持する木。

う-げき 羽檄【名】『古、支那にて、急ぎの檄文には、そのしるしとして、鳥の羽を附けて送りしよりいふ』急ぎの檄文。飛檄。

うけく 憂けく【名】うき(憂)に同じ。〔古語〕古今「世の中のうけくにあきぬおくやまの木の葉にふれる雪やけなまし」

うげ-ぐつ 穿沓【名】『うぐ(穿ぐ)を見よ』やぶれたる靴。〔古語〕萬葉「うけぐつをぬきつるごとく蹈みぬきて行くちふ人は」

うけ-こたへ 受答【名】他より問を受けて、それに答ふること。あしらひ。あいさつ。うけへんたふ。應對。應答。

うけ-こみ 受込【名】ひきうけ。のみこみ。

うけ-こむ 受込む【動四他】引受く。のみこむ。うけいる。女殺油地獄「後家のおかめが受込んで」

うけ-ざ 請座・受座【名】**一**〔建〕開閉する扉の軸を承(ウ)くる所。**二**うけざがなもの(請座金物)の略。

うけざ-がなもの 請座金物・受座金物【名】扉の軸の嵌(ハマ)る金物。うけざ。

うけ-ざかや 請酒屋【名】請賣の酒屋。うけざけを賣る家。若風俗「うけ酒屋をたたき起し」

うけ-さく 請作【名】こさく(小作)に同じ。

うけ-ざけ 請酒【名】請賣の酒。身持談義「親のしにせのうけざけを商ひしが」

うけし 憂けし【形一】うし(憂し)に同じ。〔古語〕萬葉「世の中の憂けくつらけく」

うけ-しま 受島【名】〔地〕大隅國の南方に在る島。大島郡に屬し、周圍、六里六町。

うけ-じやう 請狀【名】請合ひたるしるしに書く證書。保證狀。(多くは奉公人の身元引受證書にいふ)

うけ-しやうぎ 受將棋【名】遊戯の一。將棋の駒を、人數に配當し、その中の一人、親となりて、他の人の有せずと思ふ駒を出し、若し他の人それを有せずといふ時は、なほその親が他の駒を出し、若しその駒を他の人の持ちたる時は、その人代りて親となり、前の親の如く出す。かくめぐりめぐりて、はやく駒を出し盡したる人を勝とす。

うけ-しよ 請所【名】地頭が、領家に代りて、莊園の土地・年貢を支配する役所。うけどころ。〔鎌倉時代の語〕

うけ-しよ 請書【名】承(ウケタマハ)りたる旨を記してさし出す文書。うけがき。うけぶみ。

うけ-しようもん 請證文【名】德川時代に、訴訟して、その判決に服する場合に、原告及び被告より差出したる、承服の證書。

うけ-すう 浮居う【動下二他】浮ばしむ。〔古語〕萬葉「布勢の海に舟うけすゑて」

うけ-そう 請奏【名】公事(クジ)の日に、當事者より、所要の品目を當該官署に請求すること。

うけ-ぞなへ 受備【名】〔兵〕進擊せず、敵の來襲に備ふる陣立。

うけ-だす 受出す・請出す【動四他】**一**價を償ひて、物件をとり戻す。うけいだす。「質物を請出す」**二**價を償ひて、我が物とす。うけだす。「娼妓を請出す」

うけ-だち 受太刀【名】**一**切り掛けられたるを受け防ぐ太刀の用法。**二**議論などに受身となること。まけ色になること。守勢の位置に立つこと。

うけ-たまはり 承【名】うけたまはること。命ぜらるること。

うけたまはり-ごと 承事【名】ききごと(聞事)の敬稱。浮世親仁形氣「慰み鼓には、なかなかうけたまはりごとと云へば」

うけ-たまはる 承る【動四他】『承(ウ)け賜はるの義』**一**命を承(ウ)け奉る。仰を蒙る。つつしみて承諾す。拜承す。**二**つつしみて聞く。拜聽す。うかがふ。源氏「月ごろ何となく物さわがしきに、御琴の音をだにうけたまはらで、久しくなり侍りにけり」**三**間接に聞き及ぶ。傳聞す。拜聞す。

うけ-たむ 受溜む【動下二他】受けて溜めおく。後撰「朝ごとにおく露袖にうけためて世のうき時の涙にぞかる」

うけ-ちん 受賃【名】つまらぬ話に應答するにつきて、受取るべき報酬。聞き賃。〔俚語〕「受賃なしののろけは、御免からむる」

うけつ【名】〔動〕あうむがひ(鸚鵡貝)を云ふ。〔東京の語〕

う-げつ 雨月【名】**一**雨夜の月。**二**陰曆五月の異稱。**三**謠曲の一。西行法師の住吉明神に詣でて奇特に逢ふ事を作りしもの。撰集抄によりて、趣向を構へたるなり。

うけ-つぎ 受繼【名】うけつぐこと。繼承。

うけ-つく 受附く【動下二他】**一**申込を受けいる。引受く。**二**取次を承諾す。受附掛にて、諸人の用事を受次ぐ。

うけ-つぐ 受繼ぐ【動四他】うけとりて引きつぐ。跡を繼ぐ。

うけ-つけ 受附【名】**一**受附くること。とりつぎ。ひきうけ。**二**官署・銀行・會社などにて、來人の用件をまづ受けて聞くこと、又その場所、又その係の人。

うけつけ-がかり 受附掛【名】受附の役を擔任すること、又その人。

うけつけ-ぐち 受附口【名】受附がかりの控へ居て、來人の用件を受附くる窓ぐち。

うけつけ-ちやう 受附帳【名】官署などにて、或事件の受附をなせるごとに、その事項・受附けたる年月日・申請人の氏名及び受附の番號などを記載する帳簿。

うけつけ-ばんがう 受附番號【名】受附けたる順位を示すためにしるす番號。

うけ-づつ 受筒【名】鎧の背部なる腰の邊に著けて、指物を差し込む用に供する筒。

うけ-つぼ 受壺【名】掛金(カケガネ)と相合して締(シマ)りとなる金物。つぼがね。がったり。

うげつ-ものがたり 雨月物語【名】〔書〕白峯・菊花の契・淺茅(アサヂ)ゲ宿・夢應の鯉魚・佛法僧・蛇性の婬など十篇の小話を小說體に記したるもの。五卷・三册。上田秋成の著。

うけと-がは 受戶川【名】〔地〕磐城國雙葉(フタバ)郡にある川。水源二あり、共に阿武隈(アブクマ)山系より發し、後、相合して海に入る。長さ約十里。

うけ-どころ 請所【名】うけしよ(請所)に同じ。

うけ-とむ 受止む【動下二他】受けて支持す。新勅撰「受けとめん袖をし緒にて貫かば涙の玉の數はみてまし」

うけ-とり 受取・請取【名】**一**受取ること。**二**うけとりしようしよ(受取證書)に同じ。

うけとり-がき 受取書・請取書【名】うけとり(受取)**二**に同じ。

うけとり-かんぢやう 受取勘定・請取勘定【名】次條に同じ。

うけとり-けいさん 受取計算・請取計算【名】**一**簿記の勘定科目の一。受取るべき權利を明かにするもの。**二**〔商〕外國爲替相場を計算するに、自國の貨幣を標準とすること。

うけとり-しごと 請取仕事【名】うけおひしごと(請負仕事)に同じ。

うけとり-しよ 受取書・請取書【名】次條に同じ。

うけとり-しようしよ 受取證書・請取證書【名】金品を受取りたる者が、引渡したる者に交付する證書。受取證文。受取書。受領書。領收書。うけとり。はんとり。

うけとり-しようもん 受取證文・請取證文【名】前條に同じ。

うけとりしよ-とぢこみちやう 受取書綴込帳【名】受取書をその日附の順序に綴込みたる帳簿。

うけとり-ちやう 受取帳・請取帳【名】はんとりちやう(判取帳)に同じ。

うけとり-てがた 受取手形【名】**一**德川時代に、切米(キリマイ)又は御借米を受取る際に用ひし手形。**二**〔商〕簿記にて、一の商店にて受取るべき權利ある手形。

うけとりてがた-かんぢやう 受取手形勘定【名】〔商〕簿記にて、受取手形が自己の所有に歸したる時に記入すべき勘定の方法。

うけとりてがた-きにふちやう 受取手形記入帳【名】〔商〕簿記にて、受取手形の諸要件、即ち番號・種類・金額等を記入するに用ふる補助簿。受取手形帳。

うけとりてがた-ちやう 受取手形帳【名】前條に同じ。

うけとり-にん 受取人・請取人【名】**一**物品又は金錢を受取る人。**二**〔商〕てがたうけとりにん(手形受取人)の略。

うけとり-ぶしん 請取普請【名】うけおひこうじ(請負工事)に同じ。世間娘氣質「大きなるうけとり普請にかかって、年年、大分まうけためて」

うけとり-わたし 受取渡【名】**一**受取ると

渡すと。うけわたし。㊁大工の棟梁などが或仕事を請負ひて、更に他の者に請負はすること。

うけ-とる 受取る・請取る【動四他】㊀受けて取る。手にをさむ。落手す。領收す。受領す。宇治「みちのくにて、金うけとりて歸る時」㊁うけあふ。引受く。擔當す。狂言（子盜人）「盜人が入った。ここは、某がうけとった。裏へも脊戸へも人をまはせ」㊂信ず。合點す。うく。（打消の形に用ふ）「うけとれない話」「うけとり難し」

うけ-ながし 受流【名】受けながすこと。

うけ-ながす 受流す【動四他】㊀斬りこみ來りし刀を、身をかはして避く。先代萩「もう、これまでと、八汐が懷劍、こころえ、政岡うけながす。互にたしなむ太刀さばき」㊁先方の話を、心に入れず、さりげなくあしらひて聞く。

うけ-なは 浮繩【名】浮木に附けて、水に投げ入れおく網綱（アミツナ）。山家「はらか釣るおほわたざきのうけなはに心かけつつすぎんとぞおもふ」

網の浮繩【句】前條に同じ。

うけ-にん 請人【名】引請に立つ人。保證人。引請人。請合人。うけ。

うげ-のく 穿除く【動四自】穴あく。孔生ず。平家「左の脇の下、大きなるかはらけの口ほどうげのいてぞありける」

うけ-の-みたま 稻魂魂【名】うかのみたま（宇迦御魂）に同じ。〔古語〕和名「稻魂、宇介乃美太萬。俗云、宇加之美太萬」

うけ-の-を-の 泛子の緒の【枕】泛子の緒、即ち釣絲は、浮きてあるものなるより、うかび（浮び）にかけていふ。萬葉「すみのえのつもるあびきのうけのをの浮びかゆかむ戀ひつつあらずば」

うけはし 詛はし【形二】のろはんとするさまなり。忌み嫌はんとするさまなり。〔古語〕源氏「弘徽殿（コキデン）などの、うけはしげにのたまふと聞きしを」

うけ-はしり 【名】能樂の小鼓の打手の一。

うけ-はぜ 筌羽瀨【名】漁具の一。魞（エリ）と同樣に、水中の魚道に簀（ス）を建てて、その魚取の部に筌（ウケ）を置き、魚をその中に入らしめて捕ふるやうにせるもの。

うけ-はづす 受外す【動四他】受けんとして、誤りて、はづす。（刀などにいふ）平假名盛衰記「忠太がいらって打つ刀うけはづして、弓手の肩さき、袈裟にすっぱと斬りさげられ」

うけ-ばな 請花【名】〔建〕露盤（ロバン）の上、九輪（クリン）の下などにある花形の飾の、上を向きてあるもの。多くは八葉より成る。

うけ-はん 請判【名】うけあひの判。保證の判。保證人の印。

うけ-はらひ 受拂【名】受取ると、仕拂ふと。手に入ると、手より出すと。

うけはらひ-かた 受拂方【名】銀行・會社又は商店などにて、金錢の收入と支拂とを扱ふ者。

うけ-ばり 浮張【名】㊀敵より打擊を受くる時、その力の頭部に及ぶを避くるため、冑の鉢うらに洗革（アラヒカハ）又は布の一枚物を浮かせて張ること、又その張りたる洗革、もしくは布。うちばり。うけうら。うけら。「受張」㊁屛風の張り方の一。骨の上だけに糊をつけて、間を虛にし、輕く浮かせて張ること。

うけ-ばる 受張る【動四他】專ら引受けて事を行ふ。恐れ憚ることなく言ふ。晴れやかにたちふるまふ。〔古語〕源氏「源少納言・讚岐守などの、うけばりたる景色にて出で入らんに」

うけひ 誓【名】神かけて誓ふこと。うきゆひ。誓約。〔古語〕紀「誓約之中、此云二宇氣譬能美難區一」

うけ-ひ 受樋【名】水を受くるとひ。新六「水わくる田川のうけひらへしたに乾くまなくて朽つる袖かな」

うけ-び 受日【名】めんくわいび（面會日）に同じ。

うけひ-がり 誓狩・祈狩【名】神に祈りて、事の吉凶を獲物にて知らんとする狩。〔古語〕紀「祈狩、此云二于氣比餓利一」

うけ-ひき 受引・承引【名】うけひくこと。承諾。

うけ-ひく 受引く・承引く【動四他】承諾す。承引す。うけがふ。うべなふ。源氏「おんうしろみすべき人もなく、世にうけひくまじきことなれば、なかなか危くおぼしはばかりて」

うけひ-ぶみ 誓書【名】せいし（誓紙）に同じ。

うけひ-ゆ 誓湯【名】くがたち（探湯）に同じ。〔古語〕

う-けふ 右脇【名】㊀右のわきばら。榮花「釋迦佛の、摩耶の右脇より生れさせたまひて」㊁うけふぐわ（右脇臥）の略。著聞「入滅の儀、端坐・右脇の二つの樣あり。われ、釋尊御入滅の儀に任せて、右脇にして、滅を取るべし」

うけふ 誓ふ【動四他】㊀神に誓ふ。祈誓す。祈る。〔古語〕萬葉「水の上にかずかくごとき我が命いもにあはんとうけひつるかも」㊁のろふ（詛ふ）に同じ。〔古語〕空穗「いきあつまりて、うけひのろひぞせん」

うけふ-ぐわ 右脇臥【名】づほくめんさいうけふぐわ（頭北面西脇臥）を見よ。

うけ-ふね 宇氣槽【名】うけ（槽）に同じ。〔古語〕延喜式「宇氣槽一隻」

うけ-ぶね 浮子船【名】漁獵の時、網の所在を知らするために、浮子（ウケ）のごとくに網綱に附くる船。〔古語〕夫木「あじろすぎむすぶの浦のあさひかげはるかに出づるあまのうけぶね」

網の浮子船【句】前條に同じ。〔古語〕夫木「なには潟浦の朝霧はれもせでよるほど見えぬあみのうけぶね」

うけ-ぶみ 請文【名】うけしよ（請書）に同じ。

うけ-ぶるまひ 有卦振舞【名】有卦に入りし時に行ふ祝ひの馳走。枕「めでたきもの、うけぶるまひ」

うけ-へんたふ 受返答【名】うけこたへ（受答）に同じ。薩摩歌「二十あまりの女中が受返答を召されう」

うけ-ぼり 浮彫【名】うきぼり（浮彫）に同じ。

うけ-まい 受米【名】〔商〕定期米市場にて、買手が賣手より受取る現米。

うけ-み 受身【名】㊀相手より動作を受くること。話しかけられ又は斬り込まるる等の位置に立つこと。うけだち。㊁〔語〕動詞の、動作を受くる意を示すもの。助動詞の「る」又は「らる」を添へて示す。例へば「打たれたり」「取らる」「授けらるる人」等の類。受動。所動。

うけ-みつぢ 受三地【名】能樂にて、小鼓を打つに、一つポと受けて、三つ地を打つこと。

う-けん 有見【名】〔佛〕じやうけん（常見）に同じ。

う-げん 迂言【名】迂遠なることば。

う-げん 右舷【名】船首に向ひて、右の方のふなばた。（左舷に對して）

う-げん 繧繝【名】うんげん（繧繝）に同じ。〔古語〕中務内侍日記「うげん二疊の上に」

う-げん 有驗【名】祈りたる驗（シルシ）あること。あらたかなること。〔古語〕宇治「それよりぞ、有驗の名は高くひろまりけるとか」

うげん-ちよく 右舷直【名】〔兵〕軍艦の右舷に於ける當直。（左舷直に對して）

うげん-びらき 右舷開【名】帆船が、風を右舷の正橫に受けつつ、風位に逆ひて進むこと。（左舷びらきに對して）

うげん-べり 雲繝緣【名】うんげんべり（繧繝緣）に同じ。〔古語〕枕「うげんべりの疊」

うけ-めん 請免【名】檢見（ケミ）法の一。小さき封內などへ、檢見に遣すべき役人なき時、名主を呼出して、當年の作柄（サクガラ）を尋ね、その年の豐凶に隨ひて、名主と談合の上にて、租の增減を定むること。居檢見（ヰケミ）。

うけ-もち 受持【名】受けもつこと。引受けたる事業。擔當。擔任。

うけもち-の-かみ 保食神【名】五穀を司る神。豐受姬神をいふ。又、大氣津（オホゲツ）姬神ならんともいふ。小町踊（仲晢）「屠蘇（トソ）ざけやけふうけもちのかみの春」

うけもち-ば 受持場【名】受持ちたる場所。

うけ-もつ 受持つ【動四他】㊀手にうけて持つ。（おもに杯にいふ）狂言（きんじむこ）「しうと、うけもって御ざる。婿どのに、一つ音曲を遊ばせと申せ」萬紫千紅「周信の畫に、猩猩、雪を杯にうけもちたるかたかきたるに」㊁身に引受けて事を行ふ。擔當す。「追手の攻口をうけもつ」

うけ-もどし 受戾・請戾【名】㊀うけもど

すこと。㊁〔法〕質權又は抵當權等の關係を解除して、その差入れおきたる物を取返すこと。

うけもどし-けん 受戻權【名】〔法〕物の受戻をなし得る權利。

うけもどしけん-ちゅうし 受戻權中止【名】貸金の支拂を受くるまで、質權又は抵當權設定者等をして、受戻權を行使せしめぬこと。

うけ-もどす 受戻す・請戻す【動四他】うけだす（受出す）に同じ。

うけ-もん 浮文・浮紋【名】うきもん（浮紋）に同じ。

うけ-やど 請宿【名】雇人の身元を引請けて周旋するを營業とする家。雇人口入所。けいあん。

うけやま-ぶいちきん 請山分一金【名】德川時代の課税の一目。百姓等の持山に大木ありて、持主・村方願の上にて伐採する場合に、冥加（ミヤウガ）として、材木の何十分の一を上納せしめしもの。ぶいちきん（分一金）參照。

うけ-ゆり うけ百合【名】〔植〕ささゆりの變種。四五月頃、開花し、花蓋の長さ五六寸に達す。薩南諸島の山地に自生し、鱗莖は食ふべし。また觀賞用として栽培せらる。

うけ-よさす 奉寄さす【動四他】委託したまふ。ことよさす。〔古語〕紀「所二奉寄一、ウケヨサシタマヒシ」

うけ-ら 浮裏【名】『うけうら（浮裏）の略』うけばり（受張）に同じ。

うけら 朮【名】〔植〕をけら（朮）に同じ。〔古語〕萬葉「戀ひしけば袖も振らむを武藏野のうけらが花の色に出づなゆめ」

うけら-が-はな 朮花【名】〔書〕加藤千蔭の歌文を集めたるもの。五卷。

うけ-わたし 受渡【名】㊀受くると、渡すと。うけとりわたし。㊁〔商〕取引の履行。

うけわたし-かぶ 受渡株【名】〔商〕受渡の目的となる株券。

うけわたし-だいりにん 受渡代理人【名】〔商〕大阪堂島（ダウジマ）の米穀取引所にて、受渡につき、仲買人の代理をなす人。

うけわたし-ねだん 受渡値段【名】〔商〕うけわたしへうじゅんねだん（受渡標準値段）の略。

うけわたし-ばしよ 受渡場所【名】〔商〕賣買せられたる品物の受渡をなす場所。

うけわたし-び 受渡日【名】〔商〕賣買せられたる物品の受渡をなす日。定期取引の受渡日は、通例、每月末日の前日とす。

うけわたし-へうじゅんねだん 受渡標準値段【名】〔商〕定期取引の受渡をなす際に、計算の便宜上、かりに定むる値段。うけわたしねだん。

うけわたし-へうじゅんまい 受渡標準米【名】〔商〕たてまい（建米）を見よ。

うけわたし-まい 受渡米【名】〔商〕定期米市場にて、期日の末に、賣方が買方に提供する米穀。

うけ-を 受緖・請緖【名】鎧の袖の後の紐、又、箙（エビラ）・靫（ユギ）・空穗（ウツボ）などに附くる緖。鎧のは綿上（ワタガミ）の袖附緖に繫ぎ懸く。

うけ-をり 浮折【名】うきをり（浮折）に同じ。

うけをれ-がなもの 受折金物【名】折釘の形をなせる平金物。

うこ 烏許【名】をこ（鳴呼）に同じ。〔古語〕紀「あが心しいやうこにして」

うご 羽後【名】〔地〕東山道十三國の一。古は羽前國と共に出羽（デハ）國と稱せしが、明治元年に分れて二國となる。秋田市及び南秋田・北秋田・山本・河邊・由利・仙北・平鹿（ヒラカ）・雄勝（ヲカチ）・飽海（アクミ）の九郡に分れ、飽海郡のみ山形縣に屬し、他は秋田縣に屬す。

うご 海髮【名】〔植〕おごのり（海髮海苔）に同じ。

う-ご 雨後【名】雨降のあと。雨あがり。

雨後の筍（タケノコ）【句】同じやうなる物の、つぎつぎに世に出づる譬。〔諺語〕

うご-うご【貌】すこしづつ動くさま。うごめくさま。蠢爾。

うご-かす 動かす・搖かす【動四他】㊀動かしむ。動くやうにす。古今「あめつちをうごかし」㊁感動せしむ。驚かしむ。

うこぎ 五加【名】〔植〕五加（ウコギ）科に屬する山地自生の落葉灌木。葉はこまかき鋸齒ある五片、又は七片の小葉に分れたる掌狀複葉にて、花は繖形（サンケイ）花序にて、春、

黃綠色の小花開き、黑色の小漿果（セウシヤウクワ）を結ぶ。春のわか葉は食ふべし。夏の半に、小き白花簇（ムラ）がり開き、實は熟すれば黑くなる。生垣（イケガキ）として栽培せらる。むこぎ。

うごき 動【名】㊀動くこと。動搖。はたらき。「うごき無き世」㊁人員の移動。

動が取れぬ【句】場所狹くして、自體を動かしにくし。〔俚語〕

うこぎ-くわ 五加科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉類・離瓣花區に屬する一科。五加・人參・刺楸（ハリギリ）・八手（ヤツデ）・土當歸（ウド）・常春藤（キヅタ）等、これに屬す。

うごき-げ 動氣【名】動くべき氣振。動く樣子。〔古語〕玄玉「山の見る目もはづかしとて、動きげもなければ」

うこぎ-にんじん 五加人參【名】〔植〕ちくせつにんじん（土參）に同じ。

う-こく 烏黑【名】烏の羽のごとき、つやある黑き色。

う-ごく 右獄【名】王朝時代に、右京の銅駝坊（ドウダバウ）の中御門（ナカミカド）の北、堀川の西にありし囚獄。（左獄に對して）

うごく 動く・搖く【動四自】㊀靜かならず。ゆる。ゆるぐ。動搖す。いごく。おごく。（物にも心にもいふ）㊁變る。變動す。㊂感じて、心變る。㊃さわぐ。みだる。感動す。

うご-こぶ 海髮昆布【名】〔植〕おごのり（海髮海苔）を云ふ。〔播磨國の方言〕

うこ-さこ 右近左近【名】うちさた（內沙汰）㊁に同じ。

うご-つく【動四自】うごく。うごめく。

うこっ-けい 烏骨雞【名】〔動〕をこっけい（烏骨雞）に同じ。

うご-なはる 集侍はる・集はる【動四自】參り集まる。〔古語〕祝詞「うごなはれる神主・祝部（ハフリ）等、みなきこしめせ」

うご-なへ【名】集りて射ること。〔古語〕紀「射、ウゴナヘス」

うごひ 石斑魚【名】〔動〕うぐひ（石斑魚）に同じ。

う-ごま 胡麻【名】〔植〕ごま（胡麻）に同じ。〔古語〕名義抄「胡麻、ウゴマ。訛云、亦五萬」

うこん【名】〔人〕女歌人。右近少將藤原季繩（スヱツナ）の女。

う-こん 右近【名】㊀うこんゑ（右近衞）の略。枕「右近の中將」源氏「右近のじようも、靫負（ユゲヒ）になりて」㊁謠曲の一。鹿島神宮の主神（カミツカサ）の一條・大宮なる右近の馬場に、櫻見に來るよしを作りしもの。神德を美しく述べんがために、春の景色もて裝はせたり。

右近の橘【句】『右近衞府にて、その培養を擔任せしよりいふ』紫宸（シシン）殿の階下の左に植わりてある橘。（左近の櫻に對して）

右近の陣【句】古、宮中の儀式の時、右近衞府の武士の衞りし處。枕「右近の陣へ物見に出できて」

右近の馬場【句】右近衞府に附屬せし馬場。京都の一條・大宮にあり。每年五月近衞の官人の競馬行はれたり。今の北野神社の東南に當る。增鏡「雪の降りたるあした、右近の馬場の方」

う-こん 鬱金【名】㊀〔植〕蘘荷（メウガ）科に屬する多年生の草。根莖肥大にして卵球をなし、深黃色を呈し、葉は長さ二尺ほどにて、形、芭蕉に似、四五枚叢生す。秋、葉の心（シン）より花を出し、小苞多くして、本は白く、末は紅色を帶び、一苞內に三四個づつの黃花開く。根莖を香料または染料とす。享保年間、支那より渡來せしもの。かじつ。きぞめぐさ。㊁うこんこ（鬱金粉）の略。㊂うこんいろ（鬱金色）の略。

（うこん㊀）

鬱金の雷（カミナリ）【句】『鬱金を黃（キ）の意に取り、雷（ライ）と合せていへる語』きらひ（嫌）の隱語。〔俚語〕

う-こん 雨痕【名】〔地〕『英 Rain prints』曾て地層に印したる雨滴の痕跡。多くは圓き凹窩をなす。もと、過去の時代に、地表に受けし雨滴の、痕の附けるまま乾きて、その上に、直ちに他の地層の重りたるために生ず。あめあと。

]

うこん-いと 鬱金絲【名】鬱金色の絲。

うこん-いろ 鬱金色【名】鬱金粉にて染めたる黄色。うこん。やまぶきいろ。

うこん-うつぎ 鬱金溲疏【名】〔植〕忍冬(スヒカヅラ)科に屬する落葉灌木。高さ三尺ばかり、葉は長楕圓形にして互生し、葉柄短く、花は淡黄色にて、夏、複總狀花序をなして開く。我が國北方の山中に多し。もえぎうつぎ。みやまたにうつぎ。

うこん-かう 鬱金香【名】〔植〕うっこんかう(鬱金香)に同じ。

うこん-げんざゑもん 右近源左衞門【名】〔人〕うこんにんぎやう(右近人形)を見よ。

うこん-こ 鬱金粉【名】鬱金の根莖を粉末にし、黄色の染料とするもの。クルクミン(Curcumine)と稱する黄色素を含有す。うこん。

うこん-ぞめ 鬱金染【名】鬱金の根莖にて黄色に染むること、又その染めたる物。

うこん-づかさ 右近府【名】うこんゑふ(右近衞府)に同じ。

うこん-にんぎやう 右近人形【名】木又は張拔(ハリヌキ)にて、黄色の服紗(フクサ)を冠りたる姿に作りたる人形。德川時代に、右近源左衞門といふ若者の、京都より江戸に來りて、三味線に合せて唄を謠ひしに始まる。當時鬘(カツラ)といふものなく、黄色の服紗に絲を附け、額にかぶりて、月代(サカヤキ)を隱し右近の姿を摸せしものといふ。

うこん-の-うまづかさ 右近馬司【名】右近衞府の官人にて、馬寮(メレウ)の官を兼ぬるもの。

うこん-の-くらうど 右近藏人【名】右近衞府の官人にて、藏人を兼官するもの。

うこん-の-たいふ 右近大夫【名】五位の右近衞將監。もと右近衞府の將監の位は、從六位上相當なるを、五位に進みながらも將監なるをいふ。

うこん-の-つかさ 右近司【名】右近衞府、又はその府の將曹以下の士。源氏「うこんのつかさの、とのゐ申しの聲きこゆるは、丑になりぬるなるべし」

うこん-ばたけ 鬱金畑【名】鬱金を植ゑたる畑。凡兆「朝つゆや鬱金ばたけの秋の風」

うこん-もち 鬱金餠【名】餠米の粉に粳米(ウルチゴメ)を少し交ぜ、砂糖と垂味噌(タレミソ)とを合せたるものを、扁(ヒラ)めにして、油にて揚げたる食品。

うこん-もめん 鬱金木綿【名】鬱金染の黄色なる木綿。

う-こんゑ 右近衞【名】右近衞府に屬してあること。うこん。「右近衞の大將」「右近衞の中將」「右近衞の將監(シヤウゲン)」

うこんゑ-ふ 右近衞府【名】このゑふ(近衞府)を見よ。

うご-めき 蠢【名】うごめくこと。

うご-めく 蠢く【動四自】うじうじと動く。もちもぢと動く。やや動く。おごめく。むごめく。

うご-も 海髮藻【名】〔植〕もづく(水雲)を云ふ。〔陸奧國の方言〕

うご-もつ 墳つ【動四自】うぐもつ(墳つ)に同じ。〔古語〕紀「墳朠、ウゴモチコエ」

うごもり【名】〔植〕やまのいも(山芋)の異名。幸若歌曲(小栗判官)「せいなんとは芹のこと、うごもりとは山の芋、かごもりとはところてんなり」

うご-もる 墳る【動四自】うぐもつ(墳つ)に同じ。〔古語〕名義抄「墳、ウゴモル」

うごろ 鼹鼠【名】〔動〕もぐらもち(鼹鼠)を云ふ。〔備後國の方言〕

うごろ-もち 鼹鼠【名】〔動〕むぐらもち(鼹鼠)に同じ。

うごろもち-うち 鼹鼠打【名】民間にて、正月十四日に行ふ一種の風俗。四國にては、薄暮より明曉まで、鼹鼠を打つとて、藁を束ねて地を打ち、大阪地方にては、鼹鼠を繩にてくくり、地上を曳きあるく。この獸の土地に及ぼす害を憎み、地を打ちて、これを畏れしむる意より出でしなり。

う-さ 憂さ【名】❶うれはしきほどあひ。❷うきこと。うれひ。「うさをはらす」

う-さ 有作【名】〔佛〕人爲の所作。自然ならぬこと。煩腦(ボンナウ)を生ずること。有相(ウサウ)。(無作に對して) 榮花「有作・無作の諸法の相を見ざる所、如なり、寂なり、解脫(ゲダツ)なり」

うさ 宇佐【名】〔地〕❶豐前國六郡の一。❷豐前國宇佐郡にある町。上古の菟狹に當る。宇沙國の舊域。宇佐八幡宮あり。

宇佐の使【句】御即位の初に、宇佐神宮に遣さるる勅使。續世繼「宇佐のつかひに遣しけるを」

うさ 菟狹・宇沙【名】〔地〕うさ(宇佐)❷を見よ。

う-さい 迂才【名】迂闊なる才智。

う-さい 于思【貌】鬚多きさま。うし。うさいをう(于思翁)參照。

う-ざい 有罪【名】罪あること。いうざい。

うざい-がき 有財餓鬼【名】❶〔佛〕餓鬼の內にて、果報ややすぐれ、時として飽食し得るもの。多財餓鬼。❷慾深き人を罵りていふ語。けちんぼ。守錢奴。

うさい-かく 烏犀角【名】黑色の犀角。粉末として、小供の熱さましに用ふ。

うさい-の-おび 烏犀帶【名】石帶(セキタイ)の一種。寶石の代に烏犀角(ウサイカク)を用ひたるもの。地下(ヂゲ)六位以下の者佩用し、後には牛角を代用せり。

うさい-ゑん 烏犀圓【名】烏犀角にて製したる藥劑。うさいかく(烏犀角)參照。

うさい-をう 于思翁【名】『うさい(于思)を見よ』白き鬚のある翁。猿樂(サルガク)の三番叟の詞に「おうさいおうさい」とあるは、于思の轉なりといふ。

う-さう 有相【名】〔佛〕造作の相あるもの。虛假(コケ)の相あるもの。(無相に對して) 榮花「淨波羅密の有相を滅するところ」

う-さう 有想【名】〔佛〕無想天における有情より外の有情。(無想・非想に對して)

う-ざう 有像【名】〔佛〕形のある物。物質的の物。(無像に對して)

うさうあんらく-ぎやう 有相安樂行【名】〔佛〕學問・讀經に由りて、佛道に悟入すること。支那南嶽の僧なる慧思の唱へ出しし二種安樂行の一。(無相安樂行に對して)

うざ-うざ【貌】小き蟲などの集まりてうごめくさま。うじやうじや。

うさ-うさし【形二】治まれり。をさをさし。名義抄「治、ウサウサシ、ハル」

うさう-しふぢやく 有想執著【名】〔佛〕五官にて感知する宇宙の森羅萬象を實在なりと信じて、それに執著すること。謠曲(土車)「生死輪廻の根元を尋ぬるに、有想執著の妄念より起れり」

うさう-しゆう 有相宗【名】〔佛〕ほつさうしゆう(法相宗)に同じ。

うざう-どう 烏像幢【名】うぎやうどう(烏形幢)に同じ。

うざう-むざう 有象無象【名】❶世上の、形象あると形象なきとのあらゆる物。萬物。森羅萬象。「有相無相、本來空」❷ごたごたある物。澤山ある物。うるさき程あまたある物。〔俚語〕

うさか 鵜坂【名】うさかじんじや(鵜坂神社)の略。

鵜坂の楉祭(シモトマツリ)【句】うさかじんじや(鵜坂神社)を見よ。

鵜坂の杖【句】次條を見よ。〔卯坂の杖・菟坂の杖〕續猿蓑(馬莧)「女郎花鵜坂の杖に叩かれな」

うさか-じんじや 鵜坂神社【名】越中國婦負(ネヒ)郡鵜坂村にある縣社。式內の古社。祭神は鵜坂柳姬・鵜坂妻姬。その祭禮の時に、神主が一鄕の婦女を集め、その年の內に、男にあひたる度數だけ、榊の楉(シモト)にて女の尻を打つならはしありて、これを楉祭(シモトマツリ)といひ、その時に用ふる楉を「卯坂の杖」といふ。八雲御抄にいはゆる日本五祭の一。

うさぎ 兎・兔【名】❶〔動〕嚙齒(ゲッシ)類に屬する獸。山中に穴居し、大さ猫ほどにて、全身灰褐色なれども、冬に入りて白變するものあり。耳甚だ長く、前脚短く後脚長し。目赤く、上脣缺けて、長き髭あり。肉は柔にして美味なり。毛は筆に作る。家に畜ふものは飼兎又は南京兎と云ふ。これに對して、野生のを野兎また山兎といふ。う。をさぎ。❷『人目を忍ぶため羽織をかぶりたる姿の、兎のうづくまりたるに似たるよりいふ』遊客。〔德川時代の遊廓の隱語〕❸紋所の一。種類多し。❹能狂言の小舞の一。❺生花に於ける花留(ハナドメ)の一。

兎、波を走る【句】❶月かげの水上に映れる譬。〔諺語〕謠曲(竹生島)「月海上に浮んでは、兎も波を走るか」❷〔佛〕「三獸、渡河」を見よ。

兎の羹（アツモノ）【句】江戸幕府の恒例として、正月元日に食せし兎肉の吸物。德川家康九代の祖、有親及びその子親氏の、應永年間信濃國林鄕に潛伏せし時、同地の豪族、林藤十郎光政、十二月晦日に、積雪を侵して兎を捕へ、翌元旦に有親父子に饗せしが、その年より德川家盛運の緒に就きしより、めでたき記念として用ひきといふ。兎の吸物。

兎の裘（カハゴロモ）【句】『魯の隱公、兎裘（トキウ）に幽居して作りし文に「兎裘賦」といふものあり、即ち閑居の賦の意』醍醐天皇の皇子兼明（カネアキラ）親王の薨ずるや、天皇、親王の子伊陟に、先人家に居て何事をかなしをりしと問ひ給ひしに、兎の裘を翫べりしよし答ふ。天皇、命じて獻ぜしめ給ひしに、親王の作りし兎裘の賦にてありきといふ故事。兼明親王は學才ある人なりしに、その子の父に似ず無智なりしためなり。（鶉衣、序「うさぎのかはごろもにはあらぬ、鶉衣といへるもの、二まきを持ち來て、見せへり」）

兎の字を頂戴する【句】『「兎」といふ字は「免」の字に似たるよりいふ』免職せらるる意の隱語。〔俚語〕

兎の吸物【句】「兎の羹」に同じ。

兎の角論（ツノロン）【句】兎に角なきは明かなることとなるに、それを有りや無しやと論ずるが如き空論。〔諺語〕（齊東俗談「兎之角論、佛經、龜毛兎角を以て、名假に況ふ。俗、無著の談を、兎の角論と云へり」）

兎の上坂（ノボリザカ）【句】『兎は坂を下ることは拙く遲けれども、上ることは早く巧なるよりいふ』速かに過ぐる譬。〔諺語〕（毛吹草「はやく越ゆる年やうさぎののぼりざか」）

兎の晝寢【句】『イソップ物語に出でたる兎と龜との話、即ち、この二つ競走して、兎は逸早く進みしが、龜のおくれたるに油斷して、途中しばらく晝寢したるひまに、龜に負けたりと云ふに本づく』油斷して失敗する譬。〔諺語〕

兎の糞【句】『兎の糞は、きれぎれに粒だちたるものなるよりいふ』物事のぼつぼつ切れてつづかぬ譬。〔諺語〕

兎の耳【句】うさぎみみ（兎耳）㊁に同じ。

兎の股引【句】『兎の短き前脚に穿（ハ）く股引の義』物事をなして、後の續かぬ譬。〔諺語〕

兎を得て、蹄（ワナ）**を忘る**【句】『せんてい（筌蹄）を見よ』「魚を得て筌（ウヘ）を忘る」に同じ。

うさぎ-あみ 兎網【名】兎を捕ふる網。

うさぎ-うさぎ 兎兎【名】遊戲の一。多人數蹲りて「うさぎ、うさぎ、何見て跳ねる、十五夜お月さま見て跳ねる」と唱へつつ徐歩し、次に「ぴょい、ぴょい、ぴょい」といひつつ一齊に飛跳ぬるもの。

うさぎ-うま 兎馬【名】〔動〕奇蹄類に屬する獸。形、馬に似て小く、耳長くして兎の如し。全身、暗褐色にして、背に黑きすぢあり。性、遲鈍なれども、能く物を負ひて、遠きに行く。支那にては農業に使役す。驢馬（ロバ）。うさぎま。

うさぎ-かうもり 兎蝙蝠【名】〔動〕蝙蝠の一種。耳、長大にして、頭上にて左右相會合す。我が國には稀なり。

うさぎ-がしら 兎頭【名】餌袋（エブクロ）の紐の結び方の一。一方には鳥の首を、一方には兎の頭を附く。

うさぎ-がり 兎狩【名】㊀山兎を狩取ること。普通は網を張り、又は係蹄（ワナ）を造り、山上より追落して捕ふ。㊁前記の兎狩に擬したる遊戲。その方法、種種あり。

うさぎ-ぎく 兎菊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高山に自生す。高さ一二尺ばかり、葉は篦形（ヘラガタ）又は長楕圓形にして互生し、莖にも葉にも白き毛茸あり。花は黃色にて頭狀花序をなし、花序は舌狀花を周圍とし、筒狀花を中心とす。きんぐるま。

うさぎ-とび 兎飛【名】兩足を縛り合せ、兩手を地に突きて飛びて遊ぶ戲。

うさぎ-ばね 兎跳【名】身を屈め、足に力を入れて跳ぬること。（盛衰記「一來法師、うさぎ跳ねにぞ越えたりける」）

うさぎ-びやうほふ 兎兵法【名】淺智の者の、なまなか謀略を施して、却って失敗を招くこと。なまびやうほふ。（大夫櫻「花に風兎兵法や平家武者」）

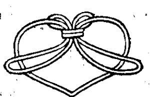
うさぎ-ぶえ 兎笛【名】兎狩の時、兎ををびき出すために吹く笛。

うさぎ-ま 兎馬【名】〔動〕うさぎうま（兎馬）の略。〔古語〕（夫木「山櫻きほひたづぬる人數に身をうさぎまのらながしぞゆく」）

うさぎ-みみ 兎耳【名】㊀耳の長きこと。飛耳。㊁よく他人の隱事を探り出す人。探報。

うさぎ-むし 兎蟲【名】〔動〕おかまこほろぎ（御釜蟋蟀）に同じ。

うさぎ-むすび 兎結【名】紐の結び方の一。長き罠（ワナ）を左右に分けて、恰も兎の耳の如き形を作りたるもの。



（びすむぎさう）

うさぎ-や 兎屋【名】明治十二三年ごろまで、東京京橋區南鍋町にありし書店。みづから天狗書林と號し、德川時代の小說を飜刻などして、極めて廉價に發賣したり。

うさ-じんぐう 宇佐神宮【名】豐前國宇佐郡宇佐町大字南宇佐に鎭坐せる官幣大社。祭神は應神天皇・神功皇后及び比賣（ヒメ）神。山城國石淸水（イハシミヅ）八幡宮も、相摸國鎌倉八幡宮も、みなこれを勸請（クワンジヤウ）せるなり。宇佐八幡宮。

うざ-つく【動四自】細かき蟲など群り動く。うざうざとす。〔俚語〕

うざっ-こい【形】細き物のしげく集りたるさま。〔俚語〕「溜水に、孑孑（ボウフラ）がうざっこくわいた」

うざ-ねはく【動四自】疲れくるしむ。難儀す。〔陸前國仙臺の方言〕（物類稱呼「大儀などいふことを、仙臺にて、うざねはくといふ」）

うさ-の-みや 宇佐宮【名】うさじんぐう（宇佐神宮）に同じ。

う-さばき 鵜捌【名】鵜飼が鵜繩を操りさばくこと。

うさ-はちまんぐう 宇佐八幡宮【名】うさじんぐう（宇佐神宮）に同じ。

うさ-はらし 憂晴・鬱晴【名】鬱氣を散ずること。きさんじ。きばらし。遣悶。

うさ-まつり 宇佐祭【名】豐前國宇佐八幡宮の祭禮。八月十五日に行はる。

うさみ-さだゆき 宇佐美定行【名】〔人〕上杉謙信の功將。資性雄毅にして、また讀書を好み、兵法に通ず。永祿七年歿す。年七十六。

うさ-むし うさ蟲【名】〔動〕小供の腹中に「生ずといふ蟲。〔古語〕

う-さん 胡盞【名】『字の廣東音なりといふ』建盞（ケンザン）の最も著名なるもの。唐の陸羽（茶道の達人、著すところ茶經三篇あり）の建安にて得たるものといふ。

う-さん 胡散【名】『字の廣東音なりといふ』いぶかり怪しむべきこと。不審。うろん。ふしぎ。「胡散な男」

うさん-がほ 胡散顏【名】不審らしき顏つき。安心ならぬ樣子。

うさん-くさし 胡散臭し【形一】怪しくて、油斷出來ず。いぶかし。うさんらし。くさし。

うさん-もの 胡散者【名】疑はしき者。あやしきもの。

うさん-らし 胡散らし【形二】うさんくさし（胡散臭し）に同じ。

うさ-ゆづる 儲弦・設弦【名】懸（カケ）替への弓弦。をさゆづる。まうけづる。〔古語〕（紀「うま人のたつることとたてうさゆづるたゆまつがむにならべてもがも」同「出二儲弦一ウサユヅルヲイダシ」）

うさる【動四自】流行おとろふ。〔俚語〕

う-さを 鵜竿【名】漁具の一。棹のさきに鵜の尾を附けて、魚を追ふに用ふるもの。

うし 牛【名】㊀〔動〕反芻（ハンスウ）類に屬する獸。馬より大きくして、脚短く、體肥えて、兩角あり、尾長くして細し。毛色は、黑・赤・白・斑など種種あり。力甚だ強く、能く物を負ひ、車を牽き、耕作の助をなす。肉・乳共に滋養となり、皮・骨・角・蹄なども、種種の用をなす。㊁〔建〕うしばり（牛梁）の略。㊂〔兵〕古、戰陣にて、竹木を家の棟木のごときさまに結びて立て、竹束を寄せかくるに用ひしもの。㊃ぎうひあめ（牛皮飴）に同じ。㊄錢勘定の百の隱語。一丁（イッチヤウ）。〔楊弓又は大弓にて賭物とする時の語〕

牛驚くばかり【句】物の黑きさま。〔古語〕（衰盛記「牛驚くばかりありければ」）

牛と呼び、馬と呼ぶ【句】『莊子の天道

篇に「呼二我牛一也、而謂二之牛一、呼二我馬一也、而謂二之馬一」とあるに本づく』種種に罵りて批評する意。〔諺語〕

牛に汗(アセ)し、棟(ムナ)に充(ミ)つ【句】『柳宗元の陸文通墓表に「其爲レ書、處則充二棟宇一、出則汗二牛馬一」とあるに本づく』藏書の多き譬。汗牛充棟。〔諺語〕

牛に喰(クラ)はる【句】欺かる。「一杯喰はさる」と同意。狂言（朝比奈）「牛にくらはれ、たらされた」

牛に經文【句】言ひきかせても何の効も無き譬。「馬の耳に念佛」と同意。〔諺語〕

牛に琴【句】『祖庭事苑に「公明儀、對レ牛彈レ琴、弄二淸角之操一、牛食如レ故、非二牛不一レ聞、不レ合レ耳也。轉爲二蚊虻之聲・乳犢之鳴一、乃掉レ尾蹀レ蹄、奮レ耳而聽、合レ意故也」、又、莊子の齊物論に「非レ所レ明而明レ之」とありて、郭註に「是猶二對レ牛鼓一レ簧耳」といへり』「牛に經文」に同じ。〔諺語〕

牛に對して琴を彈く【句】「牛に琴」に同じ。〔諺語〕

牛に引かれて善光寺【句】次條の略。〔諺語〕一茶「春風や牛に引かれて善光寺」

牛に引かれて善光寺參り【句】『昔、信濃に老婆ありしが、隣家の牛の、わがさらしおける布を角にかけて走りしを追ひて、偶然にも善光寺にかけこみ、初めてこの寺の靈場なるを知りて、それより常に參詣して、後生を願ひきと云ふ故事に本づく』はからずも、その物事の方に導かるること。〔諺語〕

牛の步(アユミ)【句】**ぎうほ**(牛步)に同じ。德川家康「怠らず行けば千里の果も見んうしのあゆみのよし遲くとも」

牛の一散(イツサン)【句】常にぐずぐずせる人の稍もすれば、妄斷をなす譬。〔諺語〕駿臺雜話「世話に牛の一散と云ふやうに、ややもすれば、機嫌にまかせ、調子に乘じなどして、一概に物を決斷して快とす。これは眞斷にあらず」

牛の籠ぬけ【句】『かごぬけの如き輕業は、敏捷なる者のなす業にて、牛の如き遲鈍なる者のなしえざるものなるよりいふ』遲鈍なる者には到底爲しえざることの譬。〔諺語〕

牛の車【句】㊀牛の牽く車。㊁天竺の提婆(ダイバ)といふ女、身を燒きて、天に生れんと願ひしを、辯才法師見て、汝身を燒きても罪滅せず、牛が車を挽く苦しさに車を摧(クダ)けども、又新に車をかけらるるが如しといひし故事。㊂〔佛〕**さんしや**(三車)を見よ。

牛の毛【句】『抱朴子に「萬夫之中、有二一人一爲レ多矣、故爲者如二牛毛一、獲者如二鱗角一也」とあるに本づく。「九牛の一毛」參照』物の多き譬。空穗「公達のおはする所は牛の毛ぞや、…なかずみがまかるところは、龍の角にだにぞあらぬや」

牛の小角(コヅノ)【句】牛の角の中心にある堅き骨。藥用とす。こづの。

牛の鞦(シリガイ)【句】はづれさうにて、はづれずといふことの譬。〔諺語〕

牛の尻【句】『小供の語に、牛を**もう**といふより、「もうの尻」をつづめて物知(モノシリ)の意に通はせていふ』**ものしり**(物知)の隱語。〔俚語〕

牛の玉【句】牛の腹中に生ずる、石のごときもの。寺院にては、これを牛黃(ゴワウ)と呼びて靈玉とす。又その白きものは、僞りて「白狐(ビヤクコ)の玉」といふ。又、僞製するものあり。「馬の玉」參照。

牛の小便【句】長きに過ぐることの譬。〔諺語〕

牛の乳(チ)【句】**ぎうにゆう**(牛乳)に同じ。〔古語〕

牛の乳(チチ)【句】前條に同じ。

牛の角を蜂が螫(サ)す【句】何の感じもなきことの譬。〔諺語〕

牛の喉(ノド)から引出したやう【句】衣服などの、黑くよごれたるさま。〔諺語〕

牛の走る【句】「牛の一散」に同じ。空穗「ただまさらが云ふことは、いはゆる牛の走るぞかし」

牛の鼻木【句】牛の鼻に通す木。うしのはなづら。

牛の鼻貫【句】前條に同じ。

牛の前の琴【句】「牛に琴」に同じ。

牛の藪入【句】**うしかけ**(牛駈)に同じ。

牛の涎(ヨダレ)【句】單調にて長長しき物事の譬。一茶「長き日や牛の涎の一里ほど」蕪「商(アキナヒ)は牛の涎」

牛は牛づれ【句】㊀牛は牛と仲よきが如く、人も同じ性質の者同志が親しきこと。〔諺語〕甲陽軍鑑「喩に牛は牛づれ・馬は馬づれと申すごとく」㊁遲鈍なる人の仲間の譬。〔諺語〕

牛を馬に乘換ふ【句】惡しきものを捨てて、善きものに換ふる譬。〔諺語〕「馬に乘るまで牛に乘る」參照。

牛を牽く【句】なまく。おこたる。〔俚語〕追善淸十郎奴俳諧「ぶらぶらと市のかりやにのめりいで（といふ句に）やら見たくなのうしをひくなり」

二十坊主に牛の睾丸、五十坊主に鹿の角【句】少年の僧は、墮落(ダラク)するやうに見えて反りて墮落せざること、牛の睾丸の垂れ下りながら落ちざるが如く、老僧は、墮落すまじく見えて、反りて墮落する者多きこと、鹿の角のいかめしく見えながら脫け落つる如し。〔諺語〕

闇(ヤミ)から牛を引出す【句】性質鈍くして快活ならぬ人の動作の譬。〔諺語〕

うし　丑【名】㊀十二支の一。**えと**を見よ。㊁方角の一。北と東との中間よりすこし北へよりたる方。㊂古の時刻の名目の一。今の午前二時より四時までの間。

丑の雨【句】**うしあめ**(丑雨)に同じ。

丑の風【句】丑の方角より吹來る風。

丑の貝【句】丑の時の知らせに吹鳴らす法螺貝、又その音。

丑の杭(クヒ)【句】古、禁中にて、丑の刻の知らせに打ちし杭。「時の杭」參照。

う-し　雨師【名】雨の神。雨祇。

う-し　鵜師【名】**うかひ**(鵜飼)㊁に同じ。

う-し　雩祀【名】あまごひ。祈雨。

う-し　雨施【名】雨のあまねく降ること、又その如くに恩惠などの遍くゆきわたること。

う-し　雨絲【名】絲のやうに細き雨。こさめ。雨絲・風片」

う-し　羽枝【名】鳥の翼の羽軸(ウヂク)より横に列なり生じたる細きもの。羽枝は更に小枝を分ち、互に密接して、一面の羽を成す。これを翈(カ)といふ。

う-し　齵齒【名】『齵の字の音、正しくは**ぐ**』**むしば**(蟲齒)に同じ。

うし　大人【代】㊀『**うしはく**(領く)參照』一つの土地の領主、又は貴き人の尊稱。紀「大人、此云二于志一」㊁男の師匠・學者の敬稱。加茂季鷹「ここもうしかしこもうしとうしだらけ角づきあひの江戸の歌人」㊂書簡文に、宛名(アテナ)の下に添へて用ふる語。(男性に限る)

う-し　于思【貌】**うさい**(于思)に同じ。

うし　憂し【形二】心なやまし。心ぐるし。わびし。いとはし。源氏「慰めがたくうしと思へば」

憂き潮【句】次條に同じ。博多小女郎波枕「うきしほ踏んで、正道の商に取附く心づけんため」

憂き瀨【句】憂くつらき時。苦しき處。〔浮瀨〕〔古語〕源氏「はかなくて世にふる川のうきせには尋ねもゆかじ二もとの杉」

憂き淚【句】憂く悲しく思ひて流す淚。丹波與作「あぁどうせうと、百千いろのうきなみだ、二つの目には保ちかね」

憂き恥【句】つらき恥辱。戀娘昔八丈「身を切裂れ憂き恥をさらすも定まる因緣づく」

憂き人【句】我よりは戀ひ慕へるに、相手は一向につれなくする、その相手の人。〔古語〕千載「うき人を忍ぶべしとは思ひきやわが心さへなどかはるらん」

憂き節【句】つらき事。かなしき場合。太平記「うきふししげき竹だるき」

憂き節の里【句】『竹の節に、臥しの意をかけていへるならん』いろざと。遊里。(遊女の身の上につきていふ)**かはたけ**(河竹)㊁參照。鶉衣「傾城といへる者のうきふしの里に賣られ」

憂き身【句】時めかず憂き節多き身の上。零落せる境遇。〔浮身〕新今古「うき身をば我れだに厭ふいとへただそをだに」

同じ心と思はん」

憂き身がくれ【句】世の中を憂くつらく思ひ、交際を絶ちてひきこもりゐること。（多くは水隱(ミガクレ)の意を兼ねていふ）〔古語〕風雅「知られじなうきみがくれの菖蒲草われのみながきねにはなくとも」

憂き身ごもり【句】前條に同じ。〔古語〕新後拾遺「朽ちねただ岩垣沼のあやめぐさうきみごもりに引く人もなし」

憂き耳聞く【句】面白からぬ噂を聞く。悲しき物語を聞く。〔古語〕平家「家をも出で、世をも遁れたりせば、今かかるうき耳をば聞かざらまし」

憂き身を窶す【句】やつす（窶す）の條下を見よ。

憂き目【句】つらき場合。〔古語〕古今「世のうきめ見えぬ山路に入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」

憂き世【句】憂きふし多き世。樂しからぬ世の中。濁世。塵世。うきよ（浮世）參照。古今「足引の山のまにまに隱れなんうき世の中はあるかひも無し」

憂き世に廻(メグ)る【句】生死(シヤウジ)輪廻(リンネ)の境界を脱せず。浮世を廻る。謡曲〔松風〕「汐くみ車、わづか（輪・僅）なる浮世にめぐるはかなさよ」

憂き世の網【句】人間の迷ののがれがたきを網に譬へていふ語。塵網(ヂンマウ)。月清集「水に棲み雲井にかける心にもうきよの網はいかが戀しき」

憂き世の色【句】この世の風潮。風雅「身こそあらめ心を塵の外になして浮世の色に染まじとぞ思ふ」

憂き世の海【句】この世に於ける煩惱(ボンナウ)。（憂苦の多きことを海に譬へていふ）今鏡「まどひの深きによりて、うき世の海の底ひなきには漂ふわざなるとぞ」

憂き世の風に當る【句】㊀胎兒(タイジ)生れ落つ。㊁世の風潮に觸る。人情の機微に觸る。

憂き世の岸【句】憂き世の海の、その岸。源氏「心こそうき世の岸を離るれどゆくへも知らぬあまのうききを」

憂き世の絆(キヅナ)【句】現世を離脱せんとする障(サハリ)となるもの。この世を憂きものと知りつつも生存する原因。即ち義理・恩愛の情など類。憂き世の綱。

憂き世の極(キハミ)【句】この世の憂くつらき事の極度。増鏡「おのおの目おし拭ひ鼻すすりあへる氣色ども、げにうきよのきはめは、今に盡しつる心地ぞする」

憂き世の關【句】現世を出離する時。續拾遺「すてやらぬ心からにや出でざらんうきよの關は守る人もなし」

憂き世の旅【句】この世を渡りくらすを旅行に譬へていふ語。謡曲（邯鄲）「浮世のたびに迷ひきて夢路をいつと定めん」

憂き世の塵【句】この世の雜事のうるさきを立迷ふ塵に譬へていふ語。塵累(ヂンルヰ)。新續古今「このままにすまばすむべき山水のうきよの塵に濁らずもがな」

憂き世の綱【句】「憂き世の絆(キヅナ)」に同じ。夫木「朝夕に袖にかくして結ぶ手のうき世の綱をとかざらめやは」

憂き世の情(ナサケ)【句】この世に於ける慈悲。生涯の恩義。國姓爺合戰「わらは一人通してたべ、まこと浮世の情ぞと、手を合せても、聽き入れず」

憂き世の波【句】うき世の海に立つ波。この世の浮沈。夫木「かぢ緒たえこと浦風にゆく舟のうきよの波にこがれてぞふる」

憂き世の闇【句】迷のために人の本心のくらむを暗夜に譬へていふ語。新續古今「夢のうちに照す光のなかりせばうき世の闇のいつか晴るべき」

憂き世の中の綱【句】「憂き世の絆(キヅナ)」に同じ。拾玉「人つなぐうき世の中の綱やなに戀にまとはる心なりけり」

うじ 蛆【名】〔動〕蠅(ハヘ)類の幼蟲。腐敗したる動物、又は排泄物などの上に生育す。色白し。

うじ【名】せきたん（石炭）を云ふ。〔近江國の方言〕

うじ-あづき【名】〔植〕かにめあづき（蟹眼小豆）に同じ。

うし-あはせ 牛合【名】牛と牛とを、角にて突き鬪はせて、その勝負を觀る戲。鬪牛。牛の角づき。西遊記「薩摩の鹿野谷といふ所には、牛あはせといふ遊あり。上方の雞合(トリアハセ)のごとし。牛を雙方より出し、戰はしめて、見物することなり」

うし-あぶ 牛蝱【名】〔動〕蝱の一種。夏日、林中に多し。體は黑茶色にして、胸部には黑色の條紋ありて、黃毛密生す。

うし-あふぎ 牛扇【名】〔植〕やつで（八手）を云ふ。〔近江國の方言〕

うし-あめ 丑雨【名】丑の時にふり出す雨。丑の雨。

うし-いし 牛石【名】ひいざろに同じ。

うじ-いちご 牛莓【名】〔植〕なはしろいちご（苗代莓）を云ふ。〔播磨國の方言〕

う-しろ 羽州【名】〔地〕羽前國と羽後國との舊稱。

うじ-うじ【貌】ためらふさま。うずうず。うじかはうじかは。ぐずぐず。もぢもぢ。

うしろ-たんだい 羽州探題【名】室町時代に、出羽を鎭撫して、國務を扱ひし役。正平年中、斯波兼賴初めてこの職に補せらる。

うし-うま 牛馬【名】㊀牛と馬と。㊁〔動〕大隅國種子島(タネガシマ)に產する一種の馬。首は通常の馬に似、體は牛の如く、常の馬よりも小く、毛細く短くして少しちぢれたり。

牛・馬にも踏まれず【句】小供の怪我(ケガ)もせず無事に生ひたつ形容。

うし-うらら【名】〔植〕つるぼ（綿棗兒）を云ふ。〔陸前國の方言〕

うし-えら【名】〔動〕うしえひ（牛鱏）を云ふ。〔東京の語〕

うし-えひ 牛鱏【名】〔動〕えひの一種。色黑く、たけ長く、大なるは六尺にも達す。

うし-おき 丑起【名】丑の刻におき出づること。

うし-おに 牛鬼【名】牛の形せりといふ妖怪。枕「名おそろしきもの。うしおに」

うしおに-じま 牛鬼島【名】牛鬼の棲めりといふ、想像上の島。一代男「貌は、色くろく、髮ながく、兩眼に光あって、そのさま、世界の圖に見し牛鬼島の如し」

うし-おひ【名】〔植〕しびとばな（死人花）を云ふ。〔美濃國の方言〕

うし-おひ 牛追【名】牛かた。牛おひ。

牛追、牛に追はる【句】事物の轉倒せる譬。〔諺語〕

うしおひ-にっき 牛追日記【名】じふろくむさし（十六六指）に同じ。

うし-おふもの 牛追物【名】騎射の一。小牛を追ひて、馬上より射るもの。主に鎌倉時代に行はれ、矢は蟇目(ヒキメ)又は大四目などを用ふ。いぬおふもの（犬追物）參照。著聞「うしおふものあらばやといはれければ」

うし-かけ 牛駈【名】陰曆五月五日に、大阪北野の近在の農夫が、牛の角に花を飾りて、梅田の野邊に放ち遊ばしめし一種の年中行事。牛の藪入(ヤブイリ)。

うし-かた 牛方【名】牛車(ウシグルマ)の宰領を業とする人。牛を使ふ人。牛奴。

うしか-の-たるしま 牛鹿足島【名】〔人〕畫家。聖武天皇時代の人。從八位上を賜はる。東大寺大佛殿の裝飾を描けり。

うじかは-うじかは【貌】うじうじに同じ。〔俚語〕鐵軍記「はづかしかったか、門口で、うじかはうじかは、這入りにくさうにしてで有ったを」

うし-かひ 牛飼【名】㊀牛を飼ひ又は使ふこと、又その人。うしつかひ。うしつき。俳諧新選（嘯山）「牛飼やねながらわたる春の水」㊁牛車(ギッシヤ)の牛を使役する雜人(ザフニン)。源氏「顏知らぬうしかひ」

うしかひ-ば 牛飼場【名】牛を飼ひやしなふところ。牧牛場。

うしかひ-ぶえ 牛飼笛【名】㊀牧場にて、牛を呼ぶために吹く笛。㊁牛を飼ふ童などが、すさびに吹く笛。ぼくてき。

うしかひ-わらは 牛飼童【名】牛車(ギッシヤ)の牛飼をつとむる者。少年又は三四十歲までの者、これをつとめ、狩衣(カリギヌ)を著、鞭を執り、頭は垂髮にて、童體をなす。うしこでい。枕「うしかひわらはの、なり惡しくてもたるこそあれ」

うしかひ-わらんべ 牛飼童【名】前條に同じ。十訓「牛かひわらんべののろひ事をしけるを聞きて」

うし-かんざし 牛簪【名】〔植〕あまも（大葉藻）を云ふ。〔肥後國の方言〕

うし-がやつり【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する草。水邊に自生す。高さ三尺ばかり、葉

は狹長にして、小穗狀をなし、纖形(サンケイ)花序をなして、黃綠色の花を開く。

う-しき 有職【名】僧職の一。已講(イカウ)・內供(クナイ)・阿闍梨(アジヤリ)の三僧官の總稱。僧綱の次、三綱の前に位す。有職正三綱(ウシキシヤウサンガウ)。大鏡「御さきに有職・僧綱どものやんごとなき候ふ」

う-しき 有色【名】〔佛〕人世の移り變りやすきを花の色の衰ふるに譬へていふ語。

うし-ぎぎ 牛黃顙魚【名】〔動〕大なる黃顙魚を云ふ。〔近江國の方言〕

うしき-ごんさんがう 有職權三綱【名】さんがう(三綱)に同じ。

うしき-しやうさんがう 有職正三綱【名】うしき(有職)に同じ。

うしき-そうがう 有識僧綱【名】各官職ある僧。

うしき-てん 有色天【名】〔佛〕しきかいてん(色界天)に同じ。(無色天に對して)

うしく 牛久【名】〔地〕常陸國稻敷(イナシキ)郡にある村。牛久沼の東北岸に位し、土浦町の南三里半。葡萄の栽培盛んなり。山口氏の舊藩地。

うし-ぐさ 牛草【名】〔植〕にはやなぎ(庭柳)に同じ。

うじ-ぐさ 蛆草【名】〔植〕みそなはしに同じ。

うしく-じやう 牛久城【名】常陸國稻敷(イナシキ)郡牛久村の南にありし城。天正中、岡見彈正これを築き、後、由良國繁これに據り、關ゲ原の役後、山口氏一萬石の治城となり、世襲して、明治維新に至れり。

うし-くすし 牛醫【名】牛の病氣を療治する醫者。〔古語〕

うし-くちなは 牛蛇【名】〔動〕からすへび(烏蛇)を云ふ。〔筑前國の方言〕

うしく-ぬま 牛久沼【名】〔地〕常陸國稻敷(イナシキ)郡にある沼。その一部は筑波郡に跨り、東西二十二町・南北二里十五町・周回六里三十三町。

うし-ぐは 牛鍬【名】㊀からすき(犂)に同じ。㊁美作國津山附近の農家の習として、正月十一日の未明に、鍬を携へ、牛を追ひて、田に至り、明(アキ)の方に向ひて、手先にて左文字の「の」の字を大書したる上、農具を使用しはじむること。百姓いはひ。

うしくぼ 牛久保【名】〔地〕三河國寶飯(ホイ)郡にある町。鐵道豐川線の一驛。

うし-ぐるま 牛車【名】㊀ぎつしや(牛車)に同じ。源氏「うしぐるまゆるされて」㊁牛に挽かする大なる荷車。俳諧新選(蘭所)「鞭うつや又も時雨の牛ぐるま」

牛車を引出す【句】軒(イヒキ)擧の高き形容。〔俚語〕

うしける【動下一自】たはむる。ふざけさわぐ。〔陸奧國青森の方言〕

うじこ【名】〔動〕あめふらし(雨降)に同じ。

うしご-うり うしご瓜【名】〔植〕きからすうり(黃烏瓜)を云ふ。〔筑前國の方言〕

うし-こでい 牛健兒【名】㊀『こでいはこんでい(健兒)にて、その年齡などの健兒に類せるよりいひしならんといふ』うしかひわらは(牛飼童)に同じ。平家「木曾、牛飼とはえいはで、やれ來(コ)、うしこでいよ、やれ來、うしこでいよ、と云ひければ」㊁仲間(チユウゲン)。足輕の類。〔德川時代の語〕

うし-こべ【名】〔植〕からすうり(烏瓜)を云ふ。〔豐後國の方言〕

うしこ-むし うしこ蟲【名】〔動〕あとびさり(惡颯)を云ふ。〔陸奧國の方言〕

うし-こんじやう 牛根性【名】㊀無口(ムクチ)にして、根氣よき性質。㊁物言はずして、ねぢけたる性質。〔俚語〕

うしごめ 牛込【名】〔地〕東京市十五區の一。

うしごめ-みつけ 牛込見附【名】牛込門にありし見張番所。

うしごめ-もん 牛込門【名】江戸城の外郭諸門の一。麴町富士見町より牛込神樂坂へ通ずる衢に當る。

うし-ごや 牛小屋【名】牛を飼ひ置く小屋。うしべや。うしや。うしをり。牛舍。

うし-ころ【名】㊀〔動〕あとびさり(惡颯)を云ふ。〔陸奧國の方言〕㊁〔植〕くろうめもどき(黑梅擬)を云ふ。〔下野國日光の方言〕

うし-ころし 牛殺【名】㊀食料にする牛を殺すこと、又その殺すことを業とする人。屠兒(トジ)。㊁〔植〕薔薇(バラ)科に屬する落葉喬木。山野に自生し、高さ丈餘に達す。葉は、うめもどきに似て長く、互生し、夏、枝の端に五瓣の白き花開く。實は大豆の大さにして、熟すれば紅く、材は鎌・鍬などの柄、又、牛の鼻木に用ひらる。かまつか。〔老葉兒樹」

うしころし-ば 牛殺場【名】牛を殺す場所。屠牛場。

うし-ごろも 牛衣【名】牛に著する衣。今昔「うしごろものごとくなる布衣を著」

うし-ざき 牛裂【名】古、行はれし一種の刑。罪人の兩手・兩足を、四頭の牛に繋ぎ、牛ごとに薪を負はせ、これに火を點ずれば、牛の背の熱するに隨ひて、縱橫に驅けんとし、終に人の體を四つに引裂くものといふ。

うしざき-ばら 月季花【名】〔植〕かうしんばら(庚申薔薇)に同じ。

うし-じま 牛島【名】〔地〕㊀小笠原群島中の兄島の別稱。㊁周防國周防洋にある島。熊毛郡に屬す。周回、二里二十一町。

うしじま 牛島【名】〔地〕㊀武藏國北葛飾(キタカツシカ)郡幸松(カウマツ)村の大字。藤花の名所。㊁武藏國東京市の今の向島邊の舊鄕名。牛島神社はこの鄕の古社。㊂羽後國河邊郡にある町。郡役所を置く。

うしじま-じんじや 牛島神社【名】うしのごぜん(牛御前)に同じ。

う-ししん 宇士新【名】〔人〕うのめいか(宇野明霞)に同じ。

う-しじやう 右史生【名】古、太政官をはじめ、八省に置かれし下僚。しじやう(史生)を見よ。

うし-じらみ 牛虱【名】〔動〕虱の一種。主に牛に生ずるもの。

うし-ぜり 牛芹【名】〔植〕たがらし(田芥)を云ふ。〔四國の方言〕

うし-たき 牛瀑【名】〔地〕和泉國牛瀧山にある瀑。三層に下り、一の瀑・二の瀑・三の瀑と稱す。一は高さ二十五丈、二は一丈二尺、三は三丈六尺。瀑壺にある石の形、牛の水中より跳上るに似たり。

うしたき-さう【名】〔植〕柳葉菜(アカバナ)科に屬する多年生の草。高さ二尺ばかり、葉は對生にて、葉柄長く、莖・葉共に毛茸あり。夏白色の總狀花を開き、倒卵形の果實を結ぶ。陰濕の地に多し。おらんだごしつ。

うしたき-やま 牛瀧山【名】〔地〕和泉國泉北(イヅキタ)郡にある山。葛城(カツラギ)山脈中の一峯。山中楓樹多く、また牛瀑あり。

うし-たけたば 牛竹束【名】竹束を牛に寄せ懸けたる武裝。

うし-たたき 牛叩【名】〔植〕いぼたのき(水蠟樹)を云ふ。〔土佐國の方言〕

うし-たはけ 牛淫【名】㊀人の、牛と姦淫すること。〔古語〕㊁獸類のごとく、人倫を亂すをいやしめていふ語。

うしち 烏瑟【名】〔佛〕『うしちにしや(烏瑟膩沙)の略』佛の三十二相の一。その頂骨の隆起して、おのづから髻(モトドリ)を成せるもの。肉髻。螺髪。佛頂骨。うしつ。うしちにしや。うしつにしや。太平記「五智の如來は、烏瑟を夜の雨に潤せり」

うしちにしや 烏瑟膩沙(梵Ushnisha)【名】〔佛〕前條に同じ。

うしつ 烏瑟【名】〔佛〕前條に同じ。

うしづ 牛津【名】〔地〕肥前國小城(ヲギ)郡にある町。九州鐵道長崎線の一驛。

う-じつ 雨日【名】雨の降れる日。

うし-つかひ 牛使【名】うしかひ(牛飼)に同じ。

うし-つき 牛附【名】うしかひ(牛飼)に同じ。〔古語〕大鏡「太政大臣實賴おとどの御わらは名を、うしかひと申しき。されば、その御ぞうは、うしかひをば、うしつきとのたまふなり」

うじ-つく【動四自】㊀うじうじと動く。うごめく。〔俚語〕㊁うじうじとす。ためらふ。逡巡す。〔俚語〕御伽名代紙衣「與次兵衛は、這入りかねてうじつくところを」

うしつにしや 烏瑟膩沙【名】〔佛〕うしちにしや(烏瑟膩沙)に同じ。

うし-とら 丑寅・艮【名】東と北との中間に當る方角。艮位。鬼門。枕「清涼殿のうしとらの隅の、北のへだてなる障子」

うしとら-よけ 丑寅除【名】きもんよけ(鬼門避)に同じ。

うし-どろばう 牛泥坊【名】うしぬすびと(牛盜人)㊀㊁に同じ。〔俚語〕

うじな 貉・狢【名】〔動〕むじな(貉)に同じ。〔古語〕紀「狢、ウジナ」

うじな 宇品【名】〔地〕安藝國廣島市の南端にある町。同名の港ありて、水深し。日

清戰爭の際、大本營を廣島に移して、この港より出兵せしむ。

うじな-じま 宇品島【名】〔地〕安藝國宇品港の西南にある小島。周回、二十六町。俗に向宇品と呼び、橋梁によりて、宇品の市街と相通ず。

うし-なひ 失【名】失ふこと。損失。

うし-なふ 失ふ・喪ふ【動四他】㊀無くす。無くなす。見えぬやうにす。源氏「としごろ沈みつる罪うしなふばかり御行ひをとはおぼしたてど」㊁死なす。殺す。伊勢「むかし、男、ともだちの人をうしなへるがもとへやりける」㊂常態を無くす。「氣をうしなふ」㊃とりはずす。「機會を失ふ」

うじな-みなと 宇品港【名】〔地〕うじな（宇品）を見よ。

うし-にしや 烏瑟膩沙・鬱瑟膩沙・烏瑟尼沙・烏瑟泥沙・鬱瑟尼沙・嗢瑟尼沙（梵 Usnisa）【名】〔佛〕うしち（烏瑟）に同じ。

うし-ぬすっと 牛盗【名】次條の音便。

うし-ぬすびと 牛盗人【名】㊀牛をぬすむ盜賊。うしぬすっと。うしどろばう。㊁無口（ムクチ）にて動作の敏捷ならぬ人を罵りていふ語。うしぬすっと。うしどろばう。蓮如上人御文章「たとひ、うしぬすびとといはるとも」㊂〔動〕いしぶし（石伏）に同じ。㊃能（ノウ）の狂言の一。

うじ-の-おみ-やまぢ 宇自臣山道【名】〔人〕畫家。聖武天皇時代の人。外從五位下・畫工正（エダクミノカミ）に任ぜらる。

うし-の-け-ぐさ 牛毛草【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。山野に自生し、葉は麥門冬（バクモンドウ）に似て、細長く、夏の初、葉間より尺餘の花莖を生じ、その頂に、淡紫色もしくは紫綠色の花、複總狀花序をなして咲く。牧草として栽培することあり。

うし-の-ごぜん 牛御前【名】東京市本所區須崎町にある神社。もと天台宗最勝寺の鎭守にして、貞觀二年に勸進す。牛島神社。うしじま（牛島）㊁參照。

うしのごぜん-まつり 牛御前祭【名】前條牛御前の祭禮。九月十五日に行はる。

うし-の-こぼれ 【名】〔植〕せんにんさう（仙人草）に同じ。

うし-の-さうめん 牛索麵【名】〔植〕ねなしかづら（根無葛）に同じ。

うし-の-した 牛舌【名】㊀〔動〕したびらめ（舌平目）に同じ。㊁〔植〕いぬびは（犬枇杷）に同じ。㊂〔植〕ふぢさはぎく（藤澤菊）に同じ。㊃西洋料理にて、牛の舌を、シチュウなどにしたるもの。

うしのした-ぐさ 牛舌草【名】〔植〕紫草（ムラサキ）科に屬する多年生の草。高さ四五尺に達す。葉は細長く光澤ある全緣にて、毛茸粗生し、下葉は二尺の長さを有するものあり。夏、五瓣の紫花を簇生し、複總狀花序をなす。歐洲の原產にて、觀賞用とす。

うしのした-もち 牛舌餠【名】いびつ形に造れる一種の餠。紅・白の二種ありて、二枚重ねて折敷（ヲシキ）などに載せて出す。

うし-の-しっぺい 牛尾禾【名】〔植〕禾本（ワクホン）科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は狹長にて硬し。花は、夏、莖頂に近き葉腋より、小穗狀花序をなして開く。各地の原野・路傍に生ず。

うしのつの-がひ 牛角貝【名】〔動〕掘足（クッソク）類に屬する貝。形、牛の角に似、長さ約一寸、色は白きと淡褐色なるとあり。

うし-の-つのつき 牛角突【名】うしあはせ（牛合）に同じ。

うしのつの-づきあひ 牛角附合【名】つのづきあひ（角附合）に同じ。

うしのつの-もじ 牛角文字【名】『その形の牛の角に似たるよりいふ』平假名のいの字。徒然「延政門院、いときなくおはしましける時、…御歌、二つもじ牛の角文字すぐな文字ゆがみもじとぞ君はおぼゆる。こひしく思ひまゐらせたまふとなり」

うし-の-つめ 牛爪【名】〔動〕次條の略。

うしのつめ-がひ 牛爪貝【名】〔動〕まつばがひ（松葉貝）に同じ。

うし-の-とき 丑時【名】うし（丑）㊂の時刻。

うしのとき-まうで 丑時詣【名】次條に同じ。謠曲（橋辨慶）「われ宿願の子細有って、五條の天神へ、丑の時まうでを仕り候ふ」

うしのとき まゐり 丑時參【名】特別の祈願を籠（コ）むるために、夜、丑の刻に、神佛に參詣すること。嫉妬ぶかき女が、かたきに思へる女を詛（ノロ）ふためにせしことも多し。頭に蠟燭を點じ、手に釘と金槌とを携へて參詣し、その詛ふ人の形を、神木に釘附などす。斯くすれば、七日目の滿願に、詛はれたる人死すべしと信ぜられたり。丑の時まうで。三世相錦繡文章「丑の時まゐりが夕立にあったやうななりをして」

うし-の-にんにく 牛忍辱【名】〔植〕しびとばな（死人花）を云ふ。〔近江國の方言〕

うし-の-はこぼれ 【名】〔植〕せんにんさう（仙人草）に同じ。

うし-の-はなぎ 牛の鼻木【句】うし（牛）の條下を見よ。

うし-の-はなぎ 牛鼻木【名】〔植〕㊀『その材を「牛の鼻木」に製することあるよりいふ』かまつか（鎌柄）に同じ。㊁がまずみ（莢蒾）に同じ。

うし-の-はなづら 牛の鼻貫【句】うし（牛）の條下を見よ。

うし-の-はなづら 牛鼻貫【名】〔植〕いしみかは（杠板歸）に同じ。

うし-の-ひたひ 牛額【名】〔植〕たがらし（田芥）に同じ。

うし-の-ふし 【名】〔植〕つるぼ（蔓穗）を云ふ。〔東京の語〕

うし-の-みや 牛宮【名】大阪天王寺の境內にある小祠。足の病を治するに効ありと信ぜられ、牛の燒物、又はその繪馬を納む。

うし-の-め-いし 牛目石【名】〔鑛〕色黑くやや青ばみて、牛の目に似たる白色の星ある石。多く阿波國より出づ。

うし-の-やぶいり 牛藪入【句】うし（牛）の條下を見よ。

うしのを-さん 牛尾山【名】〔地〕山城國宇治郡にある山。音羽山の一峯を成し、山中に嚴法（ゴンボフ）寺あり。

うし-はく 領く【動四他】『大人（ウシ）はくの意』我が有とす。占む。領有す。うすはく。〔古語〕萬葉「かむづまりうしはきいますもろもろの大神たち」

うし-ばくらう 牛博勞【名】『ばくらう（博勞）・うまばくらう（馬博勞）を見よ』牛のよしあしを相し、又は牛を仲買して賣る人。狂言（牛馬）「これは、山一つあなたに住むうしばくらうでござる」

うし-はこべ 牛蘩縷【名】〔植〕石竹科に屬する多年生の草。到る處の平地に生じ、莖は軟かにして橫はり、一尺乃至三尺に達す。葉は銳頭・全緣の卵形にて長さ一寸餘、春、白色・五瓣の小花、岐繖花序をなして開く。はこべ鹽の原料・小鳥の飼料などに用ひ、又ひたし物として食ふことあり。

うし-ばへ 牛蠅・麈蟲・黃金蟲【名】〔動〕雙翅（シサウ）類に屬する昆蟲。形、靑蠅に似て扁く、全身に黑毛密生し、又、處處に黃白色の毛生じて、銳き嘴あり。牛馬の皮膚を刺して、その血を吸ふ。

うし-ばま 丑濱【名】遠江地方にて、土用の丑の日に海水に浴すること。夏負（ナツマケ）を防ぐためといふ。

うし-ばり 牛梁【名】〔建〕主に重きものを承（ウ）くる梁。例へば土藏の地棟（ヂムネ）などの類。うし。うしひき。うしひきばり。

うし-ひき 牛曳【名】㊀〔建〕前條に同じ。㊁牛を曳きつるる者。俳諧新選（梅仙）「牛曳のくづして通る踊かな」

うしひき-ばり 牛曳梁【名】〔建〕前條㊀に同じ。

うし-ひく-はな 牛牽花【名】〔植〕『牽牛花の字の直譯』あさがほ（朝顏）に同じ。

うし-ひく-ほし 牛牽星【名】けんぎうせい（牽牛星）に同じ。謠曲（唐船）「七夕のたとへにも似ぬ身のわざのうしひく星の名ぞしるき」

う-しふ 烏集【名】うがふ（烏合）に同じ。

う-しふ 烏集の交【句】『管子に「烏集之交、雖レ善不レ親」とあるに本づく』利慾のために團結せるのみにて、實意の無きこと。

う-しふ 有執【名】〔佛〕萬法は實有（ジツウ）なりと執すること。（無執に對して）

う-しふ 有習【名】〔佛〕『習は氣習の意』身に染みたる煩惱の氣分。（無明に對して）

う-しぶ 右使部【名】しぶ（使部）を見よ。

うし-ぶいばら 【名】〔動〕こがねむし（黃金蟲）を云ふ。〔東京の語〕

うし-ぶいぶい 【名】〔動〕こがねむし（黃金蟲）を云ふ。〔伊豫國の方言〕

うしぶか 牛深【名】〔地〕肥後國天草郡にある町。天草下島の北岸に在りて、その港は水深し。

うし-ぶせ 牛臥【名】〔地〕駿河國駿東(スントウ)郡沼津の南にある海水浴場。牛臥山の麓。水清く、波靜かなり。

うし-ぶね 牛槽【名】牛の食物を盛る容器。雅亮裝束抄「うしぶね・うまぶね」

うし-べに 丑紅【名】夏は土用の丑の日、冬は寒(カン)の丑の日に賣るべに。口中のあれを防ぎ、又は小供の疱瘡・便祕などに奇效ありとて貴ぶ。古は購客に、土製の牛の玩具を呈する習なりき。

うし-へび 牛蛇【名】〔動〕からすへび(烏蛇)を云ふ。〔豐前國・豐後國の方言〕

うし-べや 牛部屋【名】㊀うしごや(牛小屋)に同じ。芭蕉「牛部屋に蚊のこゑよわし秋の風」㊁十六むさしの盤の、三角なるところ。

うしほ 潮【名】㊀海水の、日月の引力によりて、時を定めて、或は高くなり、或は低くなること。大抵、一晝夜に二回とす。しほ。潮汐。㊁海の水。かいすゐ。紀「海水、ウシホ」㊂うしほに(潮煑)の略。柳樽「平清(ヒラセイ)の奢りの末はうしほなり」

潮煉る【句】海水を煮て鹽を取る。〔古語〕夫木「うしほねるかまどの烟けをぬるみ雪もたまらぬあまのあばら屋」

潮の花【句】潮さきの、互に觸れ、又は岩・岸などに觸れて、くだけて白く散るさまを、花に見たてていふ語。芭蕉「疑ふなうしほのはなも浦の春」

潮の火【句】海中に生息せる微生物のために、夜、海上の光りて見ゆるもの。海上の燐火。不知火(シラヌヒ)などの類。

潮の水【句】昔、江戸諸侯の邸宅にて、正月の始めの辰の日の辰の刻に、辰の年の人をして、海水を酌ませ、竈の上の屋根に撒(マ)かせて、火災をまじなひしこと。

うしほ-かぜ 潮風【名】しほかぜ(潮風)に同じ。

うしほ-じんじや 海潮神社【名】出雲國簸川(ヒカハ)郡に鎭坐せる式內神社。

うしほ-じる 潮汁【名】鰹節(カツヲブシ)の煑汁を、食鹽にて味を附けたるもの。

うしほ-ぞめ 潮染【名】中形染(チユウガタゾメ)の一。インダンスレン・ブリユウ(Indanthrene blue)又は單にインダンスレンと呼ぶ染料にて型附(カタ)染を施せるもの。紫を帶びたる鮮美なる青色にして、地質は眞岡(カヲ)・木綿・木綿縮(モメンチヂミ)・瓦斯織・瓦斯縮などを用ふ。若き男女に適す。

うしほ-たうぢ 潮湯治【名】しほたうぢ(潮湯治)に同じ。

うしほだ-たかのり 潮田高敎【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。通稱は又之亟、姓名を變じて原田斧右衞門と稱す。淺野長矩に仕へて馬廻となる。元祿十六年死を賜はる。年三十五。

うしほ-どき 潮時【名】しほどき(潮時)に同じ。

うし-ぼとけ 牛佛【名】佛の、牛に權化(ゴンゲ)せるもの。〔古語〕榮花「關寺といふところに、牛ぼとけあらはれたまひて、よろづの人參りこみ、見たてまつる」

うしほ-に 潮煑【名】鯛などの肉又は骨を水にて煑て、潮汁のごとく味をつけたる吸物。うしほ。えのしまに。

うしほ-ほほづき 潮酸漿【名】〔植〕いぬほほづき(犬酸漿)に同じ。

うしほ-みづ 潮水【名】しほみづ(鹽水)に同じ。

うしほ-りう 潮流【名】能(ノウ)の笛の一流。尾州家にあり。

うし-まつり 牛祭【名】山城國太秦(ウツマサ)の廣隆寺にて、陰曆九月十五日(今は新曆十月十二日)の夜に行ふ祭。大念佛會といふ。寺中の行者、異樣の服裝をなして、牛に乘りつつ祠殿をめぐり、上宮王院の前にて、懺悔の意を述べたる祭文を讀誦す。俳諧新選(嘯山)「牛まつり能なし女聞きや居ん」

うしまど 牛窓【名】〔地〕備前國邑久(オホク)郡にある町。岡山市の東南約六里。長濱灣の南なる小半島の地。風景佳し。

うし-まるた 牛丸太【名】芝居の舞臺の天井に、橫にわたしたる太き竹。ところどころに穴を穿ち、水を落して、降雨の光景をあらはすなどに用ふ。

うし-みつ 丑三【名】㊀夜の八つ時と九つ時との間、即ち今の午前三時。(丑の時の最初即ち、今の午前二時は丑一つ、午前二時半は丑二つ、午前三時が丑三つ、午前三時半が丑四つ、午前四時は寅一つといふ順序になる) 大和「時まうすおとのしければ、聞くに、うしみつと申しけるをきゝて」㊁深更。[丑滿] 拾遺「人心うしみつ今はたのまじよ夢に見ゆやとねぞすぎにける」

うしみつ-どき 丑三時【名】前條に同じ。藝「草木も眠る丑三つどき」

うし-むし 牛蟲【名】〔動〕㊀あとびさり㊁に同じ。㊁鞘翅(セウシ)類に屬する昆蟲。形、斑蝥(ハンメウ)のごとく、全身黑褐色にて、硬翅(カウシ)に黃金色の點線あり。農作物の害蟲を食す。[慕光蟲]

うじ-むし 蛆蟲【名】㊀〔動〕うじ(蛆)に同じ。㊁他人をののしりていふ語。〔俚語〕

蛆蟲も一代【句】平凡なる者にても、やはり一生を送る譬。〔諺語〕

う-しん 有心【名】㊀心あること。思慮あること。情あること。(無心に對して) 枕「とく言へ、あまり有心すぎて、しそこなふな」㊁普通の歌を狂歌と區別していふ語。井蛙抄「後鳥羽院の御時、…柿本(カキノモト)は世の常の歌、これを有心と名づけ、栗本(クリノモト)は狂歌、これを無心といふ」㊂上品なる詞を用ひたる連歌。(無心に對して) 菟玖波集「建長六年五節の頃、有心・無心の連歌はべりけるに」㊃〔文〕連句の附方七法の一。附句によりて、前句の姿をあらはす方法。例へば「參りにも船下向にも船にして」といふ前句に對して「隣の姿もこちで出來あひ」と附くる類。

有心の序【句】じよ(序)の條下を見よ。

う-じん 羽人【名】『うくわ(羽化)を見よ』せんにん(仙人)に同じ。羽客。

う-しんじ 右心耳【名】〔醫〕しんじ(心耳)を見よ。

う-しんしつ 右心室【名】〔醫〕しんしつ(心室)を見よ。

うしん-じや 有心者【名】心ある人。思慮ある人。情あること。空穗「更にものたまふかな、有心者なり」

う-じもの 鵜自物【枕】鵜のごとき物といふ意にて、鵜は首を水中につき入るるものなるより、うなねつく(頸根突く)にかけていふ。祝詞「うじものうなねつきぬきて」

うしもめや【名】〔植〕しびとばな(死人花)を云ふ。〔石見國の方言〕

うし-や 牛屋【名】㊀うしごや(牛小屋)に同じ。芭蕉「鷄の聲にしぐるるうしやかな」㊁牛を賣買する人。㊂牛肉を賣る家。ぎうや。牛肉屋。

う-しや 羽紗【名】ごろふくれん(呉絽服連)に同じ。

うしやあがる【動四自】『失せ上るの訛。うせる(失せる)とあがる(上る)とを見よ』うす(失す)㊂を、一層罵りて呼ぶ語。〔俚語〕浮世風呂「畜生め、氣のきかねえ所にうしあがる」春花五大力「今宵中は歸すことはならない、さう思うてうしやあがれ」

うしやあがれ【感】勝手に出て行け、又は此處に來れなど罵る意。〔俚語〕

う-しやう 羽觴【名】『漢書音義に「羽觴、杯上綴レ羽以速飲也」とあり』さかづき(杯)に同じ。

う-しやう 有生【名】生命ある物。

有生、衣食住(エジキヂユウ)【句】この世に生れいでたる者は、衣・食・住の三つを必要とすること。〔諺語〕狂言(どちはぐれ)「有生えじきぢゆうと聞く時は、一切性をうけたる者の食(ジキ)を求めぬは御座らぬ程に」

う-しやう 有性【名】〔佛〕佛性のあるもの。佛と成る素性のあるもの。(無性に對して)

う-しやう 右相【名】うふ(右府)に同じ。

う-じやう 鵜匠【名】うかひ(鵜飼)㊁に同じ。

う-じやう 羽狀【名】一本の線の兩側に、幾筋かの支線が平行して分れ出でたる形。

う-じやう 有情【名】〔佛〕『梵 Sattava (薩埵)の譯語にて、衆生(シユジヤウ)はその舊譯』、生きて情あるもの、即ち一切の動物。(非情・無情に對して)

う-じやう 烏城【名】『烏は、金烏(即ち日)の義。旭川のほとりにあるよりいふ』をかやまじやう(岡山城)の異稱。(鷺城に對して)

うじやう-えふ 羽狀葉【名】〔植〕うじやうふくえう(羽狀複葉)を見よ。

う-しやう-ぐん 右將軍【名】しやうぐん(將軍)を見よ。

う-しやう-こく 右相國【名】うふ(右府)に

同じ。

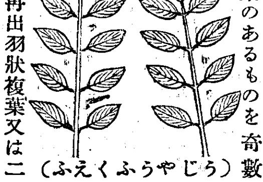
う-しやうじん 卯精進【名】昔、兎が我が身を燒きて、八幡に捧げしに、八幡その志の篤きに感じ、爾後、肉食を禁ぜられし故事。運歩色葉集「卯精進。昔八幡食二魚肉一獺獻レ魚、兎可レ獻物無レ之、入レ火燒レ身而獻レ之。八幡感二其志一、至レ今爲二卯精進一、被レ禁二肉食一者也」

うじやうじや【貌】㊀小き蟲などの、多くうごめきをるさま。うざうざ。うようよ。〔俚語〕㊁つまらぬ物語を、長くつづくるさま。うだうだ。〔俚語〕「うじやうじやと長ばなしに、夜をふかす」

うじやう-せけん 有情世間【名】〔佛〕しゆじやうせけん（衆生世間）に同じ。

う-しやうふ 右相府【名】うふ（右府）に同じ。

うじやう-ふくえふ 羽狀複葉【名】〔植〕葉柄（エフヘイ）の兩側に、小葉の排列せるもの。數種あり、先端に一小葉のあるものを奇數羽狀複葉といひ、複葉先端に小葉の無きものを偶數羽狀複葉といひ、葉柄の兩側に小葉柄が排列し、その各小葉柄が羽狀複葉を著けたるものを、再出羽狀複葉又は二回羽狀複葉といひ、なほ更に同樣に分岐するものを、三出羽狀複葉又は三回羽狀複葉といふ。



（うじやうふくえふ）

うじやう-みやく 羽狀脈【名】〔植〕次條の略。

うじやうみやく-えふ 羽狀脈葉【名】〔植〕網狀脈葉の一種。一條の主脈、即ち中肋脈を有し、これより兩側に枝脈を出し、更に分れて細脈となれるもの。梅・櫻・枇杷の葉の類。

う-じやく 烏鵲【名】㊀烏と鵲（カササギ）と。㊁〔動〕かささぎ（鵲）に同じ。

烏鵲の橋【句】「鵲（カササギ）の橋」に同じ。謠曲（天鼓）「烏鵲の橋のもとに紅葉を敷き、二星の館の前に風ひややかに」

うじやく-けう 烏鵲橋【名】「鵲（カササギ）の橋」に同じ。

うしや-の-おとど 牛屋大臣【名】〔人〕ふぢはらこれきみ（藤原是公）に同じ。

うしやめ-ぼし 危宿【名】〔天〕二十八宿の一。西方にあり。危（キ）。

う-しゆ 烏珠【名】くろめ（黑目）㊀に同じ。

う-じゆ 迂儒【名】學理にのみ拘泥して、實際の世事に通ぜざる儒者。腐儒。

うじゆ-きつ 溫州橘・雲州橘【名】〔植〕㊀うんしうみかん（溫州蜜柑）に同じ。〔古語〕尺素往來「鬼柑子・雲州橘」饅頭屋本節用集「溫州橘」㊁今いふは、一種變生の橘（タチバナ）にて、その實、蜜柑よりも大きく、味は酸く且つにがし。

う-しゆつ 烏瑟【名】〔佛〕うしち（烏瑟）に同じ。平家「金銅（コンドウ）十六丈の盧遮那佛（ルシヤナブツ）、うしゆつ高く聳えては、半天の雲に隱れ」

う-しよ 迂書【名】㊀實際の役に立たぬ書籍。㊁わが著書・または書翰の謙稱。

う-しよ 羽書【名】うげき（羽檄）に同じ。

う-じようしやう 右丞相【名】うふ（右府）に同じ。

う-しらうちゆう 右司郎中【名】うちゆうべん（右中辨）の唐名。

う-しらん 烏絲欄【名】黑く印刷したる罫紙（ケイシ）。古、支那にては、女子が艷書を書くに用ひたり。

うしる 臀る【動自】うむ。腫（ハ）る。〔古語〕

うしろ 後【名】㊀前の反對。表にあらざる方。あと。しりへ。背後。㊁背（セ）。せなか。枕「庇の柱に、うしろをあてて」㊂下襲（シタガサネ）のしり。裾（キヨ）。枕「うしろを捲かせて、笏（シヤク）とりて」㊃うしろすがた（後姿）の略。枕「羨ましげにおしはかりてつきそひたるうしろもをかし」㊄陰（カゲ）になりたる處。「屏風のうしろ」㊅のち。將來。源氏「亡（ナ）からんうしろ」㊆『謠方と囃子方（ハヤシカタ）とは舞臺の背後に居るよりいふ』芝居にて、舞臺上の俳優の動作につれて演奏せらるる歌曲。㊇芝居にて、俳優の後見となりて登場し、俳優の白（セリフ）に馴れぬ間、これを讀聞かせなど斡旋（アツセン）する人。

後千兩【句】女の姿の背後より見れば、甚だ美しきこと。後辯天。

後千兩、前（マヘ）一文【句】女の後姿（ウシロスガタ）の美しきにかかはらず、容貌のみにくき形容。〔諺語〕

後辯天【句】「後千兩」に同じ。

後辯天、前（マヘ）板額（ハンガク）【句】『はんがく（板額）を見よ』女の、後姿（ウシロスガタ）はしなやかなれども、容貌はみにくき譬。〔諺語〕

後辯天、前（マヘ）不動【句】前條に同じ。〔諺語〕

後に眼無し【句】人の注意の、あまねく行きわたらぬ譬。〔諺語〕

後の目【句】わが氣附かぬ間に、人の注意して見ること。〔諺語〕太平記「うしろの目、壁に耳、いかでか隱れあるべき」

後も暗（クレ）に【句】あとに心殘りて。不安心にて。うしろめたく。〔古語〕紀「湊のうしほのくだりうなくだりうしろもくれにおきてかゆかむ」

後を見せる【句】逃げて、人に背面を見す。負けて逃出す。平家「まさならも敵にうしろを見せたまふものかな」

うしろ-あかり 後明【名】光線を、背の方より取ること。一茶「川狩のうしろあかりやむら木立」

うしろ-あし 後足・後脚【名】㊀うしろの足。足のうしろ。にげあし。反踵。㊁背をむけて逃げんとすること。

うしろ-あたま 後頭【名】頭の後部。後頭部（コウトウブ）。

うしろ-あはせ 後合【名】㊀せなかあはせ（背仲合）に同じ。今昔「烏丸おもてに、六角堂のうしろあはせにぞ住みし」㊁あべこべ。反對。

うしろ-あゆみ 後歩【名】あとしざり。あとじさり。後退。俳諧古選（嵐雪）「立ちいでてうしろあゆみや秋の暮」

うしろ-いぶせし 後いぶせし【形二】行末、心安からず。將來の事が不安心なり。盛衰記「頼朝も、うしろいぶせく思ふなり」

うしろ-えもん 後衣紋【名】袴の腰を腰骨（コシボネ）より高く引きあげて、容態をつくろふこと。

うしろ-えり 後襟【名】柔術の稽古にて、互に相手の稽古著（ケイコギ）の襟の後部を握る方法。（まへ襟に對して）

うしろ-おし 後押【名】㊀うしろより押すこと。あとおし。㊁うしろだて（後楯）㊁に同じ。

うしろ-おび 後帶【名】㊀背後にて、帶を結ぶこと。（かかへ帶に對して）㊁若き女。

うしろ-おり 後下【名】器械體操の方法の一。

うしろ-かげ 後影【名】うしろすがた（後姿）に同じ。

うしろ-がけ 後懸【名】人力車の車體の背面を覆ふもの。幌（ホロ）と同質の物を用ふるを常とす。主に田舍向の人力車に設けらる。うしろがっぱ。うしろとうゆ。

うしろ-かけなは 後掛繩【名】舵をひきあげて淺くする綱。船の、川などに入る時に行ふ。

うしろ-がた 後方【名】昔、殿上の賭弓（ノリユミ）の儀に、射手を前後の二列に分ちたりし、その後列に屬する人人。

うしろ-がっぱ 後合羽【名】うしろがけ（後懸）に同じ。

うしろ-がへり 後轉・後返【名】㊀うしろの方へ蜻蛉返（トンボガヘリ）すること。あとがへり。㊁器械體操の方法の一。

うしろ-がみ 後髮【名】頭の後部の髮。

後髮を引かる【句】人情にほだされて、思ひ切ることを得ず。

うしろ-がも 後鴨【名】水泳法の一。水上にうつぶして頭を擡（モタ）げ、足をすこし出し、手にて水をかきつつ進むもの。（まへ鴨に對して）

うしろ-がろし 後輕し【形一】うしろやすし（後易し）に同じ。〔古語〕續紀「みまし、大臣（オホオミ）のまかりぢも、うしろがろく、心もおだひに」

うしろ-きず 後疵【名】背部に受けたる疵。（むかふ疵に對して）

うしろ-ぎたなし 後穢し【形一】心、潔白ならず。卑劣なり。本朝二十四孝「子供をゐばに恩にかけて、味方にせんと、うしろぎたない信玄に奉公しては、武士が立つまい」

うしろ-くび 後頸【名】頸の後部。

うしろ-ぐらし 後暗し【形二】㊀あとの方、心もとなし。行末知りがたし。㊁他人に隱したる所業あり。うしろめたし。亘心

に恥ぢて、心あきらかならず。貳心（フタゴコロ）あるが如し、うそぐらい。盛衰記「君をも、うしろぐらき御事に思ひ奉りて」

後暗いは、鬼の餌食（エジキ）【句】うしろぐらき所業をなせば、心とがめて、常に苦しむ意。〔諺語〕

うしろ-げさ 後袈裟【名】背後より、けさがけに斬りつくること。

うしろ-ごし 後輿【名】輿をうしろむきに舁（カツ）ぐこと。

うしろ-ごし 後腰【名】袴の後紐（ウシロヒモ）の上なる、背部にあたる部分。

うしろ-ごと 後言【名】かげぐち（陰口）に同じ。

うしろ-ざし 後插【名】女の髮の後の方に插す簪（カンザシ）。（前插・中插に對して）

うしろ-ざま 後樣【名】うしろのかた。枕「月影のはしたなさに、うしろざまへすべり入りたるを」

うしろ-じき 後敷【名】あとじき（後敷）に同じ。

うしろ-しぶき 後繁吹【名】背後より降りかかる雨、又は水のしぶき。傾城戀飛脚「うしろしぶきの吹雪にも」

うしろ-すがた 後姿【名】背面より見たる姿。うしろかげ。うしろつき。其角「をか釣りのうしろすがたや秋のくれ」

うしろ-ずね 後臑【名】後のすね。獸のあとあし。（前臑に對して）傾城反魂香「頭・前臑・後臑・胴より尾先に至るまで」

うしろ-せんりやう 後千兩【句】うしろ（後）の條下を見よ。

うしろ-ぜめ 後攻【名】敵の背後より攻めかかること。

うしろ-だう 後堂【名】堂のうしろにある廓（ウラ）。狂言（六地藏）「△なんと、地藏は出來ましたか。△なかなか。出來ました。うしろだうへまはらせられ。あら鷹が垂れてある」

うしろ-だか 後高【貌】後の方の高きさま。

うしろ-だき 後抱【名】背後より抱くこと。「うしろだきに組み留めたり」

うしろ-だて 後立【名】㊀うしろみ（後見）㊀に同じ。㊁兜（カブト）の立物の一種。（前立に對して）

うしろ-だて 後楯【名】㊀背後の防ぎとして楯にとるもの。㊁陰に居て援くる人。うしろみ。くろまく。後援。

うしろ-つき 後附【名】うしろすがた（後姿）に同じ。俳諧新選（之房）「しづけさや水鳥ねむるうしろつき」

うしろ-づけ 後附【名】〔文〕俳諧の連句の一法。附句より前句の方へ續けて、意味を連絡せしむること。

うしろ-つぶて 後礫【名】㊀逃げながら、後を向きて、礫を投ぐること。㊁負けながら、猶へらず口を叩くこと。

うしろ-づめ 後詰【名】ごづめ（後詰）に同じ。

うしろ-で 後手【名】㊀後の方。背面。そがひ。〔古語〕源氏「美しげなるうしろで」㊁兩手を背にまはすこと。しりへで。

うしろ-でつこ 後手っこ【名】兩手を背にまはさしめられて縛らるること。〔東京の俚語〕

うしろ-ど 後戸【名】後方にある戸。著聞「蓮花王院の兵士が夢に、うしろどの坤（ヒツジサル）の隅より北へ、第四の間に」

うしろ-とうゆ 後桐油【名】うしろがけ（後懸）に同じ。

うしろ-とび 後飛【名】㊀うしろの方に飛ぶこと。小町踊「冬見るや春さく梅のうしろとび」㊁後方に幅飛（ハバトビ）を行ふこと。

うしろ-ながれ 後流【名】〔建〕屋根の流の、棟（ムネ）よりうしろの方にあるもの。（まへ流に對して）

うしろ-ぬの 後布【名】袴の後部に用ふる布。

うしろ-の-あし-ふたつじろ 後足二白【名】馬の毛色の一。後脚の二つとも白きもの。

うしろ-の-ひだりあし-じろ 後左足白【名】馬の毛色の一。左の後脚の白きもの。騁足。

うしろ-の-みぎあし-じろ 後右足白【名】馬の毛色の一。右の後脚の白きもの。

うしろ-の-みつつじ 後の三辻【句】みつつじ（三辻）の條下を見よ。

うしろ-の-やま 後山【名】〔地〕『源氏物語の須磨卷に、ただ後方に在る山といふ意に用ひたるを、後世、固有の名のやうにとりなしていへるもの。わかぎのさくら（若木櫻）參照』攝津國須磨にある山。夫木「月いづるうしろのやまは雲はれて須磨の庵にかへる浦風」

うしろ-はちまき 後鉢卷【名】後頭部にて結びたる鉢卷。（むかふ鉢卷に對して）

うしろ-はば 後幅【名】衣服の後裑（ウシロミゴロ）又は袴の後布（ウシロヌノ）の幅。

うしろばり-おほぐち 後張大口【名】大口の一種。後方を張出すために、その方を太絲（イト）の織地にて仕立てたるもの。武家又は能樂の時の所用。（前張大口に對して）

うしろ-びつくり 後喫驚【名】前より見ては美しけれど、うしろ姿のみにくきこと。〔俚語〕

うしろ-ひぼ 後紐【名】次條に同じ。

うしろ-ひも 後紐【名】㊀袴の後部に附けたる紐。㊁著物のうしろに縫附け、前に廻して結ぶやうにせる附紐。赤兒に用ふ。鷹筑波「姫瓜の實をまく蔓やうしろひも」㊂人の幼き時。薩摩歌「笹野三五兵衛樣といふ人と、うしろひもから、緣ぐみあり」

うしろ-べた 後方【名】のちの方。背の方。

うしろ-べたし 後目痛し【形一】うしろめたし（後目痛し）に同じ。〔古語〕枕「めのと代へてん。いとうしろべたし」

うしろ-べんてん 後辯天【句】うしろ（後）の條下を見よ。

うしろ-まき 後卷【名】味方を攻圍む敵軍を、更にその背後より圍むこと。常山紀談「勝賴、長篠（ナガシノ）の城を圍み攻むること甚だはげしかりしに、信長、東照宮と共に、うしろ卷あり」

うしろ-まく 後幕【名】屋臺（ヤタイ）・高座などの藝人の座席の後方に張りたる幕。

うしろ-まち 後襠【名】㊀袴の後布（ウシロヌノ）を縫ひあはす布。㊁羽織・被布（ヒフ）などの後裑（ウシロミゴロ）の方に縫ひつくる襠。

うしろまはし-あみ 後廻網【名】引網の一種。地引網の外方にかけ廻して、地引網より逃去らんとする魚を更に捕ふるもの。

うしろ-まへ 後前【名】著物を縫ひなほす時、背の方を前の方に換ふること。

うしろ-み 後見【名】㊀陰に居て、他を扶助すること。うしろだて。後援。內助。〔古語〕源氏「おほやけの御うしろみをするなん、行くさきもたのもしげなること」同「けさうじ添ふとて、騷ぎつるうしろみども、近う寄りて」㊁鎌倉時代に於ける執權、足利時代の管領又德川時代にありては、將軍の幼き間、又は重き病氣の時、臨時に三家・三卿中より選ばれて、補佐せし者の稱。諸侯にありても同じ。うしろみやく。㊂こうけん（後見）に同じ。

うしろ-み 後身【名】衣服の背部。

うしろ-みごろ 後裑【名】衣服の背部のみごろ。（前裑に對して）

うしろみ-やく 後見役【名】うしろみ（後見）㊁に同じ。

うしろ-みる 後見る【動上一自】後見をなす。うしろむ。〔古語〕落窪「かくこまかにうしろみるは、あはれなることをぞ」

うしろ-む 後見【動上二自】前條に同じ。狹衣「おぼろげに思ひうしろむる人のはかばかしきなくば」

うしろ-むき 後向【名】背を向けて居ること。芭蕉「うちはもてあふがん人のうしろむき」

うしろ-めた 後目痛【貌】うしろめたきさま。〔古語〕素性集「庵の上に苔のころもぞうしろめた戀の涙はもらずもありなん」

うしろめた-がる 後目痛がる【動四他】うしろめたく思ふ。不安心におもふ。〔古語〕李穗「さばかりうしろめたがりきこえたまふものを」

うしろ-めたし 後目痛し【形一】後の方、心もとなし。うしろの方、氣がかりなり。うしろぐらし。うしろめたなし。うしろべたし。（うしろやすしに對して）〔古語〕古今「をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとり立てれば」

うしろめた-なし 後目痛甚し【形一】うしろめたし（後目痛し）に同じ。〔古語〕和泉式部集「夜のほどもうしろめたなき花の上をおもひがほにてあかしつるかな」

うしろ-めん 後面【名】芝居の狂言にて、後頭部に假面（メン）を著け、身體の前面と背面とを別人のごとくにして動作すること、又その假面。

うしろ-も-くれ-に 後も暗に 【句】 うしろ（後）の條下を見よ。

うしろ-や 後矢 【名】 敵に內應して、味方の後方より射る矢。

うしろ-やく 後厄 【名】 男女の大厄の年の次の年。 やくどし（厄年）參照。

うしろ-やすし 後安し 【形二】 心配なし。あとに心殘らず。安心なり。うしろがろし。（うしろめたしに對して）〔古語〕 拾遺「千とせへん君しいまさばすべらぎの天の下こそうしろやすけれ」

うしろ-ゆび 後指 【名】 人を、背後より指して譏（シ）ること。陰口（カゲグチ）をきくこと。しりうごと。「うしろ指をさゝる」

うしろ-ゆみ 後弓 【名】 射手（テイ）の順番にて、後に射ること。

うしろ-をがみ 後拜 【名】 體操の方式の一。背中にて合掌（ガツシヤウ）し、次第に兩手を肩の高さに至らしめて、あたかも後方を拜むがごときさまをなすもの。

うしわか-まる 牛若丸 【名】〔人〕 みなもとよしつね（源義經）の幼名。

うし-わく 牛枠 【名】 枠形にしつらへたる牛竹束（ウシタケタバ）。

うしわくだら 【名】〔動〕 ひき（蟇）を云ふ。〔九州の方言〕

うじゐ 雲林院 【名】 ❶うりんゐん（雲林院）に同じ。 ❷〔地〕伊勢國安濃郡にある村。往時この國の豪族工藤氏より出でたる雲林院氏の十一世の間據りし處。

うし-を 牛尾 【名】 馬の、その尾の形、牛の尾の如くなるもの。

うしを-きんざん 牛尾金山 【名】〔地〕 薩摩國伊佐郡大口村大字牛尾にある鑛山。金及び銀を產す。明治十年頃より採掘し、同三十三年、牛尾金山會社の有となる。

うしを-やま 牛尾山 【名】〔地〕 うしのをさん（牛尾山）に同じ。 堀太「峯たかき牛尾の山に入る人は柴車にて下るなりけり」

うし-をり 牛折 【名】 うしごや（牛小屋）に同じ。

うす 臼 【名】 ❶ 穀物を精（シラ）げ、物を碎きて粉末とし、又、餠を搗（ツ）くなどに用ふる器。多くは木の幹を胴切りにして、刳（クエ）り凹めたるもの。上部の平らなるままのあり。物をその中に入れて、杵（キネ）にて搗く。つきうす。又、からうす・すりうす・ひきうす・ふみうす等いふもあり。各、その條を見よ。 ❷ひきうす（挽臼）の略。

臼の者 【句】 うすをとこ（臼男）に同じ。

うす 有珠 【名】〔地〕 膽振（イブリ）國八郡の一。

うす 失す 【動下二自】 ❶ 見えぬやうになる。無くなる。 源氏「おもかげに見えて、ふと消えうせぬ」 ❷死ぬ。〔亡す〕 源氏「假かにうせぬれば」 ❸うせる（失せる）を見よ。

うす 薄・淡 【接頭】 うすき意。「うす墨」「うす紅」「うす茶」「うすもとで」「うす紙」

うず 髻華 【名】 古、木の枝・草などを冠の上にかざして、飾りとせしもの。後世には、位階によりて品質を異にすることと定められたり。かざし。〔古語〕 紀「髻華、此云二于孺二」

髻華の玉蔭 【句】 髻華に懸けたる日蔭かづらなりといふ。〔古語〕 萬葉「いぐし立てみわすゑまつる神主が髻華の玉蔭見ればともしも」

うず 烏芻 【名】〔佛〕 うずさま（烏芻沙摩）の略。

うず 雲珠 【名】 ❶ 唐鞍のしりがいに著くる飾りもの。 和名「雲珠、宇須」 ❷うずぐら（雲珠鞍）の略。

うず 倦ず 【動佐變自】 うんず（倦ず）に同じ。〔古語〕 空穗「わかき男・女・親・はらからとうじたまふ」

うす-あか 薄赤 【名】 うすき赤色。

うす-あかし 薄赤し 【形二】 うすく赤し。ほのかにあかし。

うす-あかり 薄明 【名】 ❶ 空又は火などのかすかに明きこと。微明。 曠野（越人）「雨の月どこともなしのうすあかり」 ❷〔地〕 日出前又は日沒後、天空のあかるきこと。空氣の上層に浮遊せる微塵（ビヂン）および水蒸氣の、日光を受けて反照するによりて生ず。

うす-あきなひ 薄商 【名】〔商〕 取引所などにて、賣買取引の少數なること。

うす-あけ 薄緋 【名】 うすき緋の色。 茜草（アカネ）にて染めたる色。

うす-あさぎ 薄淺黃 【名】 うすき淺黃色。 芭蕉「あぢさゐや帷子時のうすあさぎ」

うす-あたり 薄當 【名】 玉突にて、手玉が先玉の面の凡そ半分以下の部分に當ること。うすだま。

うす-あばた 薄痕痘 【名】 あばたの淺きもの。うすいも。

うす-あゐ 薄藍 【名】 うすき藍色。

うす-あを 薄青 【名】 ❶ うすく青き染色。 ❷經（タテ）は白、緯（ヨコ）は青なる織色。 ❸襲（カサネ）の色目の一。表は薄青・裏は青とも、表は黃青・裏は青とも、表も裏も薄青なるものともいふ。

薄青の文濃（コモン） 【句】 經（タテ）は白く、緯（ヨコ）は青紋の地（チ）よりも濃くあらはれたる織色。

うす-あを 薄襖 【名】 精好にあらざる薄き無文（ムモン）織物の狩衣（カリギヌ）。表も裏も白色なるべしといふ。

うす-あをげ 薄青毛 【名】 みづあを（水青）に同じ。

うす-いし 臼石 【名】 ❶臼の形せる石。 ❷古墳の內部などより掘出す形、筆軸を輪切にせるがごとし。古代の裝飾品ならんといふ。うすだま。

うす-いた 薄板 【名】 ❶うすき板。 ❷織物の板物（イタモノ）の薄地なるもの。うすいたもの。（厚板に對して） ❸花瓶の下に敷きて臺とする板。うすいたもの。

うすいた-ごばう 薄板牛蒡 【名】 煠（ユ）でたる牛蒡の心（シン）を拔き、醬油と味淋とにて煮、中に魚の擂身（スリ）を詰め、胡麻油にて揚げたる食品。

うすいた-もの 薄板物 【名】 うすいた（薄板）❷に同じ。

うす-いちご 臼苺 【名】〔植〕 すのきに同じ。

うす-いも 薄痘痕 【名】 うすあばた（薄痘痕）に同じ。

うす-いろ 薄色 【名】 ❶何色にかかはらず、薄き染色。（濃色に對して） ❷經（タテ）は紫、緯（ヨコ）は白なる織色。 ❸薄紫の染色。薄き二藍の色なりともいふ。 ❹襲（カサネ）の色目の一。表は赤みを帶びたる薄縹（ウスハナダ）・裏は薄紫なるもの。 源氏「白きあはせ、うすいろのなよやかなるを重ねて」

うす-うき-ぼり 薄浮彫 【名】『伊 Basso-rilievo 英 low relief』 薄き浮彫、卽ち生地の面より少しく隆起せる彫刻。うすにくぼり。（半肉彫・高浮彫に對して）

うす-うす 薄薄 【副】 すこし。ほのかに。いくぶんか。いささか。間接に。

うず-うず 【貌】 ❶うじうじに同じ。〔俚語〕 ❷心又は體力の、おのづから勇むさま。勃勃。〔俚語〕「腕がうずうずする」 ●

うす-うた 臼歌 【名】 臼を搗（ツ）きながら、うたふ歌。 袋草紙「下女のうすうたに、これをとなふ」

うす-えふ 薄葉 【名】 次條の略。 炭俵（猿雖）「雪の日や薄葉くもる寫しもの」

うすえふ-がみ 薄葉紙 【名】 鳥子紙（トリノコガミ）の一種。薄く漉（ス）きたるもの。（厚葉・中葉などに對して）

うす-おしろい 薄白粉 【名】 ❶白粉のうすきもの。 ❷うすげしやう（薄化粧）に同じ。

うすおとし-ぞめ 薄落染 【名】 裾の模樣の邊より、漸次下方へ薄く染落せるもの。

うす-がき 薄書 【名】 うす墨にて書くこと。 重井筒「ぼてり書きか、うすがきか」

うす-がき 薄柹 【名】 次條の略。

うすがき-いろ 薄柹色 【名】 染色の一。うすき柹いろ。しぶいろ。うすがき。

うす-がすみ 薄霞 【名】 ❶うすがすむこと。薄き霞。 ❷目などの、うすく霞むこと。

うす-がすむ 薄霞む 【動四自】 うすく霞む。すこし霞む。 夫木「思ひあへずしぐれにけりな立田山うすがすみゆく秋のむら雲」

うす-がね 薄金 【名】 ❶厚さの少き金屬。又それにて作りたるもの。うすかは。「うすがねの鎧」 ❷源氏家傳の八領の鎧の一。 保元「重代相傳仕って候ふ月數・日數・源太が產衣（ウブギヌ）・八龍・澤瀉（オモダカ）・薄金・楯無（タテナシ）・膝丸と申して、八領の鎧候ふが」 太平記「義貞は、薄金といふ鎧に、鬼切・鬼丸とて、多田滿仲より傳はりたる源氏重代の太刀を、二ふり帶ばれたりけるを」

うす-かは 薄皮 【名】 ❶まく。あまかは。 ❷前條❶に同じ。 ❸次條の略。

うすかは-まんぢゆう 薄皮饅頭 【名】 饅頭の、皮の薄きもの。うすかは。

うす-がみ 薄紙【名】厚さの少き紙。（厚紙に對して）

薄紙を剝ぐ【句】病の日を追ひて少しづつ癒えゆく譬。

うす-かもゐ 薄鴨居【名】〔建〕欄間(ランマ)の上などにある薄き鴨居。

うす-き 薄黃【名】うすき黃色。

うすき 臼杵【名】〔地〕㊀日向國の舊郡の一。今は、東・西の二郡に分る。㊁豐後國北海部(キタアマベ)郡にある町。東は臼杵灣に面す。郡役所を置く。稻葉氏の舊藩地。

うす-ぎ 薄著【名】時候に相當せぬうすき著衣。（厚著に對して）芭蕉「鶯の岡でなく日は薄著かな」

伊達の薄著【句】冬の寒き時、伊達を好む人の、わざわざ薄著をすること。「伊達の素足(スアシ)」參照。

うす-ぎ 薄黃【名】㊀あさぎ（淺黃）㊀㊁に同じ。㊁襲(カサネ)の色目の一。裏も表も薄き紺色なるもの。

うすき-じやう 臼杵城【名】豐後國臼杵町にありし城。大友宗麟(ソウリン)の築きしもの。大友氏滅亡後、一旦、太田重正城主となり、關ゲ原の役後、稻葉氏の城地となりて明治維新に及べり。

うす-きたなし 薄汚し【形一】何となく汚れてあり。

うす-ぎぬ 薄衣【名】薄き著物。うすごろも。（夏服などにいふ）源氏「かの脫ぎすべしたるうすぎぬをとりて、出でたまひぬ」

うす-ぎぬ 薄帛【名】うすもの（薄物）㊀に同じ。

うす-きね 臼杵【名】板の中央に、臺にて支點を作り、二人相對して、各板の兩端を踏むにつれ、一上・一下する遊戲。

うす-きん 薄金【名】少許の金分を銀中に含有すること。

うす-ぎり 薄霧【名】うすき霧。千載「秋山のふもとをこむるうすぎりは裾野の萩のまがきなりけり」

うす-ぎりふ 薄切生【名】切生(キリフ)の矢の一種。黑き斑(フ)の色うすきもの。平家「うすきりふに鷹の羽わりあはせて矧(ハ)ぎたりけるぬための鏑をぞさしそへたる」

うす-ぎる 薄霧る【動四自】うすぎり立つ。〔古語〕風雅「霜さむきあさげの山はうすぎりてこほれる雲にもる日影かな」

うすき-わん 臼杵灣【名】〔地〕豐後國北海部(キタアマベ)郡の中部、豐後水道の西にある海灣。灣頭に臼杵町、灣內に津久見島あり。

うす-くず 薄葛【名】汁などの中に葛粉をうすく加へたるもの。

うすくず-あん 薄葛餡【名】味醂に醬油を加へて煮詰めたる汁に、水に溶きたる葛をかけたるもの。種種の料理にかけて用ふ。

うす-くちなし 薄梔子【名】染色の一。梔子と紅とにて、うすく染めたるもの。

うす-くちびる 薄脣【名】㊀脣の薄きこと。㊁言葉多き人。おしやべり。〔俚語〕

うずくまる 蹲る・踞る【動四自】うづくまる（蹲る）の訛。名義抄「蹲踞、ウズクマリヰル」

うす-ぐも 薄雲【名】㊀うすく棚引ける雲。微雲。淡雲。㊁〔動〕どぶがひの類。形は小判形をなし、長さ二寸ばかり。白き色に黑斑を帶ぶ。㊂名香の一。沈(ヂン)の一種にて、香薄く輕し。㊃平氏相傳の鎧(ヨロヒ)の一。

うすぐも 薄雲【名】〔人〕江戶吉原の妓樓信濃屋の妓。歌を能くし、又、能書の名あり。某侯これを贖(アガナ)ひて、挑(イド)めども應ぜず。遂に殺さる。萬治年間の人。

うすぐも-やき 薄雲燒【名】饂飩粉(ウドンコ)を水にてこね、餡を包みて燒上げたる食品。

うす-ぐもり 薄曇【名】雲の少したなびきて、どんよりしたる天氣。

うす-ぐもる 薄曇る【動四自】空、すこし曇る。風雅「うすぐもる靑葉の山の朝あけに降るとしもなく雨そそぐなり」

うず-ぐら 雲珠鞍【名】雲珠の飾を附けたる鞍。うず。からぐら。

うす-ぐらし 薄暗し【形一】少しく暗し。をぐらし。ほのぐらし。

うす-くりげ 薄栗毛【名】馬の毛色の一。體部の毛は栗毛に黃色を帶び、鬣(タテガミ)の黑きもの。

うす-くれなゐ 薄紅【名】㊀紅のうすき色。㊁香(カウ)の一。紅よりは薄くきやしやなるにほひを發すといふ。

うす-けしむらさき 薄滅紫【名】染色の一。黑みて薄き紫色。

うす-げしやう 薄化粧【名】あつさりと化粧すること。うすげはひ。うすおしろい。淡粧。（あつ化粧に對して）

うす-げはひ 薄粧【名】前條に同じ。猿蓑（曾良）「月鉾や稚子のひたひのうすげはひ」

うす-けぶり 薄煙・薄烟【名】うすき煙。夫木「朝日さす氷の上のうすけぶりまだ晴れやらぬ淀の川ぎし」

うす-こうばい 薄紅梅【名】㊀〔植〕紅梅の、花の色うすきもの。㊁染色の一。薄紅梅の花の色に似たるもの。㊂〔動〕うぐひ（石斑魚）に同じ。

うずこうべや【名】むすこべやの訛。

うす-こそで 薄小袖【名】綿を薄く入れたる小袖。今川大雙紙「犬追物の時は、…射る時は、寒中にも薄小袖ばかり著るなり」

うす-こはく 薄琥珀【名】地薄き琥珀織。多く婦人の洋服地に用ひらる。こはくおり（琥珀織）參照。

うす-ごほり 薄氷【名】㊀薄くはりたる氷。うすらひ。㊁模樣の一。氷に縱橫・大小不規則にひびの入りたるさまに擬したるもの。

うす-ごほる 薄氷る【動四自】薄く氷る。千載「きのふこそ秋はくれしかいつのまに岩間の水のうすごほるらん」

うす-ごろも 薄衣【名】㊀うすぎぬ（薄衣）に同じ。夫木「うす衣そめほす山の雲間よりたなびく雁や春のしたおび」㊁八橋流琴組の裏六曲の一。

うす-さいしき 薄彩色【名】繪畫の彩色に、藍・代赭(タイシヤ)などを淡く用ふること。淡彩。

うす-ざくら 薄櫻【名】㊀花の色薄き櫻。隆信集「知る人を知るとは聞けどうすざくらにほひもあらし花のにほひを」㊁襲(カサネ)の色目の一。表は白・裏は紅。

うず-ざくら 雲珠櫻【名】〔植〕櫻の一種。花は單瓣・淡紅色にして蕊(ズヰ)長く、又、花心より細き瓣を出すもの。山城國鞍馬寺に多しといふ。夫木「霞たつくらまの山のうず櫻てぶりをなしてをりぞわづらふ」

うすざくら-もえぎ 薄櫻萌黃【名】襲(カサネ)の色目の一。表は薄靑・裏は櫻色、又表は靑・裏は蘇芳(スハウ)ともいふ。春用ふ。

うずさま 烏芻沙摩・烏樞沙摩・烏素沙摩・烏芻瑟摩（梵 Ucchushman）【名】〔佛〕明王の一。火性を觀じて、道を得たる明王なれば、譯して火頭と云ひ、又、火頭金剛・穢跡金剛・不壞金剛・不淨金剛等の異稱あり。この明王の神咒(シンジユ)を唱ふる者は除病・愛敬・避難・受福・仇敵等の驗を得と云ひ、密敎にてこれを祀る。又この神に禱る時は、胎中の女子を變じて、男子になし、不淨を轉じて、淸淨ならしむる德ありとて、俗に厠(カハヤ)を司るといふ。うず。

（うずさま）

烏芻沙摩變成男子(ヘンジヤウナンシ)法【句】〔佛〕烏芻沙摩明王に禱りて、胎中の女子を男子に變ぜしむる法。太平記「烏芻沙摩變成男子の法、護摩の煙は內苑に滿ち」

うずさま-みやうわう 烏芻沙摩明王【名】〔佛〕うずさま（烏芻沙摩）に同じ。

うす-ざむし 薄寒し【形一】何となく寒し。

うす-ざや 薄鞘【名】〔商〕賣買の差金(サヤ)の少きこと。

うすし 薄し【形一】㊀厚からず。㊁濃(コ)からず。㊂かろし。（病・祿・身分などにいふ）㊃淺し。（傷・色などにいふ）㊄すくなし。あはし。乏し。㊅愛情すくなし。薄情なり。萬葉「佐保川に氷りわたれるうすらひのうすき心をわが思はなくに」㊆たやすげなり。〔古語〕萬葉「戀と云へばうすきことなりしかれどもわれは忘れじ戀ひは死ぬとも」

うす-じき 薄敷【名】〔商〕仲買人が、注文を受くる際、取引所にて定めしより少額の敷金にて、注文に應ずること。（本敷に對して）

うす-しきゐ 薄敷居【名】〔建〕欄間(ランマ)下などにある、薄き下敷居。

うす-したぢ 薄下地【名】鹽加減を薄くしたる醬油。うすじやうゆ。

うす-じほ 薄鹽【名】あまじほ（甘鹽）に同じ。

うす-じめり 薄霑【名】輕くぬるること。俳諧新選（丑二）「朝顔や夜のまの雨のうすじめり」

うす-じやうゆ 薄醬油【名】うすしたぢ（薄下地）に同じ。

うす-じり 薄知【名】うすうす事情を知ること。心中刃は氷の朔日「なまなか、武士の娘とは、うすじりに人も知る」〔俚語〕

うす-じり 臼尻【名】女の尻の大なること。

うす-しろし 薄白し【形一】色褪（サ）めて、しろぼけたり。讃岐典侍日記「尾花のうすしろくなりて」

うす-ずあを 薄素襖【名】すきずあを（透素襖）に同じ。

うす-すく【動四自】いすすくに同じ。〔古語〕源氏「みかどもり、寒げなるけはひ、うすすき出できて」

うす-すはう 薄蘇芳【名】うすき蘇芳いろ。

うずすまる【動四自】むらがり集る。〔古語〕記「には雀うずすまりゐて」

うす-ずみ 薄墨【名】㊀うすずみいろ（薄墨色）の略。㊁うすずみがみ（薄墨紙）の略。〔古語〕「うすずみの綸旨」㊂てばがき（蕎麥掻）を云ふ。〔昔の女の隱語〕

薄墨の綸旨【句】薄墨がみ即ち宿紙（スクシ）に書きて下さるる綸旨。

うすずみ-いろ 薄墨色【名】うすき墨色。うすずみ。

うすずみ-がみ 薄墨紙【名】すくし（宿紙）に同じ。

うすずみ-ごろも 薄墨衣【名】うすずみ色の衣。にび色の衣。喪服。〔古語〕源氏「かぎりあればうすずみ衣淺けれど涙ぞ袖をふちとなしける」

うすずみ-しぎ 薄墨鴫【名】〔動〕きあししぎ（黃足鴫）に同じ。

うすずみ-ぞめ 薄墨染【名】うすき墨染。鼠色。七一職人歌合「すきかへしうすずみぞめの夕暮もしらかみ色に月ぞ出でぬる」

うすずみ-の-かんぬし 薄墨の神主【名】〔人〕『後拾遺和歌集に載せられたる「うすずみに書くたまづさと見ゆるかなかすめる空にかへるかりがね」といふ歌によりて得きといふ』津守（ツモリ）國基の異名。

うす-ずり 薄摺【名】薄色に摺りたること。

うす-ぞめ 薄染【名】㊀色をうすく染むること。（濃染に對して）㊁次條の略。

うすぞめ-ごろも 薄染衣【名】うすき色にそめたる衣服。うすぞめ。萬葉「くれなゐのうすぞめごろもあさはかに相見る人に戀ふるころかも」

うすだ 臼田【名】〔地〕信濃國南佐久郡にある町。千曲（チクマ）川の西岸。いはゆる佐久平（サクダヒラ）の中心に當る。郡役所を置く。

うす-たけ 臼茸【名】〔植〕菌類の一種。山林に生じ、有毒にして、傘の上面凹みて臼狀をなし、その表面は白色、裏面は黑褐色、柄部も白し。

うす-だけ 有珠嶽【名】〔地〕膽振（イブリ）國有珠（ウス）・虻田（アブタ）の兩郡の境にある噴火山。高さ一九六三尺。

うす-だたみ 薄疊【名】春又は夏に用ふる薄き疊。うすべりの類。延喜式「薄帖、ウスダタミ」

うす-だま 臼玉【名】うすいし（臼石）㊁に同じ。

うす-だま 薄玉【名】うすあたり（薄當）に同じ。（厚玉に對して）

うす-たまご 薄卵【名】うすきたまご色。

うす-だむ 薄彩む【動四他】うすく色どる。〔古語〕

うす-だん 薄緂【名】白地に薄紫にて色どれるもの。〔古語〕榮花「色紙形に、うすだんにて、同じ人、草（サウ）に書きたまへり」

うす-たらい【形】極めて大なり。〔北海道の方言〕

うす-たれ 薄垂【名】㊀うすき垂味噌（タレミソ）。㊁能（ノウ）の道具の一。毛を薄く作れる垂（タレ）。

うすだ-ゐさい 臼田畏齋【名】〔人〕有德の士。名は可久、通稱は五郎左衞門。備前國の人。藥を煉りて市に鬻ぐ。性、施與を好み、常に衣食を節して、人の急を救へり。元祿三年歿す。年四十六。

うす-ぢ 薄地【名】㊀織物の地合の薄きこと。㊁金屬・金具の薄きもの。

うす-ちや 薄茶【名】㊀挽茶（ヒキチヤ）の量を少くして點（タ）つる茶。香氣はげし。（こい茶に對して）㊁茶色のうすきもの。うすちやいろ。

うすちや-いろ 薄茶色【名】前條㊁に同じ。

うすちや-ぢやわん 薄茶茶碗【名】薄茶を點（タ）つるに用ふる茶碗。品質・形狀などは種種あり。

うすちや-てまへ 薄茶手前【名】薄茶を出す式。茶の點（タ）て方は、濃茶と略ぼ同じ。呑み廻しと、一客ごとに點（タ）つるとあり。

うすちや-ひらでまへ 薄茶平手前【名】茶の湯の會にて、會席を饗し、中立（ナカダチ）ありて後、第一に茶を點（タ）て供すること。

うず-ちり 薄塵【名】次條の略。

うす-ちりぢ 薄塵地【名】金粉の蒔き方の稀少なる塵地。凶事の際の太刀の鞘などを蒔くに用ふ。うすちり。

うすつ 烏瑟【名】〔佛〕うしち（烏瑟）に同じ。榮花「うすつの御頭は、綠の色ふかう、眉間の光毫は、右にめぐりて」

うす-つき 臼搗【名】うすをつくこと。

うす-づき 薄月【名】うすく雲のかかりたる月。淡月。

うすつき-うち 臼搗打【名】杵（キネ）にて臼を搗くがごとくに、上より打ちおろすこと。

うす-づきよ 薄月夜【名】うすく雲のかかりたる月夜。芭蕉「おもしろう松かさ燃えようすづきよ」

うす-つく 臼搗く・舂く【動四自】㊀臼の中に物を入れて、杵（キネ）にて搗く。㊁日、山の端に入らんとす。「日、西山に舂く」

うす-っ-ぺら 薄っぺら【名】㊀きはめて薄きこと。〔俚語〕㊁極めて輕佻（ケイテウ）又は淺薄なること。〔俚語〕「うすっぺらな學問」

うす-で 薄手【名】㊀陶器などの拵（コシラ）へかたの、手薄にて、きやしやなるもの。（厚手に對して）「うすでの小皿」㊁淺き手傷。あさで。微傷。

うす-どの 臼殿【名】大嘗會（ダイジヤウヱ）の時に、天神・地祇に奉る稻を舂くところ。

うす-どり 臼取【名】餅搗の時、一杵（キネ）下すごとに、水に浸せる手にて、餅の杵に粘著するを防ぐこと、又その役の人。こねどり。

うす-とりひき 薄取引【名】〔商〕取引所にて、賣買者間に、賣買成立の機會の少きこと。

うす-どろ 薄ごろ【名】次條の略。

うす-どろどろ 薄ごろごろ【名】芝居の囃子（ハヤシ）の一。太鼓のみをかすめて打續くること。幽靈の出づる場などに行ふ。四谷怪談「この臺詞（セリフ）の內、うすどろどろにて、鼠出て」

うす-なか 薄仲【名】男女の仲らひの親密ならぬこと。

うす-なしぢ 薄梨地【名】金粉の蒔方の稀少なる梨子地。

うす-にく 薄肉【名】㊀うすき肉色。八笑人「勘平が白いから、おらあ、ちっと、うすにくにしべえ」㊁次條の略

うすにく-ぼり 薄肉彫【名】うすうきぼり（薄浮彫）に同じ。

うす-にごり 薄濁【名】㊀うすく濁りてあること、又その物。㊁うすき濁酒（ニゴリザケ）。七一職人歌合「酒つくり。まづ酒召せかし…うすにごりも候ふ」

うす-にび 薄鈍【名】うすき鈍色の織物。多くは、喪服に用ふ。うすにぶ。榮花「うすにびをぞ著たる」

うす-にぶ 薄鈍【名】前條に同じ。空穗「うすにぶの一重がさね」

うす-にほひ 薄匂【名】色を薄くぼかすこと。增鏡「女院は、香（カウ）のうすにほひの御衣（ゾオン）・香染（カウゾメ）など、たてまつれば」

うす-ぬり 薄塗【名】漆を薄く塗ること、又その塗りかたの物。

薄塗の烏帽子（エボシ）【句】漆をうすく塗りて、つやなき烏帽子。年長けたる人の所用とす。

うす-ねず 薄鼠【名】次條の略。

うす-ねずみ 薄鼠【名】うすき鼠色。うすねず。

うす-ねらひ 薄狙【名】玉突にて、うすあたりに當てんとして狙ふこと。

うす-の-き 臼木【名】〔植〕すのきを云ふ。〔東京の語〕

うす-のみ 薄鑿【名】おさへつきのみ（押突鑿）に同じ。

うす-の-み 臼實【名】〔植〕すのきに同じ。

うす-のろ 薄鈍【名】うすのろきこと、又その人。ぼんやり。うすばか。〔俚語〕

うす-のろい 薄鈍い【形】少しのろし。少しにぶし。ぼんやりなり。〔俚語〕

うす-ば 薄刃【名】庖丁の、刃の薄きもの。菜切庖丁・さしみ庖丁の類。うすばばうちやう。

うす-ば 薄羽【名】昆蟲などの、羽の薄きもの。

うす-ば 臼齒・齠【名】齒の、中の凹みて臼のごとくなりたるもの。和名「齠、宇須波、老人齒如レ臼也」

うす-ばか 薄馬鹿【名】うすのろ（薄鈍）に同じ。〔俚語〕

うすば-かげろふ 薄羽蜉蝣・蚊蜻蛉【名】〔動〕脈翅（ミャクシ）類に屬する昆蟲。翅、大にして白粉を帶び、頭上黑く、複眼は大きくして單眼なく、觸角は頭の末端にあり。短くして、棍棒狀をなす。その幼蟲は、蟻地獄（アリヂゴク）といふ。ありぢごく（蟻地獄）參照。

うす-はく 領く【動四自】うしはく（領く）に同じ。〔古語〕祝詞「あがところと、うすはきませ」

うす-はく 薄白【名】次條の略。

うす-はくし 薄白紙【名】紙質の薄き白紙。うすはく。

うすば-さいしん 薄葉細辛【名】〔植〕さいしん（細辛）に同じ。

うす-はた 薄機【名】うすもの（薄物）㊀に同じ。六帖「さほ姫のおりかけさらすうすはたの霞たちきる春の野べかな」

うす-ばた 薄端【名】花器の一種。金屬製にて、形は杯に似て、口は廣く開き、中央にしきりをつけ、花をさすに便ならしむ。

うす-はぢ 薄恥【名】聊かの恥。平家「織りのべを一切れもえぬ われらさへ薄恥をかく數に入るかな」

うす-はないろ 薄花色【名】うすき縹色（ハナダイロ）。螢草（ホタルグサ）の花の如き色。うすはなざくら。うすはなだ。

うすはな-ごころ 薄花心【名】情淺くして、移り易き心。續千載「われにのみ移りはつとも月草のうす花ごころいかがたのまん」

うすはな-ごろも 薄花衣【名】うすはな染の衣。

うす-はなざくら 薄花櫻【名】㊀花の色のうすき櫻。玉葉「山のはに入日うつろふくれなゐのうすはなざくら色ぞことなる」㊁襲（カサネ）の色目の一。表は白・裏は紅。春用ふ。㊂うすはないろ（薄花色）に同じ。

うすはな-ぞめ 薄花染【名】うす花色に染めたるもの。〔古語〕新千載「せきかねし涙のはてや紅のうすはなぞめの色に出づらん」

うす-はなだ 薄縹【名】うすはないろ（薄花色）に同じ。

うすば-ばうちやう 薄刃庖丁【名】うすば（薄刃）に同じ。

うす-ばん 薄盤【名】臺の附きたる膳の緣の、常のより五分ほど低きもの。昔、身分よき家の女の用ひしもの。

うすば-よこばへ 薄羽よこばへ【名】〔動〕浮塵（ウンカ）の一種。梨・苺（イチゴ）などを初め、すべての草木を侵す害蟲。

うす-ばり 薄張【名】賭博（トバク）の一種。呑屋を相手に、薄敷（ウスジキ）にて勝負をなすもの。

うすひ 碓氷【名】〔地〕㊀うすひたうげ（碓氷峠）に同じ。〔碓日〕㊁上野國十一郡の一。

うすひ-がは 碓氷川【名】〔地〕上野國碓氷峠より發し、高崎市の西に至りて烏川に合する川。流程約十里。謠曲（鉢木）「今ぞうき世を離れ坂、墨の衣のうす（薄・碓）ひがは、下す筏の板鼻や」

うすひき-うた 臼挽歌【名】㊀うすうた（臼歌）に同じ。立志「短册はうすひき歌かこごめ花」㊁芝居の囃子（ハヤシ）に用ふる唄の一種。

うす-ひげ 薄髭【名】まばらなる髭。疎髯。

うすひ-たうげ 碓氷峠・碓日峠【名】〔地〕上野國碓氷郡と信濃國北佐久郡との交界にある山。高さ三一三五尺。中仙道の險路。新・舊の二道あり。明治二十六年アプト式鐵道を通ず。日本武尊が東征の歸途、この山を過ぎて、橘姫を追慕せられし著名なる史跡なり。山中に紅葉多し。古名、碓日の坂。

うす-びたひ 薄額【名】冠の一種。緣（フチ）を低く造りたる冠。少年又は賤官の人用ひたり。（あつ額に對して）

うすひ-の-さか 碓氷阪・碓日坂【名】〔地〕うすひたうげ（碓氷峠）に同じ。萬葉「ひなぐもりうすひのさかを越えしだに いもが戀しく忘らえぬかも」

うすひ-の-せき 碓氷關・碓日關【名】〔地〕昔、上野國碓氷峠の南麓（今の臼井町）にありし關。中仙道の通路に當りしもの。

うす-ひはだ 薄檜皮【名】檜皮にてうすく葺（フ）くこと、又その家。太平記「さしも氣高かりしうすひはだの屋形の、三つ葉・四つ葉に造り並べて」

うす-ふし 薄節【名】箭の節陰（フシカゲ）を漆にて薄く塗りたるもの。

うす-ふたあゐ 薄二藍【名】薄き二藍の色。枕「うす二藍・あをにぶの指貫（サシヌキ）」

うす-ふぢいろ 薄藤色【名】染色の一。うすき藤色。

うすべ 護田鳥【名】〔動〕おすめどり（護田鳥）に同じ。

うす-べう 護田鳥尾【名】『うすべの羽に似たるよりいふ。尾は借字にて、うはふ（斑）の音便』鷲の羽の、薄黑き斑（フ）あるもの。矢羽に用ふ。うすべを。平家「二十四さいたるうすべうの矢おひ」

うすべ-どり 臼邊鳥【名】〔動〕にはとり（鷄）に同じ。〔古語〕下學集「鷄、日本云、木綿附鳥、或云二臼邊鳥一」

うす-べに 薄紅【名】うすき紅。淡紅色。

うす-べり 薄緣【名】疊表の、心（シン）なくして、粗なる裏を附け、緣を取りたるもの。猿蓑（尙白）「田舍間のうすべり寒し菊の宿」

うすべ-を 護田鳥尾【名】うすべう（護田鳥尾）に同じ。

うすま【名】〔動〕かひこ（蠶）を云ふ。〔越後國の方言〕

うす-まゆ 薄繭・薄皮繭【名】繭層（ケンソウ）の極めて薄き繭。形狀整はず、又その蛹（サナギ）は健全ならずして、蛆（ウジ）を生ずるもあり。

うずまる 蹲る・踞る【動四自】うづまる（蹲る）の轉訛。〔古語〕字鏡集「踞、ウズマル、ウズクマル」

うす-み 薄身【名】魚類の腹部の、肉の薄きところ。

うす-みそ 薄味噌【名】薄く融（ト）きたる味噌汁。

うす-みどり 薄綠【名】㊀薄き綠色。あさみどり。㊁ひげきり（鬚切）を見よ。

うす-みの 薄美濃【名】うすく漉（ス）きたる美濃紙。

うず-むし 蛆蟲【名】うじむし（蛆）の轉。〔俚語〕矢口渡「やあ、卑怯至極のうずむしめら、目に物見せん」

うす-むらさき 薄紫【名】うすき紫いろ。わかむらさき。うすいろ。（濃紫に對して）源氏「たづぬるにはるけき野邊の露ならばうすむらさきやかごとならまし」

うすむらさき-をどし 薄紫縅【名】鎧の、薄紫の色に縅したるもの。あさむらさきをどし。

うす-め 薄目【名】薄き程あひ。うすかげん。大根をうすめに切る

うす-め 碓女・舂女・雀女【名】上古、祭祀を行ふ時に供ふる米を舂きて精（シラ）ぐることを掌りし女。〔古語〕記「雀を碓女（ウスメ）とし、雉（キギシ）を哭女（ナキメ）とし」

うすめ 護田鳥【名】〔動〕うすめどり（護田鳥）に同じ。

うずめ-どり 護田鳥【名】〔動〕おすめどり（護田鳥）に同じ。

うずめ-の-みこと 鈿女命【名】あめのうずめのみこと（天鈿女命）を見よ。

うずめ-の-めん 鈿女面【名】おかめのめん。阿多福の面。

うす-もえぎ 薄萠黄【名】㊀うすき萠黄色。㊁襲（カサネ）の色目の一。表は薄青・裏は表よりは少し濃き薄青。

うす-もとで 薄元手【名】わづかの資本金。天の網島「ちり紙屋めが、漆こしほどなうすもとで」

うす-もの 薄物【名】㊀紗（シヤ）・絽の如き薄き織物。經（タテ）・緯（ヨコ）の絲は細くして、地は薄く輕きもの。うすはた。うすぎぬ。〔羅〕源氏「うすものの直衣（ナホシ）」蕪村「うすものに遮る蓮の匂かな」㊁芝居の新作の淨瑠璃又は唄（ウタ）の摺物（スリモノ）。（これに白（セリフ）を加へて增訂せるものは即ち青表紙）〔徳川時代の江戸の劇場の語〕

うす-もみぢ 薄紅葉【名】薄き色のもみぢ。金葉「もずのゐるはじの立枝のうすもみぢ誰れわが宿のものと見るらん」太祇「町庭の心に足るやうす紅葉」

うす-もやう 薄模樣【名】うす紫に染めたる模樣。

うす-もり 薄盛【名】料理にて、まきずるめを盛りたるもの。

うす-やう 薄樣【名】㊀うすやうがみ（薄樣紙）の略。㊁古は雁皮を、又今は三椏（ミツマタ）を原料としての薄く漉（ス）きたる紙。すきうつしに用ふるに適す。源氏「いといたうなよびたるうすやうに、いと美しげに書きたまへり」㊂襲（カサネ）の色目の一。紫いろの薄樣といへば、紫に白を重ねたるものなる類。

うすやう-がみ 薄樣紙【名】うすえふがみ（薄葉紙）に同じ。

うす-やくそく 薄約束【名】かりの約束。深からぬ約束。

うす-やなぎ 薄柳【名】襲（カサネ）の色目の一。薄萠黄の白ばみたるもの。凶服に用ふ。

うす-ゆき 薄雪【名】㊀少し降りたる雪。微雪。風雅「ささの葉のうへばかりにはふりおけど道もかくれぬ野べのうすゆき」㊁饂飩粉（ウドンコ）に鷄卵を交ぜて芳しく燒き、砂糖をかけたる干菓子（ヒグワシ）。㊂うすゆきこんぶ（薄雪昆布）の略。㊃もなか（最中）を云ふ。㊄八橋流琴組表六曲の一。〔飛驒國の方言〕㊅〔書〕しんうすゆきものがたり（新薄雪物語）の略。

うすゆき-こんぶ 薄雪昆布【名】昆布を甚だ薄くけづりたるもの。大阪の名產にて、色白く、京・阪地方にて、多く吸物（スヒモノ）に用ふ。うすゆき。

うすゆき-さう 薄雪草【名】〔植〕菊料に屬する多年生の草。山地に自生す。高さ一尺ばかり、葉は披針形（ヒシンケイ）にて、裏に毛茸（マウジヨウ）あり、互生す。秋、灰色の花、小頭花序をなして開く。

うすゆき-ものがたり 薄雪物語【名】〔書〕園部衞門と薄雪姬と贈答せし艷書を主とせるもの。二卷。寬永九年の版行。

うす-ら 薄ら【貌】次條に同じ。〔古語〕

うす-らか 薄らか【貌】薄きさま。あはきさま。あっさり。うすら。淡泊。〔古語〕源氏「にび色のさしぬきうすらかに、ころもがへして」

うすらぐ 薄らぐ【動四自】㊀薄くなる。淡くなる。少くなる。うすろぐ。うする。源氏「今も、大かたの覺えのうすらぎたまふことはなけれど」㊁衰ふ。輕くなる。「暑氣うすらぐ」

うすら-ごろも 薄衣【名】うすごろも（薄衣）に同じ。〔古語〕好忠百首「蟬の羽のうすらごろもになりゆくになど打ちとけぬ山ほととぎす」

うすら-ひ 薄氷【名】うすごほり（薄氷）に同じ。〔古語〕齋宮女御集「うすらひにとぢたる冬の鶯はおとなふ春の風をこそまて」

うすらひ-の 薄氷の【枕】同じ音を含める緣より、うすき（薄き）にかけていふ。萬葉「さほ川にこほりわたれるうすらひのうすき心をわが思はなくに」

うする 薄る【動下二自】薄くなる。淺くなる。かろくなる。うすらぐ。好忠集「けをさむみさえゆく冬の夜もすがらめだにもかはす衣うすれて」

うすろがす 薄ろがす【動四他】薄ろぐやうにす。

うすろぐ 薄ろぐ【動四自】うすらぐ（薄らぐ）に同じ。

うす-わた 薄綿【名】衣服に綿をうすく入るること、又その衣服。

うす-わたいれ 薄綿入【名】うすく綿を入れたる衣服。

うす-わらひ 薄笑【名】うすわらふこと。

うす-わらふ 薄笑ふ【動四自】少し笑ふ。ほほゑむ。ほくそゑむ。うそゑむ。宇治「門部（カドベ）・府生（フシヤウ）、うすわらひて」

うすゐ 碓井【名】〔地〕うすひ（碓氷）に同じ。俳諧古選（敗香）「雪どけや碓井を越ゆる馬のやせ」

うすゐ 臼井【名】㊀〔地〕上野國碓氷（ウスヒ）郡にある町。碓氷峠の南麓。上古は碓氷の關置かれたり。うすひのせき（碓氷關）參照。㊁〔地〕下總國印旛（インバ）郡にある町。印旛沼に臨む。西北の山上に臼井氏の城址あり。うすゐじやう（臼井城）參照。

う-すゐ 雨水【名】㊀雨のために溜る水。㊁二十四節の一。陰曆の正月中旬、陽曆の二月十八日に當る。

うず-ゐ 踞【名】うづゐ（踞）の轉訛。〔古語〕字鏡集「夷、ウズヰ」

うすゐ-じやう 臼井城【名】下總國印旛（インバ）郡臼井町に在りし城。千葉常康（臼井氏を稱す）始めてこの地に據り、一族相繼いで德川氏の初に至り、天正十九年、酒井家次封ぜられ、慶長九年、上野國高崎に移るに及びて廢城となる。

うす-ゑんざ 薄圓座【名】うすき圓座。（厚圓座に對して）

うす-をとこ 臼男【名】玄米（クロゴメ）を搗（ツ）きしらぐる男。こめつきをとこ。こめつき。うすのもの。

う-せい 迂生【代】第一人稱の謙稱。小生。迂拙。野生。陋生。（多く手紙に用ふ）

う-せい 烏聲【名】からすのこゑ。

う-せい 雨聲【名】あめのおと。あまおと。

う-せうし 右少史【名】せうし（少史）を見よ。

う-せうしやう 右少將【名】右近衞府の少將。右近衞の少將。

う-せうじよう 右少尉【名】せうじよう（少尉）を見よ。

うせ-うど 失人【名】うせびと（失人）の音便。〔古語〕

う-せうべん 右少辨【名】べん（辨）を見よ。

う-せき 禹跡【名】〔地〕『禹が洪水を治め、九州を開きたる跡の義』支那の異稱。禹域。

うせ-ちやう 失帳【名】失踪（シツソウ）者の姓名を書きつけおく帳簿。〔德川時代の語〕葛原詩話「今、町の內にて、一人かけおちする時は、その日、すぐに知ることにて、或は追手を遣すか、或は失帳に附くるか、なんでも、すぐに知るるなり」

うせつ 宇出津【名】〔地〕能登國鳳至（フゲシ）郡にある町。能登內海に臨む。

う-せつ 雨雪【名】㊀雨と雪と。㊁雪の降ること。

う-せつ 迂拙【名】迂闊にして、世事に拙きこと。

う-せつ 迂拙【代】うせい（迂生）に同じ。

うせつ-りやう 雨雪量【名】うりやう（雨量）に同じ。

うせ-びと 失人【名】逃失せたる人。逃亡者。失踪人。うせうど。

うせまっかい-さま-に 【副】言葉巧に。はなし上手に。口さきうまく。〔德川時代の大阪の語〕曾根崎心中「德兵衞がうせまっかいさまに云ふとても、必ず誠にしやるなや」

う-せん 雨線【名】〔理〕『英Rainbands』日光のスペクトル中にあらはるるD線の赤側に於ける黑線。吸收線の一にして、水蒸氣によりて生ず。

うぜん 羽前【名】〔地〕東山道十三國の一。昔の出羽（デハ）國の南部にして、明治元年、羽後國と共に分立せり。山形・米澤の二市と東村山・西村山・北村山・東田川・西田川・東置賜（ヒガシオイタマ）・西置賜・南置賜・最上（モガミ）の十郡とに分る。全國、山形縣の管轄に屬す。

羽前の三山【句】〔地〕羽前國にある月山（グワッサン）・羽黑山（ハグロサン）・湯殿山（ユドノサン）の三つの山。

うせ-もの 失物【名】失せたる物。無くなりたる物。

うせる 齀る【動下一他】獸が、鼻にて物を動かす。〔古語〕和名「說文云、齀、宇世留、以レ鼻動レ物也」

うせる 失せる【動下一自】きたる（來る）・さる（去る）・ゆく（行く）・ゐる（居る）などを罵りていふ語。うしやあがる。〔俚語〕春花五大力「ぬかす事があるなら、ここへ來て、きりきりぬかせ。早くここへうせろ」浮世風呂「やい。ここへ來い。對手になる。うせぬかおのれ」

うそ 鷽・拙老姿【名】〔動〕㊀燕雀（エンジヤク）類に屬する小鳥。雀より稍大きく、頭は深黑にして、兩頰より頸にかけて深紅なり。嘴は短くして黑く、腹・背・脇は、共に灰青にして赤味を帶ぶ。秋來りて冬去る。人家に畜ひて聲を賞す。俗に、雄を照鷽（テリウソ）、雌を雨鷽（アメウソ）といふ。うそどり。うそひめ。山家「ももぞの花にまがへるてりうそのむれたつをりは散る心地する」㊁うそかへ（鷽替）を見よ。

（うそ）

鷽の琴【句】鷽の鳴くさまの、手にて琴を彈くがごとくなること。和漢三才圖會「鷽鳴時、隨レ聲兩脚互擧、如二彈レ琴動レ手。故、俚俗稱二宇曾彈レ琴」

うそ 獺【名】〔動〕をそ（獺）に同じ。

うそ 嘯【名】口をつぼめて聲を出すこと。うそぶくこと。くちぶえ。竹取「うそを吹き、扇を鳴らし」辨內侍「辨は、行幸のとしに、うそを吹く役をつとめはべりし」

うそ 噓・啌【名】㊀實ならぬ言。いつはりごと。うそごと。そらごと。虛言。㊁まち

がひ。あやまり。

嘘から出た誠【句】初は、いつはりて親切らしく言ひしことが、終には、みづからその言葉に制せられて、その親切を實行するに至る。〔諺語〕

嘘こ坊主頭（バウズアタマ）【句】㊀『言はぬと、結（ユ）はぬと、音の似たるよりいふ』嘘を言はぬと云ふ意。〔俚語〕㊁いつはりて言ひしことが、偶然に事實となること。〔諺語〕

嘘の皮【句】『かは（皮）を見よ』全々の虚言。〔俚語〕小町踊「戀せじと御禊（ミソギ）させしやうそのかは」

嘘の皮の八百【句】うそはっぴやく（嘘八百）に同じ。〔俚語〕

嘘の八百【句】前條に同じ。堀川狂歌集「菊水を汲みし彭祖が長いきもまことにはあらじ嘘の八百」

嘘の世の中【句】世の中には眞面目なる物事は却て少なきものなりとの意。〔諺語〕

嘘も方便【句】方便のために、時としては嘘をもいはねばならず。〔諺語〕

う-そ 迂疎【名】うくわつ（迂闊）に同じ。

うそ 薄【接頭】うすく・少し・やや等の意。「うそよごる」「うそさびしい」「うそ寒し」「うそ恥かし」「うそ物さみし」

うそ-いひ 嘘言【名】うそつき（嘘吐）に同じ。

う-そう 迂叟【代】老年の男子の用ふる第一人稱の謙稱。

うそ-うそ【副】うろうろ。いそいそ。きよろきよろ。〔俚語〕丹波與作「うそうそと覗きまはれど」

うそ-がたり 嘘語【名】うそばなし（嘘話）に同じ。

うそ-かへ 鷽替【名】『うそを嘘（ソウ）の義に解し、從來の凶事みな嘘となりて、吉事に取替へんとの意にて行ふなりとぞ』筑前國太宰府（ダザイフ）の天満宮にて、每年一月行ふ神事。參詣の群衆、柳の木の枝などにて鷽の形に造りたるものを袖中に隱して、神前にて互に取換へて、その年の吉兆を招くこと。その鷽は神社より出し、中に黄金製のもの一個ありとて、これを得る者は最上の吉にして、好運の兆とせり。東京・龜井戸の天神にても、文政の頃より始めたり。太宰府のは一月七日の夜に行はれ、龜井戸のは一月二十四・五の兩日に行はる。

(鷽替の鷽)

う-そく 雨足【名】うきやく（雨脚）に同じ。

う-そく 右側【名】右の方。みぎがは。（左側に對して）

う-ぞく 羽屬【名】羽毛ある動物の屬、即ち鳥類。

うそ-ぐらい 後暗い【形】うしろぐらし（後暗し）に同じ。〔俚語〕

うそくる【動下二自】狡猾なり。〔古語〕名義抄「點、ウソクレタリ」

う-そくゑい 右側衛【名】〔兵〕そくゑい（側衞）を見よ。

うそ-ごと 嘘言【名】そらごと。いつはりごと。虛言。

うそ-さびし 薄寂し【形二】何となくさびし。うたた寂し。うそものさみし。手習鑑「うそさびしい、不自由なおすまひ」

うそ-ざむ【名】何となく寒きこと。すこし寒きこと。

うそ-さむし 薄寒し【形一】何となく寒し。すこし寒し。（秋の末・冬の初めなどの寒さにいふ）几董「うそさむう畫めしくひぬ煤はらひ」

うそ-じ 嘘字【名】まちがひの文字。正しからぬ字。

うそ-つき 嘘吐【名】うそをいふ人。うそいひ。

うそ-っ-こ 嘘っこ【名】うそごと（嘘言）の訛。〔小供の語〕

うそ-っ-ぱち 嘘話【名】次條の訛。〔東京の俚語〕「そんならうそっぱちをいふ」

うそ-っ-ぱなし 嘘話【名】うそばなし（嘘話）の訛。

うそ-どり 鷽鳥【名】〔動〕うそ（鷽）に同じ。

うそ-なげき 嘯歎【名】うそぶき歎くこと。小聲にて歎くこと。名義抄「嗅、咲嗅、エナキ。東人云、ウソナゲキ」

うそ-ねむたし 薄眠たし【形一】何となくねむたし。うつらねむし。

うそ-はづかし 薄恥かし【形二】何となくはづかし。根南志具佐「うそはづかしくも心をくだく戀びとは」

うそ-はっぴやく 嘘八百【名】多くの嘘言。あまたのいつはりごと。嘘の八百。嘘の皮八百。〔俚語〕

うそ-ばなし 嘘話【名】いつはりなる話。眞實ならぬ物語。うそがたり。うそっぱち。うそっぱなし。うそものがたり。

うそ-ひめ 鷽姫【名】〔動〕うそ（鷽）に同じ。

うそぶ 嘯ぶ【動四自】うそむ（嘯む）に同じ。〔古語〕字鏡「啾啾、宇曾布」

うそ-ぶき 嘯【名】㊀うそぶくこと。㊁うそぶける姿をなせる能（ノウ）の假面（メン）。蚊相撲（カスマヒ）の蚊の精（セイ）などに用ふ。〔空吹〕狂言（松脂）「うそぶきの面」

うそ-ぶく 嘯く【動四自】㊀『うそ（嘯）を見よ』口をつぼめて聲を出す。うそむく。うそぶ。うそむ。源氏「昔おぼしいでて、なまめかしううそぶきながめたまふ」㊁長く引きて、烈しき聲を出す。吼（ホ）ゆ。（虎などにいふ）

うそ-ぶく 嘯く【動四他】詩歌を吟ず。

うぞ-ふるふ うぞ振ふ【動四自】「怖氣（オゾケ）を振ふ」に同じ。〔徳川時代の語〕女殺油地獄「踏みけしてくれると、草履を腰に、腕まくり、客は顛倒、花車も下女もうろたへ、小菊をかこうて、うぞふるふ」

うそむ 嘯む【動四自】うそぶく（嘯く）に同じ。〔古語〕紀「鳴嘯、ナキウソム」

うそ-むく 嘯く【動四自】うそぶく（嘯く）に同じ。〔古語〕

うぞ-もぞ【名】うざうむざう（有象無象）に同じ。

うそ-ものがたり 嘘物語【名】うそばなし（嘘話）に同じ。

うそ-ものさみし 薄物寂し【形二】うそさびし（薄寂し）に同じ。根南志具佐「うそものさみしき三途川（サンヅノカハ）のほとり」

うそ-やぐ【動四自】「鼻うそやぐ」を見よ。

うそ-よごる 薄汚る【動下二自】何となくよごる。うすぎたなくなる。御伽名代紙衣「うそよごれたる顔より、涙をながし」

うそり-やま 宇曾利山【名】〔地〕陸奧國恐山（オソレヤマ）の別稱。

うそ-ゑむ 薄笑む【動四自】うすわらふ（薄笑ふ）に同じ。

うた 歌【名】㊀うたふこと、又その言葉。㊁うるはしき詞を、語調を整へて綴り、人情を舒（ノ）べ景物を寫して、人の耳目を喜ばしむるもの。㊂わか（和歌）に同じ。㊃うたひもの（謠物）に同じ。〔唄〕㊄謠曲の曲節の、道行などの文句をうたふ時のもの。㊅芝居の囃子（ハヤシ）の一。㊆うたうたひ（歌謠）㊁の略。〔唄〕㊇淨瑠璃の一部、唄（タウ）の節を插みたるところ。

歌にばかり唄ふ【句】常に口にはすれども、實行するに至らず。後撰夷曲集「歌にばかり唄うて思ひつもりぬる戀の病の名をやらうさい」

歌の會【句】人人寄り集りて和歌（主に短歌）を詠（ヨ）むこと。うたくわい。

歌の臺【句】歌の詠草（エイサウ）を載する臺。

歌の柱【句】歌を書きつけたる柱。歌を柱に書くこと。

歌の林【句】多く集りてある歌。

歌の間（マ）【句】歌を詠（ヨ）むところと定められたる室。

歌の筵（ムシロ）【句】歌の會の席。

戀の歌【句】「貧の盜に戀の歌」を見よ。

うた【名】さかもり。うたげ。酒宴。〔古語〕紀「この御酒（ミキ）の御酒の、あやにうたたぬし、ささ」

うだ 宇陀【名】〔地〕大和國十郡の一。上古の「菟田縣（ウダノアガタ）」又「猛田（タケダ）縣」の地。郡役所を松山町に置く。

うた-あはせ 歌合【名】歌人あつまりて、左右に分れ、そのよみ歌を合せて、判者に優劣の沙汰を乞ひ、勝負をあらそふ會。古、歌のつがひの數によりて、百番歌合・二百五十番歌合などあり。うたくらべ。歌論議。

うたあはせ-ぶるゐ 歌合部類【名】〔書〕天德年間より永祿年間に至るまでに、朝廷及び諸家にて催されし歌合百五十餘種を集めたるもの。撰者不詳。

うた-あらそひ 歌爭【名】能（ノウ）の狂言の一。

う-たい 有體【名】〔佛〕實體のある物。（無體に對して）

う-だい 有待【名】〔佛〕人の身の、食物・衣服等の資を得て立つものなること、即ち凡夫の境涯。保元「有待の御身は、貴賤も、高卑も、異なることなく」太平記「有待の身、思ふに任せぬ習ひにて、病に犯され、早世仕ること候ひなば」

有待の依身（エシ）【句】〔佛〕『えしん（依身）を見よ』種種の資緣（シエ）を假りて立つ身體。凡夫のからだ。

う-だい 宇内【名】天地四方の內。あめがした。あめのした。天下。

う-だいし 右大史【名】たいし（大史）を見よ。

う-だいじん 右大臣【名】左大臣の次に位して、共に太政官の長官たりしもの。左大臣の關白たる時又は故障ある時には、代りて、政務を總攬（ソウラン）するを例とす。右相。右揆。右相國。右府。右相府。右丞相。

う-だいしやう 右大將【名】右近衞府の長官。右近衞の大將。

うだいしやう-かまくらじっき 右大將鎌倉實記【名】源義經が兄賴朝に疎（トウ）んぜられし事、及び佐藤信忠の忠死せし事を仕組める脚本。竹田出雲の作。

う-だいじよう 右大丞【名】うだいべん（右大辨）の唐名。

う-だいじよう 右大尉【名】だいじよう（大尉）を見よ。

うだい-てんぺん 有待轉變【名】〔佛〕有待の身は轉變すべきものなること。

うだい-ふぢやう 有待不定【名】〔佛〕有待の身は無常のものなること。盛衰記「有待不定の玉體」

う-だいべん 右大辨【名】べん（辨）を見よ。

う-だいまつ 鵜松明【名】樺（カバ）の木の皮にて作りたる松明。雨夜に鵜を使ひて、魚を取るとき用ふ。〔信濃國の方言〕

うだ-いも 宇陀芋【名】〔植〕『大和國宇陀より產するもの有名なるよりいふ』つくねいも（佛掌諸）に同じ。

うたうげ-たき 宇嶺瀑【名】〔地〕駿河國志太（ダシ）郡瀬月谷（ハセト）村にある瀑。高さ二十丈、幅三間。

うだ-うだ 【貌】ぐだぐだを云ふ。〔京都・大阪の語〕

うた-うたし 轉轉し【形二】うたたし。いよいよ甚し。うたてし。一說に、萬葉集に「于稻于稻志」と記せるは「干稻干稻志（ヒネシヒネシ）」の誤寫なるべしともいへり。〔古語〕萬葉「あらき田のししだの稻を倉につみてあならうたうたし我が戀ふらくは」

うた-うたひ 歌謠【名】㊀歌をうたふ人。歌を巧にうたふ人。㊁唄をうたふことのみを業とする芝居の囃子方（ハヤシカタ）。うた。〔唄謠〕㊂〔動〕いしぶし（石伏）に同じ。

う-たう-ぶん-ぶ 禹湯文武【名】〔人〕夏（カ）の禹王と、殷（イン）の湯王と、周の文王および武王と。ともに古の明君なり。

うた-うら 歌占【名】㊀歌又は謠物（ウタヒモノ）にて吉凶を占ふこと、又、占ひたることを歌にて言ひあらはすこと。〔古語〕十訓「心中の所願うらなへとありければ、うたうらに」㊁謠曲の一。伊勢の神職なる度會（ワタラヒ）の何がしといふ者、その子の行方を失ひて、男神子（ヲガンノコ）となり、所所にさすらひしが、遂に加賀國にてめぐりあふ事を作れるもの。

うだえんな 郞陀怨那【名】〔人〕うでん（優塡）に同じ。

うた-おくり 唄送・歌送【名】淨瑠璃の節の一。おくり（送）參照。

うた-がき 歌垣【名】『垣は人の立ち並べるさまの譬。ひとがき（人垣）參照』古、若き男女相集りて、歌を詠（ヨ）みかはし、また拍子（ヒヤウシ）をとりて、歌をうたひ、互に舞踏してあそびしこと。かがひ。〔古語〕記「平群（ヘグリ）のおみの祖（オヤ）、名はしびのおみ、うたがきに立ちて」

うたか-ぐさ 鵜鷹草【名】〔植〕とりあししようま（鳥足升麻）に同じ。

うた-がしら 歌頭【名】歌舞音樂の時、發聲する者。〔古語〕續紀「歌頭、ウタガシラ」

うた-かた 泡沫【名】㊀水の上に立つあわ。〔古語〕方丈「よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて」㊁はかなきことの譬。玉葉「流れゆく水に玉なすうたかたの哀れあだなるこの世なりけり」

うた-かた 【副】暫くの間。〔古語〕後撰「おもひ川たえずながるる水の泡のうたかた人にあはできえめや」

うたかた-ぐさ 泡沫草【名】〔植〕㊀しやうぶ（菖蒲）の異名。〔古語〕㊁とりのあしぐさ（鳥足草）の異名。

うたかた-の 泡沫の【枕】うたかたは、消えやすきものなるより、きゆ（消ゆ）にかけていふ。後撰「ふりやめばあとだに見えぬうたかたのきえてはかなき世をたのむかな」

うたかた-びと 泡沫人【名】人の命の常なくして、水の泡の如くに消えやすきこと、又その人。謠曲（夕顏）「いかにせんとかおもひ河、うたかたびとは息絶えて、歸らぬ水の泡とのみ散りはてし夕顏の」

うたかた-も 【副】暫くの間も。〔古語〕萬葉「あまざかるひなにあるわれをうたかたもひもときさけて思ほすらめや」

うた-がたり 歌語・歌談【名】㊀歌につきての物語。うたものがたり。源氏「をかしからぬうたがたりをするも」㊁歌に關する隨筆。うたものがたり。歌話（カワ）。

うたがは-くにさだ 歌川國貞【名】〔人〕うたがはとよくに（歌川豐國）㊁（ロ）を見よ。

うたがは-くにしげ 歌川國重【名】〔人〕浮世繪師。通稱は源藏。初代歌川豐國の門人。二世豐國の未亡人と婚して、二世豐國と稱せしが、同門輩家の反對ありて、國重に復す。天保六年歿す。年五十八。

うたがは-くにまさ 歌川國政【名】〔人〕浮世繪師。通稱は甚助、一壽齋と號す。元會津の染工。江戸に出でて、倉橋豐國の門に學び、俳優の肖像に妙を得たり。文化七年歿す。年三十八。

うたがは-くにまる 歌川國丸【名】〔人〕浮世繪師。通稱は文治。一圓齋・五彩樓・飜蝶庵等の號あり。江戸小田原町の質屋の子。初代歌川豐國の門に學び、俳優の似顏繪に長ず。又、俳諧を作り、俳號を飜蝶庵龍尾と云へり。文政年間に歿す。年三十餘。

うたがは-くにやす 歌川國安【名】〔人〕浮世繪師。通稱は安五郞。一鳳齋と號す。江戸の人。初代豐國の門人。俳優の似顏畫に名あり。天保七年歿す。年三十餘。

うたがは-くによし 歌川國芳【名】〔人〕浮世繪師。通稱は井草孫三郞。朝櫻樓、又一勇齋と號す。初代豐國の門人。錦繪の名手と稱せらる。文久元年歿す。年六十五。

うだがは-げんずゐ 宇田川玄隨【名】〔人〕津山侯の侍醫兼侍讀。名は晉、字は明卿、槐園と號す。蘭學を學び、西說內科選要・東西病考等の譯著あり。寛政九年歿す。年四十三。

うたがはし 疑はし【形二】疑ふべくあり。いぶかし。あやし。不審なり。うたつがはし。伊勢「かぎりなく嬉しく、又うたがはしかりければ」

うたがは-とよくに 歌川豐國【名】〔人〕浮世繪師。㊀初代。江戸の人。通稱倉橋熊吉、一陽齋と號す。歌川豐春・英一蝶・玉山九德齋等の畫法を學び、後、一家をなし、最も風俗畫の妙を得。役者の似顏はこの人より始まれりといふ。文政八年歿す。年五十七。㊁二代。（イ）初代の養子。通稱は源藏。一龍齋と號す。後、家を出で、名を改めて歌川豐重といふ。（ロ）通稱は角田庄五郞。初名國貞。一雄齋・五渡亭・香蝶棲・桃樹園の數號あり。初代の高弟、實は三代。田舍源氏その他の草雙紙の插畫を作りて、名聲あり。元治元年歿す。年七十九。㊂三代。實は四代。初名は國貞。二代の門人。明治十三年歿す。

うたがは-とよはる 歌川豐春【名】〔人〕浮世繪師。歌川家の祖。名は昌樹、通稱は新右衞門、一龍齋と號す。寛政年間、日光廟の修繕に際し、狩野家に從ひて、町繪師の長となり、彩色に從事す。文化十一年歿す。年八十。

うたがは-とよひろ 歌川豐廣【名】〔人〕浮世繪師。通稱は藤次郞、一柳齋と號す。歌川豐春の門人にて、別に一派をなす。長編の浮世草紙の插畫は、この人に始まる。文化十二年歿す。年六十五。

うたがは-は 歌川派【名】〔美〕浮世繪の流派の一。寛政頃、歌川豐春に起り、その門人、豐廣・豐國の對峙を見るに至り、豐廣の一流は、漢畫の手法を交へて、多く讀本（ヨミホン）の插畫を描き、豐國の一流は、似顏繪と嬌艷なる婦人風俗とを描きたり。えどにしきゑ（江戸錦繪）參照

うたがは-ひろしげ 歌川廣重【名】〔人〕あんどうひろしげ（安藤廣重）に同じ。

うだがは-ようあん 宇田川榕庵【名】〔人〕津山侯の侍醫。名は榕。江戸の人。能く蘭書に通じ、幕命を受けて洋書を譯し、又、植物啓源・舍密（セイミ）開宗を著す。本邦化學者の始祖。弘化三年歿す。年四十九。

うたがひ 疑【名】疑ふこと。戀におもふこと。不審。疑念。うたぐり。萬葉「大海の底をふかめてむすびてし妹がこころはうたがひもなし」

うた-がひ 歌貝【名】蛤（ハマグリ）の貝の內面に歌を書き、歌ガルタの如くに、取りて遊ぶもの。後には、將棊（シヤウギ）の駒の形にせる厚紙にて作り、金銀の箔などを押したるものを、これに代へたり。

うたがひ-ぶかし 疑深し【形一】疑ふこころ多し。うたぐりぶかし。

うたがふ 疑ふ【動四他】心迷ふ。さはあらじと思ふ。不審に思ふ。思ひたゆたふ。いぶかる。あやしむ。うたぐる。字鏡「嫌、宇太加布」

うたがふ-らく-は 疑ふらくは【副】疑ふには。うたがふことには。おそらくは。或は。

うた-がまし 歌がまし【形二】相當の歌らし。枕「さすがに歌がましく、我れはと思へるさまに、最初に詠み出で侍らんなん亡き人のためいとほしく侍る」

うだ-がみ 宇陀紙・宇田紙【名】くずがみ（國栖紙）に同じ。

うた-がりた 歌骨牌【名】次條に同じ。

うた-がるた 歌骨牌【名】長方形の厚紙の札に、數多の歌の上の句と下の句とを分ちて書きたるもの。これを弄ぶに、散（チラシ）と組分（クミワケ）との二法あり。前者は、多人數相集り、下の句を記したる方を撒（マ）き置きて、上の句を讀む（或は下の句も共に讀む）に隨ひ、下の句を記したる方を取り、その取れる多少に依りて、勝負を決し、後者は、組を二つ若しくはそれ以上に分ちて、同樣の方法にて勝負を決す。

うだき 【名】うだくこと。吼（ホ）ゆること。うだく參照。〔古語〕

うだき 抱【助數】『うだく（抱く）の假體言』かかへ（抱）に同じ。靈異記「彼手指大、如二十抱（于田支）餘二」

うた-きず 歌疵【名】批難すべきところある和歌。格に違へるところある和歌。

うた-きりぎりす 歌螽斯【名】〔動〕こほろぎ（蟋蟀）に同じ。

うたぐ 踞ぐ【動下二他】趺（アグラ）をかく。胥を掛く。〔古語〕紀「踞坐、シリウタゲヲリ」

うだく 【動四自】獸、うめき苦しみつつ怒り叫ぶ。吼（ホ）ゆ。〔古語〕紀「その猪、怒りてうだきよりく。かれ、天皇、そのうだきを畏みて、榛（ハリノキ）の上に登りましき」

うだく 抱く・懷く【動四他】いだく（抱く）に同じ。〔古語〕紀「懷二憤懟一イククミウラムルコトヲウダキタマフ」同「抱二草香部吉士漢彥脚一クサカベノキシアヤヒコガアシヲウダキテ」

うたく-こつ 烏啄骨【名】〔醫〕肩帶を構成する骨片の一。哺乳類に在りては肩胛（ケンヒ）骨に癒合して一突起をなせども、鳥類・爬蟲類等には能く發達す。

うたく-さり 歌鎖【名】文字鎖のたぐひ。歌の下の句の初の文字を、次の歌の初におきて詠（ヨ）みつつ、順次に續けゆくこと。

うた-ぐせ 歌癖【名】㊀和歌を詠（ヨ）むことを好む癖。㊁和歌の詠（ヨ）みかたに、一種の癖あること。

うた-ぐち 歌口【名】㊀和歌の詠（ヨ）み風。歌體。㊁和歌を詠（ヨ）むに巧みなること。㊂笙（シヤウ）・横笛・尺八などの、口を當てて吹く孔。

うた-くづ 歌屑【名】和歌の拙きもの。歌集中の拙き歌。徒然「古今集の中のうたくづとかや言ひつたへたれど」

うた-ぐみ 跏【名】あぐらをかくこと。あぐみ。あぐら。〔古語〕名義抄「跏、ウタグミ、カサネノアシ」

うた-くらべ 歌比【名】うたあはせ（歌合）に同じ。

うた-ぐり 疑【名】うたぐること。うたがひ。邪推。猜疑（サイギ）。〔東京の語〕

うたぐり-ぶかし 疑深し【形一】うたぐる心多し。うたがひぶかし。〔東京の語〕

うたぐる 疑る【動四他】人の心の中をうたがふ。邪推す。〔東京の語〕

うた-くわい 歌會【名】「歌の會」に同じ。

うたくわい-はじめ 歌會始【名】新年の初の歌會。席上に和歌三神、又は人麿の像を懸く。その他に定まりし次第あり。鎌倉時代より始まる。

うた-くわんじん 歌勸進【名】佛事供養のために歌を募り求むること。

うたげ 宴【名】『酒を飲み樂しみて、手を拍ち上ぐる義』酒を飲み歌をうたふ會。さかもり。酒宴。宴會。〔古語〕記「かれその傍をあるきて、そのうたげする日を待ちたまひき」

宴うつ【句】酒宴を張る。酒もりをなす。うたげす。〔古語〕名義抄「讌、ウタゲウツ、サケノミス」

うたげ-だ-に 【副】うただげに（轉宴）を見よ。

うだ-げんじ 宇多源氏【名】宇多天皇の皇子敦實（アツザネ）親王より出でし源氏。後、庭田・大原・綾小路・六角・京極・五辻の諸家に分る。（嵯峨源氏・清和源氏・村上源氏に對して）あふみげんじ（近江源氏）參照。

うた-ごくわいはじめ 歌御會始【名】おうたくわいはじめ（御歌會始）に同じ。

うた-ことば 歌詞【名】文章に用ひずして、概ね歌の上にのみ用ふる語。例へば、をぐるま（小車）・たをる（手折る）などの類。歌語。沙石集「歌詞に、北といふこと、聞きなれず」

うた-ごゑ 歌聲【名】謠（ウタ）ふ聲の調子。紀「歌聲、ウタゴヱ」

うた-ざいもん 歌祭文【名】㊀俗曲の一。もと山伏（ヤマブシ）の錫杖（シヤクヂヤウ）を振り、法螺（ホラ）を吹きながら、神佛の靈驗を唱ふるものなりしが、後には、小唄（コウタ）に作り合せて、三味線に添へて謠（ウタ）ふやうになり、これを唱ふるを「語る」といふ。中古の說敎淨瑠璃の一變せしものともいふ。さいもん。㊁淨瑠璃の中の、歌祭文節にてうたふ部分。

うた-ざうし 歌草紙【名】歌につきて記せる書物。歌書。諸國物語「日ごろ、そなたが、歌草紙を好んで見らるる」

うたざは 歌澤【名】うたざはぶし（歌澤節）の略。

うたざは-ささまる 歌澤笹丸【名】〔人〕うたざはやまとだいじよう（歌澤大和大掾）に同じ。

うたざは-しばきん 歌澤芝金【名】〔人〕㊀初代。端唄（ハウタ）の名人。本名は柴田金藏、土佐大掾（ダイジヨウ）又は土佐太夫と稱す。もと幕府の士。三絃を能くし、歌澤節を創む。㊁二代。歌澤太夫と稱す。別に一派を開きて、哥澤（カザハ）と稱す。明治七年歿す。

うたざは-ぶし 歌澤節【名】端唄（ハウタ）の一派。安政の頃、歌澤大和大掾（ダイジヨウ）・歌澤芝金・歌澤寅右衛門等の創めしもの。はうた。うたざは。かざは（哥澤）參照。

うたざは-やまとだいじよう 歌澤大和大掾【名】〔人〕歌澤節の元祖。本名は笹本彥太郎、笹丸と號す。もと幕府の士。萬延元年歿す。年六十三。

うた-ざま 歌樣【名】歌のすがた。

うた-し 歌師【名】古の雅樂寮（ウタレウ）の被官。歌人（ウタヒト）・歌女（ウタメ）を敎ふることを掌りしもの。

うた-じやうるり 唄淨瑠璃【名】大薩摩・外記（ゲキ）節の如く、長唄（ナガウタ）の節と混じたる淨瑠璃。（普通の長唄と區別していふ）

うた-す 【句】うつ（打つ）の條下を見よ。

うた-ずき 歌好・唄好【名】㊀和歌を詠（ヨ）むことを好むこと、又その人。㊁端唄（ハウタ）などを好むこと、又その人。

うたすつ 歌棄【名】〔地〕後志（シリベシ）國十七郡の一。松前追分節には訛って「おたすつ」と云へり。文化以前より漁場として知らる。

うたせ-あみ 打瀨網【名】うちせあみ（打瀨網）に同じ。

うた-ぜき 歌關【名】和歌を詠（ヨ）まざれば通行せしめじとする關所。

うた-ぜっきやう 歌說經【名】うたねんぶつ（歌念佛）に同じ。一代男「たれとは知らず、顏隱して、つれぶしに、歌說經あはれに聞こゆ」

うた-せんべい 歌煎餅【名】歌ガルタの形に造れる煎餅。

うた-そらごと 歌空事【名】和歌には實事に異りたる想像の多きこと。繪空事（ヱソラゴト）の類。野守鏡「常のたとへにも、まことなきことをば、歌そら事とこそ申しはべるめれ」

うたた 轉【副】『うたうたし（轉轉し）を見よ』㊀うたて（轉）に同じ。〔古語〕萬代「うしとて

もいかがこの代をいとふべきうたたある世の月のかげかな」㊁次第に。だんだん。ますます。いやましに。いとど。㊂何とはなしに。そぞろに。「感、うたたせまる」

うた-だいもく 歌題目【名】〔佛〕日蓮宗にて、佛に對し、鉦（カネ）・太鼓・鼓などの音樂に合せて題目を歌ふこと。僧日像の時に初まり、今は法華和讃（ホツケワサン）・宗祖和讚・鬼子母神（キシモジン）和讃等をも歌ふ。

うたたげ-に 轉宴に【副】うたた酒をのみて遊ぶこと。一説には、轉氣（ウタタゲ）の意にて、うたてしきまでなること。又この語、古事記には「宇多氣陀」とあるを「宇多陀氣」の轉倒せるものとして解すれども、又、宴直（ウタゲタダ）の意なりとして、宴（ウタゲ）の席にて、直目（タダメ）にと解するもあり。〔古語〕記「かくもがとあがみしこにうたたげにむかひをるかもいそひをるかも」

うたた-ごころ 轉心【名】物事に厭きやすき心。うつり氣。そぞろごころ。あだごころ。〔古語〕

うた-だし 歌出【名】雅樂にて、歌曲の謠（ウタ）ひはじめに、本拍子（ホンビヤウシ）の一人のまづ歌を發すること。

うた-だぬし 轉樂し【形二】何となくたのし。そぞろにたのし。〔古語〕記「このみきのあやにうただぬしさ」

うた-ね 轉寐【名】思はず知らず寐ぬること。かりそめに寐ぬること。かりね。うたたねまくら。古今「うたたねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき」

うたたね-まくら 轉寐枕【名】前條に同じ。堀河波鼓「うたたね枕、かりそめの緣の端」

うた-たふば 歌塔婆【名】大和國なる吉野山にて、西行上人の年回の時に建てしといふ塔婆。

うだち 梲【名】うだつ（梲）に同じ。〔古語〕和名「梲、爾雅云、梁上楹、謂二之梲一、宇太知」

うた-ちい【形】うたてし（轉し）の訛。〔豐後國の方言〕

うたづ 宇多津【名】〔地〕讃岐國綾歌（アヤウタ）郡にある町。丸龜市の東北一里餘。海に臨みて小港をなす。讚岐鐵道の一驛。古くは「宇足津」又は「歌津」など記せり。

うだつ 梲【名】『うだち（梲の）訛』うつばりの上に立つる短き柱。つか。うだち。下學集「宇立、ウダツ」

梲が上がらぬ【句】浮ぶ瀨なし。立身せず。幸運にむかはず。〔俚語〕

うた-づか 歌塚【名】大和國添上（ソフノカミ）郡に在る人麿の墓。

うた-づかさ 雅樂寮【名】うたれう（雅樂寮）に同じ。〔古稱〕源氏「うたづかさの人召して、船の樂せらる」

うたつがはし【形二】うたがはし（疑はし）に同じ。〔古語〕

うたつ-じやう 宇多津城【名】讚岐國綾歌（アヤウタ）郡宇多津町にある城。細川賴之の功臣奈良元安の築きしもの。その子孫、長曾我部（チヤウソカベ）元親に攻められてこれを棄て、後、仙石・生駒の二氏、封を讃岐國に受けて、ここに居れり。

うだつ-や 梲屋【名】ほったてごや（掘建小屋）を云ふ。〔上總國・遠江國等の方言〕

うた-づゑ 歌杖【名】歌會などにて、歌の考案中、腭（アゴ）を安んずるための具。笏（シヤク）のごとく作りたる板を二枚合せて、紐を懸けたるもの。

うたて 轉【副】㊀ますます。甚しく。うたた。〔古語〕萬代「常よりもうたて物こそかなしけれわが身のはてになりやしぬらん」㊁平穩ならず。世の常ならず。面白からず。うたた。〔古語〕源氏「いとうたて、ゆゆしき御ことなり」

うたて-けに 轉氣に【副】うたたらうたた進みて。〔古語〕萬葉「秋といへば心ぞいたきうたてけに花になぞへて見まくほりかも」

うたてし 轉し【形一】㊀甚し。あまりなり。〔古語〕㊁樂みなし。面白くなし。薄情なり。うるさし。いとはし。〔古語〕宇治「よよと泣きければ、うたてしや」

うたてし 轉し【形二】前條に同じ。〔古語〕撰集抄「先の世の宿執のほど思ひしられはべりて、うたてしく」

うたて-びと 轉人【名】うたてき人。いとはしき人。〔古語〕伊勢集「秋の頃、うたて人の物いひけるに」

うだ-てんわう 宇多天皇【名】〔人〕第五十九代の天皇。御名は定省（サダミ）。光孝天皇第七の皇子。御母は皇后班子。在位十年（一五四八－一五五七）。承平元年崩ず。壽六十五。

うた-な 前胡【名】〔植〕のだけ（前胡）に同じ。

うだな 優陀那（梵Udāna）【名】〔佛〕じふにぶきやう（十二部經）を見よ。

うた-ながめ 詠歌【名】和歌を詠（ヨ）むこと。〔古語〕夫木「月の夜の聲もほそめに窓あけて心をやれるうたながめかな」

うた-なし 決し【形一】疑なし。うつなし。〔古語〕著聞「天の河みぎはうたなくまさるかないかにしつらん鵲の橋」

うた-ぬし 歌主【名】歌を詠（ヨ）みたる人。歌の作者。土佐「この歌ぬし、またまからずといひて立ちぬ」

うた-ねぶつ 歌念佛【名】次條に同じ。

うた-ねんぶつ 歌念佛【名】㊀曲節をつけて唱ふる念佛。㊁伏鉦（フセガネ）に合せ、念佛の節にてうたふ一種の俗謠。元祿の頃より享保の頃まで行はれたり。うたぜっきやう。正章千句「かど說敎の聲ぞかれたる。人こぞる歌念佛は暮れかけて」

うた-の-かみ 雅樂頭【名】うたれう（雅樂寮）を見よ。

うた-の-つかさ 歌樂寮【名】うたれう（雅樂寮）に同じ。〔古稱〕拾穗「うたのつかさの樂（ガク）の、近くきこゆるかな」

うた-の-なかやま 歌中山【名】〔地〕京都東山の淸水寺の奥、淸閑寺のあるところ。

うた-の-はしら 歌の柱【句】うた（歌）の條下を見よ。

うた-の-はま 歌濱【名】〔地〕下野國日光山中禪寺湖の南岸。

うだ-の-ほふし 宇陀法師【名】一條天皇の御代に燒け失せたりといふ大和琴の名。檜にて作れるものなりきといふ。源氏「宇陀法師の變らぬ聲も」

うだ-の-みくまり-の-じんじや 宇太水分神社【名】大和國宇陀郡宇太村大字古市場に鎭坐せる神社。祭神は速秋津彥（ハヤアキツヒコ）命・天水分（アメノミクマリ）神・國水分神の三柱。延喜時代には大社に列す。

うだ-の-ゐん 宇多院【名】古の山城國葛野（カド）郡にありし仙洞御所。宇多・後宇多兩法皇の御所たり。衣笠山（キヌガサヤマ）。

うたひ 謠【名】㊀能（ノウ）に合せてうたふ一種の謠ひもの。その音節の流に、金春（コンパル）・觀世（クワンゼ）・寶生（ホウシヤウ）・金剛（コンガウ）等の諸流あり。能に合することなく、單獨に扇拍子にて歌ふこともあり、これを素謠（スウタヒ）といひ、又一曲の全部を歌ふを番謠（バンウタヒ）、一節のみを歌ふを小謠（コウタヒ）といふ。謠曲。㊁淨琉璃のうちの、謠曲の節を插める部分。

謠長じて舞【句】物事の次第に增長しゆく譬。〔諺語〕伊曾保物語「謠長じては終に舞とこそはうけたまはれ」

うたひ-こう 謠講【名】多人數、日を定めて寄り合ひ、謠をうたひあふこと。番組をつくりて行ふ。心中二枚繪草紙「今宵、丸屋の謠講に往ったれば」

うたひ-いる 謠入る【動下二他】謠ひて、中に吹込む。狂言（じせん石）「石のからうとの蓋のぶっとする程うたひ入れ」

うたひ-がしら 謠頭【名】能（ノウ）にて謠をうたひはじむる合圖に打つ大鼓・小鼓の頭。

うたひ-かた 唄方【名】芝居にて、長唄・淸元・常盤津・ちよぼ語の三味線に和して演藝を助くる役の人。

うた-びくに 歌比丘尼【名】歌念佛（ウタネンブツ）をうたふ尼。後には、色を賣る者あるに至れり。いせびくに（伊勢比丘尼）・くまのびくに（熊野比丘尼）參照。

うたひ-ざ 謠座【名】能舞臺にて、地謠（ヂウタヒ）の坐るところ。その位置は、舞臺の左方、勾欄（コウラン）の前。

うたひ-せう 謠抄【名】〔書〕百番の謠を註釋せるもの。二十卷。著者不詳。

うたひ-ぞうせう 諷增抄【名】〔書〕謠抄の詞の足らぬところを增補せるもの。十二卷。加藤盤齋の著。

うたひ-ぞめ 謠初【名】德川時代に正月二日に、始めて殿中にて催しし謠の式。足利時代にも行はれしといふ。

うたひ-だし 歌出【名】㊀一つづきの歌をうたひはじむること。うたひはじめ。㊁初めて歌を唄ふこと、又その人。

うたひ-て 謠手【名】うたふ人。巧にうたふ人。うたびと。

うた-びと 歌人【名】㊀うたよみ（歌詠）に同じ。拾遺「三條大臣家にて、うたびと召し集めて」㊁雅樂寮(ウタレウ)に屬して、國風を謠ふことを掌りし役。うため（歌女）㊁參照。㊂前條に同じ。

うたひ-どめ 謠止【名】能(ノウ)の狂言の結末を、詞又は所作を以てせず、謠にてすること。例へば、「宗論(シユウロン)」・「靱猿(ウツボザル)」等の曲の結末の類。

うたひ-どり 歌鳥【名】〔動〕ほとゝぎす（時鳥）の異名。

うたひ-ひろぐ 歌弘ぐ【動下二他】うたひて、世の中に知れわたらしむ。狂言（じせん石）「洛中にまでうたひひろげをったこと」

うたひ-ぶし 謠節【名】うたひのふし。うたひ。

うたひ-ぼん 謠本【名】謠曲の文句をしるしたる本。

うたひ-め 歌姫【名】うため（歌女）㊀に同じ。

うたひ-め 歌女【名】げいぎ（藝妓）に同じ。

うたひ-もの 謠物【名】音節をつけてうたふべき文句。歌曲。神樂・催馬樂(サイバラ)・朗詠・長唄などの類。（語り物に對して）

うたふ 訴ふ【動下二他】うったふ（訴ふ）に同じ。〔古語〕宇治「われをすててすまぬことは、たれにかは、うたへ申し候はん」

うたふ 歌ふ【動四他】㊀聲を長く引き、上げ下げをつけて、思ふ事をのぶ。節をつけて、歌をとなふ。吟ず。源氏「聲ある人してうたはせたまふ」㊁物事を、歌に詠(ヨ)む。

歌ふも、舞ふも、法(ノリ)の聲【句】森羅萬象(シンラバンシヤウ)、すべて佛法を具現す。〔諺語〕

うた-ぶくろ 歌袋【名】㊀なきぶくろ（鳴嚢）に同じ。夫木「いたづらに鳴くや蛙のうたぶくろおろかなるにも思ひいればや」㊁歌の草稿を入れおく袋。紙・錦・白綾などにて作り、柱などに掛けて、座敷のかざりとす。紙のは檀紙(ダンシ)を用ふ。

うたへ 訴【名】うったへ（訴）に同じ。〔古語〕紀「明辦二訴訟一、アキラカニウタヘヲワキマヘヨ」

うたへ-ただす-つかさ 刑部省【名】ぎやうぶしやう（刑部省）に同じ。〔古語〕和名「刑部省、宇多倍多多須都加佐」

うたへ-の-つかさ 刑官【名】ぎやうぶしやう（刑部省）に同じ。紀「刑官、ウタヘノツカサ」

うたへ-ぶみ 訴文【名】そじやう（訴狀）に同じ。〔古語〕

うた-ぼこり 歌誇【名】詠歌に巧なることを自慢すること。〔古語〕

うた-まくら 歌枕【名】『歌人の枕言(マクラゴト)』とする意。又、枕詞と同樣に、歌の一部に加へて助とする意ならんともいふ』古來、歌の中に詠(ヨ)込まれ來れる諸國の名所。又その名所の歌どもを集め載せたる書。古事談「實方をば、歌枕見てまゐれとて、陸奧守に任ぜらる」

うたまくら-あきのねざめ 歌枕秋寢覺【名】〔書〕あきのねざめ（秋寢覺）を見よ。

うたまくら-なよせ 歌枕名寄【名】〔書〕名所の歌を編集せるもの。三十八卷。僧澄月の撰。

うた-まひ 歌舞【名】歌ひ舞ふこと、又その人。紀「樂器、ウタマヒノウツハ」

うたまひ-どころ 歌舞所【名】うたれう（雅樂寮）に同じ。

うたまひ-の-つかさ 雅樂寮【名】㊀うたれう（雅樂寮）に同じ。和名「雅樂寮、宇多末比乃豆加佐」㊁次條に同じ。〔古語〕紀「樂官、ウタマヒノツカサ」

うたまひ-びと 歌舞人【名】歌舞する人。伶人。樂人。紀「樂人、ウタマヒビト」

うたまろ 歌麿【名】〔人〕きたがはうたまろ（喜多川歌麿）に同じ。

うたまろ-は 歌麿派【名】浮世繪の流派の一。明和ごろの畫家。鳥山石燕より出で、その子喜多川歌麿に至って全盛を來せり。この派に著名の畫家多し。きたがはうたまろ（喜多川歌麿）參照。

う-たん 羽緞【名】ごろ（呉絽）に同じ。

うた-め 歌女【名】㊀歌を善くうたふ女。うたひめ。（うた男に對して）㊁古、雅樂寮(ウタレウ)に屬せし役。歌人(ウタビト)と同じ事を掌りしもの。

うだ-もの 宇多物【名】越中國の刀工、宇多一派の鍛(キタ)へし刀の總稱。宇津物(ウツモノ)。

うた-ものがたり 歌物語【名】うたがたり（歌語）に同じ。榮花「故殿の歌物語を書き」

うだやな 優陀耶那（梵 Udayana）【名】㊀〔人〕うだい（烏陀夷）を見よ。㊁うてん（烏塡）を見よ。

うた-よみ 歌詠【名】㊀和歌を詠(ヨ)むこと、又その人。詠歌。うたびと。かじん。紀「謠、此云二宇多預瀰一」㊁和歌を詠(ヨ)むに巧なる人。和歌の上手。源氏「古代のうたよみは」

うたよみ-どり 歌詠鳥【名】〔動〕『古今和歌集の序に「花に鳴く鶯、水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」とあるよりいふ』うぐひす（鶯）の異名。

うた-よもぎ 歌蓬【名】〔植〕むかしよもぎ（昔蓬）に同じ。

うたり-じんじや 菟足神社【名】三河國寶飯(ホイ)郡小坂井(コザカヰ)村に鎭坐せる神社。式內の古社。

うだる 茹る【動四自】ゆだる（茹る）に同じ。〔俚語〕

うた-れう 雅樂寮【名】古、治部省に屬して、舞樂・音曲の事を掌りし役所。頭(カミ)・助(スケ)・允(ジヨウ)・屬(サクワン)以下の役員を置かれたり。うたづかさ。うたのつかさ。うたまひのつかさ。ががくれう。うたまひどころ。

うた-ろぎ 歌論議【名】和歌のよしあしを論ずること。うたろんぎ。〔古語〕大鏡「殿上に、うたろぎといふ事いできて」

うた-ろんぎ 歌論議【名】前條に同じ。

うた-ゑ 歌繪【名】〔美〕日本畫の一種。歌の意を繪にて現はし、處處に一首の歌の文字を散して插めるもの。平安朝に初まる。葦手(アシデ)・水手の類なれど、繪を主として書ける所異れり。一說には、歌にて贊を添へ記すべき材料とする繪。あしで（葦手）參照。大鏡「うたゑども書かせたまひし色紙(シキシ)がた」

うた-を 歌男【名】歌を善くうたふ男。（うた女に對して）〔古語〕紀「歌男(ウタヲ)・歌女」

うち 內【名】㊀物事の表面に見えてをらぬ方。なか。うら。（そと又ほかに對して）月濟「そとは夏あたりの水は秋にして內は冬なるひむろ山かな」㊁ま。あひだ。「今のうち」㊂それまでに至らぬ時。以內。「年二十よりうちの人」㊃なかま。くみ。うちわ。㊄我が身に屬すること。我が國に關すること。㊅內典即ち佛經の立場。（儒敎を外といふに對して）うちと（內外）參照。盛衰記「內にはすでに破戒・無慙の罪を招きたまひ、外には又仁・義・禮・智・信の法にも背きおはしますらん」㊆いへ。家屋。㊇己の家。わが住居。「うちに歸る」㊈おほうち。內裏。禁裏。源氏「今は、うちにのみさぶらひたまふ」㊉天皇の敬稱。(十一)つま。家內。（夫よりいふ）(十二)をっと。亭主。（妻よりいふ）(十三)閨中。閨房。（漢文の訓讀にいふ）「うちを好む」(十四)こころ。心意。（漢文の訓讀にいふ）「思、內にあれば、色、外にあらはる」「うちを直くす」(十五)臟腑。內臟。（漢文の訓讀にいふ）「うちを調ふ」(十六)能(ノウ)にて、流儀の謠を二分せるものの一。「內百番」(十七)能(ノウ)の舞臺。（橋がかりに對していふ）

內に省(カヘリ)みて疚(ヤマ)しからず【句】『論語の顏淵篇に「內省不レ疚、夫何憂何懼」とあるに本づく』心に省みて、愧づべき所なし。〔諺語〕

內の御方(ミカタ)【句】他人の妻の敬稱。うらかた。內儀。うちかた。うちぎみ。源氏「內の御方に消息(セウソコ)したまふを」

內の藏人(クラウド)【句】禁中に仕ふる藏人。（攝關などの家に仕ふる藏人と區別していふ）大和「內の藏人にてありける一條の君といひける人」

內の舍人(トネリ)【句】うどねり（內舍人）に同じ。

內の人【句】『內は家の意』妻が、第三者に對ひて、夫をさしていふ稱。〔俚語〕

內の帝(ミカド)【句】てんわう（天皇）に同じ。〔古語〕榮花「內のみかど、仁壽殿に渡りたまひて」

內の御子(ミコ)【句】ないしんわう（內親王）に同じ。〔古語〕

內の者【句】けらい。家臣。狂言（棒縛）「主とも思はぬ內の者かな」

內はだかりの、外(ト)すぼまり【句】家に居る時は、妻子・奴婢などに威張りちらしながら、世間に出でては、一向に

元氣なし。かげべんけい。うちべんけい。
うちひろがりのそとすぼまり。〔諺語〕

内ひろがりの、外(ト)すぼまり【句】前條に同じ。〔諺語〕

内を外(ト)にす【句】他出のみして、家に在ること少なし。

うち 打【名】㊀打つこと。㊁砧(キヌタ)にて絹を打ちて、光澤を出すこと。㊂花ふだ又はカルタの札を、手のうちより場に打出すこと。

うち 鞭【名】『うつ(打つ)の假體言』むち(鞭)に同じ。〔古語〕 字鏡「鞭、宇知」

うち 宇智【名】〔地〕大和國十郡の一。上古には御獵地ありて、「内野」と稱せし地。

宇智の墓【名】光仁天皇の皇后井上内親王の墓。大和國宇智郡坂合村大字大野の靈安寺の西にあり。

う-ち 有智【名】智慧あること、又その人。(無智に對して)

うち【名】うつつ。現在。〔古語〕 萬葉「たまきはるうちのかぎりは平らけく安くもあらむを」

うち 内【代】㊀己の夫又は妻を第三人稱としていふ語。㊁第一人稱。われ。〔山城國・周防國・若狹國の方言〕

うち 打【接頭】動詞に添はりて、語調を整へ、或は意義を強むる用をなす。「うち聞く」「うち忘れて」

うぢ 氏・姓【名】『血族の内の意といふ』㊀家の筋を分つための名目。上古よりあるは、大伴・物部(モノノベ)・蘇我など、又、朝廷より賜はりたるは、源・平・藤原・橘などにて、皆、人の名に對する家の名なり。後世、子孫の増殖するに及び、地名などを取りて、これを細分せるを「名氏(苗字)」といふ。㊁家の筋目。すじやう。いへがら。

氏無くして玉の輿【句】美女ならば、賤しき者も出世して、玉の輿に乗るほどの榮華を得。〔諺語〕 犬子集「果報ある身や乗る玉のこし(といふ句に)「美女はただ氏のなきをばもてはやし」

氏の神【句】うぢがみ(氏神)に同じ。 謡曲(雲雀山)「諸天・氏のかみも正に照覧あるべきなり」

氏の上(カミ)【句】諸氏のうちの、宗家として同族を率ゐて朝廷に仕へ、氏神の祭祀・氏人の敍爵(ジョシャク)などを掌りし者。後世は、特に朝廷より宣旨を賜はりて、これを稱することとなりしが、室町時代以後は、藤原氏の攝關となれる者・源氏の征夷大將軍となれる者のこれを稱せし外、跡を絶ち、明治維新の後は、その名全く廢す。氏の長(ヲサ)。氏の長者。氏の子上(コノカミ)。 紀「氏上、ウヂノカミ」

氏の擧(ヨキ)【句】古、毎年の縣召除目(アガタメシノヂモク)の際に、氏の長者が、その氏人の任官を申請せしこと。氏の爵。〔古語〕

氏の藏人(クラウド)【句】うぢくらうど(氏藏人)に同じ。

氏の子【句】うぢこ(氏子)に同じ。

氏の子上(コノカミ)【句】「氏の上(カミ)」に同じ。〔古語〕

氏の爵(シャク)【句】「氏の擧(ヨキ)」に同じ。〔古語〕

氏の印(シルシ)【句】氏の上の證として、朝廷より賜ふ武器。大氏の上には大刀、小氏の上には小刀を賜ふ。〔古語〕

氏の助(スケ)【句】氏の上の副。〔古語〕

氏の宗(ソウ)【句】同じ氏のうちの嫡統の家。本家。宗家。

氏の長者【句】「氏の上(カミ)」に同じ。(但し後には、源・平・藤原・橘の四氏にのみ限らるる稱號となり、同族中の官位共に高く、權勢ある者に宣下して任ぜられたり) 今昔「二郎の大臣の御流は、氏の長者を繼ぎて」

氏の社(ヤシロ)【句】氏神を祀れる神社。例へば藤原氏の春日神社の類。うぢでら(氏寺)參照。

氏の奴(ヤッコ)【句】うぢやっこ(氏奴)に同じ。〔古語〕

氏の院【句】同じ氏に屬する子弟を敎育する學校。藤原氏の勸學院・橘氏の學館院の類。〔古語〕 空穗「氏の院の學生(ガクシヤウ)」〔語〕

氏の長(ヲサ)【句】「氏の上(カミ)」に同じ。〔古語〕

氏より育【句】人は、氏姓の如何にかかはらず、育ちがらにて、その尊卑は見ゆ。〔諺語〕 丹波與作「ほんに氏よりそだちぞと、又さめざめと泣きけるが」

うぢ 氏【接尾】苗字に添へて敬意を示すに用ふる語。し。「山田うぢ」「武田うぢ」

うぢ 宇治【名】〔地〕㊀山城國八郡の一。郡の北部過半を、古より「山科(ヤマシナ)」といふ。郡役所を醍醐村に置く。㊁山城國久世(クゼ)郡に在る町。中世の歌枕たり。又、茶・納涼地及び螢の名所として知らる。古は「菟道」と書けり。㊂山城國宇治郡に在る村。宇治川を隔てて、宇治町に對す。陵墓多し。㊃うぢやまだ(宇治山田)を見よ。

宇治の茶壺【句】德川時代に、山城國宇治の製茶所より毎年幕府に進獻せし新茶を容れたる壺。將軍所藏の名器を用ひたり。

宇治の橋姫【句】はしひめ(橋姫)を見よ。

宇治の花園【句】山城國の宇治㊁にありし藤原頼通(ヨリミチ)の邸。

宇治の間(マ)【句】江戸城中大奥の居室の一。嫡出男子の住みし處。襖(フスマ)に宇治の茶摘の圖を描く。御上の間。

宇治の卷【句】〔書〕うぢじふでふ(宇治十帖)に同じ。 盛衰記「源氏の宇治の卷に」

宇治の陵(ミササギ)【句】山城國宇治郡宇治村大字木幡(コバタ)にある諸陵、即ち醍醐天皇の御養母藤原溫子(アツコ)・醍醐天皇の皇后藤原穩子(シツコ)・村上天皇の皇后藤原安子・圓融天皇の皇后藤原遵子(ノブコ)・花山天皇の御母藤原懷子(カネコ)・一條天皇の御母東三條院詮子(アキコ)・一條天皇の中宮上東門院彰子(アキコ)・三條天皇の御母藤原超子(ユキコ)・三條天皇の中宮藤原妍子(カズコ)・後一條天皇の皇后藤原威子(タケコ)・後冷泉天皇の御母藤原嬉子(キシ)・後冷泉天皇の皇后藤原歡子(ヨシコ)・後冷泉天皇の中宮藤原寬子(ヒロコ)・白河天皇の御母藤原茂子の陵など、なほ多し。

宇治の宮人【句】伊勢大神宮に奉仕する人。神人。うぢやまだ(宇治山田)參照。 新後撰「榊もて八つの石つぼふみならし君をぞ祈る宇治の宮びと」

宇治の離宮(リキユウ)【句】山城國宇治にありて、菟道稚郎子(ウヂノワキイラツコ)の住みたまひし處。今の久世郡宇治町にある離宮社は、その址なり。

宇治の渡(ワタリ)【句】うぢがは(宇治川)㊁を見よ。 萬葉「ちはや人宇治の渡の早き瀨にあはずありともものちは我が妻」

うぢ 菟道【名】㊀〔地〕うぢ(宇治)㊁に同じ。㊁姓氏の一。神別にして、物部氏の支族。

うち-あか 内赤【名】衣服の裏の赤きもの。 醒睡笑「うちあかの小袖」

うち-あかす 打明す【動四他】次條㊁に同じ。

うち-あく 打明く【動下二他】㊀『うち(打)は接頭語』あく(明く)を強めていふ語。㊁包まずに語る。隱さず話す。うちあかす。

うち-あぐ 打上ぐ【動下二他】㊀『うち(打)は接頭語』あぐ(上ぐ)を強めていふ語。㊁打ちてあがらしむ。㊂掌を打ち、歌をうたひて、酒を飲む。うたげす。〔古語〕 榮花「よろづの殿ばら、參りまかで、うちあげ遊びたまふ」㊃海暴れて、波、陸地に及ぶ。㊄聲を張りあぐ。 太平記「持經の紐を解き、要文、ところどころうちあげ、心しづかに讀誦したまひけり」㊅興行を終ふ。

うち-あげ 打上【名】㊀うち上ぐること。㊁海暴れて、波の陸上に及ぶところ。 夫木「みさごゐる濱の眞砂のうちあげに波ぎは見えて寄るもくづかな」㊂徒立(カチダチ)にて、草鹿(クサシシ)・圓物(マルモノ)などを射る時、弓を引かんとて、弓を持上ぐること。㊃興行を終ふること。㊄筒よりうちあぐる花火。(仕掛花火に對して)㊅うちあげすだれ(打上簾)の略。

うち-あげ 内揚【名】㊀衣服のあげを、裏の見えぬところに隱し縫ふもの。(そと揚に對して)㊁内をさしあぐること。内金を入るること。うちきん。 浮世親仁氣質「春になって、せめて百目うちあげすればよいが」

うち-あげ 打上【名】江戸時代に用ひられたる一種の駕籠。乗り降りする時に、簾をかかげ揚ぐるより名づく。

うちあげ-あじろごし 打上網代輿【名】打上簾の制にて、腰を網代張にせる輿。

うちあげ-こしぐろ 打上腰黑【名】打上簾の制にて、腰を黑塗にせる輿。

うちあげ-すだれ 打上簾【名】出入口に引戸なく、垂れたる簾を上げて出入する輿。江戸時代に、腰網代に次ぐ格と定まりゐたり。うちあげ。

うちあけ-ばなし 打明話【名】包まずに語る話。うちとけごと。

うち-あこめ 打衵【名】うちぎぬ（打衣）に同じ。著聞「紅の打衵」

うち-あつ 打當つ【動下二他】一『うち（打）は接頭語』あつ（當つ）を強めていふ語。二打ちて當らしむ。三花ガルタにて、うちあてを行ふ。

うち-あて 打當【名】花ガルタにて、手にある札を場に投出し、めくりの札を起して、その投出したる札とあはすること。

うち-あはす 打合はす【動下二他】一『うち（打）は接頭語』あはす（合はす）を強めていふ語。二互に打つ。打ちあふ。三あらかじめ語らひ置く。前以て相談す。交涉す。

うち-あはせ 打合【名】一互に打つこと。二あらかじめ語らひ置くこと。下相談。三雅樂にて、打物のみの合奏。四能(ノウ)にて、扇と右の手とを打合はする形(カタ)。

打合の餅【句】諸禮日記に「庭の纘松(ツイマツ)・打合の餅・紙燭(シソク)さしの事。…。輿の通る妻戸の前左右に、男女兩人づつにて、左右に臼を置きて、餅を搗いてあるべし。その間を輿をとほし、左方の餅を右方にうつし、一つに搗きあはするを、打合の餅といふ」とあり。

うち-あはせ 打袷【名】うちぎぬ（打衣）に同じ。空穗「紅の黒むまで濃き唐綾のうちあはせ一襲」

うち-あはせ 內合【名】一ないかう（內膕）に同じ。〔古語〕紀「內膕、ウチアハセ」二うちもも（內股）に同じ。〔古語〕和名「腿、宇智阿波勢」

うち-あはび 打鮑【名】のしあはび（熨斗鮑）に同じ。うちあふび。著聞「白き米をかはらけに入れたると、うちあはびとを、折敷(ヲシキ)に入れて」

うち-あひ 打合【名】うちあふこと。

うち-あふ 打合ふ【動四他】一互に打つ。たたきあふ。二雙方にて論難・攻擊す。三雙方より互に銃砲を放つ。

うち-あふ 打合ふ【動四自】『うち（打）は接頭語』あふ（合ふ）を強めていふ語。源氏「事うちあひ、目やすき御あはひとおぼさる」

うち-あふぎ 打扇【名】一芝居の小道具の一。舞臺にて、人を打つしぐさに用ふる扇子。（舞ひ踊る時などに用ふるものと區別していふ）二芝居にて、高く唄ふべきところを、特にかすめて低く唄ふ場合の聲調。

うち-あふび 打鮑【名】うちあはひ（打鮑）の轉。

うち-あぶみ 內鐙【名】りやうあぶみ（兩鐙）を見よ。

內鐙を合はす【句】「兩鐙(リヤウアブミ)を合はす」に同じ。盛衰記「馬に石突せさすな。つねに內鐙を合はせよ」

うち-あみ 打網【名】一とあみ（投網）に同じ。蜻蛉「しりなる人人は、落ちぬばかりのぞきて、打網するほどに」二伊勢蝦・めばるなどを捕ふるに用ふる底刺(ソコサシ)網。

うちあみ-ぶね 打網船【名】とあみぶね（投網船）に同じ。

うち-あや 打綾【名】打ちて光澤を出したる綾織物。空穗「かめに練りたるうちあや」

うち-あり 打有り【動良變自】『うち（打）は接頭語』ありふれてあり。普通にあり。なみ一とほりなり。宇治「やや、これは、うちある矢にもあらざりけり。神矢なりけり」十訓「心のあしき人なれども、うちある人の中にまじはりぬれば」

うち-いき 內息【名】息を內に吸ひこむこと。

うち-いけ 內池【名】庭內の小き池。屋敷うちの池。構內の池。

內池の蛙【句】「井底(セイテイ)の蛙」に同じ。〔諺語〕

うち-いし 打石【名】けい（磬）に同じ。字鏡集「磬、ウチナラシ、ウチイシ」

うち-いた 打板【名】一廊下などの絶間又は牛車(ギツシヤ)と車寄(クルマヨセ)との間などに渡す步板(アユミイタ)。二古、庭上・陣中などにて、地上に坐する時、下に敷くに用ひし板。陣中のは、敷皮(シキガハ)の代用なり。

うち-いだす 打出す【動四他】うちいづ（打出づ）に同じ。〔古語〕枕「經、低く聞えぬほどに讀みたるも、尊げなり。高くうちいださせまほしきに」

うち-いちぢ 內一地【名】雙六盤(スゴロクバン)の格の一。最初ここに相手の石二つを並ぶる定なり。

うち-いづ 打出づ【動下二自】『うち（打）は接頭語』いづ（出づ）を強めていふ語。榮花「女房どもの、髮あげてみなうちいでたるに、殿・內の大殿など、御簾の內におはしまして」

うち-いづ 打出づ【動下二他】言葉にあらはす。口に出す。うちいだす。〔古語〕榮花「なかなか、いとつつましく、物聞えたまふも、うちいでにくく覺えけり」伊勢「いかで、この男に云はんとおもひけり。うちいでにくくや有りけん」

うち-いで 打出【名】一打出づること。二「打出の衣(キヌ)」の略。〔古語〕續世繼「女房のいだし車のうちいで、しろがね・こがねにしかへされたり」三金錢を打ちて延ばす事なるべし。〔古語〕七一職人歌合「箔打(ハクウチ)。南鐐にて、うちいでわろき」

打出の衣(キヌ)【句】牛車(ギツシヤ)などよりこぼれ出でたる、女のきぬの裾。いだしぎぬ。うちいで。うちで。〔古語〕

うちいで-の-はま 打出濱【名】〔地〕うちでのはま（打出濱）に同じ。新後拾遺「駒とめてうちいでのはまを見渡せば朝日にさわぐ志賀の浦浪」

うち-いと 打絲【名】竹の篦(ヘラ)にて打ちて組み固めたる絲。くみいと。

うち-いふ 打言ふ【動四他】『うち（打）は接頭語』いふ（言ふ）を強めていふ語。枕「いかにわびしき心地しけんとうちいふほどに」

うち-いり 討入【名】討ち入ること。

うち-いり 內入【名】一中に入ること。二負債のうちの一部を償ふこと。「內入何圓何十錢」三まうけ。收入。

うち-いる 討入る【動四自】攻め入る。おそひ寄す。襲擊す。

うち-いる 打入る【動四自】味方の人數、引上ぐ。

うち-いる 打入る【動下二他】一『うち（打）は接頭語』いる（入る）を強めていふ語。竹取「手にうち入れて、家に持て來ぬ」二博弈(バクエキ)を打ちなどして、金品を注(ツ)ぎこむ。うちこむ。空穗「心よろしからず博打(バクチ)ふからの者にて、身の裝束などは皆うちいれて」

う-ちう 宇宙【名】一『宇は天地四方、宙は古往今來の義』天地。あめつち。二〔哲〕『英 Universe』すべての存在物を包容せる空間。

うちう-いんりよく 宇宙引力【名】〔理〕『英 Universal attraction』ばんいういんりよく（萬有引力）に同じ。

うちう-かいびやくろん 宇宙開闢論【名】『英 Cosmogony』宇宙の生起に關する學說。宇宙創成論。世界開闢論。

うちう-さうせいろん 宇宙創成論【名】前條に同じ。

うちう-しんけう 宇宙神教【名】〔基〕『英 Universalism』宇宙の生靈がことごとく救濟を受くべしと主張する一派の基督(キリスト)教。神は萬有の父なりといふ考に基づく。

うち-うち 內內【名】一家の內。竹取「うちうちのしつらひには、言ふべくもあらぬ綾織物に繪をかきて、間(マ)ごとに張りたり」二他人にあらはし示さぬこと。うちわ。うちまく。うちうら。ないない。內部。裡面。源氏「うちうちの事までは、いかがおぼしよらん」

うぢ-うぢ【貌】手を出しかねてためらふさま。ぐづぐづ。もぢもぢ。うじうじ。

うち-うちに 內內に【副】ないないに。表だたずに。源氏「おなじことと、うちうちには思ふとも」

うちう-ぢゆうりよく 宇宙重力【名】〔理〕『英 Universal attraction』ばんいういんりよく（萬有引力）に同じ。

うぢ-うど 氏人【名】うぢびと（氏人）の音便。

うち-うま 打馬【名】『うつ（打つ）廿を見よ』

うち-うまや 內廐【名】門內に在る廐。太平記「內廐の馬ども」

うち-うみ 內海【名】外海と連續して深く內地に入り込み、または全く陸上にある面

積の廣き水、即ち灣・内海(ナイカイ)・湖などの類。伊呂波字類「湖、ウチウミ」

うちうみ-の-うら 内海浦【名】〔地〕伊豫國宇和郡鹿島の北部に位する海灣。

うち-うら 内裏【名】**一**衣服の裏地。**二**うち(内内)**二**に同じ。

うち-うら 内浦【名】**一**海または湖水の灣入したる處。**二**〔地〕駿河國駿河灣の東北隅なる浦。駿東郡に屬す。

うちうら-わん 内浦灣・打浦灣【名】〔地〕いぶりわん(膽振灣)に同じ。

うちう-ろん 宇宙論【名】〔哲〕『英 Cosmology』宇宙の本體及び宇宙間の萬有の成立ちたる次第等に關する議論。

うちうろんてき-しようめい 宇宙論的證明【名】〔哲〕『英 Comological proof 又は Cosmological argument』有神論の一。宇宙の存在を基とし、因果の理法によりて、神の存在を證明せんとするもの。

うち-え 打柄【名】竹を削り合はせて、千段巻にせる、槍の柄。

うち-えする 打寄する【枕】うちよする(打寄する)に同じ。萬葉「うちえする駿河のねらは」

うち-えだ 打枝【名】うちおき(打置)**一**に同じ。

うち-えび 打海老【名】なま蝦の皮を去りたるを打潰したる食品。

うち-おき 打置【名】**一**金・銀を鍛(タキ)へて、造花の枝の形に造り、嫁入の時、廣蓋(ヒロブタ)に載せたる小袖をおさふるに用ふるもの。うちえだ。**二**地紋を浮織(ウキオリ)にすること。〔古語〕「うちおきの物」

うち-おく 打置く【動四他】『うち(打)は接頭語』おく。そのままにさしおく。源氏「なにがしが及ぶべき程ならねば、上(カミ)が上はうちおきはべりぬ」

うち-おこし 打起【名】**一**新地に鍬を入れて掘返すこと。開墾。うちかへし(打返)參照。**二**騎射の時、弓を引かんとして、弓を持上ぐること。

うち-おとす 打落す【動四他】**一**たたきおとす。**二**斬りおとす。

うち-おとり 内劣【名】外見の美なるに似ず、内實は劣りてあること。

内劣の、外(ト)めでた【句】家庭に在りては劣れども、外に出でては愛でられ人望あること。〔古語〕大鏡「その帝(ミカド)をば、内おとりのとめでたとぞ、世の人申しし」

うち-おび 打帶【名】くみおび(組帶)に同じ。

うち-おほひ 打覆【名】不完全なる屋根。方丈「うちおほひを葺きて」

うち-おほんぞ 打御衣【名】砧(キヌタ)にて擣(ウ)ちて、光澤を出したる御衣。〔古語〕增鏡「御引直衣・打御衣・張袴たてまつれるみけしき」

うち-がい 打櫂【名】櫂の一。船梻(フナダナ)に繩にて罠(ワナ)を作り、これに通して、横に水を搔きつつ、船を進めやる櫂。形小く、下部のひらたき部分は、普通の櫂よりも幅廣く短し。夫木「いづみ川くだる小舟のうちがいに淺瀬ぞしるき行きなやみつつ」

うちがい-ぶね 打櫂船【名】打櫂にて船を操り、艫(トモ)に具ふる練櫂にて舵(カヂ)を取る船。傳馬船。

うぢ-から 宇治香【名】組香(クミカウ)の名目の一。

うち-がうし 内格子【名】**一**内方へ上ぐるやうにせる格子。一説には、そとに一の戸じまりありて、それより内に更に作り設けたる格子。(そと格子に對して) **二**芝居の東西兩方の上棧敷(カミサジキ)の、舞臺の方より八間だけの距離の所。

うちがう-たんざん 内郷炭山【名】〔地〕磐城國石城(イハキ)郡内郷村にある石炭坑。

うち-かうぶり 内冠【名】從五位下の内位に敍せらるること。〔古語〕空穗「大將殿の御いたはりにて、七日の日、うちかうぶりたまはり」

うぢ-かがのじよう 宇治加賀掾【名】〔人〕うぢかだいふ(宇治嘉太夫)に同じ。

うち-かぎ 打鉤・打鎰【名】鐵の鉤(カギ)に長き柄をすげたる武器。柄の孔に、細引をとほしたるもあり。昔の船いくさの時、敵船に打ちこみて、これを引寄するに用ひなどしたり。

うち-がき 打牡蠣【名】〔動〕いそがき(磯牡蠣)に同じ。

うち-かく 打懸く【動下二自】打ちてかかる。竹取「波は、船にうちかけつつ」

うち-かく 打缺く【動四他】ぶっかく。打ちくだく。

うち-かく 打懸く【動下二他】『うち(打)は接頭語』かく(懸く)を强めていふ語。

うち-かくし 内隱【名】洋服の内側にあるかくし。うらかくし。

うち-かけ 打かけ【名】能樂(ノウガク)の大鼓打手の一。

うち-かけ 打掛【名】**一**りやうたう(裲襠)に同じ。〔裲襠〕和名「裲襠、宇知加介、其一當レ胸、其一當レ背也」**二**舞樂の裝束の一。その制、前記の打掛に似たり。りやうたう。〔裲襠〕**三**婦人の通常の禮服の一。帶を締(シ)めたる上に掛けて著る長き小袖。小うちぎに擬したるもの。かけ。かいどり。

(うちかけ三)

うち-がけ 内掛【名】相撲(スマフ)の手の一。障泥掛(アフリガケ)の一種。一方の足を相手の内方より掛けて、これを倒すもの。(そと掛に對して)

うちかけ-えぼし 打掛烏帽子【名】古、折烏帽子を、小結(コユヒ)も頂頭掛(チヤウヅガケ)も附けず、頭に押入れて、後の針のみにて留めおきしもの。

うちかけ-かたぎぬ 打掛肩衣【名】肩衣の裾を袴の内に入れずに、肩より打掛けて著ること。

うちかけ-がなもの 打掛金物【名】わたりがなもの(渡金物)に同じ。

うちかけ-ぎぬ 打掛衣【名】**一**むし(帔)に同じ。名義抄「帔、ウチカケギヌ、ムシ」**二**きぬかづき(衣被)に同じ。

うちかけ-すはう 打掛素袍【名】素袍の裾を、袴の内に入れずに、肩より打掛けて著ること。

うちかけ-よろひ 打掛鎧・掛甲・挂甲【名】絹布を鎧の形に裁(タ)ち、墨にて畫き、又は漆にて塗りなどし、古の武士の、儀式のときに飾りに著けたるもの。裲襠(リヤウタウ)はこれより變化せるものなるべしといふ。かけよろひ。けいかふ。延喜式「掛甲、ウチカケヨロヒ」

うち-がさね 打襲【名】うちあはせ(打袷)に同じ。

うち-がし 内貸【名】前金にて、報酬または賃錢などの幾分を拂ふこと。(内借に對して)

うち-かた 打方【名】**一**打つ法。「銃のうちかた」「碁のうちかた」**二**銃砲の發射。「うちかた止(ヤ)め」**三**鼓などを打つ方の組。(囃子方などに對して)

うち-かた 内方【名】**一**他人の妻の敬稱。内儀。おくさま。うちぎみ。うらかた。貫之集「民部卿六十の賀、つねすけの中納言のうちかた、せられける」**二**貴人の家に仕ふる女。**三**家の内。家内(カナイ)。浮世親仁形氣「きのふより、内方は、上へ下へとかへして」**四**枡などの内側のさしわたし。うちのり。

うち-がた 内方【名】内裏(ダイリ)に屬する人。〔古語〕榮花「長日の御修法・御讀經など、うちがたよりも始めさせたまひ」

うち-かた 打肩・痃癖【名】はやうちかた(早打肩)に同じ。

うぢ-かだいふ 宇治嘉太夫【名】〔人〕三絃の名人。伊勢島宮内(クナイ)の門人。和歌山の人。加賀掾(カガノジヨウ)と稱す。嘉太夫節、また加賀節の祖。寶永八年歿す。年七十七。

うち-がたな 打刀【名】鍔(ツバ)を附けて、敵を打つに便ならしめたる刀。長きを普通とす。(敵を刺すに用ふるものと區別していふ)即ち後世大小と稱するもの。(常には單にかたなといひ、軍中にてこの語を用ふといふ)うちだち。つばがたな。東鑑「上總五郎兵衞、懷中帶二一尺餘打刀一」著聞「死にたる牛、やすやすと働きて、腹の中より、大の童子、うちがたなを拔きて走り出で」

うち-かつ 打勝つ【動四自】『うち(打)は接頭語』かつ(勝つ)を强めていふ語。

うち-かつ 討勝つ【動四自】討ち平ぐ。討ち破る。

うぢ-かど 氏門【名】いへがら。いへすぢ。一門。〔古語〕續紀「己が氏門(ウヂカド)をも」

うち-がね 打金【名】小銃の火門の上に附

くる彈金（ハジキガネ）。はじけば雷管（ライクワン）をつぶして發火せしむ。はじき。鷄頭。

うち-がは 内側 【名】物の内の面。裡面。内部。

うぢ-がは 宇治川 【名】〔地〕一 山城國に在る川。近江國勢多（セタ）川の下流を、山城國宇治の邊にて呼ぶものにて、元暦元年梶原景季と佐佐木高綱と先登を競ひしところ。その下流、即ち同國淀の邊より以下を淀川といふ。二 伊勢國五十鈴川（イスズガハ）の別稱。

うぢがは-しふ 宇治川集 【名】〔書〕「書中、武士の歌多く、「もののふの」といふ枕詞は、八十宇治川（ヤソウヂガハ）といふ語にかかるものなるよりいふ」新勅撰和歌集の異名。

うち-かはす 打交す 【動四他】『うち（打）は接頭語』かはす（交す）を强めていふ語。

うぢ-かばね 氏姓 【名】氏と、かばねと。

うち-がひ 打違 【名】一 うちちがひ（打違）に同じ。〔古語〕 新六「和泉川くだる小舟のうちがひに淺瀨ぞしるき行きなやみつつ」 二 次條の略。〔打飼〕

うちがひ-ぶくろ 打違袋・打飼袋 【名】細き筒形に作り、兩端に出入の口を設け、物を入れて、腰に打違（ウチチガヒ）に佩ぶる一種の袋。もと、狩の時に、鷹又は犬などの餌を入るるに用ひしが、後には金錢など種種の物を入るるに用ひたり。うちがひ。うちがへ。うちがへぶくろ。たびぶくろ。

うち-かふ 打更ふ 【動下二他】一 更に新に打つ。二 金屬製の具などを、更に鍛ふ。

うちかふ 幹 【名】碁の手の名目の一。

うち-かぶと 内冑 【名】一 冑の裏面。 麻布などにて作る。頭入（ツイリ）。 保元「四郎左衞門も、うちかぶとを射させて、引退く」 二 手のうち。てもと。内證。 うちぶところ。うちまく。 浮世親仁形氣「世間の人に、うちかぶとを見られ、大分、身上のさはりとなります」

うち-かへ 打交 【名】うち交（カハ）すこと。〔古語〕 萬葉「からころも裾のうちかへあはねどもけしき心をあがもはなくに」

うち-がへ 打飼 【名】うちがひぶくろ（打違袋）に同じ。

うち-かへし 打返 【名】一 打返すこと。「煙管のうちかへし」「田畑のうちかへし」 二 芝居にて、背景などの書割の板を裏がへせば、裏にも別の書割ありて、場面の景色の一變するやうにしかけたること、又その板。 三 魚の脊鰭（セビレ）の一部の名目。

うち-かへし 打返 【副】あべこべに。反對に。 赤染衞門集「雪をのみとは見しがうちかへし花も雪かと見ゆる春かな」

うちかへし-わた 打返綿 【名】打ちかへしたる綿。うちわた。

うち-かへす 打返す 【動四他】一『うち（打）は接頭語』かへす（返す）を强めていふ語。 二 他人に打たれたる報として、又その人を打つ。 三 くりかへす（繰返す）に同じ。〔古語〕 源氏「さきの世ゆかしうなんと、うちかへしつつ」 四 古き烟管（キセル）又は紐などを、更に打ちて新しき物とし、又は古き綿を再び綿弓にて彈（と）き分く。 五〔農〕打起したる土壤を更に耕して、その土を反轉す。 六 先方へ打ちて返す。「電報をうちかへす」 七 博弈（バクエキ）にて、更に打ちて、先に負けたる分をも取返す。

うち-かへす 打返す 【動四自】退きたる波、再び寄來る。

うちかへ-て 打替手 【名】然あるやうに見せて然あらぬこと。あべこべ。うらうへ。〔德川時代の遊里の語〕 色道大鑑「うちかへて。圍碁より出でたることばなり。僞る姿なり。直道に物をいはず、あなたの事をいひて、こなたへ引きかけ、來らじといひて來る貌なり」

うちがへ-ぶくろ 打違袋 【名】うちがひぶくろ（打違袋）に同じ。

うち-がみ 打紙 【名】一 槌にて打固め、滑（ナメ）かにして光澤を出したる紙。 二 おほたかだんし（大高檀紙）に同じ。

うぢ-がみ 氏神 【名】一 一家の先祖を、神として祀れるもの。 藤原氏が春日の神を祭り、源氏が八幡太郎を祭る類。 これが祭祀は、氏の長者、氏人を率ゐて行へり。うぢのかみ。 源氏「一人の娘とてこもりおはする程は、必ずしもうぢがみの御つとめなどあらはならぬほどなれば」 二 うぶすながみ（產土神）に同じ。

時の氏神 【句】「挨拶は時の氏神」を見よ。

うぢがみ-の-じんじや 宇治上神社 【名】りぐうはちまん（離宮八幡）に同じ。

うち-からみ 打搦 【名】相撲（スマフ）の手の一。四手（ヨツ）に組み、我が體を潛めながら、さしたる手の方の足を、相手の内股より掛け、體を反（ソ）らせながら捻（ネヒ）り倒すこと。かけそり。

うち-がり 内借 【名】報酬・賃錢などの幾分を、前金にて借ること。（内貸に對して）

うちき 【名】芝居狂言にて、盜みをすること。

うち-き 内氣 【名】遠慮深きこと。事を控目（ヒカヘメ）にする氣質。小心。うちわ。

うち-ぎ 打木 【名】一 酒粕（サケカス）より酒をしぼり取る道具。 二 きね（杵）を云ふ。〔羽前國・羽後國の方言〕

うち-き 袿 【名】一『うちかけて著るものなるより、打著の意にていふ』古、男子の直衣（ナホシ）の下、又、婦人の唐衣（カラギヌ）の下に著用せし服。 おほうちぎ（大袿）・こうちぎ（小袿）・いだしうちぎ（出袿）參照。 源氏「かしらつき・髮のかかりはしも、…うちぎの裾にたまりて」 二 天子の御もとどり又は御鬢を結ふ人。 藏人（クラウド）の中にてこれに當り、紫の絹の直衣（ナホシ）を著、その下に袿（ウチギ）を著て祗候（シコウ）す。〔古語〕 源氏「上の御けづりぐしにさぶらひけるを、果てにければ、上は、御うちきの人召して」

うち-ぎき 打聞・打聽 【名】一 ふと聞くこと。ちよつと聞きたること。〔古語〕 源氏「深き筋おぼえぬ程のうちぎきには、をかしかなり」 二 聞きたるままを記しおくこと、又そのもの。ききがき。 三 歌を聞きたるままに書集めたるもの。 枕「人と言ひかはしたる歌の、きこえて譽められ、うちぎきなどに書入れらるる」

うち-きく 打聞く 【動四他】『うち（打）は接頭語』きく（聞く）を强めていふ語。

うち-きず 打傷 【名】物に打ちつけ、又は打たれて受けたる傷。打撲傷。

うちき-すがた 袿姿 【名】袿のみを著て、男ならば直衣（ナホシ）・狩衣（カリギヌ）など、又、女ならば裳（モ）・唐衣（カラギヌ）などを著ぬ姿。〔古語〕 源氏「あざれたるうちきすがたにて、笛をなつかしう吹きすさびつつ」

うち-きたむ 打鞫む 【動四他】『うち（打）は接頭語』きたむ（鞫む）を强めていふ語。〔古語〕 紀「うづまさは神とも神をきこえくる常世（トコヨ）の神をうちきたますも」

うち-きど 内木戸 【名】劇場の事務員の名目の一。

うち-ぎぬ 打衣 【名】『打とは、昔は砧（キヌタ）にて打ちて光澤を出ししよりいふ。但し後世は、いたびき（板引）の法を用ひたり』古の婦人が、正裝の時、五衣（イツツギヌ）の上に著し服。うちあこめ。うちあはせ。うちがさね。〔古語〕 女官飾抄「うちぎぬのこと、紅の綾をうちてかさねられ候ふを」 增鏡「濃き紅梅の十二の御ぞに、同じ色の御ひとへ、紅のうちたる、萌黃のおんうちぎぬ」

うち-ぎね 打杵 【名】きね（杵）に同じ。 若風俗「米も大かたに白（シラ）む時、うちぎねを投げすて」

うち-ぎみ 内君 【名】他人の妻の敬稱。うちかた。おくさま。おくがた。

うち-きん 内金 【名】買物又は誂物（アツラヘモノ）などの契約したる總金高の中の幾分。さしきん。にふきん。てつけきん。

うち-きん 打金 【名】〔商〕下等の品と上等の品と引替ふる時、その價の不足の分を補ふ金錢。

うちきん-うけとりしよ 内金受取書 【名】内金を受取りたる者より支拂人の方に渡す受取書。

うち-ぎんなん 打銀杏 【名】銀杏を炒（イ）りて皮を去り、熱湯を通して、布にて包み、槌にて打ちつぶしたるもの。多く旨煑（ウマニ）などに用ふ。

うち-きらす 打霧らす 【動四自】『うち（打）は接頭語』きらす（霧らす）を强めていふ語。〔古語〕 源氏「うちきらし朝ぐもりせしみゆきにはさやかにそらの光やは見し」

うち-きり 打切 【名】一 まづ終りとすること。 二 能樂打切の際の大小鼓の打手の一。 三 花合せにて、手の札をみな打ちをはること。うちじまひ。

うち-きり 内切 【名】一 矢を射て、弦（ツル）を脈所へひしとうちつくること。 二 能（ノウ）に

て、謠(ウタヒ)の切るる所に打つ拍子(ヒヤウシ)。

うち-きる 打切る【動四他】㊀『うち(打)は接頭語』切る。斬る。〔打斬る〕㊁一先づ終りとす。

う-ぢく 羽軸【名】〔動〕鳥の羽の中軸。これより羽枝を派生す。

うち-くだく 打砕く【動四他】うちこはす。うち破る。

うちくち-ぶり 【名】『いそぶり(磯觸)參照』あちこちに觸れさはることとならんといふ。〔古語〕萬葉「うちくちぶりの白波の荒磯(アリソ)に寄する」

うち-くつろぐ 打寛ぐ【動四自】『うち(打)は接頭語』くつろぐ。うちとく。

うち-ぐひ 打杙・打杭【名】地上などにうちこみたる杭。落窪「うちぐひ打ちたる方に立てたらばこそ、さもしたまはめ」

うち-くび 打首【名】ざんざい(斬罪)に同じ。

うち-くんず 打屈ず【動佐變自】『うち(打)は接頭語』くんず(屈ず)に同じ。〔古語〕枕「うちくんじたるこそ、あはれなれ」

うち-ぐもり 内曇・内陰【名】㊀鳥子紙(トリノコガミ)の上には藍、下には紫などの色にて、雲形を漉(ス)き出したるもの。短册などに多し。凶事には上・下の色を反對にす。㊁黃白色にして紫色の紋脈(モンミヤク)ある砥(ト)。山城國鳴瀧(ナルタキ)山などより出で、刀劍の地金を研ぎ、又は刀劍に光澤を添ふるに用ふ。㊂盃に用ふる土器の、内に淡黑き三つ星のごとき文(アヤ)あるもの。

うち-くら 内藏【名】古の朝廷の倉庫の一。三韓よりの貢物增加の結果、履仲天皇の御代に、齋藏(イミクラ)の傍に更に建てて、神物以外の官物を收めたるもの。阿知使主(アチノオミ)及び百濟の博士、王仁(ワニ)をして出納・記錄を掌らしめ、又、藏部(クラヒトベ)を置くに至れり。うちつくら。うちのくら。さんざう(三藏)參照。

うち-ぐら 内庫・内藏【名】家の内に作り設けたる土藏。冥途飛脚「白銀は内庫へ、金子は戸棚へ」

うち-ぐら 打鞍【名】『うつ(打つ)㊈を見よ』のりぐら(乘鞍)に同じ。

うぢ-くらうど 氏藏人【名】『藤原氏の者ならば藤藏人、源氏の者ならば源藏人といふ等、その氏を稱するを以てなり』六位の藏人の第三席に位する者。氏の藏人。

うち-くらおほひ 打鞍覆【名】鞍おほひの一種。打ちて光澤を出したる織物にて作れるもの。

うぢ-くらゐ 氏位【名】門地と位階。

うち-ぐり 打栗【名】搗栗(カチグリ)を蒸して砂糖を加へ、紙の間に入れて、円く打ちひらめたる菓子。大さ二錢銅貨ほどにて、甲斐國の産、最も名あり。

うち-くる 打呉る【動下二他】『うち(打)は接頭語』うちまかす。わたす。平家「この馬の癖として、口をば主にうちくれて、胸にて走る馬なりけり」

うち-くるぶし 内踝【名】内側へ向きたる方のくるぶし。(そと踝に對して)

うち-ぐるま 内車【名】㊀自家用の人力車。かかひぐるま。てぐるま。㊁器械の車輪の、内部にありて見えぬやう装置せられたるもの。(そと車に對して)

うち-ぐるわ 内郭【名】城砦中の内側にある郭。(そと郭に對して)

うち-ぐろ 内黑【名】内側の黑きこと。(外黑に對して) 空穗「鉢、しろがねをうちぐろに色どれり」

うち-げいき 内景氣【名】〔商〕取引所の大引後、又は日曜日などに、次の立合の相場につきて、黑人筋が賭(カケ)を試むること。

うち-げいしや 内藝者【名】茶屋・妓樓などにかかへおく藝妓。(他より招く藝妓と區別していふ)

うぢ-けいづ 氏系圖【名】家がら。家門。

うち-けし 打消【名】打消すこと。無くすること。否定。

うち-けす 打消す【動四他】㊀『うちは接頭語』けす(消す)に同じ。㊁さる事無しと斷言す。否定す。

うち-けつ 打消つ【動四他】前條㊀に同じ。〔古語〕重之集「水の上の濱名の橋も燒けにけりうちけつ浪やよりこざりけん」

うち-げんくわん 内玄關【名】主として家人の出入するための玄關。ないげんくわん。(客の出入するためのと區別していふ)

うち-こ 打粉【名】刀劍又は鏡などの曇(クモリ)を防ぐために打ちかくる粉。砥粉(トノコ)を絹布に包み、絲にて括(クク)り、打てば絹地より透出(トウシユツ)するやう作らる。

うぢ-こ 氏子【名】㊀氏の子孫。氏神㊀をおなじくする人民。うぢびと。㊁うぶこ(産子)に同じ。

うち-こさく 内小作【名】徳川時代の小作の一。小作人を自宅に住はしめ、年期を定めて小作せしめしもの。

うち-こし 打越【名】㊀酒宴にて、他人を超え、特別に名指して、盃をさすこと。㊁〔文〕連歌の或句より一句置いて前の句。連歌は變化を貴ぶが故に、打越に似るを忌む。例へば第三句は、第二句に附くこと勿論にして、而も第一句に趣向の似ざらんことを要するが如し。こし。㊂〔建〕或點を越えて測りたる長さ。例へば、「屋根の流れ、うちこし何尺」といへば、軒より棟(ムネ)を越して、更に他方の軒までの總計の尺度をいふ類。㊃「裏の印(カネ)」に同じ。

うちこし-うた 打越歌【名】〔文〕かねて後のことを詠(ヨ)める歌。例へば詞花和歌集にある「君が代の久しかるべきためしにやかねてぞ植ゑし住吉の松」の類。

うち-こしかけ 内腰掛【名】茶席の露地(ロヂ)にて、中潛(ナカクグリ)の内にある腰掛。

うちこし-ぎらひ 打越嫌【名】〔文〕連歌・連俳の去嫌(サリキラヒ)の名目の一。附けては苦しからねど、一句隔てて用ふるは嫌ふ言葉。

うちこし-だるき 打越棰【名】〔建〕神社の造營にて、本屋(オモヤ)より向拜柱(カウハイバシラ)の上に架け渡したる棰。

うち-ごしらへ 内拵【名】㊀自分の家にて造ること、又その造りたる物。㊁徳川時代に、年貢米(ネングマイ)の枡目に不足ありと認(ミト)めし俵に、補足して繕(ツクラ)ふこと。

うち-こす 打越す【動四自】『うち(打)は接頭語』こす(越す)を強めていふ語。

うぢこ-ぢゆう 氏子中【名】おなじ氏神を祀(マツ)る人民。うぢこ同士。

うちこ-ないしんわう 有智子内親王【名】〔人〕嵯峨天皇の皇女。性、貞潔、詩文をよくし、弘仁五年加茂の齋院(サイヰン)となる。賀茂齋院の始めなり。位二品に至り、承和十四年薨ず。年四十一。

うぢこ-ないしんわう 氏子内親王【名】『天皇の御氏神は伊勢大神宮にておはしますよりいふ』いつきのみや(齋宮)に同じ。

うち-こはし 打壞【名】㊀うちこはすこと。破壞。㊁天明の饑饉の時、貧民の一部が、團結して、富家の家屋などをうちこはしあるきしこと。

うち-こはす 打壞す【動四他】たたきこはす。うちやぶる。うち損ず。

うち-こみ 打込【名】㊀うちこむこと。㊁大勢揃ひて敵に駈け向ふこと。㊂擊劍にて、初心の者が先輩を相手に、籠手(コテ)・突(ツキ)などを行ひて、竹刀(シナヒ)の捌(サバキ)を練習すること。㊃清酒を仕込むに、枝桶(エダヲケ)使用仕込の後、醱酵(ハツカウ)の經過を見はからひて、漸次に技桶を親桶に合併すること。㊄圍碁にて、相手の地張内に石を下して、活路を求め、又は母石に連結を圖ること。〔擊込〕㊅芝居の囃子(ハヤシ)の一種。大太鼓を音高く打つこと。二番目狂言の始まる前などに行ふ。

うちこみ-いし 打込石【名】けこみいし(蹴込石)に同じ。

うちこみ-くわん 打込環【名】掛物に打込みて、紐を附くる環。おみえくわん。はなくわん。

うちこみ-ばけ 打込刷毛【名】次條に同じ。

うちこみ-ぶらし 打込刷毛【名】活版の紙型(シケイ)を造るに用ふるブラシ。形大きくして、把手あり。

うち-こむ 打込む【動四他】㊀打ちたたきて、深く入らしむ。㊁博奕(バクエキ)を打ちて、金品を賭(カケ)に取らる。うちいる。㊂熱心に思ひこむ。氣に入る。ほれこむ。身をうつ。諸國物語「園九郎は、娘にうちこんでより、人のおもはくもかへりみず」㊃急所をつく。とひて詰(ナジ)る。非難す。世間子息氣質「彼處は夜をどらせぬとうちこむ」

うち-こむ 打籠む【動下二他】『うち(打)は接頭語』押しこむ。とりこむ。保元「四の宮とて、うちこめられておはせしを」

うち-こゆ 打越ゆ【動下二他】『うち（打）は接頭語』こゆ。越えすぐ。

うち-ころす 打殺す【動四他】㊀『うち（打）は接頭語』ころす（殺す）を强めていふ語。大和「年ごろねたきものうちころしはべりぬ」㊁大砲又は小銃を放ちて殺す。

うち-ごろも 裏衣【名】三綱（サンカウ）以下の凡僧の著る衣。平家「那智ごもりの僧どもも、みなうち衣の袖をぞ絞りける」

うち-ざ 内座【名】江戸幕府の殿中にありし勘定所。（下御勘定所に對して）

うち-さくらだ-もん 内櫻田門【名】江戸城内廓諸門の一。前に外櫻田門あるに對していふ。一名、桔梗（キキヤウ）門。

うち-ざし 内差【名】内部よりとざすこと。落窪「うちざしにさし籠らんと思ひて、よろづに開くまじきやうに構ふ」

うち-ざた 内沙汰【名】㊀表向きにならぬ公事（クジ）。（表沙汰に對して）狂言（内沙汰）「内沙汰にして見さしやれい」㊁能（ノウ）の狂言の一。一名、右近左近（ウコンサコン）。

うち-さぶらひ 内侍【名】母屋（モヤ）の周圍の板敷の、疊を敷きたる所。侍所。さむらひ。（遠侍に對して）

うち-ざま 内樣【名】禁裏方（キンリガタ）。官軍がた。平家「九州の者どもをば、みな内樣へこそ召されしか」

うち-さます 打冷す【動四他】『うち（打）は接頭語』興をさます。〔古語〕榮花「よろづうちさましたるやうにて、あさましう人笑はれなる御ありさまを、ひと殿の内思ひなげき」

うち-さんずん 内三寸【名】脛（スネ）の踏上（ジフウヤ）より内三寸ほどの邊。（外三寸に對して）

うち-ざめ 打鮫【名】鮫の皮にあるがごとき粒を打出したる金銀の薄板。刀の柄の飾りに用ふ。太平記「打鮫の金作（コガネヅクリ）の太刀」

うち-しき 打敷【名】布帛にて作りたる敷物。多く佛に供する物の臺に敷き、又、僧家にては、案の横・周圍などに掛けて用ふ。机掛の類。蓋袱（ガイフク）。源氏「うちしきは、えびぞめのから錦なり」

うち-しき-だな 打敷棚【名】香道に用ふる一種の棚。

うち-したがふ 討從ふ【動下二他】討負かして、われに從はしむ。

うち-じに 討死【名】戰場にて死ぬること。戰死。

うぢ-じふでふ 宇治十帖【名】〔書〕源氏物語五十四帖のうちの、橋姬・椎（シヒ）が本（モト）・總角（アゲマキ）・早蕨（サワラビ）・宿木（ヤドリギ）・東屋（アヅマヤ）・浮船・蜻蛉（カゲロフ）・手習・夢の浮橋の十帖。この十帖は、八の宮といふ人の、山城國宇治にての事より書きおこしありて、源氏物語全篇中の後篇の如きものなるより、特にいふ。宇治の卷。

うぢしふゐ-ものがたり 宇治拾遺物語【名】〔書〕今昔（コンジヤク）物語の體に倣ひて、種種の小話を書きあつめたるもの。十五卷。

うぢ-じま 宇治島【名】〔地〕薩摩國川邊郡に屬する島。周回、約一里。

うち-じまひ 打仕舞【名】うちきり（打切）㊂に同じ。

うち-しゆ 内衆【名】その家に於ける凡ての人人。曾根崎心中「旦那樣・内儀樣、もうお目にはかかりますまい。さらばでござんす。内衆もさらばさらば」

うち-しろ 内城【名】島津氏の第九世貴久（タカヒサ）の、薩摩國鹿兒島に築きて移りし城。

うち-す 打爲【動佐變他】『うち（打）は接頭語』す（爲）を强めていふ語。〔古語〕枕「あくびを、おのれうちして」

うち-すう 打据う【名】㊀『うち（打）は接頭語』すう（据う）を强めていふ語。㊁打ちて倒す。たたきたふす。

うち-すがふ 打次ふ【動四自】『うち（打）は接頭語』すがふ（次ふ）を强めていふ語。〔古語〕源氏「うちすがひたる尼ども」

うち-すがる 打縋る【動四自】『うち（打）は接頭語』すがる（縋る）を强めていふ語。

うち-すぐす 打過す【動四自】㊀『うち（打）は接頭語』すぐす（過す）を强めていふ語。㊁年嵩（トシカサ）まさる。源氏「四とせばかりがこのかみにおはすれば、うちすぐしはづかしげに」

うぢ-すじやう 氏素性【名】氏と素性と。家柄と身分。

うち-すずめ 内雀【名】〔動〕ひとりむしの雌。形大きく雀に似て、翅は茶色にて、模樣あり。ざしきすずめ。

うち-すつ 打捨つ【動下二他】㊀『うち（打）は接頭語』すつ（捨つ）を强めていふ語。㊁斬りずてにす。

うち-すて 打捨【名】㊀打捨つること。㊁斬りすてにすること。

うち-ずみ 内住【名】㊀内裏（ダイリ）に住居すること。（里住に對して）〔古語〕源氏「かく心細くておはしまさんよりは、うちずみさせたまひて」㊁藏人（クラウド）又は女房の、御召によりて、常に宿直（トノヰ）に供奉せしもの。

うち-すゐかん 打水干【名】砧（キヌタ）にて打ちて光澤を出したる水干。

うちせ-あみ 打瀬網【名】船にて、海底を曳きまはして、魚を捕ふる一種の引網。うたせあみ。とろおるあみ。

うちせあみ-ぶね 打瀬網船【名】とろおるせん（トロオル船）に同じ。

うち-ぜん 内鐵【名】鉋（カンナ）の一種。桶板の彎曲せる内面を削るに用ふるもの。（そと鐵に對して）

うち-そ 打麻【名】麻を打ちて柔かくしたるもの。又「うつそ」と訓むべしとの說あり、その條及び次條參照。〔古語〕

うちそ-かけ 打麻懸【枕】打麻を鑵（クワ）にかけて績（ウ）む意にて、うむ（績む）にかけていふ。萬葉「をとめらがうみをのたたりうちそかけうむ時なしに戀ひわたるかも」

うち-そと 内外【名】内と外と。うちと。ないぐわい。

うちそ-はし 打麻はし【枕】『はとしとは感嘆の意の助辭』次條に同じ。萬葉「うちそはしをみの子らありきぬのたからの子ら」

うちそ-を 打麻を【枕】打麻を績（ウ）むといふ意にて、うむの轉なるをみにかけていふ。萬葉「うちそををみの大君あまなれやいらこが島の玉藻かります」

うぢ-だいなごん 宇治大納言【名】〔人〕『山城國宇治に別荘ありしよりいふ』みなもとたかくに（源隆國）に同じ

うぢだいなごん-ものがたり 宇治大納言物語【名】〔書〕宇治拾遺物語に倣ひて作れるもの。三卷。群書類從中に收む

うちだうぐ-まはり 内道具廻【名】酒造の藏男（クラヲトコ）。

うち-たえ 打絕え【副】『うちたゆ（打絕ゆ）の連用形より轉じたるもの』つねに。始終。全く。その後は。沙石集「うちたえ我が房におきて」「打ちたえ御無沙汰致し候」

うぢたか-りう 氏隆流【名】武家禮式の一派。小笠原氏隆を祖とす。

うちだ-ぐつわ 内田轡【名】紋所の一。普通の轡の弧に中る中央を割りたる外緣に、更に環（ワ）を重ね、その環の左右上下に四つの點を配りたるもの。

うち-たけ 打竹【名】さきたけ（拆竹）の誤か。〔古語〕記「釣らせる海人（アマ）が大口の尾はた鱸、さわさわに引きよせあげて、打竹のとををとををに」

うち-だけ 内竹【名】まへだけ（前竹）に同じ。

うち-だし 内出【名】〔商〕いちぶしゆっこ（一部出庫）に同じ。

うち-だし 打出【名】㊀うち出すこと。㊁うちだしだいこ（打出太鼓）の略。㊂うちだしぼり（打出彫）の略。㊃武具の指物（サシモノ）の一種。㊄模樣などを、裏より打ちて表に出すに用ふる型（カタ）。㊅花ガルタにて、場に合札（アヒフダ）無くして、手より札をいだすこと。

打出の頭（カシラ）【句】能樂の大鼓の打手の一。

うちだし-かのこ 打出鹿子【名】打出にしたる鹿子染（カノコゾメ）。

うちだし-だいこ 打出太鼓【名】興行物のその日の最後に打鳴す太鼓。うちだし。

うちだし-ぼり 打出彫【名】金屬の裏面より鏨（タガネ）にて打出して、模樣その他を表面に凸起せしむること。うちだし。

うち-だす 打出す【動四他】㊀打ちはじむ。㊁打ちて出でしむ。㊂『うち（打）は接頭語』だす（出す）を强めていふ語。㊃田地などの檢地の竿を打ちて、餘地を見出す。㊄金具などを、裏より打ちて、表へ高く模樣を出す。㊅芝居・相撲（スマフ）などのその日の興行の畢りたる合圖（アヒヅ）の太鼓を打ち、見物人を歸らしむ。はねる。

うち-たたく 打叩く【動四他】ぶつ。なぐる。ちやうちやくす。

うち-だち 打太刀【名】㊀うちがたな（打刀）に同じ。㊁たちうち（太刀打）に同じ。

うち-たつ 打立つ【動四自】『うち(打)は接頭語』㊀たつ(立つ)を強めていふ語。㊁旅立つ。門出す。うったつ。

うち-たつ 打立つ【動下二他】『うち(打)は接頭語』たつ(立つ)を強めていふ語。

うち-たふす 打倒す【動四他】㊀『うち(打)は接頭語』たふす(倒す)を強めていふ語。㊁打ちて、倒れしむ。

うち-たまがき-ごもん 內玉垣御門【名】伊勢神宮の兩宮の外より、第二の御門。祭典の時、玉串(タマグシ)を奉るところなるが故に、玉串御門ともいふ。

うち-たゆ 打絕ゆ【動下二自】『うち(打)は接頭語』全く絕ゆ。一向に音づれず。源氏「うちたえて、內・春宮(トウグウ)にも參りたまはず」

うち-たる 打垂る【動下二自】『うち(打)は接頭語』たる(垂る)を強めていふ語。

うち-たれ 打垂【名】㊀弓の袋の、上部の括(クク)りあまり。㊁武具の指物(サシモノ)の一。

うち-たれ-がみ 打垂髮【名】女又は兒童の頭髮の、結び上げず垂しかけたるもの。古の一般の風俗なりしなり。〔古語〕源氏「なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うちたれがみの見えつるは」

うち-たをり 打手折【枕】『うち(打)は接頭語』手折ればたわむより、たむにかけていふ。萬葉「うちたをりたむの山霧しげきかも細川の瀨に波のさわげる」

うぢ-ち 氏地【名】氏神の鎭守したまふ領內。道中雙六「鎌倉八幡宮の氏地の生れ」

うち-ちがひ 打違【名】㊀十の字を斜にしたる形。すぢかひ。うちがひ。ぶっちがひ。㊁交叉(カウサ)。

うち-ちがふ 打違ふ【動四自】㊀すぢかひになる。ぶっちがふ。㊁往きちがふ。

うち-ちがふ 打違ふ【動下二他】㊀『うち(打)は接頭語』たがひちがひにす。すぢかひに交叉(カウサ)す。㊁『うち(打)は接頭語』ゆきちがはす。㊂『さしちがふ(刺違ふ)參照』互に打つ。太平記「懸っては打違へて死し、馳入っては、組んで落ちて」

うち-ちん 打賃【名】兩替(リャウガヘ)の手數料。きりちん。

うぢ-ちや 宇治茶【名】山城國宇治より製出する葉茶。その品質、全國中最良なり。

うち-ちやうちやく 打打擲【名】ちやうちやく(打擲)に同じ。

うち-ぢやや 內茶屋【名】大阪の芝居の西の下棧敷(シタサジキ)の後にありて、茶・菓子・番附などを鬻(ヒサ)ぐ所。

うち-ぢゆう 家中【名】家內のこらず。擧家。闔家(カフカ)。渾家。全家。

うち-ちらす 打散す【動四他】㊀『うち(打)は接頭語』ちらす(散す)を強めていふ語。㊁攻めて、敵を逐散らす。攻めて走らす。

うち-づ 打出づ【動下二自】うちいづ(打出づ)の略。

うち-つ-おみ 內臣【名】古の令外(リヤウゲ)の官の一。皇極天皇の四年に初まり、光仁天皇の初に絕ゆ。後世の內大臣に相當するものなるべし。ないしん。

うち-つぎ 打繼・打次【名】圍碁にて、勝負の容易に決せざる場合に、そのまま中止して、日時を隔てたる上、更にその續を打ちつづくること。

うち-つく 打附く【動下二他】㊀投げつく。なげやる。なげあたふ。㊁『うち(打)は接頭語』つく(附く)を強めていふ語。萬葉「あま雲にはねうちつけて飛ぶたづのたづたづしかも君しまさねば」㊂直接に言ふ。露骨に仕向く。

うち-つぐ 打繼ぐ【動四自】『うち(打)は接頭語』うちつづく(打續く)に同じ。源氏「居丈の高う…うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは、御鼻なりけり」

うち-つ-くに 內國【名】㊀五畿內。近畿。(地方と區別していふ)〔古語〕㊁自國。日本。(とつ國に對して)〔古語〕

うち-つ-くら 內藏【名】うちくら(內藏)に同じ。

うち-づくり 內造【名】屋內の造作。〔古語〕空穗「樓の勾欄など、あらはなるうちづくりには」

うち-つけ 打附【名】『うちつく(打附く)㊂の假體言』㊀にはか。だしぬけ。率爾。突然。朗詠「うちつけにものぞかなしき木の葉ちる秋のはじめをけふぞとおもへば」㊁あらは。露骨。むきだし。うちはなち。ぶっつけ。源氏「うちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性にて」

うちつけ-がき 打附書【名】㊀はしりがき。なぐりがき。ぶっつけがき。㊁書簡文に、時候・安否などを略して、直に用事を書き、又は表書に脇附(ワキヅケ)を省くこと。後者は下輩に遣す時にするわざなり。

うちつけ-げさう 打附懸想【名】うちつけなる懸想。輕率なる懸想。〔古語〕狹衣「かやうのうちつけげさうなどは、わざと御心にも入らず」

うちつけ-ごころ 打附心【名】俄かに思ひ立ちたること。〔古語〕源氏「うちつけ心ありて參りこんにだに」

うちつけ-ごと 打附言【名】言ふまじき事を、あらはに言ふこと。露骨なることば。〔古語〕榮花「左大臣殿・冷泉院など、うちつけごとする御物怪(モノケ)あり」

うちつけ-ぢやう 打附錠【名】簞笥(タンス)又は引出・けんどんの蓋(フタ)などに用ふる錠前。錠身は一枚の金板の內に藏せられ、上より鍵又は突起にて締りを附くるやう構造せらる。

うちつけ-ぶち 打附緣【名】襖(フスマ)などの緣の、釘にて打ちつけたるもの。

うちつけ-め 打附目【名】ふと見たる目。率爾なる見かた。瞥見。〔古語〕増鏡「たのもしくめでたき御まもりかなと覺ゆるも、うちつけめなるべし」

うち-つ-こと 內事【名】うちわのこと。一家事。〔古語〕紀「脩二敎于內一(ウチツコトヲマツリゴトセシム)」

うち-つづく 打續く【動四自】『うち(打)は接頭語』つづく(續く)を強めていふ語。源氏「はるかなるところにうちつづきて」

うち-つ-つみ 內罪【名】天の罰。神の罰。〔古語〕紀「天罰、ウチツツミ」

うち-つ-みかど 內御門【名】『內は內裏の意』禁裏の門。〔古語〕紀「閤門、ウチツミカド」

うち-つ-みや 內宮【名】奧むきの御殿。後宮。后の宮。〔古語〕紀「掖庭、ウチツミヤ」

うち-つ-みやけ 內官家【名】古、三韓を鎭撫して施政を拔ひし所。高麗(コマ)・百濟(クダラ)・新羅(シラギ)・任那(ミマナ)の諸國に置きたり。紀「內官家、ウチツミヤケ」

うち-つめ 打爪【名】鷹の足の一部の名目。

うち-つ-もののべ 內物部【名】うちのもののべ(內物部)に同じ。〔古語〕

うち-つる 打連る【動下二自】『うち(打)は接頭語』つれだつ。連れあふ。

うち-づゑ 打杖【名】能(ノウ)の道具の一。形撞木(シュモク)に似て、鬼などの持つもの。

うち-て 打手・討手【名】㊀攻擊する人人。討伐に向ふ人人。うって。うて。㊁銃砲をうつ人。㊂殺す人。

うち-で 打出【名】うちいで(打出)㊁に同じ。〔古語〕大鏡「えもいはぬ打出ども、わざとなくこぼれ出でて」

うち-てうし 打銚子【名】『柄を打ちたる意なるべし。うつ(打つ)㊇を見よ』長柄の銚子。

うち-てうず 打懲ず【動佐變他】うちて懲らす。打ちてこりさす。〔古語〕枕「この翁丸うちてうじて、犬島につかはせ」

うち-でし 內弟子【名】わが家に同居せしめておく弟子。塾生。

うちで-の-かさ 打出笠【名】金銀を打延べて附けたる笠なるべし。〔古語〕盛衰記「額に天冠をあて、白打出の笠を著て」

うちで-の-こづち 打出小槌【名】俗に、打てば、欲する所の何物にても生ずといふ槌。大黑天の右手に持てるもの。平家「手に持てるものは、聞ゆるうちでの小槌なるべし」

うちで-の-たち 打出太刀【名】金銀を打延べて附け飾りとしたる太刀。今昔「水干・裝束して、打出の太刀帶びたり」

うちで-の-はま 打出濱【名】〔地〕㊀『逢坂の關を打出でたる處にあるよりいふ』近江國滋賀郡膳所(ゼゼ)の北方なる湖濱。歌枕の一。夫木「關こえてうちでの濱のしののめに後より送る鳥の聲かな」㊁攝津國武庫(ムコ)郡精道(セイダウ)村の海濱。正平六年、足利尊氏・直義の兄弟ここに戰へり。太平記「打出の御影の濱の松原まで」

うち-てふつがひ 内蝶番【名】鎧の胴の蝶番の一種。（そと蝶番に對して）

うぢ-でら 氏寺【名】その氏にて、冥福と榮達とを祈るために代代歸依する寺。例へば、菅原氏のは河内國の道明寺・藤原氏のは奈良の興福寺・和氣氏のは京都の神護寺・平家のは京都の延暦寺なる類。「氏の社（ヤシロ）」參照。續世繼「その女も、大臣の仕へ人なりけるが、母の、筑紫に下りて、菅原の氏寺の別當に具したりけるが」

うち-と 内外【名】㊀うちそと（内外）に同じ。〔古語〕㊁佛教と儒教と。うち（内）參照。夫木「何としてうちとの書（フミ）を學びけんまくものぶるもものうかる世に」㊂次條の略。芭蕉「かの西行の涙のあとを慕ひ、增賀のまことをかなしびて、うちとの御前にぬかづきながら」

内外の神【句】伊勢の内宮と外宮（ゲグウ）とにまします神。

内外の宮【句】伊勢の内宮と外宮（ゲグウ）と。新古今「神垣や玉ぐしの葉をとりかざしうちとの宮に君をこそいのれ」

内外の山【句】伊勢の内宮と外宮（ゲグウ）との山。謡曲（海士）「げにや、名におふ伊勢をの海士は、夕波のうち（打・内）との山の月を待ち」

うぢ-どうふ 宇治豆腐【名】山城國宇治より製出せし豆腐。七一職人歌合「戀すれば苦しかりけり宇治豆腐まめ人の名をいかで取らまし」

うち-とく 打解く【動四他】『うち（打）は接頭語』とく（解く）を強めていふ語。枕「紐うち解き」

うち-とく 打解く【動下二自】㊀『うち（打）は接頭語』とく（解く）を強めていふ語。拾遺「氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯のこゑ」㊁互に隔て心なく交はる。心を打明して親しむ。うちくつろぐ。㊂苦勞・心配なくなる。心、せいせいとす。うちくつろぐ。㊃油斷す。心ゆるむ。枕「などかはさしもうちとけつると、笑はせたまふ」

うち-とけ 打解【名】うちとくること。濱松「うちとけのあさましげなる有樣」

うちとけ-がほ 打解顔【名】うちとけたる顔つき。源氏「扇なども落して、うちとけがほ、をかしげなり」

うちとけ-ごと 打解言【名】うちとけて心おきなく語る言葉。うちあけばなし。むつごと。歡語。〔古語〕枕「奥の方に、互にうちとけごと人のいふを」

うちとけ-ざま 打解樣【名】うちとけたる容子。憚らぬありさま。後拾遺「はやく見し岩井の水の薄氷うちとけざまはかはらざりけり」

うちとけ-すがた 打解姿【名】うちとけたる姿。とり亂したるみなり。蜻蛉「うちとけ姿にて出でて見るに」

うちとけ-ばなし 打解話【名】**うちとけごと**（打解言）に同じ。

うちとけ-ぶみ 打解文【名】うちとけて書きたる文。心をうちあくる文。〔古語〕源氏「書きかよはしたらんうちとけぶみ」

うちとけ-まさり 打解優【名】うちとけたる姿の、うちとけぬ時より、却て優れること。〔古語〕源氏「うちとけまさりの、聊かもあらば」

うちとけ-わざ 打解業【名】うちとけたるしわざ。ふざけごと。じやうだん。たはむれ。〔古語〕源氏「さまことに、さあらぬうちとけわざもしたまひて」

うち-どこ 打床【名】鍛冶（カヂ）に用ふる鐵の臺。かなとこ。

うち-どこ 内床【名】自宅にて髮結を業とすること、又そのもの。（出床に對して）〔江戶時代の語〕

うち-とす 内外す【動佐變自】許されて、その家に出入す。親しく出入す。〔古語〕榮花「年ごろ、大殿の御子のやうに思ひ聞えさせたまへりければ、御方方に、みな、うちとし給へるうちにも」

うち-とねり 内舍人【名】**うどねり**（内舍人）に同じ。〔古語〕和名「内舍人、宇知止禰利」

うち-どの 打殿【名】衣を砧（キヌタ）にて打ちて光澤を出す業をするために設けたる建物。**そめどの**（染殿）參照。〔古語〕源氏「ここ・かしこの打殿よりまゐれる物ども」

うぢ-どの 宇治殿【名】〔人〕『山城國宇治に別莊ありしよりいふ』**うぢのくわんぱく**（宇治關白）に同じ。

うちと-の-はま 内外濱【名】〔地〕丹後國天の橋立の別稱。

うち-とひ 内樋【名】〔建〕軒の背後に隱れたる樋。（外樋に對して）

うち-とほり 打通【名】『うち（打）は接頭語』つと通り行くこと。四谷怪談「かど口をうちとほりに、花道よき處まで行きかけると」

うち-とむ 擊止む・討止む【動下二他】戰ひて殺す。源平布引瀧「瀨の尾の十郎兼氏をうちとめた、一つの功」

うち-とむ 打留む【動下二他】㊀打附けて落ちぬやうにす。㊁彈丸をうちあつ。しとむ。假名手本忠臣藏「猪（シシ）うちとめしと、勘平は、鐵砲ひっさげ、ここ・かしこ探りまはりて」

うち-とむ 打止む【動下二他】興行を止む。千秋樂にす。「芝居をうちとむ」

うち-どめ 打止【名】㊀興行（コウギヤウ）を終ふること。千秋樂。「相撲のうちどめ」㊁はて。をはり。終局。㊂〔商〕相場の、一日中の最後のもの。おほびけ。㊃裁縫にて、縫ひ終りの所にて、一針返して、針を布に刺しおき、更に絲を針にかけて、さきの針を引拔くこと。

うち-どめ 内泊【名】客を遊女の家に引入れて遊ばすこと。〔德川時代の遊里の語〕色道大鑑「うちどめ。傾城を揚屋へ出さず、くるわのうちにて客をとむることなり」

うち-どり 内取【名】㊀相撲節會（スマフノセチエ）の二日前に、相撲人を宮廷に召して、試みに取組ましめしこと。㊁**ぢどり**（地取）㊁に同じ。

うち-とる 打取る【動四他】『うち（打）は接頭語』**とる**（取る）を強めていふ語。宇治「蟲うちとりてゐたりけるに」

うち-とる 討取る【動四他】㊀攻め討ちて奪ひ取る。枕「この國うちとらんとて」㊁武器にて殺す。

うぢ-な 氏名【名】めうじ（苗字）に同じ。

うち-ながむ 打眺む【動下二他】『うち（打）は接頭語』**ながむ**（眺む）を強めていふ語。

うち-なし 磬【名】『**なす**（鳴す）を見よ』**うちならし**（磬）に同じ。〔古語〕名義抄「磬、ウチナシ」

うち-なし 打梨【名】㊀裝束の柔かなること。㊁**なしうちえぼし**（梨打烏帽子）に同じ。

うち-なびく 打靡く【動四自】『うち（打）は接頭語』㊀**なびく**（靡く）㊀㊁を強めていふ語。㊁**たなびく**（棚引く）に同じ。

うち-なびく 打靡く【枕】㊀靡く義より、**かみ**（髮）・**やなぎ**（柳）・**くさ**（草）にかけていふ。萬葉「ありつつも君をばまたむうちなびくわがくろかみに霜のおくまで」同「うちなびく春のやなぎとわが宿の梅の花とをいかにかわかむ」同「おしてるなにはをすぎてうちなびくくさかの山を」㊁春は柳・若草などの打靡きて、面白き頃なるより、**はる**（春）にかけていふ。萬葉「うちなびくはるさりぬれば山べには花さきををり」

うち-ならし 内馴・内習【名】うちうちの練習。したげいこ。源氏「御前に召して御覽ぜんうちならしに」

うち-ならし 磬【名】『打鳴しの義』**けい**（磬）に同じ。和名「磬、宇知奈良之」

うち-ならす 打鳴す【動四他】打ちて鳴らす。源氏「時かはりて、かねうちならすに」

うち-に 打荷【名】〔商〕『英 Jettison 又 Jetson 又 Jetsam』船舶が、その航海中に、または碇泊中に、風波に遭ひなどして、船足を輕くするため、すべて正當なる理由のもとに、その積荷又は船具を海中に投棄すること。なげに。

うちにしや 鬱尼沙【名】〔佛〕**うしちにしや**（烏瑟膩沙）に同じ。

うち-には 内庭【名】家の室と室との間の庭。なかには。つぼ。

うぢ-にんぎやう 宇治人形【名】山城國宇治の名產なる、茶の木にて造れる根附人形。刀法も彩色も奈良人形に類し、多く茶摘女のごとき茶に緣あるものの形に造る。

うち-ぬき 打拔【名】㊀うちぬくこと。㊁深く地を穿ちて、井を造ること。㊂鋒の無き鐔鏨（ハツリ）。大船の釘孔を穿つとき、鐔鏨にて孔をほりたる後、これにてうち貫き

て孔をさらふ。［打貫］ **四** 灸（キウ）をすうる場所の一。**五** 造花の花瓣・葉などを造るに用ふる器。**六** 詐らざること。〔播磨國の方言〕

うち-ぬく 打貫く【動四他】**一**『うち（打）』は接頭語。『ぬく（貫く）』を強めていふ語。**二** 彈丸にてつらぬく。

うぢ-ぬの 宇治布【名】山城國宇治より產出せし布。著聞「宇治布十反」

うち-ね 打根【名】敵に投げつくる一種の武器。形、矢に似てふとく短く作りたるもの。てや。

うち-ねずみ 內鼠【名】家にのみこもりゐて、世の中の人情に通ぜざる人を罵りていふ稱。誰我身の上「われ、一人の子をもちたりといへども、この子、うちねずみにて、わがうちより外を知らざれば」

うち-ねぶる 打眠る【動四自】『うち（打）』は接頭語。『ねぶる（眠る）』を強めていふ語。枕「困（コウ）じてうちねぶれば」

うち-の 內野【名】〔地〕**一** 大和國宇智郡の野の古稱。奈良朝頃の御獵場。うちのおほの。「宇智野」**二** 京都市上京の西なる地。治承元年、大內裏、燒亡の後は野となり、京都に事あれば兵馬の地たりき。今昔「夜に入りて內野を通りけるに、應天門を過ぎんとするに」新六「如何にせん內野の芝生年を經てあらぬ作りに狹くなる世を」

うぢ-の-あくさふ 宇治惡左府【名】〔人〕『うぢのさだいじん（宇治左大臣）を見よ。あく（惡）參照』ふぢはらよりなが（藤原賴長）に同じ。

うぢ-の-あじろ-の-しやうじ 宇治網代障子【名】平安朝の皇居の淸涼殿內なる弘徽殿（コキデン）の上局（ウヘノボネ）の前に立てたる障子。荒海の障子と同じ物にて、その北面に宇治の網代を描きてありしよりいふ。

うち-の-うち 家內【名】家のうち。かない。

うち-の-うへ 內の上【句】うへ（上）の條下を見よ。

うちの-うまや-の-つかさ 內廐寮【名】宮中の御廐一切の事を掌りし役所。天平神護中に設けられ、延曆中に廢せらる。

うち-の-うら 內浦【名】〔地〕**一** 大隅國肝屬（キモツキ）郡の東海岸にある小港。三方、山を負ふ。**二** 膽振國と渡島國との間にある海岸。

うち-の-おとど 內大臣【名】ないだいじん（內大臣）に同じ。〔古語〕枕「內のおとどの奉りたまへりけるを」

うぢ-の-おとど 宇治大臣【名】〔人〕『うぢのさだいじん（宇治左大臣）を見よ』ふぢはらよりなが（藤原賴長）に同じ。

うち-の-おほおみ 內大臣【名】ないだいじん（內大臣）に同じ。〔古語〕

うち-の-おほの 內大野【名】〔地〕うちの（內野）**一** に同じ。萬葉「たまきはる內の大野に馬なめて朝踏ますらむその草深野」

うち-の-おほまへつきみ 內大臣【名】ないだいじん（內大臣）に同じ。〔古語〕

うち-の-おほみ 內大臣【名】うちのおほおみ（內大臣）の略。〔古語〕

うち-の-かしはで-の-かみ 內膳正【名】ないぜんのしやう（內膳正）に同じ。〔古語〕

うち-の-かしはで-の-つかさ 內膳司【名】『かしはで（膳夫）參照』ないぜんし（內膳司）に同じ。〔古語〕和名「內膳司、宇知之加之波天之官」

うち-の-かた 內の方【句】うち（內）の條下「を見よ。

うち-の-かにもり-の-かみ 內掃部頭【名】內掃司（ウチノカニモリノツカサ）の長官。うちのかもりのかみ。〔古語〕

うち-の-かにもり-の-つかさ 內掃部司【名】古、宮內省に屬せし役所。はじめは供奉の疊席又は殿中の鋪設（ホセツ）などの事を司りしが、弘仁十一年掃部司と合して、掃部寮と改めらる。うちのかもりのつかさ。〔古語〕

うぢ-の-かみ 氏の上【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うぢ-の-かみ 氏の神【句】うぢ（氏）の條下「を見よ。

うち-の-かもり-の-かみ 內掃部頭【名】うちのかにもりのかみ（內掃部頭）の略。〔古語〕

うち-の-かもり-の-つかさ 內掃部司【名】うちのかにもりのつかさ（內掃部司）の略。〔古語〕

うぢ-の-きよ 氏の擧【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

を見よ。

うち-の-くすり-の-かみ 內藥正【名】內藥司（ウチノクスリノツカサ）の長官。〔古語〕

うち-の-くすり-の-つかさ 內藥司【名】古、中務省に屬して、宮中の醫藥の事をつかさどりし役所。後、典藥寮に合併せらる。〔古語〕

うち-の-くら 內藏【名】うちのくらのつかさ（內藏寮）の略。宇穗「うちのくらして奉りはべるめり」

うち-の-くらうど 內の藏人【句】うち（內）「の條下を見よ。

うち-の-くら-の-かみ 內藏頭【名】くらのかみ（內藏頭）に同じ。〔古語〕

うち-の-くら-の-つかさ 內藏寮【名】くられう（內藏寮）に同じ。〔古語〕

うぢ-の-くわんぱく 宇治關白【名】〔人〕『うぢどの（宇治殿）を見よ』ふぢはらよりみち（藤原賴通）に同じ。

うち-の-けんみ 內の檢見【句】けんみ（檢見）の條下を見よ。

うちのこ 內子【名】〔地〕伊豫國喜多郡にある町。道後地方より大洲（オホス）・宇和島等に到る通路。

うぢ-の-こ 氏の子【句】うぢ（氏）の條下を「見よ。

うち-の-ごしよどころ 內御書所【名】古、至尊閲覽の書籍を管理せし所。又臨時にこの所にて文人に詩歌を作らせ、又學生の試驗を行ひしこともあり。祕書閣。芸閣（ウンカク）。

うぢ-の-このかみ 氏の子上【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うぢ-の-さだいじん 宇治左大臣【名】〔人〕『山城國宇治にその別莊ありしよりいふ』ふぢはらよりなが（藤原賴長）に同じ。宇治の惡左府。宇治の大臣（オトド）。

うぢ-の-さふ 宇治左府【名】〔人〕前條に同じ。

うぢ-の-さらし 宇治晒【名】狂言の小舞「の一。

うち-の-し 打熨【名】次條の略。

うちのし-あはび 打熨鮑【句】うちあはび（打鮑）に同じ。

うぢ-の-しやく 氏の爵【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うぢ-の-しるし 氏の印【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うち-の-しるす-つかさ 內記司【名】ないき「（內記）に同じ。

うぢ-の-すけ 氏の助【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うぢ-の-そう 氏の宗【句】うぢ（氏）の條下「を見よ。

うち-の-ぞき 打除【名】水戰に於ける、味方の敗軍。

うち-の-そめもの-の-かみ 內染正【名】內染司（ウチノソメモノノツカサ）の長官。

うち-の-そめもの-の-つかさ 內染司【名】古、宮內省に屬して、供御の染物の事をつかさどりし役所。正（カミ）・令（ジヨウ）・史（サクワン）以下の職員を置きしが、大同三年縫殿寮（ヌヒドノレウ）に合せらる。

うち-の-たくみ-の-かみ 內匠頭【名】內匠「寮（タクミレウ）の長官。

うち-の-たくみ-の-つかさ 內匠寮【名】たくみれう（內匠寮）に同じ。和名「內匠寮、宇知乃多久美乃豆加佐」

うぢ-の-ちやうじや 氏の長者【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うち-の-つはもの-の-くら 內兵庫【名】ないひやうご（內兵庫）に同じ。

うち-の-つはもの-の-くら-の-かみ 內兵庫頭【名】內兵庫司（ウチノツハモノノクラノツカサ）の長官。

うち-の-つはもの-の-くら-の-つかさ 內兵庫司【名】前條に同じ。

うち-の-とねり 內の舍人【句】とねり（舍人）の條下を見よ。

うち-の-はか 宇智の墓【句】うち（宇智）の「條下を見よ。

うぢ-の-はしひめ 宇治の橋姬【句】はしひめ（橋姬）を見よ。

うち-の-ひと 內人【名】妻が第三者に向ひて、夫を呼ぶ稱。宅。やど。〔俚語〕

うち-の-ひめみこ 內姬御子・內親王【名】ないしんわう（內親王）に同じ。〔古語〕

うち-の-ひやうご 內兵庫【名】ないひやうご（內兵庫）に同じ。

うち-の-ひやうご-の-つかさ 內兵庫司【名】前條に同じ。

うち-のぶ 打延ぶ【動下二他】**一**『うち（打）』は接頭語。『のぶ（延ぶ）』を強めていふ語。**二**

打ちて、延ばす。

うち-の-へ 内重【名】内の圍、又その内。（とのへに對して）〔古語〕萬葉「とのへに立ちさもらひ、うちのへに仕へまつりて」

うち-の-べ 打延【名】うちのばすこと、又その物。

うちのべ-きかい 打延機械【名】綿打機械より出でたる綿を、更に精練する機械。

うち-のぼり 内幟【名】端午（タンゴ）の節句の幟（ノボリ）の、戸内に樹（タ）てたるもの。（外幟に對して）

うち-のぼる 打上る【枕】『うち（打）は接頭語』穗の生ひ出づるを上（ホ）るといひて、ほにかけたるならんとも、大和國佐保は、坂多くして、上りゆくべき處なるより、さほ（佐保）にかけたるならんともいふ。萬葉「うちのぼる佐保のかはらのあをやぎは今ははるべとなりにけるかも」

うぢ-の-ま 宇治の間【句】うぢ（宇治）の條下を見よ。

うちのまき 内牧【名】〔地〕肥後國阿蘇郡にある町。黑川の北岸の山地を占む。附近に小里・三久保等の溫泉あり。

うぢ-の-まき 宇治の卷【句】うぢ（宇治）の條下を見よ。

うち-の-み 内海【名】〔地〕安藝國賀茂郡にある町。海に臨む。その灣を内海灣と云ふ。

うち-の-みかど 内の御門【句】うち（内）の條下を見よ。

うち-の-みこ 内の御子【句】みこ（御子）の條下を見よ。

うぢ-の-みささぎ 宇治の陵【句】うぢ（宇治）の條下を見よ。

うぢ-の-みんぶきやう 宇治民部卿【名】〔人〕ふぢはらただふみ（藤原忠文）に同じ。

うち-の-みやうぶ 内の命婦【句】みやうぶ（命婦）の條下を見よ。

うち-の-みやけ 内官家【名】うちつみやけ（内官家）に同じ。〔古語〕

うぢ-の-みやびと 宇治の宮人【句】うぢ（宇治）の條下を見よ。

うち-の-もの 内の者【句】うち（内）の條下を見よ。

うち-の-もののべ 内の物部【句】もののべ（物部）の條下を見よ。

うぢ-の-やしろ 氏の社【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うぢ-の-やっこ 氏の奴【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うち-のり 内法【名】箱・管その他の構造物の、内側の端より端までの寸法。門の柱と柱との内側の間の距離、又家の敷居（シキヰ）より鴨居（カモヰ）までの距離などにもいふ。うちざし。（外のりに對して）

うちのり-なげし 内法長押【名】〔建〕障子・襖（フスマ）などの上にある長押、即ち普通の長押。

うちのり-ぬき 内法貫【名】〔建〕内法長押の後方にある貫（ヌキ）。

うち-のれん 内暖簾【名】店と奥とを仕切るために掛くる暖簾。

うぢ-の-わきいらつこ 菟道稚郎子【名】〔人〕『山城國菟道におはせしよりいふ』應神天皇の皇子。仁德天皇の弟。博く典籍に通じ、兄君と互に帝位を讓りて、つひに自殺したまふ。

うぢ-の-ゐん 氏の院【句】うぢ（氏）の條下を見よ。

うち-の-ゐや-の-かみ 内禮正【名】内禮司（ウチノヰヤノツカサ）の長官。

うち-の-ゐや-の-つかさ 内禮司【名】ないらいし（内禮司）に同じ。

うち-は 團扇【名】㊀細き竹を骨とし、紙または絹を貼（ハ）り、柄ありて風を起すに用ふるもの。羽又は檳榔（ビンラウ）の葉などにて作れるもあり。多くは圓形。（俳諧の書には、略して、「團」の一字のみを用ふ）空穗「いと暑しとのたまへば、うちはもまゐらせんとのたまひて」㊁能（ノウ）の小道具の一。唐團扇に擬して造れるもの。㊂ぐんばいうちは（軍配團扇）に同じ。

團扇の旗【句】丸き團扇の柄に緒を附けて、竿の頭に結びつけ、古、軍中にて旗じるしに用ひしもの。太平記「丹・兒玉の團扇の旗」謠曲（知章）「團扇の旗は、兒玉黨か」

團扇を上ぐ【句】㊀相撲（スマフ）の行司が、取組の勝敗の決したるとき、勝ちたる方にむかひて、手に持てる團扇をささぐ。㊁優れたり又は勝ちたりと定む。

うち-ば 内端【名】出過ぎぬこと、又その人。ひかへめ。うちき。「うちはに見積る」「うちばな人」

うちは-うじ 内牓示【名】なは（縄）㊁に同じ。

うちは-えび 團扇蝦【名】〔動〕えびの一種。頭と胸と觸角との癒合して、團扇の形に似て幅廣くなれるもの。甲のここかしこに小斑點あり。

うちは-かづら 團扇葛【名】〔植〕旋花（ヒルガホ）科に屬する多年生の草。莖は匍匐ひて六七丈に達し、葉は肉質にて凹形をなし、夏、淡紅色の花を開く。暖地の海濱に自生す。ぐんばいひるがほ。

うち-ばかま 打袴【名】板引にせる女官の袴。平絹（ヒラギヌ）にて仕立て、表・裏共に紅にて、晴の場合に用ふ。又、童女は、晴の時、その上に表袴（ウヘノハカマ）を著くといふ。榮花「袴のこはきに、かねして、ぬひ物にも、うちばかまをしたる人もあり」

うぢ-はぎ【名】〔植〕いはがらみ（岩絡）に同じ。

うちは-ぐさ 團扇草【名】〔植〕ぐんばいなづな（軍配薺）に同じ。

うちは-ごけ 團扇苔【名】〔植〕苔葱（コケシノブ）科に屬する多年生の草。根莖は絲狀にて、黑き鱗毛生じ、葉は纖長の葉柄を有して、扇形又は圓形をなし、葉の先端なる筒狀器の内に、子嚢群を有す。岩石・樹皮などに叢生す。まるばほらごけ。

うち-はさむ 捺【名】碁の手の名目。

うち-はし 打橋【名】建物と建物との間に廊下なき場合に、臨時に架けわたす橋。〔古語〕源氏「うちはし・わたどの・ここかしこの道に」

うぢ-ばし 宇治橋【名】㊀伊勢國宇治の今在家（イマザイケ）町より皇大神宮の境内へ架したる橋。㊁山城國宇治川にある橋。久世（クゼ）郡宇治町に屬し、長さ八十三間。大化二年元興寺の僧、道登の勅を奉じてはじめて架設せしもの。もとは今の位置より西方にありきといふ。古今「忘らるる身をうぢばしの中たえて人もかよはぬ年ぞへにける」

宇治橋の碑【句】大化二年にはじめて宇治川の宇治橋を架したるとき、その由來を記して、その北岸に建てし碑。その全文、帝王編年記にあり。碑石も、寛政三年、尾張の人中村維楨、これを土中より發掘して、帝王編年記によりて修補し、今も、川の東岸彼方（ヲチカタ）町なる放生院常光寺に保存せらる。但し今のは好事家の僞造せるものならんとの說もあり。

うち-はじむ 打始む【動下二他】㊀『うち（打）は接頭語』始む。著手す。㊁打つことを爲しはじむ。

うち-はしらす 打走らす【動四他】鐵砲を放ちて、敵を走らす。

うちは-す 團扇す【動佐變他】團扇にてあふぐ。〔古語〕枕「うしろにゐて、うちはするもあり」

うちは-だいこ 團扇太鼓【名】皮一枚を團扇の形に張りて、柄を附けたる太鼓。法華宗信者の題目を唱ふる時に叩くもの。

うち-はたす 打果す・討果す【動四他】武器にて殺しをはる。

うちは-だて 團扇楯【名】團扇のごとき形に造れる楯。

うち-はちもんじ 内八文字【名】遊女などの、廓中を練（ネリ）行く步みかた。足の爪先を、内方にむけてあるくこと。（そと八文字に對して）「内八文字を踏む」

うちはづし-ざま 打外樣【貌】今少しにて外れんばかりに、辛うじて打ちあてたるさま。今昔「追っかけられ、遁るるあとを、うちはづしざまに斬りければ」

うち-はづす 打外す【動四他】打當てんとして、はづす。枕「雙六（スゴロク）、…さはいみじうのろふとも、うちはづしてんや」

うちは-どころ 團扇野老【名】〔植〕野老の一種。葉は互生して淺裂の掌狀をなし、秋、綠色の小き花を開く。かうもりどころ。

うちは-とんぼ 團扇蜻蛉【名】〔動〕蜻蛉の一種。尾端に近き部分扁（ヒラッタ）く廣がりて、團扇のごとくなれるもの。腹部に黃色に黑の環線あり。

うち-はなち 打放【貌】ぶしつけ。むきだし。うちつけ。〔古語〕住吉「あはれとは見奉りながら、若き者にて、うちはなちに申しけるにこそ」

うち-はなつ 打放つ【動四他】『うち(打)は接頭語』はなつ(放つ)を强めていふ語。萬葉「やき太刀のかど打放つますらをがほぐとよみきにわれ醉ひにけり」

うち-ばば 內馬場【名】昔、武德殿前にありし馬場。天皇臨御して射御(シヤギヨ)を御覽じたり。つぼのばば。

うち-はぶ 打篏ぶ【動下二他】うちはむ(打篏む)に同じ。〔古語〕續世繼「このおとど・花園のおとど二人、若き大臣、よく仕へぬべきを、打ちはべつつ、公事も務めさせて」

うち-はふぐ 團扇河豚【名】〔動〕河豚の變種。腹の皮のよく伸びひろがりて、團扇のごとくになるもの。

うち-はぶく 打羽振ぐ【動四自】『うち(打)は接頭語』はぶく(羽振く)を强めていふ語。古今「さつきまつ山時鳥(ホトトギス)うちはぶき今も鳴かなんこぞのふるごゑ」

うち-はへ 打延へ【副】ながながと。ひき續きて。長引きて。〔古語〕枕「雨のうちはへ降る頃」

うち-はへ-て 打延へて【副】前條に同じ。〔古語〕古今「伊勢の海のあまのたくなはうちはへてくるしとのみや思ひわたらん」

うち-はむ 打篏む【動下二他】『うち(打)は接頭語』しまひこみてのみ置く。おしこめておく。うちはぶ。〔古語〕空穗「さいひて、うちはめてのみ侍らんやはとて、心に從ひて、人人に配りたまふ」

うち-はむ 打塡む【動二下他】『うち(打)は接頭語』投げこむ。落しいる。土佐「船、ほとほとしくうちはめつべし」

うち-ばん 打盤【名】❶物を打つに用ふる臺。❷能樂にて、大鼓・小鼓・太鼓などを稽古するとき、張扇にて打鳴す盤。木にて造り、下面を刳(クエ)りたるもの。

うち-ばもの 內端者【名】うちきの人。浮世風呂「近所で名代のうちばものだから」

うち-はやし 打囃【名】太鼓などを打つ囃。

うぢ-はやし うぢ早し【形一】❶いちはやし(逸早し)に同じ。〔古語〕續紀「平けき時にはつかへまつることは、誰れしの人か、つかへまつらずあらむ。かくうぢはやき時に、命を惜しまずして」❷けはし。險阻なり。〔古語〕字鏡「嶮、宇地波也志」

うち-はやす 打はやす【動四他】打ちて、勢よくす。〔古語〕枕「馬をうちはやして、急ぎ參りて」

うち-はやむ 打早む【動下二他】『うち(打)は接頭語』はやむ(早む)を强めていふ語。源氏「駒ひきとどむるほどもなく、うちはやめて、片時に參りつきぬ」

うち-はらひ 打拂・打掃【名】❶うちはらふこと。❷神前などの塵をはらふ具。綾・布などを用ふ。

打拂の筥(ハコ)【句】打拂㊁を入れおく箱。

打拂の布【句】大嘗(ダイジヤウ)祭の時、神座を拂ふための布。

うち-ばらひ 內拂【名】內金を支拂ふこと。

うち-はらふ 打拂ふ【動四他】❶『うち(打)は接頭語』拂ひ除きて淨む。逐拂ふ。❷銃砲の威力によりて擊退す。ぶっぱらふ。

うち-はり 內張【名】うけはり(受張)に同じ。

うち-はり 內はり【名】いんのはり(陰のはり)に同じ。

うち-ばり 內張【名】人力車・馬車・自働車などの車體の內部に張りたる織物。

うち-ばり 打鍼【名】鍼術にて、打込みに用ふる小き鍼。(ひねり鍼・くだ鍼に對して)

うち-ばり 梁【名】うつばり(梁)に同じ。

うち-ばり-いた 內張板【名】船の肋骨(ロツコツ)の內面に張りたる木の板。

うちは-ゑ 團扇繪【名】團扇に書ける繪。

うち-ひ 打樋【名】うち渡したるとひ。かけひ。〔古語〕山家「苗代の水を霞はたなびきてうちひの上にかくるなりけり」

うち-び 打火【名】火打にて打ちて出す火。きりび。

うち-ひく 打引く【動四他】責めさいなむ。呵責(カシヤク)す。〔古語〕空穗「はかなき事にてうちひきければ」落窪「夜ひと夜、知らぬ事により、うちひきたまひつるこそ、いとわりなかりつれ」

うち-ひ-さす 內日刺す【枕】建築高大にして美しき日影さすといふ意より、みや(宮)及び宮處(ミヤコ)の意なるみやこ(都)にかけていふ。一說には、現日(ウツヒ)さすにて、ありと日のさす意。萬葉「うちひさすみやのとねりはたへのほにあさ衣きるはいめかもうつつかも」同「うちひさすみやこしみみにさと家はさはにあれども」

うち-ひ-さつ 內日刺つ【枕】前條に同じ。萬葉「うちひさつみやけの原ゆ」

うち-ひそむ 打顰む【動四自】『うち(打)は接頭語』ひそむ(顰む)を强めていふ語。〔古語〕源氏「あへなく心細ければ、うちひそぞみぬかし」

うち-びと 內人【名】❶內裏(ダイリ)の人。禁中の人。〔古語〕榮花「このたびの童の名ども、うちびと・院びと・宮人・殿人などやうに附け集めさせたまへり」❷うちんど(內人)に同じ。〔古語〕

うぢ-びと 氏人【名】同じ氏族に屬する人の、相互に呼ぶ稱。氏神の祭祀の時には、氏長者(ウヂノチヤウジヤ)に率ゐられてこれに與(アヅ)かれり。うぢこ。族人。うぢうど。〔古語〕毛吹「杉村にしめひきかけてうぢびとの光るばかりにみがく玉垣」

うち-ひも 打紐【名】數條の絲にて組みたる紐。圓く打ちたるを丸打、ひらたく打ちたるを平打といふ。くみひも。うちを。

うち-ひらく 打開く【動四自】❶『うち(打)は接頭語』ひらく(開く)に同じ。❷ひろびろとす。開展す。

うち-ぶ 打步【名】〔商〕株券又は爲替手形等の價額が騰貴(トウキ)して、額面以上に達したるとき、その額面價額との差額。プレミヤム。

うちぶ-かんぢやう 打步勘定【名】〔商〕打步を計算するために設くる簿記上の勘定科目。

うちぶ-こうさい 打步公債【名】應募額の額面よりも多き公債。プレミヤム附公債。(割引公債に對して)

うち-ふす 打臥す【動四自】『うち(打)は接頭語』ふす(臥す)を强めていふ語。堀太「うちふさで思ひあかさんなかなかにねざむる度に苦しかりけり」

うち-ふだ 打札【名】❶たかふだ(高札)に同じ。❷花ガルタにて、手の內より打出す札。(めくり札に對して)

うち-ぶところ 內懷【名】❶最も肌に接近せる懷中。(そと懷に對して)❷相撲(スマフ)にて、胸部に接近せるところ。❸うちかぶと(內兜)㊁に同じ。「うちぶところを見らる」

うち-ぶみ 內文【名】內印(ナイイン)を捺(オ)す文。〔古語〕

うぢ-ぶみ 氏文【名】祖先の功績・家系などを記したる文書。家家の歷史ともいふべきもの。今に傳はれるは、高橋氏文の一あるのみ。〔古語〕夫木「もののふの八十氏文はかたかたに行きわかれたる跡ぞ見えける」

うち-ふる 打振る【動四他】ふりすつ。見すつ。枕「いかで、さ、つれなく打ちふりてありしならん」

うち-べ 內邊【名】內のかた。

うち-べんけい 內辨慶【名】かげべんけい(陰辨慶)に同じ。

うち-べり 內耗【名】玄米を搗(ツ)きて白米となす時、玄米の量に比して幾分を減ずること、又その減ずる量。(そと耗に對して)

うち-ほら 內洞【名】うつろ。空洞。〔古語〕

うち-ぼり 內濠・內壕【名】城の內のほり。(外ぼりに對して)

うち-ほろぼす 討滅す【動四他】攻亡す。うち平ぐ。

うち-まかす 打任す【動下二他】❶『うち(打)は接頭語』まかす(委す)を强めていふ語。❷そのままにす。

打任せたる【句】一とほりの。並並の。宇治「この病のありさま、うちまかせたる事にあらず」

打任せては【句】こまかなる點は數へ立てず、大體につきていへば。大方は。並並にては。山家「けしきをばあやめて人のとがむともうちまかせては言はじとぞおもふ」

うち-まき 打撒【名】❶さんまい(散米)に同じ。〔古語〕榮花「加持まゐり、うちまきしさわぐ」❷こめ(米)を云ふ。〔女の語〕❸米だはら。

うち-まき-よね 打撒米【名】前條㊀に同じ。

うちまき-をけ 打蒔桶【名】安産を祈るための散米（ウチマキ）を容るる桶。おしをけ。

うち-まく 内幕【名】㊀外幕（ソトマク）より小くして、その内側に張る幕。上部は横幅に、下部は縦幅に縫合せたるもの。半幕。小幕。㊁船の胴壁の内方に引く幕。㊂ないしょごと。うちわ。内情。內實。裏面。

うち-まく 打負く【動下二自】『うち（打）は接頭語』まく（負く）を強めていふ語。

うち-まず 打交ず【動下二他】『うち（打）は接頭語』まず（交ず）を強めていふ語。

うち-まぜ 打交【名】打交ずること。混合。

うち-また 内股【名】㊀うちもも（内股）に同じ。㊁うちまたもの（内股者）の略。

うちまた-がうやく 内股膏藥【名】『内股に附くる膏藥は、雙方の股につき易きよりいふ』甲乙の間に立ちて、雙方に愛せられんとし、又は雙方の人の說に贊成すること、又その人。〔俚語〕蘆屋道滿「かの道滿の内股膏藥、頼んでは却て妨げ」

うち-またがる 打跨る【動四自】『うち（打）は接頭語』またがる（跨る）を強めていふ語。

うち-またげ 打跨【名】うちまたがること。東海道名所記「馬に、…うちまたげに飛乘り」

うちまた-もの 内股者【名】内股膏藥の人。うちまた。

うち-まち 内襠【名】股引の内側の襠。

うち-まちあひ 内待合【名】茶庭の内露地（ウチロヂ）の内にある小き建物。

うち-まつ 打松【名】たいまつ（炬火）に同じ。〔古語〕源氏「打松、おどろおどろしからぬほどに焚き」

うぢ-まつり 宇治祭【名】山城國宇治の離宮（リグウ）八幡の祭禮。五月八日に行はる。

うち-まねく 打招く【動四他】『うち（打）は接頭語』まねく（招く）を強めていふ語。源氏「わらはのをかしげなる出できて、うちまねく」

うち-まはし 内廻【名】船具の一。樫（カシ）の木の短く削りたるを、簾（スダレ）の如くに編み列ねて、輪となしたるもの。その中の長き一本の端に繩を附け、その繩にて、帆桁を檣（ホバシラ）に附け、檣を卷きすべらして、帆を上下す。さるすべり。

うち-まはす 打廻す【動四他】㊀『うつ（打つ）⑦を見よ』構へめぐらす。狂言（菊花）「幕うちまはし」㊁處きらはず打ちたたく。狂言（爭爭）「棒でうちまはす」

うち-まめ 打豆【名】大豆を輕く煮て乾かし、槌にて打ち潰（ツブ）したるもの。汁などの中に入れ、又は煮て食ふ。

うち-まる 内丸【名】まるがんな（丸鉋）を見よ。

うぢ-まる 宇治丸【名】鰻（ウナギ）を酢にして乾せるもの。山城國宇治の名產。毛吹草「城州宇治の鰻鮨、これを宇治丸といふ」

うち-まゐり 内參【名】さんだい（參内）に同じ。〔古語〕源氏「うちまゐりより外のありきなど」

うち-み 打身【名】㊀ふるきずの、寒暑・時候の變り目などに痛を起すもの。㊁さしみ（刺身）に同じ。㊂料理にて、鯉の左の肉。（ひき身に對して）

うち-み 打見【名】うはべより見たる樣子。ふと見たるところ。外見。「うちみには」

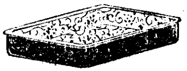
うち-み 内見【名】「内の檢見（ケンミ）」に同じ。

うち-みしやぐ 打拉ぐ【動四他】うちひしぐ。叩きつぶす。曾我會稽山「刃を石にて叩きつぶし、うちみしやいだる槌同然」

うち-みす 内御簾【名】芝居の舞臺に接續せる、八間の間の下棧敷（シタサジキ）。（外御簾に對して）

うち-みだり 打亂【名】『うち（打）は接頭語』㊀とりみだすこと。㊁次條の略。

うちみだり-の-はこ 打亂箱【名】古、化粧道具又は手拭などを入れおくに用ひし器。蓋（フタ）なし。うちみだり。源氏「うちみだりの箱・香壺（カウゴ）の箱」鹽尻「うちみだりの箱といふ物あり。源氏物語になん見えたる。もと櫛笥（クシゲ）のかけごなり。今、婦人の櫛なんど入るる亂れ箱といふ物なり」



（うちみだりのはこ）

うち-みづ 打水【名】塵埃を鎭め、涼氣をとる等のために庭などにまく水。俗曲（打水に）「うち水に晝の暑さを忘れてし雫の山の草の葉に」

うち-みよし 内舳【名】和船の船首材。外舳（ソトミヨシ）の後方にあるもの。（外舳に對して）

うちむかひ-ぶみ 打向文【名】天子又は貴人の命ずるままに、草案をも作らず、直ちにその面前にて認（シタタ）むる文書。おほせがき。〔古語〕

うち-むき 内向【名】㊀内側に向くこと。㊁一家内の關係に止まる事がら。うちうちの事件。私事。㊂矢を弓に番（ツガ）ふ時に、羽の表の、我が身の方に向きたること。（外向に對して）

うち-むさう 内無雙【名】相撲（スマフ）の手の一。四手（ヨツ）に組む時、相手の差したる手首を取り、機を見て、我が差したる手を拔き、その手にて、相手の高股を内側より掬（スク）ひ、體を押しつけながら捻り倒すもの。

うち-むらさき 内紫【名】〔動〕㊀瓣鰓（ベンサイ）類に屬する貝。殼は左右同形、その外面は白色にして、ほぼ並行せる細線あり。内面は紫色にして、美麗なり。むらさきがひ。㊁〔植〕芸香（ヘンルウダ）科に屬する落葉喬木。暖地の栽培に適し、高さ丈餘。葉大きく、葉柄の翼狀部もまた大、夏、花開き、實は冬に至りて熟し、形大きく、外皮厚く、肉淡紫色を帶び、味、甘酸にして生食すべし。たらくねんぼ。〔香欒・文旦〕

うち-むる 打群る【動下二自】『うち（打）は接頭語』むる（群る）を強めていふ語。萬葉「思ふどち馬うちむれて」

うちむろ-づくり 内室造【名】〔建〕『うつむろ（無戸室）參照』家の、屋根ばかりにて、天井（テンジヤウ）のなき造り方。

うち-んど 内人【名】『うちびと（内人）の音便』古の伊勢神宮の神職。禰宜（ネギ）の下に屬し、物忌（モノイミ）以下を率ゐて宿直し、或は神供（ジング）を調ふるなどの事を掌りしもの。熱田神宮・鹿島神宮などにも置かれたり。うちびと。

うち-め 打目・擣目【名】衣の、光澤を出さんがために、砧（キヌタ）にて擣（ウ）ちたる痕。〔古語〕源氏「くれなゐのうちめ、なべてならぬに」

うぢ-め 氏女【名】古、もろもろの氏人より朝廷に貢（ミツギ）せし女。三十歲以上・四十歲以下にて、夫の無き者より選びたり。

うぢ-め 宇治目【名】江戸時代に行はれし量目の一種。二百目を一斤とす。宇治にて、茶を量るに用ひしものといふ。

うち-めぬき 【名】うちくるぶし（内踝）を云ふ。（そとめぬきに對して）〔遠江國の方言〕

うち-も 打裳【名】打ちて光澤を出したる帛（ヌキ）の裳。〔古語〕安法集「大宮のすけの君、ひはだ色のうちもを」

うち-もがり 内虎落【名】二重虎に落を構へたる時の、内側にある方のもの。大將の陣所の構とす。（そと虎落に對して）

うち-もの 打物【名】㊀打斬るための武器。刀・槍・長刀（ナギナタ）などの類。（多くは刀にいへり）保元「弓矢とっても、打物とっても」㊁打鍛（キタ）へて造れる金屬の器具。（鑄物（イモノ）に對して）㊂槌（ツチ）にて打ちて光澤を出すこと、又その布帛。榮花「おりもの・うちもの・にしき・ぬひもの」㊃打鳴らす樂器。鐘・鼓（ツツミ）の類。（彈きもの・吹きものに對して）㊄乾菓子（ヒグワシ）の一種。みぢん粉に砂糖を交へ、型（カタ）に入れて打ちたるもの。

うちもの-し 打物師【名】刀劍を鍛へつくる人。かたなかぢ。刀工。

うちもの-よごし 打物汚【名】刃物を穢（ケガ）すのみにて効なきこと。かたなよごし。刃（ヤイバ）の汚（ケガ）。謡曲（惡源太）「汝等に向っては、打物よごしと思へども、時の敵は力なし」

うちもの-わざ 打物業【名】刃物などにて打ちあふこと。謡曲（熊坂）「打物業にてかなふまじ、手取にせんとて」

うち-もんだふ 内問答【名】〔法〕鎌倉時代に、最初に原被兩造を奉行所に召喚して審問せしこと。

うち-もも 内股【名】股の内がは。うちまた。うつもも。ふともも。腿肚。

うち-もらす 討漏す【動四他】殺さんとして、逃げらる。

うち-や 打矢【名】㊀手突矢（テツキヤ）の類。鏃（ヤジリ）も箆（ノ）も六寸ほどにて、箆は雉子（キジ）の尾にて卷き、鏃は劍尻の如く尖る。㊁矢の、的に中りたれども能く落ちつかぬも

の。**三**矢にて行ふ一種の遊戯。壺打（ツボウチ）の類なるべしといふ。

う-ちやう 圩頂【名】中央のくぼみたる頭。

う-ちやう 有頂【名】〔佛〕うちやうてん（有頂天）**一**の略。 謡曲(九世戸)「上は、有頂の雲をわけ、下は、下界の龍神」

うちやう-さはん 右丁左半【名】鼻より出入する氣息（キイ）の、奇數の時には左の孔より、隅數の時は右の孔よりすること。

うぢ-やうかん 宇治羊羹【名】白羊羹に挽茶（ヒキチヤ）粉を混ぜて製したる煉（ネリ）羊羹。

うち-やうじ 打楊枝【名】ふさやうじ（房楊枝）に同じ。

うちやう-てん 頂有天【名】**一**〔佛〕『慾界及び色（シキ）界、即ち形ある世界の頂上に位し、その上は、無色（ムシキ）界とて、無形の世界なるよりいふ』じやうごてん（淨居天）を見よ。**二**心の恍惚狀態にあること。甚しく熱中すること。うつつを拔かすこと。うはのそら。〔俚語〕

うちやう-らん うちやう蘭【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。我が國山地のいたる所に自生す。高さ五六寸。葉は披針（ヒシン）形にて、葉脚は鞘形（セウケイ）をなす。六月頃、穗狀花序の花を開く。せきらん。がんせきらん。おほいはらん。こてふらん。

うち-やげ 打上【名】結婚後、夫がはじめて妻の父母の家にゆくこと。〔美濃國の方言〕

うぢ-やつこ 氏奴【名】「氏の奴」に同じ。 記「部曲、ウヂヤツコ」

うち-やぶる 打破る・擊破る【動四他】**一**『うち（打）は接頭語』やぶる（破る）を强めていふ語。**二**擊ちて、敵兵を走らす。擊破（ゲキハ）す。

うぢ-やま 宇治山【名】〔地〕きせんがたけ（喜撰嶽）に同じ。 古今「わが庵は都のたつみ然ぞ住む世をうぢやまと人はいふなり」

うちやま-じやう 內山城【名】信濃國南佐久郡內山村にありし城。千曲（チクマ）川の一支谿に位し、もと平賀氏の本城たりしもの。後、武田氏に屬せり。

うぢ-やまだ 宇治山田【名】〔地〕伊勢國の中部に位する市。明治二十二年、宇治町と山田町とを合せて立てたるもの。伊勢神宮の所在地なるより、又の名を神都（シント）といひ、內宮は宇治に、外宮（ゲクウ）は山田に鎭まりたまふ。

うちやま-またつ 內山眞龍【名】〔人〕遠江國の國學者。賀茂眞淵の門人。日本紀類聚解等の著あり。文政二年歿す。

うち-やむ 打病む【動下二他】『うち（打）は接頭語』病ましむ。〔古語〕 記「うれたくも鳴くなる鳥かこの鳥もうちやめこせね」

うち-やる 打遣る【動四他】**一**『うち（打）は接頭語』やる（遣る）を强めていふ語。捨ておく。さしおく。放下す。うつちやる。**二**措く。

うち-ゆ 內湯【名】溫泉場の、屋內にて浴するやうにせる湯。

う-ちゆう 雨中【名】雨の降れる中。

う-ちゆう 雨注【名】雨の如くふりかかること。「彈丸雨注」

う-ちゆうじやう 右中將【名】うこんゑのちゆうじやう（右近衞中將）に同じ。

う-ちゆうべん 右中辨【名】べん（辨）を見よ。

うち-ゆき 內往【名】外に家を構へしめて、男の方より通ひゆく妾。〔俚語〕

うち-ゆく 打行く【動四自】『うつ（打つ）［世］を見よ』馬に乘りて行く。〔古語〕 萬葉「濱邊よりわがうちゆかば海邊より迎へもこぬか海人の釣舟」

うち-ゆひ 內結【名】髮結（カミユヒ）の、客を自宅に集めて、結髮するもの。（そとまはりに對して）

うち-よす 打寄す【動下二自】よせ來る。おし寄す。「波、岸にうち寄す」「敵、城にうち寄す」

うち-よす 打寄す【動下二他】『うつ（打つ）［世］を見よ』乘りたる馬を、目的物の方に近寄らしむ。 宇治「なほ目のあらざりければ、ただうちに打ち寄せて見るに」

うち-よする 打寄る【枕】『うち（打）は接頭語』同音を重ねて、するが（駿河）にかけていふ。 萬葉「なまよみのかひのくにうちよするするがの國と」

うち-よりあひ 內寄合【名】ないよりあひ（內寄合）に同じ。

うち-ら 內ら【名】うちがは（內側）に同じ。〔甲斐國・信濃國・常陸國・上野國・下野國等の方言〕

うち-りやうず 打領ず【動佐變他】うちたく。打擲（チヤウチヤク）す。〔古語〕 宇治「鬼どもの、我が身を、とりどりにうちりやうじ」

うち-ろぢ 內露地【名】露地庭の中くぐりより內の處、即ち茶室に接近せる庭。茶道にて、古來特に此處に工夫を凝（コ）らせり。

うち-ろんぎ 內論議【名】『內は內裡の義』古、御齋會（ゴサイヱ）の結願（ケチグワン）の日、即ち正月十四日に、大極殿（物忌の時は南殿）にて、問者・講師等の役を定め、天子の御前にて經文の意義を論議せしこと。

うち-わ 內輪【名】**一**一家親類。なかま同志。**二**他人に示さぬこと。うちうち。ないない。うちまく。**三**うちば（內端）に同じ。

うち-わかれ 打別【名】次條に同じ。

うち-わけ 打分【名】圍碁（ゴ）にて、二度の手合せのうちに、雙方互に一度づつ勝ちて、三度目の勝負を決せずに打止むること。うちわかれ。

うち-わけ 內譯【名】金錢を計算するとき、總高の內を小分して、その理由を記すこと。ことわけ。かどがき。

うち-わけ 內分【名】本家の知行の一部を、別家に割き與へてはあれど、なほ本家にて、その全高の名義を稱し居ること。

うちわけ-しよ 內分書【名】めいさいしよ（明細書）に同じ。

うちわ-げんくわ 內輪喧嘩【名】うちわもめ（內輪揉）に同じ。

うち-わた 打綿【名】**一**はふれいわた（法令綿）に同じ。**二**うちかへしわた（打返綿）に同じ。

うちわた-きかい 打綿機械【名】原綿を打ちて纖維（センイ）をほぐす機械。

うち-わたし 內渡【名】內金を渡すこと。

うち-わたし 打渡【名】**一**新に知行所（チギヤウシヨ）を拜領したる人に、その地所を引渡すこと。**二**うちわたしじやう（打渡狀）に同じ。

うち-わたし 打渡【副】大かた。おしなべて。〔古語〕 源氏「うちわたし世にゆるしなき關川をみなれそめけん名こそ惜しけれ」

うちわたし-じやう 打渡狀【名】知行所（チギヤウシヨ）を拜領したる人に、その地所を引渡したる證據の文書。うちわたし。

うち-わたす 打渡す【動四自】**一**『うち（打）は接頭語』わたす（渡す）を强めていふ語。**二**『うつ（打つ）［世］を見よ』馬に乘りて渡り越ゆ。〔古語〕 萬葉「千鳥なく佐保の川との淸き瀨を馬うち渡しいつか通はむ」**三**ひろく見わたす。ひろくゆきわたる。〔古語〕 萬葉「うちわたす竹田の原になくたづのまなくときなしわが戀ふらくは」

うち-わたす 打渡す【枕】遙かに見わたすなどの意より、なが（長）・をち（遠）にかけていふ。 紀「うちわたすながはえなすきいりまゐくれ」 古今「うちわたすをち方人に物まうすわれそのそこに白く咲けるはなにの花ぞも」

うち-わたり 內邊【名】大內。禁中。〔古語〕 源氏「內わたりの旅寢もすさまじかるべし」

うち-わたる 打渡る【動四自】『うち（打）は接頭語』わたる（渡る）を强めていふ語。

うち-わに 內鰐【名】わにあし（鰐足）に同じ。（外鰐に對して）

うちわ-もめ 內輪揉【名】家內のあらそひ。同志の紛議。內部のごたくさ。內紛。うちわれ。うちわ喧嘩（ゲンクワ）。內訌。

うち-わり 內割【名】**一**內耗（ウチベリ）によりて減じたる分量。（外割に對して）**二**ぶあひ（步合）に同じ。

うち-わりびき 內割引【名】わりびき（割引）に同じ。

うち-わる 打割る【名】**一**『うち（打）は接頭語』わる（割る）を强めていふ語。**二**たたき割る。**三**うちあく（打明く）に同じ。「うちわって言ふ」

うち-われ 內破【名】うちわもめ（內輪揉）に同じ。

うちわ-われ 內輪破【名】うちわもめ（內輪揉）に同じ。

うぢゐ 雲林院【名】〔地〕うりんゐん（雲林院）を見よ。

うち-ゑ 打餌【名】飯に糠（ヌカ）を雜ぜて、餅の如くに作りたるもの。犬などの餌とす。

うち-を 打緒【名】うちひも（內紐）に同じ。

うち-をさめ 打納【名】打ちつづけたる最後の一打。

うち-をしき 打折敷【名】あしうちをしき（足打折敷）に同じかるべし。

うち-をる 打折る【動下二自】『うち（打）は接頭語』をる（折る）を強めていふ語。

うち-をる 打折る【動四他】『うち（打）は接頭語』をる（折る）を強めていふ語。

うつ 鬱・欝【名】氣の塞ぐこと。心のはれやかならぬこと。「積日の鬱を散ず」

うつ【動下二自】負（マ）く。けおさる。盛衰記「ゆゆしく見えつる磨墨（スルスミ）も、まさる池月に逢ひたれば、むげにうててぞ見えたりける」

うつ 打つ・擊つ・撲つ【動四他】一物もて強く當らしむ。たたく。ぶつ。二たたきて鳴らす。たたく。萬葉「みな人をねよとのかねはうつなれど君をしおもへばいねがてぬかも」三砧（キヌタ）にて光澤を出す。源氏「かいねり打たせたるに」四綿弓などにてはじく。「綿をうつ」五投げて強く當らしむ。撒（マ）きちらす。「碇をうつ」「大砲をうつ」「水をうつ」「網をうつ」六うちつけて固定せしむ。「杭をうつ」七かりそめに構ふ。設く。空穗「さじきうちて」謠曲（夜討曾我）「うち並べたる幕の內」八附く。附著せしむ。「金紋を打つ」「紙の裏を打つ」九作る。製造す。「箔（ハク）をうつ」「紐を打つ」十たたきて、延ばす。「蕎麥（ソバ）をうつ」十一田畑を鋤きかへす。たがやす。芭蕉「畠うつ音やあらしのさくらあさ」十二その物の作用をあらはさしむ。「鍼（ハリ）をうつ」「繩をうつ」十三門・木戸などを閉づ。十四斬る。伐る。「首をうつ」十五土地を測量す。十六攻む。征伐す。斬る。殺す。「討つ」「賊をうつ」十七批難す。なじる。「非をうつ」十八勝負ごとをす。「碁をうつ」「博打（バクチ）をうつ」十九博弈（バクエキ）を行ふ。ぶつ。廿『鞭うちて進むよりいひ習へるか』馬に乘りて行く。盛衰記「つらら結べる田を橫にうつほどに、深田に馬を馳せいれて」廿一興行す。技を演ず。廿二おこなふ。なす。（身體の動作にいふ）「逃げをうつ」「寢がへりをうつ」狂言（瓜ぬすびと）「夜、瓜を取るには、ころびをうって取るものぢや」廿三犯し蔑（ナイガシロ）にす。〔古語〕空穗「大將、ぬすみする親とは、ようぞうつやといらへ」廿四總金額の一部又は纏頭（ハナ）などを渡す。浮世風呂「櫛を下にやって、三兩いくらと打てと云った」

打たす【句】騎して、馬を前進せしむ。

打ったり、舞うたり【句】一一人にて、鼓など打つわざと舞とを兼行ふ。二一人にて種種の事を兼行ひて忙し。

打つにも、舞ふにも【句】何事をするにも唯一人にて。前條參照。曾我會稽山「打つにも舞ふにも京の小四郎」

打てば響く【句】直ちに影響す。すぐに感應す。〔諺語〕和漢古諺「打てば響く、たたけば鳴る、あたれば碎く」

うつ 棄つ【動下二他】すつ（棄つ）に同じ。〔古語〕記「次になげうつる御帶になりませる神」

うつ 全【接頭】全部の意。〔古語〕紀「全剝、此云三宇都播伎二」

うつ 虛・空【接頭】中の空虛なる意。うつろ。「うつせみ」「うつ拔き」

うつ 打【接頭】うち（打）の音便。

うづ 渦【名】一水の流るる勢にて、螺旋（ラセン）形に卷きめぐること、又その部分。うづまき。盤渦（ハンクワ）。山家「しほぢゆくかごみのともろ心せよまたうづ早き瀬戸わたるなり」二線の圓く幾重にも卷きめぐりて、水の渦に似たる狀をなせるもの、又はその模樣。うづまき。

うづ 珍【貌】貴み又は賞美する意。〔古語〕祝詞「うづのみてぐら」「うづの御子」

う-づ 烏頭【名】一『形、烏の頭に似たるよりいふ』とりかぶとの根。周圍に附けるものを附子（ブシ）といひ、アコニチン(Aconitin)等の毒素を含み、痲醉（マスイ）用の藥劑に供せらる。二太刀の柄の頭に、銀にて鴛の頭を作り附けたるもの。「烏頭の太刀」

うづ 堆【接頭】うづだかき意。〔古語〕「うづ汐」「うづまさ」

うつ-あう 鬱燠【名】むしあつきこと。

うつ-あし 內足【名】ひかがみ（膕）に同じ。〔古語〕字鏡「膕、宇豆阿之」

うつ-い 鬱伊【名】憂ありて氣のふさがること。鬱紆。鬱閉。

うつ-いう 鬱憂【名】うついふ（鬱悒）に同じ。

うついう-きやう 鬱憂狂【名】〔醫〕次條を見よ。

うついう-びやう 鬱憂病【名】〔醫〕『英Hypochondria』意思の活動衰へて、物事に悲しみやすく、交際を忌み、氣ふさがり、頭痛みて、不眠に陷る一種の精神病。病勢一層進めば、鬱憂狂となり、不意に自殺を企つることあり。又、食慾全く缺けて、死に至ることあり。

うつい【形】うつくし。うっつい。「うついい子」〔信濃國の方言〕

うづ-いた 渦板【名】〔建〕渦の形の文を彫刻せる柱。蛙股（カヘルマタ）と等しく、他物を支ふる用をなす。

うづ-いときり 渦絲切【名】茶碗の絲底の、渦のごとくになれるもの。

うつ-いふ 鬱悒【名】氣のふさぐこと。心たのしからぬこと。鬱憂。

うつ-う 鬱紆【名】うつい（鬱伊）に同じ。

うつ-うつ 鬱鬱【貌】一心塞ぎて樂しからぬさま。快快。二樹木などのしげり、又は霞・雲の如き氣體の盛んなるさま。こんもり。陰陰。

うつ-うつ【貌】『うつつ（現）二より轉じたるものか。又、うつらうつらを見よ』半ば眠り半ば覺めてある感じ。うとうと。〔東京の語〕

うづ-うづ【貌】うずうずを見よ。

う-つかひ 鵜使【名】鵜飼（ウカヒ）を行ふこと、また鵜飼を業とする人。

うづ-がま 渦釜【名】數個の渦の形の文ある名物茶釜。

うっかり【名】氣ぬけがして、ぼんやりとなること、又その人。うっそり。うっとり。うかり。まぬけ。氣ぬけ。失心。恍惚（クワウコツ）。〔俚語〕狂言（梟山伏）「ことの外ほうけまして、只うっかりとなりました」

うっかり【副】心づかずに。うかと。うかり。〔俚語〕曠野（李桃）「うっかりとうつぶき居たり子規」

うっかり-づら うっかり面【名】ぼんやりとせる顏つき。

うっかり-ばう うっかり坊【名】うっかりとせる人。ぼんやり。うかり坊。〔俚語〕

うっかり-ひよん【貌】ぼんやり。うかりひよん。うかりぼん。うっかりぼん。〔俚語〕一茶「稻妻やうっかりひよんとした顏へ」

うっかり-ぼん【貌】前條に同じ。〔俚語〕

うっかり-もの うっかり者【名】氣ぬけして、ぼんやりとせる人。うっかり。うつけもの。うっそりもの。うっとり。ぼんやり。〔俚語〕

うつ-き 撞木【名】茶室にて用ふる撞木（シュモク）。喚鐘（ヨビガネ）を打つもの。

うつ-き 鬱氣【名】一氣の籠（コモ）りて開けぬこと。二心の鬱結すること。氣鬱。

（うつぎ）

うつ-ぎ 空木・卯木・溲疏【名】〔植〕虎耳草（ユキノシタ）科に屬する落葉灌木。山野に自生し、高さ七八尺に達す。幹は中空にして、質堅きゆゑ、木管・木釘などに造る。葉は對生して細く狹く、鋸齒あり。夏の初めに、白色・五瓣の花を開く。庭園に植ゑて、觀賞用にも供す。うつげ。なつゆきぐさ。うのはな（卯花）一參照。

う-づき 卯月【名】『うつ木の花の咲く月といふ意』陰曆四月の異稱。うのはなづき。

卯月の忌【句】陰曆四月の賀茂祭の神事に關係する者の、潔齋のために引籠ること。一說に、四月八日、即ち釋迦の生れたる日を、神事に忌むこと。金葉「歸る春卯月のいみにさしこめてしばしみあれのほどまでもこん」

卯月の御標（ミシメ）【句】卯月の忌に籠る時、引渡す注連繩（シメナハ）。新六「ちはやぶる卯月のみしめ改めてきねが諸ごゑはやうたふなり」

卯月の花【句】うのはな（卯花）一に同じ。新六「神祭る卯月の花の白たへにゆふとりしでて山かつらせり」

卯月の雪【句】うのはな（卯花）一の形容。

うつぎ-がき 卯木垣【名】うつぎの生垣（イケガキ）。うつぎがきね。拾玉「春夏をへだつる

宿のうつぎ垣咲かぬ方には鶯ぞなく」

うつぎ-がきね 卯木垣根【名】前條に同じ。枕「うつぎがきねといふものの、いと荒荒しうおどろおどろしげにさし出でたる枝どもなど多かるに」

うつき-どり 卯月鳥【名】〔動〕『卯月の頃より鳴きはじむるよりいふ』ほととぎす（時鶯）の異名。〔古語〕

うづき-ばな 卯月花【名】〔植〕さくなげ（石楠花）に同じ。

うつぎ-ばら 卯木原【名】うつぎの生えたる原野。曾丹集「うつぎ原てこなが布を晒せると見えしは花の咲けるなりけり」

うづき-ぼん 卯月本【名】謠曲の印本の中にて、最も早く出來たるもの。

うづき-やうか 卯月八日【名】「卯月の忌（イ）」を見よ。

うつく 空く・虚く【動下二自】㊀空虚になる。紀「無實國、ウツケタルクニ」㊁心うっとりとす。失心す。狂言（三人片輪）「さても、さても、うつけた事致した」

うづく 疼く【動四自】づきづきと痛む。うづつく。疼痛す。發心集「切り燒くがごとくうづきひびらぎ」

うつくし 【名】〔動〕『その鳴聲によりていふ。うつくしよし參照』つくつくぼうし（寒蟬）に同じ。

うつくし 愛し【形二】『いつくしの轉』いとほし。憐むべし。かはゆし。〔古語〕紀「うつくしきあが若き子を」

うつくし 美し【形二】㊀うるはし。色よし。見えよし。見事なり。奇麗なり。あてやかなり。隆信集「うつくしく咲きたる枝ども折りて」㊁心もち又は擧動いさぎよし。

うつくし-がる 愛しがる【動四他】いとほしと思ふ。かはゆく思ふ。〔古語〕枕「松君のをかしう物のたまふを、誰れも誰れもうつくしがり聞えたまふ」

うつくし-くす 愛しくす【動佐變他】うつくしむ（慈しむ）に同じ。〔古語〕空穗「うつくしうしたまふや、いさ知らず」

うつくし-け 愛しけ【形】うつくし（愛し）の連體形の轉訛。〔古語〕萬葉「おほ君のみこ

とかしこみうつくしけまこが手離れ島づたひゆく」

うつくし-づま 愛夫・愛妻【名】愛する夫又は妻。〔古語〕萬葉「やそとものをと出でゆきしうつくしづまは」同「なみくものうつくしづまとことはず別れしくれば」

うつくしび 慈【名】うつくしみ（慈）に同じ。〔古語〕紀「慈愛、ウツクシビ」

うつくしぶ 慈しぶ【動四他】うつくしむ（慈しむ）に同じ。〔古語〕名義抄「仁、ウツクシブ」

うつくしま 【貌】うつくしさま。いそがしげ。〔古語〕字鏡集「躁、ウツクシマニハシル、ウクツク」

うつくしみ 慈【名】うつくしむこと。うつくしび。慈愛。仁愛。〔古語〕源氏「かの紫のゆかりたづねとりたまひては、そのうつくしみに心いりたまひて」

うつくしむ 慈しむ【動四他】いつくしむ。愛す。したしむ。うつくしくす。うつくしぶ。〔古語〕枕「をかしげなるちごの、あからさまに抱きてうつくしむほどに、かいつきて寐入りたるも、らうたし」

うつくし-よし 【感】蟬の鳴聲。つくつくし。〔古語〕夫木「女郎花なまめきたてる姿をやうつくしよしと蟬の鳴くらん」

うっ-くつ 鬱屈【名】㊀心のふさぐこと。鬱滯。鬱結。㊁物事の澁滯（シフタイ）すること。

うつ-くひ 打株【名】樹立する株。〔古語〕字鏡「株、宇豆久比」

うづ-くまり 蹲【名】うづくまること。蹲踞。

うづ-くまる 蹲る【動四自】人、膝を折り立ててゐる。獸、前足を立ててすわる。うづつく。うづまる。丈草「うづくまる藥罐の下のさむさかな」

う-づくり 鵜作【名】うくびづくり（鵜頸作）に同じ。

うっ-くわい 鬱懷【名】心のむすぼれてあること。晴れやかならぬ心。

うつ-け 空・空氣・呆氣【名】㊀中の空しきこと。心の茫然としたること。失心。ばか。㊁うつけもの（空氣者）の略。生玉心中「やい、うつけめ」

人をうつけにす【句】他人をうつけ者

なるがごとくに見做（ナ）して取扱ふ。ばかにす。あなどる。きのふはけふの物語「言語道斷、わが祕藏の物を盜みながら、人をうつけにする」

うつ-げ 【名】〔植〕うつぎ（空木）を云ふ。〔土佐國の方言〕

うづ-げぎよ 渦懸魚【名】〔建〕渦形の鰭（ヒレ）のある懸魚。

うつけ-ごと 空言【名】そらごと。ねなしごと。

うっ-けつ 鬱結【名】うっくつ（鬱屈）㊀に同じ。

うっ-けつ 鬱血【名】〔醫〕靜脈血が、その血管内に甚しく鬱積すること。靜脈内の充血。

うっけつ-れうはふ 鬱血療法【名】〔醫〕體面の炎症を早く治癒せしむるために、その炎症の一部として、既に存する充血の上に、一層充血せしめて、一時に多量の吸收を得しむるやうにすること。耳鼻咽喉・男女生殖器等の病に應用せらる。

うつけ-もの 空氣者・呆氣者【名】心の足らぬ人。おろかもの。たはけもの。ぼんやり。のろま。うっかりもの。うつけ。うっかり。痴漢（チカン）。

うっ-こ 鬱乎【貌】うつぜん（鬱然）に同じ。「鬱乎として蒼蒼たり」

うづ-こ 何處【代】いづこ（何處）に同じ。〔古語〕紀「何處、ウヅコニカ」

うっこん-かう 鬱金香【名】〔植〕ちうりっぷに同じ。

うっ-さう 鬱蒼【貌】草木の青青と茂れるさま。うっそう（鬱葱）參照。

うっ-さん 鬱散【名】鬱氣を散ずること。きばらし。うさはらし。

うつし 寫【名】㊀寫すこと。書寫。㊁寫したる書畫。㊂うつしぼん。副書。謄本（トウホン）。㊃他の物を形どりて作ること。摸造。㊄捺染糊（ナツセンノリ）にて、木綿に形を附けて、模樣を染出すこと。

うつし 移【名】㊀移すこと。處を替ふること。㊁うつしうま（移馬）の略。〔古語〕㊂うつしくら（移鞍）の略。續世繼「みまやの御馬に、うつし置きて、出だし立てて」㊃〔植〕うつしぐさ（移草）の略。㊄薫物（タキモノ）の香を、衣類などにたきしむること。〔古

語〕源氏「よろづのすぐれたるうつしをしめたまひ」

移の馬【句】うつしうま（移馬）に同じ。〔古語〕

移の鞍【句】うつしぐら（移鞍）に同じ。〔古語〕

うつし 現し・顯し【形二】あきらかなり。あらはなり。現在にあり。〔古語〕紀「顯見蒼生、此云二宇都志枳阿烏比等久佐一」

うつしけめやも【句】うつし心あらんや、否、無し。〔古語〕萬葉「足曳のかた山きぎしたちゆかむ君におくれてうつしけめやも」

うつし-あやまり 寫誤【名】うつしあやまること。うつしちがへ。誤寫。

うつし-あやまる 寫誤る【動四他】寫して正しきを得ず。誤寫（ゴシヤ）す。うつしちがふ。

うつし-いはひ 顯齋【名】生きてゐる人に對するがごとくにして、神を祀（マツ）ること。〔古語〕紀「顯齋、此云二于圖詩怡破毘一」

うつし-いろ 移色【名】移花（ウツシバナ）にて染めたる色。月草の花の色。濱松「うつし色なる織物」

うつし-うま 移馬【名】諸國の牧場に放ち飼ひたるを徵（メ）して、左右の馬寮（メレウ）に飼ひおく馬。うつしの馬。うつし。〔古語〕源氏「うつしうまども引き出して」

うつし-おみ 現大身【名】人の形としてあらはれたる神。天皇の敬稱。あらひとがみ。〔古語〕記「吾（ア）は…葛城（カツラギ）の一言主（ヒトコトヌシ）の大神なりと申したまひき。天皇、…恐（カシコ）し、我が大神、うつしおみ有（マ）さむとは覺らざりきと白（マヲ）したまひて」

うつし-かたる 寫語る【動四自】口上を、口うつしにとりつぐ。〔古語〕源氏「げになどいひて、斯くなんとうつしかたれども」

うつし-がみ 移紙【名】つゆくさの花の汁にて染めたる紙。うつしばなにしたる紙。

うつし-ぐさ 移草【名】〔植〕『その花の汁は、物にうつして、これを染むるに用ひらるるよりいふ』つゆくさ（露草）に同じ。

うつしくにたま-の-かみ 現國玉神【名】おほくにぬしのかみ（大國主神）に同じ。

うつし-ぐら 移鞍【名】うつし馬に用ふる

鞍。もと近衛次將などの大嘗會（ダイジヤウヱ）の御禊（ミソギ）御幸の時に用ひしもの。後には隨身（ズヰジン）などの用ふるものともなれり。うつし。うつしのくら。

うつしけめやも【句】うつし（現し）の條下を見よ。

うつしごころ 現心・顯心【名】㊀たしかなる心。平生の心。うつつ心。正氣（シヤウキ）。〔古語〕萬葉「こちたくはともかもせむをくれなゐのうつしごころや妹にあはざらむ」㊁移り變はる心。うつりぎ。うはき。〔古語〕萬葉「百（モモ）に千（チ）に人はいふとも月草のうつしごころはわれ持ためやも」

うつしごと 現事【名】うつし心にて行ふわざ。正氣（シヤウキ）の仕業（シワザ）。〔古語〕取替「年ごろの御有樣は、うつしごととやおぼしつる」

うつしこめ 鬱色謎【名】〔人〕孝元天皇の后。開化天皇及び諸皇子を生む。開化天皇位に卽くに及び、尊みて皇太后といふ。

うつしざま 現狀・顯樣【名】あらはなる樣。たしかなるありさま。〔古語〕源氏「心みな亂れて、うつしざまにもあらず」

うつしちがふ 寫違ふ【動下二他】うつしあやまる（寫誤る）に同じ。

うつしちがへ 寫違【名】うつしあやまり。誤字。

うつしどの 移殿・遷殿【名】神殿營繕（エイゼン）の時、かりに神體をうつしおくところ。〔古語〕增鏡「春日の御榊、うつしどのにおはしますころにて」

うつしとる 寫取る【動四他】見又は聞きたるままを書寫す。原物のとほりに覆寫（フクシヤ）す。摸寫す。

うつしとる 移取る【動四他】移しかへて我が方に引きとる。空穗「この螢を…御覽じつけて、直衣（ナホシ）の御袖に移しとりて」

うつしのうま 移馬【句】うつし（移）の條下を見よ。

うつしのくら 移鞍【句】うつし（移）の條下を見よ。

うつしのはひ 移灰【句】はひ（灰）の條下を見よ。

うつしばな 移花【名】㊀〔植〕つゆくさ（露草）を云ふ。〔筑前國の方言〕㊁つゆ草の花を摘みて、その汁を紙に移し取り置くもの。染料とす。あゐがみ。あをばな。

うつしびと 現人・顯人【名】㊀この世の人。凡夫（ボンプ）。〔古語〕源氏「うつしびとにては、えすぐすまじかりけり」㊁うつし心を持てる人。謠曲砧「鳥てふ大おそどりも心して、うつし人とは誰れかいふ」

うつしぶみ 移文【名】まはしぶみ（廻文）に同じ。

うつしほ 打汐【名】みちしほ（滿潮）に同じ。

うづしほ 渦潮【名】渦卷く潮。〔古語〕萬葉「これやこの名におふ鳴門（ナルト）のうづしほに玉藻刈るてふあまをとめども」

うつしぼん 寫本【名】㊀原本より寫し取りたる書。謄本（トウホン）。㊁しやほん（寫本）に同じ。㊂うつしもの（寫物）に同じ。

うつしまこ うつし眞子【名】かはゆき子。眞實の子。一說には、美しき子。〔古語〕萬葉「昔より語りつぎる鶯のうつしまこかも」

うつしみ 現身・顯身【名】現世の人の身。生きてある身。うつせみ。うつそみ。〔古語〕

うつしもの 寫物【名】書き寫すべきもの、又、書くこと、又、書き寫したるもの。かきもの。うつしぼん。

うつしもの 移物【名】摸造の品。

うっしやう 鬱症【名】氣の塞（フサ）ぐ病。

うつしよ 現世・顯世【名】この世の中。げんぜ。〔古語〕

うつしゑ 映繪【名】㊀火光によりて障子などにうつす繪。硝子に彩色畫を描きて、白布の上に映す。今の謂はゆる幻燈と同じきものは、我が國にては、享和年間、江戸の池田都樂（トラク）に初まれり。かげゑ。㊁しやしん（寫眞）の雅稱。

うつしゑ 寫繪【名】書寫したる繪。雙生隅田川「これは、まことの鯉、寫繪とはさらさら思はれず」

うつす 寫す【動四他】㊀他の文字又は書畫などを、別にかく。㊁他に形を象（カタド）り作る。摸造す。㊂寫眞にとる。「撮す」

うつす 移す・遷す【動四他】㊀これをかれに置直す。場所を變ふ。おきかふ。古今「梅が香を袖にうつしてとどめては春はすぐともかたみならまし」㊁物を、人より人に順にまはして、達せしむ。㊂變ふ。變化せしむ。㊃色をすりつく。拾遺「秋の野の花のいろいろとりすべて我が衣手にうつしてしがな」㊄過す。「時をうつす」㊅病などを傳染せさす。

うつす 映す【動四他】かしこの影を、此處に現はれしむ。ここの光を、かしこにあらはす。「鏡にうつす」「幻燈をうつす」

うっす 鬱す【動佐變自】㊀塞（フサ）ぐ。心晴れず。氣むすぼる。㊁とづ。かがむ。ふさぐ。㊂茂る。むらがる。積む。㊃憤る。憂ふ。㊄蒸して香る。

うっす 鬱す【動佐變他】むす。ねかす。（麴などにいふ）

うっすら 薄ら【貌】次條に同じ。八笑人「眼のまはりを、うっすらとぼかさうか」

うっすり 薄り【貌】甚だうすきさま。かすか。ほのか。うっすら。〔俚語〕

うつせ【名】次條の略。〔古語〕源氏「いづれの底のうつせにまじりけん」

うつせがひ うつせ貝【名】㊀肉の脫けて海濱などにころがりてある貝。後拾遺「から衣そでしのうらのうつせがひむなしき戀に年のへぬらん」㊁〔動〕うづらがひ（鶉貝に）同じ。㊂〔動〕うつぼがひ（靫貝）に同じ。

うつせがひ うつせ貝【枕】うつせ貝は身の無きものなるより、みなし（身無し）にかけていふ。萬葉「すみのえの濱によるとふうつせがひみなきこともてわが戀ひむやは」

うっせき 鬱積【名】むすぼれふさぐこと。甚しくとどこほること。

うつせみ 現身・顯身【名】『うつしみ（現身）の轉といふ』うつしみ（現身）に同じ。〔古語〕萬葉「うつせみは戀をしげみと春まけておもひしげけば」

うつせみ 空蟬【名】㊀蟬の脫殼（ヌケガラ）。古今「うつせみはからを見つつもなぐさめつ深草の山烟だに立て」㊁〔動〕せみ（蟬）に同じ。（多くは歌に用ふる語）續後撰「夏山の梢にとまるうつせみのわれから人はつらきなりけり」㊂謠曲の源氏ものの一。源氏物語にある空蟬といふ女の幽靈の、旅僧にあひて、法華の功德を受くる事を作りしもの。

うつせみの 現身の・空蟬の【枕】空蟬と書くは借字にて、現身（ウツセミ）意のなるより、み（身）・いのち（命）・よ（世）・ひと（人）・いも（妹）などにかけていふ。萬葉「うつせみの世はつねなしとしるものを秋風さむみしのびつるかも」同「ともしびの影にかがよふうつせみのいもがゑまひしおもかげに見ゆ」同「うつせみのいのちを惜しみ波にぬれいらこがしまの玉藻かりをす」同「うつせみの人目をしげみあはずして年のへぬればいけりともなし」

うつぜん 鬱然【貌】㊀草木の高く生ひ茂れるさま。こんもり。鬱葱（ウツソウ）。鬱蓊（ウツヲウ）。鬱乎。〔蔚然〕㊁物事のさかりなるさま。鬱乎。鬱葱。㊂氣のふさげるさま。

うつそ 打麻【名】『うつたへ（打栲）・うつはた（打服）參照』苧を績（ウ）まんがために打ち和（ヤハ）げたる麻。一說に、「全（ウツ）麻（ソ）」の意にて、直ちに績みたる亘き麻。〔古語〕うちそ（打麻）參照。

うっそう 鬱葱【貌】㊀草木の繁れるさま。こんもり。鬱蓊。うっさう（鬱蒼）參照。㊁蒸しのぼる氣のさかんなるさま。鬱然。

うっそく 鬱塞【名】氣のふさぐこと。陰氣になること。

うつそみ 現身・顯身【名】うつせみ（現身）に同じ。〔古語〕萬葉「うつそみと思ひしときに」

うっそり【名】うっかりに同じ。〔俚語〕壽の門松「そなたのやうならうっそりでも、金さへ遣へば、髮も切る」

うっそりもの うっそり者【名】うっかりもの（うっかり者）に同じ。〔俚語〕

うったい 鬱滯【名】うっくつ（鬱屈）に同じ。

うづだいこん 渦大根【名】〔植〕『根の切口に紅・白の渦あるよりいふ』あかおさ（赤萵苣）に同じ。

うったう 鬱陶【貌】深く思ひて、心の伸びぬさま。うるさく思ふさま。「鬱陶として君を思ふ」

うったうし 鬱陶し【形二】氣塞（フサ）ぎて開けず。心晴れやらず。わづらはし。うるさし。うっとし。

うづ-だかし 堆し【形一】積りて高し。高くかさなりてあり。宇治「うづだかく、ふたおほはれぬきぬなども、ことのほかにあり」

うっ-たつ 打立つ【動四自】うちたつ(打立つ)[二]に同じ。謠曲(正尊)「物の具し、ただ今うったつ氣色見えて」

うつた-どり うつた鳥【名】〔動〕『しでのたをさ(死出田長)を見よ』ほととぎす(時鳥)に同じ。〔古語〕

うつたひ-ひめ うつたひ姫【名】夏を主(ツカサド)る神。〔古語〕篠目抄「名にしおふうつたひ姫の春日山夏の梢は花のまにまに」

うったふ 訴ふ・訟ふ【動下二他】『うたふ(訴ふ)の音便』[一]事の曲直の裁判を乞はんがために、その事柄をしるして、裁判所に願ひ出づ。訴訟を起す。告訴す。うたふ。[二]心に適(カナ)はずと思ふことを言ひ出づ。「不平を訴ふ」「屈を訴ふ」[三]曲直を解決するために、或手段に及ぶ。「腕力に訴ふ」[四]申し出づ。出世景淸「南都の大佛、御再興ましまし、すでに成就と訴ふれば、供養(クヤウ)の放舍に、急ぎ大赦を行ふべしと」

うったへ 訴・訟【名】訴ふること。訴訟(ソショウ)。

訴の却下【句】〔法〕訴訟を受理せる裁判所が、その訴訟の違式なること、又は受理・審判すべきものにあらざることを發見して、原告にこれを却下すること。

訴の取下(トリサゲ)【句】〔法〕裁判所に受理せられたる訴訟を、原告の意思によりて取消すこと。

虞芮(グゼイ)**の訟**【句】[一]古、支那にて、虞・芮の兩國、田を爭ひて決せず、西伯(周の文王)に質(タダ)さんとて、その境に入れば、耕す者は畔(クロ)を讓り、行く者は路を讓り、朝に入れば士大夫みな禮ありしより、二國の者恥ぢて、共に退きて、先に爭ひし田を間田(カンデン)とせりといふ故事。[二]他人の善行を見て我れを改むる譬。

うつ-たへ 打栲【名】『うつそ(打麻)・うつはた(打服)參照』打ちて、うるはしくしたる栲。〔古語〕萬葉「ありぎぬのたからの子らがうつたへはへておるぬの」

うつたへ【副】ひたすら。偏に。一向に。〔古語〕李花集「木曾ぢ川うつたへ瀬瀬の波ならば行きめぐりても立ちかへらまし」

うったへ-ただす-つかさ 刑部省【名】ぎやうぶしやう(刑部省)に同じ。〔古語〕

うつたへ-に【副】うつたへに同じ。〔古語〕土佐「うつたへに忘れなんとにはあらで」

うったへ ん 訴人【名】訴を起す人。告訴人。原告。

うっ-たまげる 打魂消る【動下一自】『うっ(打)は接頭語』大いに驚く。おったまげる。ぶったまげる。ぶたまげる。〔俚語〕浮世風呂「獵師い、それ見てうったまげただあ」

うつだら 鬱陀羅【名】〔人〕印度の數論派の哲學者。悉達(シッタ)太子出家の當時、その說法場を尋ねきといふ。

うつだらそう 鬱多羅僧(梵 Uttarāsaṅga)【名】〔佛〕『上著衣(ジャウチャクエ)と譯す』しちでうえ(七條衣)に同じ。

う-づち 卯槌【名】古、卯杖(ウヅエ)と同じく正月初卯の日の祝に用ひし、桃の木又は玉・犀角(サイカク)・象牙などにて、一寸四方・長さ三寸の立方形に造りたるもの。竪に穴ありて、十筋又は十五筋の五色の組絲を貫き垂れ、古、邪氣を拂ふと言ひなして、絲所より內裏に奉り、又、民間にても互に贈りあひて、身に佩(オ)び、室内にも掛けおきしもの。又後世は、これにて婦人の腰を打てば、子を產むとの迷信も生じたり。もと、支那漢の代の剛卯(ガウバウ)に擬せしものといふ。うづゑ(卯杖)參照。枕「五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに頭包みなどして」

うっちん【名】ぼんやり。ばか。べらばう。〔俚語〕河東節(助六後日道行)「野暮けんじんか、うっちんか」

うっちやう-しゅ 鬱鬯酒【名】古、支那にて、宗廟(ソウベウ)の神に捧げし一種の酒。鬱金香(ウコンカウ)の汁を、黑き黍(キビ)にまぜて釀(カモ)せるもの。

うっちやらかす 打遣らかす【動四他】うっちやる(打遣る)[二]に同じ。〔俚語〕「うっちやらかして置く」

うっちやり 打遣【名】[一]うっちやること。

〔俚語〕[二]相撲(スマフ)の手の一。相手の寄り來るを、土俵ぎはの今少しといふ處に支へて踏みとどまり、相手の體を己の背後にのめらして勝つもの。かはりみ。

うっちやる 打遣る【動四他】[一]うち捨つ。投げ棄つ。〔俚語〕[二]關(カカハ)らずに捨ておく。放任す。うっちやらかす。〔俚語〕「うっちやって置く」[三]相撲(スマフ)にて、うっちやりの手を以て相手を負かす。

うつつ 現・顯【名】[一]現在生きてあること。〔古語〕枕「うつつの人の乘りたるとなん、更に見えぬ」[二]眠りの覺めて居る時。平生。(夢に對して)伊勢「駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」[三]『「夢・うつつ」と連ね用ふるより誤りしもの』半ば眠り半ば覺めてあること。うつらうつらとしてゐること。俳諧古選(庭臺)「うつつにて留主をつかひし炬燵かな」

うつつ の やみ 現の闇【句】「闇(ヤミ)の現」に同じ。新拾遺「世の中のうつつの闇に見る夢のおどろくほどは寢てかさめてか」

うつつ を ぬかす 現を拔かす【句】本心を失ひて、その事に熱中す。(おもに女色に耽(フケ)る場合にいふ)〔俚語〕

うつつ 打棄つ【動下二他】『打(ウチ)棄(ス)つの約』すつ(棄つ)に同じ。(多くは連用形に用ふ)〔古語〕萬葉「古衣うつてし人は秋かぜの立ちくるときにもの思ふものぞ」

うっつい 美い【形】うつくし(美し)の連體形の訛。(芝居の臺詞(セリフ)などにいふ)「うっついあねえ」

うつつ-がほ 現顔【名】現に存在せるごとき容子(ヨウス)。新勅撰「契りしも見しも昔の夢ながらうつつ顔にもぬるる袖かな」

うづ-つく 疼附く【動四自】うづく(疼く)に同じ。

うづ-つく【動四他】うづくまる(蹲る)に同じ。世間手代氣質「一生秀でずに、うづついて居ようとは、腑甲斐ない」

うつつ-ごころ 現心【名】うつしごころ(現心)[一]に同じ。

うつつ-ちや 内津茶【名】江戸時代に、尾張國春日井郡內津にて製せる名物の煎茶。

うつつ-な 現無【貌】うつつなきさま。謠曲(小督)「うつつなやかかる賤しき賤(シヅ)が屋に、何の宣旨(センジ)の候ふべき」

うつつ-なし 現無し【形一】正氣(シヤウキ)を失へり。〔古語〕增鏡「心ばえなども、いかにぞやうつつなく」

うつつ-びと 現人【名】この世の人。現世の人。うつしびと。〔古語〕狹衣「からまでうつつ人にて見るべかりし人かは」

うっ-つらにくし 打面憎し【形一】『うっ(打)は接頭語』つらにくし(面憎し)を强めていふ語。狂言(樂阿彌)「我れながらうっつらにくや」

うつて 打棄【動他】うつつ(打棄つ)を見よ。

うっ-て 討手・打手【名】『討手(ウチテ)の音便』賊軍などを追討つ兵。よせて。追討兵。

うっ-て-かはる 打って變る【句】かはる(變る)の條下を見よ。

うって-がへ 打手替【名】[一]いり替りたち替ること。[二]圍碁にて、石一目を打ちて相手の石を取れば、その打ちたる石及びその附近の石を合せて、却りて相手より取らるること。

うって-つけ 討手附【副】さしあたりて都合よく。適當に。順應して。

うってん-ばってん【名】うんでいばんり(雲泥萬里)に同じ。〔俚語〕

うっとしい【形】うったうし(鬱陶し)の訛。

うっとり【名】うっかりに同じ。〔俚語〕醒睡笑「その座にありしうっとり、ふと立ち」

うっとり【貌】氣を失へるさま。ぼんやり。恍惚(クワウコツ)。

うつな【名】〔植〕くぬぎ(櫟)を云ふ。〔伊豫國の方言〕

ちつ-なかじま-せん 宇津中島錢【名】江戸時代の通貨の一種。元文の頃、紀伊國名草郡宇都村及び中島村にて鑄造(シュザウ)せし寛永銅錢。

うつ-なし 疑無し・決し【形一】疑なし。慥(シカ)かなり。〔古語〕和名「無疑、ウツナシ」

うづ-なひ 諾【名】うづなふこと。うけひくこと。〔古語〕

うづ-なふ 諾ふ【動四他】承諾す。うけひく。うべなふ。うけがふ。うづのふ。〔古

語」萬葉「み心をあきらめたまひあめつちの神あひうづなひ」

うつ-ぬき 全拔・內拔【名】『うつ（全）は接頭語』全く拔取ること。〔古語〕記「まを鹿の肩をうつぬきにぬきて」

うつ-ねん 鬱念【名】氣のむすぼれて解けぬこと。屈託。

うづ-のふ 諾【動四他】うづなふ（諾ふ）に同じ。〔古語〕祝詞「すめ神たち、あひうづのひつまりて」

うつ-の-みや 宇都宮【名】ふたらさんじんじや（二荒山神社）に同じ。

うつのみや 宇都宮【名】㊀〔地〕下野國にある市。奧羽街道の要路に當り、俗には單に「宮」と云ふ。鐵道東北線の要驛。日光線の分岐點。戸田氏の舊領地。廻國雜記「ねざめ憂き旅の夜床を思ひやれころもをうつの宮の里人」㊁姓氏の一。武家時代の豪族。藤原房前（フササキ）の裔。南北朝時代以來、諸國に流浪し、豐臣秀吉の時、ふたたび著れ、德川氏の時、一時水戸家に仕へたり。

宇都宮の釣天井（ツリテンジヤウ）【句】寬永十三年將軍德川家光、日光社參の途中、宇都宮城に宿泊の事と定まりし時、城主本多忠純（タダズミ）は德川忠長の傅（フ）たるより、忠長を立てて將軍たらしめんため、城內に釣天井を構へて、家光を弑せんことを企て、謀漏れて、出羽國に放たるといふ筋の講談。**うつのみやもみぢのつりよぎ**（宇都宮紅葉釣夜著）參照。

うつのみや-がさ 宇都宮笠【名】下野國宇都宮より產する笠。狂言（比丘貞）「鎌倉の女郎は煤竹のつめたに、織物の手おほひ、宇都宮笠をきりりと召されて」

うつのみや-きんつな 宇都宮公綱【名】〔人〕武將。彌三郎と稱す。下野國の人。初め北條高時に屬して、しばしば楠木正成の軍を苦しめしが、尊氏の叛せる時、義貞に屬して軍功を立つ。正平十一年歿す。年五十五。

うつのみや-じやう 宇都宮城【名】下野國宇都宮にありし城。南北朝時代以後、戰國時代にかけて宇都宮氏累代の居住。關ゲ原の役後、奧平家昌これに住し、その後、本多・奧平・松平・本多・奧平・阿部・戸田・松平の變轉を經、安永三年以後、戸田氏の居城となりて明治維新に及び、戊辰の役、兵火に罹りて廢城となる。

うつのみや-とんあん 宇都宮遁菴【名】〔人〕周防國岩國の儒者。名は的、字は由的。日本人物史を著し、中川淸秀の傳記中に、幕府の忌憚（キタン）に觸れ、禁錮（キンコ）せられしが、後赦されて、專ら敎授を任とす。諸書の標註を作る。寬永六年歿す。年七十七。

うつのみや-もみぢのつりよぎ 宇都宮紅葉釣夜著【名】宇都宮釣天井（ツリテンジヤウ）の講談に本づきて脚色せる演劇。河竹新七の作。「宇都宮の釣天井」參照。

うつのや-たうげ 宇津谷峠【名】〔地〕駿河國安倍郡と志太郡との堺にある山。古稱、宇津の山。舊東海道の岡部と丸子（マリコ）との間に當る。

うつ-の-やま 宇津山【名】〔地〕前條を見よ。伊勢「駿河の國宇津の山に到りて、わが入らんとする道は、いと暗う心ぼそきに、葛・楓はしげり」

うつ-は 團扇【名】うちは（團扇）の轉。〔俚語〕

うつは 器【名】㊀物を容るべきもの。いれもの。うつはもの。㊁器具。道具。うつはもの。㊂才能。器量。器局。うつはもの。

方圓の器に隨ふ【句】「水は方圓の器に隨ふ」を見よ。

うつ-はぎ 全剝【名】『うつ（全）は接頭語』全く剝取ること。〔古語〕記「ひむしの皮をうつはぎにはぎて」

うづ-ばしら うづ柱【名】〔建〕大社造（オホヤシロヅクリ）の外側の中心柱。

うっ-ぱしる 打走る【動四自】『うつ（打）は接頭語』はしる（走る）を强めていふ語。おっぱしる。〔俚語〕膝栗毛「にし達やあ、あにも知らずにうっぱしって」

うつ-はた 打服【名】『うつそ（打麻）・うつたへ（打栲）參照』打ちて和（ヤハ）かにしたる布帛。〔古語〕令集解「敷、和者、宇都波多也」

うつ-はた 內幡【名】裁縫せずして衣裳となるやうに織るきぬ。〔古語〕

うづ-はた 珍機【名】よき織物。美しき縫物。〔古語〕

うつは-もの 器物【名】うつは（器）に同じ。伊勢「飯匙（イヒガヒ）とりて、けこのうつはものにもりけるをみて」

うつ-はやし うつ早し【形一】いちはやし（逸早し）に同じ。〔古語〕字鏡集「崎、ウツハヤシ、ハゲシ」

うづ-はやし 渦早し【形一】水、渦卷き流れて早し。山家「しほぢゆくかこみのともろ心せよまたうづはやき瀨戸わたるなり」

うつはり 僞【名】いつはり（僞）に同じ。〔古語〕

うつはり【名】〔動〕きじ（雉子）の異名。〔古語〕

うつ-ばり 梁【名】〔建〕『內梁（ウツバリ）の意と云ふ』はり（梁）に同じ。和名「梁、宇都波利、棟梁也」

うつはり-ごと 僞言【名】いつはりごと（僞言）に同じ。〔古語〕紀「虛言、ウツハリゴト」

うつはる 僞る【動四他】いつはる（僞る）に同じ。〔古語〕紀「詐求、ウツハリモトメ」

うづ-ふ 烏頭布【名】〔植〕かちめ（搗布）に同じ。

うつ-ぶき 俯【名】うつむき（俯）に同じ。〔古語〕六帖「ねぶれども袖ひづ川のうつぶきに戀しき人の影なかりけり」

うつ-ぶく 俯く【動四自】うつむく（俯く）に同じ。〔古語〕宇治「うつぶきてみるに、弓のかげは見えず」

うつ-ぶく 俯く【動下二他】うつむく（俯く）に同じ。

うつ-ぶけ 俯【名】うつむけ（俯）に同じ。丹波與作「うつぶけに、かっぱと伏し」

うつぶけ-ざま 俯樣【名】うつぶしたる有樣。平家「太刀のさきを腹に突きたて、うつぶけざまに貫かってぞ失せられける」

うつ-ぶし 俯【名】うつむき（俯）に同じ。狹衣「うつぶしに伏したり」

うつぶし-いろ 空五倍子色・空柴色【名】『空（ウツ）とは、五倍子（シフ）の中の空虛なるよりいふ』五倍子にて染めたる薄黑き色。喪服に用ふ。にびいろ。

うつぶし-ぞめ 空五倍子染・空柴染【名】『前條を見よ』うつぶし色に染むること、又その染めたるもの。ふしぞめ。〔古語〕古今「世をいとひこのもとごとに立ちよりてうつぶしぞめの麻のきぬなり」

うつぶし-め 俯目【名】うつぶしになりたるさま。ふしめ。〔古語〕續世繼「おほい殿は、ふと心えて、色もかはりて、うつぶしめになりたまへりけるに」

うつ-ぶす 俯す【動四自】うつむく（俯く）に同じ。空穗「御腰、すこしうつぶしたまへり」

うつ-ぶす 俯す【動下二他】うつむく（俯く）に同じ。

うつ-ぶせ 俯【名】うつむけ。うつぶけ。

うっ-ぷん 鬱憤【名】積るいきどほり。晴れぬ怨み。かさなる遺恨。積憤。

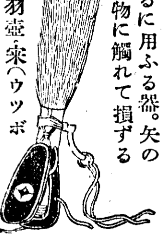
うっぷるい-ざき 十六島岬【名】〔地〕出雲國簸川（ヒカハ）郡北濱村大字金浦の西に突出せる岬。前面に十六の浮礁羅列して、常に波荒し、

うっぷるい-のり 十六島海苔【名】〔植〕あまのりの一種。長さ二三尺乃至一丈ほどの帶狀をなし、色赤黑く、質軟かにして、味美なり。出雲國簸川（ヒカハ）郡北濱村十六島（ウップルイ）岬の沿海に多し。

うっ-ぺい 鬱閉【名】㊀うつい（鬱伊）に同じ。㊁物を一ところに閉ぢこむること。

うつ-ほ 空【名】『ウツオと發音す』㊀うつろ（空）に同じ。狹衣「鳥の聲もきこえぬ木のうつほなどにて」㊁重ぬる著物の無きこと。〔古語〕源氏「山吹の袿（ウチキ）…うつほにてうち掛けたまへり」㊂〔植〕うつほぐさ（空草）に同じ。

うつぼ 空穗【名】㊀中空にて、外に毛皮を著け、矢を盛るに用ふる器。矢の雨に濡（ヌ）れ、物に觸れて損ずるを防ぐに用ふ。うつを。〔靫・羽壺・宋（ウツボの集合字）〕著聞「ひらやなぐひ・うつぼなど」㊁〔書〕うつぼものがたり（空穗物語）の略。〔宇津保〕



（うつぼ㊀）

空穗の子【句】うつぼの中に入るる小太刀。

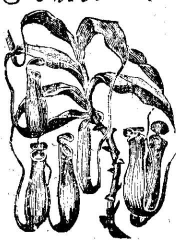
空穗の身【句】空穗に差す征矢。

うつぼ 靫【名】㊀〔動〕つめたがひ（砑螺）に同

じ。㊁うつぼがはら（靫瓦）の略。

うつぼ　鱓魚【名】〔動〕喉鰾（コウヘウ）類に屬する魚。形、鱧（ハモ）に似、長さ四五尺、鱗なく、茶褐色にして不整の横斑あり。目小くして齒銳し。肉は味美ならず。皮は美麗なる鞣革（ナメシガハ）とするを得。きちがひうなぎ。がたうなぎ。

うつぼ-かづら　靫葛・猪籠草【名】〔植〕猪籠草科に屬する多年生の食蟲草。東洋の熱帶に自生す。高さ二尺餘、葉は大形にて、次第に狹くなり、紐狀となりたるものは卷鬚（ケンシユ）の用をなし、その末端は瓶狀をなして、中に液體を貯へ、昆蟲をこの液中に落して消化し、自己の食餌（シヨクジ）とす。



（うつぼかづら）

うつぼかづら-くわ　猪籠草科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉類に屬する一科。攀緣（ハンエン）又は匍匐（ホフク）性の常綠灌木又は草本。捕蟲器を具ふ。舊世界の熱帶地方、ことに馬來（マレイ）地方に最も多し。

うつぼ-がはら　靫瓦【名】屋根の谷に用ふる一種の瓦。切面はうつぼ字形をなす。うつぼ。

うつぼ-がひ　靫貝【名】〔動〕つめたがひ（蚜螺）に同じ。

うつぼ-かもん　空勘文【名】女官の敍位の時に、敍位すべき人なくして、ただ名目のみを附けて存し置きし申文（マウシブミ）。〔古語〕

うつほ-ぎ　空木【名】『ウツオギと發音す』心（シン）の空虛なる木。うつろの木。うつろぎ。

うつほ-ぐさ　空草【名】〔植〕『ウツオグサと發音す』ねぎ（葱）の異名。うつほ。七一職人歌合「ひともじうり。紅葉せで秋ももえぎのうつほぐさつゆなき玉と見ゆる月かな」

うつぼ-ぐさ　空穗草・滁州夏枯草【名】〔植〕唇形（シンケイ）科に屬する多年生の草。葉は薄荷（ハクカ）に似、莖は方形にして、夏の半に、唇形の紫花、短大なる穗狀花序をなして開く。藥用に供せらる。しびとのまくら。ひぐらし。

うつほ-ごろも　空衣【名】昔の一種の衣服。今の素絹の類。〔古語〕

うつぼ-ざる　靫猿【名】能（ノウ）の狂言の一。大名の生猿を靫に所望する滑稽を作れり。

うつ-ぼつ　鬱勃【名】心中に籠（コモ）りたる思。不滿の情。

うつぼ-づけ　空穗附【名】相撲（スマフ）の手の一。勢つよく振りあげて投ぐるもの。

うっぽっぽ【貌】うぽっぽに同じ。〔俚語〕

うつほ-ばしら　空柱【名】『ウツオバシラと發音す』箱形の竪柱。雨水を地上に導くためにす。たてどひ。はこどひ。夫木「うつほばしらを隱題（カクシダイ）に詠みける。夜もすがら衣うつをばしら波の立つかとよそに聞きあかすかな」平家「うつほばしらより內、鈴の綱の邊に」

うつほ-ぶね　空船【名】『ウツオブネと發音す』大木をゑぐりて作れる船。うつろぶね。まるきぶね。

うつぼ-ものがたり　空穗物語・宇津保物語【名】〔書〕平安朝時代の小說。作者詳かならねど、源氏物語よりは以前に出來たるもの。二十卷。うつぼ。

うつぼものがたり-たまこと　空穗物語玉琴【名】〔書〕空穗物語を論じ、又その本文の異同を考證したるもの。五卷。細井貞雄の著。

うつぼものがたり-としかげ-の-まき　空穗物語俊蔭卷【名】〔書〕空穗物語の一部分を、萬治三年に刊行せるもの。三卷。

うづ-まき　渦卷【名】㊀うづ（渦）に同じ。㊁線の圓く幾重にもめぐりて、渦の狀をなせる形。うづ。㊂饂飩粉（ウドンコ）に卵を加へて薄く燒き、餡（アン）を包み、卷きて輪切にしたる蒸菓子。その切口、渦の卷きたるが如し。㊃小供の遊戲の一。多人數、前後に相接して、渦線（クワセン）狀に行進しては、又これを解くことを繰返（クリカヘ）すもの。㊄次條の略。

うづまき-こもん　渦卷小紋【名】渦卷の形を模樣にしたる小紋。うづまき。

うづまき-づけ　渦卷漬【名】澤山の蕃椒（タウガラシ）を入れて、甘鹽に漬けたる胡瓜（キウリ）を、その割らずに縱に切り、綿を去りて乾し、その一方より固く卷き、更に糠・鹽を入れ、澤庵漬（タクアンヅケ）の如く漬けたる食品。小口より切れば渦（ウヅ）をなす。

うづまき-みづ　渦卷水【名】渦をなして逆卷く水。

うづ-まく　渦卷く【動四自】渦の形をなしてめぐる。丸く卷きめぐる。「水、うづまき流る」

うづまさ　太秦【名】㊀『秦公（ハタノキミ）酒（サケ）、雄略天皇の時、絲綿絹帛を山の如く積みて獻りしを、天皇喜びて、禹都萬佐の號を賜ひしに本づく。禹都萬佐は、うづ高く積まれたるさまを稱（タタ）へたまへる語』姓氏の一。秦（ハタ）氏の支流。姓（カバネ）は宿禰（スクネ）。㊁姓氏の一。舊興福寺慈尊院の住職より出でし華族。男爵たり。㊂〔地〕山城國葛野（カドノ）郡にある村。その大部分は古の太秦鄕にて、秦（ハタ）氏の住地として知られ、その裔、秦川勝（カハカツ）の建てたる廣隆寺、今も殘存して有名なり。

太秦の牛祭【句】うしまつり（牛祭）を見よ。

うづまさ-でら　太秦寺【名】くわうりうじ（廣隆寺）に同じ。

うづ-まさる【動四自】雲など、堆（ウヅタカ）く起る。雲など群り起る。〔古語〕爲尹千首「くれゆけどなほあらはれて風越の峯をや雲のうづまさるらん」

うづまる　蹲る【動四自】うづくまる（蹲る）に同じ。うずまる（蹲る）參照。〔古語〕

うづまる　埋まる【動四自】うづもる（埋もる）に同じ。

うつ-み　內海【名】㊀うちうみ。いりうみ。いりえ。㊁口の小さき茶壺。

うつみ　內海【名】〔地〕尾張國知多郡にある町。知多半島の南西端。小港灣あり。船舶此處より伊勢・志摩兩國に往來す。長明集「海近き浦には松の音たてて波ぞうつみの沖つ汐風」

うづみ-どうふ　埋豆腐【名】こまかに切りたる豆腐を、椀の中に入れ、その上より飯を盛りたる食品。うづみめし。

うづみ-どひ　埋樋【名】土中に埋めたる樋。うめどひ。うめひ。

うつ-みね　宇津峯・埋峯・雲水峰【名】〔地〕磐城國田村郡二瀨（フタセ）村と石川郡小鹽江（コシホエ）村とに跨れる山。高さ一九八〇尺。東北地方に於ける南朝遺跡の一。

うつみね-じやう　宇津峯城・埋峯城・雲水峰城【名】〔城〕磐城國宇津峯の山頂にありし城。興國・正平の間、南朝の皇族宇津峰の宮（尊良親王の皇子といふ）及び北畠顯信等の據守せしところ。別稱、星ケ城。

うづみ-び　埋火【名】㊀爐（ロ）などの火を、灰にていけたるもの。いけ火。㊁爐。火鉢。㊂三味線にて歌ふ小唄（コウタ）の曲名。

うづみ-ひ　埋樋【名】土中に埋めおきて、水を通はす樋。うめどひ。かくれどひ。ふせどひ。

うづみ-めし　埋飯【名】うづみどうふ（埋豆腐）に同じ。

うづみ-もん　埋門【名】㊀城の石垣・築地（ツイヂ）などの一部に出入の孔を作り、扉を附けたる小き門。水を汲み又は船を出す等のためにせるもの。㊁家の裏口にある小き門。

うつみ-りう　打身流【名】槍術の一派。打身左內（江戶初期の人）を祖とす。

うづ-む　堆む【動四他】うづだかく積む。とりうづむ（取埋む）參照。〔古語〕源氏「祿を取らすること、うづむばかりにて、もてさわぐ」

うづむ　埋む【動四他】『もと前條の語の意』次條に同じ。〔古語〕源氏「うづみたる火をおこして」

心を埋む【句】元氣を失はしむ。めいらしむ。〔古語〕夫木「思ひやるながめも今は絕えぬとや心をうづむ夕ぐれの空」

うづむ　埋む【動下二他】㊀物（殊に土）の下に物を入れて、覆ひ隱す。うむ。いく。堀太「冬さむくいてし氷をうづめおきてはやひむろとはいふにぞありける」㊁他人の功勞などを、うやむやの中に隱す。はうむる。

埋まる【句】前條の語の受身の形（下二段の形に活用す）。**うづまる**（埋まる）參照。〔古語〕著聞「その足駄、砂子に深く入りて足くびまでうづまれにけり」

埋まれぬ名【句】「埋もれぬ名」に同じ。**うづもる**（埋もる）の條下を見よ。〔古語〕馬內侍集「おこし火の炭をば灰にかくしつつうづまれぬ名の戀をこそ思へ」

うつむき 俯【名】うつむくこと。うつぶき。うつぶし。

うつむく 俯く【動四自】頭が下に向く。うつぶく。うつぶす。（あふむくに對して）

うつむく 俯く【動下二他】うつむくやうにす。うつぶく。うつぶす。

うつむけ 俯【名】うつむくること。うつぶせ。うつぶけ。

うづむし 渦蟲【名】〔動〕**まひまひむし**（舞舞蟲）を云ふ。〔京都の語〕

うつむろ 空室【名】四方みな壁にて戸なき室。**うちむろづくり**（内室作）參照。〔古語〕和名「日本紀私記云、無レ戸室、宇都無路」

うつもん 鬱悶【名】心塞ぎて悶（モダ）ゆること。鬱悒（ウツ イブ）の甚しきこと。

うつもも 内股【名】**うちもも**（内股）に同じ。

うづもらす 埋もらす【動下四他】埋もれしむ。沈淪（チンリン）せしむ。〔古語〕取替「かかる身をもてうづもらさんことも、われになして思ふに、難しかし」

うづもる 埋もる【動四自】次條に同じ。〔古語〕六帖「はきたむる塵のかずにもおもはぬもうづもることのあやしとぞ見る」

うづもる 埋もる【動下二自】物の下又は物の中（殊に土中）に隱る。被（オホ）はれ隱る。うまる。うづまる。枕「冬のいみじう寒きに、おもふ人と、うづもれ臥して聞くに」

埋もれぬ名【句】朽ちざる名。永久に傳はる名。うづまれぬな。和泉式部集「もろともに苔の下には朽ちずしてうづもれぬ名を聞くぞかなしき」

うつゆふ 虛木綿【名】中の空虛になれる繭（マユ）。一說に、内方をうつろに卷きたる木綿（ユフ）。

うつゆふの 虛木綿の【枕】㊀うつゆふは内籠りてあるより、**こもる**（籠る）にかけていふ。萬葉「うつゆふのこもりてをればみてしがと」㊁内の狹きより、**まさき**（眞迮き）にかけていふ。紀「姸哉乎國之獲矣、雖二内木綿之眞迮國一、アナニヤシ、クニヲエツ、ウツユフノマサキクニナレドモ」

うつゆふのまさきくに 内木綿眞狹國・内木綿眞幸國【名】〔地〕日本國の古稱。

うつよく 鬱抑【名】氣のふさぐこと。心のつまること。抑鬱。

うつら 空【名】**うつろ**（空）に同じ。

うつら 恍惚【貌】**うつらうつら**に同じ。

うづら 鶉【名】㊀〔動〕鶉鷄（ジユンケイ）類に屬する鳥。多くは原野に棲み、或は人家に畜はる。形、雞の雛に似て肥え、やや小く、尾短く、全身褐色にして、黑・白の斑あり。肉甚だ美味にして、多くは羹（アツモノ）とす。うづらどり。いとら。こばなどり。萬葉「うづら鳴くふりにし里ゆ思へども何ぞもいもにあふよしもなき」㊁『天井の低きさま、鶉籠に似たるよりいふ』芝居の下棧敷（シタサジキ）。〔東京の語〕㊂『その色、鶉の羽の斑紋に似たるよりいふ』棕櫚（シユロ）の毛と加賀苧（カガヲ）とを交へて綯（ナ）ひたる繩。㊃**はかせ**に同じ。

（㊀うづら）

鶉の衣（コロモ）【句】**うづらごろも**（鶉衣）に同じ。夫木「今もなほ野となる里に誰が住みて秋はうづらの衣打つらん」

鶉の床（トコ）【句】㊀鶉の臥す處。拾遺「月ぞすむ里はまことに荒れにけり鶉の床をはらふ秋風」㊁いぶせき臥床。太平記「露に臥す鶉の床に、御涙を爭ひ」

うづらあづき 鶉小豆【名】〔植〕あづきの變種。種子の暗赤色にして紫黑の斑點あるもの。

うづらあはせ 鶉合【名】鶉を持寄り、その鳴聲によりて優劣を定むること。

うづらいし 鶉石【名】〔鑛〕瑪瑙（メナウ）の一種。圓くして小きもの。つがるめなう。

うづらいんげん 鶉隱元【名】〔植〕隱元豆の一種。種子、淡紅色にして白斑あるもの。

うつらうつら【貌】『現（ウツ）の義』たしかに目の前にあるさま。つらつら。〔古語〕萬葉「なでしこが花とり持ちてうつらうつら見まくのほしき君にもあるかも」

うつらうつら【貌】『空（ウツ）の義』うとうと。うつら。茫然。恍然。恍惚。土佐「目もうつらうつら」正章千句「雨に窓風に障子をひきたててうつらうつらと物おもふさま」

うつらか【副】前條に同じ。〔古語〕

うづらがうし 鶉格子【名】『形、鶉籠に似たるよりいふ』女郎屋の局（ツボネ）女郎の居る處に建つる格子。

うづらかご 鶉籠【名】鶉を飼ひおく籠。方形にて、家根を絲の網にて極めて低く張りたるもの。

うづらがは 鶉革【名】鶉の羽のごとき模樣を燻（スク）べ現はしたる革。**もんうづら**（紋鶉）參照。

うづらがひ 鶉貝・琵琶螺【名】〔動〕腹足（フクソク）類に屬する貝。殼は大さ三寸ほどに達し、薄くして兩端尖りたる卵形又は楕圓形をなし、その色、外面は淡褐にして白色の斑文あるさま鶉の羽に似たり。うつせがひ。ほろがひ。やつしろがひ。

うつらかふ 携ふ【動四他】手をとりあふ。たづさふ。〔古語〕紀「携レ手、ウツラカヒテ」

うづらがみ 鶉紙【名】日影に透（ス）かして見れば鶉の形にすきて見ゆる一種の紙。うづらぎれ。

うづらがり 鶉狩【名】原野にて、鶉を狩ること。うづらの。醒睡笑「津の國にて、ある侍の、うづらがりして遊ばんと、鷹すゑさせ出でられけるに」

うづらぎぬ 鶉衣【名】**うづらごろも**（鶉衣）に同じ。擧白集「鳴きたえぬ秋くれしより深草やうづらぎぬ打つ音ばかりして」

うづらきび 鶉黍【名】〔植〕**もちきび**（餅黍）に同じ。

うづらぎれ 鶉切【名】**うづらがみ**（鶉紙）に同じ。

うづらぐさ 鶉草【名】〔植〕㊀**あは**（粟）に同じ。㊁**ちどめぐさ**（血止草）に同じ。

うづらぐるま 鶉車【名】鶉の形に作りて車を附けたる玩具。日向國東諸縣（ヒガシモロガタ）郡高岡村の法華藏寺の祭禮に賣るもの。

うづらごろも 鶉衣【名】『荀子の大略篇に「子夏貧、衣、懸結如レ鶉」とあり。鶉の體の、短き羽毛に被はれたる樣、襤褸（ボロ）に似たるよりいふ』つぎはぎしたる衣。うづらぎぬ。うづらのころも。鶉衣（ジユンイ）。弊衣。

鶉衣の百結（モモムスビ）【句】『詩經に「弊裘何啻聯二百結一」とあるに本づく』ところどころ假に結びて繕ひたる襤褸。鶉衣「うづら衣の百むすび」

うづらごろも 鶉衣【名】〔書〕『前條の語の意にて、値無き短文を集め綴りたる書と謙遜して名づけたるもの』横井也有の俳文を集めたるもの。十四卷。

うづらだか 鶉鷹【名】〔動〕鶉を捕へしむるに用ふる鷹。

うづらだけ 鶉茸【名】〔植〕『傘の上、松の鱗の如くにて、その斑文、鶉の羽の文に似たるよりいふ』松茸の一種。蓋の表面に鶉の羽に似たる斑あるもの。

うづらだち 鶉立【名】㊀何の用意もなく、ふと旅に立つこと。㊁食事の給仕などする時、廻膝（マハリヒザ）をなさず、一足にそのまま立つこと。無作法の振舞として、大いに嫌ふ。〔俚言〕

うづらちりめん 鶉縮緬【名】しぼの大なる一種の縮緬。經（タテ）は糊を施せる生絲を用ひ、緯（ヨコ）の隔番に縒込む左（ヒダリヨリ）と右撚との絲は、普通の縮緬の二本づつなるとは異なりて、四本乃至六本づつ用ふ。くさりちりめん。えぼしちりめん。

うづらとり 鶉取【名】鶉を捕ふること、又それを營業とする人。柳樽「うづらとり少將さまを見知りごし」

うづらどり 鶉鳥【名】〔動〕**うづら**（鶉）㊀に同じ。記「おほみや人はうづらどりひれとりかけて」

うづらなく 鶉鳴く【枕】鶉は荒れたる野などに棲む鳥なるより、**ふる**（舊る）にかけていふ。萬葉「うづら鳴くふりにし里ゆおもへどもなにぞもいもにあふよしもなき」

うづらなす 鶉如す【枕】鶉は草の根などに匍（ハ）ひ歩くものなるより、**いはひもとほり**（い這ひもとほり）にかけていふ。萬葉「ししじものいはひをろがみうづらなすいはひもとほり」

うつらねむし うつら眠し【形一】何となくねむし。うそねむたし。

うづらの 鶉野【名】**うづらがり**（鶉狩）に同じ。

うづら-の-ころも 鶉の衣【句】うづら(鶉)の條下を見よ。

うづらのめ-かば 鶉目樺【名】『その色、鶉の羽に似たるよりいふ』矢に矧(ハ)ぎたる、樺のあまはだ。東鑑「俣野、矢即覽レ之、無文染羽、以二鶉目樺一撥レ之、篠口卷也」

うづら-の-や 鶉廼舍【名】〔人〕うへだあきなり(上田秋成)の家號。

うつら-はま 內浦濱【名】〔地〕筑前國遠賀(ヲンガ)郡岡垣村の海濱。昔京都より太宰府に往來する大路に當り、名寄などには「鶉濱」と書けり。懷中抄「かりにとは思はぬ旅をいかにしてうつら濱をば行きくらすらん」

うづら-ひき 鶉蠶【名】〔動〕あかがへる(赤蛙)を云ふ。〔伊豫國の方言〕

うづら-ふ 鶉斑【名】㊀鶉の羽色の如く、茶褐色に黑白の點ある模樣。㊁〔動〕羽の斑文の鶉に似たる鷹。

うづら-ぶえ 鶉笛【名】㊀鶉を狩るとき、これを誘ひ寄するために吹く笛。㊁笛を拍子(ヒヤウシ)短く吹くこと。

うづら-まき 鶉卷【名】白き韋(ナメシガハ)を木に卷きつけて、藁と煙草とにて燻(スク)べて、色を附けしもの。

うづら-まめ 鶉豆・斑大豆【名】〔植〕大豆の一種。種子の、黑又は赤褐にして、白き斑あるもの。

うつ-らん 蔚藍【名】濃きあゐいろ。「蔚藍の天」

うづら-めし 鶉飯【名】ことりめし(小鳥飯)に同じ。

うづら-もく 鶉杢【名】㊀木目(モクメ)の、節(フシ)多くして、鶉の羽色に似たる美しきあやあるもの。屋久杉(ヤクスギ)などに多し。㊁〔植〕やくすぎ(屋久杉)に同じ。

うづら-もち 鶉餅【名】唐法師糯米(クウボシモチゴメ)を蒸籠(セイロウ)にて蒸し、臼にて搗(ツ)きて、小くちぎり、赤小豆の餡を包み、鷄卵形に丸め、更に胡麻油を引きたる燒鍋にて、焦目(コゲメ)を附けたる菓子。元祿・享保の頃、行はれたり。うづらやき。

うづら-やき 鶉燒【名】㊀前條に同じ。祇園物語「あたりなるやきもちひと申すもの、一つまゐるべくもや候。…老人、一つ取りて、…これならば、小豆とてこそ賣るべけれ、餅と名をつけて僞れるこそ輕薄なれ。…うづらやきは、うす皮の十字のたぐひならん。あまりに輕薄なるによりて、翁の涙ながし感ぜられ候も、ことわりなり」㊁食物を油にて煎(イ)りつけて、鶉色にすること。「茄子のうづらやき」

うつり 映【名】㊀映ること。㊁色と色との出合ひたるはえ。色彩の配合。㊂物と物との趣のつりあひてあること。

うつり 移【名】㊀移ること。遷移。變轉。變遷。㊁つづきあひ。ゆかり。關係。㊂心のうつること。〔德川時代の遊里の語〕色道大鑑「うつり心のうつりなり。男より女へのうつりあれど、まづ、うつりといふ時は、女より男のかたへのうつりなり。傾城を買ひてしこむ內に、女郎より、うつり心のよしあしを吟味する事なり」㊃他より贈物を受けたるとき、返禮にとて、その器に入れて戾す品物。物なきときは、半紙又は附木(ツケギ)などを用ふ。うつりがみ(移紙)參照。㊄刀の地の平(ヒラ)に燒刃の影のごときものの見ゆること。

うつり-が 移香【名】物に移り殘れる香氣。遺薰。殘香。源氏「もてならしたるうつりが、いとしみふかうなつかしうて」

うつり-かはり 移變【名】物事の次第にかはり行くこと。かれ去り、これ來ること、沿革。變遷。

うつり-かはる 移變る【動四自】次第にかはり行く。かれ去りてこれ來る。移變。源氏「世の中、さまざまにつけて、はかなく、移りかはるありさま」

うつり-がみ 移紙【名】他より贈物を受けたる返禮とする紙。うつり(移)㊃參照。

うつり-ぎ 移氣【名】變りやすき心。かはり心。うはき。浮世風呂「ほんにほんに移氣なものでございます」

うつり-ごし 移腰【名】柔術の手の一。相手が我が左側にまはりし時、我が右腕を相手の腰にまはし、左手にて、相手の橫腹を抱き上げ、その時、相手の前方に移るを利用し、我が腰を支點として、直ちにその方に投捨つ。

うつ-りつ 鬱壘【名】支那にて、東海の度朔(度索)山に桃樹三千株あり、その間に蟠屈せる大桃樹の東北なる鬼門の上に、神荼(シント)といふ神と共に住みて、共に百鬼を支配すといふ神。黃帝の始めし事なりとて、正月一日、桃の木の板に二神の像を畫きて符とし、戶に懸くる習はしもありき。きもん(鬼門)參照。

うつり-ばし 移箸【名】わたりばし(渡箸)に同じ。

うつり-まひ 移舞【名】舞の手の一。謠曲(谷行)「醉に引かるる戲れの舞、おもはゆながらもうつりまひ」

うつり-やまひ 移病【名】でんせんびやう(傳染病)に同じ。

うつ-りん 鬱林【名】ふかき林。茂林。

うつりよう-たう 鬱陵島・鬱凌島・蔚陵島【名】〔地〕朝鮮慶尙南道竹邊灣の沖にある島。松・杉等の良材および漁利多し。日露戰役に於ける日本海の戰は、この附近にて終れり。我が國の舊稱は松島(マツシマ)・磯竹島。

うつる 映る【動四自】㊀この物の影又は光、かしこに見はる。影さす。映ず。うつろふ。源氏「赤き紙のうつるばかり色ふかきに」㊁色と色と、互に善く出合ふ。似合ふ。㊂趣、互に似合ふ。よく配合す。

うつる 移る・遷る【動四自】㊀かはる。かはり行く。變遷す。變化す。うつろふ。㊁場所かはる。轉宅す。移轉す。うつろふ。更科「九月三日、かどでして、いまたちといふ處にうつる」㊂時、立つ。時、過ぎゆく。うつろふ。萬葉「うつりゆく時みるごとに心いたく昔の人しおもほゆるかも」㊃色、褪(サ)む。うつろふ。躬恒集「あたらしくわれのみやみん菊の花うつらぬさきにこん人もがな」㊄散る。うつろふ。新古今「今日だにも庭をさかりと移る花消えずはありとも雪かとも見よ」㊅色又は香など、染(シ)みつく。うつろふ。新後拾遺「梢をばさそひもあかず梅が香のうつる袖まで春風ぞ吹く」㊆感染す。傳染す。

移り移らず【句】移るか、移らぬか。源氏「旅寢してなほ心みよ女郎花さかりの色にうつりうつらず」

移れば變る【句】人情・世態、歲月とともに變りゆく。新古今「袖の露もあらぬ色にぞ消えかへるうつればかはるながめせしまに」

うつ-るゐ 鬱壘【名】うつりつ(鬱壘)の誤。

うつれう-し 蔚繚子【名】〔書〕兵法七書の一。支那周の代の魏の人、蔚繚(孟子と同時代の人ならんといふ)の著。五卷。

うつ-ろ 空【名】中の空しきこと。うつほ。うつら。うろ。空虛。

うつろ-ぎ 空木【名】心(シン)の空虛なる木。うつほぎ。

うつろ-ぢゆう 洞中【名】一門。一家族。〔天正・慶長頃の語〕

うつろ-はす 移ろはす【動四他】移ろふやうにす。かはらす。

うつろひ 移【名】㊀うつろふこと。變遷。〔古語〕新千載「君見よと插しし簪は散りもせずうつろひもせずのどけかるらん」㊁やうつり。轉居。〔古語〕空穗「大納言殿北の方、また對面したまはねば、うつろひもえしたまはず」

うつろひ-ぎく 移菊【名】襲(カサネ)の色目の一。表は薄紫・裏は黃又は白。一說に、表は紫・中紫又は薄紫・裏は青。

うつろふ 移ろふ【動四自】うつる(移る)㊀㊁㊂㊃㊄㊅の延。源氏「山里にうつろひなんとおぼしたりしを」萬葉「天の川こぞのわたりのうつろへば淺瀨ふむまに夜ぞふけにける」

うつろふ 映ろふ【動四自】うつる(映る)㊀の延。後撰「花ざかりまたもすぎぬに吉野川かげにうつろふ岸の山吹」

うつろ-ぶね 空船【名】うつほぶね(空船)に同じ。

うづ-わ 渦輪【名】㊀渦を卷きたるごとき圓形。㊁〔動〕次條の略。

うづわ-がつを 蹲輪鰹・雲文松魚・雲圖鰹【名】〔動〕鰹の一種。長さ約一尺に達し、腹に筋目なく、背は茶黑色にして、後方に雲形の斑紋あり。うづわ。

うづ-ゐ 蹲居【名】うづくまり居ること。うずゐ(蹲居)參照。〔古語〕

う-づゑ 卯杖【名】古、正月初卯の日に、邪氣を避くとて、桃又はその他の木を五尺三寸に切り、二本又は四本づつ束ねて、初は

大學寮、又後には諸衛府より朝廷に奉りしもの。卯槌と同じく支那漢代の剛卯（ガウバウ）に倣へるものといふ。いはひのつゑ。うのひのつゑ。うづち（卯槌）參照。夫木「萬代にありきの山の白椿君がさかゆくうづゑにぞ切る」雜談抄「今の世に、賀茂より、卯杖とて、在家などに送るは、一尺あまりの白く削りたる木に、日かげのかづらを纏ひて、倶里伽羅龍（クリカラリユウ）の形に作れるものと」

卯杖の壽（コトブキ）【句】うづゑほがひ（卯杖祝）に同じ。〔古語〕

卯杖の法師【句】卯杖をたてまつる法師なりといふ。〔古語〕枕「卯杖の法師」

うづゑ-ほがひ 卯杖祝【名】卯杖をたてまつる時に奏する壽詞（ヨゴト）。うづゑのことぶき。〔古語〕夫木「曉がたに歸らせたまふとて、うづゑほがひをきこしめして」

うづゑ-まひ 卯杖舞【名】熱田神宮の祭に行ふ一種の舞。

うつを 靫【名】うつぼ（空穗）㊀に同じ。

うつ-をう 鬱蓊【貌】樹木のしげりてあるさま。蓊鬱。

うつを-ばしら 空柱【名】うつぼばしら（空柱）に同じ。夫木「夜もすがら衣うつをばしら浪の立つかとよそに聞きあかすかな。この歌は、…うつをばしらを隱題（カクシダイ）に詠みけるに詠めると」

う-て 討手【名】うって（討手）に同じ。〔古語〕

討手の使【句】つゐたうし（追討使）に同じ。〔古語〕大和「大貳純友が騷の時に、うてのつかひにさされて」

うで 腕【名】㊀肘（ヒヂ）と手くびとの間。ただむき。小手（コテ）。㊁肩より手くびまでの間全部。手。㊂てぎは。うでまへ。技倆。技能。器量。「うでがある」㊃ちから。腕力。㊄椅子の、背部より左右兩側に突出でて、臂を倚する部分。人力車にもこれを備へたるものあり。㊅〔理〕天秤（テンビン）の支點より力の作用點までの距離。力。力量。㊆櫓（ロ）の一部の名目。

腕一本、脛（スネ）一本【句】おのれ一身の外にたよる物なき譬。〔諺語〕

腕が鳴る【句】うでだてをなさんとする意氣、抑（オサ）へがたし。

腕に縒（ヨリ）を掛ける【句】常よりも一層勵みて、事に當る。

腕を組む【句】うでぐみをなす。

腕を鳴す【句】わが伎倆（ギリヤウ）をあらはさんとて、事あれかしと待ちのぞむ。

腕を伸（ノ）す【句】十分に腕まへを示す。

うで-あて 腕當【名】鎧（ヨロヒ）の具の一。

うて-あふ 打合ふ【動四他】うちあふ（打合ふ）に同じ。

う-ていこく 于定國【名】〔人〕支那漢の世の人。字は曼倩（マンセイ）。宣帝の時、廷尉となり、後、御史大夫を經て、丞相となる。閭門破れて、父老これを修治せんとせし時、我れ獄を決すること公平、寃屈（エンクツ）の者なければ、子孫その陰德によりて必ず榮ゆる者あらんとて、その門を高大にし、あらかじめ駟馬（シバ）・高蓋（カウガイ）の車を容るるに便ならしめきといふ。枕「門（カド）のかぎりを高く造りつる人も聞ゆるは、といへば、…それは、于定國が事にこそ侍るなれ」

うで-いし 腕石【名】延縄（ハヘナハ）又は網を沈ましむるために、その一部に附くる錘（アバ）。小手石。

う-てう 烏鳥【名】〔動〕からす（烏）に同じ。

烏鳥の私情【句】『「反哺（ハンポ）の孝」を見よ』孝養するこころ。孝心。

うで-おし 腕押【名】二人、掌を握り合ひて、腕を立て、臂（ヒヂ）を下につけて、互に押合ひて倒さんとする遊戲。うでずまふ。

うで-かう 腕香【名】僧侶又は修驗者（シユゲンジヤ）などの荒行（アラギヤウ）の一。腕の皮膚の上にて、香を燻（クン）ずる術。うでご。

うで-かう 腕膏【名】㊀『腕に小刀を刺して、その場に膏藥を塗りて効能を唱へしに因る』かうやくうり（膏藥賣）に同じ。〔江戸時代の語〕㊁腕に刃物を刺しなどして、財物を貫ひあるく乞食。

うで-かぎり 腕限【名】腕力のつづくかぎり。

うで-がなもの 腕鐵物【名】〔建〕鐵にて作りたる持送（モチオクリ）。

うで-がね 腕金【名】腕木を、金屬にて造れるもの。うでぎ（腕木）參照。

うで-かへり-こぼし うて返小法師【名】おきあがりこぼし（起上小法師）を云ふ。〔伊勢國久居（ヒサヰ）の方言〕

う-てき 雨滴【名】雨のしたたり。あまだり。

うで-ぎ 腕木【名】〔建〕㊀一端を柱などに取附け、他の一端を横に又は上方に斜に出して、垂木（タルキ）などを支へしめたる材。㊁電柱に横に取附けて、架空電線を支持せしめたる木。高壓電線を支持せしめたるものは、危險の標（シルシ）として、赤色に塗る。

うで-きき 腕利【名】うでこき（腕扱）に同じ。

うでぎ-ひさし 腕木庇【名】〔建〕腕木にて支へ持たせる庇。

うでぎ-もん 腕木門【名】きどもん（木戸門）に同じ。

うで-くび 腕首【名】てくび（手首）に同じ。

腕首を取る【句】㊀他人の腕くびをおさへ握る。うでくびをにぎる。宇治「童の腕くびを取りて、引きとどめて」㊁追從す。へつらふ。おもねる。手とり足とりす。盛衰記「他人の門へ足踏み入れず、腕首取って追從せず」

腕首を握る【句】前條に同じ。盛衰記「相傳の主を捨て奉って、今さらに平家に腕首をにぎらん、末代まで名こそ惜しけれ」

うで-ぐみ 腕組【名】兩の腕を、胸の前にて組合はすること。（物事を思案するときなどに行ふ）

うで-くらべ 腕競【名】腕力又は技倆を競爭すること。

うで-ぐるま 腕車【名】他人の腕を攫（ツカ）んで、ぐるぐると引きまはすこと。

うで-ご 腕香【名】うでかう（腕香）の訛。

うで-こき 腕扱【名】仲間の中にて、技倆の最も勝れたること、又その人。うできき。うでっこき。

うで-さき 腕先【名】㊀腕のさき。㊁腕力にうったへて事を行ふこと。（口先に對して）

うで-ざた 腕沙汰【名】腕力を用ふるに至れること。

うて-ず【名】『うてるの將然形に打消の助動詞の添へるもの』無意氣なる人。ぶすゐもの。〔德川時代の語〕冥途飛脚「彼の田舍客のうてずにせびらかされて、頭（ツ）がいたい。忠さまは、まだ見えぬか」

うで-ずまふ 腕相撲【名】うでおし（腕押）に同じ。

うで-ぞろひ 腕揃【名】腕力又は技能ある人の、揃ひ居ること。

うで-だて 腕立【名】我が力を賴みて、他人と爭はんとすること。うでっこ。

うで-だめし 腕試【名】腕力又は伎倆をためすこと。

うで-づく 腕盡【名】腕力を主として、事を爲すこと。

うで-っ-こ 腕っこ【名】㊀うでだて（腕立）に同じ。〔俚語〕㊁腕を覆（オホ）ふ具。多くはメリヤスにて作る。うでぶくろ。

うで-っ-こき 腕扱【名】うでこき（腕扱）の訛。

うで-っ-ぷし 腕節【名】うでぶし（腕節）の訛。

うで-てんがう 腕てんがう【名】手にて行ふいたづら。てすさび。てなぐさみ。〔德川時代の語〕

うで-とり 腕取【名】互に腕をとりて、力量を爭ふこと。

うて-な 臺【名】㊀屋根なくして高き樓。㊁物の臺の、上るべきもの。源氏「はちすばをおなじうてなと契りおきて露のわかるるけふぞかなしき」

臺の竹【句】禁中清涼殿の東にある呉竹臺（クレタケノウテナ）の竹。後柏原院集「君が代のためしとなりぬももしきやうてなの竹の直きすがたは」

臺の花【句】〔佛〕れんだい（蓮臺）㊀に同じ。

うてな 萼【名】『うてな（臺）㊀の意』花の蔕（ホゾ）の端の、四方に出でて、花瓣を受くるもの。がく。

うで-なし 腕無【名】㊀腕の無きかたは者。でんばう。㊁技倆または腕力の無きこと、又その人。

腕無の振相撲（フリズマフ）【句】㊀相撲の法を知らずして、みだりに手足を振りて取る相撲。㊁それに適する技倆なくして、みだりに事を行ふこと。〔諺語〕

腕無のふりづんばい【句】㊀『つんばいはつばいの訛』腕力無き者が石を投ぐること。㊁「腕無の振相撲」㊁に同じ。〔諺語〕出世景淸「そのいましめに遇ひながら、菜をつかまんとは、うでなしのふりつんばい」

うて-ぬき 腕貫 【名】㊀二の腕の周圍にまとひて飾とする環狀の物。うでわ。㊁うでぶくろ（腕袋）に同じ。㊂太刀の柄頭（ツカガシラ）又は鐔より垂れたる緖。手首を通し、拔刀の際、手より振離れざらしむるためのもの。㊃槍の石突にある穴。いしづきのあな。うでぬきのあな。㊄ぬきいれ（貫入）に同じ。

うで-ばり 腕張 【名】器械體操の一。下垂せる二條の繩の先端を兩手にて執り、片臂を曲げ、他の片臂を側方へ突出すもの。

うで-びき 腕引 【名】兩人互に腕の曲りめに、一筋の手拭の端をはさみ、兩方より引合ひ、引寄せられし方を負（マケ）とする遊戲。

うで-ぶくろ 腕袋 【名】毛絲などにて、腕にはまるやうに編み、腕部の暖氣を保護するもの。うでぬき。

うで-ぶし 腕節 【名】㊀腕の關節。㊁うで。腕力。うでっぷし。

うで-ぼし 腕節 【名】前條の轉。堀河波鼓「長刀持ったる腕ぼし、共にねぢ折って吳んず」

うで-ぼね 腕骨 【名】腕の骨。腕力。〔俚語〕

うで-まくり 腕捲 【名】袖口を捲り上げて、肘をあらはすこと。まくりで。

女子（ヲナゴ）の腕捲 【句】「朝雨は女子の腕まくり」を見よ。

うで-まへ 腕前 【名】はたらきぶり。手なみ。うで。技倆。

うで-まもり 腕守 【名】腕貫（ウデヌキ）などに入れおく神佛の守札。

う-てん 雨天 【名】雨降りの空。あまぞら。

雨天順延 【句】豫定の日に雨降れる時、順送りに日を延ばすこと。

うてる 【動下一自】㊀『うつの訛』氣を呑まる。よわる。負（マ）く。㊁炎暑などのために腐る。すゆ。（魚などにいふ）

うでる 煠でる・茹でる 【動下一他】ゆづ（煠づ）に同じ。〔俚語〕

うで-わ 腕輪 【名】うでぬき（腕貫）㊀に同じ。

うと 空 【代】『うつ（空）の轉』うつろ。空虛。

う-と 烏兎 【名】『金烏と玉兎との義』㊀太陽と月と。日月。㊁歲月。光陰。「烏兎匆匆」

うど 土當歸 【名】〔植〕㊀五加（ウコギ）科に屬する多年生の草。多くは山中に自生し、又人家にも栽培す。春、宿根より生じて、高さ五六尺に及び、葉は二回羽狀複葉にて互生し、夏秋の頃、小白花簇（ムラガ）り開く。嫩芽（ワカメ）を食用とす。㊁ししうど（獨活）に同じ。字鏡「獨活、宇度。又云、乃太良。一云、獨搖草」

獨活の大木（タイボク） 【句】量の大なるのみにて、質に於てはすぐれたる點の無き譬。〔諺語〕

うど 宇土 【名】〔地〕㊀肥後國十二郡の一。郡役所を三角町に置く。㊁肥後國宇土郡にある町。細川氏の支族の舊藩地。又、天正十六年小西行長の居城せし處。九州鐵道八代線の一驛にて、三角（ミスミ）線の分岐點。

うど 有渡 【名】〔地〕駿河國の舊郡の一。明治二十九年、安倍（アベ）郡に合併せらる。

うとう 【名】嶮（ケハ）しく出張りたる地勢。〔東國・奥羽邊の古の方言〕

うとう 善知鳥 【名】㊀〔動〕『兩鼻孔の間に側扁なる角狀突起あるさま、前條のうとうに似たるよりいふとぞ』うとうどり（善知鳥）に同じ。㊁善知鳥（ウトウドリ）の鳴聲にもとづける傳說。允恭天皇の時、烏頭安潟（ウトウヤスカタ）、勅勘（チョクカン）の身となりて、奥州の外ケ濱（ソトガハマ）に卜居し、干潟に小祠を造りて宗像（ムナカタ）三女神を祀りしが、その死後、雌・雄の異鳥、祠畔に飛來り、雄は「うとう」と鳴き、雌は「やすかた」と鳴く。安潟父子の一念の化せしものならんとて、人人恐れ敬ひしに、一獵師、過ってその雄鳥を殺ししに、雌鳥泣き悲しみて、田畑を害し、獵師も非業の死を遂ぐ。よって、里人、雄鳥のために祠を建つ。今の青森市の善知鳥神社これなりといふ。㊂謠曲の一。前記の傳說に本づき、陸奥國卒都（ソト）の濱の漁父の、生前に殺生せし報にて、冥途（メイド）の苦を受くる事を作りしもの。〔烏頭〕

うとう-あふぎ 善知鳥扇 【名】能（ノウ）の「善知鳥」の曲における後仕手（アトシテ）の持つ扇。白骨に鳥の食合ひせる樣など描く。

うとう-じんじや 善知鳥神社 【名】陸奥國青森市安方町に鎭坐せる縣社。祭神は宗像（ムナカタ）三女神、即ち市杵島姫（イチキシマヒメ）命・多紀理姫（タキリヒメ）命・多岐都姫（タキツヒメ）命。うとう（善知鳥）㊁參照。

うと-うと 【貌】睡眠を催すさま。うつらうつら。

うと-うとし 疎疎し・踈踈し 【形二】甚だ疎し。甚だ疎遠なり。甚だ無沙汰なり。冷淡なり。源氏「おのれをもおもてぶせなりとおぼしすてたりしかば、うとうとしきやうになりそめしかど」

うとう-どり 善知鳥 【名】〔動〕游禽（イウキン）類に屬する鳥。形、小鴨に似て、色淡黑く、頸長く、嘴の本に側扁なる角狀突起ありて、末尖る。但しこの突起、秋には落ち、冬はただ痕跡をとどむるのみ。北海道沿岸に產す。うとうやすかた。うとう。

うとう-やすかた 善知鳥安方 【名】〔動〕『やすかたは鳴聲なりといふ』前條に同じ。〔古語〕夫木「みちのくの卒都（ト）の濱なる呼子鳥なくなる聲はうとうやすかた」

うとうやすかた-ちゆうぎでん 善知鳥安方忠義傳 【名】〔書〕松亭金水の補修せる讀本（ヨミホン）。平將門の一族・臣下の事を脚色せるもの。六册、十八卷。插畫は歌川豐國。山東京傳の作。

う-とく 有德 【名】㊀德行あること。いうとく。（主に僧侶などにいふ）「有德の高僧」㊁富み榮ゆること。ぶげん。富裕。富貴。〔有得〕

うとく-じん 有德人・有得人 【名】ものもち。うとくにん。分限者。

うとく-にん 有德人・有得人 【名】前條に「同じ。

うと-ぐらし 疎暗し・踈暗し 【形一】うすぐらし（薄暗し）に同じ。

うど-ごんげん 鵜戸權現 【名】うどじんぐう（鵜戸神宮）を見よ。

うとし 疎し・踈し 【形一】㊀親しからず。疎遠なり。無沙汰なり。源氏「うときまらうど」㊁善く知らず。不案內なり。「耳うとし」㊂敏捷ならず。おぼろげなり。

うど-じんぐう 鵜戸神宮 【名】日向國南那珂（ミナミナカ）郡鵜戸村大字宮浦に鎭坐せる官幣大社。祭神は鸕鷀草葺不合（ウガヤフキアヘズ）尊。崇神天皇の御代の創建。社殿は海岸なる鵜戸の窟（イハヤ）と稱する大なる土窟の中にあり。窟は尊降誕の地なりといふ。舊稱、鵜戸權現。うのは（鵜羽）參照。

う-どねり 內舍人 【名】㊀古の殿上童（テンジヤウワラハ）の官。中務（ナカツカサ）省に屬し、帶刀して朝廷に宿衞し、雜役に從事し、行幸には左右前後に供奉して警護せしもの。定員、初は九十人、後、四十人となり、又、六十人となる。攝政・關白に隨身（ズヰジン）を賜ふ時には、これを給せらるる定にて、後世は、武士の資を獻じて、この職に拜せらるるものありき。上代は舍人といひしが、文武天皇の御代に至りて內舍人の名見ゆ。うちのとねり。㊁今の東宮職と主殿寮（トノモレウ）との判任官にて、殿中の雜務に從事するもの。

うどねり-ずゐじん 內舍人隨身 【名】隨身の一。前條參照。（本府隨身・小隨身に對して）、榮花「准三宮には、內舍人隨身二人、左右近衞の御隨身仕うまつる」

うどの 鵜殿 【名】〔地〕攝津國三島郡五領（ゴリヤウ）村の大字。淀川の下流の右岸。古は「宇渡野」とも書けり。うどのよし（鵜殿葦）參照。謠曲（籠祇王）「うどのの蘆の露分けて、旅ごろもきん（著・禁）野の雪をたどり行く」

うどの-あし 鵜殿蘆 【名】〔植〕うどのよし（鵜殿葦）に同じ。

うどの-いはや 鵜戸窟 【名】〔地〕うどじんぐう（鵜戸神宮）を見よ。

うどの-しねい 鵜殿士寧 【名】〔人〕儒者。德川氏麾下の士。服部南郭に從ひ、古文辭に名あり。桃花園遺稿・雜肋集等の著あり。安永三年歿す。年六十五。

うどの-よし 鵜殿葦 【名】〔植〕禾本（クワホン）科に屬する多年生の草。葉細長くして、葦に類し、花は褐色にして、曖地の沼澤に自生す。攝津國鵜殿の產ことに名あり、篳篥（ヒチリキ）の舌に賞用せられたり。うどのあし。うのよし。せいこのあし。

うどの-よの 鵜殿餘野 【名】〔人〕女流の歌人。紀伊侯の夫人に仕へ、瀨川と稱す。賀茂眞淵（マブチ）門下の三才女の一人。旅日記・岐蘇路の記・家集佐保川等の著あり。

うど-はま 宇土濱・宇止濱・鵜戸濱 【名】〔地〕日向國南那珂（ミナミナカ）郡鵜戸村の海濱。鵜戸神宮あり。

うど-はま 有渡濱【名】〔地〕『うど(有渡)を見よ』駿河國安倍(アベ)郡久能(クノ)山下より三保に跨る一帶の海濱。壬二「うどはまの天の羽ごろも春は來て今も霞の神やふるらん」〔古語〕

うとふ 善知鳥【名】うとう(善知鳥)に同じ。

うとぶ 疎ぶ・疎ぶ【動上二他】うとむ(疎む)に同じ。〔古語〕祝詞「疎ぶる物」

うとぶ 疎ぶ・疎ぶ【動四他】前條に同じ。

うとまし 疎まし・疎まし【形二】うとうとしげなり。いとはし。きらはし。源氏「あれたるまがきのほど、うとましく、うちながめたまふに」

うとまし-びと 疎まし人・疎まし人【名】うとましき人。〔古語〕

うとみ 疎み・疎【名】うとむこと。

うとむ 疎む・疎む【動四他】親しからぬ樣にもてなす。遠ざく。忌嫌ふ。うとぶ。うとんず。源氏「御おもひどちにて、ならうとみたまひそ」

うとむ 疎む・疎む【動下二他】疎ましむ。〔古語〕濱松「あやにくにおはずるよしをのみ言ひうとめたまへど」

うどむ 澱む【動四自】よどむ(澱む)に同じ。

う-どん 饂飩・溫飩【名】うんどん(饂飩)に同じ。

うどん 優曇(梵 Udumbara(優曇鉢羅)の略)【名】〔植〕『靈瑞又は瑞應と譯す』印度に於ける想像の植物。常に實ありて花なく、三千年ごとに一たび花を開き、その花を優曇華(ウドンゲ)と云ひ、その花の開く時には、世に必ず佛ありと云ふ。うどんばら。

うどん-くひ 饂飩食【名】仕事の拙き者を嘲る語。醒睡笑「世間に、下手(ヘタ)なる者を饂飩くひといふ事は」

うどん-げ 優曇華【名】㊀〔佛〕優曇(ウドン)の花。うどんばらげ。うどん(優曇)參照。㊁稀に有りて、たやすく遇ひがたき物事の譬。㊂『寒國にては、稀に花咲くよりいふ』芭蕉の花を云ふ。〔北國の方言〕謡曲(芭蕉)「優曇華の花待ちえたる芭蕉葉の」㊃〔植〕「その花、花托の内に隱れて見えざるよりいふ』いちじゆく(無花果)を云ふ。〔加賀國の方言〕㊄〔動〕『そのさま恰も花の咲きたるが如きより名づく』草蜻蛉(クサカゲロフ)の卵の、濕地にある草木の枝・古材又は器物の内に著きたるもの。形、四五分ほどの白き絲の如く、數條叢生し、頭に白き卵ありて、細苞のごとく見ゆ。

(うどんげ㊄)

優曇華の花【句】前條㊄に同じ。夫木「玉つばき光をみがく君が世にもかへり咲くうどんげのはな」

うどんげ-ものがたり 優曇華物語【名】〔書〕山東京傳の作りたる讀本(ヨミホン)。七册。

うどん-こ 饂飩粉【名】『多く饂飩にせしより名づく』小麥の粉。うどんの粉。

うとん-ず 疎んず・疎んず【動佐變自】『疎みすの音便』うとむ(疎む)に同じ。

うどん-どうふ 饂飩豆腐【名】豆腐をこまかく切りて湯煮にし、山椒(サンセウ)などを入れ、醬油に浸したる食品。はちはいどうふ。

うどん-のこ 饂飩粉【名】うどんこ(饂飩粉)に同じ。

うどんばら 優曇鉢羅【名】〔佛〕うどん(優曇)に同じ。

うどんばら-げ 優曇鉢羅華【名】〔佛〕うどんげ(優曇華)㊀に同じ。

うどん-ぶるひ 饂飩篩【名】饂飩粉をふるふに用ふる篩。

うどん-や 饂飩屋【名】饂飩を賣る家、又その人。

うど-め 烏頭芽【名】楤(ラク)の木の若芽。形、蕗薹(フキノトウ)の如く、酢味噌に和(ア)へて食ふ。うどもどき。

うど-め 土當歸芽【名】土當歸の芽。紫色にして、長さ一寸に滿たず、秋・冬のころ、食物のつまに用ふ。うのめ。

うど-もどき 土當歸擬【名】㊀〔植〕たらのき(楤木)に同じ。㊁〔植〕繖形(サンケイ)科に屬する野生の越年草。形、猪土當歸(シシウド)に似、葉背白く、莖・葉に毛茸(マウジヨウ)なく、莖は紫色を帶ぶ。根は藥用に供せらる。㊂うどめ(烏頭芽)に同じ。

うとるめえ(佛 Outremer)【名】西洋繪具の一。青空色の强烈にして美しきもの。もとは瑠璃(ルリ)を燒きて作りしが、今はケエオリン・ソヂウム及び硫黃を混合して製す。おるとらまりん。

うと-ろ 空【名】うつろ(空)の轉。

う-な 海【接頭】『うはうみ(海)、なは助辭の**の**の轉』海の意。「うな原」「うな路」

うな【句】『うぬ(汝)はの約』汝は。おのれは。今宮心中「うな、よく身をぶたせたなあ、覺えてゐろ」

うな 鮒【名】〔動〕ふな(鮒)の轉。〔俚語〕

うな 鰻【名】〔動〕うなぎ(鰻)に同じ。〔俚語〕

う-ない 宇内【名】うだい(宇内)に同じ。

うな-うな【名】叱りて打つこと。うのうの。〔俚語〕浮世風呂「にくいおっかあめだの。うならうなをしてやらう」

うな-がける 項掛ける【動四自】項(ウナジ)に手を掛く。(互に親しみ合ふ時に爲す)〔古語〕萬葉「たづさはりうながけりゐておもほしきことも語らひ」

うながし 促【名】㊀促すこと。㊁上古、四坊の戶籍を正し、賦役(フエキ)を催促し、姦邪を察することを司りし職。

うながし【名】〔動〕かみさげむし(紙下蟲)を云ふ。〔出雲國の方言〕

うながす 促す【動四他】催(モヨホ)したつ。催促す。急がず。せきたつ。空穗「御車につづきて、うながし入る」

うながす 項がす・嬰す【動四他】うなぐ(項ぐ)の敬語。〔古語〕記「あめなるやおとたなばたのうながせる玉のみすまる」

うな-かぶす 項かぶす【動四自】項を傾く。傾き伏す。〔古語〕記「うなかぶしなが泣かさまく」

うな-かみ 海上【名】海のほとり。うみべ。〔古語〕萬葉「わたの底、沖つ深江のうなかみのこふの原に」

うなかみ 海上【名】㊀〔地〕下總國九郡の一。郡役所を銚子町に置く。㊁〔地〕上總國の舊郡の一。今の市原郡の一部。合せし年代明らかならず。㊂姓氏の一。皇別に屬し、姓(カバネ)は首(ヲビト)。㊃うながみど(海上砥)の略。

うな-がみ 項髮【名】たてがみ(鬣)に同じ。〔古語〕和名「鬐、俗云、宇奈加美、馬項上長毛也」

うなかみ-ずゐおう 海上隨鷗【名】〔人〕いなむらさんぱく(稻村三伯)に同じ。

うながみ-たねひら 海上胤平【名】〔人〕歌人。椎園と號す。下總國の人。加納諸平の門人。大正五年歿す。年八十八。椎園歌集あり。

うながみ-ど 海上砥【名】下總國海上郡犬吠(イヌボエ)崎邊より出づる一種の砥。刀劍の荒砥(アラド)の砥目(トメ)を落すに用ふ。うながみ。

うながみ-の-みや 波上宮【名】琉球國那覇(ナハ)區若狹町にある官幣小社。この國の大社七所の一。祭神は活玉男(イクタマノヲ)神・伊弉冊事(イザナギ)・神解男(コトトケヲ)神。波之上神社。

うなぎ 鰻・鱣・鰻鱺・泉海魚【名】〔動〕喉鰾(コウヘウ)類に屬する魚。淡水に產す。形、圓筒狀にして長く、背は蒼黑にして、腹白く、鱗なくして、身、甚だ滑かなり。多くは、背より裂きて、骨を去り、蒲燒(カバヤキ)とす。味、甚だ美なり。うな。

うなぎ-かき 鰻掻【名】泥中の鰻を引掻き捕ふる具。長き棒の端に、岐ある鉤(カギ)を附けたるもの。水底を掻探り、鉤にかけて捕ふ。四谷怪談「働きかけたうなぎかき、どうでしまひは身を裂かれ」

うなぎ-ざけ 鰻酒【名】㊀鰻を肴にして飲む酒。㊁酒に鰻の蒲燒(カバヤキ)を浸(ヒタ)したるもの。

うなぎ-ざる 鰻笊【名】鰻を入るるに用ふる籠。

うなぎ-せん 鰻筌【名】鰻を捕ふるに用ふる筌。

うなぎだに 鰻谷【名】〔地〕大阪市南區に在る町。東ノ町・西ノ町・中ノ町に分る。

うなぎ-たろべゑ 宇奈木太郎兵衞【名】おつまはちろべゑ(御妻八郎兵衞)參照。

うなぎ-たろべゑ 宇奈木太郎兵衞【名】〔人〕萬治三年始めて江戶木挽町(コビキチヤウ)に、森田座を創立し、芝居を興行したる人。

うなぎ-づか 鰻塚【名】鰻を捕ふるために水底に裝置する積石。落鰻(オチウナギ)のその間に潛伏せるを、簣(ス)又は板などにて包圍して捕獲す。

うなき-つかみ 鰻摑【名】〔植〕うなぎづる（鰻蔓）に同じ。

うなぎ-づつ 鰻筒【名】水底に沈めおきて鰻を捕ふるに用ふる竹筒。

うなぎ-つり 鰻釣【名】鰻を釣ること。

うなぎ-づる 鰻蔓・雀翹【名】〔植〕蓼（タデ）科に屬する多年生の草。田の畔・溝の淵などに生じ、高さ一二尺に達し、莖は方形にして細かなる刺あり。葉は披針形にして、春の末、頭狀に排列せる帶紅白色の花開く。鰻を捕ふるに、この葉莖を持添ふるときは、捕へやすしといふ。うなぎつかみ。

うなぎ-どんぶり 鰻丼【名】うなぎめし（鰻飯）に同じ。

うなぎ-の-かは 鰻皮【名】じやぶくろ（蛇袋）の異稱。〔讃岐國の方言〕

うなぎ-の-せのぼり 鰻背上・鰻瀨登【名】小供の遊戯の一。一人前にあり、他の一人、前の人の帶（後方）に取附き、その他の人、又かくの如く帶に取附き、幾人にても、かく連りたる上にて、他の一人は、その連りたる後方の人の背より上りはじめて、匍（ハ）ひながら次に移り、又その次に移り、前の人の背にまで行くもの。

うなぎ-のぼり 鰻登【名】『鰻の水淺き所をも滯るところなく泝（サカノボ）るに譬へていふ』次第に立身又は進歩し行くこと。

うなぎ-ばさみ 鰻鋏【名】鰻をおさふるに用ふる鋏。形、唐鋏（クワバサミ）に似、刃に相當する部分平にして、その面に短き針を植ゑたるもの。

うなぎ-ばり 鰻針【名】鰻を釣るに用ふる針。鉤（カギ）を直角形にし、多くは眞鍮（シンチユウ）にて作る。

うなぎ-めし 鰻飯【名】丼（ドンブリ）に飯を盛り、その上に蒲燒（カバヤキ）にせる鰻を載せたる食品。うなぎどんぶり。うなどん。

うなぎ-や 鰻屋【名】鰻を蒲燒（カバヤキ）にして客にすすむる家。

うなぎ-やな 鰻簗【名】落鰻（オチウナギ）を捕ふるために作れる簗。

うなぎ-わた うなぎ綿【名】鬱金（ウコン）・淺黃などに染めたる綿にて製したる綿帽子。

うなぐ 項ぐ・嬰ぐ【動四他】うなじに掛く。**うながす**（項がす）參照。〔古語〕萬葉「我がうなげる玉の七つを」

うなごし【名】〔動〕**をながうじ**（尾長蛆）を云ふ。〔尾張國の方言〕

うな-こぶ 項瘤【名】『**うなはうなじ**（項）の略』牛の後頸即ち駕（ガ）を受くるところにある瘤。〔古語〕字鏡「䩭、項衝レ駕處也。宇奈己不。又、宇奈志」

うな-さか 海境【名】『**うな**（海）を見よ』海の境界。〔古語〕萬葉「うなさかをすぎて漕ぎゆくにわたつみの神のをとめに」

うなさる 魘る【動下二自】『もと、**うなる**（唸る）に對する他動詞の被役形』おそろしき夢を見て、苦しげなる聲を立つ。おそはる。

うなじ【名】牛の兒。乳牛。

うなじ 項【名】頭部と後頸部との接點。えりくび。ぼんのくぼ。うなね。宇治「おとがひの下より、うなじへ、七八寸ばかり、とがり矢を射出しつ」

項の下の旋毛（ツムジ）【句】**とうじや**（燃蛇）に同じ。

うな-だま 項玉【名】うなじの周圍に附くる裝飾の玉。日本振袖始「項玉・手玉・足玉の緒の繰返し」

うな-だる 項垂る【動下二自】首を前出して、項を低る。うつぶく。俛首す。拾遺「しばしだに影にかくれぬ時はなほうなだれぬべき撫子の花」

うな-だれ 鰻垂【名】鰻の蒲燒（カバヤキ）に用ふるたれ。〔東京の語〕

うな-ぢ 海路【名】『**うな**（海）を見よ』**ふなぢ**（船路）に同じ。

うな-つき 項衝【名】㊀童の髮の短くして、その末の、項（ウナジ）を衝くほどのさまなるもの。〔古語〕萬葉「うなつきのわらはが身には」㊁うしろの頸筋。盛衰記「佐殿（スケドノ）は、手洗ひ口漱（ソソ）ぎて、これを請取りて、領許（ウナツキ）に入れてぞおはしける」

うな-づく 頷く・點頭く【動四自】『項衝くの義』首を動かして、うけがひたるを示す。がてんす。得心す。點頭す。源氏「げにあやなし、さははべらぬかといへば、中將うなづく」

うなつるす 聽す【動四自】うなづき許す。肯（ウケガ）ふ。〔古語〕紀「不レ聽ウナツルサズ」

うな-て 畦手【名】畦のそばに掘りて、田に引く水をながす溝。〔古語〕夫木「ますらをがうなての道にいぐし立て水口祭る時はきにけり」

うな-と 海門【名】『**うな**（海）を見よ』灣入したる海の入口。港の入口。〔古語〕

うな-とと 鰻魚【名】〔動〕**うなぎ**（鰻）を云ふ。〔東京の小供の語〕

うな-どん 鰻丼【名】**うなぎどんぶり**（鰻丼）の略。〔俚語〕

うな-ね 項根【名】**うなじ**（項）に同じ。〔古語〕祝詞「うなねつきぬき、かしこみも申す」

項根衝突く【句】頭を地に垂れて敬禮す。頓首・禮拜す。〔古語〕祝詞「鵜じものうなねつきぬきて」

う-なは 鵜繩【名】㊀鵜をあやつるためにその頸に附くる繩。新六「この川にさよふけぬらしかつら人うなは手にまき船くだすなり」㊂繩に鵜の羽又は小き板きれを結び附けて、魚を驚かし、驅りて、網の方へ追込むに用ふる具。かはひきづな。山家「見るもうきは鵜繩に逃ぐるいろくづをのがらかさでもしたむもち網」

うなは-あみ 鵜繩網【名】鵜繩の附ける敷網（シキアミ）。

うな-ばた 海邊【名】『**うな**（海）を見よ』**う**みべ（海邊）に同じ。

うな-ばら 海原【名】『**うな**（海）を見よ』ひろびろとせる海。おほうみ。滄海。うのはら。記「うなばらをしらせ」

うなひ 耡【名】うなふこと。耕作。

うな-び 海邊【名】『**うな**（海）を見よ』**うみべ**（海邊）に同じ。〔古語〕萬葉「いさなとりうなびをさして」

うなび-がは 宇奈比川【名】〔地〕越中國にある川。萬葉「まつだえのなが濱すぎてうなび川淸きせごとに」

うなひ-をとめ 宇奈比處女【名】〔人〕**うばらをとめ**（菟原處女）に同じ。萬葉「葦の屋のうなひをとめがおくつきを往き來（ク）と見てはねのみし泣かゆ」

うなふ 耡ふ【動四他】『**うね**（畦）を活用したる語』鋤・鍬などにて、田圃を掘返して、畦（ウネ）を造る。田畑に畦（ウネ）をたがやす。

うなふ 捶ふ【動四自】『前條の語より轉じたるもの』一旦、的に中（アタ）りたる矢、はね返りて、鏃（ヤジリ）の方、地に立つ。三度うなふ矢は惡矢とせらる。

うな-べ 海邊【名】『**うな**（海）を見よ』**うみべ**（海邊）に同じ。〔古語〕

うな-べた 海邊【名】『**うな**（海）を見よ』**うみべ**（海邊）に同じ。〔古語〕

う-なみ 卯波【名】卯月の頃に立つ波。〔九州南部の方言〕無名抄「四月・五月には、あけくれ浪立ちて、しづまる間（マ）も無し。卯月に立つをばうなみといひ、さ月に立つをばさなみとなん申しはべる」

うな-め 畦目【名】次條の略。

うなめ-ぬひ 畦目縫【名】鎧の袖・草摺（クサズリ）および兜（カブト）の錣（シコロ）などの菱縫の板にある飾縫（カザリヌヒ）。縅絲（ヲドシイト）の並びて田畑の畦（ウネ）のごとく、目をあらはしたるもの。多くは啄木（タクボク）の絲を用ふ。うねめぬひ。うなめ。

うな-もと 項本【名】魚の頭の方より一番目の脊鰭（セビレ）。〔料理の語〕

うな-や 檻【名】ひとや。獄屋。〔古語〕八雲御抄「うなやは、人をこむるところをいふ」

うなり 唸【名】㊀うなること。うめくこと。㊁凧の上部に附けて風に鳴らすもの。鯨の鬚、又は籐（トウ）を薄く剝ぎて、竹に張り、小き弓のごとき形にして造る。〔風箏〕㊂〔理〕『英 Beat』振動數の極めて僅かに異なる二つの音を同時に聞くとき、音波の濃厚なる部分と稀薄なる部分との齟齬（ソゴ）・錯綜（サクソウ）より生ずる現象。一秒間の唸の數は、二音の振動數の差に等し。

うなり-ごま 唸獨樂【名】玩具の獨樂の、うなり聲を發するもの。胴は竹又は薄き金屬にて作り、內部を空虛にし、處處に孔を明けたるものにて、廻るにつれて、空氣振動の工合にて音を發す。

うなり-ごゑ 唸聲【名】うなる聲。うめきごゑ。

う-なる 唸る【名】『うは擬聲の語、なるは鳴るの意。うめく(呻く)を見よ』㊀苦しみて、うんうんといふ。惱みて呼ぶ。うめく。いなる。呻吟(シンギン)す。㊁獸など怒りて、口を閉ぢ又は少し開きて、聲を發す。㊂物の音のひびき、長く續く。㊃淨瑠璃又は小唄(コウタ)などを、口籠聲(クゴモリゴヱ)にてうたふ。㊄〔理〕唸(ウナリ)の現象、生ず。

唸るほど【句】おびただしきさまにいふ語。〔俚語〕「金が、うなるほど有る」

うな-わく 膿沸く【動四自】膿(ウミ)が沸く。膿が流れ出づ。〔古語〕

うな-ゐ 髫髮【名】㊀『項(ウナ)居(ヰ)の義』「幼き人の項(ウナジ)に垂るる髮。うなゐがみ。うなゐはなり。をはなり。〔古語〕 字鏡「髫、髮至レ肩垂貌。宇奈井」 ㊁うなゐご(髫髮子)に同じ。〔古語〕 大和「そこなりけるうなゐをば、右京のかみ呼びいでて」 ㊂〔動〕うなゐごどり(髫髮子鳥)に同じ。

うなゐ-がみ 髫髮【名】うなゐ(髫髮)㊀に同じ。先代萩「子は、孝行に、おも痩せて、はごくみかへす鳥羽玉(ウバタマ)の涙をかくすうなゐがみ」

うなゐ-ぐるま 髫髮車【名】うなゐごの乘れる車。〔古語〕 空穗「うなゐぐるま五つ、しもづかへ車五つしてなん參りたまひける」

うなゐ-ご 髫髮子【名】㊀髮を、うなゐに結びたる童子。うなゐ。うなゐはなり。〔古語〕 堀次「うなゐごがあはぢのかみをとりたててまきそめ川よ淵瀬かはるな」 ㊁小供の六七才なるもの。童男。童女。㊂〔植〕おきなぐさ(翁草)を云ふ。〔京都の語〕

うなゐご-どり 髫髮子鳥【名】〔動〕『拾遺集の「ほととぎすをちかへり鳴けうなゐごがうちたれがみの五月雨の空」といふ歌に本づけるなるべし』ほととぎす(時鳥)の異名。〔古語〕

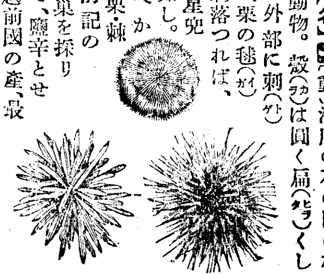
うなゐ-はなり 髫髮放【名】『結び上げずに放ち置くよりいふ』うなゐ(髫髮)㊀㊁に同じ。〔古語〕 萬葉「橘の寺の長屋に我がいねしうなゐはなりは髮あげつらむか」

うなゐ-まつ 髫髮松【名】墓のしるしに植うる松。〔古語〕 源氏「心ばせ・かたちなどもめやすくて、うなゐまつにおぼえたるけはひ」

うなゐ-をとめ 髫髮少女【名】うなゐ髮にて居る童女。〔古語〕 夫木「けさ見ればうなゐをとめがすりごろも春立ちそむる軒の松かぜ」

うに【名】〔鑛〕でいたん(泥炭)をいふ。〔伊勢國・伊賀國の方言〕 芭蕉「香に匂へうに掘る岡の梅の花」

うに 海膽【名】㊀〔動〕海底の石の間に棲む棘皮(キョクヒ)動物。殼(カラ)は圓く扁(ヒラ)くして紫黑色。外部に刺(トゲ)多く生じ、栗の毬(イガ)の如く、刺落つれば、そのさま星兜(ホシカブト)の如し。肉、食ふべからず。〔海栗・棘鬣〕 ㊁前記の海膽の卵巢を採り鍊(ネ)りて、鹽辛とせるもの。越前國の産、最も名あり。〔雲丹〕



(うに㊀)

うに-あへ 雲丹和【名】雲丹にて和(ア)へたる食品。

うにう【名】〔動〕おっとせい(膃肭獸)を云ふ。〔アイヌの語〕

うに-かまぼご 雲丹蒲鉾【名】普通の蒲鉾の如く造りたるものの上に、雲丹を鍊交(ネリマ)ぜたるものを塗附け、遠火に炙りたるもの。

うに-くさ うに草【名】〔植〕かにくさ(蟹草)に同じ。

うにこおる (英 Unicorn)【名】〔動〕いっかく(一角)に同じ。平家女護島「かの唐土のうにこほるといふけだものは」

うに-つぼ 海膽壷【名】海膽の殼(カラ)。うにのす。かぶとがひ。

うに-の-す 海膽の巢【句】うに(海膽)の條下を見よ。

うにや-ざくら【名】物をうちすてにすること。〔芝居の隱語〕

うぬ 己【代】第二人稱の卑稱。おのれ。なんぢ。きさま。うぬれ。うれ。〔俚語〕

うぬ 犬【名】〔動〕いぬ(犬)に同じ。〔古語〕 紀「犬、ウヌ」

うぬ-ぼる 己惚る・自惚る【動下二自】高慢す。自負す。

うぬ-ぼれ 己惚・自惚【名】うぬぼるること。おのぼれ。自負。

己惚と瘡氣(カサケ)の無い者は無い【句】多少のうぬぼれと梅毒とは、何人にもあり。〔諺語〕

うぬぼれ-かがみ 己惚鏡・自惚鏡【名】㊀姿・顏形などの、實物よりも善く見ゆる鏡。㊁己を知る明無きこと。〔俚語〕

うぬま 鵜沼【名】〔地〕美濃國稻葉郡にある村。木曾川の北岸。尾張國犬山町に對す。承久の亂・小牧の役等に名あり。

うぬ-め-ら 己奴等【代】うぬら(己等)を一層卑しめていふ語。〔俚語〕 諸國物語「狼藉をはたらくうぬめらは、晝強盜なるべし」

うぬ-ら 己等【代】うぬ(己)の複數。きさまたち。うぬめら。〔俚語〕

うぬ-れ 己【代】うぬ(己)に同じ。

うね 畦・畝・壠・隴【名】㊀『うなふ(耡ふ)參照』田畠の中の土を堆(ウヅタカ)く盛上げて長く續け、作物(サクモツ)を植附くる處。さく。うねどこ。小大君集「くひどころ見ればうねなる老なすびらゐたる人のくへるなるべし」 謠曲(知章)「滄波のうねに浮き沈む水鳥の如し」 ㊁波の一つ一つ。㊂釀造上、溜麴(タマリカウヂ)製造の際、味噌玉に麴菌(カウヂタケ)を發育せしむるために、その小塊を幾筋にも平行せしめて並ぶること。

畦を立つ【句】田畠に畦を作る。うねだて(畦立)參照。

うね-あひ 畦合【名】畦と畦との間。

うねら【名】〔動〕をっとせい(膃肭獸)を云ふ。〔アイヌの語〕

うね-うね 畦畦【名】あまたの畦。

うね-うね【貌】田畠の畦の形をなして、波の立ち又は山脈の續けるなどのさま。「うねうねとしたる大波」

うね-おび 畦帶【名】元祿の頃、流行せし帶。縞柄の畦に似たりしもの。

うね-おり 畦織・畝織【名】經(タテ)・緯(ヨコ)共に白の練絲(ネリイト)を用ひて、織地は高く低く畦の如くに織れる一種の七子(ナナコ)織。羽後國秋田の名産。〔白羅布・起條布〕

うね-くね【貌】うねりくねるさま。

うね-くる【動四自】うねるに同じ。

うね-こ【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)を云ふ。〔東京の語〕

うね-ざし 畦刺【名】畑の畦のごとく、絲を浮かして刺縫ふこと、又そのもの。

うねざし-たび 畦刺足袋【名】絹絲にて畦刺に刺したる晒木綿(サラシモメン)の足袋。うねたび。

うね-しりがい 畦鞦・畝鞦【名】畦織(ウネオリ)の緒(ヲ)にて造れる鞦。

うね-だて 畦立【名】㊀『「畦を立つ」參照』田畑に畦を起し整ふること。作條(サクデウ)。㊁うね(畦)㊂に同じ。

うね-たび 畦足袋・畝足袋【名】うねざしたび(畦刺足袋)に同じ。渡世身持談義「海士(アマ)も、うねたびはきて、花も紅葉もなかりけりと詠み」

うね-どこ 畦床【名】うね(畦)㊀に同じ。

うね-どる【動四自】うねうねとして進む。

うね-の 畝野【名】〔地〕近江國蒲生(ガマフ)郡にありし野。太平記「世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと、あはれなり」

うね-は【名】〔植〕みみな(耳菜)に同じ。

うね-はば 畦幅【名】畦の廣さ。

うねび 畝火【名】姓氏の一。蕃別(バンベツ)に屬す。姓(カバネ)は宿禰(スクネ)。

うねび-かん 畝傍艦【名】甲鐵製の巡洋艦。長さ五十四間・幅七間。噸數三千六百五十一。明治十七年佛國にて製造し、廻航中、同十九年十二月三日、シンガポオルを拔錨の後、蹤跡を失ふ。

うねび-の-かしはら-の-みや 畝傍橿原宮【名】かしはらのみや(橿原宮)を見よ。

うねび-の-しらかしはら-の-みや 畝傍白橿原宮【名】前條に同じ。

うねび-やま 畝傍山【名】〔地〕大和國高市郡の西北部にある小丘。白橿(シラカシ)村に屬す。高さ七一八尺。耳梨山・香山(カグヤマ)と共に大和國三山の一。一名、慈明寺山。紀元元年神武天皇御即位の地。萬葉「玉だすきうねびのやまのかしはらの聖の御代ゆ」

うねびやま-の-うしとら-の-みささぎ 畝傍山東北陵【名】神武天皇の御陵。大和

國高市郡白檮(シラカシ)村大字山本字神武田(ジムタ)にあり。

うねびやま-の-きた-の-みささぎ 畝傍山北陵【名】神武天皇の皇子神八井耳(カンヤヰミミ)命の御墓。大和國高市郡白檮(シラカシ)村大字山本にあり。俗稱、御陵山(ミササギヤマ)。

うねびやま-の-ひつじさる-の-みほどゐ-の-へ-の-みささぎ 畝傍山西南御陰井上陵【名】安寧天皇の御陵。大和國高市郡白檮(シラカシ)村大字吉田御陰井の西北にあり。俗稱、安寧山。

うねびやま-の-みなみ-の-まさごだに-の-へ-の-みささぎ 畝傍山南纎沙谿上陵【名】懿德(イトク)天皇の御陵。大和國高市郡白檮(シラカシ)村大字畝傍眞名子谷(マナコダニ)にあり。

うねびやま-の-みほどゐ-の-へ-の-みささぎ 畝傍山御陰井上陵【名】うねびやまのひつじさるのみほどゐのへのみささぎ(畝傍山西南御陰井上陵)に同じ。

うね-べ 采女【名】うねめ(采女)㈠に同じ。〔古語〕（空穗）「時もちが妻(メ)は、朱雀院の御時、うねべをなんしはべりし」

うね-べ 采女【名】㈠姓氏の一。神別に屬す。姓(カバネ)は朝臣(アソン)。饒速日(ニギハヤヒ)命六世の孫なる大水口(オホミナグチ)宿禰の裔。㈡姓氏の一。神別に屬す。姓(カバネ)は連(ムラジ)。饒速日(ニギハヤヒ)命六世の孫なる伊香我色雄(イカガシコヲ)命の裔。

うねべ-うまのり 采女馬乘【名】うぬめうまのり(采女馬乘)に同じ。〔古語〕（榮花）「例のことなれば、うねべうまのりなど、儀式・ありさま、さきざきの、おなじことなり」

うねべ-の-つかさ 采女司【名】うねめのつかさ(采女司)に同じ。

うねべ-の-つかさ 采部司【名】齋宮寮十二司の一。

うね-め 采女・婇【名】㈠『うねべ(采女)の轉。べは部の意。後漢書の鄧皇后紀に「置二美人・宮人・采女三等一」とありて、註に「采擇也、以レ因二采擇一而立レ名」とあるによりて采女の字を宛つ』古、諸國の郡の少領(セウリヤウ)以上の姉妹の形容端正なる者を、朝廷に貢ぜしめ、宮中にて御膳の事をつかさどらしめたるもの。一百戸を采女一人の料とし、庸布・庸米みな次丁に准じたり。うねべ。㈡謠曲の一。采女が奈良の猿澤池に入水せし物語を、大和物語に本づきて作りしもの。きぬかけやなぎ(衣懸柳)參照。

うねめ-うまのり 采女馬乘【名】采女の馬に乘ること。うねべうまのり。〔古語〕

うねめ-ぎぬ 采女衣【名】ゐぎぬ(繪衣)に同じ。

うねめ-でん 采女田【名】不輸租田(フユソデン)の一。古、采女の資用に充つるために給せられし田。うねめのひれだ。うねめやうでん。

うねめ-ぬひ 畦目縫【名】うなめぬひ(畦目縫)に同じ。

うねめ-の-かみ 采女正【名】次條に同じ。

うねめ-の-しやう 采女正【名】采女司の長官。うねめのかみ。〔古語〕

うねめ-の-つかさ 采女司【名】古、宮內省に屬して、諸國より貢せる采女を撿挍する事を司りし役所。うねべのつかさ。

うねめ-の-ひれだ 采女肩巾田【名】うねめでん(采女田)に同じ。〔古語〕（續紀）「采女肩巾田、ウネメノヒレダ」

うねめ-べ 采女部【名】采女司の屬官。史生(シシヤウ)の次に位す。

うねめ-やうでん 采女養田【名】うねめでん(采女田)に同じ。

うね-もぢり 【名】〔植〕ざいふりぼく(杖杉)に同じ。

うねり 【名】㈠うねること。曲り旋ること。盤紆(バンウ)。卷曲。㈡靜かにうねり立つ大波。大曲線をなして、白頂なく寄來る波。(大風の來らんとする前兆なり) ㈢古の兵法にて、騎戰における組打の樣式の一。

うねり-ぐし うねり串【名】平たき魚類を丸燒にする時の串の刺方、即ちうねらせて刺すもの。

うねる 【動四自】『うね(畦)を活用せしめたる語』右に左に、又は高く低く、曲り旋る。まがりくねる。うねくる。

う-の-あし 鵜脚【名】〔動〕腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。海底の岩石上に吸著して生活す。殼は圓錐(エンスヰ)形なれども、螺狀(ラジヤウ)を失ひ、且つその頂は一方に偏す。

うのあし-がひ 鵜脚貝【名】〔動〕腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。多く海濱の岩石に附著す。形狀やや前條の鵜脚(ウノアシ)に似て、陣笠狀の殼を有すれども、螺旋狀をなさず。

う-の-くそ 鵜の糞【句】う(鵜)の條下を見よ。

う-の-くび 鵜頸【名】㈠うのくびむすび(鵜頸結)の略。㈡城の見附(ミツケ)の橋の下なる水はけの、石垣にてたたみ上げたるもの。

うのくび-づくり 鵜頸作【名】うくびづくり(鵜頸作)に同じ。

うのくび-むすび 鵜頸結【名】紐の結び方の一。繩(ナハ)を二つ作り、それを重ね合せて結ぶもの。かめぐくし。かもくたし。かもさげ。わさぎ。かしつけ。うのくび。

う-の-け 兎毛【名】㈠うさぎの毛。㈡事物の極めて小さき譬。（守武千句）「黑軸の筆にて書ける文もうし、兎の毛ほどだに心ありてよ」

兎毛で突いたほど【句】疵(キズ)などの僅かなるさま。〔俚語〕

兎毛の末【句】うのけ(兎毛)㈡を一層强めていふ語。

うのけ-どほし 鵜毛通【名】〔建〕唐破風(カラハフ)の懸魚(ゲギヨ)。

うのしま 宇島・鵜島【名】〔地〕豐前國築上(チクジヤウ)郡にある町。九州鐵道宇佐線の一驛。周防灘に臨みて小港を成す。

う-の-しやう 鵜匠【名】うしやう(鵜匠)に同じ。

うのつ-もの 守津物【名】うだもの(宇多物)に同じ。

う-の-とき-あめ 卯時雨【名】卯の時(今の朝六時)に降る雨。(俗說に、降りても、すぐに霽(ハ)るるものなりと云ふ)（諺）「うのときあめに、笠をぬげ」

う-の-とり 鵜鳥【名】〔動〕う(鵜)に同じ。

鵜鳥の尻ぬけ【句】『うのみ(鵜呑)を見よ』事を丸呑にして、忘れやすきこと。〔諺語〕

う-の-は 鵜羽【名】謠曲の一。古事記・日本紀などによりて、鵜戸窟(ウドノイハヤ)の故事を作りしもの。

う-の-はな 卯花【名】㈠うつぎの花。「水晶花」、（萬葉）「藤なみは咲きて散りにき卯の花は今ぞさかりと」㈡〔植〕うつぎ(空木)に同じ。㈢『白きを卯の花、青きをその葉に譬へていふ』襲(カサネ)の色目の一。表は白・裏は青。女房の五衣(イツツギヌ)には、表はみな白・裏は上の二つは白・中央は黃・次は濃き青・下は淡き青、單なるは裏も白。多くは卯の花の咲く時節に用ひたり。うのはないろ。うのはながさね。㈣『色白くして卯の花に似たるよりいふ』きらず(雪花菜)を云ふ。〔東京の語〕㈤〔動〕うのはないか(卯花烏賊)の略。㈥〔動〕あゆ(鮎)の異名。

うのはな-あへ 卯花和【名】豆腐の滓(カス)をよく擂(ス)り、鹽と酒とにてからからに煎(イ)りて、物を和(ア)へたる食品。

うのはな-いか 卯花烏賊【名】烏賊の背を十文字に細かに切り、淡き味つけの醬油にて煑たる食品。うのはないり。うのはな。

うのはな-いり 卯花熬【名】前條に同じ。

うのはな-いろ 卯花色【名】うのはな(卯花)㈢に同じ。

うのはな-がき 卯花垣【名】卯の花の咲きたる生垣(イケガキ)。うのはながきね。（新千載）「いとはやも里なれにけり郭公卯の花垣にをちかへりなく」

うのはな-がきね 卯花垣根【名】前條に同じ。（枕草）「卯の花垣根近うおぼえて、子規も蔭にかくれぬべう覺ゆかし」

うのはな-がさね 卯花襲【名】うのはな(卯花)㈢に同じ。（枕草）「うのはながさねを、ここに掛けたるやうにぞ見えける」

うのはな-くたし 卯花腐【名】『卯の花もくさるばかりに降りつづく雨といふ』五月雨の降るさまの形容。（千載）「いとどしくしづのいほりのいぶせきに卯の花くたしさみだれぞ降る」

うのはな-ぐもり 卯花曇【名】卯の花の咲く頃の曇れるそら。（鶉衣）「卯月は、例のうのはなぐもりに」

うのはな-ごろも 卯花衣【名】卯の花がさねの衣。

うのはな-ぞめ 卯花染【名】卯の花色の染色。

うのはな-づき 卯花月【名】『卯の花の咲く月の義』うづき(卯月)に同じ。〔古語〕

うのはな-づきよ 卯花月夜【名】卯の花の

白く盛りに咲けるを、月に見なしていふ語。うのはなづくよ。月清「おのづから心に秋もありぬべしうのはなづきようちながめつつ」

うのはな-づくよ 卯花月夜【名】前條に同じ。〔古語〕月清「ほととぎすしのびしのびに來鳴くなりうのはなづくよほの見ゆるころ」

うのはな-つまどり-よろひ 卯花妻取鎧【名】卯花縅（ウノハナヲドシ）の鎧の袖と草摺（クサズリ）との褄を取りたるもの。

うのはな-なます 卯花膾【名】ぬたなますの上に、大根又は湯びきの魚肉を散らしかけたる食品。〔料理の語〕

うのはな-の 卯花の【枕】㊀「卯の花」と同じ頭音を有する、うき（憂き）にかけていふ。萬葉「うぐひすのかよふかきねのうのはなのうきことあれや君がきまさぬ」㊁卯花の咲くより、さつき（五月）にかけていふ。萬葉「時ならず玉をぞぬける卯の花のさつきを待たば久しかるべみ」

うのはな-びらめ 卯花比目魚【名】比目魚を煠（ユ）で、その肉をほぐして卯の花の如くしたる食品。〔料理の語〕

うのはな-ぶき 卯花葺【名】卯の花に蔽はれたる屋根。夫木「しはつ山うのはなぶきのかり庵やよどこもさえぬ雪のしたぶし」

うのはな-めし 卯花飯【名】豆腐のからに鷄卵などを交ぜ、鰹節（カツヲブシ）の汁などにて味を附けたるを掛けたる飯。

うのはな-やき 卯花燒【名】鮒（フナ）を炙（アブ）りて、酢にひたし、豆腐のからを振りかけたる食品。

うのはな-やま 卯花山【名】㊀卯の花の咲きてある山。萬葉「見わたせばうのはなやまのほととぎす音（ネ）のみし鳴かゆ」㊁〔地〕越中國にありて礪波（トナミ）山に續ける山。古歌には、時鳥・卯の花などの名所として詠ぜらる。風雅「朝まだきうのはなやまを見わたせば空はくもらでつもる白雪」

うのはな-をどし 卯花縅【名】『白きを卯の花の色に、又、萌黄をその葉の色に譬へていふ』上は白絲にて縅し、袖と草摺（クサズリ）との下の方は萌黄絲又は藍絲にて縅したる鎧。又、上半部に白絲を用ひ、下半部に萌黄絲又は藍絲を用ひたるもの、白と萌黄又は藍とを段をどしにせるものなどあり。

う-の-はら 海原【名】うなばら（海原）に同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「大君のみことかしこみ磯にふりうのはらわたる父母をおきて」

う-の-まつり 鵜祭【名】謠曲の一。能登國の氣多（ケタ）明神の神事を綴（ツヅ）りしもの。うまつり（鵜祭）參照。

う-の-まる 鵜丸【名】保元の亂の時、崇德上皇より、源爲義に賜ひし御劍。

う-の-み 鵜呑【名】㊀鵜の魚を呑むが如く、食物を嚙（カ）まずに呑みこむこと。まるのみ。㊁學理などを、よく考へずに器械的に記憶すること。

う-の-め 鵜芽【名】うどめ（土當歸芽）に同じ。

うの-めいか 宇野明霞【名】〔人〕京都の儒者。名は、鼎、字は士新、通稱は三平。徂徠の學を好み、弟、士朗をして就きて學ばしむ。京都に徂徠の學を講ずるはこの人に始まる。延享二年歿す。年四十八。

うのめ-がへし 畦目返・鵜目返【名】衣服を、表裏より互に交合せて、うなめに縫ふこと、又その物。

う-の-め-たか-の-め 鵜の目鷹の目【句】う（鵜）の條下を見よ。

う-の-めつき 有の目附【句】う（有）の條下を見よ。

うのめ-ゆわう 鵜目硫黄【名】〔鑛〕硫黃の一種。黃に赤みを帶び、透明にして光澤あるもの。

うの-よし 鵜野葦【名】〔植〕うどのよし（鵜殿葦）に同じ。色三味線「鵜野よしの細枝」

うは 上【接頭】上（ウヘ）の意。「うはづつみ」「うはがき」

うば 祖母【名】おほば。ばば。〔古語〕隆信集「うばにて侍りし人の身まかりて、母のかの服（ブク）著られし日」

うば 姥【名】㊀年老いたる女。ばば。おうな。㊁老女にかたどれる能（ノウ）の假面（メン）。「高砂」の曲のつれ等に用ふるもの。

うば 乳母【名】『前條の語の轉』めのと。乳母（ニユウボ）。おんば。うめば。

乳母の新鉢（アラバチ）【句】『乳母は、既に子を生みたるものなれば、處女の乳母はあるべからざるよりいふ』世に有るべからざる物事の譬。〔俚語〕

うば 豆腐皮【名】ゆば（湯葉）に同じ。

うば-あいさ 姥秋沙【名】〔動〕秋沙の一種。眼の上に、黑き筋あり、翼にも、ところどころ、黑き羽の交れるもの。

うは-あぎ 上顎【名】次條に同じ。

うは-あご 上顎【名】上の方の顎。うはあぎ。

うは-あし 上脚【名】うはさたて（上戶立）に同じ。

うは-あしどり 上足取【名】〔商〕相場の騰貴したること。〔取引所の語〕

うば-あらそひ 乳母爭【名】なすのよいちさいかいすずり（那須野與一西海硯）を見よ。

うばい 優婆夷（梵 Upāsikā）【名】〔佛〕『淸淨女・近事女・近美女・近住女など譯す』七衆の一。婦人の佛敎徒の總稱。佛敎に親近し、戒を受けて修行し、又よく僧に近づき住むによりていふ。（優婆塞に對して）徒然「比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞は優婆夷より劣れり」

う-ばい 烏梅【名】梅の實のふすべたるもの。色黑くして香氣あり。染料または藥料に用ひらる。

う-はう 右方【名】㊀右の方。㊁雅樂の右方の舞を奏する方、即ち高麗（コマ）樂と渤海（ボツカイ）樂。みぎ。右樂（ウガク）。右舞（ウブ）。（左方に對して）

う-ばう 羽旄【名】鳥の羽と牛の尾とを竿頭に附けたる幢（ハタホコ）。

う-ばう 烏帽【名】黑き色の帽。

うは-うき 上置【名】㊀田の畔の上などに、泥土を塗りおくこと。㊁嫁に行くとき、女の持行く調度の中の物。

うはうき-おそひ 上置襲・襠【名】うはおそひ（上襲）に同じ。〔古語〕字鏡「襠、宇波宇岐於曾比」

うは-うす 上臼【名】挽臼（ヒキウス）の、上層に重なるもの。

うはう-どうじ 雨寶童子【名】天照大御神を云ふ。〔兩部神道の語〕

うは-うは 上上【貌】氣の浮きて落著かぬさま。うからか。

うば-うり 姥瓜【名】〔植〕まくはうり（甜瓜）に同じ。

うは-えだ 上枝【名】上方にある枝。

うは-えり 上領【名】えりの上部の方。

うは-おき 上置【名】㊀餠・飯などを盛りたる上に、更に盛りたる副食物。㊁料理にて、賞玩せらるる部分を上に置くこと。鳥類ならば、白鳥は蹼（ミヅカキ）又は首骨、雁は蹼、鴨は赤足、菱喰（ヒシクヒ）は黑足、鶴は黃筋の類。

うは-おそひ 上襲【名】衣服をよごさぬために、おほひに著る小衣。うはうきおそひ。うはがけ。〔古語〕

うは-おひ 上被【名】うはおほひ（上被）に同じ。〔俚語〕

うは-おび 上帶・表帶【名】㊀鎧（ヨロヒ）又は著物の上に締むる常の帶。太平記「郎等に著せられたる鎧取りて、肩に投げかけ、馬の上にて上帶を締め」㊁腰帶にて捲（マク）り上げたる上衣の上（ゲア）を固定するために、腰部の上位、即ち中腹部に當る部分を締むる紐。一代女「男の聲つかひならひ、身ぶりも、大かたに見ておぼえ、した帶かくも似る物かな、うはおびも、常の細きに代へて」㊂箙（エビラ）の上に引掛けて、腰に結び留むる組紐（クミヒモ）。㊃ふとおび（太帶）に同じ。

うは-おほひ 上被【名】物の上を被ひ包むもの、即ち席・布・紙などの類。うはづつみ。うはおひ。おほひもの。

うは-おほめ 上大目【名】うへおほめ（上大目）に同じ。

うは-がい 上がい【名】うはがへ（上交）㊀の訛。

うばが-いけ 姥池【名】〔地〕昔、江戶淺草明王（妙音）院の庭にありし池。この附近の一軒屋の老婆、石の枕にて旅人の頭を碎かんと謀り、誤りて我が娘を殺し、これを哀みてこの池に投じて死せし、即ち「石の枕」の傳說、廻國雜記・東海道名所記などに詳しく見ゆ。

うは-がき 上書・表書【名】書狀・書物・匣（ハコ）などの表面に名稱又は外題（ゲダイ）などを書くこと、又その書きたる文字。おもてがき。うはづけ。うはぶみ。表記。宇治「大和より、瓜を人のもとへやりける文（フミ）の

うはがきに」

うは-がけ 上掛【名】うはおほひ。うはっぱ「り。上著。外套。

うは-がさね 上襲【名】㊀衣服の上前。㊁うはぎ(上著)に同じ。

うば-がしら 姥頭【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)を云ふ。〔渡島國松前の方言〕

うは-がすみ 上霞【名】或物の上の方に立つ霞。拾遺「ひばりゐる春の山田のうはがすみやへになりゆく夕ぐれの空」

うは-かぜ 上風【名】草木などの上を吹く風。(下風に對して) 新古今「今はただ心のほかに聞くものを知らずがほなる荻のうはかぜ」

うば-が-だけ 祖母嶽・優婆嶽・嫗嶽【名】〔地〕日向・肥後兩國の境にある山。高さ六五六〇尺。九州第一の高山。北麓なる豐後國直入(ナホリ)郡嫗嶽村に嫗嶽神社あり。白雉二年の創建に係るといふ。祖母山(ソボサン)。

うばがたけ-じんじや 嫗嶽神社【名】前條を見よ。

うば-が-つづら 姥葛籠【名】〔植〕かしゆう「(何首芋)に同じ。

うばがね-さう 杜葉山【名】〔植〕いづせんりやう(伊豆千兩)に同じ。

うばがね-もち 杜葉山【名】〔植〕前條に「同じ。

うは-かは 上側【名】物の上の方。おもて。うはべ。うはつら。表面。外側。

うは-かは 上皮【名】㊀皮の上の、更に薄き皮。㊁物の外面を被ふもの。外被。表皮。

うは-がは 上側【名】うはかは(上側)に同じ。

うば-がひ 姥貝【名】〔動〕瓣鰓(ベンサイ)類に屬する貝。赤貝の類。介殼の外部の縱の筋最も細かくして、その一片の短きもの。多く常陸國及び北海道より產し、肉は食用とす。ほくきがひ。

うは-がひ 上交【名】㊀おくみ(衽)に同じ。〔古語〕字鏡「衽、衿也、袂裳際也。衣前藏也。宇波加比」㊁うはまへ(上前)㊀に同じ。

うは-かぶき 上歌舞妓【名】はで。華奢。虛飾。〔德川時代の俚語〕世間娘氣質「世間の娵のうはかぶきなること、これに限らず」

うば-が-ふところ 祖母懷【名】名物の茶いれの一。喫茶書「うばがふところ、これに古瀬戸もあり、又はその後のもあり、千貫・五百貫、いろいろあり。近年うばがふところといふ茶いれ、にせもの多くあり」

うばがふところ 姥懷【名】〔地〕『がは助辭』京都の粟田口より東、大津街道の日岡(ヒノヲカ)峠にさしかからんとする處の俗稱。

うは-がへ 上交【名】㊀うはまへ(上前)㊀に同じ。㊁軸物の、表紙の附きたる方。

うは-がみ 上紙【名】上包の紙。表紙。

うば-がみ 姥髮【名】能(ノウ)にて、姥の假面(メン)と共に用ふる白髮まじりの鬘髮(カツラガミ)。

うば-が-もち 姥餅【名】東海道の草津驛にて賣る餅。丹波與作「乘りおくれじと、どさくさ津、お姫樣よりまづ姥が餅、一くち、二くち、水口(ミナクチ)どぢやう」

うば-が-ゆ 姥湯【名】〔地〕羽前國南置賜(ミナミオイタマ)郡山上(ヤマガミ)村附近にある溫泉。米澤市より六里。泉質は酸性を帶ぶ。姥ヶ溫泉。

うば-が-ゆり 姥百合【名】〔植〕かはゆり(川百合)を云ふ。〔伊勢國の方言〕

うは-がり 上借【名】金錢などを、一旦借りたる上に、おなじ貸主より、更に借入るること。

うは-がる 上枯る【動下二自】うらがる(末「枯る)に同じ。

うは-がる 上嗄る【動下二自】聲すこしく嗄る。當流小栗判官「淚に聲もうはがれし」

うは-がれ 上枯【名】うはがるること。(下枯に對して) 夫木「うはがれの草葉は霜になほさえて春めきやらぬ小野のふるみち」

うば-が-をんせん 姥溫泉【名】〔地〕うばがゆ(姥湯)に同じ。

うは-き 浮氣・上氣【名】㊀情に感動しやすくして、心の定まらぬこと。心の浮れがちにて、變りやすきこと。輕佻。浮華。㊁男女の間の愛情の變りやすきこと。多情。

うは-ぎ 上著・表著【名】㊀衣服の最も上(和服ならば羽織、洋服ならば外套を著るときはその下)に著るもの。表衣。枕「二藍のおりもの、蘇枋(スハウ)のうすもののうはぎなどにて」㊁『襲(カサネ)の上に著るよりいふ』うちき(袿)に同じ。

うはぎ【名】〔植〕よめな(嫁菜)に同じ。〔古語〕萬葉「妻もあらばとりてたげましさみの山野上(ヌノヘ)のうはぎすぎにけらずや」

うはき-がらす 浮氣烏【名】うかれがらす(浮烏)に同じ。冥途飛脚「浮氣烏が月夜も闇も、首尾をもとめてあほあほとさ」

うばきくだ 優婆毱多(梵 Upagupta)【名】〔人〕『近護又は大護と譯す』釋迦滅後百年に出でたる印度の大德。摩突羅(マトゥラ)國に生る。族姓は首陀(スダ)。六神通を得て阿羅漢果(アラカンクワ)を證す。世に無相好佛と稱せらる。

うはき-ざかり 浮氣盛【名】極めて浮氣なること、又その年輩。

うはき-ざけ 浮氣酒【名】うかれて飲む酒。淀鯉出世瀧德「仁三郎がうはき酒」

うはき-しやう 浮氣性【名】うはきなる性「質。

うは-きっつけ 上切附【名】うへしたくら(上下鞍)に同じ。

うはき-っ-ぽい 浮氣っぽい【形】『ぽいは接尾語』うはきなり。移りやすし。〔俚語〕

うはき-もの 浮氣者【名】浮氣なる人。輕薄もの。多情家。

う-はく 烏白【名】こくびやく(黑白)に同じ。

う-はく 雨雹【名】『雹を雨(フ)らす意』雹の降ること。

う-ばくか 右幕下【名】㊀右近衞大將の居所、又その人。㊁〔人〕みなもとよりとも(源賴朝)に同じ。

うは-ぐくり 上括【名】指貫(サシヌキ)の裾を、膝下あたりにて、括り結ぶこと。

うは-ぐすり 上藥・釉藥【名】陶器及び磁器の表面に塗る硝子質の粉末。窯中(ヤウチユウ)の高熱に溶解して、陶磁器の表面を硝子の如く美しくし、又それに施したる模樣を透明にするために用ひらる。

うは-ぐそく 表具足【名】腹卷の上に著けたる鎧。義經記「うは具足のよしあしは」

うば-ぐち 姥口【名】㊀『老人の口は、齒の透くものなるよりいふ』物の蓋の、能く合はずして透くこと。㊁〔動〕鯇(ベニ)の二三寸なるもの。〔筑後國の方言〕㊂面頰の一。

うは-くちびる 上脣【名】上の方の脣。うはくちびろ。(下脣に對して)

うは-くちびろ 上脣【名】前條の轉。〔俚語〕

うは-ぐつ 上靴【名】爪革つきの上草履。西洋室などに用ふ。すりっぱ。

うばくった 優婆掘多【名】〔人〕うばきくた(優婆毱多)に同じ。

うは-くび 上頸【名】馬の頸の頭部に近寄「りたる部分。

うは-ぐみ【名】うはぐむこと。〔古語〕

うは-ぐむ【動四自】あきる(惘る)に同じ。〔古語〕大鏡「うはぐみて、人人の御顏をとかく見たまひつつ」

うは-ぐむ 上汲む【動四他】うは水を汲む。夫木「沈む身はただ山の井の底なれやうはぐむ人に恐れてぞすむ」

うは-ぐもる 上曇る【動四自】上の方が曇る。表面、曇る。枕「いと濃ききぬのうはぐもりたるに」

うは-ぐら 上鞍【名】〔建〕柿葺(コケラブキ)などの風に吹捲(フキマク)らるるを防ぐために、屋上に、人の字の形に取附けたる丸太。

うば-ぐるま 乳母車【名】幼兒を乘せて、うしろより押進むるやうにする小き車。普通、籐(トウ)を編みて作り、日覆(ヒオヒ)を取附く。

(まるぐばう)

うは-げ 上毛【名】上に生えたる毛又は羽毛。興風集「うきてぬる鴨のうはげにおく霜のきえてものおもふころにもあるかな」

うは-げた 上桁【名】和船の帆桁(ホゲタ)の、上部にあるもの。

うは-こそで 上小袖【名】上に重ね著る小袖。小町踊(和年)「下下も春は著にけりうはこそで」

うは-こと 譫語【名】㊀熱などに浮かされて、自覺を失ひ、わけの分らぬことを語ること。㊁事情を辨へぬ放言。でたらめ。たはこと。

うばこ-の-ゆ 姥子湯【名】〔地〕相模國箱根山の奥にある溫泉。箱根七湯の外にして、鹽類泉に屬し、創傷・皮膚病に効あり。

うは-こべり 上小緣【名】和船の小緣の上部を覆ふ板。

うは-ごほり 上氷【名】うはべに薄く張りたる氷。重之集「うはごほりとくるなるべし山かげのいはまの清水音まさるなり」

うは-ごゑ 上聲【名】〔音〕『伊 Falsetto』最も高き音を發せんとする時に、地聲(ヂゴヱ)を避けて、美的に發する假聲。

うはさ 噂【名】㊀世間にて言ひはやす話。うはさばなし。風說。風聞。世評。㊁或物事又は人の上などにつきて話すこと。うはさばなし。

噂をすれば影【句】次條の略。

噂をすれば、影がさす【句】人の噂をしてをる處へは、往往その人が來る。〔諺語〕野良の玉子「いがやの九平次なども、私定めて御存じでござりませうね。…、私も、たった一度、あそこのうちへは參りやした。（と噂をすれば影がさす。向ふ通るは、いがや）」

人の噂も七十五日【句】一時はかれこれと、惡く言觸らさるとも、長くつづくものにあらず。〔諺語〕

うは-ざうり 上草履【名】家の內の板の間などにて穿(ハ)く草履。

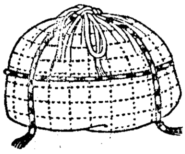
うば-さぎ 姥鷺【名】〔動〕涉禽(セウキン)類に屬する鳥。形小くして、全身淡紅を帶び、面部には羽毛無くして露出し、嘴(クチハシ)長くして角質なり。

うば-ざくら 姥櫻【名】㊀〔植〕『葉のなきを、齒のなきにかけていふ』櫻の一種。八重の白き花を、葉の出でざる前に簇(ムラガ)り開くもの。花輪大きく、花莖みじかし。㊁なまめきたる老女の譬。

うは-ざし 上差・上刺【名】㊀『長くして、他の矢よりも上方に出でをるよりいふ』箙(エビラ)に矢を盛りて、その左の方に指し添ふる二本の矢。多くは鏑矢(カブラヤ)又は雁股(カリマタ)を用ふ。うはや。なかざし(中差)參照。「うはざしの矢」「うはざしの鏑」㊁布帛を、力絲にて、碁盤目(ゴバンメ)の形に竪横に刺し縫ふこと。又その刺し縫ひたる物。盛衰記「黑丸といふ御中間(チユウゲン)に、上刺にしたる袋を持たせて、御所を出しまゐらす」〔表差〕㊂うはざしぶくろ(上差袋)の略。㊃狩衣(カリギヌ)・直垂(ヒタヽレ)などの袖ぐくり又は袴の紐などに、平組緒(ヒラクミヲ)・丸組緒などにて刺縫へる飾。續世繼「裳の腰にも、しろかねを延べて、うはざしは、玉を貫きて飾られはべりける」

うはざし-ばこ 上差箱・上刺箱【名】禮式の時、衣服を入るる箱。

うはざし-ぶくろ 上差袋・上刺袋・表插囊【名】古、貴人の外出の時、小袖又は器物を入れて、供の者に持たせてあるきし袋。色は一樣ならねど、多くは表・裏同色にて、破れぬやうに絲にて上刺にし、同じく上刺にしたる方形の底を入れ、口は組絲にてかがり、これに太き緒を通してくくりとす。又、夜具を入るる上刺袋を宿直袋(トノヰブクロ)といふ。うはざし。



（うはざしぶくろ）

うはさ-ばなし 噂話【名】うはさ(噂)に同じ。文反古「世のうはさばなしもっぱら」

うは-さん 上棧【名】舵(カヂ)の一部の名目。

うば-ざめ 姥鮫【名】〔動〕板鰓(ハイサイ)類に屬する魚。青鮫の類。體長くして、皮に皺(シワ)あり。齒極めて小く、全身赤ばみ、大なるものは六七尋(ヒロ)あり。肉は美味ならねど、蒲鉾(カマボコ)の料に用ふ。うばぶか。ざうざめ。

うは-ざや 上鞘【名】〔商〕定期賣買にて、他の期の相場以上に增加したる差額。（下鞘に對して）

うは-じかけ 上仕掛【名】弦の輪の上の方。

うは-じき 上敷・表敷【名】㊀物の上に敷く物。字鏡集「氈、ウハシキ、ケノユカ、カモノケ、ケノムシロ」〔古語〕㊁くらしき(鞍敷)に同じ。和名「鞍褥、久良之岐。俗云、宇波之岐」㊂寢床の汚れを防がんために、その上に敷く布帛。しいつ。

うば-しぎ 姥鷸【名】〔動〕鷸の一種。嘴長くして黑く、體は紫色を帶びたる鼠色にて、黑斑あり。

うば-じようすけ 姥尉介【名】〔人〕つるやなんぼく(鶴屋南北)の戲名。

うは-じらむ 上白む【動自四】うはべの色、白ばむ。〔古語〕源氏「ゆるしいろの、わりなううはじらみたる一かさね」

うは-じる 上汁【名】㊀流動物の表面に浮く汁。うはずみ。㊁人の利益の幾分を、勞せずして取ること。うはまへ。〔俚語〕

上汁を吸ふ【句】㊀汁の上澄(ウハズミ)の部分を吸ふ。㊁「上前(ウハマヘ)を取る」に同じ。

うはじろ-のくるま 上白車【名】網代車(アジログルマ)の一種。屋形・袖などの白地なるもの。大臣・大將・納言等の乘用たりき。袖白の車。ちがひ物見車。

うは-すぎ 上過【名】〔商〕相場のはげしく「騰貴せること。

うは-すすみ 上進【名】〔商〕相場の騰貴すること。價の高くなること。

うは-すだれ 上簾【名】車・輿などに懸くる簾。（下簾に對して）

うは-すべり 上滑【名】㊀物の表面のなめらかなること。㊁輕輕しくして注意の足らぬこと。藤田東湖書簡「讀書は、博きを貴び候へども、うはすべり致し候うては、何ほど萬卷を讀み候ふとて」

うは-ずみ 上澄・上清【名】㊀流動物の上層の澄みてあること、又その部分。うはじる。（うは濁に對して）㊁濁酒の、糟(カス)よどみて澄みたる上層の部分を汲取れるもの。なかくみ(中汲)參照。

うは-ずんべり 上滑【名】『うはすべり(上滑)の訛』何事もなきやうに裝ふこと。うはなだら。〔俚語〕關八州繫馬「うへうへ方はうはずんべり、お心でばかり、くよくよくよくよ、思ひのつもり」

うは-ずり 上摺【名】うはぞめ(上染)に同じ。拾玉「山吹をわけゆく人の衣手や春のかたみの露のうはずり」

うは-ずる 上擦る【動四自】㊀表面なめらかにてすべる。㊁おちつかず。かろがろしく見え又は聞ゆ。〔俚語〕

うはせ-じんじや 宇波西神社・上瀨神社【名】若狹國三方(ミカタ)郡八(ヤ)村に鎭坐せる縣社。祭神は鸕鷀草葺不合(ウガヤフキアヘズ)尊。大寶元年の建立。

うばそく 優婆塞・烏婆塞（梵 Upāsaka）【名】〔佛〕『清淨信士・淸士・德士・淸信男・近事男・近善男・近住男など譯す』七衆の一。男子の佛敎徒の總稱、即ち在家(ザイケ)の男の佛敎・僧侶に親近し、戒を受けて修行するもの。いばそく。いぶそく。（優婆夷に對して）源氏「優婆塞ながら行ふ山の深き心」

優婆塞の宮【句】親王にて出家せられたる方。入道親王。

うば-そだち 乳母育【名】乳母の手にて養育せられたること。

うは-そで 上袖【名】柔道の稽古にて、相手の袖を握るとき、その上部を握ること。

うは-ぞめ 上染【名】表面を染むること。うはずり。堀次「柞(ハハソ)ばら露のしらはひさしつれば時雨の雨ぞうはぞめはする」

うは-ぞろへ 上揃【名】あをちや(青茶)㊀に同じ。

うは-だき 上薰【名】名香の一。沈(ヂン)の一種。

うは-だな 上棚・上椎【名】和船の左右の側面の板の最上部。二階、即ち中椎の上にあるもの。ならのへ。ふなべた。ふなばた。ふなはら。

うはだ-の-みささぎ 宇波多陵【名】桓武天皇の妃藤原旅子(タビコ)の御陵。山城國乙訓(オトクニ)郡大枝(オホエ)村にあり。

うば-たま 烏羽玉【名】求肥(ギウヒ)にて餡(アン)を包み、白砂糖をまぶしたる餅菓子。

烏羽玉の筋【句】『次條に引きたる後撰集の歌參照』黑くして光澤(ツヤ)のある頭髮。〔古語〕夫木「物をのみみだれてぞ思ふたれにかは今はなげかんうばたまのすぢ」

うばたま-の 烏羽玉の【枕】ぬばたまの(射干玉の)に同じ。古今「いとせめて戀しきときはうばたまのよるの衣をかへしてぞ寢(ヌ)る」後撰「たらちねはかかれとてしもうばたまのわが黑髮を撫でずやありけん」

うは-ちどり 上千鳥【名】〔動〕みやこどり(都鳥)に同じ。

う-はつ 有髮【名】剃髮などせず、頭に髮をたてたること。「有髮の時」「有髮の尼」

うは-っ-かは 上皮【名】うはかは(上皮)の音便。〔俚語〕

うは-つき 上突【名】玉突にて、玉の中央以上の部を突くこと。

うはつき-だつ 上附きだつ・浮つきだつ【動四自】うはつく（上附く）に同じ。芭蕉「蝶鳥もうはつきだつや花の雲」

うは-つく 上附く・浮つく【動四自】氣が浮きて、落ちつかず。うはうはとす。うはつきだつ。

うは-つ-くに 上國【名】この地球上の國。この世の國。（根國(ネノクニ)に對して）〔古語〕祝詞「吾(ア)がなせの命は、上つ國を知ろしめすべし」

うは-づけ 上附【名】うはがき（上書）に同じ。和泉式部續集「ふみ箱のうはづけの心もとなさに、端をあけて見るままに」

うはつ-そう 有髮僧【名】**一**髮を剃らずに居る僧。**二**俗人にして、佛道を修め、または無慾恬澹(テンタン)なる生活をなす人。

うは-づつみ 上包【名】うはおほひ（上被）に同じ。

うはづつのを-の-かみ 上筒男之神【名】伊弉諾(イザナギ)尊の御子。

うは-っ-つら 上面【名】うはつら（上面）の音便。〔俚語〕

うは-っ-てうし 上調子【名】うはてうし（上調子）の音便。〔俚語〕

うは-っ-ぱり 上張【名】うはばり（上張）**二**の音便。〔俚語〕

うは-っ-ぺ 上邊【名】うはべ（上邊）の音便。〔俚語〕

うは-っ-ぺら 上邊【名】うはべら（上邊）の音便。〔俚語〕

うは-づみ 上積【名】荷を船又は車などの上層に積むこと、又その上層に積みたる荷。

うは-つゆ 上露【名】草の葉などの上に置く白露。源氏「光ありとみし夕顔のうはつゆはたそがれどきのそら目なりけり」

うは-つら 上面【名】うはべ。表面。外側。うはっつら。

うは-て 上手【名】**一**上の方。**二**みなかみ。川かみ。上流。夫木「さみだれは岸のうはてに舟つけてなぎさをみをの淀の川水」**三**かざかみ。上風。**四**犬追物(イヌオフモノ)にて、我が馬の前に立ちたる射手。（した手に對して）**五**石帶(セキタイ)の一部の名目。建武年中行事「束帶の人は、うはてをはづす」**六**技能などの、他より勝ること。

上手に出る【句】**一**相手に對して、こなたの見識又は力量まさる。**二**相手に對して威を示す。ゐばる。

うは-てうし 上調子【名】**一**三味線の調子の鋭きもの。うはってうし。たかね。**二**淨瑠璃の連彈(ツレビキ)の場合に、強き調子の三味線を彈く者。うはってうし。**三**落ちつかぬ音調。うかれてうし。うはってうし。**四**言語・動作などの落ちつかぬこと。うはってうし。輕佻(ケイテウ)。

うはて-かぢ 上手舵【名】船首のはげしく風上に開き上ぐる傾のある時、これに對するため、舵の柄をすこし風上に寄すること。

うはて-すかし 上手透【名】相撲(スマフ)の手の一。相手の腕を抱込み、その胸に肩と頭とをつけて、前方へ引落すもの。かしらひねり。

うはて-なげ 上手投【名】相撲(スマフ)の手の一。相手の四手(ヨツ)に組まんとするを、下の手にてその腕を取留め、上の手にて、廻(マハシ)の結びめを取り、腰へ釣りつけ、身を捻(ネヒ)りながら倒すもの。

うはて-ひねり 上手捻【名】相撲(スマフ)の手の一。四手(ヨツ)に組み、褌(ミツ)を引きあふ間に、上手に力を込めて捻(ネヒ)り倒すもの。逆捻(ギャクヒネリ)。

うはて-まはし 上手廻【名】帆船の航海中、逆風のために、一杯開(イッパイヒラキ)となすも、なほ船首の方向正しきを得ざるとき、一方の舷(ゲン)に風を受けたるまま航走を續けたる上、舵と帆との作用にて、船首を廻轉して、他方の舷より風を受けて、目的の方向に前進すること。逆轉。（下手廻に對して）

うはて-やぐら 上手櫓・上手矢倉【名】うはやぐら（上櫓）に同じ。

うは-とたて 上戸立【名】和船の戸立の上部の、上棚(ウハダナ)と接着する部分。うはあし。

うは-どほり 上通【名】和船の上棚(ウハダナ)と加敷(カシキ)との接合線。

うはどほり-くぎ 上通釘【名】上通の接合に用ふる釘。

うは-どよむ 上響む【動四自】うはべのみ鳴りひびく。〔古語〕長能集「うはどよみどよみにけりな淀川の底にも戀ひんのどけからぬに」

うは-なげ 上投【名】湯を注(ツ)ぎたる後に茶を入るること。

うは-なげし 上長押【名】〔建〕上方にある長押。（した長押に對して）

うは-なだら 上なだら【名】うはべのなだらかなること。うはずんべり。〔古語〕堀太「とけねどもうはなだらなる人かとよ名はひむろにて下は氷れる」

うは-なほし 上直【名】うはべだけを直すこと。

うは-なみ 上波【名】水面に高く立つ波。續古今「すませども淺き瀨にたつうはなみのしづめがたきは心なりけり」

うは-なり 上鳴・表鳴【名】笙(シヤウ)などの、正音以外に發する、輕くかすかなる音。

うは-なり 後妻【名】**一**『うはを（後夫）參照』二度目の妻。のちぞひ。ごさい。（こなみに對して）〔古語〕十訓「呂后ときこえける后は、戚夫人といひけるうはなりを捕へて」**二**ねたみ。そねみ。嫉妬(シット)。〔古語〕字鏡「嫌、宇波奈利」

うは-なり 嫐【名】うはなりうち（嫐打）の略。

うはなり-うち 後妻打【名】古の風俗に、妻を離別して、後妻を娶るや、先妻の親戚來りて、後妻の家を襲(オソ)ひしこと。鎌倉時代より始まり、江戸時代の始にかけて流行したりといふ。相當うち。

うはなり-うち 嫐打【名】市川家の歌舞伎十八番の一。妻・妾の間の嫉妬(シット)を演ずるもの。外題は「甲賀三郎鬼神退治、一心五界玉」、又、改作して「花雲鐘入月(ハナノクモカネイリアヒ)」ともいへり。うはなり。

うはなり-ねたみ 後妻嫉【名】しっと（嫉妬）に同じ。〔古語〕紀「嫉妬、ウハナリネタミシテ」

うはなり-ゆ 嫉妬湯【名】温泉の、人の聲を聞きて湧(ワキ)上るといふもの。

うは-に 上荷・表荷【名】**一**上積にする荷。**二**馬・車・船などに積み載せたる荷物。**三**本船に上荷を積み又は本船より上荷を取るに用ふる荷船。大さは凡そ二三十石積にて、七杜上荷・中船上荷・新上荷・堀江上荷・播磨上荷・堺上荷・房州上荷などあり。うはにぶね。**四**攝津國の川船。

うは-にごり 上濁【名】流動物の上方の濁りたること。（うは澄に對して）

うばにしやっと 優波尼娑土・優婆尼殺曇（梵「Upanisad」）【名】〔書〕印度の婆羅門(バラモン)時代に發達せる哲學の書。唯心(ユイシン)一元論的にして、百五十篇より成り、主に吠陀(ヹエダ)中に存在せる哲學的思想を推演せるものにて、小我を脱して、絶對なる大我に合一すべきを說く。

うはに-ぶね 上荷船【名】うはに（上荷）**三**に同じ。

うは-ぬり 上塗【名】**一**壁土・漆などを塗るに、最上の面を塗ること。（中塗・下塗に對して）**二**物事の上に、また他の物事を添へ加ふること。うはのり。（多くは惡しき物事にいふ）「恥のうはぬり」

うは-ね 上直・上値【名】今までの値(ネ)より高値(タカネ)なること。

うばね-かんびき 于撥干引【句】漢字の「于」と「干」とは形まぎれやすければ、前者は下を撥(ハ)ね、「干」の字は引下しのままなること。

うはの-おほぞら 上の大空【句】おほぞら（大空）の條下を見よ。

うはの-そら 上の空【句】そら（空）の條下を見よ。

うばの-たまも 烏羽の玉藻【句】たまも（玉藻）の條下を見よ。

うは-のり 上乘【名】**一**〔商〕『英 Supercargo』航海中、荷物と共に乘込みて萬事を處理・監督すること、又その事務を委託せられたる雇員。**二**うはぬり（上塗）**二**に同じ。膝栗毛「はじめの百が惜しくなって、うはのりをした」

うは-は 上端【名】**一**物の上部。上面。〔古語〕夫木「いなみのを朝ふみわたるかり人の笠のうははになびく荻はら」**二**單位に滿たぬ。餘分の端數。

うは-ば 上齒【名】上の齦(ハグキ)にある齒。（下齒に對して）

うは-ば 上葉【名】莖・枝などの上の方にある葉。（下葉に對して）千載「いかなればうはばをわたる秋風に下をれぬらん野べのかるかや」

うは-ばき 上履【名】室内の板の間・床の上などを歩む時のはきもの。うはざうりの類。一代男「小野のたき炭・吉野紙・悲田院のうはばきまでもみづからして、…待つ人も見えず」

うは-はげ 上剝【名】塗物などの、上の方の剝ぐること。

うは-ばなれ 上放【名】〔商〕物價又は相場の、きはだちて騰貴すること。

うは-ばひ 上這【名】㊀表面を這ひあるくこと。浮世風呂「千手觀音の上這はあるべきか」㊁〔商〕うはむき（上向）㊂に同じ。

うは-ばみ 蟒蛇【名】㊀〔動〕蛇類の巨大なるもの。をろち。大蛇。㊁『大蛇は物を呑むといふ傳説よりいふ』よく酒を飲む人。大酒家。〔俚語〕㊂〔動〕『英Python』身長二十尺乃至二十五尺に達する一種の大蛇。亞細亞の南部及び亞弗利加の水邊に棲息し、背部は黄褐色にして暗色の斑紋あり。腹部は白ばみ、肛門の邊の兩側に、小形・不完全なる後肢の遺物あり。無毒にして、小き鳥獸を捕へ食ふ。

うはばみ-さう 蟒蛇草【名】〔植〕蕁麻（イラクサ）科に屬する草。山中の濕地に生じ、莖は高さ約一尺、多くは傾斜す。葉は長楕圓形又は卵狀披針形にして齒牙狀の缺刻あり。淡綠色にして互生し、四五月の頃、白色の花を開く。くちなはじやうご。むかごみづ。やまとろろ。

うは-ばん 上盤【名】〔地〕或地層又は鑛層に直接する、その上位の地層。

うは-はらおび 上腹帶・表腹帶【名】馬の腹帶の上をつつむ、大きなる帶。〔古語〕和名「、宇波波艮於比、馬大帶也」

うは-はらまき 上腹卷・表腹卷【名】狩衣・直垂（ヒタタレ）・水干などの上に腹卷を卷くこと。（下腹卷に對して）

うは-ばり 上張・上貼【名】㊀天井・襖（フスマ）などの紙張の仕上張（シアゲバリ）。（下張に對して）㊁着物の汚れぬやうに、その上に被ひ著るもの。うはっぱり。夕霧阿波鳴門「この上張の袷を脱ぐ」㊂足袋（タビ）の一部の名目。

うは-ばれ 上腫【名】上層のはれ。うはがはのふくれ。

うは-ひ 上翳・外障眼【名】瞳（ヒトミ）の上に、くもを生じ、遮られて、物の見えぬ病。（そこひに對して）

うは-びき 上引【名】內曇（ウチグモリ）又は白砥（シラト）等の薄きものを指頭に附けて、刀劍の地艷（ヂツヤ）・刃艷（ハツヤ）を出すこと。

うばひ-くび 奪首【名】味方の取りし敵首を奪ひて、我が功とすること。ばひくび。

うは-ひげ 上髭【名】脣の上に生ゆる髭。くちひげ。（下髭に對して）

うは-ひも 上紐【名】衣の上を結ぶ紐。（下紐に對して）好忠集「なつかしく吹きくる風にはかられて上紐ささでくらす頃かな」

うばふ 奪ふ・褫ふ【動四他】㊀强ひて、人の物を取る。ひったくる。ふんだくる。源氏「引きかくすを、さなめりと見て、奪ひとりつ」㊁掠め取る。盜む。㊂とりあぐ。剝奪（ハクダツ）す。褫奪（チダツ）す。㊃君主を除きて、みづからこれに代る。〔簒ふ〕字鏡「簒、宇波不」

膽（タン）を奪ふ【句】驚き怖れしむ。どぎもを拔く。肝をつぶさしむ。

心膽を奪ふ【句】前條に同じ。

うば-ふか 姥鱶【名】〔動〕うばざめ（姥鮫）に同じ。

うは-ぶき 上葺【名】屋根の上部を葺くこと、又これを葺く料に用ひたる物。

うは-ふくみ 上含【名】謠曲の謠ひ方の含みの一種。張る氣味なるもの。

うは-ぶし 上臥【名】うへぶし（上臥）に同じ。

うは-ぶち 上扶持【名】ふち（扶持）に同じ。〔江戸時代の語〕

うは-ふなばり 上船梁【名】和船の船梁の上部、即ち上枻（ウハダナ）の上部に嵌入（カンニフ）せる梁木（ハリギ）。

うは-ぶみ 上文【名】うはがき（上書）に同じ。蜻蛉「心ぼそく書きて、うはぶみに西山よりと書いたるを」

うは-ぶん 上分【名】はつほ（初穗）に同じ。著聞「上分、佛に參らせんとて」

うは-べ 上邊【名】上に見ゆる處。おもて。うはむき。うはべら。うはっぺら。外觀。源氏「心のうちには、思ふことゝもやあらん、うはべは、誇りがにみゆる頃ほひなりかし」

うはべ-なし 上邊無し【形一】愛想なし。情愛を缺きてあり。〔古語〕萬葉「うはべなきものかも人はしかばかり遠き家ぢを歸す思へば」

うはべ-ら 上邊【名】うはべ（上邊）に同じ。

うは-ぼう【名】〔植〕くぬぎ（櫟）の異名。

うば-ほほ 姥頰【名】武具の鐵面（カナメン）の一種。鬚なき半頰（ハンボホ）。

うは-ぼり 上彫【名】しあげぼり（仕上彫）に同じ。

うは-まき 上卷【名】白紙を横にして禮紙（ライシ）を包み、宛名を書くもの。

うは-まだら 上斑【名】うはべの斑なること。〔古語〕好忠集「うはまだら今朝しも閨の見えつるはらべこそ夜はに袖はさえけれ」

うは-まはり 上廻【名】船の上半部。〔水夫の語〕

うは-まへ 上前【名】㊀衣服の前襟（マヘエリ）の、上なる方。左の前身頃（マヘミゴロ）。うはがひ。うはんまへ。㊁他のために取次ぎて拂ふべき代金・貨錢などの中の一部。うはじる。かすり。

上前を取る【句】他人の利益の幾分を、勞せずして取る。上前をはねる。上汁（ウハシル）を吸ふ。

上前をはねる【句】前條に同じ。

うはまへ-とり 上前取【名】うはまへを取ること、又その人。口錢とり。

うは-み 上身【名】魚を俎（マナイタ）に載せたる時、上になりたる方の肉。

うは-み 褶【名】うはも（上裳）の轉。〔古語〕和名「袴條。釋名云、摺襲也。覆二袴上一之言也、宇波美」

うはみず-ざくら 上不見櫻【名】〔植〕薔薇（バラ）科に屬する落葉喬木。幹は暗褐色の木皮鱗狀をなし、花は色白くして香氣あり。實は食用に供せられ、材は小家具・印版・蝙蝠傘の柄などに、又、樹皮は曲物を縫ふに用ひられ、根は染料となる。にはざくら。ははか。きそざくら。うはみぞざくら。

うはみぞ-ざくら うはみぞ櫻【名】〔植〕前條に同じ。

うは-みづ 上水【名】うはずみの水。

うは-むき 上向【名】㊀上に向くこと。あふむき。㊁江戸時代の米相場會所及び米會所の役員。相場の立會（タチアヒ）に、拍子木（ヒヤウシギ）を撃ちて、仲買人を集め、又、立會終るや、水を撒（マ）きて仲買人を退散せしむることを掌りしもの。㊂うはべ（上邊）に同じ。㊃〔商〕相場の騰貴せんとすること。景氣のよくなりゆくこと。うはばひ。

うは-むしろ 上筵・表筵【名】寢床に布く筵。うはしきの筵。源氏「御しとね・うはむしろ・屏風」

うはん-まへ 上前【名】うはまへ（上前）㊀の音便。〔俚語〕

うは-め 上目【名】㊀瞳（ヒトミ）を上へ向くること。「上目で睨む」㊁衡竿（ハカリザホ）の上面に盛りたる星をめあてに量ること。（向目（ムカフメ）に對して）㊂かいがけ（皆掛）に同じ。㊃越えあまること。超過。

うば-め 乳母女【名】うば（乳母）に同じ。夫木「いち子もるうばめおうなの重ね持つこのて柏に面ならべん」

うば-め 姥女【名】〔植〕次條の略。夫木「冬くれば霜をいただくうばめの木おいの姿やいとど見ゆらん」

うばめ-がし 姥女樫・青剛樹【名】〔植〕殼斗（カクト）科に屬する常綠喬木。暖地に自生し、葉は楕圓形又は倒卵形にして、その上部に鋸齒あり。花は雌雄異株、黄褐色にして春開く。材は器具用等に供せらる。いまめがし。いやめがし。うばめ。うばめがしは。うばめのき。

うばめ-がしは 姥女柏【名】〔植〕前條に同じ。

うはめ-づかひ 上目使【名】瞳（ヒトミ）を上へ向けて、相手の顏を見ること、又その癖（クセ）ある人。

うばめ-の-き 姥女木【名】〔植〕うばめがし（姥女樫）に同じ。

うは-も 上裳・表裳【名】裳の上に著る衣。うはみ。しびら。（下裳に對して）〔古語〕催馬樂（我門爾）「うはもの裾ぬれ、下裳の裾ぬれ」

うは-もの 上物【名】家屋。建築物。（した物に對して）

うは-もり 上盛【名】、㊀有るが上に盛添ふること。㊁最上部に盛ること、又その物。㊂第一の上手。第一流。〔古語〕津國女夫池「おもしろの花のくるわや、世界の色のうはもり」

うはもる 上盛る【動四自】心、高ぶり亂る。女殺油地獄「心は沈み、氣はうはもり、逃げてくれうと駈け出でて」

うはや 上矢・上箭・表矢【名】うはざし（上差）㊀に同じ。

上矢の鏑（カブラ）【句】箙（エビラ）に盛れる上差（ウハザシ）の鏑矢。うはざし。うはざしの矢。太平記「もののふのうはやのかぶら一筋に思ふ心は神ぞ知るらん」

うはや 上屋【名】㊀停車場・波止場（ハトバ）・稅關などにて、旅客又は貨物の雨露に濡（ヌ）れぬやうに設けたる、粗略なる建物。㊁建築物の上に假屋根を設けて、雨天にても、工事を施し得るやうにせるもの。すやね。

うはやがかり 上屋掛【名】稅關の上屋に貯藏せる貨物の保管と出入とを掌る人。

うはやかた【名】船の屋形の上。やね船の屋根の上。宇治「うはやかたへ出でて」

うばやぎいうしん 姥柳有莘【名】〔人〕豐後國岡藩の儒官。名は元聖、字は子文。徂徠・南郭の門人。最も易學に精しく、藩侯の知遇を得、庶政に擧用せらる。天明六年歿す。年六十六。

うはやく 上役【名】己より上に立つ役人。上官。

うばやく 乳母役【名】乳母となりて、小供を育つる役。

うはやぐら 上櫓・上矢倉【名】相撲（スマフ）の手の一。四手（ヨツ）に組みて、上手にて相手の廻（マハシ）を取り、上手の方の足を相手の内股へ蹴込（ケコ）む心にて、下手の方へ廻はりて落すもの。うはてやぐら。つりだし（釣出）・もちだし（持出）參照。

うはやせいど 上屋制度【名】關稅の賦課・徴收を受くべき輸入物が、輸入手續を終へて市場に出づるまで、その關稅を徴收せずして、上屋に保留することを許可する制度。その貨物の逆輸出せらるる場合には、全く課稅せずに終るものとす。

うはやり 上槍【名】敵と槍を交ふる時、相手を突くに先ちて、その槍の柄を、我が槍の柄にて抑（サオ）へつくること。（した槍に對して）

うはやわたし 上屋渡【名】〔商〕貨物を上屋に貯藏せるまま引渡すこと。（埠頭渡・甲板渡・停車場渡・船腹渡などに對して）

うばゆ 鵜羽湯【名】うぶゆ（產湯）に同じ。運歩色葉「鵜羽湯、ウバユ、又、產湯」

うばゆり 姥百合・蕎麥葉貝母【名】〔植〕百合（ユリ）科に屬する多年生の草。葉は圓形にして大きく、花も大きくして白く、多くは溪間に自生す。鱗莖は純白にして品質すこぶる佳良、食用となり、又、澱粉（デンプン）製造用に供せらる。かばゆり。こばゆり。しかかくれゆり。うしかくれゆり。ねずみゆり。

うはよみほふもん 上讀法門【名】德川時代に、四月と十二月との二回、關東十八檀林の貫主が論頭となり、淨土宗の學徒を集めて宗學を論議せしめしこと。

うはより 上縒【名】仕上げに掛けたる縒。

うはより 上寄【名】〔商〕その日の最初の相場が、前日の引値（ヒケネ）よりも高く附けられたること。

うばら 茨【名】〔植〕いばら（茨）㊀に同じ。〔古語〕好忠集「なつかしく手にはをらねど山賤の垣根のうばら花さきにけり」

うばら 姥等・婆等【名】歲末に、白木綿にて頭面を覆ひ、腰に赤き前垂（マヘダレ）を掛け、鐘を携へて米錢を乞ひあるく女乞食。〔京都の語〕

うばら 菟原【名】〔地〕攝津國の舊郡の一。明治二十九年、武庫（ムコ）郡に合併せらる。

うばらぐつわ 蒺藜轡【名】『形、蒺藜（ハマビシ）の實に似たるより蒺藜の字を用ふ』轡の一種。菱形の鑣（カガミ）を有するもの。〔古語〕和名「蒺藜銜、宇波良具都波」

うばらすみよしじんじや 茨住吉神社【名】攝津國武庫（ムコ）郡御影（ミカゲ）に鎭坐せる神社。もと神功皇后の創立したまひしものにて、全國無數の住吉神社は皆これより勸請（クワンジヤウ）したるものなり。

うばらぢごく 嗢鉢羅地獄【名】〔佛〕はちかんぢごく（八寒地獄）を見よ。

うばらりゆうじん 優鉢羅龍神【名】〔佛〕次條に同じ。

うばらりゆうわう 優鉢羅龍王【名】〔佛〕はちだいりゆうわう（八代龍王）を見よ。

うばらをとめ 菟原處女【名】〔人〕求塚（モトメヅカ）の故事にて名高き女。うなひをとめ。もとめづか（求塚）參照。萬葉「見㆓菟原處女墓㆒歌一首並短歌」

うばり 優波離・優婆釐（梵Upali）【名】〔人〕『近取・近執など譯す』印度の人。賤族首陀羅（スダラ）より出で、釋迦に從ひて苦行し、十大弟子の一に數へられ、世に持戒第一の稱あり。釋迦滅後、第一結集の時に律藏を誦出せりと云ふ。

うはゑ 上繪【名】繪又は模樣などの上を、繪具にて明瞭に畫き分くること、又その畫き分けたるもの。今は、專ら染拔きたる布帛の上を、更に繪具にて畫き添ふるにいふ。

うはゑかき 上繪書【名】上繪を書くこと、又その職業の人。

うはゑし 上繪師【名】上繪を書くことを業とする人。

うはゑや 上繪屋【名】上繪を書くことを職とする人、又その家。

うはを 後夫【名】『うはなり（後妻）參照』二度目のをっと。〔古語〕和名「後夫、宇波乎。一云、伊萬乃乎宇止」

うはを 上尾【名】鷹の尾羽の一。

うはをり 上折【名】烏帽子の上の方を折曲ぐること。保元「上折したる烏帽子」

うはをりえぼし 上折烏帽子【名】細烏帽子の上の方を折曲げたるもの。

うひ 烏琵【名】〔佛〕うしち（烏瑟）に同じ。

うひ 初【接頭】始めの・初めての等の意。「うひまなび」「うひごと」

うひあゆみ 初步【名】あるきぞめ（步初）に同じ。名義抄「踵、ウヒアユミ、タガタガ」

うひうひし 初初し【形二】未だ物事に馴れず、羞（ハツ）しげなり。初心らし。はじめてらし。〔古語〕源氏「いとはづかしう、よろづの事うひうひしき心地すれど」

うひかうぶり 初冠【名】㊀初めて冠を被ること。うひかむり。元服。〔古語〕伊勢「むかし、男、うひかうぶりして」㊁始めて位に敍（ヨジ）せらるること。うひかぶり。うひかむり。初位。

うひかぶり 初冠【名】前條㊁に同じ。〔古語〕紀「初冠、ウヒカブリ」

うひかむり 初冠【名】㊀うひかうぶり（初冠）に同じ。謡曲（杜若）「殿上にての元服のこと、當時その例稀なるゆゑに、うひかむりとは申すとかや」㊁能（ノウ）にて、垂纓（タレエイ）の冠。「絃上（ゲンジヤウ）」・「融（トホル）」等の曲の仕手（シテ）に用ふ。

うひげんざん 初見參【名】初めての見參。初めての面會。初對面。

うひご 初子【名】初めて產む子。うひのこ。初生兒。

うひごと 初事【名】初めてする事。かはきり。〔古語〕源氏「そのきはぎはをまだ思ひ知らぬうひごとぞや」

うひごと 初言【名】初めていふ言葉。はつこうじやう。〔古語〕蜻蛉「人のうひごとは咎めぬものぞ」

うひごと 初琴【名】初めて彈（ヒ）く琴。〔古語〕源氏「うひごと習ふ人もあめるを」

うひごもち 初子持【名】はじめて子を持つこと、又その人。

うひごゑ 初聲【名】うぶごゑ（產聲）に同じ。

うひざん 初產【名】初めて子を產むこと。

うびた 右端【名】鯉の腹の方の第四の右の鰭（ヒレ）。〔料理の語〕

うひだち 初立【名】うひだつこと。〔古語〕源氏「久しうまゐりはべらねば、いぶせきに、けふなんうひだちし侍る」

うひだつ 初立つ【動四自】㊀人、はじめて出でたつ。〔古語〕㊁春になりて、霞はじめて立つ。〔古語〕夫木「いつしかもうひだちにける霞かなまだいとけなき春のはじめに」㊂鳥の雛、育ちて、はじめて巢を立つ。〔古語〕好忠集「子規うひだつ山をさと知らばこのまを行きて聞くべきものを」

うひたび 初旅【名】はじめて旅にいづること。はつたび。

うびたひ 兎額・戴星【名】馬の額の白きもの。つきじろ。ほしづき。〔古語〕和名「戴星馬。爾雅注云、白顚。一名、的顙。俗稱爲㆓戴星馬㆒、宇比多非能无末」

うひぢ 泥土【名】『ひぢ（泥）を見よ』どろ（泥）に同じ。〔古語〕紀「埿土、此云㆓于毗尼㆒」

うひぢに-の-みこと 泥土煑尊・宇比地邇尊【名】豐雲野(トヨクモヌ)神に次ぎて生れたまひし男神。沙土煑(スヒヂニ)尊と合せて、神代七代中の第三代とす。埿土根尊。

うひぢね-の-みこと 埿土根尊【名】前條に同じ。

うひ-ぢん 初陣【名】初めて軍に出づること。はじめての出陣。いくさはじめ。

うひつ-こんがう 右弼金剛【名】〔佛〕**にわう**(仁王)を見よ。

うひ-とそう 烏飛兎走【名】『**うと**(烏兎)參照』光陰の速かに經過すること。

うひ-に 初に【副】初めて。はじめに。〔古語〕古今「われはけさうひにぞ見つる花の色をあだなるものといふべかりけり」

うひ-の-こ 初子【名】**うひご**(初子)に同じ。

うひ-の-やまぶみ 宇比山踏【名】〔書〕國學に志す人のための案內書。一卷。本居宣長(ノリナガ)の著。

うひ-ばな 初花【名】初めての花。はつはな。〔古語〕貫之集「うひ花咲ける紅梅を折りて」

うひ-ぼうこう 初奉公【名】初めての奉公。源平布引瀧「さあ、瀨の尾が首取って、うひ奉公の手がらせよ」

うひ-まくら 初枕【名】**にひまくら**(新枕)に同じ。

うひ-まご 初孫【名】初めて生るる孫。はつまご。

うひ-まなび 初學【名】㈠學問を修め初むること。にひまなび。しよがく。㈡未熟の學問。

うひ-みやづかへ 初宮仕【名】初めての宮仕。〔古語〕増鏡「おしなべてのうひみやづかへのさまよりは思ひあがれる氣色なり」

う-ひやうご 右兵庫【名】**ひやうご**(兵庫)を見よ。(左兵庫に對して)

うひやうご-の-かみ 右兵庫頭【名】右兵庫寮の長官。

う-ひやうごれう 右兵庫寮【名】**ひやうごれう**(兵庫寮)を見よ。

う-ひやうゑ 右兵衛【名】**うひやうゑふ**(右兵衛府)の略。

うひやうゑ-の-かみ 右兵衛督【名】右兵衛府の長官。

うひやうゑ-の-ぢん 右兵衛陣【名】㈠右兵衛の控所(ヒカヘジヨ)、即ち內裏內廓十二門の一なる陰明門外なる南北の二屋舍。㈡**おんめいもん**(陰明門)の異稱。

うひやうゑ-ふ 右兵衛府【名】**ひやうゑふ**(兵衛府)を見よ。

うひ-やまぶみ 初山蹈【名】㈠初めて山に上ること。初めての山行。㈡修驗者(シユゲンジヤ)の、初めての峯入(ミネイリ)。㈢學藝の道に初めてたづさはること。

う-ふ 【感】笑を怺(コラ)へて輕く出す聲。

う-ふ 右府【名】**うだいじん**(右大臣)の唐名。

う-ふ 烏府【名】**すみとり**(炭斗)の異稱。(茶道にていふ)

う-ふ 迂腐【名】迂闊にして生氣の無きこと。

う-ふ 嫗伏【名】**うふよういく**(嫗伏孕鬻)を見よ。

うぶ 生・產【名】㈠生れのままにて、飾なきこと。手入らずにあること。㈡生來のままにて、物事に慣れぬこと。初心。㈢情事(イロゴト)を解せぬこと。おぼこ。㈣**うぶけ**(產毛)の略。㈤薪などの、よく枯れてあらぬもの。なま。蕣「うぶの薪(キマ)に、下女の迷惑」

う-ぶ 有封【名】神社又は寺院の、朝廷より封戸(フコ)又は封戸田を賜はれるもの。「有封の寺」「有封の社」

う-ぶ 右舞【名】**うはう**(右方)㈡に同じ。(左舞に對して)

うぶ 生・產【接頭】生れ出でたる事物に關する意。「うぶ毛」「うぶ聲」

うぶ-いはひ 產祝【名】出產の祝。

うぶ-がみ 產髮【名】**うぶげ**(產毛)に同じ。

うぶ-がみ 產神【名】**うぶすながみ**(產土神)に同じ。

うぶがみ-まうで 產神詣【名】**うぶすなまゐり**(產土神參)に同じ。

うぶ-ぎ 產著・產衣【名】生れたる兒に初めて著する衣。うぶぎぬ。

產著の祝【句】赤子の誕生後はじめ著衣するを祝ふ儀式。著衣(チヤクエ)はじめ。著衣(チヤクエ)の祝。

產著の鎧(ヨロヒ)【句】源家相傳の鎧の一。義家が二歲の時用ひしもの。

うぶ-ぎぬ 產衣・初衣【名】**うぶぎ**(產著)に同じ。〔古語〕狹衣「御うぶぎぬのありけるを、とりいだして」

うぶぎ-ふくさ 產著袱紗・產衣幅紗【名】赤子を產湯(ウブユ)より取上ぐる時に用ふる白羽二重又は白絹。白繪にて蟹取(カニトリ)模樣をゑがくを例とす。

うぶ-げ 產毛【名】產兒の胎中に在る時に生ひたる髮の毛。うぶがみ。うぶ。胎髮。運歩色葉「產毛、ウブゲ」

うぶ-こ 產子【名】同じうぶすなの神社の管下に屬する人民。

うぶ-ご 產子【名】あかご。赤子。

うぶ-ごて 產籠手【名】鎧の籠手の一種。

うぶ-ごゑ 產聲【名】產兒の生れて、初めて泣出す聲。うひごゑ。

う-ぶし 浮節【名】淨瑠璃の節の一。

うぶ-しま 產島【名】〔地〕肥後國の西方に在る島。天草群島の一。周回、一里十町餘。

うぶ-すな 產土【名】㈠人の生れたる土地。本土。產地。〔產生・本居〕㈡次條の略。

うぶすな-がみ 產土神【名】產土を護る神。その土地の神。うぶすな。うぶがみ。(今は誤りて「うぢ神」といふ)

うぶすな-まうで 產土神詣【名】次條に同じ。

うぶすな-まゐり 產土神參【名】出產ありて後、男子は三十一日目、女子は三十三日目、その產土の神に詣(マウ)づること。古は百日目に詣でたり。みやまゐり。うぶがみまうで。うぶすなまうで。

うぶ-ぞり 產剃【名】產兒の生れて、初めて髮を剃ること。貞丈雜記「うぶぞりを剃髮のいはひといふ」

うぶ-たち 產立【名】產兒の生れて、七日目の祝。七夜(シチヤ)。「うぶたちの祝」

うぶ-だな 產棚【名】產所に据ゑつくる棚。白木にて三重に作り、胡粉(ゴフン)にて塗り、雲母(キラ)にて松竹鶴龜を畫き、上層と中層とには、湯を盛りたる桶を十二もしくは十三安置し、產湯に少しづつ用ふ。

うぶ-ち 產血【名】出產の時に出づる血。

う-ぶっしやう 有佛性【名】〔佛〕佛性のあること。

うぶ-どの 產殿【名】出產をなすための殿舍。〔古語〕紀「產殿、ウブドノ」

う-ぶね 鵜船【名】鵜飼(ウカヒ)に用ふる船。造りかた高瀨船に似たり。うかひぶね。

うぶね-しふ 鵜船集【名】〔書〕『篝屋(カガリヤ)警固の武士の歌、多く入りてあり、鵜船に篝は附物なるよりいふ』**ごしふゐしふ**(後拾遺集)の異稱。

うぶん-ぼく 烏文木【名】『烏は**からす**にて黑き意』**こくたん**(黑檀)に同じ。

うぶ-め 產女・孕女【名】㈠孕める女。產婦。和名「產婦、和名、宇不女」㈡次條の略。一代女「蓮の葉笠を著たるやうなる小供の面影、腰より下は血に染みて…おわりよおわりよと泣きぬ。これかや、聞傳へし孕女なるべしと、氣を留めて見しうちに」

うぶめ-どり 產女鳥・孕女鳥・產婦鳥・姑獲鳥【名】想像上の一種の鳥。形、角鷹(クマタカ)に似たりといひ、また鳶の如しともいふ。その聲、小供の泣くが如しとぞ。又、俗說に、產婦死して、その一念より化したるものといふ。中國邊にては、この鳥、夜中飛行して小供を害すと言傳へ、夜間は小供を外出せしめず。うぶめ。

うぶ-や 產屋【名】㈠出產のための室。產所。(上古は、出產の度ごとに新に建てたり)源氏「ある人の、うぶやにまかりて」㈡**うぶやしなひ**(產養)に同じ。〔古語〕榮華「女一の宮の御うぶやの殘り物」

產屋の儀式【句】**うぶやしなひ**(產養)に同じ。〔古語〕増鏡「御うぶやの儀式、あるべき事どもなど、こちたきまで、もよほしおかれ」

うぶや-さうぞく 產屋裝束【名】『產屋にては、すべて白き色を用ふるが儀式なるよりいふ。**いろなほし**(色直)を見よ』白き裝束。〔古語〕榮華「身屋(モヤ)の御簾(ミス)の內にぞ、うぶやさうぞくしたる衆ども、いと多く居たり」

うぶ-やしなひ 產養【名】古、出產の後三日目・五日目・七日目に、その親戚の者より產婦の衣裳・赤子の襁褓(ムツキ)・屯食(トンジキ)・椀飯(ワウバン)などを產家に贈りて祝意を表し、賀宴を開きしこと。うぶやの儀式。うぶや。〔古

語〕紫式部日記「三日にならせたまふ夜は、宮づかさの大夫よりはじめて、御うぶやしなひつかうまつる」

うぶ-ゆ 産湯【名】生れたる兒に、初めて湯をつかはしむること、又その湯。うばゆ。

うぶゆ-だらひ 産湯盥【名】うぶ湯に用ふるたらひ。

うふ-よういく 嫗伏孕鬻【名】『禮記に出づ。嫗伏は、鳥が氣を以て卵をかへすこと。孕鬻は、懷胎・生育の義、即ち獸類が胎生の子を育つること』鳥獸の生育すること。

うぶ-ゐ 産井【名】うぶ湯の水を汲みとる井戸。

うへ 上【名】❶上の方。高き方。かみ。（下（シモ）に對して）❷うはべ。おもて。表面。❸すぐれたる方。貴きこと。長けたること。❹ほとり。萬葉「あらたへの藤原がうへにをす國をめしたまはむと」❺加ふること。添ふること。「その上にも」❻天皇陛下を呼び奉る語。〔古語〕源氏「うへも、御涙のひまなく流れおはしますを」❼大内。殿上。〔古語〕「うへ宮づかへ」「うへの命婦」❽將軍などの貴族。うへさま。公方（クバウ）。❾貴人の御座に近き處。〔古語〕榮華「からぶり得て、兵衞佐になりぬ。春宮にもうへ許されて」❿貴人の妻。竹取「離れたまひし元のうへは」⓫女主人・母・祖母など、すべて目上の貴婦人。〔古語〕⓬貴婦人の稱號に添ふる語。「葵のうへ」⓭その物事に關係してゐること。「身のうへ」源氏「さまざまの人のうへどもを語りあはせつつ」⓮或物事の結果。或事の濟みたる後。「酒のうへの口論」「面會のうへで決（キ）める」⓯門・牛車（ギツシヤ）などの屋根。〔古語〕枕「などか…この土御門しも、うへもなく造りそめけん」⓰物價の騰貴すること。⓱姓氏の一。奈良に住せし伶人（レイジン）の家。こま（狛）參照。

上越す【句】まさりて甚し。

上知る【句】貴人の前に出づることを許さる。うへ（上）⑨參照。〔古語〕後撰「白雲のうへ知る今日ぞ春さめのふるにかひある身とは知りぬる」

上に上あり【句】我がまされりと思ふ以上に、優れるものあり。上見れば限なし。上を見れば方圖なし。〔諺語〕

上の女房【句】主上に近侍する女房。〔古語〕源氏「人がらのあはれに情ありし御心を、うへの女房なども戀ひしのびあへり」

上の御局（ミツボネ）【句】うへつぼね（上局）の敬稱。〔古語〕枕「殿上人、うへのみつぼねに召して」

上の召使（ウヘノメシツカヒ）【句】王朝時代に、太政官の史生（シシヤウ）の下にありて、雜役を務めし者。

上の男（ヲノコ）【句】うへびと（上人）に同じ。〔古語〕古今「うへのをのこども、鴨の川原に川逍遙しける供にまかりて」

上見ぬ鷲【句】驕慢（ケウマン）にして、上を畏れぬ人の譬。〔諺語〕「上見ぬ鷲の僭上沙汰」

上見れば限無し【句】「上に上あり」に同じ。

上よ、下（シタ）よ【句】上になったり、下になったり。狂言（姫糊）「兩馬が間にどうと落ち、上よ下よとしたりしが」

上を下【句】次條に同じ。俳諧新選（加友）「上を下叡東山の花見かな」

上を下に反（カヘ）す【句】上・下入れみだる。混雜す。盛衰記「賴政、ばけ物を射おとしければ、貴賤・上下・女房・男房、上を下にかへし」

上を下へ反す【句】前條に同じ。太平記「賢王の横言になる世の中は、上を下へぞかへしたりける」

上を下へと反（カヘ）す【句】前條に同じ。浮世親仁氣質「内方は、上を下へとかへして、御前の行く方へ尋ねまはり」

上を見な【句】己より身分の高き者を見て、之を羨（ウラヤ）むなかれ。〔諺語〕駿臺雜話「東照宮御在世の時、近習の若き者に、汝等、身を保つに簡要の語あり、…五字にて云はば、上を見な、七字にて云はば、身のほどを知れ、…常世の人、おほかた、上に目をつけ、身の程を知らず、それ故に、おのづから驕りたかぶりて、物事に華麗を事とするほどに」

上を見れば方圖（ハウヅ）なし【句】「上に上あり」に同じ。

今の上【句】今上天皇。いますべらぎ。當今（タウギン）。當帝（タウダイ）。〔古語〕源氏「帥（ソチ）の宮と聞えしは、今は兵部卿にて、今のうへに御かはらけ參りたまふ」

内の上【句】天皇。主上。うへ。うち。〔古語〕源氏「内のうへなん、よく似奉らせたまへる」

うへ 筌【名】魚を捕ふる具。細き竹を編みて、底無徳利のごとき形に造り、魚の一旦入りたる上は、出で遁るることの出來ぬやうにせるもの。うけ。うへやな。うくつ。

うべ 郁子【名】〔植〕むべ（郁子）に同じ。

うべ 宜【副】まことに。げにも。なるほど。道理で。うめ。むべ。うべな。うめな。〔古語〕大和「おる人の心にかよふ藤衣うべいろことにほひたりけり」

宜なり【句】尤もなり。當然なり。紀「宜哉乎、ウベナルカナ」

宜も無し【句】わけもなし。道理にもあらず。〔古語〕蜻蛉「うべもなきことにてもありけるかな」

うへ-うへ 上上【名】『うへ（上）⑧を見よ』高貴なる身分の人。うへつがた。狂言（土產鏡）「うへうへは申すに及ばず、我等ごとき者まで」

うべ-うべし 宜宜し【形二】道理なり。さもあるべし。尤もらし。篤實らし。〔古語〕枕「かきなりて咲きたる、うべうべしき所の前栽（センザイ）にはよし」

うべ-うり うべ瓜【名】〔植〕からすうり（烏瓜）を云ふ。〔山城國の方言〕

うへ-おほめ 上大目【名】海を航する和船の舵（カヂ）の一部。

うへ-かは 上革【名】半部（ハジトミ）車・網代（アジロ）車・八葉（ハチエフ）車などの簾の緒の上端に附けて垂らす革帶（カハオビ）。緒と同色なるを普通とす。

うへ-こす 上越す【句】うへ（上）の條下を見よ。

うへさか-はんざゑもん 上阪半左衞門【名】〔人〕劍術家。名は安久。念心流劍術の祖。

うへ-ざふし 上雜仕【名】女御（ニヨウゴ）の入内（ジユダイ）又は五節（ゴセチ）の舞の時に臨時に置かれて、雜役・駈使の役を勤むる下位の女官。枕「うへざふし・わらはべども」

うへ-さま 上樣【代】❶うへ（上）⑥の敬稱。太平記「上樣には、まだ知ろしめされ候はずや」❷うへ（上）⑧に同じ。太平記「一の宮の御前に參りて、合戰の樣は、今はこれまでとおぼえ候。上樣の御事は、たとひ敵の中へ御出で候とも」

うへ-ざま 上樣・上方【名】うへのかた。上部。上方。宇治「上ざまへ蹴上げ」

うへさま-だんご 上樣團子【名】殿樣のめしあがる團子。きのふはけふの物語「織田信長公、時時、けうに團子きこしめす。よく參るとて、京わらべども、上樣團子と申す」

うへさま-びより 上樣日和【名】豐臣秀吉が小田原城を攻めし時、五十餘日の間、晴天うち續きしより、小田原海岸の住民たちの悦びて呼びし稱。

うべ-し 宜し【副】うべ（宜）を强めていふ語。〔古語〕萬葉「山川を淸みさやけみうべし神代ゆ定めけらしも」

うべ-しかも 宜しかも【副】うべ（宜）を强めていふ語。〔古語〕紀「うべしかも蘇我の子らを大きみのつかはすらしき」

うべ-しこそ 宜しこそ【副】うべ（宜）を强めていふ語。〔古語〕萬葉「奈良山の峯なほきらふうべしこそ籬のもとの雪は消えずけれ」

うへ-した 上下【名】❶上と下と。かみしも。❷朝廷と諸民と。政府と民間と。❸主家と召使と。❹物事の顚倒すること。うらうへ。「うへしたになる」

うへ-したくら 上下鞍【名】下鞍（シタグラ）を二枚重ねて用ひたる時の、上の方のもの。うはきつけ。左筆（サヒツ）。

うへ-しま 上島【名】〔地〕播磨國播磨洋にある島。東西四町・南北二町。

うべ-じんじや 宇部神社【名】因幡國岩美（イハミ）郡國府（コフ）村大字宮下に鎭坐せる國幣中社。祭神は武内宿禰と傳ふれど、詳かならず。

うべ-し-も 宜しも【副】うべ（宜）を强めていふ語。貫之集「咲くかぎり散らではてぬる菊の花うべしも千代のよはひ延ぶらん」

うへ-しらず 上不知【名】上位に立てる人を怖れ敬はぬこと。上見ぬ鷲。「見よ。

うへ-しる 上知る【句】うへ（上）の條下を

うへ-しろ 上白【名】一襲（カサネ）の色目の一。表の白きもの。二牛車（ギッシャ）の上葺（ウハブキ）の白きもの。

うへ-すがた 上姿【名】殿上にある時の姿。なほしすがた。〔古語〕

うへ-すぎ 上杉【名】一姓氏の一。本姓は藤原。房前（フササキ）より出づ。鎌倉時代に丹波國上杉莊を領せしより氏とす。足利時代には、尊氏・直義（タダヨシ）の母、この家より出でしより重く用ひられ、關東の足利氏に屬して家老となる。後、八條上杉・扇谷（アフギガヤツ）上杉・託間（タクマ）上杉・山内（ヤマノウチ）上杉・犬懸（イヌカケ）上杉・越後上杉等の數家に分れて相軋（キシ）り、遂に越後上杉家の家老長尾氏に家名を讓り、ついで滅ぶ。二姓氏の一。舊姓長尾。越後上杉家の家老。謙信の時、山内上杉家より家名を讓り受けて、上杉氏と稱す。豐臣秀吉の時、會津に移され、德川氏の初、米澤に移さる。明治維新後、伯爵を授けらる。別に米澤の一部を分領せし一分家あり、男爵を授けらる。

うへすぎ-あきさだ 上杉顯定【名】〔人〕武將。房顯の養子。房定の次子。山内上杉家第七代の主となる。民部少輔・伊豫守と稱し。剃髮後、可淳と號す。しばしば扇谷上杉家の定正と兵を交へ、永正七年長尾爲景を討ちて戰死す。年五十七、一に五十六。

うへすぎ-うぢのり 上杉氏憲【名】〔人〕武將。朝宗の子。後、禪秀傑山と號す。持氏管領の時、執事となり、應永二十三年、足利義嗣に應じて兵を擧げ、鎌倉に入りしが、敗れて自殺し、一族皆殺さる。

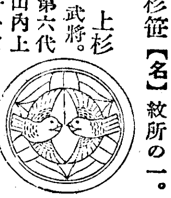
うへすぎ-かげかつ 上杉景勝【名】〔人〕武將。謙信の養嗣子、長尾政景の子。初名は顯景。通稱は嘉平次。謙信の死後、秀吉に仕へ、小田原の役に功あり。後、石田三成に黨して、德川家康に叛き、會津百二十萬石より米澤三十萬石に移さる。大阪の役に殊功あり。元和九年歿す。年六十九。

うへすぎ-けんしん 上杉謙信【名】〔人〕武將。本姓は長尾氏。爲景の第三子。初名は景虎、後、輝虎と改め、薙髮して謙信と號す。能く兵器に通じ、しばしば武田信玄と戰ひ、信玄の死後、信長と會戰を約し、天正六年、期に先ちて越後國春日山（カスガヤマ）城に歿す。年四十九。佛を信じて、終身娶らず。

（うへすぎけんしん）

うへすぎ-ざさ 上杉笹【名】紋所の一。下の圖を見よ。

うへすぎ-さだまさ 上杉定正【名】〔人〕武將。扇谷（アフギガヤツ）上杉家第六代の主。持朝の子。山内上杉家の顯定と相爭ひてしばしば兵を構ふ。明應二年北條早雲と兵を合せて、顯定と戰ひ落馬して歿す。年五十二。



（うへすぎざさ）

うへすぎ-じんじや 上杉神社【名】羽前國米澤市に鎭坐せる別格官幣社。祭神は上杉輝虎・同治憲。

うへすぎ-ぜんしう 上杉禪秀【名】〔人〕うへすぎうぢのり（上杉氏憲）に同じ。

うへすぎ-てるとら 上杉輝虎【名】〔人〕うへすぎけんしん（上杉謙信）に同じ。

うへすぎ-のりかた 上杉憲方【名】〔人〕武將。憲顯の第五子。足利氏滿の執事。薙髮して道合と號し、應永元年歿す。年六十。

うへすぎ-のりざね 上杉憲實【名】〔人〕武將。山内（ヤマノウチ）上杉家第四代の主。房方の子。憲基の養子。鎌倉の管領。持氏の專橫を極諫して忌まれ、諸國を巡遊して、寛正七年、長門國大寧寺に歿す。

うへすぎ-はるのり 上杉治憲【名】〔人〕米澤城主。秋月種美（タネヨシ）の子。吉憲に養はれ、彈正大弼と稱し、鷹山と號す。學を好み、又、殖産に意を用ひて藩の疲弊を救ひ、名君の聞え高し。文政五年歿す。年七十二。

うへすぎ-ようざん 上杉鷹山【名】〔人〕うへすぎはるのり（上杉治憲）に同じ。

うへ-だ 上田【名】高地にある田地。〔古語〕風雅「松かげの水せき入れて住吉の岸の上田に早苗取るなり」

うへだ 上田【名】一〔地〕信濃國小縣（チヒサガタ）郡にある町。千曲（チクマ）川の右岸。鐵道信越線の一驛。蠶業地たり。慶長五年眞田（サナダ）昌幸（マサユキ）の德川秀忠の軍を支へし處。松平（藤井）氏の舊藩地。二うへだじま（上田縞）の略。

うへだ-あきなり 上田秋成【名】〔人〕國學者。大阪の人。後、京都の南禪寺中に住し、鶉廼舍・無腸或は餘齋と號す。博覽・强記にして、文章に長じ、又茶事を好みて、自ら茶器を製し、粟田燒を發明す。文久七年歿す。年七十八。雨月物語等の著あり。

うへ-たう 上たう【名】百姓たちより、その領主の館をさしていふ語。狂言〔雁かりがね〕「罷り出でたる者は、河內の國の御百姓でござる。毎年、うへたうへ、御年貢に初雁をさし上げます」

うへだ-がはら 上田原【名】〔地〕信濃國小縣（チヒサガタ）郡川邊村にある原。天正年中、武田信玄の村上義淸と戰ひし處。

うへだ-かんし 上田感之【名】〔人〕書家。止止齋、又、半九窩（ハンキウクワ）と號す。上田流書法の祖。文政九年歿す。年七十二。

うへだ-じま 上田縞【名】信濃國小縣（チヒサガタ）郡上田地方より織出す縞紬（シマツムギ）。眞綿を手にて抽（ヌ）き出し、これを紡（ツム）ぎて織りたるもの。うへだつむぎ。うへだ。

うへだ-じやう 上田城【名】信濃國上田にありし城。眞田氏の創築にかかる。關ゲ原の役後、眞田信幸・仙石忠政を經て、松平（藤井）氏ここに居り、明治維新に至る。舊稱、尼ゲ淵城・伊勢崎城。

うへだ-すぢ 上田條【名】狆（ンチ）などの毛色の、上田縞に似たるもの。

うへだ-つむぎ 上田紬【名】うへだじま（上田縞）に同じ。

うへだ-びん 上田敏【名】〔人〕英文學者。文學博士。靜岡の人。京都文科大學敎授たり。文藝評論をよくす。大正五年歿す。年四十二。

うへだ-ももき 上田百樹【名】〔人〕國學者。俗稱、鍵屋藤助。京都の人。本居宣長の門人。

うへだ-りう 上田流【名】一馬術の一派。大坪流より出でたる、上田但馬守重秀を祖とす。二書道の一派。うへだかんし（上田感之）を見よ。

うへ-つ-がた 上方【名】官位高き人。うへ「うへ。貴人。貴顯。

うへ-つ-ぼね 上局【名】常の局の他に、天子の御座の近き處にある後宮。女官の宿直（トノヰ）の時に、しばし息（イコ）ふ處。上の御局（ミツボネ）。〔古語〕源氏「かりそめに、几帳などばかりへだてて、うち休むうへつぼねにしたり」

うへ-つ-みち 上道【名】〔地〕東海道。〔古語〕紀「東海、ウヘツミチ」

うへ-とのゐ 上殿居【名】殿上のとのゐ。〔古語〕小大君集「うへとのゐとて、お前近くさぶらふ人人」

うべ-な 宜な【感】うべなるかな。道理なるかな。うめな。〔古語〕

うべな-うべな 宜な宜な【感】前條の語を重ね用ひたるもの。げにげに。〔古語〕記「うべならうべな君まちがたにわがけせるおすひの裾に月たたなむよ」

うへ-なし 上無し【形一】これより上に越すものなし。最上なり。こよなし。新古今「富士のねの烟もなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり」

うべ-なふ 諾ふ【動四他】一『宜（ウベ）なふの義』同意す。うけひく。承知す。うけがふ。うづなふ。うづのふ。うめなふ。〔古語〕二服從す。謝罪す。〔古語〕紀「不レ服、ウベナハヌ」同「謝、ウベナヒニキ」

うべ-なむ 諾む【動四他】前條に同じ。〔古語〕續紀「天地（アメツチ）のうべなみゆるして」

うへの 上野【名】〔地〕一伊賀國阿山（アヤマ）郡にある町。舊津藩主藤堂氏に至り、此に城代を置けり。二東京市下谷區にある公園。地坪十六萬九千百六坪。園內に老樹多く、殊に櫻樹に富む。忍（シノ）ゲ岡。三東

京市を起點として、奥羽・信越・常磐その他に向ふ鐵道驛。上野公園の北側にあり。

うへ-の-おんぞ 上御衣【名】次條の敬稱。うへみぞ。〔古語〕源氏「無紋のうへの御衣、にびいろの御下襲（シタガサネ）」

うへ-の-きぬ 表衣【名】はう（袍）に同じ。〔古語〕和名「袍、宇倍乃岐沼」

うへ-の-こうゑん 上野公園【名】〔地〕うへの（上野）㈡に同じ。

うへ-の-じやう 上野城【名】伊賀國上野にありし城。天正中、北畠氏の臣瀧川雄利の創築。文祿中、筒井定次この地に封ぜられて修築し、慶長十三年以來、藤堂家の領有に歸す。今は公園地。

うへの-せんさう 上野戰爭【名】東京上野公園地に起りし戰。明治元年四月、將軍慶喜の恭順を悅ばざる輩、輪王寺宮を奉じて、彰義（シヤウギ）隊と稱し、官軍と戰ひしき。

うへ-の-はうぐわん 上の判官【句】はうぐわん（判官）の條下を見よ。

うへ-の-はかま 表袴【名】束帶（ソクタイ）の時、大口の袴の上に重ねて穿（ハ）く袴。口狹くして、襞（ヒダ）あり。色は表白・裏紅。四時共に著用す。紋は三位以上と四位以下とにて相異あり。前者は、窠（クワ）に霰（アラレ）を平常に堅文（カタモン）、晴には浮文（ウキモン）にし、老年は藤の丸を用ひ、後者は、表は白の平絹・裏は紅の平絹。

うへのはら 上野原【名】〔地〕甲斐國北都留（キタツル）郡にある町。武藏の國境に臨む。甲州街道の要路。鐵道中央線の一驛。

うへ-の-みつぼね 上の御局【句】うへ（上）の條下を見よ。

うへ-の-めしつかひ 上の召使【句】うへ（上）の條下を見よ。

うへ-の-をのこ 上の男【句】をのこ（男子）の條下を見よ。

うへ-はらまき 上腹卷【名】腹卷を直垂（ヒタタレ）・狩衣（カリギヌ）の上に著したる裝。

うへ-びと 上人【名】でんじやうびと（殿上人）に同じ。〔古語〕源氏「あるうへびと、來あひて」

うへ-ふか-ぬ-みかど 上不葺御門【句】みかど（御門）の條下を見よ。

うへ-ぶし 上臥【名】殿中に宿直すること。うはぶし。〔古語〕平家「法住寺殿にうへぶしして」

うべ-まつり 宇倍祭【名】因幡國の宇倍神社の祭禮。今は四月二十一日に行はれ、古は春・秋二季に行はれたり。

うへ-みぞ 上御衣【名】はう（袍）の敬稱。うへのおんぞ。〔古語〕空穗「布の太きをうへみぞに染めて」

うへ-みだい 上御臺【名】寡婦となりし御臺所。

うへ-みやづかへ 上宮仕【名】禁中に仕ふること。〔古語〕源氏「はじめより、おしなべての上宮仕したまふべききはにはあらざりき」

うへむら-きちや 上村吉彌【名】〔人〕京都の俳優。女形の名人。延寶頃、江戸に下る。女の帶の吉彌結は、この人より始まる。

う-へん 羽片【名】〔植〕羽狀複葉に於ける第一回の羽狀に割れたる各片。

う-べんくわん 右辨官【名】右大辨・右中辨・右少辨の總稱。（左辨官に對して）

うべんくわん-きよく 右辨官局【名】古、右辨官の事務を執りし役所。右大臣、これを掌れり。

うべ-も 宜も【副】尤もにも。げにも。萬葉「みな人の戀ふるみ吉野けふ見ればうべも戀ひけり山川きよみ」

うへ-や 上屋【名】禁中の御座所近き處にある、女官の詰所ならん。うへつぼね。〔古語〕枕「更に見はべらじとて、ゆゆしさに、うへやに隱れ臥しぬ」

うへ-やな 筌【名】うへ（筌）に同じ。

うへやま-じやう 上山城【名】『もと上山氏の居城たりしよりいふ』つるまるじやう（鶴丸城）に同じ。

うへ-わらは 上童【名】宮中又は貴族の家に召使はるる童男又は童女。〔古語〕源氏「ことごとしき御使にもあらず、例たてまつれたまふうへわらはなり」

う-ほ 禹歩【名】へんばい（反閉）に同じ。下學集「反閉、天子出御之時、陰陽家所ㇾ行也、又謂㆓之禹歩㆒也」

う-ぼく 烏木【名】〔植〕『うぶんぼく（烏文木）を見よ』こくたん（黑檀）に同じ。

う-ぼくや 右僕射【名】うだいじん（右大臣）の唐名。（左僕射に對して）

うぼ-ぜ【名】〔動〕次條の略。

うぼぜ-だひ うぼせ鯛【名】〔動〕いぼだひ（疣鯛）に同じ。

うぽっぽ【貌】うからかと遊びまはるさま。うはのそら。うっぽっぽ。おぽっぽ。〔俚語〕浮世風呂「うぽっぽで遊んであるく者」

うほり-ぐるひ うほり狂【名】佯（イツハ）りて狂氣めくこと。僞狂。佯狂。

うぼん-さい 盂盆齋【名】盂蘭盆（ウラボン）に、僧尼に供養（クヤウ）すること。事物起源「今世七月十五日、營㆓僧尼供㆒謂㆓之盂盆齋㆒」

うま 馬【名】㈠〔動〕奇蹄類に屬する獸。家畜として貴ばれ、力つよく、足はやく、人を載せ、物を負ひ、又は車を牽く。顏は長くして、齒は上下おのおの六板あり、齒の數にて、その老少をはかる。頭部に鬣（タテガミ）あり。元來五趾なれども、中央の一趾のみ發育して、底に凹みある圓き單蹄をなす。尾の長さは、大抵、身の高さに同じ。毛の色に種種ありて、その名稱もまた多し。㈡もくば（木馬）に同じ。㈢ふみだい（踏臺）に同じ。㈣「馬を繫ぐ」を見よ。㈤竈の中に置きて、薪の枕とする鐵具。薪架。㈥雙六（スゴロク）の賽の一種。枕「うまおりぬ雙六」（この枕草子の文、もと「め（目）おりぬ」とありし「め」に「馬」の字を充てしを、「うま」と誤讀せしものならんともいふ）㈦けいま（桂馬）に同じ。㈧女郎屋にて、揚代の勘定不足なる客に附きて、客の家まで、その代金をとりに行く人。〔東京の遊廓の語〕

馬が合ふ【句】意氣投合す。うまあひ（馬合）參照。〔京都・大阪附近の語〕壽門松「何ぼう分限者・金持でも、町人とは馬が合ふまい」

馬、肥ゆ【句】「秋高く馬肥ゆ」を見よ。

馬、角を生ず【句】『支那の戰國時代に、燕の太子丹、秦に質（チ）たりしに、その待遇禮無かりしより歸國せんことを求めし時、秦王、烏の頭白く馬角を生ずるを待ちて放ち歸すべしと答へたりといふ故事に本づく。その時、太子天を仰いで哭せしに感じて、烏の頭白く馬角生ずるを得て、歸國の望を遂せりと傳ふ』有りうべからざる物事の譬。

馬、躓（ツマヅ）く【句】わが乘馬のつまづくは、人に戀ひらるるしるしなりといふ意。〔諺語〕〔古語〕萬葉「しばつ山うちこえゆけばわが乘れる馬ぞつまづく家戀ふらしも」

馬に乘りて馬を探る【句】一旦よき地位を得、その地位を利用して、更にそれよりもよき地位を求む。〔諺語〕

馬に乘るまで牛に乘る【句】よき地位又はよき物事を得るまでは、現在のままにて居る。「馬を牛に乘換ふ」參照。〔諺語〕

馬には乘って見よ、人には添うて見よ【句】物事は、みづから經驗せざれば、會得（エトク）しがたきにより、すべて經驗して後に判斷せよ。〔諺語〕

馬の頭（アタマ）、牛の頭（アタマ）【句】別別の事を同じことのやうに考ふる意。〔俚語〕

馬のいくさ【句】きへい（騎兵）に同じ。〔古語〕紀「騎卒、ウマノイクサ」

馬の籠ぬけ【句】窮屈にして處置に困る譬。〔諺語〕

馬のきほね【句】馬の下腭（カガク）なりといふ。〔古語〕和名「食槽、馬乃岐保禰」類名「食槽、ウマノキホネ」

馬の口【句】次條に同じ。〔古語〕紀「轡、ウマノクチ」

馬の口輪（クチワ）【句】くつわ。くつばみ。字鏡「銜、馬乃口和」

馬の沓【句】㈠馬にはかしむる藁沓（ワラグツ）。㈡馬上にて穿（ハ）く沓。

馬の鞍【句】うまくら（馬鞍）に同じ。〔古語〕字鏡「鞍、馬之久良」

馬の毛（ケ）【句】馬の尾の毛。

馬の小便【句】㈠惡しき茶を罵りていふ語。〔俚語〕㈡びいる（麥酒）を罵りていふ語。〔俚語〕

馬の背を分ける【句】雨の、ここは降りたれども、かしこは降らぬさまの譬。諺「夏の雨は、馬の背を分ける」

馬の大夫【句】左右馬寮(メレウ)の允(ジヨウ)の、五位に敍せられたるもの。〔古語〕

馬の血合(チアヒ)【句】次條に同じ。〔四國の方言〕

馬の血取(チトリ)【句】馬の惡血を去るために、馬を集めて、伯勞(バクラウ)が針を刺すわざ。農家にては、多く田植の終りたる頃に行ふ。うまさし。馬の血合。うまばり(馬鍼)參照。

馬の角遣(ヤ)らう【句】『馬には角なきに、そを與へんといふは、畢竟與へざる意』人に物を與へざる意。〔俚語〕

馬の爪【句】㊀馬の脚に生ひたる爪。萬葉「うまのつめいつくすきはみふなのへのいはつるまでに」㊁ばづめ(馬爪)に同じ。

馬の涙の旋毛(ツムジ)【句】てきるゐ(滴涙)に同じ。

馬の鼻向(ハナムケ)【句】はなむけ(鼻向)を見よ。伊勢「馬のはなむけせんとて」

馬の鼻を立てなほす【句】馬の首を、わが行かんとする方へ向けなほす。出世景淸「御馬の鼻を立てなほし、都にかへらせたまひける」

馬の骨【句】素性のわからぬ人を罵りていふ語。〔俚語〕「どこのうまのほねか分らぬ」

馬の耳【句】次條の略。

馬の耳に風【句】いくら說諭してもとりあはぬ譬。ばじとうふう。うまのみみ。〔諺語〕

馬の耳に念佛【句】いくら說諭しても悟らぬ譬。牛に經文。〔諺語〕

馬の六具【句】馬具の六種、即ち馬面(バメン)・胸懸(ムナカケ)・馬鎧(ウマヨロヒ)・鎖手綱(クサリタヅナ)・鎖脚絆(クサリキヤハン)・鐵沓(カナグツ)。

馬は馬づれ【句】同類相伴なふをよしとする譬。〔諺語〕心中萬年草「馬は馬づれ、牛は牛づれ」

馬百石【句】馬一匹を飼ふ費用は、百石の祿高に相當す。〔諺語〕

馬を牛に乘換ふ【句】よきものを捨てて、惡しきものを取る譬。〔諺語〕

馬を鹿【句】「鹿をさして馬といふ」に同じ。

馬を繫ぐ【句】時めく人の氣にたがはざるやうにす。〔德川時代の遊廓の語〕色道大鑑「うまつなぐ。時めく人には、誰れも崇敬して輕薄し、家門に馬をつなぎ、伺侯する貌なり。その人にさはらざるやうに、心にしたがふを云ふ…馬(マウ)とばかりもいふ」

馬を引く【句】女郎屋にて、勘定の不足なるため、その女郎屋より附添はせたる人と共に、歸り來る。〔俚語〕うま(馬)㊇參照。

あをき馬【句】あをうま(青馬)に同じ。〔古語〕紀「白馬、アヲキウマ」字鏡「驄、青色。阿乎支馬」

いたけなる馬【句】高さ四尺二寸までの馬。

移(シウツ)の馬【句】うつしうま(移馬)に同じ。〔古語〕

千里の馬【句】千里の道をも走り得るほどの健脚の馬。千里の駒。

龍(タツ)の馬【句】りゆうめ(龍馬)に同じ。〔古語〕夫木「山高み石踏む道のはるけさにたつのうまをも今得てしがな」

うま 午【名】㊀十二支の一。えと(兄弟)を見よ。㊁南方にあたる方角。㊂年・月・日・時刻の名目の一。時刻のは、今の晝の十二時にあたる。正午。

午の貝【句】午の刻にふき鳴して時刻を知らする貝。千載「今日もまた午の貝こそ吹きつなれ未(ヒツジ)のあゆみ近づきぬらん」

うま 今【名】いま(今)に同じ。〔古語〕六帖「東路の里の遠くもあらなくにうまやらまやと君を待つかな」

うま 右馬【名】右馬寮(ウマレウ)の官人。

うま 甘【名】食物。うまうま。〔小供の語〕

うま 宇摩【名】〔地〕伊豫國十二郡の一。郡役所を三島町に置く。

うま 甘【貌】甘きさま。狂言(宗論)「あらうまや。」

うま 馬【接頭】動植物などの同じ種類中にて形の大なる意。「うま芹」「うま蘊」

うま 甘・美・熟【接頭】㊀物の味の口に適し、又は物事の巧なる意。紀「宇磨酒、ウマザケ」㊁貴く勝れたる意。〔古語〕「うま人」

うま-あきんど 馬商人【名】ばくらう(伯樂)に同じ。

うま-あげ 馬上・獻馬【名】走馬を獻ずること。あげうま。增鏡「兩社にて、うまあげせられけり。神も、いかに名殘多く見たまひけん」

うま-あしがる 馬足輕【名】敵を牽制(ケンセイ)するために、これを襲擊(シフゲキ)せん擬勢を示して放つ、二三十騎の兵。

うま-あそび 馬遊【名】馬に乘る眞似(ネマ)をする遊戲。うまごと。

うま-あづかり 馬預【名】德川時代に、六所の官馬の調習及び馬具一切の修繕を掌りし役。初め桑島氏これを勤め、後、諏訪部(スハベ)・曲木(マガキ)二氏の世職となり、神田橋久保町の御廐內に住し、職祿三百俵・役料十五人口を給せられたり。おうまあづかり。おめしうまあづかり(御召馬預)參照。

うま-あひ 馬合【名】意氣の投ぜる同志。仲のよき同志。「馬が合ふ」參照。〔畿內の語〕

うま-あぶ 馬虻【名】〔動〕うまばへ(馬蠅)に同じ。

うまあらひ-うつぎ 馬洗空木【名】〔植〕どくうつぎ(毒空木)に同じ。

うま-い 熟寐【名】快く寐入ること。うまいね。熟睡。〔古語〕萬葉「しろたへのたもとゆたけく人のぬるうまいはねずやこひわたりなむ」

うま-いかだ 馬筏【名】多くの馬を繫ぎ並べて、筏の如くにして、河を渡るもの。一頭づつにては水に押流さるる恐れあればなり。宇治「馬筏をつくりて泳がせけるに」

うま-いくさ 馬軍・騎【名】騎馬の兵士。騎兵。〔古語〕紀「騎、ウマイクサ」㊁騎兵の戰鬪。騎戰。

うま-いし 馬醫師【名】㊀馬の疾病を治する醫師。うまくすし。うまいしや。馬醫。獸醫。㊁左右馬寮(メレウ)に屬し、左馬允(サマノジヨウ)・右馬允(ウマノジヨウ)の下にありて、馬の疾病の治療に從事せし職。古事談「忠延、馬醫師になされけり」

うま-いしや 馬醫者【名】前條㊀に同じ。

うま-いね 熟寐【名】うまい(熟寐)に同じ。

〔古語〕

うま-いひ 美飯【名】よき米の飯。〔古語〕萬葉「うまいひを水にかみなしわが待ちしかはりはぞなきただにしあらねば」

うまいもの-くひ 旨物食【名】美食を好むこと、又その人。〔俚語〕

うま-いり 馬入【名】主將の、城中に入ること。

うま-いれ 馬入【名】騎兵にて、敵陣を駈(カケ)崩すこと。

うま-う 羽毛【名】㊀鳥類の羽と毛と。「羽毛美麗なり」㊁鳥類の羽。

うま-うち 馬打【名】『うつ(打)㊈を見よ』馬に乘り行くこと。

うま-うど 馬獨活【名】〔植〕いぬうど(犬獨活)を云ふ。〔東京の語〕

うま-うま 甘甘【名】うま(甘)に同じ。〔小供の語〕

うま-うま 甘甘【貌】手際よく又首尾よく爲果(シオホ)するさま。たくみ。まんま。生玉心中「うまうまと、よく喰はせたなあ」

うま-おひ 馬追【名】㊀牧場にて、野馬を驅り、埒內(ラチウチ)に追入れて、これを捕ふること、又その人。㊁わが馬に客又は荷物をのせて追ひゆくこと、又その人。うまかた。うまひき。まご。馬夫。丹波與作「とっさまが有るほどなれば、うまおひは致さねども」㊂〔動〕うまおひむし(馬追蟲)の略。

うまおひ-ごゑ 馬追聲【名】馬を追ふ時のかけごゑ。丹波與作「しいといふうまおひごゑも」

うまおひ-むし 馬追蟲【名】〔動〕直翅(チヨクシ)類に屬する昆蟲。形、螽蟖(キリギリス)に似、綠色。小形にして、鳴く聲奇にして「しいしい」と馬を追ふに似たり。夏季、燈火を慕ひて、人家にいり來る。うまおひ。すいっちよ。つむ。

うま-おり 馬下【名】昔。そのかみ。〔俚語〕俚言集覽「うまおり。在所より出でて、馬をおりたる時といふこと、昔時をいふなり」

うま-かけ 馬駈【名】けいば(競馬)に同じ。

うま-かし 馬貸・馬借【名】ばしやく(馬借)に同じ。

うま-かず 馬數【名】乘馬したる度數。〔馬術上の語〕

うまかた 馬形【名】㊀馬の形の繪。〔古語〕㊁木又は紙などにて、馬の形に作り、神馬の代りに用ふるもの。つくりうま。

うまかた 馬方【名】㊀うまおひ(馬追)㊁に同じ。㊁徳川時代に、將軍の乘馬を調習する事を掌りし役。若年寄の所管たり。おうまかた。

馬方・船頭・御乳(オチ)の人【句】『馬方は、驛舍(エキシヤ)の馬子にて、荷物を質にとりてある故、途中にて强請し、船頭も、旅途の渡し場の船頭にて、荷物を質に取りてある故、中流にて强請し、御乳の人は、乳兒を質にとりて、我がままをするよりいふ』世に制御すべからざる者の稱。馬方・獵師。〔徳川時代の諺語〕丹波興作「馬方・船頭・御乳の人、こちもそちらと同じこと」倭訓栞「世に制すべからざるものを、馬夫・船頭・乳母といへり」

馬方・獵師【句】前條に同じ。

うまがたけ 馬嶽【名】〔地〕豐前國京都(ミヤコ)郡稗田(ヒエダ)村の南にある山。

うまがたけじやう 馬嶽城【名】豐前國の馬ゲ嶽に在りし城。天慶五年源經基の築きしもの。應永年間、新田義基征西將軍に從ひて當國に下りしより後、三代の居城となり、後、大内・大友・龍造寺・黑田等の諸氏を經て、慶長五年細川忠興の有に歸し、元和元年廢す。

うまがたのしやうじ 馬形障子【名】古、淸涼殿の渡殿(ワタドノ)の北の方に立てられし衝立(ツイタテ)にて、馬の繪をゑがきたるもの。はね馬の障子。

うまかたぶし 馬方節【名】馬方の馬を牽きながらうたふ歌の節、又その歌。

うまがつぱ 馬合羽【名】馬に著する合羽。俳諧古選(令德)「馬合羽雪うち拂ふ袖もなし」

うまかはう 馬買【名】『かはうは「買はん」の音便』ばくらう(伯樂)に同じ。七一職人歌合「うまかはう」

うまかひ 馬飼・馬甘【名】馬を飼養すること、又その人。むまかひ。紀「典馬、此云二于麻柯毗一」

うまかひ 馬貝【名】石決明(アハビ)などの貝の孔に長き紐を通じ、その紐を、胸の邊にて兩手に持ちながら、貝を足にはきて步むことなるべし。

うまかひば 馬飼場【名】馬を畜ひ養ふ處。牧馬場。

うまかひべ 馬飼部【名】馬を飼牧するを職とする部屬。〔古語〕

うまがほ 馬顔【名】人の顔面の長大なるを嘲りていふ稱。うまづら。一代女「馬がほにして、横にひろがりし面かげ」

うまがる 甘がる【動四他】甘しと思ふ。

うまき 馬城【名】まき(牧)に同じ。〔古語〕後拾遺「年頃しりはべりけるうまきの、うれへあることありて」

うまき 鵜巻【名】谷川にて、鵜を集め、魚を取巻きて、汀(ミギハ)に追寄すること。

うまきたし 鱧腸【名】〔植〕たかさぶらう(鱧腸)に同じ。

うまぎぬ 馬衣【名】布にて仕立て、馬に被らするもの。色は多くは紺・萌黄などにて、その馬の飼主の定紋(ヂヤウモン)を染めぬく。

うまきり 馬切【名】織田三七郎信孝(ノブタカ)が、大和橋にて馬士を斬りて、三千兩を强奪する事を脚色せる芝居の狂言。

うまぐ 馬具【名】ばぐ(馬具)に同じ。〔古語〕空穗「鍛冶二十人ばかり居て、よろづの物、うまぐ・をりびつなど造る」

うまくさ 馬草【名】まぐさ(秣)に同じ。〔古語〕字鏡「秣、宇末久佐」

うまくさ 甘臭【貌】うまくさき感じ。狂言(こんくわい)「うまくさや、うまくさや、一口喰はうか」

うまくさし 甘臭し【形一】うまさうなる香あり。

うまぐし 馬櫛・馬梳【名】㊀馬の毛をすきて垢(アカ)を去るに用ふるあらぐし。あかとり。うまはたけ。㊁前記の馬櫛の形をゑがきて、旗などのしるしとせるもの。

うまぐすし 馬醫【名】うまいしや(馬醫者)に同じ。〔古語〕

うまくち 甘口【名】㊀あまくち(甘口)に同じ。㊁利益ある事柄。

うまぐつ 馬沓【名】かなぐつ(金沓)に同じ。

うまぐは 馬鍬・馬杷【名】まぐは(馬鍬)に同じ。和名「馬杷、宇麻久波、作」田具也。鏂楱、和名同上、鐵齒杷名也」

うまぐひ 馬杭・馬杙【名】馬を繫ぎ留むるための杭。

うまくら 馬鞍【名】馬におく鞍。くら。うまのくら。〔古語〕

うまぐるま 馬車【名】馬の挽(ヒ)く車。(牛車に對して)

うまげた 馬下駄【名】こまげた(駒下駄)に同じ。〔徳川時代の語〕西鶴大矢數「三尾の谷が聲めて通すや雪の笠(寸松)、あっぱれ大將のうまげたの霜(西鶴)」

うまけぶり 馬烟・馬煙【名】馬の走り過ぐるために、道に起る塵ぼこり。うまけむり。馬塵。

うまけむり 馬烟・馬煙【名】前條に同じ。

うまけんじやう 馬獻上【名】江戸時代に、八月朔日に、幕府より朝廷に馬を獻ぜし儀式。馬は關東の牧場より選べり。

うまご 馬子【名】まご(馬子)に同じ。狂言(見物左衞門)「うまごだち」

うまご 孫【名】まご(孫)に同じ。〔古語〕靈異記「孫、ウマゴ」

うまごあつかひ 孫扱【名】わが孫の如くにあしらふこと。〔古語〕源氏「夏の御方は、かくとりどりなる御うまごあつかひを羨みて」

うまごころ 甘心【名】まごころ。眞意。實意。〔古語〕發心集「うま心に使はるれば」

うまごと 馬事【名】うまあそび(馬遊)に同じ。

うまごやし 苜蓿・連枝草【名】〔植〕『馬肥しの義』荳(マメ)科に屬する二年生の草。多くは原野に自生す。葉は莖に互生し、形、萩に似て小く、鋸齒あり。春の末、葉の間に三つ・四つ・五つづつ、黃なる小蝶花を開く。牧草又は肥料に供せらる。おほひ。おほひのみ。まごやし。かたばみ。みつば。

うまごり 美織【名】うるはしき織物。〔古語〕

うまごりの 美織の【枕】うるはしき織物なる綾といふ義より、あやにかけていふ。萬葉「うまごりのあやにともしきなるかみのおとのみ聞きし」

うまさかのみや 厩坂宮【名】舒明天皇の一時皇居としたまひし宮。今の大和國高市郡にありしものなれど、何村の地なるか明かならず。

うまさく 青葙【名】〔植〕のげいとう(野鶏頭)に同じ。

うまざくり 馬ざくり【名】馬の蹄(ヒヅメ)にて踏窪めたること、又その痕跡、又その時はねかかる泥水。〔古語〕夫木「數ならぬ身に知られたるうまざくりさのみや同じあとをふむらん」俳諧新選(菜根)「馬ざくりかかるもすそやおぼろ月」

うまざけ 旨酒・味酒【名】あぢざけ(味酒)に同じ。〔古語〕

うまざけ 旨酒・味酒【枕】㊀次條に同じ。萬葉「うまざけみわのとのとのあさとにもいでてゆかなみわのとのどを」㊁よき酒を産する地名につづけていふ。紀「旨酒餌香(エガ)市」儀式帳「味酒鈴鹿國と白(マヲ)しき」

うまざけを 旨酒を【枕】酒は釀(カ)みて造るものなるより、かみ(神)又はその略なる、みにかけていふ。萬葉「うまざけをかみなびやまのおびにせる」同「うまざけを三輪のはふりがいはふ杉手ふれし罪か君にあひがたき」同「うまざけを三諸の山にたつ月のみがほし君が馬のあとぞする」

うまさし 馬差【名】宿驛にて、問屋より言ひつかりて、それぞれ人馬に役をあてくばる役人。問屋・馬借(バシヤク)・馬子(マゴ)の間に立ちて、傳馬の指圖をす。傳吏。

うまさし 馬刺【名】「馬の血取」を云ふ。〔奥州の方言〕

うまさはふ 味澤相【枕】あぢさはふ(味澤相)に同じ。萬葉「うまさはふめごともたえぬ」

うまさへ 馬副【名】うまぞひ(馬副)㊀に同じ。〔古語〕枕「馬さへの程ぞなどいへば」

うまし 旨し・甘し【形二】㊀味、口に適ひてよし。むまし。催馬樂(大芹)「おほぜりは國のさたもの小ぜりこそゆでてもうまし」㊁よし。快し。巧みなり。「美し」㊂心ゆるし。あまりに寬大なり。あまし。御伽名代紙衣「親父のうまさには、息子が餡にして」㊃時機よし。運よし。好都合なり。「うまいしあはせ」

うましあしかびひこぢのかみ 可美葦

芽彦舅神【名】天地渾沌（コントン）の時、あしかびの萌ゆるが如く生れませる神。

うまし-くに 美國・可怜國【名】國をほめていふ語。よき國。〔古語〕紀「可怜國、ウマシクニ」

うま-しま 馬島【名】〔地〕周防國の東南方にある島。周回、一里廿五町。熊毛（クマゲ）郡麻里府（マリフ）村に屬す。

うま-しばゐ 馬芝居【名】馬に種種の戯を演ぜしむる見世物。猿芝居・犬芝居の類。

うましまぢ-の-みこと 宇摩志摩遲命・宇摩志摩治命【名】〔人〕次條に同じ。

うましまで-の-みこと 可美眞手命【名】〔人〕饒速日（ニギハヤヒ）命の子。神武天皇の東征に從ひて功あり。うましまみのみこと。うましまぢのみこと。

うましまみ-の-みこと 味間見命【名】〔人〕前條に同じ。

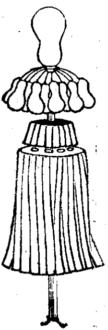
うまし-みち 美道【名】よき道路。良道。〔古語〕

うまし-もの 甘物【名】味のすぐれたる物。〔古語〕萬葉「うましものいづくあかぬをさかとらが角のふくれにしぐひあひにけむ」

うまじ-もの 馬自物【枕】馬のごとくにの義より、なはとりつけて（縄取附けて）・たちてつまづき（立ちて躓き）にかけていふ。萬葉「うまじもの繩とりつけてししじもの弓矢かこみて」同「うまじもの立てつまづきせむすべのたづきをしらに」

うま-しやうぞく 馬裝束【名】馬に著せたる装束。

うま-じるし 馬標・馬驗・馬印・馬章【名】古、軍中にて、將帥（シヤウスヰ）の傍に建置き、その所在の目標とせしもの。豐臣氏の千生瓢簞（センナリベウタン）・德川氏の五本骨の金扇（キンセン）の類。天正の頃より始まる。


（うまじるし）

うまじるし-もち 馬標持【名】武家時代に、旗奉行に屬し、馬標を持ちて、主將に隨ひし役。名稱は德川時代より定まれり。

うま-ず 不生【名】㊀子を生まぬこと。㊁うまずめ（不生女）の略。

うま-すげ 馬菅【名】〔植〕莎草（カヤツリグサ）科に屬する多年生の草。高さ尺に達し、葉は狭小。雌雄同株にて、花は穂狀花序をなして咲く。水邊に自生す。

うまず-め 不生女【名】子を生まぬ女。うまずをんな。うまず。石女。風雪「うまずめの雛かしづくぞあはれなる」

うまず-をんな 不生女【名】前條に同じ。根南志具佐「うまず女に、燈心をあてがひ」

うま-せ 馬塞【名】馬を逐入れておくための垣。うまふせぎ。〔古語〕萬葉「うませごし麥はむ駒のはつはつにひ肌觸れし子ろし悲しも」

うま-ぜみ 馬蟬【名】〔動〕くまぜみ（熊蟬）に同じ。

うま-ぜり 馬芹【名】〔植〕たうき（當歸）に同じ。

うま-ぞひ 馬副【名】㊀馬に乘りたる人に附添ふ人。うまぞへ。うまさへ。枕「うまぞひ・隨身・ことねりわらは」㊁室町時代に、將軍の乘馬に附添ひて供せし役人。

うまぞひ-わらは 馬副童【名】馬副の役をつとむる童。〔古語〕源氏「うまぞひわらはのほど、みな作りあはせて」

うま-ぞへ 馬副【名】うまぞひ（馬副）㊀に同じ。著聞「馬ぞへ、ひきまろばかされて、馬をすててけり」

うま-ぞり 馬橇【名】乘合馬車の臺の如きものを橇に取附け、これを馬に曳（ヒ）かしむるもの。雪國の一部に行はる。

うま-だし 馬出【名】㊀馬場の、馬を乘出す處。ばばもと。（馬駐に對して）うまはしり（馬走）參照。〔古語〕空穂「馬だしより馬とどめまで」㊁城門の前に築きたる土手。人馬の出入を敵の眼より遮（サヘギ）るためのもの。

うま-たて 馬立【名】馬を繫ぎおく處。うまつなぎ。うまつなぎば。うまとめ。

うま-たで 馬蓼【名】〔植〕たでの一種。普通のより長大なるもの。莖はまだらにて、葉に黑き斑點あり。

うま-だて 馬楯【名】馬上にて執る楯。

うま-たはけ 馬婚・馬姦【名】人の、馬と姦淫すること。〔古語〕記「馬たはけ・牛たはけ・雞たはけ・犬たはけ」

うまたま-の うま玉の【枕】うばたまの（烏羽玉の）に同じ。夫木「うまたまの夜わたる月のすむ里はげに久方のあまの橋立」

うま-だまり 馬溜【名】城外の橋際に設けたる空地。

うま-たらう 馬太郎【名】ばか（馬鹿）㊀に同じ。〔德川時代の俚語〕春花五大力「こちの國の名物を知らぬとは、わいらも、きついうまたらうぢやな」

うま-だらひ 馬盥【名】ばだらひ（馬盥）に同じ。

うま-づかさ 馬司【名】攝政・關白家に仕へて、その家司（ケイシ）の下に屬し、廐馬（バキウ）の事を掌りし役。うまやのつかさ。〔古語〕新六「見わたせばみな青鷺のけつるめを引きつづけたる馬づかさかな」

うまづかさ-の-もん 馬司門・馬寮門【名】だっていもん（談天門）の異稱。

うま-づかひ 馬使【名】馬を飼養して使ふ人。

うま-づき 馬附【名】乘馬の口とり。べつたう。うまとり。馬奴。馬丁。

うま-つぎ 馬繼【名】馬にて旅行するとき、馬を乘りかふるところ。うまや。驛。丹波與作「泊（トマリ）・泊は多くとも、十萬億土うまつぎなしの」

うま-つつじ 馬躑躅【名】〔植〕れんげつつじ（蓮華躑躅）に同じ。

うま-つなぎ 馬繫【名】㊀うまたて（馬立）に同じ。㊁〔植〕こまつなぎ（駒繫）に同じ。㊂〔植〕のがりや（荷草）に同じ。

うまつなぎ-ば 馬繫場【名】うまたて（馬立）に同じ。

うま-つはもの 馬兵【名】きへい（騎兵）に同じ。〔古語〕紀「精騎、ウマツハモノ」

うま-つぶて 馬礫【名】馬を礫の如くに投げとばすこと。人礫の類。

うま-づら 馬面【名】うまがほ（馬顔）に同じ。

う-まつり 鵜祭【名】能登國羽咋（ハクヒ）郡なる氣多（ケタ）神社の祭禮。二月初午の日と十一月中巳（ナカノミ）の日とに行はる。當日、鵜を神前にささげて、後これを放つに、その鵜、必ず越後國西頸城（ニシクビキ）郡能生（ノフ）町なる能生神社に至ると言傳ふ。

うま-とどめ 馬止・馬駐【名】㊀馬場の行きどまりの處。ばばすゑ。（馬出に對して）うまはしり（馬走）參照。〔古語〕空穂「馬だしより馬とどめまで」㊁馬を下りて、その馬をとめおく場所。こまとどめ。謡曲（熊野）「はや、程もなく、これぞこの車やどり・うまとどめ、ここより、花ぐるま、おりゐの衣、はりまがた」

うま-どねり 馬舍人【名】馬の口とり。うまやのとねり。とねり（舍人）㊁參照。今昔「右近少將しのびて竊かに出でつつ、鎭西へ下りけり。わづかに隨身一人・小舍人（コドネリ）一人・童一人・うまどねりばかりにて、行きつく所をとまりとして」

うま-とび 馬跳・馬飛【名】一人は、體を屈して立ち、他の一人は股（マタ）を擴（ヒロ）げて、立てる人の背に手を輕く突きながら後方より或は側面より飛びこゆる遊戲。かはづとび。かへるとび。

うま-とめ 馬留【名】馬を繫ぐ木。こまとめ。うまたて。

うま-とり 馬取【名】うまつき（馬附）に同じ。丹波與作「與作が草履とり、うまとりの切米」

うま-に 馬荷【名】馬に負はする荷物。萬葉「重きうまにに上荷（ウハニ）打つといふことのごと」

うま-に 旨煮・甘煮【名】魚介の肉と蔬菜とを、味醂（ミリン）・醬油・鰹節・砂糖などにて、濃く甘く煮しめたる食品。

うま-ぬすびと 馬盜人【名】㊀馬を盜む者。太平記「馬ぬすびとと覺ゆるぞ。ただ射殺せ」㊁〔動〕あかめだひ（赤目鯛）を云ふ。〔東京の語〕㊂〔動〕あかう（赤魚）に同じ。

うま-ねぶり 馬睡【名】馬に乘りたるままにて眠ること。平治「日ねもすの軍に疲れたまひければ、うまねぶりをし、野路の邊よりうちおくれたまへり」

うま-の-あし 馬脚【名】㊀芝居の狂言にて、馬に擬（ギ）したる物を出す時、その前後四肢の役をつとむる二人の者。うまかたぶぎやう。うまやく。㊁下等なる俳優を嘲りていふ語。

うま-の-あしがた 毛茛【名】〔植〕きんぽうげ（毛茛）に同じ。

うまのあしがた-くわ 毛茛科【名】〔植〕きんぽうげくわ（毛茛科）に同じ。

うま-の-あと-あし-むかふ 馬跡足向 【名】 芝居の花道の稱。〔俚語〕

うま-の-いくさ 馬のいくさ 【句】 うま(馬)「の條下を見よ。

うま-の-かしら 午頭 【名】 和船の艫(モト)の一部にて、船頭の居る處。

うまのかしら-だつ 午頭立 【名】 和船の艫歩(トモアユミ)の端にある臺。左右に佛神を安置す。荷船にては、二本だつといふ。

うま-の-かひ 午の貝 【句】 うま(午)の條下を見よ。

うま-の-かみ 右馬頭 【名】 右馬寮の長官。下僚に右馬助(ウマノスケ)・右馬允(ウマノジヨウ)・右馬屬(ウマノサクワン)などあり。

うま-の-かみはさみ 馬髪鋏 【名】 馬の毛を切るに用ふるはさみ。 字鏡「鋏、馬乃加美波佐美」

うま-の-きぼね 馬の牙骨 【句】 うま(馬)の「條下を見よ。

うま-の-くそ 馬糞 【名】 そくはつ(束髪)を嘲りていふ語。〔俚語〕

うま-の-くち 馬の口 【句】 うま(馬)の條下を見よ。

うま-の-くちわ 馬の口輪 【句】 うま(馬)の「條下を見よ。

うま-の-くぼがひ 馬陰貝 【名】〔動〕 たからがひ(寶貝)に同じ。〔古語〕 和名「紫貝、一名、文貝、宇末乃久保加比」

うま-の-すず 馬鈴 【名】〔植〕 次條の略。

うま-の-すずかけ 馬鈴懸 【名】〔植〕 次條に同じ。

うまのすず-くさ 馬鈴草・馬兜鈴・土青木香 【名】〔植〕 馬兜鈴科に屬する多年生の蔓草。山野に自生し、葉は紫綠色にて、惡臭あり、形、山芋のに似て、互生し、夏、葉の間に紫綠色の不整喇叭(ラッパ)狀なる花開き、蒴果を結ぶ。おはぐろばな。うまのすずかけ。うまのすず。こまのすず。

うまのすずくさ-くわ 馬兜鈴科 【名】〔植〕 顯花植物・雙子葉門・離瓣花區の一科。草本又は木本にして、馬兜鈴・寒葵(カンアフヒ)等これに屬す。

うま-の-せき-みなと 馬關港 【名】〔地〕 赤「間關港の別稱。

うま-の-せ-ごえ 馬脊越 【名】 峠(タウゲ)の路の左右に谷などありて、馬の背の如く極めて狹きところ。

うま-の-たいふ 馬の大夫 【句】 うま(馬)の「條下を見よ。

うま-の-たま 馬玉・酢荅 【名】 馬をはじめ、牛・羊・豚・猪・鹿などの腹中に生ずる石の如きもの。その狀一ならず。色は灰色・錫色・褐色など種種あり。食物に混じて腹に入りたる鐵片などの、久しきを經て變じたるものといふ。糞に混じて出づるより、石糞(セキフン)ともいひ、牛のは牛玉(ウシノタマ)といふ。どうさらばさら。へいさらばさら。

うま-の-ぢん 右馬陣 【名】 しうめいもん(修明門)の異稱。

うま-の-つかさ 馬寮 【名】 めれう(馬寮)に「同じ。

うま-の-つめ 馬の爪 【枕】 馬は歩むに爪をつくより、つくにかけていふ。 萬葉「馬のつめつくしの崎にちまりゐてあれはいははむもろもろはさけくと申す歸りくまでに」

うま-の-とき-あめ 午時雨 【名】 午の時に降出す雨。

うま-の-ないし 馬內侍 【名】〔人〕 三十六歌仙の一人。一條院皇后の女房。右馬權頭源時明の女。

うま-の-なみだ-の-つむじ 馬の淚の旋毛 【句】 うま(馬)の條下を見よ。

うま-の-はかけ-ぐさ 馬齒缺草 【名】〔植〕 次條に同じ。

うま-の-はこぼれ 馬齒缺 【名】〔植〕 せんにんさう(仙人草)に同じ。

うま-の-ばんじやう 馬番匠 【名】〔植〕 きんぼうげ(毛茛)を云ふ。〔河內國の方言〕

うま-の-ひゆ 馬莧 【名】〔植〕 すべりひゆ(馬齒莧)に同じ。

うま-の-みつば 馬三葉・變豆菜 【名】〔植〕 繖形(サンケイ)科に屬する多年生の草。山野の陰濕の地に自生す。葉は掌狀に深裂し、花は小くして淡綠色をなし、多數簇(ムラガ)り生ず。おにみつば。

うま-の-ほね 馬の骨 【句】 うま(馬)の條下「を見よ。

うま-の-め 馬目 【名】〔植〕 あをつづら(木防已)に同じ。

うまのやま-じやう 馬山城 【名】 伯耆國東伯(トウハク)郡橋津村東郷池の北にある丘陵。天正九年吉川(キッカハ)元春の據守して、豐臣秀吉の軍を禦(フセ)ぎし處。

うま-のり 馬乘 【名】 ㊀馬に乘ること、又その人。㊁馬に乘ることに巧なる人。調馬師。㊂馬に乘るが如くに物に跨ること。「うまのりに乘る」 ㊃うまのりどうしん(馬乘同心)の略。㊄羽織の脊筋の下、又は半纏絆(ハンジユバン)・シャツ等の脇縫(ワキヌヒ)の下を、すこし縫殘してあけおくこと。㊅うまのりばかま(馬乘袴)の略。

うまのり-きやうそう 馬乘競走 【名】 遊戲の一。一人前に立ち、他の一人はその人の腰帶を摑(カツ)みて腰を屈め、又、一人は腰を屈めたる者の背に乘りたる者數組にて競走するもの。

うまのり-ごろも 馬乘衣 【名】 馬に乘る時に著るころも。(一說に、「馬埀衣」の誤にて、「まだらのころも」と訓むべしと) 萬葉「すみの江のなみづま君が馬乘衣さにづらふあやめをすゑて縫へる衣ぞ」

うまのり-ぞめ 馬乘初 【名】 うまのりはじめ(馬乘始)に同じ。

うまのり-だつ 馬乘立 【名】『跨れるよりいふ』船の水押(ミオシ)の附留(ツキドマリ)にある立(タツ)。小早・鯨船・渡海船などにあり。

うまのり-どうしん 馬乘同心 【名】 騎馬の下士卒。うまのり。

うまのり-ばおり 馬乘羽織 【名】 昔、馬に乘る時に著用せし羽織。右方の脇に襠(マチ)なく、脊筋は打裂(ブッサキ)羽織と同じくし、地質は眞岡木綿(マヲカモメン)・細七子・羅紗・呉絽(ゴロウ)などを用ひ、無地又は小紋にて、多くは紋附とし、縞物は用ひず。

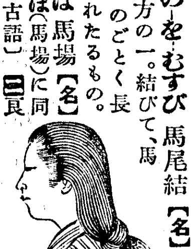
うまのり-ばかま 馬乘袴 【名】 馬に乘る時に著くる袴。襠(マチ)高くして、裾を廣く作れるもの。うまばかま。うまのり。

うまのり-はじめ 馬乘始 【名】 新年の初めに乘馬を乘初むる儀式。ひめはじめ。うまのりぞめ。

うまのり-ばば 馬乘馬場 【名】 ばば(馬場)に同じ。〔俚語〕

うま-の-を-の-たひつり 馬尾鯛釣 【名】 玩具の一。小き弓の弦(ツル)に鯛の形せる物を貫き、下より彈き上げて、その弦を搖れながら下るやうに造りたるもの。

うま-の-を-むすび 馬尾結 【名】 女の髪の結ひ方の一。結びて、馬の尾のごとく長く垂れたるもの。



(うまのをむすび)

うま-ば 馬場 【名】 ㊀ばば(馬場)に同じ。〔古語〕 ㊁良馬を産する地。

うま-ばかま 馬袴 【名】 うまのりばかま(馬乘「袴)に同じ。

うま-ばくらう 馬博勞 【名】 ばくらう(博勞)に同じ。(牛博勞に對して) 狂言(牛馬)「一の杭を、この馬ばくらうが繫いでござる」

うま-はしり 馬走 【名】 馬場の馬出(ウマダシ)より馬駐(ウマトドメ)までの距離。

うま-はす 殖す 【動四他】 うまはるやうにす。ふやす。蕃殖せしむ。うまふ。〔古語〕

うま-はだ 馬膚 【名】 馬の鞍の輪の爪先より少し上の內側の部分。馬の膚に觸るる處。

うま-はたけ 馬刷 【名】 うまぐし(馬櫛)に同じ。〔古語〕 和名「馬刷、于麻波太氣」

うま-ば-どの 馬場殿 【名】 次條に同じ。 榮花「五月には、うまばどのにて駒くらべさせたまふ」

うま-ば-の-おとど 馬場殿 【名】 禁庭(キンテイ)の馬場にある殿舍。五月の騎射の時、中・少將の著座する處。うまばどの。うまばのとの。 源氏「うまばのおとどのほとり立ちわづらひて」

うま-ば-の-との 馬場殿 【名】 前條に同じ。〔古語〕 源氏「うまばのとのに、左右の司の御馬ひきならべて」

うま-ばへ 馬蠅 【名】〔動〕 蠅の一種。普通のよりはやや大きく、全面に白色の細軟毛を被る。幼蟲は馬の腹內に發育し、糞と共に排泄(ハイセツ)せられて蠅となり、馬の身體にたかる。うまあぶ。

うま-ば-や 馬場屋 【名】 馬場に設けある屋舍。〔古語〕 榮花「くらべ馬をせさせたまはんとて、土御門殿の馬場屋・埒(ラチ)など、いみじうたてさせたまふ」

うま-ばり 馬鍼 【名】 馬の血をとりて療治するに用ふる鍼。「馬の血取」參照。

うまはる 殖る【動四自】產(マウ)る。殖ゆ。蕃殖す。うまほる。うまはす(殖す)參照。〔古語〕紀「蕃息、ウマハリ」

うま-ひき 馬引【名】うまかた(馬方)に同じ。

うま-ひじり 馬聖【名】こむそう(虛無僧)をいふなるべし。七一職人歌合「いとふなよ通ふ心のうまひじり人の聞くべきあの音もなし」

うま-びと 貴人【名】門地高き家に生れたる人。位高き人。德高き人。あてびと。〔古語〕紀「うまびとはうまびとどちや」貴人の子【句】㊀門地高き家の人の子。〔古語〕萬葉「あさりする海人の子どもと人はいへど見るに知らえぬうまびとの子と」㊁うまびと。貴人。〔古語〕紀「君子、ウマビトノコ」

うま-びゆ 馬莧【名】すべりびゆ(馬齒莧)に同じ。〔古語〕字鏡「白芒、馬比由」

うま-びる 馬蛭【名】〔動〕蛭の一種。黑褐色にして普通のより大きく、三四寸あり。淡流等に產し、動物質を食とす。くまびる。和名「馬蛭、無末比流、蛭之大也」

うま-ふ 殖ふ【動四他】うまはす(殖す)に同じ。〔古語〕萬葉「寺寺のめがき申さく大神の男餓鬼(キヲガ)たばりてその子うまさむ」

うま-ふせぎ 馬防【名】うませ(馬塞)に同じ。〔古語〕字鏡「栭、馬夫世支」

うま-ぶね 馬槽【名】㊀飼葉(カヒバ)を入るる器。かひばをけ。はみをけ。〔古語〕大和「ただ殘りたるものは、うまぶねのみなんありける」㊁ばだらひ(馬盥)に同じかるべし。

うま-ぶね 馬船【名】馬を載するための船。

うま-ふふき【名】〔植〕ごばう(牛蒡)に同じ。〔古語〕

うま-ぶみ 馬蹈【名】通行する馬の足あとのために、道路のくぼみたる部分なるべし。〔古語〕夫木「瀨田の里橋のうまぶみ朽ちめ多み底の淚ぞ面影に立つ」

うま-へん 馬偏【名】漢字の偏の一、卽ち驅・駿・馴などの字の左にある馬の字。

うまほる 殖る【動四自】うまはる(殖る)に同じ。〔古語〕

うま-まはり 馬廻【名】㊀大將の乘れる馬のあたり。太平記「將軍、戰場に出でたまはんずる時、わざと馬まはりに控へて」㊁次條の略。

うままはり-ぐみ 馬廻組【名】主君の馬のほとりに附從ふ馬上の侍。うままはり。

うま-み 甘味【名】うまき味ひ。うまきほどあひ。

うま-みち 馬道【名】馬の行きかよふ路。

うま-むしや 馬武者【名】きへい(騎兵)に同じ。平治「敵の馬武者」

うま-めしぞめ 馬召初【名】德川幕府の恒例の一。正月初旬に、將軍が吹上(フキアゲ)もしくは奧の馬場にて、馬に乘初むる儀式。

うま-もち 馬持【名】㊀馬を所有せること。重帷子「馬持がよいゆゑ、その月毛も、一兩年ぬっきりと好くなった」㊁所有の馬の取扱ひかた。㊂馬を人に貸して、その賃錢を收むること、又その人。四谷怪談「四谷の住人、馬もちにて、佛孫兵衞せがれ小兵衞」

うま-や 廐【名】『馬屋の義』馬をかひ置く小屋。

廐の案主(アンズ)【句】廐別當(ウマヤノベツタウ)の下に位して、案文(アンモン)を司る。役上皇・攝政・關白の廐には、この職を置かれたり。

廐の神【句】保馬(ヤスマ)神と生馬(イクマ)神との稱。日本書紀の神代卷に、保食神(ウケモチノカミ)の頭より牛馬の化生せしことを記せるによりて見れば、生馬・保馬はこの神の異名かといふ。

廐の司(ツカサ)【句】うまづかさ(馬司)に同じ。

廐の舍人(トネリ)【句】うまやどねり(廐舍人)に同じ。增鏡「御隨身・居飼・御廐の舍人」

廐の別當【句】院司(ヰンジ)・家司(ケイシ)・國司などの下に屬して、廐馬(バキウ)の飼養を掌りし役。鎌倉幕府にもこの職名あり、卽ち廐奉行に同じ。

うま-や 驛【名】『馬屋の義』旅人の便利を計りて、街道のところどころに、馬又は人足などを備へおき、その求に應じて、次立(ツギタテ)をなすところ。うまつぎ。しゆくば。しゆく。宿驛(シユクエキ)。新勅撰「伊勢の勅使にて、伊賀のうまやに著きはべりける」

驛の鈴【句】えきれい(驛鈴)に同じ。うまやづたひのすず。新六「たびびとの山越えわぶる夕霧にうまやの鈴の聲ひびくなり」

驛の長(ヲサ)【句】えきちやう(驛長)㊀に同じ。〔古語〕大鏡「明石の驛…うまやのをさのいみじう思へるけしきを」

うまやかた-ぶぎやう 廐方奉行【名】室町幕府の職制の一。廐奉行の命を奉じて、廐の事を扱ひしもの。

うま-やく 馬役【名】うまのあし(馬脚)㊀に同じ。

うまや-ごえ 廐肥【名】牛馬を飼ふ小屋に敷きたる敷藁(シキワラ)と牛馬の糞尿(フンネウ)とのまじりたるを貯へおき、腐敗せしめて使用する肥料。

うまや-こし【名】〔植〕にがな(苦菜)に同じ

うまやざか-でら 廐坂寺【名】こうふくじ(興福寺)を見よ。

うまや-ざぶらひ 廐侍【名】遠侍(トホザムラヒ)の類。鎌倉時代・室町時代の武家の邸內に、人人の控へ居るために設けたる一室。太平記「うまやざぶらひには、赤松信濃守範資、上座して、一族・若黨三十二人、膝を屈して並み居たりけるが」

うまや-たち 驛館【名】驛に設けたる屋舍。〔古語〕紀「驛、ウマヤタチ」同「亭、ウマヤタチ」

うまや-だて 廐立【名】馬の、廐(ウマヤ)にて飼馴したるもの。

うまや-ぢ 驛路【名】驛のある道。街道。えきろ。はゆまぢ。〔古語〕

うまや-づかひ 驛使【名】公事のために諸國を經由し往還する使。驛鈴を携帶し、各驛より次驛に遞送(テイソウ)せしむ。

うまや-づたひ 驛傳【名】えきでん(驛傳)に同じ。〔古語〕

驛傳の鈴【句】えきれい(驛鈴)に同じ。うまやのすず。〔古語〕堀太「逢坂の關の關守出でてみようまやづたひの鈴きこゆなり」

うまや-どねり 廐舍人【名】廐に附屬する中間(チユウゲン)。口取などをつとむ。うまやのとねり。

うまやど-の-わうじ 廐戶皇子【名】〔人〕しやうとくたいし(聖德太子)に同じ。

うまや-の-かみ 廐の神【句】うまや(廐)の條下を見よ。

うまや-の-つかさ 廐の司【句】うまや(廐)の條下を見よ。

うまや-ぶぎやう 廐奉行【名】鎌倉・室町兩時代に、幕府の廐馬を掌りし役。

うまやばし 廐橋【名】〔地〕上野國前橋の舊稱。

うまや-ばし 廐橋【名】『德川幕府の廐ありし地なるよりいふとぞ』東京隅田川に架れる橋。吾妻(アヅマ)橋の下にありて、同じく淺草・本所兩區を連絡せしむるもの。昔は渡船にて交通し、「御廐河岸(オウマヤガシ)の渡」と呼びたり。

うま-ゆみ 馬弓【名】馬上にて、弓を射ること。騎射。(かち弓に對して)〔古語〕空穗「うまゆみつかうまつる」

うま-よろひ 馬鎧・馬甲・馬革【名】軍馬に著せて、敵の馬を驚かすに用ひしもの。多くは鐵鎖にて製し、金屬又は革の板を縫附け、又、紙にても製したり。明德の頃まで用ひられたり。

うまら 茨【名】うばら(茨)に同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「道のへのうまらの上にはほ豆のからまる君をはかれかゆかむ」

うま-ら 甘ら【貌】うまきさま。よくするさま。〔古語〕記「よくすに釀(カ)みし大御(オホミキ)、うまらにきこしもちをせ」

うまら-ぐつら 蒺藜衘【名】うばらぐつわ(蒺藜衘)に同じ。〔古語〕字鏡「蒺藜衘、宇萬良久豆良」

うまる 埋る【動四自】㊀うづもる(埋もる)に同じ。㊁缺損をつぐなふ。ひきあふ。つまる。(下に打消の語を添へて用ふ)〔俚語〕續膝栗毛「餘計な錢をとられて、うまらねえ目にあった」堀川狂歌集「夏祓してもうまらぬ借錢のふちは瀨ならぬあすか川かな」

うまる 生る・產る【動下二自】『もとうむ(生む)の被役形』㊀子、母の腹より出づ。出生す。誕生す。うまれいづ。源氏「玉のをのこみこさへ生れたまひぬ」㊁世に現はれ出づ。うまれいづ。

生れた跡のはやめ藥【句】その時機に後れたる譬。喧嘩(ケンクワ)すぎての棒ちぎり。六日の菖蒲、十日の菊。〔諺語〕曾我

會稽山「生れたあとの早めぐすり、口ばかりの廣言、言ふな、言ふな」

生れぬ先の父【句】前の世の父。俚言集覽「世俗に、一休禪師の歌とていふ、やみの夜に鳴かぬ烏の聲きけば生れぬさきの父ぞ戀しき」

生れぬ先の襁褓(ムツキ)定め【句】早計に失することの譬。〔諺語〕

生れも附かぬ【句】うまれつきにてはなき。生來ならぬ。「うまれもつかぬ不具(カタハ)となりて」

うまれ 生【名】㈠生るること。誕生。出生。㈡生れたる地。産地。生地。㈢すじやう。おひたち。「うまれが惡い」㈣うまれつき(生附)に同じ。「おろかなるうまれなれば」

うまれ-あがる 生上る【動四自】親よりもまさりて生る。狂言(八句連歌)「親御よりもうまれあがらっしやれたことでござる」

うまれ-あはす 生合はす【動四自】他の人と同時に生る。

うまれ-あふ 生合ふ【動四自】恰も或場合にあたりて生る。うまれあはす。際會す。大鏡「かかる彌勒(ミロク)の世にうまれあひて」

うまれ-いづ 生出づ【動下二自】うまる(生る)に同じ。

うま-れう 右馬寮【名】めれう(馬寮)を見よ。

右馬寮の御監(ゴゲン)【句】「馬寮(メレウ)の御監」を見よ。

うまれう-でん 右馬寮田【名】不輸租田(フユソデン)の一。右馬寮の雜貨に充てたる公廨田(クゲデン)。諸國の墾田などを割きて置けり。

うまれ-おち 生落【名】生れおつること。出生。浮世風呂「うまれおちより死ぬまで、生れた土地を一寸も離れねえよ」

うまれ-おつ 生落つ【動上二自】生れて、この世の人となる。(うみ落すに對して)

うまれ-がはり 生變【名】生れ變はること。轉生。再生。「鬼神のうまれがはり」

うまれ-かはる 生變る【動四自】㈠動物の死後、その魂再び他の動物に變はりて生る。(佛說にていふ)㈡全く改心す。悔悟して善人となる。

うまれ-かへる 生返る【動四自】生をかへて生れ來る。〔古語〕夫木抄「後の世にも、かかる中に生れ返らん」

うまれ-ご 生兒【名】生れたる兒。生れてまだ月日を多く經ぬ兒。産兒。

うまれ-こきやう 生故鄉【名】生れたるふるさと。うまれ在所。生國。産地。出生地。

うまれ-ざいしよ 生在所【名】前條に同じ。鄉貫(キヤウクワン)。

うまれ-しやう 生性【名】うまれつき(生附)に同じ。丹波與作「いかなる因果ならうまれしやう」

うまれ-すじやう 生素性【名】生れたる家系。うぢすじやう。

うまれ-ぞこなひ 生損【名】人となりの正しからぬこと、又その人。〔俚語〕世間娘氣質「娘をうまれぞこなひと惡名つけられ」

うまれ-だち 生立【名】うまれつき(生附)に同じ。浮世風呂「生れだちのわりい野郎なら、おぼっぽで遊びあるいて」

うまれ-たて 生立・初生【名】生れたるばかりなること。生れて間のなきこと。

うまれ-つき 生附・性【名】生れつくこと。生れつきたるさま。うまれ。うまれしやう。うまれだち。生得。性質。天性。生來。

うまれ-づき 生月【名】出生せし月。生月。

うまれ-つく 生附く【動四自】生れながらにして、その身にそなはる。(うみ附くに對して)「おろかに生れつく」

うまれ-どき 生時【名】生れ出でたる時。

うまれ-どころ 生所【名】生れたる處。出生地。

うまれ-どし 生年【名】生れ出でたる年。生年。

うまれ-ながら 生れながら【副】生るると同時に。生れたる時よりそのまま。うまれながらにして。狂言(横座)「生れながら横座になほる」

うまれながら-に-して 生れながらにして【副】前條に同じ。

うまれ-ね 生直【名】〔商〕取引所にて、毎月の發會の時の最初の直段(ネダン)。

うまれ-び 生日【名】生れ出でたる日。誕生日。

うま-わたし 馬渡【名】すゐば(水馬)㈡に同じ。

うま-をさ 馬長【名】祇園(ギヲン)の御靈會(ゴリヤウヱ)の神事に、小舍人童(コドネリワラハ)に美裝せさせて、馬に乘せ、社頭の馬場を練(ネ)り步ましめしもの。枕「ごりやうゑの馬をさ」

うみ 海【名】㈠水の大に瀦(タマ)りてあるところ。淡水なるもの即ち湖などを淡海(アハウミ)といひ、鹽水なるを鹽海(シホウミ)といふ。うみが。〔古語〕「琵琶のうみ」㈡しほうみ(鹽海)に同じ、即ち地球の面にて、廣大に鹹水の湛へたるところ。うみが。㈢水の瀦れるを、海になぞらへていふ語。「袖のうみ」「硯のうみ」「霧のうみ」㈣物事の集合せるところ。淵叢。「言葉のうみ」㈤いそ(磯)㈥に同じ。

海、燃ゆ【句】大風の時、浪に夕日うつりて、火の燃ゆるが如くに見ゆ。

海こも山こもつかず【句】いづれとも決せず。〔諺語〕

海に千年、河に千年【句】世故の經驗を積みて老猾(ラウクワイ)なる人の譬。うみせん。〔諺語〕

海の神【句】海を司る神。わたつみ。海神(カイシン)。紀「陽侯、ウミノカミ」

海の幸(サチ)【句】うみさち(海幸)に同じ。〔古語〕紀「海幸、ウミノサチ」

海の襖(フスマ)【句】海のひろびろとしてある樣を襖に譬へていふ語。

海の外(ホカ)【句】外國。海外(カイグワイ)。夫木「みことのり道にそむかぬ故とてや海のほかにもまもりあるらん」

海の都【句】りゆうぐう(龍宮)に同じ。たつのみやこ。〔古語〕草根集「尋ねてはなどあはざらん人住まぬ海の都のありかなりとも」

海の物【句】海に產する物。

海の物とも川の物とも附かず【句】物事の所屬、前途分明せず。いづれのものともつかず。〔諺語〕

海も見えぬに船用意【句】事を早まる譬。〔諺語〕

海を擊つ【句】海上に居る敵を、陸上より擊つ。〔古の戰術の語〕

海を煮る【句】『史記の吳王濞傳に「即レ山鑄レ錢、煮二海水一爲レ鹽」、又蘇軾の表忠觀碑に「吳越地方千里、帶甲十萬、鑄レ山煮レ海、象犀珠玉之富甲二於天下一」とあり』海水を煮て、鹽を取る。

海を山にす【句】無理なる事をなす譬。〔諺語〕

西の海へさらり【句】『源氏物語の橋姬卷にも「年ごろよからぬ人の、心をつけたりけるが、人をはかりごちて、西の海のはてまでとりもてまかりしかば」とあり』すべての災厄を西海へさらりと拂ひ棄つ。(厄拂にいふ)

うみ 膿【名】『うみしる(熟汁)の略』腫物(ハレモノ)又は疵口(キズクチ)などの、熟(ウ)みたる處より出づる濃き汁。多くは飴のごとき色。膿汁。膿(ノウ)。

うみ 生【名】生むこと。生みたること。「うみの親」「うみの父」「うみの母」「うみの子」(養父・養母・養子などと區別していふ)

生の恩【句】父母の恩。

生の恩より育(ソダテ)の恩【句】次條に同じ。〔諺語〕

生の親より育(ソダテ)の親【句】生父母の恩より養育せし人の恩の重きこと。生の恩より育の恩。〔諺語〕

うみ-あつむ 生集む【動下二他】子を多く生む。うみひろぐ。〔古語〕夫木抄「よくもうみあつめたまひつる御子たちかな」

うみ-あり 海有【名】うみなし(海無)を見よ。

うみ-いし 海石【名】海中にある石。

うみ-いだす 生出す【動四他】生みて出す。うむ。うみだす。夫木抄「みめかたちよりも、生みいだしたる才(ザエ)、生みいだしたる子などを見るに」

うみ-いも 海芋【名】〔植〕かにくそ㈡に同じ。

うみ-うさぎ 海兎【名】〔動〕あめふらし(雨降)に同じ。

うみ-うし 海牛【名】〔動〕腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。我が國各地の淺海に產す。形、小判のごとく、色は一樣ならず、往往甚だ美麗なるものあり。背面に二本の觸角と花彩狀の鰓(エラ)とを具へ、腹面は筋肉質の足となれり。卵塊は索麵狀(サウメンジヤウ)をなし、

支那人はこれを海粉（カイフン）と稱し、食用に供すといふ。

うみ-うそ 海獺 【名】〔動〕あしか（葦鹿）に同じ。

うみ-うちは 海團扇・石帆 【名】〔動〕珊瑚蟲に屬する腔腸（カウチヤウ）動物。我が國各地の海濱にあり。やや堅き角質の骨骼を有し、形、團扇を開きたるが如し。

うみ-うなぎ 海鰻 【名】〔動〕あなご（穴子）に同じ。

うみ-うま 海馬 【名】〔動〕たつのおとしご（龍落子）に同じ。

うみ-うめ 熟梅 【名】熟したる梅の實。金葉「葉がくれにつはると見えしほどもなくこはうみうめになりにけるかな」

うみ-うり 熟瓜 【名】熟したるうり。

うみうり が 熟柿（ウミガキ）を笑ふ 【句】自己の缺點に氣附かずして、他人の缺點を嘲り笑ふ。〔諺語〕

うみ-えび 海蝦 【名】〔動〕いせえび（伊勢蝦）に同じ。

うみ-うを 海魚 【名】かいぎよ（海魚）に同じ。（川魚に對して）

うみ-えら 海鰓 【名】〔動〕珊瑚蟲類に屬する腔腸（カウチヤウ）動物。丈二三寸にて、角質の中軸の周緣に軟き肉を有し、上部は左右に短き肢を出し、鳥の羽の如き外觀を呈す。我が國各地の海に産ず。

うみ-おとす 生落す 【動四他】兒をうみ終ふ。うむ。（うまれ落つに對して）

うみ-が 海 【名】『がは處の義』うみ（海）㊀㊁に同じ。〔古語〕記「うみがゆけば、腰なづむ」

うみ-がき 熟柿 【名】熟したる柿の實。散木「心してこのみもをらん夕されば世をうみ柿に嵐吹くなり」

うみ-がた 海形 【名】海上の景に摸し造れるもの。〔古語〕空穗「左大將殿、大いなるうみがたをして」

うみ-が-つき 産月 【名】うみづき（産月）に同じ。〔古語〕榮花「承香殿（シヨウキヤウデン）の女御、うみがつきも過ぎさせたまひて」

うみ-がに 海蟹 【名】〔動〕しまがに（縞蟹）に同じ。

うみ-かは 海川 【名】海と川と。河海（カカイ）。

うみ-かむろ 海禿 【名】〔動〕あしか（葦鹿）に同じ。

うみ-かんざし 海簪 【名】〔動〕うみやなぎ（海柳）㊁を云ふ。〔肥後國の方言〕

うみ-がめ 海龜 【名】〔動〕海洋に産する龜類の總稱。あかうみがめ・あをうみがめ・たいまい等種種あり。各その條を見よ。（陸龜に對して）

うみ-がも 海鴨 【名】〔動〕うみがらす（海鴉）に同じ。

うみ-がや 海萱 【名】〔植〕をぎ（荻）に同じ。

うみ-がらす 海烏 【名】〔動〕游禽（イウキン）類に屬する鳥。北海道及び千島の沿岸に産す。形、むぐりに似、鳩よりも大きく、嘴細くして長く、脚短く、羽毛の色は黑褐なれども、冬には白色部を增す。うみがも。

うみ-きじ 海雉 【名】〔動〕しちめんてう（七面鳥）に同じ。

うみ-ぎし 海岸 【名】海の岸。かいがん。うみべ。

うみ-ぎす 海鱚 【名】〔動〕しろぎす（白鱚）に同じ。

うみ-ぎは 海際 【名】海のほとり。うみべ。曲謠（知章）「いづくともなき海ぎはや浦なる關に著きにけり」

うみ-ぐさ 海草 【名】〔植〕海中に生ずる草の總稱。大部分は海藻類にして、他に僅少の雜草あり。かいさう。

うみ-くちなは 海蛇 【名】〔動〕うみへび（海蛇）に同じ。

うみ-ぐも 海蜘蛛 【名】〔動〕蜘蛛類に似たる海産の節足動物。頭胸部には一對の鉗狀顎と四對の步脚とを具へ、腹部は萎縮して、小突起をなすに過ぎず。常に海草の間を緩步す。分類上の位置詳かならず、假に蜘蛛類に附屬せしむ。

うみ-くわじ 海火事 【名】陽氣昇騰のために、海の四邊に赤氣の滿ちわたること。陸にては、鹽やけといふ。〔船人の語〕

うみ-けむし 海毛蟲 【名】〔動〕環蟲（クワンチユウ）類に屬する蠕形（ゼンケイ）動物。長さ四五寸に達す。海鼠（ナマコ）のごとき形にて、表面に白く剛き長毛を生ず。日本海の各所に産す。

うみ-こ 海子 【名】鮫皮の類違（ルヰチガヒ）の一。

うみ-こ 膿蠶 【名】一種の病に犯されて、膚の色乳白となり、容易に破れて、白液を漏出するに至りたる蠶（カヒコ）。

うみ-こく 海石 【名】德川時代の納稅の一種。漁獵或は海草の利益ある河海に沿へる土地に對し、その獲得せる高を石高（コクダカ）に換算して、金穀を納れしめしもの。うみだか。

うみ-ごし 海越 【名】海を隔てたること。謠曲（三井寺）「波もあは（泡・粟）津の森見えてうみごしの、かすかに向ふかげなれど」

うみ-こぞう 海小僧 【名】海に住みて、形、僧に似たる怪物なりといふ。

うみ-ごめ 海米 【名】〔植〕こうぼふむぎ（弘法麥）に同じ。

うみ-ざうめん 海索麪 【名】㊀〔植〕紅色藻類に屬する藻（モ）。形、索麪の如く、赤紫色にて、鹽に漬け、又は灰に和して乾かし、食用とす。㊁〔動〕後鰓（コウサイ）類に屬する軟體動物の卵。㊂〔動〕あめふらし（雨降）に同じ。

うみ-さち 海幸 【名】海にての獲物、卽ち魚介などの利得。うみのさち。（山さちに對して）〔古語〕記「海さちも己がさちさち」

うみ-ざめ 海鮫 【名】〔動〕さかたざめ（犂頭鯊）に同じ。

うみ-じ 産字 【名】〔音〕淨瑠璃を語るとき、長く音を引くがために、その前後に連なる母韻の自然に殘ること。

うみ-じか 海鹿 【名】〔動〕あめふらし（雨降）に同じ。

うみ-しじみ 海蜆 【名】〔動〕蜆の一種。海中に産す。川に産するものより大きく、色多くは黑或は黃褐なり。

うみ-しだ 海羊齒 【名】〔動〕海百合（ウミユリ）類に屬する棘皮（キヨクヒ）動物。海に産す。形小さく、周緣に有節の五肢を出し、その各肢より小肢を出し、更に分岐して、やや羽毛の觀を呈す。こまち。こまつら。

うみ-しやうが 海生薑 【名】しやうがいし（生薑石）を云ふ。〔能登國の方言〕

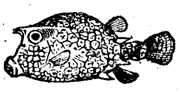
うみ-しる 膿汁 【名】うみ（膿）に同じ。

うみ-す 産巢 【名】子を産むもの。母胎。俚言集覽「唐鳥のうみすとて、よく子をかへすをいふ」

うみ-すぎ 海杉 【名】〔植〕うみひば（海檜葉）㊀に同じ。

うみ-すずき 海鱸 【名】〔動〕海中に産する鱸。（川すずきに對して）

うみ-すずめ 海雀 【名】〔動〕㊀游禽（イウキン）類に屬する海鳥。形、鶺鴒（セキレイ）より大きく、背は黑く、腹は淡鼠色にて、むく鳥に似、嘴は尖りて銳く、翼は短く、巧に泳ぎ、又水中に潛（クグ）る。脚は體の後部に偏せるため、陸上にては直立す。北海道以北の沿岸に産し、冬期は南下してよく內地の沿岸に來る。㊁固顎（コガク）類に屬する魚。海に産し、河豚（フグ）に似て小く、鱗堅く、背は蒼ばみて斑點あり、腹は白く、かはごふくに似て、頭に二本の角の如きものあり。嘴の尖れること鳥のごとし。すずめうを。いしふぐ。かいぎう。すずめふぐ。



（うみすずめ㊁）

うみ-すひ-いし 膿吸石 【名】形、龍骨のごとくにて、圓く扁（ヒラ）く、膿を吸はしむるに用ふる一種の小石。舶來品なりといふ。

うみ-せん 海千 【名】『「海に千年、川に千年」の略』世故に通じて狡猾（カウクワツ）なる人。〔俚語〕

うみ-そ 績麻 【名】績（ウ）みたる麻絲。「うみを」。

うみ-そこなふ 生損ふ 【動四他】出産たやすからず。宇治「彼れが子をうみそこなひて、死して」

うみ-だか 海高 【名】うみこく（海石）に同じ。

うみ-たけ 海茸・海筍 【名】〔動〕瓣鰓（ベンサイ）類に屬する軟體動物。中國・九州邊の泥海に産し、殼はどぶがひに似て扁（ヒラ）く、色白くして脆く、長さ一尺餘の黑色の水管を具へ、常にこれを上方に出すこと筍のごとし。膓（ハラワタ）を去りて食ふに味美、又、鹽づけとして貯ふべし。

うみたけ-のし 海茸熨斗・海筍熨斗 【名】儀式用に供する大形の熨斗。海筍を水に入れ、日光に曝（サラ）し、後、藺筵（ヰムシロ）の上に熨斗形の型（カタ）を置きて、その中に擴げ乾かして製す。

うみ-だす 生出す 【動四他】㊀うみいだす（生出す）に同じ。㊁働き又は節儉して、財産を造る。かせぎだす。利殖す。

うみだて 續立【名】「腕だてのだてと同じからん」麻をうむわざ。狂言(吃)「麻(ヲ)うみだてはすれども」

うみたなご 海鯽【名】(動)硬鰭(カウキ)類に屬する魚。沿海に產し、形、かいづに似て扁く、長さ四五寸乃至一尺。口小く、背部は銅青色にして、腹部は銀白色。

うみたる 海樽【名】(動)サルパ類に屬する小蟲。常に海面に浮遊す。體は樽形を呈し、體壁(タイヘキ)筋は環狀をなす。

うみち 膿血【名】㊀うみと、血と。㊁血のまじりたるうみ。ちうみ。

うみち 海地【名】海に沿ひたる土地。卜養狂歌集「卜養、江戶築地の海邊にて、屋敷を下し賜はるとき、ある人、卜養は本道とこそ思ひしからうみち(海地・膿血)をとるは外科が所望か」

うみぢ 海路【名】海上の船の通ふ路。ふなぢ。うみつぢ。航路。海路(カイロ)。

うみづき 產月【名】兒を產むべき月。うみがつき。うむがつき。臨月。蓐月。

產月近き麻疹(ハシカ)の惱(ナヤミ)【句】苦しきことのある上に、又苦しき事の生ずる譬。泣面(ナキツラ)に蜂。〔諺語〕假名手本忠臣藏「氣づかひに氣づかひを重ねしは、產月ちかき嫁たちの、はしかに病みつくごとくにて」

うみつく 生附く【動下二他】㊀魚・蟲などが卵を生みて、物に附著せしむ。(生れ附くに對して) ㊁生みて、その性を得しむ。

うみつぢ 海津路【名】うみぢ(海路)に同じ。〔古語〕萬葉「うみつぢの凪ぎなむ時も渡らなむかく立つ波に船出すべしや」

うみっぱた 海邊【名】うみばた(海邊)の音便。〔俚語〕

うみつばめ 海燕【名】(動)游禽(イウキン)類に屬する海鳥。羽毛の色多くは暗黑にて、形と飛ぶさまとは燕によく似たれど、燕の類にあらず。趾(シ)の間に蹼(ミヅカキ)ありて、海面を游泳し、嘴の形、鷗(カモメ)に似たり。

うみつみち 海津道【名】海に沿ひたる道。海道。〔古語〕紀「東海、ウミツミチ」

うみつむぎ 紡績【名】麻をうむと、絲をつむぐと。

うみづら 海面【名】㊀海の上。海の表面。うなづら。海面(カイメン)。〔古語〕伊勢「伊勢・尾張のあはひの海づらを行くに」㊁海のほとり。うみべ。〔古語〕源氏「さるうみづらに出でたまひたる、ひがひがしきやうなれど」

うみつる 生連る【動下二他】生みたる子を引連る。空穗「いかめしき雌熊・雄熊、子を生みつれて」

うみて 海手【名】海の方角。蕪村「海手より日は照りつけて山ざくら」

うみてふてふ 海蝶蝶【名】(動)とびのうを(飛魚)の異名。一說には、翼足類に屬する一種の軟體動物。

うみどうがめ 海どう龜【名】(動)かぶとがに(兜蟹)に同じ。

うみどぢやう 海鰌【名】(動)ぎんぱうに同じ。

うみどんがん 海どんがん【名】(動)かぶとがに(兜蟹)を云ふ。〔讃岐國高松の方言〕

うみとらのを 海虎尾【名】(植)褐色藻類に屬する海藻。淺海の岩石上に著生し、長さ一二尺、老成後は小枝を生ず。とらのを。ねずみのを。

うみどり 海どり【名】うみほほづき(海酸漿)に同じ。

うみどり 海鳥【名】(動)かいてう(海鳥)に同じ。

うみな 孃【名】をみな(女)に同じ。〔古語〕名義抄「孃、ウミナ・ハハ」

うみなか 海中【名】海の中。海上。土佐「京の子の日のこと言ひいでて、小松もがなといへど、海なかなれば難しかし」

うみながし 產流【名】りうざん(流產)に同じ。〔古語〕增鏡「あさましき御事さへいできて、これも御うみながしにて、俄に失せさせたまひけりとぞ聞こえし」

うみなし 海無【名】鞍(クラ)の前輪・後輪(シヅワ)に輪なく、山形の下に高く隆起せる線の無きもの。その線あるを海有といふ。

うみなり 海鳴【名】海上にて、暴風雨の襲來(シフライ)の際などにおこる一種の音響。

うみにな 海蜷【名】(動)いそにな(磯蜷)に同じ。

うみねこ 海猫【名】(動)鷗(カモメ)の一種。その鳴く聲やや猫に類す。

うみのおい 海老【名】(動)『海老の字の直譯。腹部の屈曲を、老人の腰屈めるに譬へて、支那にては海老と書く』えび(海老)に同じ。

うみのおきな 海老【名】(動)前條に同じ。新續古今「世の人はうみのおきなといふめれどまだはたちにも足らずぞありける」

うみのつき 海月【名】(動)『海月の字の直譯。夜間この物の漂へるあたりは明るく見ゆるより、支那にては海月といふ』くらげ(海月)に同じ。夫木「わが戀は海の月をぞ待ちわたるくらげの骨にあふ夜ありやと」

うみのなかみち 海中道【名】(地)筑前國糟屋(カスヤ)郡の西海中に突出したる、三里ばかりの沙地。別稱、志賀鼻。

うみばうず 海坊主【名】㊀(動)しやうがくばう(正覺坊)に同じ。㊁海上に見はるる物の怪(ケ)の類。あやかし。ふないうれい。

うみばた 海邊【名】うみべ(海邊)に同じ。

うみばと 海鳩【名】(動)游禽(イウキン)類に屬する海鳥。太平洋の北部に產し、形も羽毛の色も、海鳥に似て、やや小し。

うみひごひ 海緋鯉【名】(動)硬鰭(カウキ)類に屬する魚。ひめぢの類。南海に產す。全身赤くして、頭より尾にかけて、幅廣き黃金色なる一條の線あり。

うみひば 海檜葉【名】㊀(植)紅藻類に屬する海藻。水底の石などに附著して生ず。枝甚だ多くして網のごとく、色は紅白・黃紫・黑褐など種種あり。外柔かにして內に骨骼部あり。紅・黃二種の外は、外皮を去れば、その骨、珊瑚の如しといふ。うみすぎ。㊁(動)ヒドロ蟲類に屬する腔腸(カウチヤウ)動物。海草の生ぜる岩石などに附著して生活し、外觀は海藻に似たり。

うみひる 海蛭【名】(動)蛭の一種。長さ約二寸にして、綠色をなす。全面に疣狀(イボジヤウ)の突起物あり、前後の兩端に吸盤あり。鮫(サメ)・鱏(エヒ)などに吸ひつく。

うみひるも【名】(植)水鼈(トチカガミ)科に屬する。草莖は細くして、水底を這ひて、各節より根と葉とを出す。葉は披針形又は楕圓形にて全緣。花は單性・雌雄同株。我が國暖地の淺海に生ず。

うみひろぐ 生廣ぐ【動下二他】うみあつむ(生集む)に同じ。女殺油地獄「數の子ほど生みひろげ」

うみぶくれ 海脹【名】つなみ。海嘯(カイセウ)。

うみぶね 海船【名】海上を航する船。(河船・田船などに對して)

うみべ 海邊【名】海のほとり。うみばた。うみべた。うみっぱた。

うみべた 海邊【名】前條に同じ。

うみへちま 海絲瓜【名】(動)海綿(カイメン)類の一種。多く沿海に生じ、淡紫色を帶び、乾燥すれば淡黃色を呈して、強直となる。わたとり。

うみへび 海蛇【名】(動)爬蟲(ハチユウ)類中の蛇類の一。海中に棲み、多くは熱帶地方に產す。長さ三尺內外。毒牙を有すれども、その毒激しからず、側扁なる尾によりて游泳す。我が國の永良部鰻(エラブウナギ)もこの一種なり。うみくちなは。

うみほっす 海拂子【名】(動)ほっすがひ(拂子貝)に同じ。

うみほほづき 海酸漿・龍葵【名】長辛螺(ナガニシ)・赤辛螺(アカニシ)・天狗辛螺(テングニシ)・黃辛螺(バイ)等の卵囊。皮堅く、海中の石などに著きて生ず。染色などして、小孔を穿ち、女兒、酸漿(ホホヅキ)に代へて吹きならす。いそほほづき。うみどり。

うみまつ 海松【名】㊀海邊に生ずる松。源氏「うみまつや時ぞともなき陰にゐて何のあやめもいかにわくらん」㊁(動)腔腸(カウチヤウ)動物の一。うみひばの類。骨骼は黑くして光澤あり、膚に細かなる穴多く、印材・パイプ等の裝飾具に製せらる。くろさんご。〔鐵樹〕㊂(植)『海松の字の直譯』みる(海松)に同じ。土佐「おぼつかな今日は子の日かあまならばうみ松をだにひかましものを」

うみみみず 海蚯蚓【名】(動)環蟲(クワンチユウ)類に屬する蠕形(センケイ)動物。長さ三寸・幅二

分ばかり。色白くして、淡紅を帶び、多くの環節を有し、各節に八箇の剛き毛、一對をなして生ず。釣魚の餌とす。

うみ-みやうじん 海明神【名】〔動〕あめふらし(雨降)を云ふ。〔三河國の方言〕

うみ-も 海藻【名】海の藻。落穗「底なるや見るにかくるるうみもをばえこそかづかね目にさはりつつ」

うみ-やらじ 海楊枝【名】〔動〕あめふらし(雨降)に同じ。

うみ-やなぎ 海柳【名】**一**〔植〕あまも(大葉藻)に同じ。**二**〔動〕珊瑚類に屬する腔腸(カウチヤウ)動物。大なるものは五尺に至る。肉は蚯蚓(ミヽズ)に似て、末の方廣し。骨は簪に似て、色白く、方・圓の二種あり。我が邦にては因幡(イナバ)・伯耆(ハウキ)邊の海に多く産す。簪となし、又は束ねて杖に用ふ。おとひめのかんざし。うみかんざし。しろさんご。〔沙箸〕

うみ-やま 海山【名】**一**海と山と。さんかい。**二**物事の高く深き譬。謠曲(調伏曾我)「山河・草木、震動して、箱根のうみやまの御法(ミノリ)もおのづから」

うみ-ゆり 海百合【名】〔動〕海百合類に屬する棘皮(キヨクヒ)動物。外形、海羊齒(ウミシダ)に似、黄色・多角形の柄によりて、深海の岩礁に固著す。又、柄の處處に卷枝輪生す。とりのあし。

うみゆり-せきくわいがん 海百合石灰岩【名】〔鑛〕海百合の柄の化石を含む石灰岩。裝飾材とし、又、文房具製造用とす。錢石。

うみゆり-るゐ 海百合類【名】〔動〕棘皮(キヨクヒ)動物の一綱。海百合・海羊齒(ウミシダ)等これに屬す。前世紀には、この類の動物大いに繁殖したり。

うみ-りんご 海林檎【名】〔動〕球形の殼(カラ)ある古生代の一種の棘皮(キヨクヒ)動物。

うみ-わた 海綿【名】〔動〕かいめん(海綿)に同じ。

うみ-を 績麻【名】績(ウ)みたる苧(ヲ)。うみそ。〔古語〕萬葉「少女らがうみをのたたりうちそかけうむ時なしに戀ひわたるかも」

うみ-をそ 海獺【名】〔動〕らっこ(臘虎)に同じ。

うみを-なす 績麻如す【枕】績みたる麻は長きものなるより、なが(長)・ながと(長門)にかけていふ。萬葉「うみをなすながらの宮に宮ばしらふとたかしきて」同「をとめらがをけにたれたるうみをなすながとの浦に」

う-む 有無【名】**一**有ると無きと。**二**否と應と。諾(ウ)と否(ナイ)と。**三**しかあると、しからざると。「有無の返事」**四**〔佛〕有に執著(シフヂヤク)すると無に執著すると。

有無無しに【句】いやおうなしに。是非とも。むりやりに。有無を言はせず。四谷怪談「逢うたら有無なしにつけうぜ」

有無の邪見【句】〔佛〕次條に同じ。

有無の二偏【句】〔佛〕宇宙・人生を有と見ると無と見るとの二つの偏見。この何れにも偏せざる眞理を中道と云ふ。有無の邪見。

有無の目つき【句】能(ノウ)にて、無き物を有るがごとくにすると、又、目の前にある物を無きがごとくにするときの態度。前者を有(ウ)の目つき、後者を無の目つきといふ。

有無を言はせず【句】抗辯せしめず。むりやりに。異論を言はしめず。

有無を交易す【句】我に餘れる物を、他の餘ある物と易へて、互の無を補ふ。

有無を離る【句】〔佛〕有無の差別を離れて、眞實の法を悟る。

うむ 生む・産む【動四他】**一**動物生殖作用の自然の結果として、子を生ずること。産す。金葉「子をうみてけるが」**二**生ず。殖やす。出す。「金が子をうむ」「い」を見よ。

生むが易い【句】「案じるより生むが易い」

生んだ子より抱いた子【句】實の子より育てたる子の方がかはゆきこと。〔諺語〕「熟す。

うむ 熟む【動四自】果物成熟す。みがいる。

うむ 膿む【動四自】膿(ミウ)を釀(モカ)す。膿をもつ。化膿す。結膿す。和名「膿、訓宇无、又云、宇美之留、濃汁也」

膿んだとも潰(ツブ)れたとも言はず【句】何とも言ひ來らず。音沙汰なし。

膿んだ物が潰(ツブ)れたとも言はず【句】前條に同じ。

うむ 倦む【動四自】仕事に厭く。いやになる。拾遺「世をうみてわがかす絲は七夕(タナバタ)のなみだの玉の緒とやなるらん」

うむ 績む【動四他】麻又は苧(ヲ)を、細く裂き、長く合はせて縒(ヨ)る。六帖「たてぬきに身をばうむともあさはたのおりては君にあはじとぞおもふ」

うむ 埋む【動下二他】**一**うづむ(埋む)に同じ。**二**湯に水を加へて、ぬるくす。浮世風呂「熱いといへばぬるい。うめろといへばうめるなと」

うむかし【形二】おむかしに同じ。〔古語〕續紀「その人のうむかしきこと、いそしきことを、つひにえ忘れじ」

うむかしむ【動四自】おむかしむに同じ。〔古語〕續紀「いそしみうむかしみ忘れたまはず」

うむ-がつき 産月【名】うみづき(産月)に同じ。〔古語〕紀「開胎、ウムガツキ」

うむき 海蛤【名】〔動〕はぐまり(蛤)の類。〔古語〕和名「海蛤、宇无岐乃加比」

うむき【名】〔植〕次條に同じ。

うむき-な うむき菜【名】〔植〕いかりさう(碇草)に同じ。〔古語〕

う-むく 呻く【動四自】うめく(呻く)に同じ。〔古語〕今昔「ねのびをするやうにうちうむきて」

うむし-やき 蒸燒【名】むしやき(蒸燒)に同じ。〔古語〕

うむす 蒸す【動四他】**一**むす(蒸す)に同じ。〔古語〕字鏡「燰、宇牟須。又、可志久」**二**孵化せしむ。かへらす。〔古語〕

うむすび-まつり 産靈祭【名】産靈神(ムスビノカミ)を祭ること。〔古語〕字鏡「禖、以レ牲祀二司命一也、宇牟須比麻豆利」

うん 運【名】人の身にめぐり來る善惡の象。まはりあはせ。しあはせ。天命。天運。運命。因緣(インエン)。「じ。

運か罰(バチ)か【句】「一か八(バチ)か」に同じ。

運の矢が目に中る【句】一度行へる惡事を、人に見あらはさるる譬。〔諺語〕

運は天にあり【句】すべて物事は天運次第なり。〔諺語〕

うん 暈【名】〔理〕『英 Halo の譯語』太陽又は月の周圍に圓く白色に現はるる輪。大氣の上層にある氷の細片の光線を屈折・分散するによりて生ず。かさ。はろ。

うん【名】うんこに同じ。〔小供の語〕

うん 己【代】『うぬ(己)の轉』なんぢ。おのれ。〔肥前國長崎の方言〕膝栗毛「うんどもは、長崎のかもんぢやが」

うん【感】**一**承諾の意を示す聲。う。**二**うめく時、氣絶する時などの聲。う。平假名盛衰記「やあ、面倒な女めと、肩さきつかんで投げつくれば、うんとばかりに、氣息(イキ)絶えだえ」**三**力をこむる時の聲。

うんと云ふほど【句】きはめて多く。甚だ十分に。うんと。〔俚語〕膝栗毛「かどの立場(タテバ)で、うんといふほど食って來やした」

うんともすんとも【句】否(イヤ)とも應(オウ)とも返辭をせぬ形容。博多小女郎浪枕「はっちはっちと空耳つぶし、うんともすんともいはれぬ佛の方便にて」

うん-あう 蘊奧【名】『蘊は畜(タクハ)ふる意。ウンナウと發音す』學藝などの奧深きところ。奧義。奧旨。

うん-う 雲雨【名】**一**雲と雨と。**二**『宋玉の神女賦に「楚襄王、夢二一婦一曰、妾巫山之女、朝爲二行雲一暮爲二行雨一朝朝暮暮、陽臺之下」とあるに本づく』男女の交接の譬。**三**『吳志の周瑜の傳に「恐三蛟龍得二雲雨一終非二池中物一」とあるに本づく』立身出世の機會。

うん-うん 云云【名】**一**『もと「何何と云ひ、何何と云ふ」の意の略。ウンヌンと發音す』しかじか。これこれ。(詞を略していふに用ふ) 宇治「ちひさき文字にて、金御嶽云云と、ことごとく書かれたり」**二**言ふに言はれぬ事情。曰くつき。〔俚語〕「云云の譯あひ」

うん-うん【感】苦しみうなる聲。〔俚語〕

うん-えい 雲翳【名】『翳はくもる意』くもり。かげり。

うん-えい 雲影【名】雲のすがた。

うんえい-たうせい 雲影濤聲【名】松の樹

の形と松風の音との形容。

うんえき 瘟疫【名】發熱する流行病。熱病。

うんえふくわ 雲葉科【名】〔植〕やまぐるまくわ（雲葉科）に同じ。

うんえふわかしふ 雲葉和歌集【名】〔書〕柿本人麿・大伴家持（ヤカモチ）等より後嵯峨天皇の時代までの歌を集めたるもの。十卷。編者詳かならず。

うんえん 雲烟・雲煙【名】㊀雲と烟と。㊁すぐれたる山水畫。「一幅の雲烟」

雲烟過眼【句】『蘇軾の寶繪堂記に「譬ニ之烟雲之過レ眼、百鳥之感レ耳、豈不ニ欣然接レ之、去而不ニ復念一也」とあるに本づく』㊀一時の樂。長く執著せぬ愉快。虛心平氣。㊁物事に深く心を留めぬこと。「すべて雲烟過眼に付す」

雲烟飛動【句】書家などの書きたる文字の勢よき譬。

雲烟縹渺（ヘウベウ）【句】雲烟のひろくたなびきて限なき形容。

うんか 雲霞【名】㊀雲と霞と。㊁物の群がれる譬。增鏡「六波羅をさして、雲霞のごとくたなびきたるに」

うんか 浮塵子【名】〔動〕有吻（イウフン）類に屬する稻の害蟲。十數種あり。形態は蟬に似て小く、長さ二分內外。前翅・後翅同形にて、口器は管狀の吻（クチバシ）をなし、これを莖葉中に插入して汁液を吸ひ、枯死せしめ、草中に潛伏して越冬し、翌春に產卵す。あわむし。ぬかばへ。よこばひ。こぬかむし。

うんが 運河【名】運漕・灌漑（クワンガイ）・排水・給水などのために、人工に由りて開鑿（カイサク）したる水路。ほりわり。ほりえ。

うんかい 雲海【名】㊀はてなく廣き海。㊁高山の頂などにて、脚下に雲滿ちて、恰も海面の波濤（ハタウ）を見おろすが如く見ゆること。

うんかう 運行【名】㊀運轉してすすみ行くこと。運びめぐること。「日月の運行」㊁〔天〕『英 Bevolution』天體のその軌道を運動すること。公轉。周轉。㊂船舶の前進又は後退。（航行・航海といふよりは狹き意に用ふ）

うんかう 芸香【名】〔植〕へんるうたに同じ。

うんかうくわ 芸香科【名】〔植〕へんるうたくわ（ヘンルウタ科）に同じ。

うんかく 芸閣【名】『芸は香の善き草にて、書籍の中に入れて、蠹魚（トギヨ）を防ぐに用ふるよりいふ』書籍を藏むる樓。しよつぐら。芸臺。書樓。書庫。

うんかく 雲客【名】てんじやうびと（殿上人）に同じ。太平記「月卿・雲客」

うんかく 雲鶴【名】㊀雲と鶴とを配合せる模樣。圓形・方形など種種あり。古、親王及び太閤（タイカフ）となりたる人の袍（ハウ）などに用ひたり。㊁青磁の茶碗および高麗燒（カウライヤキ）の香爐（カウロ）と茶碗との一。地紋に雲と鶴との模樣あり。

（うんかく㊀）

うんがしようかうき 運河昇降機【名】運河の異なる水準間に船を通ずる設備。船を水槽中に浮べ、水槽の兩端を密閉して、水壓又は水の浮力を利用して上下せしむ。

うんがふ 雲合【名】雲のごとく集合すること。雲集。

うんがふむしふ 雲合霧集【名】あまた四方より集まること。「天下の士、雲合霧集す」

うんかん 雲間【名】雲の絕間。雲の中。くもま。

うんかん 雲漢【名】㊀あまのがは。銀河。㊁天つ空。おほぞら。

うんがんじ 雲巖寺【名】下野國那須郡須賀川村にある臨濟宗の寺。本尊は慧心作の釋迦坐像。大治中、叟元和尙の開基。後廢れしを、弘安中、北條時宗再興し、元僧彥昭國師を開山第一世とす。

うんき 雲氣【名】㊀晴雨などにつけて雲の動くこと。くもゆき。㊁空に立ちのぼる一種の陽氣。㊂芝居にて、空に雲氣の立ちのぼれるさまを示すために、舞臺の天井より吊（ツル）し下ぐる、雲形の道具。

うんき 運氣【名】自然の現象を人の運命に配したるもの。うん。運命。

うんき 温氣【名】むし暑きこと。暑氣。

うんきう【名】〔動〕かぶとがに（兜蟹）を云ふ。〔筑前國の方言〕

うんきふ 雲級【名】〔地〕雲形（ウンケイ）の種類。卷雲・卷層雲・卷積雲・積卷雲・層卷雲・層積雲・亂雲・積雲・積亂雲・層雲の十種あり。うんけい。

うんきふづ 雲級圖【名】〔地〕雲形を觀測するときの標準とするために、その種類を並べ描けるもの。

うんきん 雲錦【名】朝のかすみ。

うんきんしやう 雲錦裳【名】㊀きはめて美麗なる錦の衣裳。㊁美しくすぐれた詩文の譬。

うんきやう 雲鏡【名】〔地〕『英 Uephoscope』雲の動く方向と、その速度とのおほよそを測量するための器械。雲速計。

うんきやく 雲脚【名】㊀雲の垂下したるがごとくに見ゆるもの。雲の風に吹かれて空を動きゆく形容。くものあし。くもあし。㊁下等なる茶。下學集「雲脚、惡茶名也、言茶泡早滅、如ニ浮雲脚早過去一也」㊂かうせん（香煎）に同じ。室町殿日記「別寬、雲脚を立てて參らす。…かるがると香煎を出すこと、言語道斷、言ふばかりなし」

うんきやく 運脚【名】古、調（テウ）・庸（ヨウ）を運ぶ役をつとめし人夫。ぶ。よぼろ。

うんきやくだい 雲脚臺【名】雲形に造れる、足を取附けたる臺。禁裏（キンリ）・院中へ物を捧ぐる物をのするに用ふ。

うんく 雲衢【名】雲の立ちゐる處。雲上。

うんく 雲鼓【名】〔佛〕禪寺にて、庫裡（クリ）內に置きて、食事の合圖に打鳴す鼓。

うんくわ 雲花【名】しゆんうん（春雲）㊂に同じ。

うんくわ 雲和【名】『周禮の春官大司樂に「雲和之琴瑟」とあり。雲和は山の名にて、この山より出づる材木を以て琴瑟を作るよりいふ』こと（琴）の異名。

うんぐわ 雲臥【名】世を避けて、山中などに棲むこと。高臥。

うんぐわい 雲外【名】雲の上。雲表。雲上。「雲外の寺」

うんくわうにち 瘟光日【名】昔の曆にいへる宿曜の日の一。灸（キウ）を忌むといふ。

うんくわん 雲鬟【名】『雲は天外の綠雲に譬へていふ』わがねて結（ユ）ひたる美人の髮。

うんけい 運慶【名】〔人〕彫刻家。後鳥羽・順德兩朝時代の人。康慶の子。名は譽。備中法印と號す。東寺の大佛師の職に補せられて、建久再興の事に功あり。又、鎌倉の大倉新御堂・持佛堂等の佛像を作りて大に著る。作風は寫生を基礎とし、剛健の精神を表現す。鎌倉に住みしが故、鎌倉佛師の祖と稱せらる。東鑑には雲慶と記せり。

うんけい 雲形【名】㊀雲のかたち。㊁〔地〕うんきふ（雲級）に同じ。

うんけい 雲髻【名】女の髮の、高く結びたるものの美稱。

うんげい 雲霓【名】雲とにじと。（降雨の前兆の意に用ふ）

雲霓の望（いッ）【句】『次條を見よ』甚だ切なる希望。

大旱に雲霓を望むが如し【句】『孟子の梁惠王下篇に「民望レ之、若ニ大旱之望ニ雲霓一」とあるに本づく』希望の甚だ切なる譬。〔諺語〕

うんげいべり 繧繝緣【名】うんげんべり（繧繝緣）の訛。狂言（見物左衞門）「疊は皆うんげいべりに高麗べり」

うんけつ 蘊結【名】思のつもりて解けぬこと。鬱結。

うんげん 繧繝・暈繝【名】『暈繝と書けるが元にて、日月のまはりにある暈の如くなるよりいふとぞ』㊀うんげんさいしき（繧繝彩色）に同じ。㊁繧繝彩色のごとき色合に織りたる織物。㊂うんげんにしき（繧繝錦）の略。㊃うんげんべり（繧繝緣）の略。增鏡「西の一間にうんげん二帖」㊄繪畫のくまどり。

うんげんさいしき 繧繝彩色【名】同じ色にて、薄・中・濃など數段に分けて彩色せるもの。色の種類によりて、朱繧繝・紫繧繝・萌黃繧繝などの別あり。うんげん。うげん。

うんげんにしき 繧繝錦【名】赤地に、縱筋の間に黃・綠・紫・靑などの色にて、菱形又は花菱縞などの模樣を織出したる綾織物。裝飾用に用ふ。うんげん。うげん。

うんげん-べり 繧繝緣【名】疊・茵などの緣の、繧繝錦を用ひたるもの、又その緣を用ひたる疊・茵。古は、天皇・上皇の外は、神佛の前にのみ用ひ、他は禁ぜられしが、足利時代には將軍なども用ふるに至れり。うげんべり。うんげいべり。うんげん。

うん-こ【名】くそ（糞）に同じ。〔小供の語〕

うんこ 雲居【名】〔人〕元和年間の奇僧。土佐の人。攝津國勝尾寺及び陸奧國松島瑞巖寺等に住し、伊達政宗に優遇せられたり。

うん-こく 雲谷【名】一 雲の立ち罩（コ）めたる谷。二〔人〕次條に同じ。

うんこく-けん 雲谷軒【名】〔人〕せっしう（雪舟）の號。

うんこく-じ 雲谷寺【名】周防國山口にありし寺。畫僧雪舟の居りしところ。

うんこく-とうがん 雲谷等顏【名】〔人〕畫家。通稱は治平。肥前國の人。雪舟の畫風を得て氣韻頗る高く、遂に一家をなす。天正頃の人。次條參照。

うんこく-は 雲谷派【名】日本畫の一派。雲谷等顏を祖とす。等顏・雪舟の棲みし雲谷寺に居て、寺號を氏とし、雪舟三世と稱せしに始まる。

うんご-じ 雲居寺【名】山城國京都の今の高臺寺の在るところにありきといふ寺。承和四年、菅野眞道が桓武天皇のために建立せしもの。始は八坂東院といへり。應仁の亂に亡ぶ。散木「人のもとより雲居寺の大佛拜みまゐらんに具せよとありければ」謠曲（自然居士）「かやうに候ふ者は東山雲居寺のあたりにすまひ仕るものにて候ふ」

うん-こん 雲根【名】『雲は山中の岩石の間より出づとていふ』一 山中の岩石の異稱。二 やま（山）の異稱。

うん-ざ 運座【名】〔文〕多數の人集りて、連歌又は俳句をよむに、互に題を出しあひ、各人、各題につきて一句づつをよみ、よみをはりし後、集めて淸書し、互選して點數の多少を定むること。文政年間に始まるといふ。水車吟。ひざまはし。

うん-さい 雲際【名】雲のあるあたり。そら。くもぎは。虛空。「雲際に聳ゆ」

うん-さい 運載【名】船・車などに載せて運ぶこと。

うん-さい 雲齋【名】うんさいおり（雲齋織）の略。

うん-ざい【名】人を罵りて呼ぶ稱。傾城島原蛙合戰「斬らずとも死すべきうんざいども」

うんさい-おり 雲齋織・運齋織【名】地（ヂ）粗く厚く、目を斜に織りたる綿布。足袋の底などに用ふ。雲齋といふ人の織出せるものといふ。うんさい。一代男「雲齋織の袋足袋（フクロタビ）」

うんさい-ぞこ 雲齋底【名】次條に同じ。

うんさい-たび 雲齋足袋【名】雲齋織の布を底にして仕立てたる足袋。うんさいぞこ。

うん-さう 運漕【名】船にて物を運ぶこと。漕運。

うん-さう 蘊藻【名】みづくさ。水草。謠曲（和布刈）「蘊藻の禮奠」

うん-ざう 溫糟【名】次條の略。

うんざう-がゆ 溫糟粥【名】一 古、十二月八日に內裡（ダイリ）に獻上せし一種の粥。餅・燒栗・菜の葉などを細かに刻（キザ）みて、甘酒に混じて造れるもの。二 禪寺にて用ふる一種の粥。普通の米粥に味噌と四角にきざみたる酒糟とを交ぜて製せるもの。臘八（ラフハチ）がゆ。うんざう。〔紅糟粥〕

うんさう-てん 運漕店【名】荷物の運漕を業とする家。

うん-さん 雲散【名】雲の散るごとくちりぢりになること。

うん-さん 雲棧【名】山中にある高きかけはし。くものかけはし。

うん-ざん 雲山【名】雲のかかれる遠方の山。

うん-ざん 運算【名】〔數〕洋算にて、式の示すとほりに數を計算すること。演算。

うんさん-むせう 雲散霧消【名】ちりぢりになりて消え失すること。

うんざり【貌】厭きはつるさま。〔俚語〕

うんざりはく【句】一 艱難す。二 倦（ウミ）飽く。〔俚語〕

うん-し 雲脂【名】頭のふけ。

うん-し【代】『うぬしの訛』なんぢ。おまへ。〔佐渡國の方言〕

うん-じ 云爾【名】『云云爾爾といふべきを略したる語。うんうん（云云）參照』漢文の結びに用ふる語。しかいふ。かくいふ。

うん-しう 雲岫【名】雲のかかれる峰。

うん-しう 雲州【名】一〔地〕いづも（出雲）の略稱。二〔植〕うんしうみかん（雲州密柑）に同じ。

雲州の旦那【句】『雲州の密柑は種の無きものにて、たね（種）とかね（金）とは音の似たる言葉なるよりもぢりていふ』金錢の無き旦那の隱語。〔俚語〕

うんしう-みかん 雲州蜜柑・溫州柑・乳橘【名】〔植〕密柑の一種。實も葉も、常の密柑よりやや大きく、果皮薄く、種子なくして、味最も美なり。もと支那の浙江（セキカウ）省溫州（ウンシウ）より渡りしものと稱すれど、支那には、この種の蜜柑現存せざるがごとしといふ。我が國にては、紀伊國に最も多く產す。うじゆきつ。うんしう。

うんしう-わうらい 雲州往來【名】〔書〕めいかうわうらい（明衡往來）に同じ。

うんじ-がほ 倦顏【名】倦（ウ）みたる樣子。迷惑なる樣子。〔古語〕宇津「身じろくべきやうもなくて、うんじ顏つくりてあり」

うん-しつ 雲室【名】〔人〕江戸西久保（ニシノクボ）の光明寺に住せし畫僧。名は了軌、字は公範、石窓と號す。畫を文晁（ブンテウ）に、學を林氏に受け、詩社を結びて、小不朽吟社といふ。文政十年寂す。年七十五。老君解意・莊叟得意の著あり。

うん-しふ 雲集【名】雲の如く集まること。多く集まること。雲合。雲屯。

うんしふ-むさん 雲集霧散【名】多く集りて、又ちりぢりに散ずること。

うん-しん 運針【名】うんしんはふ（運針法）の略。

うんしん-げっせい 雲心月性【名】『唐詩に「野客雲爲レ心、高僧月爲レ性」とあり』恬澹（テンタン）・無慾なる心。

うんしん-はふ 運針法【名】裁縫科にて針の運びかた。うんしん。

うん-しや 蘊藉・醞藉・濫藉【名】心しとやかに、おくゆかしきこと。をんしや。

うん-しや 運者【名】幸運なる人。しあはせもの。發心集「近江はゆゆしき運者かな」

うん-じや 雲蛇【名】雲の中を翔（カケ）るといふ蛇。龍。用明天皇職人鑑「左の眼ぬけ出でがん火あたりに散亂し、雲蛇に卷かれて飛行する」

うんしやう 運敞【名】〔人〕眞言宗の僧。京都智積院（チシヤクヰン）第七代の住職。もと大阪の人。俗姓は藤原氏。字は元春、泊如と號す。賴運・元壽等に師事し、その學各宗に亙りて深し。元祿六年寂す。年八十。大疏第三重啓蒙・釋論第三重啓蒙など、著書多し。

うん-しやう 運掌【名】物を掌の上にてめぐらす如く、たやすく成しとぐること。

うん-じやう 運上【名】『運送・上納の義』一 公物を運送すること。うんじやうもの。二 德川時代に、幕府より農・工・商等の營業又は運漕の品物に課して、若干の金を納めしめし定率ある稅。みやうが（冥加）參照。

うん-じやう 雲上【名】一 雲の上の方。雲外。雲表。二 禁裡（キンリ）。朝廷。くものうへ。

うん-じやう 醞釀【名】一 酒をかもすこと。釀造。二 天地間の萬物の熟し成ること。

うん-じやう 雲壤【名】『壤は土の意』うんでい（雲泥）に同じ。

うん-じやう 雲狀【名】雲のごとくむらむらとせる狀態。

うんじやう-えもんしふ 雲上衣紋集【名】〔書〕裝束の衣紋の圖・染色等のことをくはしく記せるもの。一卷。著者不詳。

うんじやう-がた 運上方【名】德川時代に運上の事を取扱ひし役人。

うんじやう-しよ 運上所【名】德川時代に運上を取扱ひしところ。

うんじやう-す 運上す【動佐變自】一 やむを得ず承服す。據（ヨンドコロ）なく從ふ。二 しばしば艱難に遇へるために、心萎靡（ヰビ）して物に逆はず。〔俚語〕

うんじやう-そでがき 雲上袖垣【名】葭（ヨシ）にて作りたる庭園裝飾用の垣根。緣には杉丸太を置き、藤蔓（フヂヅル）にて結ひ附く。

うんじやう-びと 雲上人【名】うんかく（雲客）に同じ。

うんじやう-まい 運上米【名】『運送上納の米の義』一 武家時代に工商に課せし租。二 武家時代に、公物を運送せしこと。

うんじやう-もの 運上物【名】うんじやう(運上)㊀に同じ。

うんじやう-れう 運上料【名】うんそうちん(運送賃)に同じ。

うん-しゆ 運輸【名】うんゆ(運輸)を見よ。

うん-じゆ 雲樹【名】雲のこめたる樹。

うん-じよう 雲蒸【名】雲のむらがり起ること。

うん-じよう 雲仍【名】雲孫と仍孫と。遠孫。

うんじよう-りゆうへん 雲蒸龍變【名】『雲立ちのぼり、池中の魚の、龍と變じて、登天する義』㊀好き機會に遭遇して、大事を遂ぐること。㊁有爲の士が、よき機會に遭遇して、功名・富貴の志を遂ぐること。

うんじよ-き 耘耡器【名】〔農〕作物の雜草を除き、且つ土壤を耡(キス)起すに用ふる器具。

うん-しよく 慍色【名】いかれる顏色。はらだちがほ。忿怒の相。

うん-しよく 暈色【名】㊀虹のごとき色。㊁〔鑛〕劈開の罅(ヒビ)などに現るる、虹のごとき色の曲線狀の模樣。

うんしよく-がらす 暈色硝子【名】種種に光線を反射して美麗なる光彩を放つ硝子。

うんず 倦ず【動佐變自】『うみす(倦す)の音便』倦む。厭はしくなる。〔古語〕伊勢「世の中を思ひうんじて」

うんす-うんす【感】力を入るる時などにうなる聲。うんうん。〔俚語〕

うん-すん【感】苦しみうなる聲。浮世風呂「息子はむすこで、便毒(ヨコネ)をふみ出して、うんすんと寢てゐる」

うんすん-がるた うんすん歌留多【名】加留多の一種。明和・安永の頃流行せり。

うん-すゐ 雲水【名】㊀雲と水と。㊁『雲のごとく行き水のごとく流るる意』づだ(頭陀)に同じ。「雲水の行(ギヤウ)」「雲水の生涯」

うんすゐ-そう 雲水僧【名】あんぎやそう(行脚僧)に同じ。

うん-せい 運性【名】人の干支に因りて、天與の運命を定むること。

うん-せい 運勢【名】㊀運(ウン)のいきほひ。㊁うん(運)に同じ。

うん-せい 芸生【名】陰暦十一月の異名。

うん-せい 雲棲【名】世俗を脱して、雲の生ずる處に住むこと。

うん-せう 雲霄【名】㊀青雲のたなびく空。あをぞら。㊁高き地位の譬。

うんせう 雲照【名】〔人〕眞言宗の高僧。出雲國の人。慈雲上人に從ひて出家し、明治十三年東京に出でて目白(メジロ)僧園を開き、仁和寺管長となり、大僧正に進む。佛敎大意・日本國敎論等の著あり。四十二年寂す。年八十三。

うん-ぜう 雲擾【名】世の大に亂るること。「天下雲擾す」「四方雲擾す」

うんせき-ど 運積土【名】〔農〕ちゆうせきど(沖積土)を見よ。

うん-せん 雲箋【名】他人の手紙の美稱。朶雲。華墨。尊翰。

うんぜん-かん 雲饂羹【名】寄物(ヨセモノ)料理の一種。山の芋の擂(ス)りたるに、砂糖と玉子とを練合せて蒸し、雲形に切りたるもの。精進料理の場合には、玉子を加へず。山梔(クチナシ)にて色を附く。

うんせん-がたけ 溫泉嶽・雲仙嶽【名】〔地〕肥前國南高來(ミナミタカク)郡島原半島の中央にある噴火山。最高峰を普賢(フゲン)嶽と稱し、高さ約四八〇〇尺。山勢雄偉、西南の山腹に溫泉あり。泉質は硫黃泉に屬し、皮膚病に効あり。

うんせん-がみね 雲山峯【名】〔地〕和泉・紀伊兩國の境にある山。葛城山脈の最高峯にして、船人の目標となる。雨ノ森。

うんせん-しき 暈渲式【名】〔地〕暈滃(ウンヲウ)式に似て、高低を色の濃淡にて示すもの。

うんぜん-つつじ 溫泉躑躅【名】〔植〕石南(シヤクナゲ)科に屬する落葉小灌木。技・葉細小にして、花も小く、鐘狀にして五裂し、色淡黃なり。肥前國の溫泉嶽に多し。

うん-そ 運祚【名】『そ(祚)は位の意』㊀天皇の御位。㊁しあはせ。天運。

うん-そう 芸窻【名】芸閣の窻。書窻。まなびのまど。

うん-そう 運送【名】㊀うんぱん(運搬)に同じ。㊁〔商〕或一定の場所より他の場所に、貨物又は旅客を送達すること。

うんそう-いたくしよ 運送依託書【名】〔商〕運送を依託する時、運送狀に代へて用ふる證書。運送狀に似たれども、法律上の關係嚴密ならず、極めて簡單なるもの。

うんそう-えいげふ 運送營業【名】〔商〕陸上又は水上にて、物品又は旅客の運送をなす營業。運送店・回漕店・運送問屋など、これなり。運送業。運搬業。運輸營業。

うんそうえいげふ-しや 運送營業者【名】運送營業を爲す人。運送屋。

うんそう-かん 運送艦【名】うんそうせん(運送船)㊁に同じ。

うんそう-くわぶつひきかへしよう 運送貨物引換證【名】〔商〕荷送人の請求により、運送人の交付する有價證券。運送する物品を受取るとき、引換の證となるもの。

うんそう-けいやく 運送契約【名】〔商〕運送品に對して荷送人と運送人との間に取結ぶ契約、即ち甲の人が乙の人の物を運送せんことを約し、乙の人がこれに對して、運賃を拂ふ契約。

うんそうけいやく-しよ 運送契約書【名】〔商〕運送契約の成立を證する書面。

うんそう-げふ 運送業【名】〔商〕うんそうえいげふ(運送營業)に同じ。

うんそう-しや 運送者【名】〔商〕うんそうにん(運送人)に同じ。

うんそう-じやう 運送狀【名】〔商〕運送人の請求により、荷送人より物品の運送につきて交付する證書。その記載すべき事項は商法の規定に基ける一定の形式を要す。いんぼいす。おくりじやう。うんそういたくしよ(運送依託書)參照。

うんそう-せん 運送船【名】㊀運送に用ふる船舶。㊁戰時に、陸海軍に屬して、兵士又は軍需品を運送するに用ふる船。うんそうかん。

うんそうせん-き 運送船旗【名】海軍旗章の一。運送船たることを示すために、その船舶の大檣頭に掲ぐ。横は縱の一倍半の大さなる白色に、紺色の山形二條を描く。

うんそう-ちん 運送賃【名】〔商〕物品又は旅客を運送する報酬として受くる賃錢。運賃。運上料。運送料。運送料金。

うんそう-てん 運送店【名】〔商〕陸上の運送萬般のことに從事する家。普通は運送取扱人たると共に運送人たるを常とす。(回漕店に對して)

うんそう-とりあつかひ 運送取扱【名】〔商〕旅客又は物品の運送を取次ぐこと。即ちその旅客又は荷送人と運送人との間に立つこと。

うんそうとりあつかひ-えいげふ 運送取扱營業【名】〔商〕旅客又は物品の運送の取次をなす營業。運送取扱業。

うんそうとりあつかひ-けいやく 運送取扱契約【名】〔商〕運送品に對して、荷送人と運送取扱人との間に結ぶ契約。

うんそうとりあつかひ-げふ 運送取扱業【名】〔商〕うんそうとりあつかひえいげふ(運送取扱營業)に同じ。

うんそうとりあつかひ-てすうれう 運送取扱手數料【名】〔商〕運送取扱人が運送品を運送人に引渡したる時、その報酬として受取るべき金。

うんそうとりあつかひ-にん 運送取扱人【名】〔商〕運送取扱を營業とする人。運送仲立人。

うんそう-なかだちにん 運送仲立人【名】〔商〕前條に同じ。

うんそう-にん 運送人【名】〔商〕運送營業をする人。運搬者。運送者。

うんそう-ひ 運送費【名】貨物の運送に要する費用。

うんそう-ひん 運送品【名】運送の目的たる物品。

うんそう-ほけん 運送保險【名】〔商〕損害保險の一。陸上又は河川・港灣に於ける物品の運搬中に生じたる荷主の損害を塡補(テンポ)するための保險。特別に制限を加へざる限りは、天災・地變の損害にも應ずべきものとす。(海上保險に對して)

うんそうほけん-けいやく 運送保險契約【名】〔商〕運送保險につきて保險者と被保險者との間に結ぶ契約。

うんそうほけん-しようけん 運送保險證券【名】〔商〕運送保險の契約を表明するために、保險者より被保險者に交付する要式の有價證券。流通性の證券なるが故に、

これを裏書・讓渡することによりて、その保險の目的と共にこれに對する一切の權利を讓與することとなる。

うんそう-めんじやう 運送免狀【名】〔商〕稅關より下付せらるる免狀。貨物名及び船積人と受託者との氏名を記入す。主に沿海貿易に使用せらるるものにて、正・副二通あるを常とす。

うんそう-や 運送屋【名】運送業を營む者。運送營業者。

うんそう-れう 運送料【名】うんそうちん(運送賃)に同じ。

うんそう-れうきん 運送料金【名】前條に同じ。

うんそう-ゐたくじやう 運送委託狀【名】鐵道にて貨物を運送する時に用ふる委託狀。

うんそく-けい 雲速計【名】〔地〕うんきやう(雲鏡)に同じ。

うん-そん 雲孫【名】『雲は輕遠にして浮雲のごとくなる意』㊀仍孫(ジヨウソン)の子。八代目の子孫。㊁遠孫。

うん-だい 芸臺【名】うんかく(芸閣)に同じ。

うんたい-けう 雲帶橋【名】園庭に於ける、木製にて支柱なき橋。

うん-たう 雲濤【名】天際に見ゆる海の波。

うん-だう 雲堂【名】『雲は雲水の僧の諸方より來り集る意』そうだう(僧堂)の異稱。〔禪宗の語〕

うん-だめし 運試【名】幸運か否運かを試みる行爲。

うん-たらたかんまん 云多羅吒干曼(梵 Hūm trat ham mam)【名】〔佛〕不動明王に祈る呪文。

うん-ちう 運籌【名】はかりごとをめぐらすこと。

うん-ちく 蘊蓄【名】㊀積みたくはふること、又その物。たくはへ。㊁深く修養を積みたること。

うん-ちん 運賃【名】〔商〕うんそうちん(運送賃)の略。

うんちん-きって 運賃切手【名】〔商〕次條に同じ。

うんちん-きっぷ 運賃切符【名】〔商〕支拂濟の運賃額を證明するために船舶周旋人より荷主に交付する切符。運賃切手。

うんちん-こめ-ねだん 運賃込値段【名】〔商〕うんちんもちだいか(運賃持代價)に同じ。

うんちん-さきばらひ 運賃先拂【名】〔商〕貨物の完全に運送の目的地に送付せられたる時、その到著地にて、運賃を支拂ふこと。(運賃前拂に對して)

うんちん-とんすう 運賃噸數【名】せきとんすう(積噸數)に同じ。

うんちん-へう 運賃表【名】〔商〕各種の商品に就き、運賃率を詳細に記載したる表。運送業者の發行するもの。

うんちん-ほけん 運賃保險【名】〔商〕損害保險の一。運送賃を保險に付すること。運送人は運送行爲を完全に遂行するにあらざれば、運賃を請求するをえざるが本則なれど、事故のために運送を繼續する能はざるに至り、從ひて運賃を失ふ場合の損失を塡補(テンポ)するためのもの。

うんちんほけんれう-こめ-ねだん 運賃保險料込値段【名】〔商〕『英 Cost insurance and freight』原價及び運賃の値段になほ海上保險料をも加算せるもの。沖著値(オキチヤクネ)。著値(チヤクネ)。到著値段。**うんちんこめねだん**(運賃込値段)參照。

うんちん-まへばらひ 運賃前拂【名】〔商〕貨物の運送を運送者に賴むと同時に、運賃を支拂ふこと。運賃元拂。運賃元地拂。(運賃先拂に對して)

うんちんもち-だいか 運賃持代價【名】〔商〕『英 Cost and freight』商品の原價に、荷造費及びその物の運送費用を算入したる値段。運賃持値段。運賃込直段。**うんちんほけんれうこめねだん**(運賃保險料込値段)參照。

うんちん-もち-ねだん 運賃持値段【名】〔商〕前條に同じ。

うんちん-もとちばらひ 運賃元地拂【名】〔商〕次條に同じ。

うんちん-もとばらひ 運賃元拂【名】〔商〕うんちんまへばらひ(運賃前拂)に同じ。

うんちん-りくあげ-とんすうばらひ 運賃陸上噸數拂【名】〔商〕積込當時の重量・容積に依らずして、到著港に於て貨物引渡の際の重量・容積を標準として支拂ふ運賃。

うんちん-りつ 運賃率【名】運賃の割合。運賃の高。

うんちん-わりまし 運賃割增【名】〔商〕貨物運送の依賴多くして船舶缺乏し、又は戰爭・時變のために航海の危險なる時、その他、豫定の航路變更のため費用を要する場合に、船主が運賃表に定めたる運賃率以外に請求する運賃。

うん-ちや 雲茶【名】ひきちや(挽茶)に同じ。

うん-ちゆう 雲中【名】雲のなか。雲裏。

雲中供養【句】〔佛〕菩薩等が、彩雲の中にて、金蓮花を持ち、その他、種種の妙花を盛りて、阿彌陀佛に從へるさまを、繪にあらはせるもの。

うん-つく 雲突【名】智慧のなき者を嘲りでいふ語。うんつく太郎左衛門。〔俚語〕

うん-づく 運盡【名】運命に任すること。

うんつく-たろざゑもん 雲突太郎左衛門【名】うんつく(雲突)に同じ。〔俚語〕

うんづ-せう 雲圖抄【名】〔書〕正月より十二月までの公事をしるして、圖にあらはし、別に裏書一卷には神樂(カグラ)・節會(セチヱ)・弓場始(ユバハジメ)・臨事祭などの次第をしるせるもの。一卷。藤原重隆の著。

うん-てい 雲梯【名】㊀車輪を附けて運搬を便にしたる、古の攻城用の高き梯子。雲のかけはし。㊁紫宸殿(シシンデン)の北廂(キタビサシ)の東階の別稱。

うん-てい 雲程【名】『萬里青雲の程に上り初むるに譬へていふ』學に入ること。

うん-でい 雲泥【名】『雲と泥との意』懸隔の甚しき譬。霄壤。雲壤。天地。月鼈(ゲツベツ)。十訓「何事をもしたらんには、雲泥の心地して」「雲泥の相違」

うんでい-ばんり 雲泥萬里【名】前條を强めていふ語。うんでんばんでん。うってんばってん。

うんでう-じゆく 紅調粥【名】あづきがゆ(小豆粥)に同じ。下學集「紅調粥、ウンデウジユク。正月十五日赤豆粥也」

うん-てん 運轉【名】㊀めぐりまはること。㊁つかひこなすこと。運用。利用。「資金の運轉」

うんてん-かう 運天港【名】〔地〕琉球國沖繩島國頭(クンヂヤン)郡今歸仁(ナキジン)村にある港。謝名(ジヤナ)灣內の要港。

うんてん-し 運轉士【名】航洋船舶の職員の一。船長の命を受けて、運航のことを分掌するもの。

うんてん-しきん 運轉資金【名】〔商〕りうどうしほん(流動資本)に同じ。

うんてん-しほん 運轉資本【名】〔商〕りうどうしほん(流動資本)に同じ。

うんてん-しゆ 運轉手【名】汽船・汽車・電車・自動車などの機關の運轉をつかさどる人。機關手。

うんでん-ばんでん【名】うんでいばんり(雲泥萬里)の訛。浮世風呂「おらん所の氣ぐらゐとは、うんでんばんでんの違よ」

うん-と【副】多く。たくさん。しこたま。〔俚語〕

うん-どう 運動【名】㊀めぐり動くこと。物體が、その位置を變ずること。㊁攝生のためなどに、身體を動かすこと。㊂散步。遊步。散策。㊃〔理〕『英 Motion』物體の位置又は物體內の諸點の位置の變化すること。㊄〔兵〕行軍・駐軍・戰鬪の際、隊形を變換し又は姿勢を移轉するがために、軍隊を進退・集散する動作。㊅社會上の或目的を達するために、その筋に關係ある人人に、盡力周旋をたのみあるくこと。〔俚語〕

うんどう-あん 雲洞庵【名】越後國南魚沼郡三和(ミワ)村大字雲洞にある曹洞宗の寺。金城山と號し、世に海北禪林といふ。養老年中、藤原房前(フササキ)が母のために創立せしものといふ。

うんどう-がく 運動學【名】〔理〕『英 Kinematics』力學の一分科。物體の運動についての幾何學的性質を論ずる學。

うんどう-かんかく 運動感覺【名】〔醫〕『英 Sensation of movement』全身又は身體の一部を動かす時に起る感覺。關節感覺と筋感覺より成る。

うんどう-き 運動器【名】〔動〕動物が自體の移動を行ふための器官。即ち手・足・翼(ツバサ)・鰭(ヒレ)などの類。

うんどう-くわい 運動會【名】多人數あつまりて、種種の運動・遊戲などを行ふこと。

うんどう-けい 運動計【名】〔天〕日月の運行をはかる器具。

うんどう-こん 運動根【名】〔醫〕脊髓の前角より出でて運動神經の機根たるもの。皮膚・筋肉等に分布す。前根。

うんどう-しってう 運動失調【名】〔醫〕『英 Ataxia』筋肉の働きの調節を缺くこと、即ち隨意運動を調節する力を失ひたるか、又は調節するに困難なること。

うんどう-しんけい 運動神經【名】〔醫〕『英 Motornerve』神經中樞に存する細胞中に生ぜし興奮を外方に傳送し、つひに筋・腺等に及びて、これらの機官に變化・運動等を起さしむる神經。遠心性の神經。（感覺神經に對して）

うんどう-しや 運動者【名】自己又は他人のために運動㊅をなす人。運動屋。

うんどう-しやつ 運動襯衣【名】運動に便なるやうに、半袖(ハンソデ)に仕立てたる襯衣。

うんとう-しゆん 雲頭皴【名】皴(シユン)法の一。山嶽・岩石などを描くに、うづまける雲のごとき筆致を用ふること。

うんどう-ちゆうすう 運動中樞【名】〔醫〕神經中樞中の、運動神經の中樞となる方面。（感覺中樞に對して）

うんどう-ばうし 運動帽子【名】運動・遊戯などを行ふときに用ふる一種の帽子。周緣なく、疾走するに空氣の抵抗少なし。

うんどう-ふく 運動服【名】運動・遊戯などの時に用ふるために、寛闊・輕快に仕立てたる服。

うんどう-まさつ 運動摩擦【名】〔理〕物體の面上を、或他の物體が辷(スベ)り動く際に、その運動を妨ぐる方向に起生する力。

うんどう-や 運動屋【名】うんどうしや(運動者)を卑しめていふ語。

うんどう-りやう 運動量【名】〔理〕『英 Momentum』物體の質量と速度とを相乘したる積。

うん-とん 雲屯【名】うんしふ(雲集)に同じ。

うん-どん 饂飩・溫飩【名】小麥粉に鹽を加へ、水にて固く揑(コ)ね、麵棒(メンボウ)にて薄く展(ノ)べ、細く切りたる食品。うどん。

うんない【感】はいに同じ。〔羽前國の方言〕

うんなん-じやから 雲南麝香【名】支那産の麝香中の最上品。香氣峻烈・快美にして、且つ永く存留す。麝香囊は球狀・滑澤にして、硬毛わづかに生じ、内容物は黄褐色を帶ぶ。

うん-にや【副】いな。然らず。〔俚語〕 浮世風呂「うんにや、ほんのことさ」

うん-ぬん 云云【名】うんうん(云云)を見よ。

うんのう-しき 暈滃式【名】〔地〕うんをうしき(暈滃式)を見よ。

うんのくち-じやう 海野口城【名】信濃國南佐久郡南牧村にありし城。村上氏に屬し、後、武田氏に歸す。

うんの-しようみん 海野勝珉【名】〔人〕金屬彫刻家。水戸の人。東京美術學校教授となり、尋で帝室技藝委員となる。大正四年歿す。年七十二。

うん-のふ 雲衲【名】うんすゐ(雲水)に同じ。

うん-のみ【名】うのみ(鵜呑)の音便。〔俚語〕

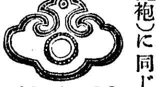
うんの-ゆきのり 海野幸典【名】〔人〕江戸の國學者。通稱源兵衞、柳園また遊翁と號す。幕府の御家人。本居大平に學び、和歌を善くし、嘉永元年歿す。年六十。

うん-のろ【名】うすのろ(薄のろ)の音便。〔俚語〕 潮來婦誌「二朱や三朱は、よけいの仕事をしめえものでもねえが、うんのろにされちやあ、ましやくに合はねえ」

うん-ぱう 運報【名】よき報(ムク)。しあはせ。果報。 愚管抄「義朝といふほどの武士にこの意趣結ぶべしや。運報のかぎり、時の至れるなり」

うん-ぱう 緼袍【名】をんぱう(緼袍)に同じ。

うん-ばん 雲版【名】寺院などにて合圖に打鳴す一種の樂器。青銅又は鐵の板の邊に雲形を鑄附けたるもの。茶道にても用ふ。長板。



（うんばん）

うん-ばん 雲帆【名】遠方の雲の間に、ほのかに見ゆる船の帆、又その船。

うん-ぱん 雲半【名】陰曆十一月の異名。

うん-ぱん 運搬【名】㊀荷物などを持運ぶこと。運送。運輸。㊁〔地〕次條に同じ。

うんぱん-えいりよく 運搬營力【名】〔地〕『英 Transportation』流水・氷河または風などが岩・砂礫・泥土などを運搬する作用。運搬作用。

うんぱん-かうだう 運搬坑道【名】鑛石などの運搬に使用する坑内の道路。

うんぱん-きぢゆうき 運搬起重機【名】起重機の一。車軸上に据附(スヱツ)け、人力又は蒸氣力に由りて、軌條上を移動し得る裝置あるもの。

うんぱん-ぐ 運搬具【名】〔經〕うんゆきくわん(運輸機關)を見よ。

うんぱん-げふ 運搬業【名】うんそうげふ(運送業)に同じ。

うんぱん-さよう 運搬作用【名】〔地〕うんぱんえいりよく(運搬營力)に同じ。

うんぱん-しや 運搬者【名】〔商〕うんそうにん(運送人)に同じ。

うんぱん-ぜい 運搬税【名】〔法〕消費税の一。消費物が取引・賣買のため運搬せらるる場合に課するもの。

うんぱん-にん 運搬人【名】〔商〕うんそうにん(運送人)に同じ。

うんぱん-ひ 運搬費【名】運送に要する費用。

うん-ぴつ 運筆【名】筆の運び方。ふでづかひ。かきかた。

うん-びん 雲鬢【名】鬢の毛の美しきを雲の文(アヤ)に譬へていふ語。

うん-びやう 瘟病【名】ねつびやう(熱病)に同じ。

うんぴやう-ざっし 雲萍雜志【名】〔書〕柳澤淇園(キエン)の隨筆。四卷。

うん-ぷ 運夫【名】荷物を運送する人夫。

うん-ぶつ 雲物【名】きしやう(氣象)に同じ。

うんぷ-てんぷ 運否天賦【名】人の運の吉凶は、天の定むる所なること。うんまかせ。

うんぺい-ざいく 雲平細工【名】雲平糖にて乾菓子(ヒグワシ)を作ること、又その乾菓子。

うんぺい-たう 雲平糖【名】白砂糖と微塵粉(ミヂンコ)と少量の水と擂(ス)りたる薯蕷(ヤマノイモ)とを交ぜて、兩手にてよく揉(モ)みて揑(コネ)固めたる食品。菓子の松葉・吹寄(フキヨセ)・花物などを作るに用ふ。

うん-ぺう 雲表【名】うんぐわい(雲外)に同じ。

うん-ぺき 運甓【名】㊀支那晉の陶侃(タウカン)、荊州に在りし時、百個の甎甓(シキガハラ)を朝は齋外に運び、夕は齋内に運びしかば、人その故を問ひしに、吾まさに力を中原に致さんとするに、悠優して事に堪へざらんことを恐るるためなりと答へし故事。㊁身體を强健ならしめんがために勞働する譬。

うんぺん-じ 雲邊寺【名】阿波國三好(ミヨシ)郡佐馬地(サマチ)村雲邊寺山の頂に在る眞言宗の寺。巨贅山と號す。弘法大師の開基。本尊は十一面觀世音。四國靈場八十八個所の一。

うんぺんじ-やま 雲邊寺山【名】〔地〕阿波國三好郡と讚岐國三豐郡との境界にある山。讚岐山脈に屬し、高さ一八五七尺。一名、佐野山。

うん-ぽ 雲母【名】〔鑛〕きらら(雲母)に同じ。

うんぽ-いろはしふ 運歩色葉集【名】〔書〕いろは順に排列したる辭書。四卷。天文年間の作。著者詳ならず。足利時代の言語、殊に軍記物などを調ぶるに適す。

うん-ぼう 雲甍【名】高く聳えたる屋根。

うんぼう 雲夢【名】〔地〕支那楚の七澤の一。支那の里數にて、方二百里といふ。

雲夢八九を呑む【句】『支那前漢の司馬相如が、夢に、雲夢の如き大澤を八九ばかり呑みて、胸中すこしも苦痛を感ぜざりきといふ故事に本づく』氣宇の極めて大なる形容。

うん-ま 薀魔【名】〔佛〕四魔の一。ま(魔)を見よ。

うん-む 雲霧【名】㊀雲と霧と。㊁深き疑惑の譬。「雲霧に鎖さる」㊂奸臣が君主の聰明を蔽ふ譬。

雲霧を披(ヒラ)いて青天を覩(ミ)る【句】『晉の衞瓘、樂廣に見え、これを評して謂ひし語に本づく』心のはれやかになる譬。〔諺語〕

うん-むん 諺文【名】〔語〕おんもん(諺文)に同じ。

うん-めい 運命【名】うん(運)に同じ。

うんめい-でん 溫明殿【名】『七修類稿に「漢書霍光傳、光之喪、賜㆓東園溫明㆒、服虔

註、以二東園一爲二出レ鏡之所一、予恐溫明鏡名也」とあり。鏡の名に因みしものならん』大内裡（ダイリ）の御殿の一。西面して、綾綺（リヨウキ）殿の後方にあり。廣さ九間四面（一說に七間四面）。その南部は神鏡安置の室にして、賢所（カシコドコロ）又は内侍所（ナイシドコロ）といふ。

うんめい-ろん 運命論【名】㊀〔哲〕『英 Fatalism』人生の賢愚・好運・否運などは、先天的に定まるものにして、人力によりて如何ともなすべからずといふ學說。宿命說。㊁〔文〕支那魏の季康、字は蕭遠（セウエン）の作れる文章。聖賢・帝王・臣庶等、みな時運に遭遇すると否とによりて一盛・一衰・一進・一退するものなる由を說けり。

うん-めん 饂麪【名】饂飩を汁にて煮たる食品。

うん-も 雲母【名】〔鑛〕きらら（雲母）に同じ。

うんも-てっくわう 雲母鐵鑛【名】〔鑛〕輝鐵鑛の一。常に片片相重りて、鱗片狀をなす。製鐵の原料。

うんも-はん 雲母板【名】〔鑛〕薄片の雲母をシエラックにて粘合せしめ、窯（カマ）に入れて熱を與へ、固結して一枚となせるもの。

うんも-へんがん 雲母片岩【名】〔鑛〕『英 Mica-schist』水成岩の一。主成分が石英と雲母とより成れる片岩。その雲母の種類によりて、白雲母片岩・黑雲母片岩・絲雲母片岩の別あり。建築用としては、おもに家屋の土臺石に供せられ、その他、庭石・敷石・壁石などに用ひらる。

うんも-へんまがん 雲母片麻岩【名】〔鑛〕『英 Mica-gneiss』雲母を主なる成分とせる片麻岩。

うん-もん 雲紋【名】雲のごとき斑（フ）または模樣。くもがた。

うん-もん 諺文【名】〔語〕おんもん（諺文）に同じ。

うんもん 雲門【名】〔人〕支那後漢の禪僧。禪に徹底して一派を開き、雲門宗と云ふ。雲門宗は支那の禪に於ける五家・七宗の一。

雲門の屎橛（シケツ）【句】或人、雲門に佛陀とは何者ぞと問ひしに、乾屎橛と咎へたる故事。乾屎橛は糞を取る篦にて、迷悟隔別の迷執を打破せんがためにいへる語なり。鴉鷺合戰物語「祖師の西來、雲門の屎橛」

うんもん-しゆう 雲門宗【名】〔佛〕うんもん（雲門）を見よ。

うんもん-ちく 雲紋竹【名】〔植〕斑竹の一種。幹面に斑紋あり。文房具又は杖などを造るに用ふ。

うん-やだい 雲屋臺【名】雲中に樓閣・臺舍などを現はしたる模樣。錦・甆器（キジ）などに多し。

うん-ゆ 運輸【名】『輸の字の音、正しくは「しゆ」』荷物などを持運ぶこと。うんそう。うんぱん。

うんゆ-えいげふ 運輸營業【名】〔商〕物の運輸をなす營業。運送營業。

うんゆえいげふ-はうこく 運輸營業報告【名】〔商〕運輸營業者に於て發行する營業報告。

うんゆ-きくわん 運輸機關【名】〔經〕貨物の運搬に關する機關の總稱。その內、湖・海・河川・運河・街路・鐵道等を運輸線路といひ、人力車・馬車・荷車・汽車・船舶等の類を運搬具といふ。

うんゆ-げふ 運輸業【名】〔商〕うんそうげふ（運送業）を見よ。

うんゆ-ぜい 運輸稅【名】〔經〕かうつうぜい（交通稅）に同じ。

うんゆ-せんろ 運輸線路【名】〔經〕うんゆきくわん（運輸機關）を見よ。

うんゆ-ちやう 運輸長【名】鐵道の運輸及び鐵道用電氣通信並びに信號に關する事務を掌理し、所部の係員を監督するもの。

うん-よう 運用【名】はたらかすこと。活用。利用。

運用の妙、一心に存す【句】『唐書の岳飛傳に「飛隷二留守宗澤一、澤謂曰、爾勇智・才藝、古良將不レ能レ過、然好二野戰一非二萬全計一、因授以二陣圖一、飛曰、陣而後戰、兵法之常、運用之妙、存二於一心一、澤是二其言一」とあるに本づく』兵法は死物に同じく、これを活用するは、將たる者の一心に存す。〔諺語〕

うんよう-ぎよぐ 運用漁具【名】魚の所在を追ひて、何處にも持運びうる漁具。

うんよう-じゆつ 運用術【名】舵・帆・暗車などにて船舶を操縱（サウジユウ）する術。

うん-ら 雲鑼【名】明（ミン）樂・淸（シン）樂に用ふる一種の樂器。銅製の小鑼十個を、三個づつ同一の木架にかけ、一箇を最上にかけ、小槌にて打つもの。

うん-らい 雲來【名】雲のごとく多く集ること。

うん-らう 雲廊【名】雲のごとく長くつづきたる廊。長廊下。

うん-らん 雲蘭【名】〔植〕きんぎよさう（金魚草）に同じ。

うん-り 雲裏【名】雲のうち。雲中。

うん-りん 雲林【名】雲のかかれる幽邃なる林。

うんりん 雲林【名】〔地〕臺灣島彰化縣の市。別稱、斗六。

うんりん-ゐん 雲林院【名】㊀京都の市外、愛宕（オタギ）郡にありし寺。紫野の西、船岡の東、大德寺の南。もと淳和天皇の離宮たりしを、元慶八年僧正遍照奏して、寺となし、元慶寺の別院とせり。村上天皇の時に再興あり、その後、漸次荒廢して、地を大德寺に屬せしむ。その舊址を「うぢゐ（雲林院）」と稱し、觀音堂なほ存す。寺の名も、普通「うりんゐん」と呼びたり。㊁謠曲の一。攝津國蘆屋（アシヤ）里の公光といふ人、伊勢物語を深く信仰して、夢にその祕事の傳授を受け、都に上りて在原業平の靈にあひしことを作れるもの。うりんゐん。

うん-りやう 雲量【名】〔氣〕雲の空をおほへる分量。日出・日沒の頃最も多く、午前・午後の九時・十時頃最も少し。これを測定するには、目分量を以てするより外、特別の器械なし。

うん-りゆう 雲龍【名】うんりよう（雲龍）に同じ。

うんりゆう-すゐ 雲龍水【名】古、消火の用に供せし喞筒（ポンプ）。龍吐水（リユウドスヰ）。

うん-りよう 雲龍【名】㊀雲中の龍。㊁龍の雲を起して昇天するさまを描（エガ）きたる模樣。

雲龍・井蛙（アセイ）【句】地位の高下又は賢愚などの差の甚しく懸隔せる譬。

うんりよう-かく 雲龍閣【名】唐土の禁中の御殿の一。

うんりよう-がま 雲龍釜【名】雲龍水指（ミヅサシ）の紋繪を武野紹鷗（タケノセウオウ）の寫して所持しをりしを、千休利（センノリキウ）自筆にて寫して鑄させたる茶釜。

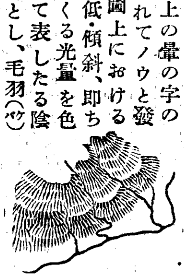
うんりよう-ぶろ 雲龍風爐【名】雲龍釜を掛くるに用ふる風爐。

うんりよう-みづさし 雲龍水指【名】青磁共蓋（セイジトモブタ）にて、内外に雲龍の模樣ある一種の名物水指。

うん-ろ 雲路【名】雲のたなびけるを形容していふ語。

うん-ゐ 云爲【名】言ふことと行ふこと。言行。

うんをう-しき 暈滃式【名】〔地〕『英 Hachure 滃は、上の暈の字の韻に引かれてノウと發音す』地圖上における土地の高低・傾斜、即ち地表の受くる光量を色度によりて表したる陰影を標準とし、毛羽（ケバ）にて示すもの。（暈渲（ウンセン）式・等高線式に對して）



（うんをうしき）

うめ 梅【名】㊀〔植〕薔薇（バラ）科に屬する落葉喬木。春、百花に先だちて花を開く。五瓣にして香氣高く、單瓣あり、重瓣あり、白色なるもの多けれども紅なるもあり。多くは庭前に植ゑ、又、小なるものは盆栽として賞す。實は形圓く、初め青くして熟すれば黃色を帶び、味酸く、生食し又は梅干（ウメボシ）にす。材も種種の細工に用ひらる。からぶんぼく。このはな。なぐさ。㊁梅の實。枕「梅食ひて」㊂うめがさね（梅襲）の略。㊃大阪の劇場の見物場の一部の名目。㊄花ガルタの札の一。二月に當るもの。㊅紋所の一。種類多し。㊆謠曲の一。梅の精あらはれ出でて、古歌と古事とを語ることを作りしもの。

梅と櫻【句】美しき物の二つならびたる譬。

梅に鶯【句】仲のよき譬。

梅の花【句】㊀梅樹に咲く花。㊁うぐひすそで（鶯袖）に同じ。

梅は食ふとも核（サネ）食ふな、中に天神寢て御座る【句】生梅の核に毒あるを警めたる語。〔諺語〕

梅を採る【句】『たんばい(探梅)參照』梅の花のある處を尋ねゆく。

うめ 宜【副】うべ(宜)に同じ。〔古語〕紀「諾、此云二宇毎那利一」

うめ-あな 埋穴【名】物を埋むべき穴。

うめ-あはす 埋合はす【動下二他】足らぬを、他のものにて償ふ。利益にて損を償ふ。

うめ-あはせ 埋合【名】㊀埋合はすること。つぐのひ。おぎなひ。㊁〔商〕相場にて、買ひたる物品が氣に入らぬため、賣手に戻し、更にその補充として、代用の品を買取ること。

うめ-うつぎ 梅五加木【名】〔植〕やまうつぎの一種。葉短く、花、梅に似たり。

うめ-が-え 梅枝【名】㊀梅の枝。㊁三味線に合せてうたふ小唄(コウタ)の一。その詞は「梅が枝の手水鉢叩いてお金が出るならばその時や身請(ミウケ)をそれ頼む」㊂謡曲の一。富士といふ樂人、非命の最期を遂げしため、その妻これを痛みて、この世に執心(シフシン)を殘ししが、法華經の功德(クドク)を仰がんとて、旅僧に一宿を乞ひ、かくて懺悔(ザンゲ)の樂を舞ふことを作りしもの。

うめがえ-でんぶ 梅枝田夫【名】でんぶ(田夫)に同じ。

うめ-が-か 梅香【名】㊀梅花の香氣。㊁京都にて製する一種のねり香。㊂でんぶ(田夫)に同じ。

うめがか-でんぶ 梅香田夫【名】でんぶ(田夫)に同じ。

うめ-がき 梅垣【名】梅の生垣(イケガキ)。

うめ-がさね 梅襲【名】襲(カサネ)の色目の一。表は白・裏は蘇芳(スハウ)。一說には、表は濃紅・裏は紅梅。十一月より二月までの間に用ふ。うめのはなぎぬ。うめぞめ。うめ。

うめ-がし 埋樫【名】〔植〕みぞがし(溝樫)に同じ。

うめ-がね 埋鐵【名】刀劍を鍛ふるにあたり、疵の生じたるとき、その周圍を彫りひろげて、穴一杯に別の鐵を埋込むこと。

うめがはちゆうべゑ-めいどのひきやく 梅川忠兵衞冥途飛脚【名】近松門左衞門の作れる戲曲の一。寶永七年大阪の飛脚屋龜屋忠兵衞と北の新地槌屋(ツチヤ)の遊女梅川との情死せしことを脚色せるもの。俗に、略して梅忠(ウメチユウ)といふ。

うめ-がへし 梅返【名】紅梅色に染めたる染物。おもに羽織の裏地として、元祿のころ行はれたり。若風俗「梅がへしの給羽織」

うめ-かん 梅羹【名】うめやうかん(梅羊羹)に同じ。

うめ-き 埋木・塡木【名】㊀材のすき目又は孔などに、他の木片を塡めてつくろふこと。いれき。㊁うめきざいく(埋木細工)の略。

うめき-ごゑ 呻聲【名】うなりくるしむ聲。うなり聲。

うめき-ざいく 埋木細工・塡木細工【名】種種の木を集め、接合せて、物の形を造り出したる細工物。よせきざいく。うめき。木象眼(モクザウガン)。

う-めく 呻く【動四自】㊀『うは、苦しむ時の聲にて、うなるのうに同じく、めくは接尾語』憂き事と思ひて嘆く。大息をつく。うむく。源氏「かかるわざは、人するものにやあらんと、うちうめきたまふ」㊁うなる。わめく。うむく。著聞「牛、夜ごとに必ずうめくこと侍りけり」㊂苦しみて詩歌を詠(ヨ)出づ。苦吟す。うむく。枕「うめき誦(ズ)じつる歌」㊃うなる(唸る)に同じ。女殺油地獄「うめくほどの金」

うめ-くさ 埋種【名】すきを埋むる物。補足する材料。

うめ-くさ 埋草【名】㊀敵の城を攻むる時、その堀を埋むるための草。太平記「黑丸の城を攻めらるべしとて、堀・溝をうめんために、うめくさ三萬餘荷を」㊁穴藏などの中に貯へおく飼草。

堀の埋草に爲る【句】㊀雜兵などが城攻めに行くを卑下していふ語。㊁したばたらきをなす。緣の下の力持をなす。

うめ-けむし 梅毛蟲【名】〔動〕鱗翅(リンシ)類に屬する蛾(ガ)の幼蟲。青藍色を呈して細長く、背側及び體側に黃色の縱線あり。梅・林檎・梨・桃・李・櫻・薔薇等の葉を食害す。

うめ-けんじらう 梅謙次郎【名】〔人〕民法學者。法學博士。東京帝國大學法科敎授たり。韓國法典調査委員長として京城に滯在中、明治四十三年歿す。年五十一。

うめ-ごよみ 梅曆【名】梅花の開落によりて、季節を知ること。小町踊(秉言)「奏するやけふ早咲のうめごよみ」

うめごよみ 梅曆【名】㊀〔書〕しゆんしよくうめごよみ(春色梅曆)の略。㊁次條の略。

うめごよみ-たつみのその 梅曆辰巳園【名】小說の「春色梅曆」を歌舞伎に脚色したるもの。河竹新七の作。うめごよみ。

うめ-ごろも 梅衣【名】牛皮(ギウヒ)に餡(アン)をつつみ、その上を紫蘇(シソ)にてくるみたる菓子。味、上品なり。遠江國見附(ミツケ)の名產。

うめ-ざき 梅咲【名】〔植〕ばいくわいかりさう(梅花碇草)に同じ。

うめざき-いかりさう 梅咲碇草【名】〔植〕前條に同じ。

うめ-ざけ 梅酒【名】梅の實を浸して釀したる酒。

うめ-ざし 梅插【名】插木の一。插穗の三分の二位まで土中に插入るる方法。

うめ-ず 梅酢・梅醋【名】梅の實を鹽につけて絞りたる汁。味甚だ酸く、紫蘇(シソ)を加へて赤くしたるを赤酢と呼び、梅漬の酢となし、又は物を染め、その他、種種の用とす。又紫蘇を加へざるは白酢といふ。梅漿。

うめ-その 梅園【名】梅の樹を植ゑつけたる園。花を賞し且つ實を得んがためにす。ばいゑん。うめやしき。

うめぞの 梅園【名】姓氏の一。本姓は藤原、閑院家の一門、橋本家の支族。明治維新後、子爵を授けらる。

うめ-ぞめ 梅染【名】㊀梅谷澁(ウメヤシブ)にて染むること、又その染めたるもの。染むる度數の少きは、赤梅と呼びて、黃ばみたる赤色を呈し、その度數の多くして黑ばみたるを黑梅といふ。かがぞめ(加賀染)參照。㊁うめがさね(梅襲)に同じ。

うめだ 梅田【名】〔地〕鐵道東海道線の大阪驛の舊稱。大阪市北區曾根崎町にあり。西成(ニシナリ)線の起點。

うめだ-うんぴん 梅田雲濱【名】〔人〕次條に同じ。

うめだ-げんじらう 梅田源次郎【名】〔人〕志士、儒者。名は定明。雲濱、又、湖南と號す。若狹國小濱の人。山崎闇齋に就きて學び、尊王・攘夷の說を唱へ、幕府の忌諱に觸れて捕縛せられ、安政六年江戶の獄舍に斬らる。年四十四。

うめただ 埋忠【名】姓氏の一。もと京都の刀鍛冶(カタナカヂ)の家より出で、足利時代の重宗と云ふ人に至り、鍔を製造する名工の家として德川時代に及び、寬文頃に、重茂(シゲヨシ)と云ふ人、一代の名工と稱せられ、法橋(ホツケウ)に敍せられたり。

うめただ-さうがん 梅忠象眼【名】梅忠一派の刀工の手に成れる象眼。

うめただ-つば 埋忠鍔【名】梅忠一派の刀工の作れる鍔。鐵・眞鍮(シンチユウ)・赤銅(シヤクドウ)等を材料に用ひ、形狀・圖樣みな一派の意匠に出づ。

うめ-たつ 埋立つ【動下二他】凹みたるところを、土にて埋む。埋む。ふさぐ。

うめ-たて 埋立【名】㊀埋めたつること、又その埋築きたる土地。㊁湯に水を加へてぬるくしたる際。

うめたて-こうじ 埋立工事【名】埋立の工事。

うめたて-しんち 埋立新地【名】新しく出來たる埋地。

うめたて-ち 埋立地【名】うめち(埋地)に同じ。

うめ-だな 梅棚【名】四十八棚の一種。床の間・書院などの脇に設く。

うめだに 梅溪【名】姓氏の一。本姓は村上源氏、久我(コガ)家の支族。子爵たり。

うめだ-もくのじよう 梅田木工丞【名】〔人〕本心鏡智流槍術の祖。名は治忠。近江國甲賀の人。元祿七年歿す。

うめ-ち 埋地【名】河・海・沼・澤などの臨地に沿ふ處を埋めたてたる地。うめたて。うめたてち。

うめ-ちや 埋茶【名】㊀次條の略。㊁うめちやみせ(梅茶見世)の略。

うめちや-ぢよらう 埋茶女郎【名】散茶女郎より一段劣りたる女郎。埋茶見世に居りしもの。うめちや。

うめちや-づくり 埋茶造【名】江戶吉原の女郎屋の店の作り方の一。散茶づくりの次なるもの。元祿の中頃より始まる。

うめちや-みせ 埋茶見世【名】江戶吉原の女郎屋の見世の、埋茶作りにせるもの。うめちや。(散茶見世に對して)

うめ-ちゆう 梅忠【名】**うめがはちゆうべゑめいどのひきやく**(梅川忠兵衛冥途飛脚)を見よ。

うめづ 梅津【名】㊀〔地〕山城國葛野(カド)郡にある村。桂の里の近傍にて、梅ノ宮神社のある處。㊁**うめわか**(梅若)を見よ。

うめ-づけ 梅漬【名】㊀梅の實を鹽又は酒精(アルコオル)にて漬けたる食品。㊁薄く切りたる大根・瓜・薑(シヤウガ)などを梅酢に漬けて赤くしたる食品。

うめ-つ-さつき【名】陰曆二月の異稱。〔古語〕祕藏抄「二月、うめつさ月。鶯のかよはぬ里の宿はあらじ花ざかりなるうめつさつきに」

うめ-つ-さばな【名】冬の梅の異名。〔古語〕藏玉集「梅つさ花、冬梅」

うめ-つ-さをばな【名】〔植〕**からもも**(唐桃)の異名。〔古語〕祕藏抄「となめきのさきさかまきの白妙のうめつさを花まさかりに見ゆ…うめつさを花とは、李(カラモモ)の花なり」

うめつ-づき 梅津月【名】陰曆二月の異稱。〔古語〕莫傳抄「大空の音やしるらん梅津月いづくに聞くも風にほふ頃」

うめづ-どの 梅津殿【名】〔人〕**ふぢはらもとざね**(藤原基實)に同じ。

うめづ-の-おとど 梅津大臣【名】〔人〕前條に同じ。

うめ-つぼ 梅壺【名】**ぎようくわしや**(凝花舍)に同じ。

うめつぼ-の-にようご 梅壼女御【名】〔人〕みなもとさとこ(源基子)に同じ。

うめ-つ-みち 海津路【名】『**うみつみち**(海津路)の轉』**うみぢ**(海路)に同じ。

うめづ-むしこう 梅津蒸講【名】二月の中の酉の日に、山城國葛野(カド)郡東梅津村にて催す講。氏神、松尾神社を祀りて、疱瘡に罹らざる呪(マジナヒ)をなし、大釜に甘酒及び諸味(モロミ)を沸して、酒宴をなす。

うめ-どだい 埋土臺【名】〔建〕地中に埋めてある土臺。

うめ-どひ 埋樋【名】地中に埋めたる樋。うづみどひ。うづみひ。うめみぞ。いひ。

うめ-なふ 諾ふ【動四自】**うべなふ**(諾ふ)に同じ。〔古語〕紀「謝、ウメナヒマヲサン」

うめ-ねず 梅鼠【名】染色の一。小豆色に鼠色を加へたる如きもの。

うめ-ねだ 埋根太【名】〔建〕土などの上に、ぢかに置きてある根太。ころばしねだ。

うめ-の-あめ 梅の雨【句】**あめ**(雨)の條下を見よ。

うめ-の-いろ-づき 梅色月【名】陰曆五月の異名。〔古語〕

うめのき-ごけ 梅樹苔・地衣苔【名】〔植〕地衣類に屬する苔。扁平にて、灰白色をなす。老樹・古岩などに著生す。

うめのき-はら 梅木原【名】梅樹の多き原野。好忠集「山里の梅の木原に春ばかりいほりてをらん花も見がてら」

うめ-の-しま 梅島【名】〔地〕昔、山城國宇治川にありし小島。增鏡「御船にて、槇の島・梅の島・橘の小嶋など御覽ぜらる」

うめのと-まかど 梅門眞門【名】〔人〕長門國府中の城主、毛利甲斐守元義の戲名。文武に通じ、性洒落にして、風雅・遊興を好む。狂歌堂眞顏(マガホ)の門に遊び、俳諧を能くし、遂に判者に列す。天保十四年歿す。

うめのはな-がさ 梅花笠【名】梅の花を頭にかざすこと。古今「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花がさ」謠曲(蘆刈)「名におふ梅の花がさ縫ふてふ鳥の翼にて」

うめのはな-がひ 梅花貝【名】〔動〕瓣鰓(ベンサイ)類に屬する軟體動物。殼は圓く小さく白くして、梅の花瓣に似たり。貝細工の簪(カンザシ)などに作る。散木「春風に浪やをりけんみちのくの籬の島の梅の花貝」

うめのはな-ぎぬ 梅花衣【名】**うめがさね**(梅襲)に同じ。

うめのはな-げ 梅花毛【名】鷹の目の前の毛。

うめのはな-の-さかづき 梅花杯【名】酒を盛りたる盃を、梅鉢の紋のごとく、中央に一つ、周圍に五つ列べたること。左より飲み始め、最後に中央の盃を飲む禮なり。

うめのはな-の-み 梅花飲【名】前條のごとく盃を据ゑて、酒を飲むこと。**うぐひすのみ**(鶯飲)參照。

うめ-の-はる 梅春【名】三味線に合はせてうたふ小唄(コウタ)の一。淸元の曲として名高し。文句は狂歌堂眞顏(マガホ)の作。

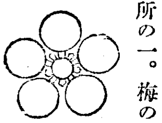
うめのみや-じんじや 梅宮神社【名】山城國葛野(カド)郡梅津村大字西梅津に鎭坐せる神社。祭神は酒解(サカトケ)神・大若子(オホワカゴ)神・小若子神・酒解子(サカトケゴ)神。橘氏の氏神にして、俗間に、姙婦當社の砂を取りて、帶と襟(エリ)とに佩ぶることあり。檀林(ダンリン)皇后の遺風なりといふ。

うめのみや-まつり 梅宮祭【名】山城國葛野(カド)郡梅宮神社の祭禮。四月上申日及び十一月上卯日に行はる。

うめ-の-よしべゑ 梅由兵衛【名】〔人〕大阪の竊盜。本名は梅澁(ウメシブ)由兵衛。元祿中、天王寺屋の小僧長吉を殺して磔刑に處せらる。戲曲には、長吉をその妻の弟として脚色せり。

うめ-ばたけ 梅畑【名】梅を植ゑたる畑。

うめ-ばち 梅鉢【名】㊀紋所の一。梅の花の形を、正面より描(ヱガ)きたるもの。菅原家の紋などこれなり。㊁一閑の作の名物香合。


(うめばち㊀)

うめばち-けぎよ 梅鉢懸魚【名】五角形の懸魚(ケギヨ)。懸魚中の最も簡單なるもの。

うめばち-こばん 梅鉢小判【名】『梅鉢は加賀侯の定紋』德川時代に、加賀國にて使用せし小判。面に梅鉢の極印ありて、金・銀の二種あり。かがこばん。

うめばち-さう 梅鉢草【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。高さ四五寸、葉の形圓く、春、一重にして、梅花に似たる小き白き花、一花梗ごとに一輪づつ開く。ばいくわさう。

うめばち-も 梅鉢藻【名】〔植〕**ばいくわも**(梅花藻)に同じ。

うめ-はつ-づき 梅初月【名】『梅の花の吹きそむる月の義』陰曆十二月の異名。〔古語〕藏玉集「花はまだつぼむ枝かとほの見えてうめはつづきの心色めく」

うめ-びしほ 梅醬【名】梅干の種を去りて、その肉を擂鉢(スリバチ)にて擂(ス)り、砂糖を加へたる食品。梅酥。

うめ-ぼし 梅干【名】㊀熟したる梅の實を、鹽に漬(ツ)け、後に紫蘇(シソ)の葉を加へて、なほ漬くること數日、色の深紅となる頃に取出して、度度、晴天に晒す。蓄へおきて食用とす。醃梅(エンバイ)。霜梅。㊁次條の略。

うめぼし-あめ 梅干飴【名】有平糖(アルヘイタウ)にて、梅干ほどの大さに作りたる菓子。うめぼし。

うめぼし-がほ 梅干顏【名】衰へて皺(シワ)のよりたる顏。

うめぼし-おやぢ 梅干爺【名】年老いて、顏に皺の多くよりたる男。〔俚語〕

うめぼし-づけ 梅干漬【名】梅の實を漬けて、梅干となすこと。

うめぼし-ばば 梅干婆婆【名】年老いて、顏皺の多くよりたる女。〔俚語〕

うめ-ぼふし 梅法師【名】**うめぼし**(梅干)の訛。

うめぼり-こくが 梅暮里谷峨【名】〔人〕江戸の小說家。通稱は反町(ソリマチ)與左衞門。蕣亭(シユンテイ)と號す。もと久留里侯の臣にて、大目附たり。本所埋堀(ウメボリ)の邸に居る。その著、傾城買二筋道、世に名あり。文政四年歿す。年七十二。

うめ-み 梅見【名】梅の花を賞すること。觀梅。

うめ-みぞ 埋溝【名】地中に埋めて、汚水などを除き去る溝。うめどひ。暗渠(アンキヨ)。

うめみ-づき 梅見月【名】陰曆二月の異名。〔古語〕藏玉集「訪ふ人もなきふる里のうめみづき風のなさけを袖に知るかな」

うめ-むき 梅剝【名】皮を剝ぎたる梅の實。

うめ-むしろ 梅莚【名】梅干を干すに用ふるむしろ。上等なる柔き藁を、こまかに編みたるものにて、昔は特に荒物屋などにてこれを賣れりといふ。俚言集覽「うめむしろ。漬梅を干す莚なり」

うめ-むすび 梅結【名】紐などの、梅の花形にむすびたるもの。

うめ-もどき 梅擬・落霜紅【名】〔植〕冬青(ソヨゴ)科に屬する山地自生の落葉樹。高さ一丈餘。葉は梅に似て、枝の間に集りて互生す。夏、淡紫色なる五瓣の小花開く。實は圓くして紅色・白色又は黃色を呈し、落葉後、美觀を增すを、枝のまま瓶に插して

觀賞す。

うめ-もみぢ 梅紅葉【名】梅の木の葉の紅葉せるもの。

うめ-やうかん 梅羊羹【名】梅干を加へて作りたる羊羹。うめかん。

うめ-やき 梅燒【名】擂（ス）りくづしたる魚の肉を、梅の實ほどに丸め、湯びきて、たれ味噌にて味をつけ、青海苔（アヲノリ）を衣につけ、梅の枝にさしたる食品。

うめ-やしき 梅屋敷【名】うめぞの（梅園）に同じ。

うめ-やしぶ 梅谷澁【名】紅梅の根を切りて、濃く煎じ出したる染汁。明礬（ミヤウバン）を交へて用ふ。狩衣・直垂などの色に、木蘭地（モクランヂ）といふは、これにて染めたるなり。

うめ-ゆ 埋湯・塡湯【名】水を加へてぬるくしたる湯。陰陽水。

うめわか 梅若【名】㊀〔人〕うめわかまる（梅若丸）の略。㊁姓氏の一。能樂の家。橘諸兄十世の孫友時、山城國葛野（カド）郡梅津に住して氏とす。後、丹波國に移り、友時の二十八世の孫景久、十六歲にして、後土御門天皇の御覽に入り、「若」の一字を賜はりて、梅若太夫といひしより、爾來姓を梅若と改め、代代、觀世（クワンゼ）派のツレ師たり。

うめわか-き 梅若忌【名】うめわかまつり（梅若祭）に同じ。

うめわか-づか 梅若塚【名】武藏國南葛飾（ミナミカツシカ）郡隅田村なる木母（モクボ）寺の境内にある塚。寬和年間、吉田少將維貞の子なる梅若丸、五歲にして父に後れ、比叡山に登りて修學し、十二歲にして、人かひ信夫藤太に拐（カドハカ）されて此處に來り、貞元元年三月十五日早世す。偶ここに會せる忠丹阿闍梨（アザリ）、あとを弔ひ、なほ遺言して築かせたるもの、即ちこの塚なりといふ。後世、毎年三月十五日、新曆にては四月十五日、木母寺にて追善供養（クヤウ）のため、大念佛會を行ふ、これを梅若祭といふ。

うめわか-まつり 梅若祭【名】前條を見よ。

うめわか-まる 梅若丸【名】〔人〕うめわかづか（梅若塚）を見よ。

うめわか-みのる 梅若實【名】〔人〕能樂家。幼名龜次郎、又、六之丞と稱す。明治四十二年歿す。年八十二。

うも 芋【名】〔植〕いも（芋）に同じ。〔古語〕萬葉「はちす葉はかくこそあれもおきまろが家なるものはうもの葉にあらじ」

うも【代】第一人稱の卑稱。〔俚語〕

う-もくてう 右木鳥【名】もくてう（木鳥）を見よ。

うもし 重し【形二】おもし（重）に同じ。名義抄「秤、ウモシ・ハカリ・カナフ」

う-もじ う文字【名】『もじ（文字）は接尾語』㊀うちかた。內儀。〔女の語〕㊁宇治の茶。〔女の語〕

うもす【動四他】むす（蒸す）に同じ。〔古語〕

う-もん 有紋【名】㊀衣服に紋あるもの。（無紋に對して）㊁能樂などにて、作法正しきこと。（無紋に對して）

う-もん 有文【名】㊀冠の、小さき菱形の紋ある羅（ウスモノ）にて張りたるもの。五位以上の者これを著用し、後世、羅織なくなりては、菱紋（ヒシモン）を綴ぢつけたり。㊁石帶（セキタイ）の一種。唐草・唐花・獅子形・鬼彩等の模樣あるもの。有文の帶。「有文巡方（ジユンパウ）」「有文丸鞆（マルトモ）」㊂〔文〕俳諧にて、言外に殘したる句。（無文に對して）

有文の帶【名】うもん（有文）㊁に同じ。せきたい（石帶）參照。

う-もん 右門【名】うゑもんふ（右衞門府）の略。

う-もん 有門【名】〔佛〕佛敎中の、有敎を說く法門。例へば倶舍（クシヤ）宗にて、三世實有・法體恒有を說く類。

うもる 埋る【動下二自】うづもる（埋もる）に同じ。芳雲集「松はけさ雪にうもれて炭がまの煙ばかりぞ峯にのこれる」

うもれ-いたし 埋れいたし【形二】心はなはだ鬱屈せり。限りなくわびし。〔古語〕源氏「和琴（ワゴン）などの緒も、とり放ちやつされて、ねをたてぬも、いとうもれいたき業なりや」

うもれ-ぎ 埋木【名】㊀年久しく土中に埋れて居たる木。その質、黑檀（コクタン）の如し。仙臺地方に多し。土中より掘出して、埋木細工に用ふ。淸愼公集「山おろしの風は吹けどもそのはしも今はちりこぬ谷のうもれぎ」㊁不遇なる人の譬。うもれみ。和泉式部集「春やくる花や吹くとも知らざりき谷の底なるうもれぎの身は」㊂〔植〕『源賴政が宇治平等院にて、討死の際詠みし「うもれぎの花さくこともなかりしに身のなるはてぞあはれなりける」といふ歌に本づきて名づけたりといふ』いちじゆく（無花果）に同じ。

埋木に花咲く【句】望んで得べからざる譬。平家「埋木の花咲くこともなかりしに身のなるはてぞあはれなりける」

うもれぎ-ざいく 埋木細工【名】埋木にて器物を作ること、又その作れる器物。仙臺の名產。うもれぎ（埋木）㊀參照。

うもれぎ-の 埋木の【枕】埋木は現れぬものなるより、あらはるまじ（現るまじ）・した（下）にかけていふ。萬葉「まがなもてゆげのかはらの埋木のあらはるまじき事あらなくに」同「あまたあらぬ名をしも惜しみ埋木のしたゆぞ戀ふるゆくへ知らずて」

うもれ-ぐさ 埋草【名】樹蔭に生えて、人に知られぬ草。〔古語〕夫木「大あらきのもとあらの下のうもれぐささもおいらくの末ぞいぶせき」

うもれ-ざは 埋澤【名】うもれて荒れすさびたる沼。

うもれ-すくよか 埋れすくよか【貌】心の浮浮とせぬさま。心立のすなほなるさま。〔古語〕源氏「いともうもれすくよかにて、何のはえなきをぞ、くちをしうおぼす」

うもれ-ぼり 埋堀【名】うづもれて荒れたる堀。

うもれ-まつ 埋松【名】物蔭にかくれて人の目につかぬ松。〔古語〕隆信集「二葉よりひく人もなきうもれ松ひとりも年のふりにけるかな」

うもれ-み 埋身【名】世に捨てられて知られぬ人。うもれぎ。〔古語〕能宣集「うもれみのうへはつれなくありながらしたには深き戀もするかな」

うもれ-みづ 埋水【名】草木などの陰にある水。〔古語〕新古今「春日野のおどろの道のうもれみづ末だに神のしるしあらはせ」

うもれ-ゐ 埋井【名】うづもれて荒れたる井。〔古語〕

うや 禮【名】ゐや（禮）に同じ。〔古語〕紀「無レ禮、ウヤナシ」

う-や 烏夜【名】闇の夜。暗夜。

う-や 雨夜【名】雨の降る夜。あまよ。

うや-うやし 恭し【形二】『禮（ウヤ）禮しの義』謹み敬ひてあり。行儀よくあり。慇懃（インギン）なり。

うや-えぼし 禮烏帽子【名】引入れ烏帽子の類にて、烏帽子のかぶりざまの名か。一說には、禮帽の意にて、たてえぼし（立烏帽子）の異稱なるべしと。十訓「白き衣・赤き袴著たまひて、うやゑぼししてぞ居たまひたりける」

うや-かく【動四他】うやまふ（敬ふ）に同じ。〔古語〕續世繼「うやかきて、まさしくありつるものを」

うやかす 飢かす【動四他】うやす（飢す）に同じ。太平記「その身、食に飢ゑて、沙を食ひて死せしことは、母をうやかし殺したりしその因果に依りてなり」

う-やく 烏藥【名】黑褐色にして、一種の臭氣ある舶來の藥品。木根の古きものといふ。

うや-ごと 禮事【名】ゐやごと（禮事）に同じ。〔古語〕

うやす 飢す【動四他】飢ゑしむ。空腹になす。うやかす。〔俚語〕

うや-なし 禮無し【形二】ゐやなし（禮無し）に同じ。〔古語〕紀「無レ禮、ウヤナシ」

うや-はふ 敬ふ【動四他】うやまふ（敬ふ）に同じ。〔古語〕紀「禮儀、ウヤハヒ」

うや-まひ 敬【名】うやまふこと。尊敬。

うや-まふ 敬ふ【動四他】『うやは禮（ウヤ）の義』尊みて禮を盡す。尊敬す。あがむ。ゐやまふ。うやかく。うやはふ。夫木「みさごだにうやまふ磯をうちさらしはらふるしほをなごめかねつる」

敬はば順（シタガ）へ【句】その道又はその人を大切に思はば、それに從へ。〔諺語〕嘉吉物語「入道殿、涙をおさへ、かさねてのたまふやう、何事も、うやまはばしたがへと申す譬あり」

う-やむや 有耶無耶【名】おぼろげなること。曖昧。摸稜（モリヤウ）。模糊（モコ）。

うやむや-の-せき 有耶無耶關・有也無也關【名】〔地〕今の羽前國山形より陸前國仙臺に通ずる奥州街道の笹谷（ササヤ）峠にありし關。鳥海（テウカイ）山の麓にも同名の地ありといふは、誤傳なるべし。むやむやの關。もやもやの關。いなもやの關。伊奈の關。奥の細道「南に鳥海山、天をささへ、その影、江に映りて、西は有耶無耶の關を限り」

うゆ 飢ゆ【動下二自】うう（飢う）の訛。

うゆ 植ゆ【動下二他】うう（植う）の訛。

う-よ 紆餘【貌】㊀うねりくねるさま。まはりどほききさま。遠まはしにたくみに言ひあらはすさま。

う-よ 雨餘【名】雨はれたる後。あまあがり 雨後

う-よう 有用【名】物事の役に立つこと。いうよう。（無用に對して）

うよ-うよ【貌】打群れて入亂れたるさま。うざうざ。〔俚語〕

う-よく 羽翼【名】㊀羽とつばさと。㊁補佐すること、又その人。たすけ。「羽翼すでに成る」

う-よく 雨浴【名】〔醫〕療養上に行はるる沐浴の一。灌水器を以て、全身に冷水をふりかくるもの。

う-よく 右翼【名】㊀右の方のつばさ。㊁〔兵〕軍隊又は艦隊の右の端に位せるもの。（左翼に對して）

うよく-かん 右翼艦【名】〔兵〕右翼に位せる軍艦。（左翼艦に對して）

うよく-たい 右翼隊【名】〔兵〕右翼にそへてある軍隊。（左翼隊に對して）

うよ-ねはん 有餘涅槃【名】〔佛〕『梵 Sopadisesa.nirvāna』小乘にて、涅槃の境界に入りし後も、なほ肉體の存すること、即ちこの世に於て早く涅槃に達したること。煩惱（ボンナウ）を滅盡したる有餘涅槃は、死後、初めてその至完至全に到達するものとし、これを無餘涅槃といふ。されど、みだりに無餘涅槃を彼岸に認めて、死期を急ぐが如きは、佛の嚴禁するところなり。

うよめ【名】〔動〕にほどり（鳰鳥）を云ふ。〔尾張國の方言〕

う-よりやう 禹餘糧【名】㊀〔鑛〕小礫（セウレキ）の、酸化鐵に結合せられたるもの。㊁藤の根にて作りたる食物。飢饉の時には、これをも食用に充て得といふ。

うら 裏【名】㊀表の反對の方。直接には見えぬ方。拾遺「君こふる涙のかかる袖のうらはいはほなりとも朽ちぞしぬべき」㊁家のうしろ。㊂うらち（裏地）に同じ。俳諧古選（祇貞）「裏へ出て聞けばおもてにほととぎす」㊃物事の全く相反する方。反對。うらうへ。うらはら。㊄〔文〕連歌・連俳の初表（シヨオモテ）の次。句數は、十二句を普通とし、百韻にては十四句。而して、その最初の句を、裏角（ウラカド）といふ。即ち初表が六角なる時は、發句より七句目にあたり、初表が八句なる時は、九句目にあたる。㊅うらせんけ（裏千家）の略。㊆相撲（スマフ）にて、本式ならぬ手。㊇〔文〕脚本などの仕組に、事がらの表だちたる方よりも、裏面の世話がかりたる方を主として寫したるもの。例へば忠臣藏にて、敵討の準備のために、樣樣の辛酸を嘗むる次第などを記す類。㊈同じ遊女に二度逢ふこと。（初會（シヨクワイ）・なじみに對して）〔遊里の語〕㊉同じ事を二度行ふこと。⑪肛門。⑫事の内幕（ウチマク）。暗黑面。⑬〔數〕うらていり（裏定理）に同じ。⑭〔文〕懷紙の文字を書かぬ方の稱。

裏かく【句】「裏をかく」に同じ。盛衰記「遠矢にのみぞ射ける。されども、鎧（ヨロヒ）よければ裏かかず」

裏には裏が有る【句】社會の現象は複雜なるものにて、表面より見たるのみにては、その眞相を知るを得ず。〔諺語〕

裏行く【句】表面は從ふやうに裝ひて、裏面にはそれと反對の行をなす。〔俚語〕先代萩「うまくこの場をかへりしも、うらのうらゆく匙かげん」

裏をかく【句】㊀矢が中（アタ）りて、裏まで通る。うらかく。㊁相手の機先を制して、これを妨ぐ。うらかく。うらをくはす。

裏を返す【句】㊀同じ遊女に二度逢ふ。〔遊里の語〕㊁同じ事を二度くりかへす。〔俚語〕

裏をくはす【句】「裏をかく」㊁に同じ。

一の裏【句】〔文〕懷紙（クワイシ）の一の折の裏。うら（裏）⑭參照。

うら 浦【名】海の陸地にいり込みたる所。古今「うきめのみ思ひながるるうらなればかりにのみこそあまはよるらめ」

浦の神【句】浦浦を守る神。紀「浦神、ウラノカミ」

うら 占・卜【名】うらなひ（占）に同じ。〔古語〕紀「卜書、ウラノフミ」萬葉「玉桙の道にいでたち夕うらをわがとひしかば」

うら 心【名】『裏の意。顏を、表の意にておもてといふに對せる語』こころ（心）に同じ。〔古語〕

〃心も無し【句】うらなし（心無し）に同じ。空穗「うちとけてうらもなくこそたのみけれ思の外にみゆるしたひも」

うら 心【接頭】『前條の轉』こころ・おもひなどの意。「うら悲し」「うらはづかし」「うら淋し」

うら 末【代】㊀はし。はて。すゑ。㊁こずゑ。うれ。（もとに對して）萬葉「をさとなる花橘を引きよぢて折らむとすれどうら若みこそ」

うら 己【代】第一人稱。おのれ。われ。おら。うら。〔俚語〕浮世風呂「うらあ方で、山の芋といひます」

うら-あそび 浦遊【名】濱邊に出で、魚介などをあさりて遊ぶこと。謡曲（藤栄）「今日は日もうららかに候ふ間、浦遊に出でばやと思ひ候」

うら-あはせ 裏合【名】『心合せの意』互に心の底をうち明くること。鶉衣「うらあはせの夫婦とはなりける」

うら-あふ 心會ふ【動四自】心、よく似る。〔古語〕續後撰「わきて見ん神のつかさのうらあひてしるき日蔭の山あゐの袖」

うら-あみ 裏編【名】編物の編み方の一。

うら-いせん 有來錢【名】『有來新兵衞の願に由りて鑄造（シユザウ）せしより名づく』元文元年山城國鳥羽の横大路（ヨコオホヂ）にて鑄造せし寛永錢。銅色黑ずみて精良ならず。

うら-いそ 浦磯【名】いそ。はま。萬葉「濱びよりうらいそを見つつ」

うら-いた 裏板【名】㊀物の裏面にある板。㊁天井なき室の、屋根裏に張附けたる板。㊂天井。大鏡「寢殿うらいたのかべの、すこし黑かりければ」

うら-いちじゅん 裏一巡【名】〔文〕連句にて、名殘の折となりて、座中の銘銘（メイメイ）が一句づつ附くること。

うら-いん 裏印【名】實印の裏に作りおく印。餘り重大ならざる場合に用ひられしもの。現今の認印（ミトメイン）はこれより出でしものといふ。うらはん。

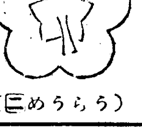
うら-うち 裏打【名】㊀紙又は革などの裏に、更に紙又は布などを貼（ハ）りて、厚くすること。㊁裏を附けたる直垂（ヒタタレ）。室町時代には、直垂と素襖（スアウ）とは貴賤通用の常服にて、直垂は主に裏あるものを用ひ、素襖は單（ヒトヘ）なるもの用ひしより、裏打といへば直ちに直垂の意ともなりたり。㊂醪（モロミ）を搾（シボ）りたる酒粕の、未だ醱酵せざる米粒を多く含むもの。

うらうづ-がひ 裏渦貝【名】〔動〕腹足（フクソク）類に屬する貝。殼は上尖り下平にして、底に渦狀の文あり。彩りて玩具などとす。夫木「たち騷ぐ蘆のもと葉をかきわけてうらうづ貝をひろひつるかな」

うら-うつり 裏移【名】〔文〕連歌・連俳にて、表より裏へ移るべき場合の句、即ち歌仙にては七句目、百韻にては九句目。

うら-うへ 裏表【名】㊀裏と表と。うらおもて。表裏（ヘウリ）。㊁うらはら（裏腹）㊁に同じ。㊂前後又は左右相對すること。宇治「うらうへに二ならびに居なみたる鬼、數知らず」

うら-うめ 裏梅【名】㊀襲（カサネ）の色目の一。表は白・裏は蘇芳（スハウ）。春の初に用ふ。㊁紋所の一。梅の花を裏面より見、萼（ガク）と花柄とを中心としてあらはしたるもの。


（うらうめ㊁）

うら-うめ 裏塡【名】〔建〕うらごめ（裏込）に同じ。

うら-うら 浦浦【名】ここの浦、かしこの

浦。多くの浦。金葉「四方の海の浦浦ごとにあされどもあやしや見えぬ生けるかひかな」

うら-うら 【貌】 うららか。のどか。うらら。〔古語〕 枕「やよひ三日、日はうらうらとのどかに照りて」 萬葉「うらうらに照れる春日に」

うら-うらし 【形二】 のどけし。ほがらかなり。うららけし。〔古語〕

うら-えり 裏襟 【名】 著物の襟の裏に縫ひつくる小切。えりうら。

うら-おくび 裏衽 【名】 袷・綿入などの如く、裏と表とより成れる衣服の、裏面の衽。

うら-おし 裏押 【名】 かなど(金砥)に同じ。

うら-おもしろし 心面白し 【形一】 何となく面白く感ず。〔古語〕

うら-おもて 裏表 【名】 **一** うらうへ(裏表)一に同じ。**二** 事がらの表面と內情と。かげひなた。表裏(ヘウリ)。

うら-おもふ 心思ふ 【動四自】 **一** かれこれと思ひなやむ。心配す。うらもふ。〔古語〕 名義抄「慮、ウラオモフ、オモバカリ」 **二** ためらふ。たゆたふ。狐疑す。猶豫す。〔古語〕 名義抄「猶豫、ウラオモフ」

うらが 浦賀 【名】〔地〕 相摸國三浦郡にある町。三浦半島の東岸。海に臨む。造船所あり。嘉永六年及び安政元年に、米國のペルリ(Perry)提督の軍艦を率ゐ來りて通交を求めたる地。

うら-が-かた 占方 【名】 うらかた(占方)に同じ。狂言(横座)「うらがかたに占はせて御座れば、辰巳の方にあると申す」

うら-がき 裏書 【名】 **一** 紙の裏面に、文字を書くこと。**二** 古き軸物などの裏面に、その僞物にあらざることを證明する意味の文句を書くこと、又その文句。**三** 古、書籍の形が卷物なりし時代に、その裏面に、表に漏れたる事又は註釋などを書きしこと。(綴本の形となりてよりは、本文の末に記入することとなりて、奥書(オクガキ)といへり) **四** 江戸時代に、訴訟の文書の裏面に、判決文又は出廷期日などを記ししこと。**五** 書札の裏に自己の名を記すこと。**六** 〔商〕『英 Indorsement 又は Endorsement』 手形あるひはその他の證券などに、權利の移轉を證するため、被裏書人の姓名又は商號・移動の年月日及び裏記人の名を記すこと。但しその記載の場所は、裏面とのみに限られたるにあらず、又、被裏書人の姓名を記さざることもあり。

裏書の連續 【句】〔商〕 手形又はその他の證券の、裏書によりて、甲より乙へ、乙より丙へと、中斷なく順次に轉轉して流通すること。

うらがき-きんし 裏書禁止 【名】〔商〕 手形又はその他の證券の發行人または所持人が、裏書の連續を中途に妨止して、爾後、流通し得ざらしむるために、その旨を記載すること。

うらがき-にん 裏書人 【名】〔商〕 手形の裏書をなしたる人。

うらがき-もの 裏書物 【名】 芝居の大道具・小道具・衣裳・鬘(カツラ)などの類。〔旅芝居又は壯士芝居の語〕

うらがき-ゆづりうけにん 裏書讓受人 【名】〔商〕 裏書によりて、手形又はその他の證券を讓り受くる人。

うらがき-ゆづりわたし 裏書讓渡 【名】〔商〕 手形又はその他の證券の裏面に、その手形などを讓り渡すむねを明記すること。

うらがき-ゆづりわたしにん 裏書讓渡人 【名】〔商〕 裏書により、手形又はその他の證券を他に讓り渡す人。

うら-かく 裏かく 【句】 うら(裏)の條下を見よ。

うら-かくし 裏隱 【名】 洋服の裏側のかくし。うちかくし。

うら-がくる 浦隱る 【動下二自】 浦の陰にかくる。新葉「わが心蔦の細江をこぐ舟の君にぞよせしうらがくれても」

うら-がくる 浦隱る 【動四自】 前條に同じ。〔古語〕 萬葉「風吹けば浪かたたむとさもらふに蔦の細江にうらがくりをり」

うら-がこひ 裏圍 【名】 庭園の裏手にあたる圍。

うら-がしや 裏貸屋 【名】 家の後の方に建てたる貸屋。うらだな。(裏借屋に對して) 一代女「裏貸屋に住める女」

うらがす 【動四他】 うらぐやうにす。慰め喜ばす。たのします。〔古語〕 出雲風土記「宇良加志給鞆、猶不レ止レ哭」

うら-かぜ 浦風 【名】 浦に吹く風。はまかぜ。

うらかぜ-ぐさ 裏風草 【名】〔植〕 かはらざいこ(川原柴胡)に同じ。

うら-かた 裏方 【名】 公家衆又はその他の貴人の奧方。おうらさま。おうらごてん。

うら-かた 占形 【名】 **一** 占(ウラ)にあらはれたる象(カタチ)。うらがかた。うらはひ。〔古語〕 うらなひ(占)參照。紀「占狀、ウラカタ」 **二** うらなひしや(占者)に同じ。謠曲(大江山)「大江山の鬼神の事、占方の言葉に任せつつ、賴光保昌に仰せつけらる」

うら-かたぎ 裏形木 【名】『かたぎ(形木)一を見よ』 裝束の裏に模樣を附けたるもの。人車記「小舍人・童・牛飼等、裝束裏形木」

うらかた-ばんしよ 裏方番所 【名】 浦浦に設けたる番所。ものみどころ。

うら-がつ 浦賤 【名】『やまがつ(山賤)參照』 濱べに住む賤しき漁夫。〔古語〕 和歌初心抄序「田夫・野人・うらがつ・山がつ」

うら-かど 裏角 【名】〔文〕 うら(裏)五を見よ。

うら-がな 裏假名 【名】 漢字の左傍に附くる振假名(フリガナ)。

うら-がなし 心悲し 【形二】 心の中、悲し。〔古語〕 萬葉「春の野に霞たなびきうらがなしこのゆふかげに鶯鳴くも」

うら-がね 裏鐵 【名】 鐙などの裏面に打附くる鐵の薄板。

うら-がね 裏曲・裏矩 【名】 曲尺(カネジヤク)の裏に目盛せる尺度。その一尺は、表の一尺四寸一分四厘二毛一絲にあたる。うらじやく。裏の目。

うらかは 浦河 【名】〔地〕 **一** 日高國七郡の一。アイヌの部落多し。**二** 日高國浦河郡にある町。北海道廳浦河支廳を置く。

うら-がは 裏側 【名】 裏のかた。裏面。(おもて側に對して)

うらかは-こんぶ 浦河昆布 【名】〔植〕『浦河も、三石も、共に日高國の地名』 みついしこんぶ(三石昆布)に同じ。

うら-がふ 裏甲 【名】〔建〕 日本建築にて、軒附(ノキツケ)下にある化粧板(ケシヤウイタ)。

うらが-ぶぎやう 浦賀奉行 【名】 江戸幕府の職制の一。浦賀港に出入する船舶及び奧羽より大阪に行く廻船の米穀などの監査を司り、又、相摸國の公事(クジ)訴訟をも取扱ひし役。老中の管下に屬し、定員は、はじめ一人、後、二人。享保五年十二月より設けらる。その以前は、伊豆國下田にて、當職のことを行ひ、下田奉行と稱したり。

うら-がへし 裏返 【名】 うらがへすこと。

うら-がへす 裏返す 【動四他】 裏を返して、表となす。ひっくり返す。

うら-がへる 裏返る 【動四自】 **一** 裏が返りて、表となる。ひっくりかへる。**二** 味方が敵となる。內應す。うらぎりす。

うらかみ 浦上 【名】 **一** 姓氏の一。足利時代の末における中國の豪族。紀貫之(キノツラユキ)二十二代の孫行景、播磨國西方浦上に住して氏とす。初は赤松氏の臣。後、織田信長に從ひしが、家臣宇喜田直家の謀逆によりて衰ふ。**二** 〔地〕 紀伊國東牟婁(ヒガシムロ)郡にある小港灣。

うら-がみ 裏紙 【名】 本紙の裏に添へたる紙。

うらかみ-ぎよくだう 浦上玉堂 【名】〔人〕 文人畫家。備前國の人。初め元・明の畫法を學び、後、一派の風を起し、水墨の山水に長ず。文政三年歿す。年七十六。

うらかみ-しゆんきん 浦上春琴 【名】〔人〕 畫家。玉堂の子。初め元・明の古法を學び、遂に一流を出し、父の畫法と大にその趣を殊にし、山水・花鳥・草木の畫に巧みなり。弘化三年歿す。年六十八。

うらかみ-むらむね 浦上村宗 【名】〔人〕 武將。則宗の孫、宗助の子。大永二年その主赤松政村を弑し、後、細川高國を助け、細川晴元の兵と戰ひて敗死す。

うら-がる 末枯る 【動下二自】 草木の末が枯る。うはがる。新古今「うらがるる淺茅が原の刈萱の亂れて物を思ふ頃かな」

うら-がれ 末枯 【名】 うらがるること。萬葉「しらとほふをにひた山のもる山のうらがれせななとこはにもがも」

うら‐き 末木【名】樹木の末の方。こずゑ。（もと木に對して）

うら‐ぎく 裏菊【名】㊀菊の花を裏より見たる形の模樣。㊁鎧に附くる菊花形の飾金具。㊂〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は線形にて、秋、淡紫色の花、繖形(サンケイ)に排列せる小頭花序をなして開く。はましをん。〔金盞菜〕

うら‐きど 裏木戶【名】裏口の木戶。（おもに芝居にていふ）

うら‐ぎぬ 裏衣【名】衣のうら。

うら‐ぎん‐しじみ 裏銀小灰蝶【名】〔動〕小灰蝶(シジミテフ)の一種。翅(ツバサ)の裏の銀白なるもの。

うら‐きもん 裏鬼門【名】鬼門と反對の方角、即ち西南方。鬼門に準じて忌み避く。

うら‐ぎり 裏切【名】㊀戰爭中に、味方の者が、ひそかに敵に通じて、後より切り出づること。敵に欵(クワン)を送ること。內應。內通。㊁同志のものが、意外に反對に立つこと。裏をかくこと。反應。

うら‐ぐ 裏具【名】〔美〕『必ず具(グ)を用ふるよりいふ』日本畫の人物・花鳥等の密畫にて、絹地の裏に彩色を施すこと、又その彩色。色彩を柔ぐるためにするなり。うらざいしき。**うらはく**(裏箔)參照。

うらぐ【動下二自】面白くなりて、心浮きたつ。うれしくなる。〔古語〕**うらがす**參照。記「この獻れる大御酒(オホミキ)にうらげて」

うら‐くぎ 裏釘【名】打ちたる釘の、物の裏に拔け出でたるもの。

裏釘を返す【句】㊀裏釘の端を曲げて、表の方へ打返す。（物のひきかかりて傷つくるを防ぐためにす）㊁念の上にも念を入れて事をなす。〔俚語〕

うらく‐ぎれ 有樂切【名】織田有樂齋の祕藏せし名物切。緞子(ドンス)にて、花色の地に、薄き花色のこまかき網目の地紋あり、その上に雲龍を飛紋に織出せるもの。

うら‐ぐし 卜串【名】大嘗會の時、悠紀(ユキ)・主基(スキ)の國郡卜定の名を記せる紙。

うら‐ぐち 裏口【名】家のうしろの出入口。勝手口。せど。うらせど。（表口に對して）

うら‐くづれ 裏崩【名】味方の後陣の陣容の崩解すること。味方の後方部隊の亂るること。

うら‐ぐはし 心細し【形二】樂し。おもしろし。〔古語〕萬葉「うらぐはしふせの水うみにあま船にまかぢかいぬき」

うらぐは‐の‐き 末桑木【名】桑の木の末(ウラ)。桑の木の梢。〔古語〕紀「つぬさはふ磐之媛(イハノヒメ)がおほろかにきこさぬうらぐはのき」

うら‐ぐみ 裏組【名】㊀八橋(ヤツハシ)流の琴曲の名目の一。薄衣・桐壺(キリツボ)・須磨・四季・扇・雲井の六曲あり。㊁三味線の彈きかたの一。柳川撿挍の作。賤(シヅ)・錦木・青柳・早船・八幡(ヤハタ)・翠簾(スミ)・なよしの七曲あり。

うらく‐りう 有樂流【名】茶道の一流。織田有樂齋を祖とす。

うら‐け 裏家【名】うらせんけ(裏千家)に同じ。

うら‐け 裏毛【名】羅紗又はメリヤスの襯衣(シャツ)などの、裏面に毛を織出したるもの。

うら‐ご 裏濃【名】裏の色の濃きこと。

裏濃の蘇芳(スハウ)【句】襲(カサネ)の色目の一。表は薄蘇芳(ウススハウ)・裏は蘇芳。樺櫻(カバザクラ)に似たり。

うら‐こうぢ 裏小路【名】うらやこうぢ(裏屋小路)に同じ。

うら‐こかる 裏濃かる【動良變自】『こかるは濃く有るの意にて、連體形にのみ用ひ、心焦(ウラコガ)るに言ひかけたるもの』心ふかく戀ひしたふ。〔古語〕拾遺「神無月しぐれしぬらし葛の葉のうらこかる音に鹿もなくなり」

うら‐こし 裏濃し【形一】裏の方、濃き色なり。裏濃(ウラゴ)にてあり。夫木「春またずいそぐ花野の梅が枝にうらこき雪の降らぬ日ぞなき」

うら‐こし 浦越【名】㊀浦を越すこと。㊁浦の方より陸へ吹く風。

うら‐ごし 裏漉【名】水嚢(スヰナウ)を倒にせるがごとき形にて、餡(アン)の類を漉すに用ふる器、又この器にて漉したるもの。

うら‐ごし 裏腰【名】袴の腰板の裏に附くる布。

うら‐ごと 占事・卜事【名】うらなひごと。うらへ。うらなひ。〔古語〕

うら‐こひ 心戀【名】うらこふること。戀慕。〔古語〕萬葉「くれなゐの赤裳すそびき少女らは思ひ亂れて君まつとうらこひすなり」

うら‐こひし 心戀し【形二】心の中、戀し。うらこほし。〔古語〕萬葉「うらこひしわがせの君はなでしこが花にもがもな朝なさな見む」

うら‐こふ 心戀ふ【動上二他】心の中にて戀ひ慕ふ。〔古語〕萬葉「わがせこにうらこひをれば天の川夜船漕ぎとよむかぢのと聞ゆ」

うら‐こほし 心戀し【形二】うらこひし(心戀し)に同じ。〔古語〕記「おふをよし鮪(シビ)つく蜑よしがあればうらこほしけむ」

うら‐ごめ 裏込【名】〔建〕『英 Back-filling 又は Backing』橋梁・隧道(トンネル)などの工事に於て、アアチを作り、又は橋臺を積みたる場合に、その背部に土砂・砂利又はコンクリイトを塡充すること。うららめ。うらづめ。

うら‐ごゑ 裏聲【名】〔音〕高くうたふべきところを、ことさらに低く輕く發する聲、即ち地聲(ヂゴエ)をあらはさぬもの。小町踊(貞室)「うらごゑもよしや難波のほととぎす」同(家明)「うらごゑが友呼びかはす濱千鳥」（この二つの例、みな浦聲の意にいひかけたり）

うら‐ごゑ 浦聲【名】海上にて囀(サヘヅ)る鳥の聲。前條の例參照。

うら‐ざいしき 裏彩色【名】〔美〕うらぐ(裏具)に同じ。

うら‐さく 裏作【名】〔農〕あとさく(後作)に同じ。

うら‐ざくら 裏櫻【名】紋所の一。櫻の花を裏より見、萼(ガク)と花柄とを中心に現はしたるもの。

うら‐ざし 裏差【名】こづか(小柄)に同じ。

うら‐ざしき 裏座敷【名】母屋(オモヤ)より裏にあたれる座敷。（表座敷に對して）

うら‐さだめ 卜定【名】占(ウラナヒ)にて、事の吉凶を定むること。

うら‐ざと 浦里【名】浦ちかき處にある村里。漁村。

うら‐さびし 心寂し【形二】心の中さびし。こころぼそし。〔古語〕古今「君まさで烟たえにし鹽釜のうらさびしくも見えわたるかな」

うら‐さぶ 心寂ぶ【動上二自】心ぼそく思ふ。心さびしく感ず。〔古語〕萬葉「はしきよし君はこのごろうらさびて嘆きぞいます」

うら‐さぶ 浦寂ぶ【動上二自】浦の景色、荒れて寂し。萬葉「ささなみの國つ御神のうらさびて荒れたる都見れば悲しも」

うら‐ざん 裏棧【名】〔建〕天井板又は扉などの裏面に取附けたる棧。

うら‐し 占師【名】おんやうじ(陰陽師)に同じ。

うらじ 連【名】むらじ(連)に同じ。〔古語〕紀「日下部連(クサカベノウラジ)」

うら‐しげどう 末重籐【名】すゑしげどう(末重籐)に同じ。

うら‐しほ 浦潮【名】浦にさしくる潮。〔古語〕萬葉「秋山の紅葉をかざしわがをればうらしほみちく未だあかなくに」

うら‐しま 浦島【名】㊀浦にある島。濱松「いかなれや浦島にのみ波かけて高瀬の濱によらじとはする」㊁〔動〕腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。殼(カラ)は質堅くして、その口狹く長く、螺塔低く、甲は小くして扇形をなす。㊂**うらしまのこ**(浦島子)に同じ。㊃謠曲の一。官人、勅によりて、丹後國の浦島明神に參詣に赴きしに、浦島の神あらはれ、天女をして舞はしめ、龍神をして、不死の藥を君に捧げしむる趣を作れるもの。古稱、浦島の龜。

浦島の箱【句】浦島の子の、龍宮より持歸れりといふ箱。たまてばこ。山家「いひすてて後の行方を思ひはてばさてさはいかにうらしまのはこ」

うらしま‐が‐こ 浦島子【名】〔人〕**うらしまのこ**(浦島子)に同じ。萬紫千紅「戶隱大明神奉納。この神は浦島が子の箱ならであまの岩戶をあけて嬉しき」

うらしま‐さう 浦島草・虎掌【名】〔植〕天南星(テンナンシヤウ)科に屬する多年生の草。山野の

陰地に自生す。形は螢草に似、莖は高さ一二尺にて圓く中空に、葉は掌狀に分裂し、五六月頃、天南星（テンナンシャウ）に似たる花を開く。

うらしま-だいみやうじん 浦島大明神 【名】丹後國竹野（タカノ）郡網野町にある神社。祭神は浦島子なりといふ。網野（アミノ）神社。

「こ（浦島子）の俗稱。

うらしま-たらう 浦島太郎 【名】うらしまの

うらしま-のかめ 浦島龜 【名】うらしま（浦島）四の古稱。

うらしま-のこ 浦島子 【名】昔、丹後國與謝（ヨサ）郡に住みきといふ人。ある日、魚を釣りに行きしに、大なる龜の化して美人となれるものに逢ひ、伴はれて常世（トコヨ）の國に赴き、そこにて三年を經、故郷を思ひ出して歸らんことを告ぐるに、美人、形見にとて、手箱を與ふ。かくて故郷に歸り來れば、世は代り果てて、幾百年を經たるかを知らず。不思議なりとて、彼の箱を開き見るに、中より雲の如きもの立上りて、常世の國の方に棚引くと見ゆるや、忽ち髮白く顏皺みて老い果てたりといふ。正しくは水江（ミヅエ）浦島子といひ、水江浦嶼子とも書けり。うらしま。うらしまがこ。萬葉「水の江の浦島の子が鰹つり鯛つりかねて」

うらしま-のはこ 浦島の箱 【句】うらしま（浦島）の條下を見よ。

うら-じんじや 宇良神社 【名】丹波國與謝（ヨサ）郡本莊（ホンジヤウ）村にある神社。浦島子を祀れるものといふ。 「じ。

うら-じやく 裏尺 【名】うらがね（裏矩）に同

うら-じやくや 裏借屋 【名】裏貸家を借りて住むこと。うらだなずまひ。（裏貸屋に對して） 蕪村「白露の身や葛が葉の裏借屋」

うら-しようもん 浦證文 【名】江戸時代に、米穀・貨物を回漕するに際し、航路に當れる港の浦役所にて、風浪の難などのために荷物の減損せし旨などを證せし書狀。

うら-じろ 裏白 【名】**一** 紙を横に二つに折りて、表の方のみに文字を書きたるもの。**二** 紺足袋（コンタビ）の裏の白きもの。**三** 草木の葉の裏の白きもの。**四**〔植〕裏白科に屬する多年生の草。暖地に自生し、高さ四五尺、葉は常綠にして羽狀に分裂し、上面は鮮

綠、裏面は白し。新年の飾りに用ふ。ほなが。おほしだ。**五**〔植〕かはらさいこ（川原柴胡）に同じ。**六**〔植〕いぶきよもぎ（伊吹艾）に同じ。**七** うらじろのき（裏白木）に同じ。**八** まじ（眞風）に同じ。**九** うらじろど（裏白戸）の略。**十** うらじろれんが（裏白連歌）の略。寒川入道筆「北野裏白の事」 **十一** 有韻の連俳の、後を略して、表八句のみなるもの。**十二** 南京青磁香爐（ナンキンセイジカウロ）の、裏面の白きもの。形は一樣ならず。

うらじろ-あかざ 裏白藜 【名】〔植〕藜（アカザ）科に屬する一年生の草。丈低く、直立せずして横臥す。葉は長楕圓形にて、表は綠に、裏は帶白色。花は穗狀花序にて淡綠色。いたる所の原野に自生す。

うらじろ-いちご 裏白莓 【名】〔植〕薔薇（ライバ）科に屬する蔓生の落葉灌木。幹に赤色の毛茸密生し、葉は羽狀複葉にて、各小葉は卵形にして、裏に白色の軟毛密生す。花は春開きて白色、實は熟すれば、濃き黄ばみたる紅色を呈し、味、甘酸にして食ふべし。えびがらいちご。さるいちご。

うらじろ-がし 裏白樫 【名】〔植〕殼斗（カクト）科に屬する暖地自生の常綠喬木。高さ三四丈に達し、葉は細長くして裏白く、五月頃白樫（シラカシ）に似たる花を開く。材質堅くして、薪炭又は器具製造用に供せらる。ほそばがし。やなぎがし。

うらじろ-ぎく 裏白菊 【名】〔植〕いはこぎく（岩小菊）**一**に同じ。

うらじろ-ぐす 裏白樟 【名】〔植〕樟の一種。葉は普通の樟に似て厚く、且つ裏やや白く、花は天竺桂（ヤブニクケイ）に似、材は堅くして諸種の用に供せられ、又、根幹・枝葉より樟腦を取り、實よりは蠟を取る。

うらじろ-くわ 裏白科 【名】〔植〕隱花植物、羊齒（シダ）類に屬する一科。

うらじろ-たで 裏白蓼 【名】〔植〕けいはたで（けいは蓼）に同じ。

うらじろ-ど 裏白戸 【名】土藏の入口にある引戸。表側は漆喰塗（シックヒヌリ）。うらじろ。

うらじろ-のき 裏白木 【名】〔植〕薔薇（バイラ）科に屬する山地自生の落葉喬木。高さ約四丈に達し、葉は廣卵形にして鋸齒あ

り、裏に白き毛を密生す。夏、葉の間に小さき白き花むらがり開き、實は櫻の實の如く、材は堅くして、器具製造に供せらる。うらじろ。

うらじろ-もみ 裏白樅 【名】〔植〕**一** だけもみ（だけ樅）に同じ。**二** 松杉（ショウサン）科に屬する常綠喬木。高さ約三丈に達し、周圍一丈三尺に及ぶ。樹皮は帶黄褐色 樹形及び葉はだけ樅に似たれど、葉の先端一針をなし、且つその裏面の白からざるはこれに異なり。材は淡黄褐色、種種の用に供せらる。へそもみ。みつみねもみ。

うちじろ-れんが 裏白連歌 【名】連歌を、懷紙（クワイシ）の表にのみ書くこと。うらじろ。

うら-す 裏簀 【名】うらすがはら（裏簀原）の畧。

うら-す 浦洲 【名】浦べにある洲。〔古語〕 記「わが心うらすの鳥ぞ」

うら-すがはら 裏簀原 【名】花ガルタの八八にて用ふる場役（バヤク）の一。梅・松・櫻の短冊を、場札にて揃ふること。うらす。

うら-すき 裏梳 【名】石灰漬（イシバヒヅケ）を了へて、脫毛したる獸皮の裏面を、銳利なる刃物にて削りて一樣にし、且つ欲するところの厚さとなすこと。なますき。

うら-すごし 心淒し 【形二】ものすごし。保憲女集「うらすごくたつ川霧を見わたせば朝はむ鶴の上もかすめり」

うら-ずり 裏摺 【名】掛物又は卷物などの表裝を仕上ぐるとき、その裏面を大板の上にひろげ、無患子（ムクロジ）を百ほど琴絲にて繫げるものにて強くこすりて、平に且つ軟かにすること。

うら-ぜき 裏關 【名】古、相撲（スマフ）の關二人ありし時の、第二位のもの。

うら-せど 裏背戸 【名】せど。裏ぐち。

うら-せんけ 裏千家 【名】『宗室、千氏本家の裏に住みしよりいふ』茶道千家流の分派。千（セン）利休の孫、宗室の創めしもの。うらけ。（表千家に對して）

うら-たつ 占立つ 【動四自】占（ウラ）を立てて問ふ。一說には、むらだつ（叢立つ）の誤なりと。〔古語〕 萬葉「まつが浦にさわゐうらたちま人ごとおもほすなもろわがもほのすも」

うら-だつ 浦立つ 【動四自】浪、浦に立つ。〔古語〕 壬二「霞みゆく松さへつらき大淀の浦だつ浪にかへるかりがね」 「同じ。

うら-だな 裏店 【名】うらがしや（裏貸屋）に

うら-だな-がり 裏店借 【名】裏店を借りて住むこと、又その人。うらだなずまひ。うらやずまひ。うらやずみ。

うら-だな-ずまひ 裏店住 【名】前條に同じ。

うら-ち 裏地 【名】家の裏手にある土地。

うら-ぢ 浦路 【名】浦邊の路。新千載「さよふけてかよふ千鳥の聲すなりたがすむとこのうらぢなるらん」 「うら。

うら-ぢ 裏地 【名】衣服の裏に用ふる布帛。

うら-ちどり 浦千鳥 【名】浦邊にゐる千鳥。風雅「つかへこし跡にのこりて浦千鳥あるかひもなき音をのみぞなく」

うら-つき 裏附 【名】裏の附きたるもの。

うら-づき 裏突 【名】擊劍の突き方の一。

うらつき-ざうり 裏附草履 【名】うらつけざうり（裏附草履）に同じ。

うら-つけ 裏附 【名】**一** 衣裳などの、裏を附けたるもの。**二** 蠟型に附著せる銅版を印刷に供するにあたり、その裏面に鉛・アンチモン・錫（スズ）の合金を流しこみて、適當の厚さに作ること。**三** 次條の略。浮世風呂「おれの草履は、長刀だらうが、檜だらうが、その代に裏附を取るぞ」

うらつけ-ざうり 裏附草履 【名】『うらなし（裏無）を見よ』裏をつけたる草履。三枚又は五六枚なるものあり。うらつけ。うらつきざうり。

うらつけ-だい 裏附臺 【名】電氣銅版の裏附をなす時に用ふる臺。

うら-づたひ 浦傳 【名】海邊に沿ひたる道を行くこと。うらめぐり。うらわたり。

うら-づたふ 浦傳ふ 【動四自】浦より浦へ傳ひゆく。千載「岩こゆる荒磯波に立つ千鳥心ならずや浦づたふらん」

うらつじ 裏辻 【名】姓氏の一。本姓は藤原氏。閑院家の一門、正親町（オホギマチ）の支流。子爵たり。

うら-づみ 裏積【名】煉瓦又は石などを積重ねたる裏側。

うら-づめ 裏詰【名】〔建〕うらごめ（裏込）に同じ。

うら-て 浦手【名】浦の方。

うら-て 裏手【名】裏の方。うしろの方。

うら-て 占手【名】㊀相撲（スマフ）の最手（ホテ）に次ぐもの。〔古語〕空穗「すまひ…一のは、うらて」㊁歌合の最初の番（ツガヒ）。〔古語〕寬平歌合「左方うらての歌は」㊂うらなひの樣子。謠曲（烏帽子折）「それ、松明の占手と云っぱ、一の松明はいくさがみ、二の松明は時の運、三は我れらの命なるに、三つが三つながら消ゆるならば、今夜の夜討は、さてよな」

うら-ていり 裏定理【名】〔數〕『英 Obverse of a theorem』一の定理の假說ならびに終結を否定したる形の定理。例へば「甲が乙ならば、丙は丁なり」に對する「甲が乙ならざれば、丙は丁ならず」の如きもの。原定理眞なりとも、ただちにその裏定理も眞なりとは斷定し難し。うら。

うら-てやま 占手山【名】㊀〔地〕大和國にある山。古歌に紅葉の名所として詠（ヨ）まる。夫木「吹く風のすさびやすらん神なびのうらてのやまの峯のもみぢ葉」㊁祇園會（ギヲンヱ）の山の一。神功皇后の松浦（マツラ）川に鮎を釣りたまふ體を作れるもの。

うらど 浦戸【名】〔地〕うらどわん（浦戸灣）を見よ。

うら-とく 心釋く【動下二自】心、さっぱりとす。氣がなほる。うちとく。〔古語〕後撰「春日さす藤のうら葉のうらとけて君しおもはばわれもたのまん」

うら-とひ 占問【名】占（ウラ）ひとふこと。

うら-とふ 占問ふ【動四他】うらなふ（占ふ）に同じ。〔古語〕萬葉「卜部（ウラベ）をも八十のちまたもうらとへど君をあひ見むたどき知らずも」

占問ふ橋【句】はしうら（橋占）を見よ。夫木「なぐさめてうらとふはしよまさしかれつれなき中を待ちもわたらん」

うら-どふ 裏問ふ【動四他】內幕（ウチマク）の樣子を問ひ尋ぬ。女殺油地獄「よその方からうらどひける」

うら-どほし 浦遠し【名】浦、遠く長くつづきたり。玉葉「浦遠きしらすの末の一つ松また影もなくすめる月かな」

うら-どほり 裏通【名】大どほりのうしろの道路。うらみち。（表通に對して）

うらど-わん 浦戸灣【名】〔地〕土佐國吾川（アガハ）郡の東、土佐・長岡二郡の交界にある海灣。形、瓢の如くにて、中央狹小、土佐南岸の中央を占め、その港を浦戸港（舊名、桂濱）と云ふ。

うら-な 裏名【名】いんご（隱語）に同じ。醒睡笑「この寺に、下戸の裏名を小穴（コアナ）と申すと答ふ」

うら-ながや 裏長屋【名】長屋づくりの裏だな。

うら-なぎ 浦凪・浦和【名】浦浪の靜かなること。〔古語〕萬代「うらなぎにつりのをたれてくるわれぞいたくな立ちそ沖つ白浪」

うら-なく 心泣く【動下二自】心のうちにてなげく。〔古語〕萬葉「久方のあまのかはらにぬえ鳥のうらなげましつともしきまでに」

うら-なけ 心泣【名】心の中にて歎くこと。〔古語〕萬葉「奈良のわぎへにぬえ鳥のうらなけしつつした戀に思ひうらぶれ」

うら-なげ 裏投【名】柔道の投げ方の一。我が胸を相手の腰部に附著するやうに後より抱き、我が胸部を支點として投ぐる業。

うら-なさけ 心情【名】なさけ。情愛。曾我「戀のくせとやいつはりを賴み顔なるうらなさけ」

うら-なし 裏無【名】㊀裏を附けぬこと。㊁『草履は裏を附けて、二枚にせるが普通なるよりいふ。うらつけざうり（裏附草履）を見よ』裏を附けず一枚に造りたる草履。建武年中行事「うらなしを、下に置きて、めして、たつみに向ひて、三あし步ませたまふ」㊂かはざうり（皮草履）をいふ。〔九州の方言〕㊃竹の皮の草履をいふ。〔東國の方言〕

うら-なし 心無し【形一】心の中に包み隱すことなし。心のへだてなし。眞なり。うらもなし。〔古語〕源氏「例の、うらなきものから」

うら-なじみ 裏馴染【名】なじみきん（馴染金）を見よ。

うら-なひ 占・卜【名】㊀占ふこと。占形（ウラカタ）によりて、將來の事または見えぬところの事などをあて試むること。我が國の上古には、男鹿（ヲジカ）の肩骨を灼（ヤ）き、その裂目の模樣によりて判斷し、これを太占（フトマニ）と呼びしが、後、支那より、龜の甲を灼きて判斷する法及び筮木（メドギ）又は筮竹（ゼイチク）を用ひて行ふ方法傳來し、今は主として筮竹に依る。又、足占（アウラ）・石占（イシウラ）・橋占（ハシウラ）・歌占（ウタウラ）・辻占（ツジウラ）などいふ類も、古來廣く行はれたり。うらなひさん。うら。うらへ。うらやさん。うらかた（占形）・うらべ（卜部）參照。㊁うらなひしや（占者）に同じ。

うらなひ-さん 占算【名】㊀うらなひ（占）㊀に同じ。狂言「うらなひさん、占の御用、しかも上手なり」㊁次條に同じ。

うらなひ-しや 占者【名】占を業とする人。易を見る人。はっけみ。さりまさ。うらなひ。うらなひびと。うらなひさん。賣卜者。卜人。

占者、身の上知らず【句】「醫者の不養生」に同じ。〔諺語〕

うらなひ-びと 占人【名】うらなひしや（占者）に同じ。

うら-なふ 占ふ・卜ふ【動四他】占（ウラナヒ）を行ふ。うらとふ。うらふ。

うら-なみ 浦波【名】浦にたつ浪。萬葉「朝風に浦波さわぎ夕風に浦藻はよりく」

うら-なり 末成【名】瓜などの、莖・蔓などの末の方に實のること。（本成に對して）

末成の瓢簞【句】顔色青ざめて虛弱なる人の形容。

うら-なる 浦馴る【動下二自】その浦に住み馴る。源氏「うらなれたらん人はとて」

うらにうむ（英 Uranium）【名】〔鑛〕白色にて熔解しがたき金屬元素。その鹽素化合物にナトリウムを作用せしめて得。放射物質の一。ウラン。

うらにうむ-がらす うらにうむ硝子（英 Uranium glass）【名】ウラニウムの鹽類を混じたるガラス。黄色にして、燐光を放つが故に、ガイスレル管を製するに用ふ。

うら-にし 浦西【名】西南の風。〔丹後國經ゲ岬附近の漁夫の語〕

うら-には 裏庭【名】家の後方にある庭。

うらには-の-かみ 卜庭神【名】玉體を卜ふ時に祀る太詔戸（フトノリト）命・久慈眞智（クジマチ）命の二神。兒屋根（コヤネ）命の別號なりといふ。

うら-にほん 裏日本【名】〔地〕日本の本洲の地形上、中央山脈より日本海に臨む一帶の地。（表日本に對して）

うらにや（英 Urania）【名】ミウズ女神の一。天文を司るものとせられ、その像は球體と杖とを携ふ。

うら-の-かね 裏の印【句】かね（印）の條下を見よ。

うら-の-かね 裏の矩【句】かね（矩）の條下を見よ。

うら-の-かみ 陰陽頭【名】『うらは占の義』陰陽寮（オンミヤウレウ）の長官。

うら-の-しつけ 裏熨斗附【名】刀劍の鞘の差裏（サシウラ）にのみ熨斗附せるもの。

うら-の-つかさ 陰陽寮【名】『占（ウラ）の官（ツカサ）の義』おんみやうれう（陰陽寮）に同じ。

うら-の-はつしま 浦初島【名】〔地〕紀伊國海草（カイサウ）郡にある地島（ヂノシマ）・沖島（オキノシマ）兩島の合稱。歌枕の一。新續古今「紀の海や沖つ浪間の雲はれて雪に殘れる浦の初島」

うら-の-め 裏の目【句】め（目）の條下を見よ。

うら-ば 末葉【名】草木の莖又は枝の末の葉。うれば。萬葉「春べ咲く藤のうらばのうらやすにさぬる夜ぞなき子ろをしもへば」「萩のうらば」「菊のうらば」

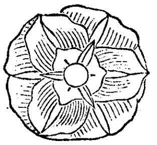
うら-はぎ 末矧【名】矢の、羽を矧ぎつけて、上端を卷きとめたる部分。（もとはぎに對して）

うら-はく 裏箔・裏薄【名】〔美〕日本畫にて、絹地の裏に金箔（キンパク）を置くこと、又その置きたる金箔。黄金の光澤を柔ぐるためにするなり。うらぐ（裏具）參照。

うら-はず 末弭【名】上の方の弓弭。（もとはずに對して）

うら-はづかし 心恥かし【形二】心のうちに恥ぢてあり。

うら-はなあふひ 裏花葵【名】紋所の一。下の圖を見よ。



（ひふあなはらう）

うら-はなびし 裏花菱【名】紐などの結び方の一。はなびしの一種。

うら-はひ 占兆【名】うらかた（占形）㊀に同じ。〔古語〕紀「兆、ウラハヒ」

うら-はふ 浦法【名】德川時代の、沿海地方の取締規則。

うら-はみ 卜食【名】龜卜（カメウラ）の、縱橫の裂け目。縱を吉とし、橫を凶とす。〔古語〕、夫木「月なみのよるの祭の霜の上に曉をまつうらはみの人」

うら-はん 裏判【名】㊀文書又は證券の裏書の證としてしるす花押（クワアフ）又は印判。㊁うらいん（裏印）に同じ。

うらば-やなぎ 裏葉柳【名】うぐひすちや（鶯茶）に同じ。

うら-はら 裏腹【名】㊀背と腹と。㊁うへした。うらおもて。うらうへ。反對。

うら-びと 占人【名】うらなひをする人。〔古語〕

うら-びと 浦人【名】海邊に住む人。漁民。源氏「浦人のしほ汲む袖にくらべ見よ波路へだつる夜の衣を」

うら-びやうし 裏拍子【名】〔音〕ひやうし（拍子）を見よ。

うら-びる 【動下二自】うれはしく思ふ。うれへわぶ。うらぶる。〔古語〕風雅「君に戀ひうらびれをれば秋風にたなびく淺茅の露ぞけぬべき」

うらふ 占ふ・卜ふ【動下二他】うらなふ（占ふ）に同じ。〔古語〕紀「卜合、ウラヘテ」同「卜、ウラフルニ」

うら-ぶね 浦船【名】浦にある船。謠曲（高砂）「高砂やこの浦船に帆をあげて、月もろともに出でしほの」

うら-ぶみ 占文【名】占ひ定めたる次第の記錄文。せんもん。徒然「吉平が自筆のうらぶみの裏に書かれたる御記」

うら-ぶる 【動下二自】わびしく思ふ。心うく思ふ。うらびる。〔古語〕萬葉「うらぶれて物なおもひそ天雲のたゆたふ心わがおもはなくに」

うらへ 占・卜【名】うらなひ（占）に同じ。〔古語〕紀「太占之卜事、フトマニノウラヘ」

うら-べ 浦邊【名】浦の近邊。浦のほとり。千載「さみだれは蜑のもしほ木朽ちにけりうらべに烟たえて程へぬ」

うら-べ 卜部【名】古、太占（フトマニ）の卜事によりて、神事に奉仕せし氏族。始祖詳かならず。大寶令の制にては、神祇（ジンギ）官に屬せしめて、定員を二十人とし、伊豆・壹岐・對馬の三國より、もしくは在京者中より卜占・解除の事に長じたる者を取ることとせり。いづれも卜部姓を稱すれども、必ずしも一氏族より分派せるものにはあらざらんかともいふ。〔古語〕萬葉「千早ぶる神にもおほすならうらべすゑ龜もな燒きそ」同「武藏ぬにうらべかた燒きまさでにものらぬ君が名うらに出でにけり」

うらべ-かねとも 卜部兼俱【名】〔人〕よしだかねとも（吉田兼俱）に同じ。

うらべ-けんこう 卜部兼好【名】〔人〕よしだけんこう（吉田兼好）に同じ。

うらへ-だ 占田【名】神饌に供する稻を作る田を占ひて、その占に當りたる田。〔古語〕紀「卜定田、ウラヘダ」

うら-べに 裏紅【名】〔植〕りんだう（龍膽）に同じ。

うらべに-さう 裏紅草【名】〔植〕いはゆきのした（岩雪下）に同じ。

うらべに-すもも 裏紅李【名】〔植〕よねもも（米桃）に同じ。

うら-ぼ 末穗【名】稻・麥などの穗の、末の方にあるもの。

うら-ぼし 裏星・水龍骨【名】〔植〕羊齒（シダ）類に屬する隱花植物。山の崖（ガケ）又は巖石などに著きて生ず。葉は廣さ四五分、長さ二三寸、裏に金色の星の如き斑紋あり。冬も枯れず。筑前國に多し。

うらぼし-くわ 水龍骨科【名】〔植〕隱花植物、羊齒（シダ）類に屬する一科。

うら-ぼたん 裏牡丹【名】紋所の一。牡丹の花を裏より見たる形を、蕚（ガク）を中心に現はしたるもの。

うらぼん 盂蘭盆（梵 Ullambana）【名】『救倒懸』と譯す。頭を下にし足を上にして地獄に墮つる苦相を倒懸と云ひ、それを救ふは即ち地獄に墮（オ）ちたる人を救ふ意』陰曆七月十五日に行ふ佛事。これを說ける經に盂蘭盆經あり。もと釋迦十六弟子の人なる目連（モクレン）が道眼（ダウゲン）を以て、生母の地獄に在るを觀じ、釋迦に乞ひてこれを救へるに起因し、現世より七世までの父母の恩を報じ、併せて一切の死者の冥福を祈るとて、種種の飲食を供へ修す。支那にては梁の武帝の大同四年、我が國にては、齊明天皇の時に初まれり。ぼん。うらんぼん。うらぼんこう。うらぼんぐゑ。

うらぼん-ぎやう 盂蘭盆經【名】〔書〕うらぼん（盂蘭盆）を見よ。

うらぼん-ぐ 盂蘭盆供【名】〔佛〕盂蘭盆に、佛又は僧に物を捧ぐる佛事。

うらぼんぐ-ゑ 盂蘭盆供會【名】〔佛〕うらぼん（盂蘭盆）に同じ。四季「うらぼんぐゑの法事」

うらぼん-こう 盂蘭盆講【名】〔佛〕うらぼん（盂蘭盆）に同じ。榮花「阿彌陀には、今日盂蘭盆講せさせたまへば」

うらぼん-ゑ 盂蘭盆會【名】〔佛〕うらぼん（盂蘭盆）に同じ。

うら-ま 浦曲【名】浦の曲り入りたるところ。うらみ。うらわ。〔古語〕萬葉「玉つ島磯のうらまのまなごにもにほひてゆかな妹にふれけむ」

うら-まき 裏卷【名】掛物の卷きをさめに、外に出づる部分。大抵、薄き絹を張る。

うら-まさ-に 占正に【副】占ひ正しく。占の如く。〔古語〕萬葉「ことだまの八十のちまたにゆふけとふうらまさにのれ妹にあはむよし」

うらまさり-こうばい 裏勝紅梅【名】襲（カサネ）の色目の一。表は紅梅・裏は紅。春の初に用ふ。

うら-まち 裏町【名】うらどほりの町。

うら-まつ 浦松【名】浦べに生えたる松。夫木「はるかなるねのひが崎にすむあまはうらまつをのみ引きや寄すらん」

うら-まつ 心待つ【動四自】心の中にて待つ。〔古語〕萬葉「秋風に今か今かとひもどきてうらまちをるに月かたぶきぬ」

うらまつ-みつよ 裏松光世【名】〔人〕權中納言益光の子。固禪と號す。有職・故實に精しく、大內裏圖考證の著あり。文化元年卒す。

うら-まつり 裏祭【名】祭禮のありし次の日。〔加賀國の方言〕

うらみ 怨・恨・憾【名】㊀怨むること。憎しと思ふこと。伊勢「人のうらみはおふものにやあらん」㊁殘念に思ふこと。不滿足。遺憾。

うら-み 浦回【名】うらま（浦曲）に同じ。〔古語〕萬葉「岩の間をいゆきもとほりいなびづまうらみを過ぎて」

うら-み 浦見【名】浦を見ること。（主に恨の意に言ひかけて用ふ）蜻蛉「濱千鳥あとのとまりをたづぬとて行くへも知らぬうらみをやせん」

うらみ-うた 怨歌・恨歌【名】怨の意を含めて詠（ヨ）める歌。狹衣「うらみ歌を早く詠みかけよ」

うらみ-がほ 怨顏・恨顏【名】怨める顏つき。續後撰「今よりの秋の夜風やいかならんけさだに葛の恨みがほなる」

うらみ-ぐさ 怨種・恨種【名】怨のたね。淀鯉出世瀧德「それはわか草、身を恨みぐさ、なんのそなたに、怨いたではなし」

うらみ-くち 怨口・恨口【名】怨の口上。怨言。

うらみ-こい 怨こい・恨こい【名】うらみっこ（怨っこ）に同じ。

うらみ-ごと 怨事・恨事【名】怨むる意を表す事がら。源氏「なぞ…うらみごとはしたまふ」

うらみ-ごと 怨言・恨言【名】怨みていふ言葉。俗曲（裏組錦木）「山がらが籠のうちでのうらみごと、籠が小かごでもんどりうたれぬ」

うら-みごろ 裏身頃・裏衽【名】袷（アハセ）・綿入などの身頃の裏にある布。

うらみ-ごゑ 怨聲・恨聲【名】怨むがごとき音聲。堀太「待つほどの過ぎやしぬらん衣うつきぬたの音のうらみ聲なる」

うらみ-じに 怨死・恨死【名】ものごとを怨みて、死ぬること。十訓「うらみじにに死にたまへり」

うら-みち 裏道 【名】㊀家の裏口より通行する道。㊁街道以外の道路。うらどほりの路。ちかみち。ぬけみち。間道。

うらみ-っ-こ 怨っこ・恨っこ 【名】互にうらむこと。うらみこい。うらみっこい。〔俚語〕「うらみっこの無いやうに、同じやうに分けてやる」

うらみ-っ-こい 怨っこい・恨っこい 【名】前條に同じ。 浮世風呂「怨っこいの無(ネ)えやうに」

うらみ-っ-ぽい 怨っぽい・恨っぽい 【形】『ぽいは接尾語』ややもすれば、物事をうらめしく思ふ性質なり。〔俚語〕 柳樽「うらみっぽい歌ばかりよむ源三位」

うらみ-つらみ 怨辛・恨辛 【名】さまざまの怨。〔俚語〕 俗曲(於染久松)「うらみつらみも、みづからを、袖にすがりて涙ぐみ」

うらみ-どき 怨時・恨時 【名】怨むる時機。うらむるをり。 清少納言「契りてし繁き梢のほどもなくうらみどきにはいかがなるらん」

うらみ-どころ 怨所・恨所 【名】怨むべき點。 後撰「これはかく怨みどころもなきものをうしろめたくは思はざるらん」

うらみ-なき 怨泣・恨泣 【名】怨めしさに泣くこと。 丹波與作「胸に書附あるならば、ここが立割り見せたいと、うちたたいたる胸あても、しぼるばかりのうらみなき」

うらみ-なみだ 怨涙・恨涙 【名】怨めしさに流す涙。 關取千兩幟「それ程の大事のこと、つれそふ女房に隱して居るお前の心が聞えぬと、うらみなみだに時うつり」

うらみ-ね 怨寢・恨寢 【名】無情を怨みながら寢ぬること。(主に男女の間にいふ) 儿董「うらみねの蒲團そなたへゆがみけり」

うらみ-の-すけ 恨之助 【名】〔書〕慶長の頃の假名草子。恨之助といふ者、京都の清水寺に詣でて、雪の前といふ女を見そむる事を作れるもの。 趣向、薄雪物語に似たり。 沙金袋(正伯)「葛の葉やうらみのすけが下がさね」

うらみ-の-たき 裏見瀑 【名】〔地〕下野國上都賀(カミツガ)郡日光山にある瀑。高さ約十丈・幅約三間にて、落下する背面を見得るによりてこの名を得しなれど、明治三十八年の洪水に崩れて、今は舊形をとどめず。別稱、阿含(アゴン)瀑 荒澤瀑。

うらみ-の-やいば 恨の刃 【句】やいば(刃)の條下を見よ。

うらみ-の-やま 恨山 【名】〔地〕信濃國にありといふ山。 夫木「尋ねばや心の末は知らずとも人をうらみのやまのかよひぢ」

うらみ-ぶかし 怨深し・恨深し 【形二】怨みがちにてあり。 狂言(墨塗)「おうらみぶかいお方」

うらみ-ぶみ 怨文・恨文 【名】怨を陳べたる「書面。

うらむ 怨む・恨む・憾む 【動上二他】㊀他人のしむけを、不平に思ふ。 源氏「いとつらきとうらみられて」 ㊁人に向ひて、不平の心を語る。 源氏「うらむるも、ねたけれど」 ㊂殘り惜しく思ふ。

恨みよがしに 【句】『がしは、助辭かしの轉訛』恨みよと云はぬばかりのさまに。〔俚語〕 俗曲(鬢はり)「胸のほむらの火にかけてうらみよがしに幾すぢか、解けぬ思ひの黑髮ながら」

うらむ 怨む・恨む・憾む 【動四他】㊀前條に同じ。㊁怨をはらすために事を行ふ。無念ばらしをなす。 四谷怪談「どうぞ、伊右衞門に逢うて、ひと太刀なりとうらまんと」

うら-むかひ 浦向 【名】向ひあひたる浦。 謠曲(烏追船)「この湖より群鳥あがって浦向ひの田を食み候間」

うらむらく-は 憾むらくは 【副】『恨むるはの延』うらむることには。殘念なることには。くやしきことには。

うら-むらさき 末紫 【名】末の方の色の紫なること。(主に怨むに言ひかけて用ふ) 〔歌語〕 拾遺「ゆく春をうらむらさきの藤の花かへるたよりに染めやしつらん」 謠曲(女郎花)「うらむらさきの葛の葉のかへらば連れよ妹背の波」

うらん (獨 uran) 【名】〔鑛〕うらにうむに同じ。

うらん-ぼん 盂蘭盆 【名】〔佛〕うらぼん(盂蘭盆)に同じ。

うら-めぐり 浦巡 【名】浦浦を巡り歩くこと。海邊を傳ひあるくこと。うらづたひ。うらわたり。 夫木「引きつれていづ方へとかむらちどり浦めぐりして友さそふらん」

うらめし 怨めし・恨めし 【形二】怨むべし。怨に思ふべくあり。

うらめしむ 怨めしむ・恨めしむ 【動四他】うらめしく思ふ。〔古語〕 萬葉「わぎも子をあひ知らしめし人をこそ戀のまされば恨めしみもへ」

うら-めづ 心愛づ 【動下二他】心の中にてめづ。愛好す。〔古語〕 輔親集「かたしける小忌(ヲミ)の衣のうらめでてけさの日かげはまばゆかるらん」

うら-めづらし 心珍し 【形二】心に、めづらしく感じてあり。〔古語〕 古今「わがせこが衣の裾を吹きかへしうらめづらしき秋のはつ風」

うら-もと-なし 心許無し 【形一】こころもとなし(心許無し)に同じ。〔古語〕 萬葉「岩ほろのそひの若松かぎりとや君が來まさぬうらもとなくも」

うら-もひ 心思 【名】うらもふこと。〔古語〕

うら-もふ 心思ふ 【動四自】うらおもふ(心思ふ)の略。〔古語〕 萬葉「すがのねのねもごろ妹に戀せましうらもふ心おもほえぬかも」

うら-もん 裏門 【名】裏の方にある門。裏より出入する門。後門。(表門に對して)

うら-もん 裏紋 【名】正式の紋所のかはりに用ふる紋。かへもん。(表紋に對して)

うらもん-きって-ばんがしら 裏門切手番頭 【名】江戸幕府の職制の一。下卒を率ゐて大奥に通ずる御切手門の出入を監査し、非常を守衞することを掌りしもの。定員は五人乃至七人、御留守居の管下に屬す。切手番頭。

うら-もやう 裏模樣 【名】物の裏面にある「模樣。

うら-や 裏屋 【名】家の後の方に建てたる家。うらだな。

うら-やき-ふで 裏燒筆 【名】繪を書くに用ふる燒筆の一。屛風・衝立(ツイタテ)・杉戸などのごとく、下圖(シタヅ)を下に當てて寫しながら描くこと能はざる場合に用ふるもの。これを用ひて下圖の裏面に線書きし、描かんとする物の上に覆ひて、表より押せば、燒炭はその物の上に、その線書の形を印す。へうたんずみ(瓢簞炭)參照。

うらやく-せん 浦役錢 【名】室町時代の稅目の一。將軍・諸侯必要に應じ、浦浦に住居する者に臨時に課したるもの。賦課の標準は、今日にては明かならず。

うら-やくば 浦役場 【名】遭難の船舶を救護する等の海上の事務を執るために、沿海の要地に設けたる特別の役場。明治九年以來の設置にて、今は大抵その地の町村役場に併置す。

うら-やぐら 裏櫓 【名】遊廓の裏通りにある女郎屋。(表やぐらに對して)〔德川時代の江戸深川仲町の語〕

うらや-こうぢ 裏屋小路 【名】裏屋にある路次。うらこうぢ。 夕霧阿波鳴門「稻荷あたりの裏屋小路をのぞき廻り」

うら-や-さん 占や算 【名】うらなひさん(占算)に同じ。 狂言(居杭)「うらなひさん、占の御用、しかも上手なり。うらやさん、うらやさん」

うら-やす 心安 【貌】心のうち安きさま。安心。こころのどか。〔古語〕 萬葉「春べ咲く藤の末葉(ウラバ)のうらやすにさぬる夜ぞなき子ろをしもへば」

うらやす-の-くに 浦安國 【名】〔地〕『心安の國の義。浦は假借の文字』日本國の美稱。〔古稱〕 紀「浦安國、ウラヤスノクニ」 夫木「波立たで風をさまれる君が世にその名あらはすうらやすのくに」

うらや-ずまひ 裏屋住 【名】うらだなずまひ(裏店住)に同じ。

うらや-ずみ 裏屋住 【名】うらだなずまひ(裏「店住)に同じ。

うら-やなぎ 裏柳 【名】襲(カサネ)の色目の一。表は白・裏は萌黃。

うら-やま 浦山 【名】㊀浦と山。山海。 謠曲(高砂)「浦山國を隔てて住むといふは」 ㊁浦邊にある山。沿海の山。

うら-やま 裏山 【名】住家の背後にある山。

うらやま-かぜ 浦山風 【名】浦邊にある山

を吹く風。十六夜「しらざりき浦山風も梅が香は都に似たる春のあけぼの」

うら-やまし 羨まし【形二】うらむべし。ねたまし。

うらやまし-がる 羨ましがる【動四他】うらやましく思ふ。

うら-やまぶき 裏山吹【名】**一** 襲(カサネ)の色目の一。表は黃・裏は山吹。一說に、表は黃朽葉・裏は靑。又一說に、表は黃・裏は紅又は萌黃(モエギ)。又、女房の衣には、五衣(イツツギヌ)として、單(ヒトヘ)は靑。

うら-やみ 羨【名】**一** うらむこと。**二** ねたむこと。枕「ものうらやみし、身の上なげき」

うらやみ-がほ 羨顏【名】うらむがごとき顏つき。

うらやみ-なし 羨無し【形一】互に羨む所なし。源氏「こなた・かなた、うらやみなくもてなして」

うら-やむ 羨む【動四他】『心(ウラ)病(ヤ)むの義』**一** 他の好きことを見、我れもその如くにあらぬを歎きて、心なやむ。羨しく思ふ。詞花「萬代のためしに君が引かるれば子の日の松もうらやみやせん」**二** 他の我れよりもすぐれたるを悄む。そねむ。ねたむ。紀「嫉妬、ウラヤミネタムコト」

うら-ゆき 裏行【名】おくゆき(奧行)に同じ。

うら-ら 己等【代】おのれら。われら。

うら-ら 麗【貌】次條に同じ。堀太「春の日のうららに照らす垣根には友まつ雪ぞ消えがてにする」

うら-らか 麗らか【貌】**一** 晴れわたりてのどか。うららうら。うらら。ほがらか。晴朗。枕「日のうららかなるに」**二** 聲のうるはしく冴(サ)えたるさま。源氏「鶯のうららかなる音(ネ)」**三** 心ののびのびとはれやかなるさま。さわやか。拾松「へだてなう、うららかに打解けたまへれば」

うらら-けし 麗らけし【形一】うららかにてあり。長閑にてうつくし。

うら-りう 裏流【名】うらせんけ(裏千家)に同じ。

うらる-あるたい-ご 烏拉兒阿爾泰語（英 Ural-altaic languages）【名】〔語〕『もと烏拉兒山と阿爾泰山との間の國土に播布せる語の意』北部亞細亞・東部亞細亞・土耳其及び歐洲の露西亞の北部に分布せる語。この語族の形體上の特色は添加語たることにして、細分すればウラル語・アルタイ語の二となり、日本・朝鮮・琉球・アイヌ・エスキモオ・滿洲・蒙古・韃靼・土耳古等の語は前者に屬し、サモエット・フインランド・ホンガリヤ等の語は後者に屬するものとせらる。ちゆらにやん語。

うらる-いし 烏拉兒石（英 Uralite）【名】〔鑛〕輝石(キセキ)の變質・假象して成れる纖維(センヰ)狀・絹絲光澤の角閃(カクセン)石。

うらる-だま 烏拉兒玉【名】烏拉兒(ウラル)山脈より産出する寶石類の總稱。

うら-わ 浦回【名】浦の曲がりたる處。うらま。うらみ。新古今「野べの露うらわの波をかこちてもゆくへもしらぬ袖の月かげ」

うらわ 浦和【名】〔地〕武藏國北足立(キタアダチ)郡にある町。鐵道高崎線の一驛。埼玉縣廳の所在地。

うら-わかし 心若し【形一】**一** 年わかし。をさなし。蜻蛉「鹿…さしはなれたる谷の方より、いとうらわかき聲に、遙かにながめ鳴きたんなり」**二**『末(ウラ)若しの意か』若くみづみづし。草木うらわかし。萬葉「高まどの秋野の人の撫子の花うらわかみ人のかざしし撫子花の」

うらわけ-ごろも 浦分衣【名】浦づたひする人の衣。〔古語〕壬二「夕あらしうらわけごろも吹きはらへもしほのけぶり立ちやそふらん」

うら-わたり 浦渡【名】うらづたひ(浦傳)に同じ。〔古語〕堀太「綱手ひくなだの小船や入りぬらんなにはのたづのうらわたりする」

うら-ゑ 裏繪【名】雜誌などの裏の表紙にゑがく繪。太祇「花鳥もうらゑは薄き扇かな」

うり 瓜【名】**一**〔植〕葫蘆(ヘウタン)科に屬する一年生の蔓草にして、大なる實を結ぶものの總稱。きうり・しろうり・まくはうり・かぼちや・へちま・すゐくわ、その他種々あり。各、その條を見よ。**二**〔植〕まくはうり(甜瓜)に同じ。**三**〔植〕しろうり(越瓜)を云ふ。**四**〔植〕きうり(胡瓜)を云ふ。〔京都の語〕〔東京の語〕**五** うりちやいれ(瓜茶入)の略。**六** 祥瑞(シヨウズヰ)製の七種香合の一。

瓜に爪有り、爪に爪無し【句】漢字の「瓜」と「爪」との字形の似たるより、誤らざらしむる注意にいふ語。

瓜の種を並ぶ【句】『詩經の衞風碩人に「齒如二瓠犀一」とあり。瓠犀は瓠(ユフガホ)の子(タネ)』齒ならびのそろひて細く白きさまの譬。

瓜の蔓に茄子は成らぬ【句】凡庸(ボンヨウ)なる親に非凡なる子の生れざる譬。「鳶が鷹を産む」の反對。〔諺語〕

瓜二つ【句】次條の略。〔諺語〕

瓜を二つに割ったやう【句】かれと、これと相似たる譬。瓜二つ。〔諺語〕吾吟我集「よろひつれておなじさねなる剛の者瓜を二つにわるたぐひかな」

うり【名】〔植〕ぎぼうしゆ(擬寶珠)を云ふ。〔下野國日光の方言〕

うり-あぐ 賣上ぐ【動下二他】**一** 賣りをはる。みな賣る。**二** 賣りて、代價を取る。

うり-あけ 賣明【名】〔商〕取引所にて、手許に貨物無くして賣ること。

うり-あげ 賣上【名】賣上ぐること、又その結果として得たる錢。

うりあげ-かんぢやう 賣上勘定【名】〔商〕品物を預り置きて、前金を拂はず、一定の時期に、その品の賣上高によりて、品主にその代料を拂ひ渡すこと。

うりあげかんぢやう-しよ 賣上勘定書【名】〔商〕『英 Account sales』賣上勘定に依る約束を以て預りたる品物の賣れたる時、その結果を記して、賣主より品主に交付する勘定書。賣上計算書。賣上仕切書。賣上仕切狀。

うりあげかんぢやうしよ-ちやう 賣上勘定書帳【名】〔商〕委託販賣者が賣上勘定書を受取る順次に貼附(テウフ)する帳簿。

うりあげかんぢやう-ちやう 賣上勘定帳【名】〔商〕うりあげちやう(賣上帳)に同じ。

うりあげ-きん 賣上金【名】うりあげだか(賣上高)に同じ。

うりあげ-けいさんしよ 賣上計算書【名】〔商〕うりあげかんぢやうしよ(賣上勘定書)に同じ。

うりあげ-しきりじやう 賣上仕切狀【名】〔商〕うりあげかんぢやうしよ(賣上勘定書)に同じ。

うりあげ-しきりしよ 賣上仕切書【名】〔商〕うりあげかんぢやうしよ(賣上勘定書)に同じ。

うりあげ-しよう 賣上證【名】〔商〕うりわたししよう(賣渡證)に同じ。

うりあげ-そうだか 賣上總高【名】一日又は一箇月に賣上げたる金額。

うりあげ-だか 賣上高【名】賣上總高より諸入費を差引きたる金額。あげだか。賣上金。

うりあげ-ちやう 賣上帳【名】〔商〕毎日の賣上げたる品物及びその直段などを記し置く帳面。賣上勘定帳。

うりあげ-てすうれう 賣上手數料【名】〔商〕委託販賣の受託者が、賣捌の報酬として、賣上金高の一定の率を賣主より受くる料金又は物品。

うりあげ-てどりだか 賣上手取高【名】〔商〕賣上總高の內より諸費用及び自己の賣上手數料を差引きたる正味の殘高。賣主の手許に送るべきもの。

うりあげ-ひん 賣上品【名】賣捌きたる品目。

うりあげ-もとちやう 賣上元帳【名】〔商〕掛賣(カケウリ)をなしたる得意先の氏名・商號を口座として、賣捌一切の勘定を整理する帳簿。賣捌勘定元帳。

うり-あます 賣餘す【動四他】賣りきれずに品物を殘す。狂言(酢薑)「かほどに毎日持てまゐっても、つひに賣餘いて戻ったことがござらぬ」

うり-ありく 賣步く【動四他】次條に同じ。續詞花集「女の…賣りありきけるを聞きて」

うり-あるく 賣步く【動四他】商品を持ちあるきて賣る。行商す。うりありく。

うりい【名】〔動〕『うりくひむし(瓜食蟲)を見よ』はたおりむし(機織蟲)を云ふ。〔常陸國の方言〕

うり-いそぎ 賣急【名】〔商〕相場にて、賣方が恰好の賣所又は賣時に急ぎて賣ること。〔取引所の語〕

うり-いだす 賣出す【動四他】賣りはじむ。發賣す。うりだす。

うり-いとど【名】〔動〕はたおりむし（機織蟲）を云ふ。〔上野國の方言〕

うり-いへ 賣家【名】人に賣り讓るべき家。うりや。

賣家を唐様（カラヤウ）に書く三代目【句】『もと柳樽の句』祖父の働きて財産を造りたる家も、孫の代にはなまじひに學藝に身を入れて、家業をおろそかにし、破産するに至る。（町人に學問は不要なりとして誡むる意）〔諺語〕

うり-いを 賣魚【名】賣物にする魚。七一職人歌合「はやくこそ六角町のうりいをのなれぬさきより戀りはてけれ」

うり-うち 賣擊【名】〔商〕うりたたき（賣叩）に同じ。

うり-うめ 賣埋【名】〔商〕先の買物に對して、その契約期限内に轉賣し、實際にその現物の取引をなさずして取引を完結すること。〔取引所の語〕

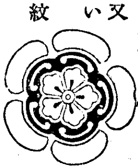
うり-うり 瓜賣【名】瓜を賣る人。

うりう-ゐん 雲林院【名】うりんゐん（雲林院）の音便。榮花「ついたち・三四日の程にぞ、うりうゐんの西の院といふ所におはしまさせたまふ」

うり-おひ 賣追【名】〔商〕相場にて、高値（ネダカ）の早晚下落すべきを見越して、しきりに賣ること。〔取引所の語〕

うり-かけ 賣掛【名】物を賣りて、未だその代金を受取らぬこと、又その代金。うりかけだいきん。かけ。

うり-かげ 瓜蔭【名】紋所の一。かげのうり。



（げかりう）

うりかけ-かんぢやう 賣掛勘定【名】〔商〕得意先に對する掛賣取引の金高の全體。得意先勘定。賣掛先勘定。掛賣勘定。掛先勘定。

うりかけ-きん 賣掛金【名】〔商〕賣掛にて賣捌きたる金額。

うりかけさき-かんぢやう 賣掛先勘定【名】〔商〕うりかけかんぢやう（賣掛勘定）に同じ。

うりかけ-だいきん 賣掛代金【名】うりかけ（賣掛）に同じ。

うり-かた 賣方【名】一 賣る方法。二 賣る方の人。うりて。うりや。（買方に對して）〔取引所の語〕三 徳川時代に、家祿米（カロクマイ）下付の日、これを買取らんとて詰めをる米屋及びその中に交りて、賣買の價格を定めし者。

うりかた-おほてすぢ 賣方大手筋【名】〔商〕常に多額の賣注文をなす斯界の頭領株たる人。（買方大手筋に對して）

うりかた-とうほん 賣方謄本【名】〔商〕委託品賣捌の手續を仲買人より委託者に通知する書面。

うりかた-なかがひ 賣方仲買【名】〔商〕相場にて、賣方の注文を委託せられたる仲買。〔取引所の語〕

うり-かつ 賣勝つ【動四自】うりひしぐ（賣拉ぐ）に同じ。〔徳川時代の俚語〕芭蕉「蒟蒻にけふはうりかつ若菜かな」

うり-かづら 瓜蔓【名】瓜の蔓。うりづる。〔古語〕

うり-かは 瓜皮【名】〔植〕澤瀉（オモダカ）科に屬する多年生の草。水田中に自生す。葉は根生葉にして、夏秋の頃、白色の三瓣花を開く。やなぎおもだか。うりかはぐさ。おほぼしさう。

うり-がは 賣側【名】徳川時代の札差（フダサシ）の米を賣捌く手數料。

うりかは-ぐさ 瓜皮草【名】〔植〕うりかは（瓜皮）に同じ。

うりかは-けしぐくり 瓜皮罌粟括・瓜皮芥子括【名】芝居にて、錦祥女（キンシャウニョ）などのごとき唐風の婦人に扮（フン）する者の著用する衣裳。

うり-がはせ 賣爲替【名】〔商〕『英 Selling exchange』銀行より賣放つ外國爲替。即ち銀行が送金希望者より金を受取りて、電信爲替を取組み、又は送金手形を振出すもの。（買爲替に對して）うりさうば（賣相場）參照。

うり-かひ 賣買【名】賣ると買ふと。ばいばい。あきなひ。

賣買高し【句】物のあたひ廉ならず。天の網島「うりかひ高い世の中でも、金とたはけは澤山なと、いろいろの評判」

うりかひ-てがた 賣買手形【名】賣買するための手形。

うり-かふ 賣買ふ【動四他】物を賣り又は買ふ。賣買（バイ）す。

うり-かへで 賣楓【名】〔植〕めうりのきに同じ。

うり-き 賣木【名】賣物の樹木。生玉心中「賣木の花に氣をはらし」

うり-き 賣氣【名】賣らんとする氣配。賣らんとする傾向。

うり-きたる 賣來る【動四他】賣りつづけて今に至る。狂言（煎物賣）「この茶屋は…代代賣來ったに」

うり-ぎよく 賣玉【名】〔商〕取引所に於ける賣物。（買玉に對して）

うり-きり 賣切【名】賣りきること。

うり-ぎり 瓜切【名】瓜を切るがごとく、眞二つに斬ること。うりわり。太平記「胴なかを瓜ぎりに斬りて落されけるほどに」

うり-きる 賣切る【動四他】賣りつくす。ことごとく賣る。

うり-きる 賣切る【動下二自】うれきる（賣切る）の訛。

うり-きれ 賣切【名】うれきれ（賣切）の訛。

うり-くさ 瓜草【名】〔植〕玄參（ゴマノハグサ）科に屬する一年生の小草。あぜたうがらしの類。多くは田野・園圃の間に自生す。葉は卵形にて、揉（モ）みて嗅（カ）げば瓜の香あり。花は、唇形・淡紫色にして、四月頃開く。

うり-ぐすり 賣藥【名】ばいやく（賣藥）に同じ。

うり-くち 賣口【名】うりさき（賣先）に同じ。

うり-くづし 賣崩【名】〔商〕賣りくづすこと。相場を下落せしむること。

うり-くづす 賣崩す【動四他】〔商〕盛んに賣立てて相場を下落せしむ。

うり-ぐひ 賣食【名】定りたる業無く、所有の諸道具類を賣拂ひたる金にて、日日の生活を立つること。

うりくひ-むし 瓜食蟲【名】〔動〕一 こほろぎ（蟋蟀）を云ふ。〔奥州の方言〕二 はたおりむし（機織蟲）を云ふ。〔上野國の方言〕

うり-くらげ 瓜水母【名】〔動〕櫛水母（クシクラゲ）の一種。高さ三四寸・幅二寸に達し、形は扁圓錐狀にて、櫛齒（シッ）狀の八箇の纖毛列、縱に體面を走れるさま、瓜の外貌に似たり。

うり-けん 賣劵・沽劵【名】物を賣渡すことを契約して認（シタタ）むる證書。うりけんじやう。沽劵（コケン）。

うりけん-じやう 賣劵狀・沽劵狀【名】前條に同じ。

うり-こ 賣子【名】商家の雇人の、物を賣歩くもの。販夫。「新聞の賣子」

うり-こかす 賣りこかす【動四他】他人より借り又は預りたる品を、ことわりなしに他へ賣りとばす。

うり-こきやく 賣沽却【名】賣拂ふこと。

うり-こし 賣越【名】〔商〕定期取引にて、買手が賣手に變じて賣りたる數が、以前買手たりし時に買取りし數よりも多きこと。

うり-ごし 賣腰【名】〔商〕相場に於ける賣方の勢力の强弱の度合。

うり-ことば 賣言葉【名】他を怒らせんためにわざと言ひだす言葉。暴言。（買言葉に對して）

賣言葉に買言葉【句】相手より暴言を受くれば、我れよりもその返報に暴言を吐くこと。狂言（入間川）「昔も賣言葉に買言葉とは、よう言うたものぢやなあ」

うり-こみ 賣込【名】賣りこむこと。

うりこみ-しやう 賣込商【名】地方の荷主（ニヌシ）より委託せられて、貿易港の外國商館に賣込む商人。

うりこみ-てあひ 賣込手合【名】〔商〕貿易上の賣手の手合。〔武藏國橫濱の方言〕

うり-こむ 賣込む【動四他】一 商品を賣りて運び込む。二 多年の商賣に、得意さきの信用をかさぬ。「賣込んだ店」

うり-ごや 瓜小屋【名】瓜畠を番する小屋。

うり-ごゑ 賣聲【名】賣らんがために呼びあるく聲。

うり-さうば 賣相場【名】〔商〕一 商品の原價に、その他の諸掛及び原價に對する一定の利息等を加へたる値段。うりさばきねだん。うりね。うりねだん。二『英 Selling rate の譯語』賣爲替の相場。（爲替取組人よりいへば買相場となる）

うり-さき 賣先【名】商品を賣込むべき相手。うりくち。さばきくち。得意。得意先。

うりさき-しりよく-ほしようれう 賣先資力保證料【名】〔商〕しはらひほしようれう(支拂保證料)に同じ。

うり-さぐ 賣下ぐ【動下二他】官より物品を民間に賣る。

うり-さげ 賣下【名】賣下ぐること。

うりさげ-じよ 賣下所【名】賣下ぐるところ。「切手賣下所」

うり-ささへ 賣支【名】〔商〕賣方に立ちて相場を支へ、崩落せしめざる手段。

うり-ざし 瓜刺【名】瓜を敵と見なして刺しつらぬく、戰爭に擬(ギ)したる遊戲。

うり-ざね 瓜核・瓜實【名】㊀瓜の核。瓜の種子。うりだね。㊁うりざねがほ(瓜核顏)の略。

うりざね-がた 瓜核形【名】石造の手水鉢の、形の瓜核に似たるもの。難波寺形。

うりざね-がほ 瓜核顏【名】色白く中高にてやや長き人の顏。うりざね。

うりざね-どうろう 瓜核燈籠【名】形の瓜核に似たる石燈籠。

うり-さばき 賣捌【名】賣捌くこと。

うりさばき-かんぢやう-もとちやう 賣捌勘定元帳【名】〔商〕うりあげもとちやう(賣上元帳)に同じ。

うりさばき-じよ 賣捌所【名】賣りさばく店。「新聞雜誌賣捌所」

うりさばき-にん 賣捌人【名】賣りさばきをなす人。

うりさばき-ねだん 賣捌値段【名】〔商〕うりさうば(賣相場)㊀に同じ。

うりさばき-ゐたく 賣捌委託【名】〔商〕ゐたくはんばい(委託販賣)に同じ。

うり-さばく 賣捌く【動四他】手びろく賣る。うりこなす。賣る。

うり-さばける 賣捌ける【動下一自】ひろく賣れゆく。

うり-ざら 瓜皿・瓜盤【名】瓜を盛る皿。紀「瓜盤、ウリザラ」

うり-したふ 賣慕ふ【動四他】〔商〕相場にて、賣手が自己の意に適したる場合を認めて、しきりに賣る。

うり-しのぐ 賣凌ぐ【動四他】〔商〕相場にて、買手がさかんに來るに對して、つひに賣叩き盡す。

うり-しぶる 賣澁る【動四他】〔商〕相場にて、賣手が自己の希望どほりの値の出でぬため躊躇す。

うり-しろ 賣代【名】賣りて得たる金錢。うりあげ。

うりしろ-なす 賣代爲す【動四他】賣りて、代金となす。賣りあげて、錢となす。

うり-す 螽斯【名】〔動〕『うりくひむし(瓜食蟲)を見よ』はたおりむし(機織蟲)を云ふ。〔近江國の方言〕

うり-すゑ 賣据【名】家・藏などを、もとのままに据ゑおきて、賣ること。

うり-そそぐ 賣注ぐ【動四他】〔商〕うりたたく(賣叩く)に同じ。〔取引所の語〕

うり-ぞへ 賣添【名】〔商〕相場にて、賣手がしきりに賣りをる場合に、他の賣手又は多數の人の來りて聲援すること。

うり-ぞめ 賣初【名】はつうり(初賣)に同じ。

うり-だうぐ 賣道具【名】賣拂ふ道具。

うり-だか 賣高【名】物を賣りて取上げたる金高。うりあげだか。

うり-だし 賣出【名】㊀賣出すこと。賣始め。賣りぞめ。發賣。㊁特別に日などを選み、景氣をつけんがために、或は廉價にし、或は景物を添へなどして賣ること。㊂人望の高まり行くこと。〔俚語〕

うり-だす 賣出す【動四他】㊀うりいだす(賣出す)に同じ。㊁商賣して、追追繁昌す。㊂人望高まりゆく。〔俚語〕うれっこ(賣子)參照。

うり-たたき 賣叩【名】〔商〕うりたたくこと。うりうち。

うり-たたく 賣叩く【動四他】〔商〕相場にて、賣方が買方の多少に拘らず盛んに賣出し、一時、買方をして、相場を自由にすること能はざらしむ。うりものそそぐ。うりそそぐ。〔取引所の語〕

うり-だて 賣建【名】〔商〕たて(建)を見よ。

うりだに-いし 瓜溪石【名】〔鑛〕紀伊國日高郡南部(ミナベ)川の支流なる瓜溪より產する石。多くは靑色を帶び、盆石に佳なり。

うり-だね 瓜種・瓜核【名】うりざね(瓜核)に同じ。

うり-だめ 賣溜【名】賣上げたる代金のたまりたるもの。うりだめきん。

うりだめ-きん 賣溜金【名】前條に同じ。

うり-ち 賣地【名】賣るべき土地。うりぢめん。

うり-ぢめん 賣地面【名】前條に同じ。

うり-ちやいれ 瓜茶入【名】唐物(カラモノ)の茶入二十四種の一。姥口(ウバクチ)にて、胴に七葉又は八葉の瓜形の切込(キレコミ)あり。うり。

うり-ちやう 賣帳【名】賣りたる物の名とその價とを記しおく帳簿。

うり-つく 賣附く【動下二他】强ひて買はしむ。おしうりにす。

うり-つくす 賣盡す【動四他】有る限りを悉く賣る。賣果たす。

うり-つくり 瓜作【名】瓜を作ること、又その人。源氏「うりつくりになりやしなまし」

うり-つくり 瓜作【枕】瓜は蔓のまにまに處定めずなるものなるより、となりかくなりにかけていふ。拾遺「音に聞く狛のわたりのうりつくりとなりかくなりなる心かな」

うり-づけ 瓜漬【名】瓜の漬物。

うりつけ-はうこくしよ 賣附報告書【名】〔商〕仲買人が、賣手に商品賣買の顚末を報告する書。數量・價格・時期・代金受取の時期・仲買手數料などを記載す。(買附報告書に對して)

うり-つなぎ 賣繫【名】〔商〕賣りつなぐこと。

うり-つなぐ 賣繫ぐ【動四他】〔商〕相場にて、現物の所有者が、その現物を定期取引に賣建(ウリダテ)をなす。

うり-づめ 賣詰【名】絕えず賣ること。

うり-づら 瓜蔓【名】次條に同じ。〔古語〕

うり-づる 瓜蔓【名】瓜の蔓。うりづら。うりかづら。

うり-て 賣手【名】物を賣る人。うりかた。うりぬし。うりにん。(買手に對して)

うり-どころ 瓜所【名】瓜を產する地。小大君集「瓜どころここにはあらじ山城のつらを尋ねてわれならざらん」

うり-とばす 賣飛す【動四他】惜しげなく賣る。

うり-な 賣名【名】賣物の名。俗謠「金魚を賣りにやったら、賣名を忘れ、酒に醉うた鮒はいりませんかいな」

うりなか-がひ 賣仲買【名】〔商〕商品の賣捌方に關して、他人の商行爲を媒介する商人。

うり-ながす 賣流す【動四他】遠方へ賣りとばす。

うり-なほし 賣直【名】〔商〕賣りなほすこと。

うり-なほす 賣直す【動四他】〔商〕相場にて、新規に更に賣る。

うり-にん 賣人【名】うりて(賣手)に同じ。

うり-ぬし 賣主【名】㊀うりて(賣手)に同じ。(買主に對して)㊁〔法〕賣買契約により、相手方に對して、或財產權を移轉する義務を負ふ者。(買主に對して)

うり-ぬし 瓜主【名】瓜の持主。狂言(瓜ぬす人)「さてもさても、よい肝をつぶいた。うりぬしかと思うて」

うりぬし-かぶ 賣主株【名】〔商〕或事業を會社組織に變更する場合に、その事業の關係人が現金の代りに受くる株。

うり-ぬすびと 瓜盜人【名】㊀畑なる瓜を盜む人。㊁悖德(ハイトク)の人を罵りていふ稱。蓮如上人御文章「たとひ瓜ぬすびとと云はるるとも」

うり-ね 賣直【名】賣渡す直段。うりねだん。賣價。(買直に對して)「賣直は、元直(ネモト)の二割高」

うり-ね 瓜根【名】〔植〕きからすうり(黃烏瓜)を云ふ。〔越前國・紀伊國及び大和國の方言〕

うり-ねだん 賣直段【名】うりね(賣直)に同じ。

うり-の 瓜野【名】〔地〕うりふの(瓜生野)を見よ。

うり-のき 瓜木【名】〔植〕㊀山茱萸(サンシユユ)科に屬する山地自生の常綠木。高さ一丈に達し、葉は甜瓜(マクハウリ)のに似、幹にも甜瓜のごとき筋あり。花は白色・七瓣にして花瓣外反し、その香氣また甜瓜に類す。幹のあまがはは、剝ぎ乾して、驛馬の背にかけて蠅拂(ハヘハラヒ)に用ひられたり。うりはのき。㊁うりはだかへで(瓜肌楓)に同じ。

うり-のき 賣退【名】〔商〕賣りのくこと。

うり-のく 賣退く【動四他】〔商〕相場にて、先の買を不利益と見て、相場の下落に先だちて轉賣し、その賣買を終了す。**なげ**(投)・**りぐひ**(利食)參照。

うり-のせ 賣乘【名】〔商〕賣乘せること。

うり-のせる 賣乘せる【動下一他】〔商〕相場にて、賣に利益ありと見たる場合に、更にその賣玉(ウリギヨク)を增す。**りのせ**(利乘)參照。

うり-ば 賣場【名】**一**商品を陳列して、顧客に賣捌く特定の場所。**二**芝居にて、棧敷(サジキ)・土間の見料を掌る所、又その所の役員。

上(ウヘ)の賣場【句】芝居の賣場の、正面の棧敷(サジキ)のみを支配するもの。中央に設けたる高き壇の上に居る。たかば。

下(シタ)の賣場【句】芝居の賣場の、正面の棧敷・土間一切を支配するもの。正面の棧敷の下の片寄りたる處に居る。

うり-ばう 瓜坊【名】猪の兒。

うりはだ-かへで 瓜肌楓【名】〔植〕槭樹(モミヂ)科に屬する落葉喬木。山地に自生す。樹皮綠色にて、瓜の膚色に類する小斑あり。葉は對生し、鋸齒を具へて、三裂もしくは五裂し、開きたる掌の如し。春、淡黃色の花を開く。うりのき。おほうりかへで。かうもりかへで。かはほりかへで。

うり-ばたけ 瓜畑【名】**一**瓜を作る畑。瓜を作れる畑。**二**うりふ(瓜生)に同じ。

うりは-のき 瓜葉木【名】〔植〕うりのき(瓜木)㊁に同じ。

うり-ばへ 瓜蠅・瓜葉蟲・守瓜・蠜【名】〔動〕鞘翅(セウシ)類に屬する害蟲。主に瓜類の幼苗に生じ、成蟲は形、螢に似、濃黃褐色にして光澤を有し、成蟲のまま越年して、翌年出でて、葉を網狀に蠶食す。捕ふる時は惡臭ある液を出す。うりむし。

うり-はらひ 賣拂【名】賣拂ふこと。

うり-はらふ 賣拂ふ【動四他】賣りて仕舞ふ。賣却す。てばなす。賣る。

うり-ひしぐ 賣拉ぐ【動四他】同じ商賣をなして、相手をまかす。賣高が他にまさる。世間娘氣質「美濃屋が新みせにうりひしがれて」

うり-ひろぐ 賣弘ぐ【動下二他】次條に同じ。

うり-ひろむ 賣弘む【動下二他】ひろく世間へ賣る。賣先をひろくす。うりひろぐ。

うり-ひろめ 賣弘【名】賣弘むること。

うり-ふ 瓜生【名】瓜の生えてある處。うりばたけ。〔古語〕長方集「しばかこふ園の瓜生の一つらになるとしならばまくりあへかし」

うりふ-いは 瓜生岩【名】〔人〕慈善家。岩代國の人。瓜生會を起し、大に貧民又は戰死者遺族の救育に勉む。明治二十九年藍綬褒賞を賜はり、同三十年歿す。年六十九。

うり-ふたつ 瓜二つ【句】うり(瓜)の條下を見よ。

うりふ-たもつ 瓜生保【名】〔人〕勤王家。越前國の人。判官また左衞門尉と稱す。延元元年義兵を杣山(ソマヤマ)に擧げて、高師泰を破り、翌年金崎(カナガサキ)に援ひしが、今川賴貞大兵を率ゐて來り攻むるに當り、弟義鑑と奮戰して死す。

うりふ-てらす 瓜生照【名】〔人〕勤王家。保の弟。彈正左衞門と稱す。新田義貞に屬して功あり。後、義助に從ひ、足利高經を足羽(アスハ)に攻めてこれを走らせしが、終る所を知らず。

うり-ぶね 賣船【名】**一**賣るべき船。**二**『貨錢にて手間を賣る意よりいふ』**かしぶね**(貸船)に同じ。平假名盛衰記「うりぶねの船頭ふぜい、いくさといふ者は、夢に見た事もござらぬ」

うり-ぶね 瓜船【名】**一**瓜を積みたる船。**二**『船の形に似たるよりいふ』瓜を縱に二つに割りたる一つ一つ。散木「うり船はうみすぎてこそまゐりたれ浪に振られてみなそこに見ゆ」

うりふ-の 瓜生野【名】〔地〕攝津國にある野。正平二年楠木正行、北軍の將山名時氏・細川顯氏の住吉にあるを攻めんとして、この地に戰ひ、大にこれを破る。今は大阪府東成(ヒガシナリ)郡墨江村の字となりて、遠里小野(ヲリヲノ)といひ、その地の人は瓜野といへり。遠里小野(トホザトヲノ)。

うりふ-やま 瓜生山【名】山城國愛宕(オタギ)郡白河村の東北にある山。歌枕たり。新勅撰「行く人を留めかねてぞ瓜生山峰たちならし鹿の鳴くらん」

うり-へぎ 賣剝【名】他人の物を賣りて、その代價の一部を私すること。長町女腹切「賣りへぎの二十兩たとへ首になるとても」

うり-べらし 賣減【名】賣りへらすこと。

うり-へらす 賣減す【動四他】商賣に損をして、手元をへらす。〔東京の語〕

うり-まい 賣米【名】うりよね(糶)に同じ。

うり-まはる 賣廻る【動四他】賣らんとしぞ步きまはる。賣らんとして持ち步く。

うり-まろび 瓜轉【名】瓜の轉がるがごとく人の轉ぶこと。〔古語〕行宗集「ふく星のけふより見ゆる身にしあればうりまろびして悅びぞする」

うり-みて 賣滿【名】品物を殘りなきまで賣ること。賣りつくすこと。

賣滿は長者【句】賣りみての最後の品は、賣る者も長者のごとく心ゆるやかになりて、つとめて價を低くす。〔諺語〕

うり-むかひ 賣向【名】〔商〕相場にて、買方に對して賣ること。

うり-むし 瓜蟲【名】〔動〕うりばへ(瓜蠅)に同じ。

う-りん 羽鱗【名】鳥と魚と。

う-りん 羽林【名】『疾きこと羽のごとく、多きこと林のごとき意といふ』このゑふ(近衞府)の唐名。

うりん-け 羽林家【名】公卿の家格の第四位、卽ち大臣家に次ぐもの。その官、侍從より大中納言・參議等に至るを先途とし、近衞中少將を兼ぬるもの。正親町(オホギマチ)・中山・鷲尾・園・油小路・松本・姉小路・東園・大宮・西大路・庭田等の諸家。

うりん-じ 羽林兒【名】このゑへい(近衞兵)の唐名。

うりん-じしやう 羽林次將【名】このゑのせうしやう(近衞少將)の唐名。

うりん-じやうしやう 羽林上將【名】このゑのたいしやう(近衞大將)の唐名。

うりん-たいしやうぐん 羽林大將軍【名】前條に同じ。

うりん-ちゆうらうしやう 羽林中郞將【名】このゑのちゆうじやう(近衞中將)の唐名。

うりん-れい 雨霖鈴【名】唐朝の歌曲の名目。玄宗が、蜀に幸し、棧道(サンダウ)にて、車駕の鈴の聲と霖雨の音と相應ずるを聞き、楊貴妃を悼(イタ)む情に堪へずして作れるもの。

うりん-ゐん 雲林院【名】うんりんゐん(雲林院)㊀の略。うりうゐん。うじゐ。うぢゐ。大鏡「さいつころ雲林院の菩提講に詣でてはべりしかば」古今「うりんゐんの木の陰にたたずみて詠みける」

うりんゐん-ぼだいこう 雲林院菩提講【名】三月二十一日、京都紫野の雲林院にて法華・金光明の二經を講じて營みし法會。

うり-もの 賣物【名】賣るべき品物。賣拂ふ物。賣品。

賣物、買物【句】その品の價の如何によりて、賣る人は賣るも賣らぬも自由、又、買ふ人も買ふも買はぬも自由なり。〔諺語〕

賣物には花を飾れ【句】賣物は、立派に飾りて、人の心を惹(ヒ)くやうにせよ。〔諺語〕

賣物、安物(ヤスモノ)【句】つとめて賣らんとする物には、價安くして品質劣れるもの多し。〔諺語〕天の網島「さすが賣物安物め、どしやう骨見ちがへ、魂を奪はれし、巾著切め」

うりもの-け 賣物氣【名】賣物らしき樣子。

うりもの-ちやう 賣物帳【名】賣りたる商品を書上ぐる日記簿。

うりもの-みせ 賣物店【名】賣物を置きならべたる店。賣店(バイテン)。

うり-もみ 瓜揉【名】胡瓜(キウリ)又は越瓜(シロウリ)などのわたを去りて、薄く刻み、鹽をかけ、能く揉(モ)みて、三杯酢に漬けたる食品。

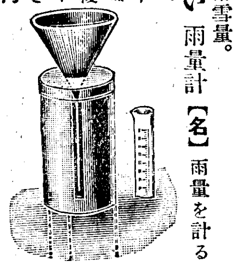
うり-や 賣屋【名】〔商〕うりかた(賣方)㊁に同じ。(買屋に對して)

うり-や 賣家【名】うりいへ(賣家)に同じ。

う-りやう 雨量【名】〔地〕『英 Quantity of precipitation』空氣中に含める水分が雨・雪などとなりて、地面に降下し、地中に浸透(シントウ)せず又蒸發もせぬものと假定しての

堆積分量。通常ミリメエトルを單位として計算し、又、雪は水に換算してあらはす。降水量。雨雪量。

うりやうーけい 雨量計【名】雨量を計るに用ふる具。圓筒を漏斗(ロウト)狀の蓋(フタ)にて覆ひ、その中央なる小き孔より筒內に落ちて溜れる水の深さによりて計る。


（うりやうけい）

うりやーさしきん 賣屋差金【名】〔商〕定期取引所にて、賣手が、自己の不利益を知り、その取引契約を解除する場合に、買方に支拂ふ打歩(ブウチ)金。

うりゆう 雨龍【名】〔地〕石狩國九郡の一。雨龍川の東西兩岸の山谷を占む。空知(ソラチ)支廳の管轄に屬す。

うりゆうーがは 雨龍川【名】〔地〕石狩國雨龍郡を縱斷する川。天鹽國境より發し、神居(カモヰ)の險峽を經て諸流を集め、石狩川に合す。長さ約四十里。

うーりよう 雨龍【名】あまりよう(雨龍)に同じ。

うりーよね 糶【名】『賣米(ネヨ)の義』藏米を賣出すこと、又その米。うりまい。(かひよねに對して)

うりーわたし 賣渡【名】賣渡すこと。

うりわたしーしよう 賣渡證【名】〔商〕商品を賣却せし時、賣主より買主に對し、その賣買の目的物を移轉したる事を證明するために交付する證書。商品の種類・數量及び代價等を記載す。うりあげ證。賣渡證書。

うりわたしーしようしよ 賣渡證書【名】前條に同じ。

うりーわたす 賣渡す【動四他】賣りて、その品物を渡す。

うりーわり 瓜割【名】うりぎり(瓜切)に同じ。狂言(太刀奪)「瓜わりにしてやらう」

うりーをしみ 賣惜【名】〔商〕相場にて、賣手が賣ることを控ふること。(自己の註文する機會の到來を待つか、又は賣りたる後の補充品の仕入に困難する等の場合に生ず)

うる 粳【名】澱粉乏しく、炊(カシ)ぎて粘りけの乏しき稻・粟・黍などの總稱。(糯(モチ)に對して)「うるの米」

うる 末【名】うれ(末)の轉訛。〔飛驒國の方言〕

うーる 傴僂【名】せむし(背蟲)に同じ。

うる 賣る【動四他】㊀錢と引易へに、物を渡す。ひさぐ。古今「家を賣りて詠(ヨ)める」㊁名聞のために世に弘む。てらふ。「名を賣る」㊂欺く。だしぬく。「國を賣る」「友を賣る」

うる 熟る【動下二自】熟す。

うる 賣る【動下二自】㊀商、行はる。買はる。狂言(河原太郎)「賣るる酒ならば、賣れうぞ」㊁世に知らる。人に知らる。「名がうる」

うるーあは 粳粟【名】〔植〕粘りけ乏しき粟。即ち普通の粟。味劣れど、食用に供し、又飴(アメ)の原料とす。あはのうるしね。(もちあはに對して)

うるい 玉簪【名】〔植〕ぎぼうしゆ(擬寶珠)を云ふ。〔奥州の方言〕

うるか 鱁鮧【名】鮎(アユ)の肉・內臟又はその子を鹽辛のごとくに製したる食品。

うるか 海豚【名】〔動〕いるか(海豚)の轉。

うるき【名】〔植〕じふにひとへ(十二一重)に同じ。

うるーきび 粳黍【名】〔植〕白色にして粘り氣少き黍、即ち普通の黍。炊(カシ)ぎて飯・粥とし、又は團子とす。うるしきび。うるちきび。

うるぎーぼし 女宿【名】二十八宿の一。西方にあり。

うるけし 愚し【形一】おろかなり。〔古語〕

うるけーお 于樓該鉤【名】うるぢ(宇流鉤)に同じ。〔古語〕紀「癡騃鉤、此云于樓該膩」

うるける 潤ける【動下一自】うるほふ。ふやける。〔陸奧國の方言〕

うるーごめ 粳米【名】うるち(粳)に同じ。

うるさ【貌】うるさきさま。源氏「才(ザエ)たぐひなくうるさながら」

うるさーうるさ【貌】前條の語を重ねていふ語。六帖「秋萩の玉まく葛のうるさうるさ我をな戀ひそあひも思はず」

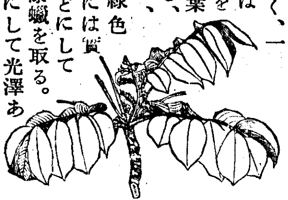
うるさーがる【動四他】うるさく思ふ。煩はしく思ふ。源氏「髪をかきなでつつけづることをもうるさがりたまへど」

うるさし【形一】うるせしに同じ。〔古語〕枕「花のにほひなど咲きたるに劣らず、いかにうるさかりけん」

うるさし 五月蠅し【形一】わづらはし。厭はし。大和「法師になりぬる人は、かくうるさき事いふものかといひければ」

うるさん 蔚山【名】〔地〕朝鮮慶尙道蔚山郡にある都邑。海に瀕す。慶長二年、征韓再役の際、加藤清正の明將楊鎬(ヤウカウ)に圍まれて死守し、遂にこれを擊破せしところ。壘壁今に存す。

うるし 漆【名】㊀〔植〕漆樹(シウル)科に屬する落葉喬木。高さ一二丈に達す。葉の形ぬるでに似、鋸齒なく、一柄に四對もしくは六對づつの小葉を著けたる羽狀複葉をなして、互生し、夏、梢に穗出でて、雌雄異株なる黃綠色の小花開く。雌樹には實あり、大さ一分ほどにして黃褐色、乾して漆蠟を取る。樹皮は、初は灰色にして光澤あれども、後、割目を生じて粗くなり、傷けて漆液を取る。材は黃色を帶び、堅からざれど水濕に堪ふ、漁網の浮子(ウキ)・器具などに作る。うるしのき。〔漆樹〕和名「漆、宇流之」㊁漆の樹の皮に、鋸目を入れて、そこより流れ出でたる灰白色の汁を採取し、これに乾燥劑と著色劑とを加へて製したるもの。通常、漆酸・水分・護謨質・含炭素質・揮發性酸及び成油の六分を含み、種種の器に塗る料とす。


（うるし㊀）

うるし 粳【名】うるち(粳)に同じ。

うるしい【形二】うれし(嬉し)の訛。卜養狂歌集「たまはりし木地三つ組の塗物はうるしいうるしいかたぢゆうけない」

うるしーいし 漆石【名】〔鑛〕㊀こくえうせき(黑曜石)に同じ。㊁せきたん(石炭)を云ふ。〔越後國の方言〕

うるしーかき 漆掻【名】漆の皮樹より液汁を採集すること、又これを業とする人。

うるしーがき 漆書【名】漆にて書くこと、又その書きたるもの。しっしよ。

うるしーかせ 漆乾【名】次條に同じ。

うるしーかぶれ 漆瘡【名】漆の毒氣にかぶれて生ずる皮膚病。毒に觸れたる皮膚に多數の小突起を生じ、重きは腫(ハ)れ上りて非常に痒きこともあれど、十日間前後を經れば快癒す。うるしまけ。うるしかせ。うるしくひ。和名「漆瘡、宇流之加不禮、人見レ漆中二其毒一而腫是也」

うるしーきび 粳黍【名】〔植〕うるきび(粳黍)に同じ。

うるしーぐさ 漆草【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。絲狀をなして再三分岐し、中肋を有す。我が國の北部の淺海に生ず。

うるしーくひ 漆喰【名】うるしかぶれ(漆瘡)に同じ。

うるしーくわ 漆樹科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉類・離瓣花區に屬する一科。木本にて、樹脂或は乳樣の液汁を含む。漆・櫨(ハゼ)・白膠木(ヌルデ)・檬果(マンゴウ)等これに屬す。

うるしーげし 漆消・雪下紅【名】〔植〕ほろし(蜀羊泉)に同じ。

うるしーこし 漆漉【名】漆を漉(コ)すに用ふる紙。おもに吉野紙を用ふ。うるしこしがみ。天の網島「塵紙屋めが漆漉ほどな薄元手で」

うるしこしーがみ 漆漉紙【名】前條に同じ。

うるしーざいく 漆細工【名】器物に漆を塗りて種種の細工をなすこと、又その器物。うるしぬり。

うるしーぢ 漆地【名】漆にて塗りたる下地(シタヂ)。

うるしーつぼ 漆壷【名】漆液を貯藏するに用ふる木造の器。

うるしーぬり 漆塗【名】器物に漆を塗ること、又これを業とする人、又その塗りたる器物。

うるーしね 粳稻【名】〔植〕うる米の實のる稻。その實は粘りけ少し。和名「秔米。本草云、秔米、字亦作レ粳、一名ト米、宇流之禰」

粟のうるしね【句】うるあは(粳粟)に同じ。〔古語〕和名「粱米、阿波乃宇留之禰」

うるし-の-き 漆樹【名】〔植〕うるし（漆）㊀に同じ。

うるし-はぎ 漆矧【名】矢の羽を矧ぎたる絲の上を、漆にて塗りたるもの。雨雪の時に用ふ。

うるし-ばけ 漆刷毛【名】漆を塗るに用ふる刷毛。刷毛の殆ど全長に達する毛を、薄き板にて扁く包み、漆を著くる末の部分だけ、板を削りて、毛を現はして用ふ。

うるし-ばたけ 漆畑【名】漆の木を植ゑたる畑。江戸時代には、檢地の際、この畑を上上の位と定めたり。

うるし-ばん 漆判【名】膠（ニカ）をひきて漆の如き光澤を出したる判。一代男「かための誓紙、漆判の朽ちぬまでとぞ祈りける」

うるし-ぶぎやう 油漆奉行【名】『あぶらうるしぶぎやう（油漆奉行）を見よ』江戸幕府の職制の一。勘定奉行の支配に屬し、漆の收納及び社寺の什器などの事を掌りしもの。後、油奉行廢せらるるに及んで、その事をも攝行せり。

うるし-ぶろ 漆風呂【名】うるしむろ（漆室）に同じ。

うるし-べ-の-つかさ 漆部司【名】古、大藏省に屬し、漆を塗ることを掌りし役所。ぬりべのつかさ。

うるし-べら 漆箆【名】漆を塗るに用ふる箆。木材にて作る。

うるし-まけ 漆負【名】㊀うるしかぶれ（漆瘡）に同じ。㊁體質の漆かぶれに罹りやすきこと。

うるし-むろ 漆室【名】漆を塗りたる物を入置きて乾かす室。うるしぶろ。

うるし-もん 漆紋【名】定紋を漆にて書きたるもの、多く夏衣の紋附などに行はる。

うるし-や 漆屋【名】漆を製して賣る店。

うるし-ゆみ 漆弓【名】ぬりゆみ（塗弓）に同じ。

うるし-ゑ 漆繪【名】㊀漆器の上に、更に種種の色漆にて描きたる畫。推古時代よりありて、大和國法隆寺所藏の玉蟲の厨子（ヅシ）のは最も古きものなり。近代に至りては、すべての漆器產地に於て描かる。㊁錦繪などの、墨刷（スミズリ）の上に膠（ニカ）を塗りて、漆のごとき光澤を出し、又、金泥などをも用ひたるもの。〔臙脂畫〕

うるせし【形二】うるはし。よし。すぐれたり。うるさし。〔古語〕 源氏「宮の御琴の音は、いとうるせくなりにけりな」 源氏「童なれどもかしこくうるせきものは、かかる事をぞしける」

うる-ち 粳【名】粘りけ少き米、即ち普通の米。うるごめ。うるし。うるちごめ。（餅米に對して）

うる-ぢ 宇流鉤【名】凶事を釣るといふ鉤。うるけち。〔古語〕 紀「宇流鉤、ウルヂ」

うるち-あは 粳粟【名】〔植〕うるあは（粳粟）に同じ。

うるち-きび 粳黍【名】〔植〕うるきび（粳黍）に同じ。

うるち-ごめ 粳米【名】うるち（粳）に同じ。

うるつぷ 得撫【名】〔地〕千島國九郡の一。得撫（ウルツプ）・知理保以（チリホイ）・武魯頓（ブロトン）の諸島より成る。中に、得撫島最も大なり。根室支廳の管轄に屬す。

うるつぷ-さう 得撫草【名】〔植〕玄參（ゴマノハグサ）科に屬する多年生の草。根莖は匍匐し、葉は肉質にて長卵形をなし、鋸齒を有す。花莖一尺ばかり、夏、紫色の花、穗狀花序をなして開く。北部の高山に自生す。

うるはし 麗し【形二】㊀つやありて美し。たをやかなり。外貌ととのひてあり。むるはし。 狹衣「御うちとけ姿のうるはしきよりも」 ㊁親しむべし。心まめやかなり。かはゆし。むつまし。〔古語〕 伊勢「むかし、男、いとうるはしき友ありけり」

うるはし-だつ 麗しだつ【動四自】うるはしき樣に見ゆ。かはゆきさまに見ゆ。〔古語〕 源氏「うるはしだちてはかばかしき方に見れば」

うるはしむ 麗しむ【動四他】かはゆく思ふ。愛らしく思ふ。〔古語〕 紀「道のしりこはた少女は爭はず寢しくをしぞもうるはしみ思ふ」

うるはす【動四自】心を通ず。したしむ。〔古語〕 紀「腹心、ウルハシテ」

うるひ 潤【名】うるほひ（潤）に同じ。〔古語〕 夫木「咲く花のかぞいろはとて降る雨のはぐくみたつるうるひとぞ見る」

うるひ 閏【名】うるふ（閏）に同じ。〔古語〕 六帖「うるひさへありて行くべき年だにも春に必ずあふよしもがな」

うるひ【名】〔植〕じふにひとへ（十二一重）に同じ。

うるび-いろ 潤色【名】うるみいろ（潤色）に同じ。

うるびんら-かせふ 憂樓頻螺迦葉【名】〔人〕三迦葉の一。佛成道の初め、他の二弟子と共に、衆を將ゐて佛に歸す。

うるふ 閏【名】地球が太陽を一周しをはる時日、又は月が地球を一周しをはる時日が、地球の一回自轉する時間（即ち一晝夜二十四時間）の整數倍ならざるより生ずる過剩の日數。太陰曆にて、一年を三百六十日としてこれを十二月に分つも、月の朔望に合はず、なほ餘を生ずるを、積みて一箇月として一年に加ふ。これを閏月といひ、大よそ五年に二度づつの割合にて、十九年間に七回を重ぬれば、全く過不及無きに至る。而して、その閏月のある年を閏年といふ。太陽曆にては、一年を三百六十五日とするも、實際に於ては毎年零二四二二の餘分を生ずるより、四年毎に二月に一日を加へて二十九日となし、百年目にはこれを加へず、四百年目には又加へて過不足を調節し、その日を閏日といひ、閏日のある年を閏年といふ。又、閏年ならぬ年を平年（ヘイネン）といふ。うるひ。

うるふ 潤ふ【動下二他】うるほす（潤す）に同じ。〔古語〕 著聞「喉（ノド）うるへたまへ」

うるふ 潤ふ【動四自】うるほふ（潤ふ）に同じ。〔古語〕 公任集「ひとつ雨にうるふ草木はことなれど終には本にかへらざらめや」

うるふ-づき 閏月【名】うるふ（閏）を見よ。

うるふ-どし 閏年【名】うるふ（閏）を見よ。

閏年、片袖足らず【句】徳川時代に、太陰曆によれば、六十一日目に庚申の日あり、この夜男女同衾すれば、盜心ある子を孕（ハラ）むといひて、これを忌み、この夜は、庚申待とて、多人數あつまりて庚申を祭り、談話をなす習慣あり。閏年にはこの庚申の日平年より多く、大抵七回もあり、されば、女子は男子の挑（イド）むことの多いために、片袖のみにては足らずとの義。〔俚語〕

うるふ-び 閏日【名】うるふ（閏）を見よ。

うるほす 潤す【動四他】㊀濕氣を含ましむ。しめす。しめらす。うるふ。㊁富ます。ゆたかならしむ。恩澤・利益を得しむ。うるふ。

うるほひ 潤【名】㊀うるほふこと。しめり。うるひ。濕氣。㊁文學・美術の作品に、感情的趣味の多きこと。（乾燥に對して）㊂まうけ。得分。利潤。利益。恩澤。「土地のうるほひ」 輔親集「うるほひにぬるべき身とし知りぬればふる夏の夜の雨もうれしき」

うるほふ 潤ふ【動四自】㊀濕氣を含む。うるふ。しめる。㊁利を得。富む。まうかる。恩澤を蒙る。うるふ。

うるま-に【名】〔植〕いちゐ（一位）を云ふ。〔北海道の方言〕

うるま-の-しま うるまの島【名】〔地〕琉球國の古稱。一說には臺灣。 千載「おぼつかなうるまの島の人なれやわがうらむるを知らずがほなる」

うるま-の-わたし 宇留間渡【名】〔地〕美濃國稻葉郡鵜沼（ウヌマ）村にある、木曾川の渡。

うるまん【名】いるまん（伊留滿）に同じ。

うるみ 潤【名】㊀うるむこと。㊁うるみいろ（潤色）の略。

うるみ-あづき 潤小豆【名】〔植〕うづらあづき（鶉小豆）に同じ。

うるみ-いろ 潤色【名】潤ひて光の鮮かならぬ色。さえぬ色。うるみ。うるびいろ。

うるみ-しゆ 潤朱【名】朱の漆塗の、黑みを帶びたるもの。

うるみ-まくら 潤枕【名】潤朱にて塗りたる枕。

うるみ-わん 潤椀【名】潤朱にて塗りたる椀。

うるむ 潤む【動四自】㊀冴（サ）えず。鮮（アザ）かならず。透き通らず。くもる。しぶる。 鬼貫「水よりも氷の月はうるみけり」 ㊁水氣を含む。どんよりす。㊂打たれ又はつめられなどして生じたる疵が、紫色になる。

うる-め 潤目【名】〔動〕㊀うるめいわし（潤目鰯）を云ふ。〔京都・大阪の語〕㊁めだか（目高）を云ふ。〔越後國の方言〕

をゑゐわ　ろれるりら　よゆや　もめむみま　ほへふひは　のねぬにな　とてつちた　そせすしさ　こけくきか　おえういあ

うるめ-いわし 潤目鰯 **【名】**〔動〕喉鰾（コウヘウ）類に屬する魚。鯡（ニシン）の類。多くは南海に產し、形は鰯に似、瞼（マブタ）赤くうるむ。鱗は櫛形にして剝げやすく、背部は淡蒼色、腹部は帶黃白色、脂少く、味淡泊、鰯と同じく食用に供し、又、搾粕（シメカス）・乾鰯（ホシカ）などとす。うるめ。

うる-もち 粳餅 **【名】** うる米をまぜて舂きたる餅。しんこ。うる。うるのもち。

うるりこ 細魚 **【名】**〔動〕一種の小き魚。一說には、鯋（イサ）の一名なりともいふ。和名「細魚宇流理古」

うるるく **【動四自】** をののく。おそる。〔古語〕名義抄「悸、ウルルク、イタム、ココロハシリ」

うれ 末・杪 **【名】** 草木の莖又は幹の末。うら。〔古語〕古今「笹の葉に降りつむ雪のうれをおもみもとくだちゆくわがさかりはも」

うれ 賣 **【名】** 賣れること。賣れ行くこと。「賣れが惡い」

うれ 己 **【代】** **一** 第一人稱。おのれ。うら。おれ。てまへ。**二** 第二人稱。おのれ。なんぢ。うぬれ。うぬ。おのれ。てまへ。

うれ-きる 賣切る **【動下二自】** 悉く賣れて殘品無くなる。うりきる。

うれ-きれ 賣切 **【名】** 賣れ切ること。うりきれ。

うれ-くち 賣口 **【名】** 賣れ行く方面。うれさき。うれゆき。はけみち。販路。

うれ-こみ 賣込 **【名】** うれこむこと。

うれ-こむ 賣込む **【動四自】** うれ口附く。

うれ-さき 賣先 **【名】** うれくち（賣口）に同じ。

うれ-さむ 賣醒む **【動下二自】** 商賣、次第に衰ふ。〔德川時代の語〕風流軍配團「終には賣れさめて、次第に商らすくなりぬ」

うれし 嬉し **【形二】** 喜ぶべきことに逢ひて、心浮きたつが如し。快く喜ばし。心喜ばしく樂し。大和「院の御せらそこの、いとうれしく待りて」

嬉しや水 **【句】** 古、嬉しく感じたる時發せし語。〔諺語〕辨内侍日記「うれしや水、鳴るは瀧の水、日は照るとも絕えずたらたりと囃しつつ」平家「うれしや水、とはやす」

うれし-かなし 嬉悲し **【形二】** うれしきことと、かなしきことと。〔俚語〕

うれし-がほ 嬉顏 **【名】** 嬉しげなる顏つき。よろこびがほ。太祇「父と子によき榾（ホダ）くべしうれし顏」

うれし-がらせ 嬉しがらせ **【名】** ちよっと嬉しと思はすること。〔俚語〕八笑人「ところ繁昌、家繁昌、その外、うれしがらせ、うけのよき事ばかり言ひならべ」

うれし-がる 嬉しがる **【動四他】** 嬉しく思ふ。うれしむ。うれしぶ。枕「さらばいかにめでたからんなど申す。うれしがりて」

うれし-けし 嬉しけし **【形二】** うれしきさまなり。うれしさうなり。〔古語〕萬葉「ここをしもあやにたふとみ嬉しけくいよよ思ひて」

うれし-ごゑ 嬉聲 **【名】** うれしげなるこわね。俳諧新選（嘯山）「接待や田も世の中のうれし聲」

うれし-なき 嬉泣 **【名】** 嬉しき餘りに泣くこと。よろこびなき。感泣。

うれし-なみだ 嬉淚 **【名】** 嬉しさに感じて出づる淚。感淚。

うれし-の 嬉野 **【名】**〔地〕播磨國加東（カトウ）郡にある野。東西二里・南北十四町。

うれしの-ちや 嬉野茶 **【名】** 肥前國藤津（フヂツ）郡不動山嬉野邊より製出する茶。

うれし-の-もり 嬉森 **【名】** 東京向島の南端なる水戶侯邸內の森。墨水銷夏錄「これは嬉森といふ。吉原がよひの人、舟にて歸るに、ここにて曉なれば、歸るに首尾よく嬉しといふより名づけたるなり。向ふの岸の松を首尾の松といふも、これとおなじ」

うれしの-やき 嬉野燒 **【名】** 肥前國藤津（フヂツ）郡西嬉野村に產する磁器。承應年間に創まる。靑色にして釉藥（ウハグスリ）の下は紅味を帶び、裏に嬉野燒の印を押す。

うれしの-をんせん 嬉野溫泉 **【名】**〔地〕肥前國藤津（フヂツ）郡西嬉野村にある溫泉。泉質は炭酸泉に屬し、リウマチスに効あり。

うれし-ぶ 嬉しぶ **【動四他】** うれしがる（嬉しがる）に同じ。〔古語〕萬葉「思ひのべうれしびながら枕つくつまやのうちに」

うれし-む 嬉しむ **【動四他】** うれしがる（嬉しがる）に同じ。〔古語〕紀「歡喜、ウレシム」

うれ-だか 賣高 **【名】** 賣れたる量又は價額。

うれ-たし 憂たし **【形二】** **一** うれはし。歎かはし。憂ふべくあり。〔古語〕紀「慨哉、此云二于黎多棄伽夜一」**二** いとふべし。きらはし。〔古語〕空穗「うれたき人かな」

うれ-だす 賣出す **【動四自】** **一** 販路、廣まりはじむ。**二** 名が知れわたりはじむ。

う-れつ 優劣 **【名】** いうれつ（優劣）に同じ。諺草「優劣、ウレツ」

う-れつ 羽裂 **【名】** 羽狀に裂くること。

うれ-づく **【名】**『憂（レウ）たく思ひて償（ツグナ）ふ意といふ』賭事（カケゴト）をして、負けたるときに出しつぐなふ物。〔古語〕記「かのうれづくの物を償はず」

うれ-っ-こ 賣子 **【名】** **一** はやりっこ（流行子）に同じ。〔俚語〕**二** 多くの人にめではやさるる人。ひろく歡迎さるる人。はやりっこ。はながた。〔俚語〕

うれ-のこり 賣殘 **【名】** 賣れ殘ること、又その品物。

うれ-のこる 賣殘る **【動四自】** 賣れずに殘る。

うれ-ば 末葉・杪葉 **【名】** 枝の末の方にある葉。うらば。〔古語〕夫木「み山路を夕越えくれば椎柴のうればにつたふ玉霰かな」

うれは-し 憂はし **【形二】**『うれふ（憂ふ）を見よ』憂ふべし。歎かはし。〔古語〕源氏「心かなしきさまざまの、うれはしき事のみ多かるに」

うれひ 憂・愁・患 **【名】** うれへ（憂）に同じ。萬葉「ながきけに思ひつみこしうれひはやみぬ」

うれひ-ごと 憂事・愁事 **【名】** **一** かなしき事がら。しんぱいごと。**二** 芝居の狂言にて、憂に沈むさまを演ずること。愁嘆（シウタン）。女殺油地獄「やつしは甚左衛門、幸左衛門が思案ごと、四郎三がうれひごと、にっぽん一の名人さま」

うれひ-さんぢゆう 愁三重 **【名】** **一** 淨琉璃の節の一。**二** 芝居の合方（アヒカタ）の一種。專ら三味線にて奏し、愁嘆の場に用ふるもの。

うれひ-ぶし 愁節 **【名】** 愁嘆の場合を表はす節。世間娘氣質「出羽芝居の阿波太夫がうれひぶしに打込み」

うれふ 憂ふ・愁ふ・患ふ **【動四他】**「一說には上二段の活用なりともいへど、「うれはし」といふ語もありて、「羨む」と「羨まし」又「煩ふ」と「煩はし」などの例によりて類推すれば、なほ四段活用なるべし」次條に同じ。〔古語〕三代實錄「日夜（ヒルヨル）間（ヒマ）無く憂ひおもほしおはします」

うれふ 憂ふ・愁ふ・患ふ **【動下二他】** **一** 歎き訴ふ。愁訴す。〔古語〕源氏「とのゐ所、ゆづりたまひてんやと、中將にうれへたまふ」**二** 心配す。氣づかふ。思ひ煩ふ。案ず。悲しむ。歎く。玉葉「水まさる早瀨の船もわがごとやのぼりもやらぬ世をうれふらん」**三** 病にかかる。煩ふ。病む。「風疾を患ふ」

うれへ 憂・愁・患 **【名】** **一** 歎き訴ふること。うれひ。愁訴。哀訴。竹取「かのうれへせしたくみらをば」**二** 心配。不安心。かなしみ。なげき。うれひ。玉葉「秋にそふうれへもかなしいつまでと思ふわが身の夕ぐれの空」**三** 害となること。わざはひ。うれひ。「後の患を除く」**四** やまひ。病氣。うれひ。「痘瘡の患に罹る」**五** 忌中。うれひ。紀「重服、オヤノウレヘ」

愁の雲 **【句】** しううん（愁雲）の直譯。夫木「空に滿つうれへの雲のかさなりて冬の雪とも積るなりけり」

愁の眉 **【句】** しうび（愁眉）の直譯。謠曲（切兼曾我）「愁の眉もたちまちに開くる花の盃」

愁の緖 **【句】** しうしよ（愁緖）の直譯。夫木「よそぢまで愁の緖にはつながれぬさてわれゆるせ住吉の神」

うれへ-がほ 憂顏 **【名】** 心配なる顏つき。しんぱいがほ。

うれへ-の-け 愁の毛 **【句】** け（毛）の條下を見よ。

うれへ-ぶみ 愁文 **【名】** 愁訴又は祈願する文書。歎願書。〔古語〕續古今「高き机の上に、うれへぶみの箱といふものをおかれ」

うれへ-まうし 愁申 **【名】** 歎き訴ふること。愁訴。〔古語〕

うれへ‐わするる‐くさ 憂忘るる草【名】〔植〕わすれぐさ（萱草）に同じ。乗輔集「片時も見てなぐさめよ昔よりうれへ忘るるくさといふなり」

うれむ‐ぞ【副】如何にぞ。いかでか。うれむぞは。〔古語〕萬葉「わたつみの沖にもちゆきて放つともうれむぞこれがよみがへりなむ」

うれむぞ‐は【副】前條に同じ。〔古語〕萬葉「なら山の小松がうれのうれむぞはわが思ふ妹にあはずやみなむ」

うれ‐ゆき 賣行【名】うれゆくこと。商況。

うれ‐ゆく 賣行く【動四自】おひおひと賣る。次第に買手が附く。

うれる 賣れる【動下一自】買手が附く。〔俚語〕

うれ‐わら‐は 末わら葉【名】末の亂れそけたる葉。〔古語〕萬葉「玉にぬきけたずたばらむ秋萩のうれわわら葉における白露」

うろ 筌【名】うへ（筌）に同じ。

うろ 虛【名】うつろ。あな。空洞。「齒のうろ」

う‐ろ 雨露【名】㊀雨と露と。あめつゆ。㊁恩澤のあまねきこと。「雨露の惠」「聖代、雨露多し」

う‐ろ 有漏【名】〔佛〕「梵 Āsrava 又 Āsraia の譯語。有は三業（サンゴフ）の結果の後世に續生して失せざるもの、漏は煩惱（ボンナウ）の意、煩惱は不知不識の間に外界の結緣（ケチエン）に觸れて貪慾（ドンヨク）・瞋恚（シンイ）等の過を漏すよりいふ』おのづから煩惱の生ずること、又その世界。三界輪廻の境界。假想の迷を離れぬ世界、即ち天上界及び人間世界の如き、これなり。有漏道。（無漏に對して）新勅撰「有漏よりも無漏に入りぬる道なればここぞ佛のみともなりける」「有漏の世界」「有漏の世」

有漏の身【句】〔佛〕三界の迷を離れがたき身。凡夫の身。新勅撰「有漏の身は草葉にかかる露なるをやがて蓮にやどらざりけり」

う‐ろ 迂路・紆路【名】まはり路。遠路。

う‐ろ 烏鷺【名】㊀からすと、さぎと。㊁黑と白と。㊂『碁石の色は黑と白となるよりいふ』ご（碁）の異名。「烏鷺の爭」

うろ‐うろ【貌】うろつくさま。まごまご。俳諧古選（秋風）「櫻ぬれてうろうろとなるひとりかな」

うろうろ‐がほ うろうろ顏【名】うろうろと迷ふ顏つき。

うろうろ‐なみだ うろうろ涙【名】おろおろなみだ（おろおろ涙）に同じ。壽門松「恨みまじりのうろうろ涙」

うろうろ‐ぶね うろうろ船【名】『うろは「賣らう」の訛といふ』海上を徘徊して、客船の客などに、菓子・酒などを賣りつくる船。〔東京の語〕

うろうろ‐まなこ うろうろ眼【名】心落ちつかずうろうろと見まはす眼。うろうろめ。〔俚語〕道中雙六「川傳ひ、探りまはし、まっ暗がり、うろうろまなこに、助平が、これも窺ふ拔けみちを」

うろうろ‐め うろうろ眼【名】前條に同じ。

うろ‐おぼえ 空覺【名】おろおぼえ（おろ覺）に同じ。

うろ‐くづ 鱗【名】〔動〕㊀次條㊀に同じ。〔古語〕㊁うを（魚）に同じ。〔古語〕榮花「宇治川の底にしづめるうろくづを網ならねどもすくひつるかな」

うろこ 鱗【名】㊀〔動〕魚又は爬蟲（ハチユウ）類の皮の上に、順序よく重なれる、小く薄く堅き、ほぼ三角形のもの。爬蟲（ハチユウ）類のは表皮の變形せるもの、魚類のは眞皮中に生じて、粘滑なる表皮これを被ふ。又、哺乳類中の穿山甲（センザンカフ）のごときも、眞皮の化骨によりて生じたる鱗を具ふ。いろこ。いろくづ。うろくづ。こけ。㊁ふけ（雲脂）に同じ。㊂紋所の一。三角形を一つ又は三つ以上組合せたる形。種種あり。㊃うろこがた（鱗形）㊀の略。

鱗を拭（フ）く【句】魚を料理するにあたりて、まづ鱗を除き去る。こけをふく。狂言（俄道心）「この鯛のうろこを拭いて…皮をむくとは云はぬ。うろこをふくと申す」

うろこ【名】〔動〕もろこ（諸子）を云ふ。〔奥州の方言〕

うろこ‐いし 鱗石【名】三角形の敷石。

うろこ‐がた 鱗形【名】㊀うろこ（鱗）㊂のごとき形の一面に連續せる模樣。つなぎうろこ。うろこ。いろこがた。㊁謠曲の一。北條時政の、江の島の神德によりて、三鱗（ミツウロコ）がたの紋を得る事を、太平記に依りて作りしもの。㊂うろこがたや（鱗形屋）の略。柳樽「龍宮武鑑板もとはうろこがた」㊃さんかくけい（三角形）に同じ。

うろこがた‐や 鱗形屋【名】江戸日本橋區通旅籠（トホリハタゴ）町、即ち通稱大傳馬町三丁目にありし地本問屋。萬治以前より、引續き營業し、代代、暦本を出版し、天明年間に至りて廢業す。屋標は、〇の中に三鱗（ミツウロコ）をゑがけり。うろこがた。

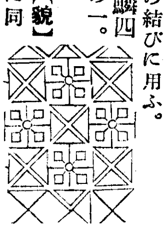
うろこ‐くぎ 鱗釘【名】〔建〕障子に硝子をパテどめにする時に用ふる、三角形の亞鉛鋲。

うろこ‐ぐも 鱗雲【名】〔地〕けんせきうん（卷積雲）に同じ。

うろこ‐はく 鱗箔【名】能（ノウ）にて、鬼女・蛇體などに扮（イデタ）つ者の著る、金の鱗形の摺箔ある衣裳。

うろこ‐むすび 鱗結【名】紐の結び方の一。行器（ホカヰ）の緒の結びに用ふ。

うろこ‐よつめ 鱗四目【名】模樣の一。下の圖を見よ。


（うろこよつめ）

うろ‐そか 疎か【貌】おろそか（疎か）に同じ。〔古語〕名義抄「稀、ウロソカナリ」

うろ‐だう 有漏道【名】〔佛〕うろ（有漏）に同じ。（無漏道に對して）

うろたふ 狼狽ふ【動下二自】迷ひ騷ぐ。あわつ。

狼狽へて子を逆樣【句】あわて迷ひて小供をさかさまに抱き又は負ふ。〔諺語〕

うろたへ‐ねずみ 狼狽鼠【名】㊀うろたへて逃路を失ひたる鼠。㊁人のうろたへたるを嘲りていふ語。壽門松「たはけ鼠のうろたへ鼠、この合點がいかぬか」

うろたへ‐ばう 狼狽坊【名】うろたへもの（狼狽者）に同じ。

うろたへ‐まなこ 狼狽眼【名】あわて迷ひたる時の目つき。春花五大力「このわらぢ、三度がさ、路銀も持って參ったは、夜のうちに立ちのかさうと、うろたへまなこで駈けつけたのぢやわいなう」

うろたへ‐もの 狼狽者【名】物事にあわてやすき人。あわてもの。うろたへばう。天の網島「二年あまりのなじみの女、心體（シンテイ）見つけぬうろたへもの」

うろ‐ぢ 有漏路【名】〔佛〕有漏の世界。この世。元可集「うろぢより入りにしむろ（無漏・室）のとまりぶね法（ノリ）にもとまる心はなれよ」

うろ‐つく【動四自】迷ひ步む。うろうろとす。まごまごとす。彷徨す。徘徊す。

うろとろぴん（羅 Urotropinum）【名】泌尿器の疾病に用ふる一種の藥品。フォルムアルデヒドにアンモニヤを作用せしめて得る、白色の結晶物。一名、フォルミン。

うろぬき‐だいこん 虛拔大根【名】おろぬきだいこん（疎拔大根）㊀に同じ。

うろぬき‐な 虛拔菜【名】まびきな（間引菜）に同じ。

うろ‐ぬく 虛拔く【動四他】おろぬく（疎拔く）に同じ。

うろ‐ほふ 有漏法【名】〔佛〕有漏の世界に起る一切の現象。（無漏法に對して）

うろ‐むろ‐ほふ 有漏無漏法【名】〔佛〕有漏・無漏の世界の一切の現象、即ち善惡の總稱。

うろ‐ん 胡亂【名】「宇の廣東音なりといふ』疑はしきこと。合點のゆかぬこと。いぶかしきこと。うさん。不審。狂言（ぶんざう）「汝がやうなうろんな奴」

うろん‐ざ 胡亂座【名】〔佛〕禪寺の儀式の時、新職席の人の、新・舊兩職の何れの資格に依りてよきか、未だ決定せぬ場合に、假に坐る位。

うろん‐もの 胡亂者【名】怪しむべき者。

うろろこ 鯥【名】〔動〕だぼはぜ（だぼ鯊）に同じ。

うわ 宇和【名】〔地〕伊豫國東宇和郡にある町。郡役所を置く。

うわう‐さわう 右往左往【貌】四方へ逃げ散るさま。しどろもどろ。

うわじま 宇和島【名】〔地〕伊豫國北宇和

郡にある町。南宇和島灣に臨める同名の良港を控へ、港の前面に九島（クジマ）横はりて、港口を南北に分つ。郡役所を置く。伊達（ダテ）氏の舊藩地。舊稱、板島。

うわじま-ざさ 宇和島笹【名】紋所の一。竹幹に葉の附けるままのもの二本を、左右より向ひあはせて、縮（ワガ）ねて圓形とし、その中央に向ひあはせの雀二匹を配りたるもの。

うわじま-じやう 宇和島城【名】伊豫國宇和島町にある城。永祿の頃、西園寺氏の城邑。その後、戸田勝隆・藤堂高虎・富田知勝を經て、慶長十九年伊達政宗の庶子秀宗封ぜられ、子孫繼ぎて明治維新に及べり。

うわる 植わる【動四自】植ゑらる。

う-ゐ 有爲【名】〔佛〕「梵 Asravaās の譯語」因緣和合に由って作爲せらるる一切の現象。人生の生住變滅の定らぬこと。（無爲に對して）「有爲轉變」「有爲無常」

有爲の奥山【句】〔佛〕有爲の境を脫することの難きを、深山を越ゆるに譬へていふ語。「無爲に入る」參照。いろは歌「うゐのおくやま今日越えて、淺き夢見じ、醉ひもせず」

有爲の境【句】〔佛〕現象の生滅增減する世界。絕對・常住の理法を悟らぬ世界。無常の世。有爲の世。

有爲の四相【句】〔佛〕しさう（四相）を見よ。

有爲の報佛【句】〔佛〕はうしんぶつ（報身佛）に同じ。

有爲の世【句】〔佛〕「有爲の境」に同じ。萬葉「うゐの世はいづらつねなるくさの葉にむすべる露の風まつがごと」

うゐうゐ-けう 回回敎【名】『うゐは回の字の唐音。回紇（Uigur）人の支那に傳播せしめし敎なるよりいふ』ふゐふゐけう（回回敎）に同じ。

う-ゐき 禹域【名】〔地〕うせき（禹跡）に同じ。

うゐ-きやう 茴香【名】〔植〕「字の唐音」繖形（サンケイ）科に屬する多年生の草。春、宿根より叢生し、高さ五六尺。葉は互生して細長く、莖と共に白色を帶びて香氣あり。夏、枝ごとに五瓣の小黃花を開く。實は長楕圓形にて、藥用又は香料となり、茴香（ウヰキヤウ）油の原料ともなる。葉も生食せらる。くれのおも。地中海沿岸の原產。

うゐきやう-あぶら 茴香油【名】揮發油の一種。茴香の實より取りたるもの。

うゐ-さい 回祭【名】〔佛〕『字の唐音』亡僧の供養料を副司（フウス）即ち納所に收むること。くわいさい。〔禪宗の語〕

うゐ-てんぺん 有爲轉變【名】〔佛〕この世は因緣によりて假りに成れるものなれば、生・住・異・滅の變化を免るるあたはず、展轉變滅窮りなきこと。世事の移りかはり易きこと。有爲無常。

うゐ-ほふ 有爲法【名】〔佛〕因緣の和合によりて生ずる諸法。

うゐ-むじやう 有爲無常【名】〔佛〕うゐてんぺん（有爲轉變）に同じ。

う-ゐん 右院【名】明治四年七月に左院と相對して設けられたる太政官の一院。各省の卿の機務を議せしところ。

うゐ-らう 外郎【名】「字の唐音」㊀うゐらうぐすり（外郎藥）の略。㊁うゐらうもち（外郎餅）の略。

うゐらう-うり 外郎賣【名】㊀外郎藥を賣る人。㊁市川家の歌舞伎十八番の一。二代目團十郎が、江戸の森田座にて、若綠勢曾我（ワカミドリキホヒソガ）の狂言にて、外郎賣に扮（フン）し、大に喝采を得たるより家の藝となれり。

うゐらう-ぐすり 外郎藥【名】『陳宗敬は、本國にては、順宗に仕へて、禮部員外郎の官に在りしよりいふ』相摸國小田原より出す賣藥。色黑く金色の衣を附けたるものにて、德川時代には東海道名物の一として名高く、又、行商法によりて諸國に弘まりたり。一名、透頂香（トウチンカウ）。痰（タン）を治するに効あり、又、髮の臭氣を去るに用ひしものにて、透頂の名はその意に本づくともいふ。支那の陳宗敬が、元の滅びし後、應安中に歸化して、筑前國博多に住して傳へたるものとも、その子宗奇、足利將軍の召に應じ、京都西洞院に住してその方を傳へ、小田原の本鋪虎屋藤右衞門はその支流なりともいひ、又、小田原のは、鎌倉圓覺寺の祖大覺禪師の、宋より來朝の際、小田原の某人に傳へし藥方に本づくといひ、又その來朝の際、員外郎の官に在りし人、冠を挂けて隨ひ來り、藥を賣りて京師に來りて住せしが、子孫、後北條氏の城下小田原に來りて、代代家方とせりともいふ。うゐらう。

うゐらう-とうちんかう 外郎透頂香【名】前條に同じ。

うゐらう-は 外郎派【名】蹴鞠（シウキク）の一派。京都西洞院（ニシノトウヰン）なる外郎二位杏林といふ人、鞠に妙を得て、種種の曲を蹴（ケ）しが、その子、近衞政光の父の傳を得て創めたるもの。

うゐらう-まめ 外郎豆【名】〔植〕『痰（タン）を治すること外郎藥の如くなるよりいふ』たんきりまめ（痰切豆）に同じ。

うゐらう-もち 外郎餅【名】米の粉を黃に染め、砂糖を加へて蒸し、四角に切りたる菓子。形も色も外郎藥に似たり。周防國山口の名產。うゐらう。

うゐ-れい 回禮【名】〔佛〕佛家にて、他の寺院などより饗應などせられし時の返禮。還禮。復禮。

うゑ 飢・饑・餓【名】うゑること。ひもじきこと。いひうゑ。空腹。

うゑ 植【名】植うること。

うゑ-いたみ 植傷【名】〔農〕移植によりて、苗の不良なる狀態に陷ること。

うゑ-かふ 植換ふ【動下二他】植ゑたる場所を變ず。移植す。

うゑ-かへ 植換【名】植換ふること。

うゑがみ-だう 植髮堂【名】京都東山粟田の青蓮（シヤウレン）院の隣にある寺。僧親鸞（シンラン）得度の時の剃髮を、その童形の木像に植ゑて、安置せるところ。花頂山（クワチヤウザン）の御堂。うゑがみでら。うゑがみみえいだう。

うゑがみ-でら 植髮寺【名】前條に同じ。

うゑがみ-みえいだう 植髮御影堂【名】前條に同じ。

うゑ-き 植木【名】㊀植ゑたる樹木。うゑてある木。榮花「うゑあつめつくろはせたまひし前栽（センザイ）・うゑきども」㊁ぼんさい（盆栽）に同じ。

植木靜かならんと思へども、風止まず【句】「木靜かならんと欲すれば、風止まず」に同じ。〔諺語〕榮花「植木靜かならんと思へども、風止まず、子、孝せんと思へども、親待たず」

寶の植木【句】しちぢゆうほうじゆ（七重寶樹）に同じ。〔古語〕續古今「あだに散る花見るだにもあるものをたからのうゑき思ひこそやれ」

うゑき 植木【名】〔地〕㊀肥後國鹿本（カモト）郡にある町。西南戰爭の激戰地。一名、味取（ミトリ）新町。㊁筑前國鞍手（クラテ）郡にある町。九州鐵道若松線の一驛。附近に炭坑多し。

うゑき-しよく 植木職【名】うゑきや（植木屋）に同じ。

うゑき-だな 植木店【名】植木を賣る店。

うゑき-だな 植木店【名】㊀〔地〕東京日本橋區坂本町邊の俗稱。㊁『淸元節の本家は、東京日本橋植木店に住せるよりいふ』淸元の太夫の語りぶりを賞むるかけ聲。

うゑき-ばち 植木鉢【名】植木をうゑ置くに用ふる陶製の鉢。形、方・圓など種種あり。はち。

うゑき-ぶぎやう 植木奉行【名】江戸幕府の職制の一。作事奉行の下にありて、諸植木方を管せしもの。

うゑき-むろ 植木室【名】冬季、寒を畏る植木、又は花を早く咲かせんとする花木などを入れ置く煖室。むろ。

うゑき-や 植木屋【名】植木の培養（バイヤウ）・手入（テイレ）又は庭作などを業とする家、又その人。うゑきしよく。

うゑ-ぐさ 植草【名】植ゑたる草。

うゑ-こなぎ 植小葱【名】植ゑたるこなぎ。〔古語〕萬葉「かみつけぬ伊香保の沼にうゑこなぎかく戀ひむとや種求めけむ」

うゑ-ごみ 植込【名】㊀樹木を植込みたる所。㊁芝居にて、木立の茂れるさまを板などに描きて、舞臺の上に立て飾るもの。

うゑ-こむ 植込む【動四他】草木をしげく植う。

うゑ-じ 植字【名】㊀くわつじ（活字）に同じ。㊁しよくじ（植字）に同じ。

うゑし-じやう 種石城【名】うえいしじやう（羽衣石城）に同じ。

うゑ-じに 餓死【名】飢ゑはてて死ぬること。餓死(ガシ)。

うゑ-じ-の-かみ 右衞士督【名】右衞士府(ウヱジフ)の長官。この下に佐(スケ)・尉(ジョウ)・志(サクワン)の職員あり。

うゑ-じ-ばん 植字版【名】くわつじばん(活字版)に同じ。

うゑ-じ-ふ 右衞士府【名】ゑじふ(衞士府)を見よ。

うゑ-た 植田【名】苗代(ナハシロ)の稲苗を植うる田。

うゑ-たけ 植竹【名】植ゑたる竹。萬葉「うゑたけのもとさへとよみ出でていなばいづしむきてか妹がなげかむ」

うゑ-だけ-たば 植竹束【名】竹束を杙(クヒ)のごとくに地上に立てて、柵のごとくにしたる武具。矢丸を防ぐ用とす。

うゑ-たつ 植立つ【動下二他】うう(植う)を強めていふ語。伊勢集「植立てて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらん」

うゑた-ばたらき 植田働【名】昔の戰にて、敵の早苗田を、踏(フミ)荒し、或は竹木にて捏(ネコ)返して、稲を毀損すること。

うゑ-つき 植月【名】苗などを植うべき月。夫木「今見ればうゑつき近み我がかどのわさだの苗はみぎは生ひにけり」

うゑ-つき 殖槻・殖春【名】神樂歌(カグラウタ)の曲の一。

うゑつき 植槻【名】〔地〕大和國添下(ソフノシモ)郡にありし地。今は生駒(イコマ)郡郡山(コホリヤマ)町の字となれり。神樂歌「うゑつきや田中の森」萬葉「春さればうゑつきが上の」

うゑつき-でら 植槻寺【名】前條の大和國植槻にありし寺。今の郡山(コホリヤマ)町の植槻八幡の傍にある觀音堂はその址なりといふ。今昔「敷下郡植槻寺」

うゑ-つく 植附く【動下二他】草木を移し植ゑて生ひ立たしむ。

うゑ-つけ 植附【名】一 植ゑつくること。二 たうゑ(田植)に同じ。

うゑ-なは 植繩【名】〔農〕移植の時に照準として用ふる繩。處處に附けたる目標によりて、苗と苗との距離を定む。

うゑ-ばうさう 植疱瘡【名】しゆとう(種痘)に同じ。

うゑ-ひげ 植髯【名】能(ノウ)の假面(メン)などの、髯を描かずに、毛を植ゑて作れるもの。

うゑ-びと 飢人【名】飢ゑたる人。拾遺「飢ゑたる人、道のほとりに臥せり…紫の上の御衣(オンゾ)を脫ぎて、うゑびとの上におほひたまふ」

うゑ-びと 植人【名】物を植ゑつくる人。〔古語〕今昔「うゑびとなど、雇ひ具して」

うゑ-まつ 植松【名】植ゑたる松。爲尹千首「心ありて誰れすむならん大方の岩木のほかの庭のうゑまつ」

うゑまつ 植松【名】姓氏の一。村上源氏。千種(チクサ)氏の支族。有能の末子雅永(寶永四年薨ず)を祖とす。子爵たり。

うゑまつ-ありのぶ 植松有信【名】〔人〕國學者。通稱は彥兵衞。松蔭と號す。尾張國の人。本居宣長門下の高弟。最も語學に精し。文化十年歿す。

うゑむら 植村【名】姓氏の一。清和源氏。その祖土岐益持、美濃國より遠江國上村に移住し、子孫世世德川氏に仕へ、大和國高取に封ぜらる。子爵たり。

うゑむら-ろしう 植村蘆洲【名】〔人〕詩人。名は正義、字は子順、後、俊利と改む。大沼沈山に學び師事すること四十年、竟に一派を成す。明治十八年歿す。年五十六。

う-ゑん 迂遠【名】一 道路の迂回して遠きこと。まはりみち。二 まはり遠きこと。てぬるきこと。迂闊。

うゑ-め 植女【名】さをとめ(早少女)に同じ。〔古語〕夫木「さなへとるみ田のうゑめもいろいろの袖をつらねていはふ今日かな」

うゑ-もの 植物【名】一 地に植ゑつくる草木などの總稱。しよくぶつ。二 野菜。蔬菜。三 〔文〕俳諧の連歌の去嫌(サリキラヒ)の分類の一。草・木・竹の類。

うゑもん 右衞門【名】うゑもんふ(右衞門府)の略。

うゑもん-の-かみ 右衞門督【名】右衞門府の長官。この下に佐(スケ)・尉(ジョウ)・志(サクワン)の職員あり。ゑもんのかみ。

うゑもんのすけ-の-つぼね 右衞門佐局【名】〔人〕藤原兼俊の女。初め後水尾天皇に奉侍し、後に將軍綱吉の侍女となる。寶永三年歿す。

うゑもん-の-だいぶ 右衞門大夫【名】右衞門の尉にして、五位に敍せられたるもの。ゑもんのだいぶ。

うゑもん-の-ぢん 右衞門陣【名】『右衞門の武士ここに陣を張るよりいふ』ぎしうもん(宜秋門)の異稱。増鏡「右衞門の陣より、おそろしげなる武士、三四人」

うゑもん-の-ふしやう 右衞門府生【名】右衞門府の下官。

うゑもん-ふ 右衞門府【名】ゑもんふ(衞門府)を見よ。

うゑ-わけ 植分【名】草木の苗を分けて植うること。

うを 魚【名】〔動〕一 脊椎(セキツヰ)動物中の一綱。一般に紡錘(バウスヰ)狀をなして縱に扁く、鱗を有して、水の抵抗力を殺(ソ)ぐ。運動器としては鰭を有す。いを。うろくづ。さかな。魚類。二 さけ(鮭)を云ふ。〔古の料理の語〕

魚、木に緣(ヨ)る【句】求めて獲がたき譬。「木に緣りて魚を求む」參照。

魚心あれば、水心有り【句】他人、我に對して從順なる心あれば、我もまたその人に對して厚意を加ふ。〔諺語〕

魚と水【句】仲のよき譬。〔諺語〕「水魚(スヰギョ)の交」參照。義經記「今日より後は、魚と水とのごとくにして、先祖の恥をすすぎ、亡魂の憤を休めん」

魚の釜中に遊ぶが如し【句】『通鑑の漢順帝紀に「廣陵賊張嬰曰、相聚偸レ生、若三魚遊二釜中一、知二其不一レ可レ久」とあるに本づく』禍の目前に近づける譬。〔諺語〕

魚の目に水見えず【句】わが身に關することに氣のつかぬ譬。〔諺語〕

魚は江湖に相忘る【句】『莊子の大宗師篇に「孔子曰、魚相二忘於江湖一、人相二忘於道術一」とあるに本づく』悠悠自適するさま。〔諺語〕

魚は鯛【句】魚類中の美は鯛なり。「花は櫻木、人は武士」の類。〔諺語〕

魚身、鳥皮【句】魚は、肉の方より燒き、鳥は、皮の方より燒くものなり。〔諺語〕

魚を得て筌(ウヘ)を棄つ【句】次條に同じ。〔諺語〕謠曲(放下僧)「妻戀ひかぬるさ男鹿のたたずむ月を山に見て、指を忘るる思あり。浦の湊の釣舟は、魚を得て筌を棄つ」

魚を得て筌(ウヘ)を忘る【句】『莊子の外物篇に「筌者所二以在一レ魚、得レ魚、而忘レ筌、蹄者所二以在一レ兎、得レ兎而忘レ蹄」とあるに本づく。筌は支那にて魚を捕ふるに用ふる籠』一 物事の成立てる本を忘れ、又は恩を忘るる譬。〔諺語〕二 その意を知りて、その語を忘るる譬。〔諺語〕げんせん(言筌)・せんてい(筌蹄)參照。

魚を拂ふ【句】洋中にて、大魚の群にまつはられたる時、影を現はさぬやうに、板子にて、音高く船ばたをたたき、これを逐拂ふ。〔漁夫の語〕

網に魚【句】「袋の鼠」に同じ。〔諺語〕

小水(セウスヰ)の魚【句】『出曜經に「是日已過レ命則衰滅、如二小水魚一、斯有二何樂一」とあるに本づく』生命の、今日か明日かとせまりゆく譬。轍鮒(テツプ)の急。〔諺語〕太平記「日ごろの儀勢盡きはてて、いつしか小水の魚の、誠に吻(イキツ)く體になりて」

釣落した魚は大きい【句】失ひたる物は、すべて特にすぐれたる物なりしやうに感じて惜しまるるものなり。死にし子、顏よかりき。〔諺語〕

呑舟の魚【句】「網(アミ)呑舟の魚を漏す」を見よ。

うを-あきんど 魚商人【名】魚を賣る人。さかな屋。魚屋。

うを-あみ 魚網【名】魚を捕ふる網。さかなあみ。いをあみ。あみ。漁網(ギョマウ)。

うを-いち 魚市【名】魚を賣買する市場。さかないち。うをいちば。

うを-いちば 魚市場【名】前條に同じ。

うを-うり 魚賣【名】魚類を賣りあるく人。いをうり。うをあきんど。さかなうり。さかなや。

うを-がし 魚河岸【名】魚市場のある河岸。さかながし。

うを-きり 魚切【名】〔地〕石見國にある勝地。邑智(オホチ)郡冠山(カムリヤマ)の西麓、矢上(ヤガミ)川の上流。溪流數町の間、岩崖と水流との奇觀を呈す。雅稱、斷魚溪(ダンギヨケイ)。

うを-ぎれ 魚切【名】不漁のために、魚類の絕ゆること。春花五大力「△鰻の蒲燒でも、

取りにやれ。△さっき取りに遣りましたが、銀杏(イテフ)屋も、横町のも、うをぎれだと云うてぢやわい」

うを-ぐし 魚串【名】魚を燒く時に刺す串。竹又は鐵などにて作る。いをぐし。

うを-ざき 魚崎【名】〔地〕攝津國武庫(ムコ)郡にある町。住吉川の河口の東岸。造酒業盛んなり。別稱、五百崎(イホザキ)。

うを-じやうゆ 魚醬油【名】魚類又はその腸などを原料として製したる醬油。例へば鮊子(イカナゴ)醬油・鰯(イワシ)醬油などの類。

うを-じらみ 魚蝨【名】〔動〕蝨の一種。形、扁平にして小く、淡水に生ずる魚の皮膚に吸著して、害を與ふる蟲。

うを-ずみ 魚住【名】〔地〕播磨國明石郡にある村。その東方なる江井(エヰ)ケ島の邊は、古、魚住の泊(トマリ)とて、瀨戸內海の航路に當る港津として名高く、舊名は名寸隅(ナスミ)と呼び、また魚住(ナスミ)とも書きしが、後世「うをずみ」と呼ぶに至れりといふ。

うをずみ-やき 魚住燒【名】陶器の一種。攝津國明石郡中尾より製出するもの。茶器を主とす。

うを-せんべい 魚煎餅【名】魚肉を原料とし、煎餅のごとき形に乾し固めたるもの。

うを-たか 魚鷹【名】〔動〕『魚を好み食ふよりいふ』みさご(鶚)に同じ。

うを-だな 魚棚【名】魚類を上げおく棚。

うを-だな 魚店【名】魚類を賣る家。さかなや。うをや。

うをづ 魚津【名】〔地〕越中國下新川(シモニヒカハ)郡にある町。富山灣に臨む。郡役所を置く。海上に往往蜃氣樓を現出す。

うを-つきりん 魚附林【名】魚族を集むるを目的とする森林。魚族の丘陵・森林ある海岸に集まる習慣あるを利用したるなり。

うをづ-じやう 魚津城【名】越中國魚津にありし城。吉野朝方の椎名(シヒナ)孫八の築きしもの。後、板屋政廣・上杉謙信・柴田勝家等、これを領し、又、前田氏の有となり、元和元年廢せらる。

うを-つなぎ 魚繫【名】魚を串に刺したるごときさまに並ぶこと。魚貫(ギヨクワン)。

うを-づら 魚面【名】魚群の浮び來たるために、海面の一種特別の狀況を示すこと。いをづら。〔漁夫の語〕「魚づらが見えた」

うを-つり 魚釣【名】魚を釣ること、又その人。

うを-つりざを 魚釣竿【名】つりざを(釣竿)に同じ。

うを-どり 魚捕・魚取【名】漁網の一部、魚群を追込みて、最後にこれを集めて取揚ぐる部分。通常中央にありて、目を他の部分即ち袖・肩・裾などより密にす。いをあみ。おくあみ。

うを-に 魚荷【名】魚の荷。魚をはこぶ荷。淀鯉出世瀧德「上(カミ)からくだる魚荷のもどり、歩き歩きの高ばなし」

うを-にかは 魚膠【名】魚類の皮・骨などより製したる膠。効用は、獸類より製したるものと異なるところなし。

うをぬま-がは 魚沼川【名】〔地〕越後國にある川。三國嶺の東北より發し、北魚沼郡を過ぎて信濃川に合す。長さ二十一里。別稱、大野川・上田川・奧野川・輪奈津川。

うをぬま-じんじや 魚沼神社【名】越後國北魚沼郡城川村に鎭坐せる縣社。祭神は天香語山(アマノカグヤマ)命。舊稱、上彌彥(カミヤヒコ)神社。

うを-の-たな 魚棚【名】魚屋の多き街。芭蕉「鹽鯛の齒ぐきも寒しうをのたな」

うを-の-め 魚目【名】『魚類の目のごとく見ゆるよりいふ』手足などに、神經の乳嘴(ニウシ)突起の變化發育して、白大豆のごとき形に堅くなりたるもの。いをのめ。いをめ。

うを-ばち 魚蜂【名】〔動〕蜂の一種。體小く、器物の穴などに巢を作る。

うを-ひしほ 魚醬【名】魚肉のしほから。

うを-へん 魚偏【名】漢字の偏の一。鯛・鯉・鰭・鱗などの字の左傍にある魚の字。

うを-み 魚見【名】魚類の所在又はその群り來る狀況等を見分くること、又その人、又その場所。場所は、陸上の高地又は海中に櫓(ヤグラ)を設けなどし、又、船中にて檣(ホバシラ)を利用し、或は特別に高臺を設けなどす。

うを-みそ 魚味噌【名】淡泊なる魚類を加へて造りたる味噌。

うを-や 魚屋【名】うをだな(魚店)に同じ。

え

發音 ㊀あ行第四の音。母音。舌を平常の位置より少しく前方に進め、やゝこれを高めて、硬口蓋に近づけ、氣息によりて聲帶を振動せしめて發す。口の開き方は大抵おと同じくして、舌の位置よりいへば、いとあとの中間にあり。他のえ列の音は、や行・わ行を除きて、皆この母音とその列の子音との結合より成る。や行のえは今は全くあ行のえと同音なれども、上古にはその區別判然たりしが如く、あ行のは「依」・「愛」・「得」等の漢字にてうつせるに、や行のは「叡」・「江」・「枝」・「兄」等にてうつせり。わ行のゑも、今日は發音には差別なけれども、假名の形を異にせり。こは文字の形のみを存して、その音は早く母音となれるものとす。ゑの條下參照。㊁長音はええの如く重ね記し、又はえーの如く長音符を用ひて書く。本書は前者に依れり。あの條下㊁參照。㊂えよりい又はひに連る時は、えの長音に發音すること多し。例へば、えいしん(榮進)・あかえひ(赤鱏)の如し。他行のえ列の音も亦皆然り。例へば、けいあん(慶安)・ていわう(帝王)の如し。いの條下㊃參照。㊃う又はふに連る時は拗音(エウオン)となる。例へば、ひつえう(必要)・しえふ(枝葉)をヒツヨー・シヨーと發音する類。他行のえ列の音も皆同じ。例へば、でうれい(條例)・かんぺう(干瓢)・けふせう(狹小)の如し。㊄撥音(ハツオン)nの下に來れば、nの添はることあり。例へば、いんえん(因緣、in-en)をいんねん(innen)、さんえ(三衣、san-e)をさんね(san-ne)といふ類。あの條下㊂參照。

字源 平假名のえは「衣」(呉音エ)より來り、ゑは「江」(訓讀)の草體。その他「盈」・「要」・「愛」・「得」・「延」等の草體は變體假名として用ひらる。片假名のエは「江」の旁。

え 兄【名】あに(兄)又あね(姉)に同じ。(弟(オト)に對して)〔古語〕「大え」「え姫」

え 胞【名】えな(胞)に同じ。〔古語〕紀「胞、エ」

え 役【名】えだち(役)に同じ。〔古語〕紀「調役、ツキノエ」

え 疫【名】はやりやまひ。時疫。疫病。えやみ。〔古語〕紀「疾疫、エノヤマヒ」大鏡「時のえにおはしまさず」

え 枝【名】えだ(枝)に同じ。〔古語〕記「ほつえのえの末葉(ウラバ)」

え 肢【名】『身體の枝といふ意』てあし。四肢。〔古語〕紀「四支、ヨツエ」

え 江【名】海・河・湖などの、陸に幅廣く入込みたる處。いりえ。和名「江、衣、江海也」

え 柄【名】『器物の枝といふ意』器物の、手に取りやすからしむるために細く長くしたる部分。とって。和名「柄、器物莖柯也、衣、一云、賀良」

柄が長い【句】談話にむだごと多し。〔俚語〕

え 榎【名】〔植〕えのき(榎)に同じ。〔古語〕和名「榎、字亦作レ檟、一名、楉、衣」

え 荏【名】〔植〕えごま(荏胡麻)に同じ。〔古語〕和名「荏、衣」

え 宴【名】えん(宴)の略。〔古語〕堤中納言集「京極の藤の花のえしはべりけるとき」

え 緣【名】えん(緣)㊀の略。〔古語〕伊勢「秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ」

え【副】『得の意。又えし(善)の語幹ともいふ』よく。あへて。(下に打消の助動詞又反語の助辭來る)〔古語〕えしも・えも・えや・えやは等